僕生江恒山が、大宅鷹取なるもの子供を蹴殺したことから、鷹取が怒りの餘り、遂に伴大納言放火の眞相を暴露してこれを告發したので、大納言は言ひ逃るすべもなく、罪に服して遠流されてしまつた。繪巻はこれを三分し、上巻には應天門炎上の場面、中巻に源左大臣愁嘆の場面と、子供の喧嘩からやがて放火の眞相を言ひふらす場面、下巻には伴大納言配流の場面を取扱つてゐる。何れも畫面を長く連續せしめ、構圖・配置の妙を以て抑揚巧みに事件の發展を示唆し、且つ人物の姿態・動作に微妙な表現を託し、深く話の内容にも立ち入つて、行き屆いた觀察を以て各段躍如たる面目を活寫せる手腕に至つては、「信貴山緣起」(別項)に相並ぶほどの技量を發揮してゐるが、畫風は「信貴山緣起」が繪佛師流なるに比し、これは寧ろ繪所の繪師一流の麗彩にして練熟せる描寫に於て特色を發揮してゐる。この繪の作者に就いては土佐光長と傳へられてゐる。光長は藤原末葉から鎌倉初葉にかけて在世した繪師で、その作としては「年中行事」六十巻を擧ぐべきであるが、これは安永年間に燒失し、今摸本を存するばかりで、比較するに十分でない。併し人物の姿態・構圖等、相似た點も尠からず、且つはこの三巻、その描寫樣式が藤原風の穩雅な趣に加へて、鎌倉期に發展する動的表現をも見るべき點に於て、正に藤原鎌倉交會の作と云ふべく、これを當時の名手に擬し得べしとすれば、まづ光長を擧ぐるは決して無理でない。蓋し藤原鎌倉過渡の際に於ける浪漫時代の所産として、繪巻中でも屈指の傑作である。〔田中(一)〕

友則（とものり）　歌人（三十六歌仙の一）【姓紀】【家系】紀氏系圖によれば宮内權少輔有則の子にて、貫之の從弟にあたり、清正・房則の二子がある。「後撰集」巻十九の詞書によれば、女のあつたことが分る。【閲歴】寛平九年土佐掾に任じ、十年少内記、延喜四年大内記に進んだ（古今集目錄）。「後撰集」巻十五に、年四十に餘る迄司を賜はらぬことを時平に語つてゐるのは右の任官以前であらう。「古今集」は延喜五年（大内記）、貫之・躬恒・忠岑等と共に撰修に從事したのであるが、中途で歿したものか、「古今集」巻十六に、その死を悼む貫之・忠岑の歌がある。前記四十云々から推すと、凡そ年六十に近いと考へられる。歌人としての地位は貫之と匹敵したと考へられる。「古今著聞集」に、寛平歌合に左方にて初雁の歌「春霞かすみていにし雁金は今ぞなくなる秋霧の上に」を詠じ、講師が上の五文字だけを讀んだ時、右方のものは秋の歌に春霞とあるのを嘲笑したが、讀み終るに至つて一座のものが絶唱であるのに感歎したといふ説話を載せてゐる。この歌は「古今集」で讀人不知であり、顯昭註には古物語に云ふとして、この説話を載せてはゐるが、躬恒の子が詠んだとなつてゐる。歌風から推して、この歌は友則作ではあるまい。父も歌人であつたと見え、「古今集」巻十六に、父が生前に詠んだ歌を集めて、惟喬親王に奉り、自らも一首の歌を添へたとある。同巻十八に筑紫に下つてゐたことを記してゐるが、何時の頃か分らない。「後撰集」巻十二に身分の高い女に戀した歌、同巻七に藤原忠行と贈答した歌、「古今集」巻十六に敏行（延喜元年歿か）の死を悼む歌がある。彼は寛平御時后宮歌合、寛平菊合、惟貞親王家の歌合の作者である。【作品】勅撰集に入る歌は、古今四十五首、後撰九、拾遺二、その他凡そ八、合計凡そ六十四首あり、大部分は家集「友則集」（別項）に收められてゐる。貫之の「新撰和歌」には十二首、公任は、「夕されば佐保の河原の河霧に友まどはせる千鳥なくなり」を代表作としてをる。能因の「玄々集」には一首も見えない。【參考】古今集目錄○歌仙傳○大日本史二百十九○國文學全史（平安朝篇）〔西下〕

友則集（ともののりしふ）　歌集　一巻一册　【作者】紀友則【諸本】歌仙歌集本・群書類從二四八所載本がある。後者は歌の數が二首多く、その他小異がある。【解説】歌仙歌集本は七十二首あり、部類はないが大體に於て四季・戀・雜の順に排列してゐる。このうち友則の歌と認め難いもの十四首あるが、これ等は贈答歌、或は勅撰集に於て友則の歌の次にあるもの、或は勅撰集に於て友則の歌を落し、却つてその次の歌を收めたものなどである。後世の勅撰集はこれ等他人の歌をも友則の歌として引いてゐるやうである。「古今集」中に於ける友則の歌四十五首、「後撰集」九首は、凡て本集中に見えるが、詞書に於て小異がある。〔西下〕

具平親王（ともひらしんわう）　漢學者・歌人【通稱】後中書王・六條宮、又は千種殿【生歿】康保元年六月十九日、民部大輔保光の坊城の宅に御生誕、寛弘六年（一六六九）七月二十八日薨ず。御年四十六。【學統】慶滋保胤に師事し、また紀齊名・大江以言等と友として交つた（今鏡）。【閲歴】御母は女御庄子（代明親王の王女）、康保二年八月十三日親王となり、三品に叙す。寛弘四年（四十四歳）四月二十五日、一條院の皇居に詩宴を行はれ、二品に叙す。後、中務卿となる。薨去の年の釋奠は具平親王の喪によつて宴座を中止された。儒者として又歌人として資性英敏であつたが、當時は藤原氏全盛の時代で驥足を伸ばされる事が出來なかつたと見える。その點は源英明の「二毛詩」等に見ると同じ境遇であらうと推察される。即ちかゝる御境遇が詩歌管絃に走らせたとも見られる。一條帝が甚だしく寵愛せられたのも、實に文才を愛せられたのみではあるまいと思ふ。【著作】眞字伊勢物語二巻（伊勢物語參照）○六帖抄三巻（「源平盛衰記」巻七、大納言出家事の條に、「六帖抄と言ふ歌艸紙をぞ渡されける。彼抄と申すは村上帝第八御子具平親王家の御集なり。……歌道殊に巧におはしけるが後の世の御形見とて集めさせ給たりける草子也」と見える。「古今六帖」と關係あるか否か不明である。又「本朝書籍目錄」には「六帖」（貫之或は兼明親王とし、別に「私記六帖」（後中書王六條宮）とある。「古今六帖」と「私記六帖」とは自ら別であらうが、かゝる記載から、後人が「古今六帖」を或は具平親王の著の如くしたものかも知れない）。（古今六帖參照）○弘決外典抄。（寶永六年の刊本あり、昭和五年金澤文庫本をコロタイプ版にして民友社より出版。本書を兼明親王著とするは誤）。

【人物】御性格が聰敏で博學多才であつた。詩歌に長じ、又音律に達し、或は陰陽道・醫術、諸技藝に悉く通達してゐられた。大江匡房は古今よく父の業を繼ぐ者具平親王等五指を屈するに足らない事を言つた。要するに時世は藤原氏の勢力が絶對であつたから、政界には望もなく、ただ一世の文宗として、前中書王兼明親王と並稱せられた。晩年、世を遁れる志があつたけれども、一條帝は遂に御許しにならなかつた。

【參考】日本紀略○榮華物語（初花）○今鏡○江談抄巻四・五○古事談諸道○源平盛衰記○本朝文粹巻十二　〔山岸〕

吃又（どもまた）「傾城反魂香」を見よ。

供奴（とものやつこ）　登庸の御めぐみ御ひろきにすがりて拙筆力七以呂波（にじりがきなゝついろは）　所作事　變化物　【本名題】【別名】芝翫奴　【初演】文政十一年三月七日初日、江戸中村座「水滸傳曾我風流」後日狂言「一谷嫩軍記」第二番目大切。〔作詞〕二代瀬川如皐〔曲節〕長唄〔立唄〕芳村孝次郎〔作曲〕四代杵屋三郎助〔振附〕四代西川扇藏・藤間大助（二代勘十郎）【傳來】曲・振ともに傳存。【諸本】長唄正本。日本歌謠集成巻九・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收。【題材】舞踊の奴は「髭奴」「雇奴」「戯奴僕（うかやつこ）」「戀奴」「行列奴」「奴僕（やつすけ）」等、種々あり、歌舞伎特有のもので、實在の奴をそれ〴〵舞踊化したものである。本曲は廓へ主人の供をする奴を執（とり）へたもの。【内容】臺提灯を持つた奴（二代中村芝翫、後の四代歌右衛門）が吉原田圃を駈け出して來て、主人の供に遲れだ。同三年十六歳で開成所教授方となつた。慶應元年、幕府の選抜に依つて、中村敬宇・箕作奎吾・菊池大麓等十四名と共に英國に留學、ロンドン大學豫備校に入つたが、間もなく幕府の瓦解に遭つて明治元年歸朝した。同三年外務省辨務少記に任じ、森有禮に伴はれて渡米、五年ミシガン州のアン・アンボール高等學校に入り、次いでミシガン大學に哲學・理學を修めること四年半、同九年マスター・オブ・アーツの學位を得て歸朝、開成學校五等教授に任ぜられた。二十九歳、爾來同校が東京大學、帝國大學、東京帝國大學と進展する間、文學部教授、同部長、文科大學々長に歴任して、前後二十三年教職にあつたが、單に文學部のみでなく、法學部・

外

談出京、苦學を重ねたが、脚氣を病んで一時鄉里に歸つた。二十四歳、再び上京して早稻田の東京專門學校に入學し、同校卒業後、歸國して政治運動に奔走した。偶々同地に赴いた島田三郎にその文才を認められ、二十五年上京して毎日新聞記者となつた。二十六年、歸國結婚。夫人を携へて上京し、依然として毎日新聞の編輯に從事した。その年の夏、近衛篤麿の知遇を受けて雜誌「精神」（後に「明治評論」と改題）の經營に當り、始めて人物月旦に筆を着けた。その冬、單行本「東洋治安策」を出し、評論家としての地歩を固めた。かくて約四年間、同誌に關係してゐるうちに、三十年、博文館の招聘を受け、雜誌「太陽」に人物月旦を執筆するに及び、よく調査された材料の上に築かれた情理兼ね備はつた人物批評は、

體詩抄」（明治十五年）に於て、譯詩七篇、作詩二篇を掲げ、うちテニスンの「輕騎隊進擊の詩」及び「拔刀隊」は最も人口に膾炙した。彼は明治二十年代に入り、更に散文詩の創成を企て、同二十八年刊「新體詩歌集」（中村秋香・上田萬年・坂正臣等と合著）に於て、「旅順の英雄可兒大尉」の如き試作を公けにしてゐる。明治軍歌の嚆矢は作者も認めた如く、彼の「拔刀隊」の歌で、彼の文語自由詩の試みは十數年後に實現し、その散文詩的要求を充たした。その詩作は語法に拙劣であつたが、最も熱心に種々の創見を發表し、且つ習作を公けにした點で、特殊な史的地位を占めてゐる。この外哲學・社會・音樂・繪畫・演劇等に啓蒙的議論を隨時發表して世を益した。なほ萬歳三唱の風は彼の定むる所であるのを見れば、社會的活動の大なる

供奴（ともやっこ）　所作事　變化物　【本名題】登庸の御めぐみ御扇筆力七以呂波（にじりがきなゝいろはひろきにすがりて）【別名】芝翫奴【初演】文政十一年三月七日初日、江戸中村座「水滸傳曾我風流」後日狂言「一谷嫩軍記」第二番目大切。〔作詞〕二代瀬川如皐〔曲節〕長唄〔立唄〕芳村孝次郎〔作曲〕四代杵屋三郎助〔振附〕四代西川扇藏・藤間大助（二代勘十郎）【傳來】曲・振ともに傳存。【諸本】長唄正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收。【題材】舞踊の奴は一髭奴・「雇奴」・「戯奴僕」・「戀奴」・「行列奴」・「奴僕」等、種々あり、歌舞伎特有のもので、實在の奴をそれ〴〵舞踊化したものである。本曲は廓へ主人の供をする奴を執へたもの。【内容】臺提灯を持つた奴（二代中村芝翫、後の四代歌右衛門）が吉原田圃を駈け出して來て、主人の供に遲れて探す振。次いで主人が廓通ひの仕草を眞似る振からクドキになり、遂に足拍子を存分艶めかしく踏み踊るうちお供に遲れたのに氣附き、提灯を點して揚屋を指して急いで行く。【價値】足拍子踏む所が眼目になつてゐるが、曲中の所謂「奴丹前」と稱する部分は、舞踊史の傳統上注目すべきである。【備考】「傾城」（別項―戀傾城）「ごみ太夫」「乙姫」「浦島」（別項）「瓢箪鯰」「石橋」と組み合せた二代中村芝翫七變化所作事の一。【參考】近世邦樂年表（長唄之部）〇長唄の心得

（秋葉）

小谷青楓

鳥谷部春汀（とやべしゅんてい）　評論家　【本名】銑太郎【生歿】慶應三年三月、陸奥國三戸郡五戸に生れ、明治四十一年歿。享年四十四。【閲歴】家は代々南部藩士で、父を忠治と云つた。小學校を卒へるや、選拔生となつて青森專門學校農藝科に入學した。明治十五年（十八歳）出京、苦學を重ねたが、脚氣を病んで一時郷里に歸つた。二十四歳、再び上京して早稻田の東京專門學校に入學し、同校卒業後、歸國して政治運動に奔走した。偶々同地に赴いた島田三郎にその文才を認められ、二十五年上京して毎日新聞記者となつた。二十六年、歸國結婚。夫人を携へて上京し、依然として毎日新聞の編輯に從事した。その年の夏、近衛篤麿の知遇を受けて雜誌「精神」（後に「明治評論」と改題）の經營に當り、始めて人物月旦に筆を着けた。その冬、單行本「東洋治安策」を出し、評論家としての地歩を固めた。かくて約四年間、同誌に關係してゐるうちに、三十年、博文館の招聘を受け、雜誌「太陽」に人物月旦を執筆するに及び、よく調査された材料の上に築かれた情理兼ね備はつた人物批評は、その平明で自由な文章と相俟つて、人物批評の世界に新しい型を開き、一般の歡迎する所となり、人物評論家としてユニイクな地位を得た。居ること二年、三十二年、報知新聞に招かれて主筆となり、傍ら依然「太陽」の人物評論を擔當した。この前後、彼は單行本「明治人物評論」「續明治人物評論」を刊行し、次いで三十八年、再び博文館に入り、雜誌「太陽」を主宰し、歿するまでその地位にゐた。【著書】前記の外に、「明治人物小觀」「明治外交史」「春汀文集」等がある。歿後、「春汀全集」が博文館から刊行された。

（高須）

外山ㇾ山（とやまちゆざん）　詩人・教育家　【本名】正一【幼名】捨八【生歿】嘉永元年九月二十七日、江戸小石川柳町に生れ、明治三十三年三月八日歿す。享年五十三。【閲歴】靜岡藩士外山忠兵衛の息。文久元年、蕃書調所に入り、次いで箕作麟祥の門に入つて英語を學んだ。同三年十六歳で開成所教授方となつた。慶應元年、幕府の選拔に依つて、中村敬宇・箕作奎吾・菊池大麓等十四名と共に英國に留學、ロンドン大學豫備校に入つたが、間もなく幕府の瓦解に遭つて明治元年歸朝した。同三年外務省辨務少記に任じ、森有禮に伴はれて渡米、五年ミシガン州のアン・アンポール高等學校に入り、次いでミシガン大學に哲學・理學を修めること四年半、同九年マスター・オブ・アーツの學位を得て歸朝、開成學校五等教授に任ぜられた。二十九歳、爾來同校が東京大學、帝國大學、東京帝國大學と進展する間、文學部教授、同部長、文科大學々長に歷任して、前後二十三年教職にあつたが、單に文學部のみでなく、法學部・理學部等に講座を持つてゐたのに徴しても、その知識の該博なるを知る事が出來よう。この當時にあつて、その進化主義の學說を以て一般世人を啓發した功は沒すべからざるものがある。同二十三年には貴族院議員に勅選され、同三十年東京帝國大學總長となり、翌年伊藤博文の下に文部大臣になつたが、二ケ月の後內閣は更迭した。この外各種の公職にあつた。

外山正一

【業績】彼の功績の最も顯著なるは、明治十四五年の交、漢字を排斥して矢田部良吉等と共に羅馬字會を創立し、井上哲次郎・上田萬年等と共に新體詩を高唱した運動である。また井上巽軒（哲次郎）・矢田部尙今（良吉）との合著「新體詩抄」（明治十五年）に於て、譯詩七篇、作詩二篇を掲げ、うちテニスンの「輕騎隊進擊の詩」及び「拔刀隊」は最も人口に膾炙した。彼は明治二十年代に入り、更に散文詩の創成を企て、同二十八年刊「新體詩歌集」（中村秋香・上田萬年・坂正臣等と合著）に於て、「旅順の英雄可兒大尉」の如き試作を公けにしてゐる。明治軍歌の嚆矢は作者も認めた如く、彼の「拔刀隊」の歌で、彼の文語自由詩の試みは十數年後に實現し、その散文詩的要求を充たした。その詩作は語法に拙劣であつたが、最も熱心に種々の創見を發表し、且つ習作を公けにした點で、特殊な史的地位を占めてゐる。この外哲學・社會・音樂・繪畫・演劇等に啓蒙的議論を隨時發表して世を益した。なほ萬歲三唱の風は彼の定むる所であるのを見れば、社會的活動の大なるを證する事が出來る。

（土井・日夏）

宅山石（とやまのいし）　隨筆　初編四卷　【著者】松井輝星【名稱】著者の題詩に「攻玉它山石、冶金鑄海鹽、世間棄物鮮、勿作卑賤嫌」とある。卽ち書名の因る所である。【刊行】弘化二年、川喜多眞彥校訂。【解說】和漢學を兼ねた著者の隨筆で、本朝に於ける事物の起原、稱謂及び雅俗語の解說、舊慣・古制、史上人物の評論、その他、歷史・地理談等主として考古的の所感を述べたものである。卷一（元）皇國文學の起原以下二十二條、卷二（亨）んンの字以下三十九條、卷三（利）高麗以下二十六條、卷四（貞）信長・信玄・謙信以下三十三條を收めてゐる。卷尾に天保十五年男源黃の跋を添へてある。

【著者小傳】松井輝星。初名輝晨、字は賚黃、通稱七郎、號は羅州、又耕讀園、大阪の人。尾張の儒家眞瀨中洲に學び、易學を以て一家

に燒失し、今摸本を存するばかりで、比較するに十分でない。併し人物の姿態・構圖等、相似た點も尠からず、且つはこの三卷、その描寫樣式が藤原風の穩雅な趣に加へて、鎌倉期に發展する動的表現をも見るべき點に於て、正に藤原鎌倉交會の作と云ふべく、これを當時の名手に擬し得べしとすれば、まづ光長を擧ぐるは決して無理でない。蓋し藤原鎌倉過渡の際に於ける浪漫時代の所產として、繪卷中でも屈指の傑作である。

（田中（一））

友則（とものり）　歌人（三十六歌仙の一）【姓紀】【家系】紀氏系圖によれば宮內權少輔有則風から推して、この歌は友則作ではあるまい。父も歌人であつたと見え、「古今集」卷十六に、父が生前に詠んだ歌を集めて、惟喬親王に奉り、自らも一首の歌を添へたとある。同卷十八に筑紫に下つてゐたことを記してゐるが、何時の頃か分らない。「後撰集」卷十二に身分の高い女に戀した歌、同卷七に藤原忠行と贈答した歌、「古今集」卷十六に敏行（延喜元年歿か）の死を悼む歌がある。彼は寬平御時后宮歌合、寬平菊合、惟貞親王家の歌合の作者である。【作品】勅撰集に入る歌は、古今四十五首、後撰九、拾遺二、その他凡そ八、合計凡後中書王・六條宮、又は千種殿【生歿】康保元年六月十九日、民部大輔保光の坊城の宅に御生誕、寬弘六年（一六六九）七月二十八日薨ず。御年四十六。【學統】慶滋保胤に師事し、また紀齊名・大江以言等と友として交つた（今鏡）。【閲歷】御母は女御庄子（代明親王の王女）、康保二年八月十三日親王となり、三品に叙す。寬弘四年（四十四歳）四月二十五日、一條院の皇居に詩宴を行はれ、二品に叙す。後、中務卿となる。薨去の年の釋奠は具平親王の喪によつて宴座を中止された。儒者として又歌人として資性英敏であつたが、當時は藤原氏全盛の時技藝に悉く通達してゐられた。大江匡房は古今よく父の業を繼ぐ者具平親王等五指を屈するに足らない事を言つた。要するに時世は藤原氏の勢力が絕對であつたから、政界には望もなく、ただ一世の文宗として、前中書王兼明親王と並稱せられた。晩年、世を遁れる志があつたけれども、一條帝は遂に御許しにならなかつた。

【參考】日本紀略〇榮華物語（初花）〇今鏡〇江談抄卷四・五〇古事談諸道〇源平盛衰記〇本朝文粹卷十二

（山岸）

吃又（どもまた）「傾城反魂香」を見よ。

を成した。文政五年（一八二二）二月歿。享年七十二。易に關する述作の多い中で、「周易象徴樞機」「象圓變通」等が行はれた。又「文章軌範」「莊子因」を校刊した。【和田】

豐澤團平（とよさはだんぺい）　操三味線彈【本名】加古仁兵衞義知（よしとも）【生歿】文政十年三月二十一日巳刻、播州加古に生れ、明治三十一年四月一日、稻荷座で大隅太夫の「花上野志渡寺」を彈きながら、床で人事不省に陷り、病院への途中、鹽町三休橋筋角で絕命した。享年七十二【閱歷】大阪の竹本千賀太夫の養子、十三歳で三代豐澤廣助の門に入り、豐澤力松と名乘つた。天分あつて忽ち腕を擧げた。天保十年因講加入。稻荷文樂軒芝居へ出勤。同十三年正月座摩（ざま）の芝居で豐澤丑之助を名乘り、弘化元年二代廣助の幼名豐澤團平を襲いで諸所の芝居を勤めた。この頃既に嶄然頭角を顯はし、嘉永六年二十七歳で江戸歸りの長尾太夫の三味線を竹田芝居で彈いた。翌安政元年八月に天滿天神境内の芝居で、長尾の相三味線として「忠臣藏」六段目を彈いてゐる上に、大立物三代長門太夫の相三味線三代鶴澤清七が病氣缺勤の代役を勤めたのは、斯道の記錄的の拔擢であつた。この頃から長門太夫に囑望されて、遂に安政三年九月二十三日、鶴澤清七の病歿後、長門太夫の相三味線と正式に決定して、元治元年十月長門が歿するまで、約九ケ年間彈いてゐた。後、湊太夫・五代春太夫を彈き、近世の名人攝津大掾を仕立て上げ、後、春子太夫に三代大

豐澤團平

隅太夫を繼がせ、大隅を仕込んで大立者とし、彦六風の藝風を樹立して淨曲界を風靡し、清水町の師匠と呼ばれ、古今獨歩の名人と唱へらるゝに至つた。團平は三代廣助の弟子であつたが、その頃京に棲んでゐた二代廣助の寵を受けて藝道の奥義を授けられた。彼は初め播州高砂の人佐藤八重を娶つたが、八重は二子を殘して、明治二年四月十一日三十一歳で歿した。後妻を迎へたのが明治九年で、これが有名な才女千賀である。千賀は團平の家政を整理し、藝道に內助の功多く、多少文筆の嗜みがあつたから、淨瑠璃の新作加筆などをもした。

【業績】第一に、義太夫節の整理・保存・復舊に努めた。廢曲を復活し、院本に殘された節章の一點をも苟くもしなかつた。第二に、三味線は淨瑠璃の伴奏に過ぎなかつた古來の習慣に對して、松屋清七が、三味線の符章を發明して三味線のツボを記錄するに至つて、始めて伴奏から脫し、三味線の手として獨立したのを、團平は更に大成して、節と三味線とを並行せしめることに成功した。明治十六年四月、文樂座の番附に於いて、古來始めて座本・太夫以外、三味線・人形の紋下を書き現はして三味線の位置を明確に示した。第三、淨瑠璃の新曲も多く、就中「壺坂靈驗記」「良辨杉由來」「大阪落城譚」「猿蟹合戰」などが有名である。但し「壺坂」「良辨杉」のあるは、千賀の慫慂功績と見るべきである（「壺坂」は千賀の加筆、「良辨杉」は千賀の作）。されば明治二十六年十一月二十日、千賀の病歿後、團平には新作曲の見るべきものが絕無であるのに見ても、これを知ることが出來よう。併し彼の音曲上の復古集成運動は、攝津大掾との紛擾分離によつて、文樂座にて挫折したから、彦六座でこれを試み、大隅を大成せしめた結果、明治期の淨瑠璃曲風をして文樂風と彦六風との二樣を生ぜしむるに至らしめたのである。【石割】

豐島與志雄（とよしまよしを）　小說家【閱歷】明治二十三年十一月二十七日、福岡縣朝倉郡禮田村に生る。第一高等學校を經て東京帝國大學佛文科に學び、在學中久米正雄等と共に第三次「新思潮」を興し、大正三年二月處女作「彼等と湖水」を發表し、爾來創作に飜譯に不斷の精進を努めて同人中最も早く世に出た。卒業後文筆生活を續ける傍ら、敎壇に佛文學を講じ、嘗て慶大講師であり、現在法政大學敎授・帝大講師である。【著作】主として大正年間に多くの小說を書いたが、「蘇生」「反抗」「人間繁榮」「生あらば」等の作集の外、「新選豐島與志雄集」及び明治大正文學全集第三十九卷に收められてゐる。飜譯にユウゴオの「レ・ミゼラブル」、ロマン・ロオランの「ジャン・クリストフ」の二大業績がある。

【作風】柔嫩なる文章を以て、市井の日常事を題材として平叙しながら、その作品は常に異常なる神經の流れと一脈の幻想味を漂はして獨自の藝術的境地を有してゐる。ことさらに深刻に走ることなく、寧ろ明るい溫雅な筆致の間にさへ、白日の妖氣とも稱すべきものを感じさせる點、全く比類なき特異である。彼は文壇に出でて以來時流に媚びることなく終始自己を操守して大成し、所謂文士といふよりは文學者たるその風格が作品の上にも現はれてゐる。代表作としては「蘇生」「野ざらし」「理想の女」「人間繁榮」を擧ぐべく、外に戲曲も十篇ほどある。【水木】

豐竹越前少掾（とよたけえちぜんのせうじよう）　淨瑠璃太夫【通稱】河內屋勘右衞門、また幾竹屋【歿年】明和元年（一七六四）九月十三日、享年八十四。【法名】一音院眞覺隆信日重居士【墓所】大阪中寺町高津表門筋北入東側本經寺。【閱歷】堂島豐後の家敷中衆某とも說かれてゐる（淨瑠璃譜）。生來の音樂好きは家業を捨てて義太夫の門に入り、竹本采女を名乘つた。初舞臺は元祿十一年らしい（竹豐故事）。彼は太夫としては、天稟音曲家として惠まれ、且つ性質稜々たる覇氣を藏し、藝術家としての天資と、經營家としての才能をも併せ具へてゐた。されば初舞臺の翌年元祿十二年の頃、既に獨立の志あり、師筑後に一派を立つることを願つてゐたともいふ。元祿十五年三月十一日、竹本座が伊勢への旅興行の時、采女は阪地に殘つて「けいせい懷子（ふところご）」といふ紀海音（？）の新淨瑠璃を上演したが、失敗に終つた。翌元祿十六年、道頓堀東立慶町（りゅうけいまち）の芝居で道具屋節と呼ばれた道具屋吉左衞門・永島重太夫と共に素淨瑠璃の出語りで興行したが、これ亦失敗に終つたので、やがて素淨瑠璃で旅興行へ出た。その歸り際に、泉州堺での心中事件を一段の世話淨瑠璃として、「心中淚の玉井」（別項）と名題をおいてかけたのが大當りだつたのに力を得て、同年歸阪後、直ちに道頓堀の東（竹本座より東寄り）に舞座の櫓を借りて、長門九郎兵衞と相座本で「豐竹座」（別項）の櫓を始めて揚げ、「堺みやげ、心中淚の玉井」を上演した。これは元祿十六年七月の盆興行で、この時始めて豐竹若太夫を名乘つた。相當の人氣を得たらしいが、興行上の成績は思はしくなかつた。續いて世話物「金屋金五郎浮名額」（別項）、寶永元年の「東岸居士」を打揚げて、若太夫一行は備中へ旅立つた。その不在中に豐

豐竹越前

竹座が賃借りの櫓なる舞の座を泉州築能（つくの）といふ人が買收し、櫓は竹田へ讓り、小屋は壞された。歸阪して「金屋金五郎後日雛形」の新淨瑠璃に出語り、藤井小三郎の出遣ひを試みたが成績は思はしくなかつた（座不詳）。寶永三年の暮には河內屋加兵衞の助力の下に「豐竹座」を再興した。相座本に辰松八郎兵衞を配し、作者には紀海音（別項）を抱へた。これも成功と迄はいかなかつたが、この間若太夫は天性の美聲、華麗な節廻しに切磋琢磨を加へて、遂に梁塵軒とも號した。十月十六日初日、「赤澤山伊東傳記」の大切「首途蓬萊山」で、自ら出語りをして受領を祝つた。この時天滿橋の三右衞門といふ者、芝居表へ始めて幟一本を立てたのが芝居表の幟の始めである。越前少掾は寬保元年冬、江戸へ下り、同二年正月江戸肥前座で「北條時賴記」五段目鉢木雪の段を江戸肥前掾をワキとして出語りをした。その年歸阪。延享二年十一月「北條時賴記」三度目の上演、六十五歳で一世一代の出語りで舞臺を退き、後見として豐竹座を守り立てた。延享三年秋京都で一世一代を「粂仙人吉野櫻」で勤め、寬延元年十月泉州堺で一世一代を「東鑑御狩卷」と「惡源太平治合戰」で勤めた。實に舞臺生活四十八年、新作淨瑠璃を作曲し、操にかけたこと約百四十五番。隱退後は、梁塵軒の作者名夫【本名】勝次郎。通稱紅屋長兵衞【變名】竹本內匠太夫・竹本大隅掾・竹本大和掾【歿年】明和三年十一月八日歿。享年六十五【法名】大譽宗和貫碩居士【閱歷】竹本筑後掾（別項）の高弟、內匠理太夫の子。理太夫は內匠を姓とする一派の太夫であつたが、義太夫に敎を乞うて入門した。彼は義太夫の櫓揚から、その歿後に及んでも竹本座を守り、正德五年の「國姓爺合戰」に三段目の口と四段道行で、竹本頼母のワキを語つて引退した。彼の一子勝次郎は幼少の頃から淨瑠璃道に入り、伊藤出羽芝居に出勤して、伊藤三輪太夫を名乘つた。後、豐竹上野少掾（後に越前少掾）の門に入り、豐竹三輪太夫と稱し、享保八年十一月「建仁寺供養」で豐竹座の初舞臺を勤め、後、享保十九年十月竹本座の「鷹屋道滿大內鑑」から竹本此太夫と名乘つた。【石割】

豐竹此太夫（とよたけこのたいふ）　操淨瑠璃座【沿革】元祿十六年の創立より、豐竹越前少掾の時代までは「豐竹越前少掾」の項參照。同太夫の歿するに先立ち、寬延元年八月竹本座（別項）の「假名手本忠臣藏」（別項）興行中、初代吉田文三郎と竹本此太夫との衝突から、竹本座と豐竹座の東西太夫の出入が行はれた。これより太夫の進退節度を失ひ、その後、不平がある度に東西太夫の入替へが行はるゝといふ風に樂屋の風紀が亂れ、座と共に榮枯を頒ち盛衰を共にする意氣は、太夫にも座本にもなくなつた上に、類燒に續く座本の死は、一座の意氣を全く喪はしめ、越前歿後の翌明和二年八月三十日、豐竹座は歌舞伎芝居と變つた。元祿十六年の創立より數へて座歷六十二年、豐竹座は

は實にこの人に始まつたのである。【石割】
豐竹越前少掾（とよたけえちぜんのせうじよう）　淨瑠璃太夫「豐竹筑前少掾」を見よ

豐竹越前少掾（因會所藏）

竹座が賃借りの檜なる舞の座を泉州築能といふ人が買收し、檜は竹田へ讓り、小屋は壞された。歸阪して「金屋金五郎後日雛形」の新淨瑠璃に出語り、藤井小三郎の出遣ひを試みたが成績は思はしくなかつた（座不詳）。寶永三年の暮には河内屋加兵衞の助力の下に「豐竹座」を再興した。相座本に辰松八郎兵衞を配し、作者には紀海音（別項）を抱へた。これも成功と迄はいかなかつたが、この間若太夫は天性の美聲、華麗な節廻しに切磋琢磨を加へて、遂に「東風」の一流を編み出すに至つた。次いで享保三年正月受領して豐竹上野少掾藤原重勝と稱した。同九年の大火後は、しばらく地方を巡行して、同年十月十六日、新築の舞臺開きを「女蟬丸」で開けた。越えて同十一年四月の「北條時賴記」（別項）は、古今の大當りをとり、翌年正月まで興行を續けた。これによつて豐竹座の基礎を固め、若太夫の地盤を堅固にした。享保十六年九月三十日、再び受領して豐竹越前少掾藤原重泰となつた。この時、別に梁塵軒とも號した。十月十六日初日、「赤澤山伊東傳記」の大切「首途逢萊山」で、自ら出語りをして受領を祝つた。この時天滿橋の三右衞門といふ者、芝居表へ始めて幟一本を立てたのが芝居表の幟の始めである。越前少掾は寬保元年冬、江戸へ下り、同二年正月江戸肥前座で「北條時賴記」五段目鉢木雪の段を江戸肥前掾をワキとして出語りをした。その年歸阪。延享二年十一月「北條時賴記」三度目の上演、六十五歳で一世一代の出語りで舞臺を退き、後見として豐竹座を守り立てた。延享三年秋京都で一世一代を「粂仙人吉野櫻」で勤め、寬延元年十月泉州堺で一世一代を「東鑑御狩卷」と「惡源太平治合戰」で勤めた。實に舞臺生活四十八年、新作淨瑠璃を作曲し、操にかけたこと約百四十五番。隱退後は、梁塵軒の作者名で「酒呑童子出生記」（延享三年五月）、「萬戸將軍唐日記」（延享四年三月）、「華和讃新羅源氏」（寬延二年七月）を綴つて操にかけてゐる。

【業績】豐竹座出でて東西の抗爭激しく、舞臺裝置や衣裳等に異常な進歩を示した。これ「曾根崎心中」（別項）の大當りで、座本隱退を決意した筑後掾とその人と爲りを異にしてゐる點である。越前は天授の眞甲の音が古今に勝れた上に、一・二・三の音が揃ひ、東風の淨瑠璃は、流麗な音聲で節面白く華やかであるから世上に喜ばれ、そして筑後掾の創始時代の義太夫節に、東風の脈を竹本賴母によつて注入され、遂に今日の淨瑠璃を成したのは、越前の業績であると見らるゝ。【門葉】主なるものは豐竹若太夫代々、豐竹駒太夫代々、駒太夫系統なる豐竹麓太夫及び豐竹筑前少掾（別項）等である。

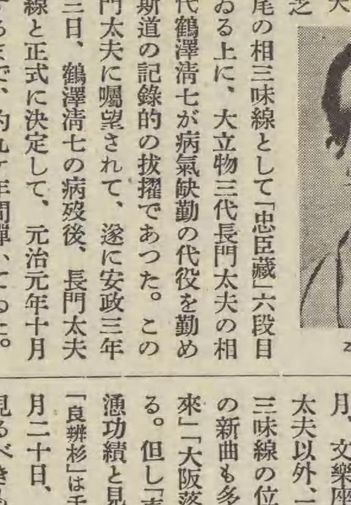
豐竹上野少掾 とよたけかうづけのせうじよう 淨瑠璃太夫【本名】勝次郎。通稱紅屋長兵衞【變名】竹本内匠太夫・竹本大隅掾・竹本大和掾【歿年】明和三年十一月八日歿。享年六十五【法名】大譽宗和貫碩居士【閱歷】竹本筑後掾（別項）の高弟、内匠理太夫の子。理太夫は内匠を姓とする一派の太夫であつたが、義太夫に敎を乞うて入門した。彼は義太夫の檜揚から、その歿後に及んでも竹本座を守り、正德五年の「國姓爺合戰」に三段目の口と四段道行で、竹本賴母のワキを語つて引退した。彼の一子勝次郎は幼少の頃から淨瑠璃道に入り、伊藤出羽芝居に出勤して、伊藤三輪太夫を名乘つた。後、豐竹上野少掾（後に越前少掾）の門に入り、豐竹三輪太夫と稱し、享保八年十一月「建仁寺供養」で豐竹座の初舞臺を勤め、後、享保十九年十月竹本座の「鷹屋道滿大内鑑」から竹本を冒し、父の姓をその儘名として竹本内匠太夫を名乘つた。寬保元年九月、又豐竹座へ出勤。延享元年十一月越前少掾一世一代、三度目の「北條時賴記」で、内匠太夫は受領して豐竹上野少掾と稱し、同四年三月病氣のため退座した。翌寬延元年竹本座の檜下竹本此太夫（豐竹筑前少掾參照）が人形遣吉田文三郎と「假名手本忠臣藏」で衝突し、此太夫が豐竹座に去るや、座本竹田出雲に懇請されて竹本座に入り、再び受領して竹本大隅掾と稱し、檜下となつた。また同年九月京都で、竹茂都大隅を名乘つて座本となつた（東西評林）。かくて寶曆元年三度受領して竹本大和掾藤原宗貫と改め、同十三年八月「諸葛孔明鼎軍談」で一世一代を勤めて引退し、有隣軒と號した。「東西評林」（寶曆八年刊）に彼を評して、「扨も〳〵あんな心の多い尻の居らぬ男はわしはいやじや」といつてゐる。竹本座と豐竹座の太夫の出入頻發は實にこの人に始まつたのである。【石割】

豐竹此太夫 とよたけこのだいふ 「豐竹筑前少掾」を見よ

豐竹座 とよたけざ 操淨瑠璃座【沿革】元祿十六年の創立より、豐竹越前少掾の時代までは「豐竹越前少掾」の項參照。同太夫の歿するに先立ち、寬延元年八月竹本座（別項）の「假名手本忠臣藏」（別項）興行中、初代吉田文三郎と竹本此太夫との衝突から、竹本座と豐竹座の東西太夫の出入が行はれた。これより太夫の進退節度を失ひ、その後、不平がある度に東西太夫の入替へが行はるゝといふ風に樂屋の風紀が亂れ、座と共に榮枯を頗ち盛衰を共にする意氣は、太夫にも座本にもなくなつた上に、類燒に續く座本の死は、一座の意氣を全く喪はしめ、越前歿後の翌明和二年八月三十日、豐竹座は歌舞伎芝居と變つた。元祿十六年の創立から數へて座歷六十二年、豐竹座は越前少掾と壽命を共にした。その後明和四年豐竹此吉が座本となり、豐竹此太夫（二代）・豐竹駒太夫等と謀り、當專助（別項）を作者として北堀江市側に豐竹座の名を興し、興行を續けたが、それは殘骸に過ぎず、眞の豐竹座は明和二年を以て廢滅したといつても過言ではない。【石割】

豐竹筑前少掾 とよたけちくぜんのせうじよう 淨瑠璃太夫【通稱】岸本屋善兵衞【前名】竹本此太夫【歿年】明和五年十一月五日。享年六十九【法名】法音院宗普日開信士【墓所】大阪天滿西寺町本傳寺【閱歷】竹本筑後掾（別項）の高弟陸奥系の人で、茂太夫の弟子。初め陸奥伊太夫といつた。合羽屋が渡世であつたから合羽伊太夫の稱がある。修業中出羽芝居を勤め、元文元年十月、竹本座を竹本美濃太夫で初舞臺、同三年八月竹本此太夫を名乘つた。延享元

月に天滿天神境内の芝居で、長尾の相三味線として「忠臣藏」六段目を彈いてゐる上に、大立物三代長門太夫の相三味線三代鶴澤清七が病氣缺勤の代役を勤めたのは、斯道の記錄的の拔擢であつた。この頃から長門太夫に嘱望されて、遂に安政三年九月二十三日、鶴澤清七の病歿後、長門太夫の相三味線と正式に決定して、元治元年十月長門が歿するまで、約九ケ年間彈いてゐた。後、湊太夫・五代春太夫を彈き、近世の名人攝津大掾を仕立て上げ、後、春子太夫に三代大



月、文樂座の番附に於いて古來始めて座本太夫以外、三味線・人形の紋下を書き現はして三味線の位置を明確に示した。第三、淨瑠璃の新曲も多く、就中「壺坂靈驗記」「良辨杉由來」「大阪落城譚」「猿蟹合戰」などが有名である。但し「壺坂」「良辨杉」のあるは、千賀の慫慂功績と見るべきである（「壺坂」は千賀の加筆、「良辨杉」は千賀の作）。されば明治二十六年十一月二十日、千賀の病歿後、團平には新作曲の見るべきものが絶無であるのに見ても、これを知ることが出來よう。併し彼の音曲上の復古集成運動は、攝津大掾との紛擾分離によつて常なる神經の流れと一脈の幻想味を漂はして獨自の藝術的境地を有してゐる。ことさらに深刻に走ることなく、寧ろ明るい溫雅な筆致の間にさへ、自日の妖氣とも稱すべきものを感じさせる點、全く比類なき特異である。彼は文壇に出でて以來時流に媚びることなく終始自己を操守して大成し、所謂文士といふよりは文學者たるその風格が作品の上にも現はれてゐる。代表作としては「蘇生」「野ざらし」「理想の女」「人間繁榮」を擧ぐべく、外に戲曲も十篇ほどある。【水木】

豐竹越前少掾 とよたけえちぜんのせうじよう 淨瑠璃太夫一行は備中へ旅立つた。その不在中に豐竹座を一段の世話淨瑠璃として（別項）と名題をおいてかけたのが大當りだつたのに力を得て、同年歸阪後、直ちに道頓堀の東（竹本座より東寄り）に舞座の櫓を借りて、長門九郎兵衞と相座本で「豐竹座」（別項）の櫓を始めて揚げ、「堺みやげ、心中淚の玉井」を上演した。これは元祿十六年七月の盆興行で、この時始めて豐竹若太夫を名乘つた。相當の人氣を得たらしいが、興行上の成績は思はしくなかつた。續いて世話物「金屋金五郎浮名額」（別項）、寶永元年の「東岸居士」を打揚げて、若太夫一行は備中へ旅立つた。その不在中に豐

年播磨少掾の後を承けて竹本座の櫓下となつたが、寛延元年の「假名手本忠臣藏」で、人形遣吉田文三郎と衝突し、豐竹座に移つて豐竹此太夫を名乘り、同二年三月、かしく兄殺しを直ちに脚色して「八重霞浪花濱萩」(並木大助作)を上演し大當りを取つた。その年九月二十三日受領、豐竹筑前少掾藤原爲政と稱した。寶暦七年九月「滑和源氏十五段」山伏攝待で一世一代を勤め、舞臺を退いたが、後、越前少掾の追善のため、明和元年十月「追善記念(かたのごとく)卻」に口上附で出演、續いて翌十一月の「二ツ腹帶」に出勤を名殘として、餘生を門弟の藁陶に送つた。【藝風】元來筑前少掾は小音で、大入りの時は聞き取れないと言はれたが(浪花其末葉)、「實體に情を深く語る」(淨瑠璃大系圖)のがその特色で、工夫一つで見物を引きつけた。爾來聲量のない太夫は、筑前少掾の工夫に學ぶところが多い。なほ此太夫の名跡は五代まで續いた。

〔石割〕

豐竹肥前掾(とよたけひぜんのじょう)

淨瑠璃太夫

【通稱】新右衞門【俳號】東々庵蛙井・一瓢庵等。【歿年】寶暦七年(一七五七)正月五日、江戸に歿す。享年五十四。【閲歷】寶永元年、大阪松屋町筋太物商の家に生る。生來虚弱、淨瑠璃を好み、家業を捨てて享保十一年二月、二十三歳で豐竹座「曾我錦几帳」に出演したのが初舞臺である。爾來稽古を怠らず、享保十五年八月「補正成軍法實錄」で、初めて序切を語る。同十八年江戸に下り、吉原五十町に借家して住んだ。かくて若松丹後掾の名代で操芝居を興行し、また葦屋町辰松八郎兵衞芝居にも出勤した。元文年間、堺町にて新に操芝居の櫓を揚げ、受領して豐竹肥前掾藤原清正と稱した。これが江戸肥前座である。江戸に操義太夫節の流布したのは、全く彼の手によつて成されたのである。古來三都に、座本と座主と櫓下太夫を兼ねたのは、京の宇治加賀掾、大阪の豐竹越前少掾、江戸の豐竹肥前掾の三人のみだと言はれてゐる。彼は江戸へ下るや、歌舞伎芝居の如く通しの繪看板を掲げ、又夜中木戸前に明日札を行燈にて掛け初めたと傳へる。延享四年春、「菅原傳授手習鑑」が大當りであつたのは、江戸中の手習師匠へやす札を配つた宣傳が利いた爲めである。かく商才の利いた傍ら、俳諧もやり、「かくれんぼ」(延享二年序)、「頭陀袋」(寛延四年序)の二俳書を編纂してゐる。

〔石割〕

豐竹若太夫(とよたけわかたいふ)「豐竹越前少掾」を見よ。

豐玉姬(とよたまひめ)「鸕鷀草葺不合尊」を見よ。

豐年(とよとし)漢學者【姓】賀陽朝臣【生歿】天平勝寶三年に生れ、弘仁六年(一四七五)歿。享年六十五。【墓所】宇治稚郎子命が仁德帝と相讓り給うた義に感じて、その御陵下に陪葬せられんことを請ひ、勅許を得て、其處に葬つた。【家系】賀陽氏はもと備中の舊族で、孝靈帝の皇子稚武彦命の後裔である。卽ち吉備氏と同族の皇別であるが、吉備氏の如く「新撰姓氏錄」に明記のないのは、本郷たる備中の賀陽郡から中央に出て未だ聞達繁榮しなかつた爲めであらう。【學統】大納言石上宅嗣に厚遇せられ、芸亭院に居る事數年の間に廣く群書に通達し、博學は淡海三船・釋通融にも過ぎてゐると稱せられた。【閲歷】神護元年六月、賀陽氏十二人に朝臣の姓を賜はつたが豐年十五歳の時である。延暦十六年二月九日(四十七歳)文章博士從五位下にて東宮學士に任ぜらる。東宮は安殿親王(平城帝)である。大同元年三月桓武帝崩御、五月東宮卽位され、豐年は文章博士從五位下兼陰陽頭となつた。時に五十六歳。同三年五月十四日、式部大輔從四位下より兼下野守となる。平城帝の卽位後、尚侍藤原藥子が寵を恃みて權を擅にした。それ以來、女謁が屢々行はれて英賢は多く排斥せられた。然るに豐年は、獨り素志を懷き、沈默自ら守つて憂悶を詩賦に紛らしてゐた。帝讓位後、奈良に遷幸し給うたが、豐年は職を守つて追從に與らなかつた爲めに、藥子の亂に關係しなかつた。嵯峨帝卽位の後、その宏才を惜しんで任用し、弘仁元年九月十六日(六十歳)、播磨守となされた。六十三歳、病を得て京に歸り、宇治の別業に歸臥した。晩年稚郎子命の高風を慕ひ、宇治に葬られんことを請うた事は「故老の稚郎子命の事を語るを聞き」と言ふが、弘仁三年宮中に「日本紀」進講のあつたことによつて、命の高風に感激したのであらう。又平城帝と嵯峨帝の關係に對して感ずるところもあつたので、殊更葬地を宇治に求めようと願つたことと推察せられる。卽ち嵯峨帝は、既に東宮時代に廢立せられようとし、驚き悲しんで桓武帝の御陵に祈つて纔かに事なきを得た。又藥子は虚榮心強く、平城上皇の重祚をそゝのかし奉つて、所謂藥子の亂を起したのである。これ等の事件は、豐年の性格と相容れないものであつたことは想像するに難くない。

【業績・人物】經史には殊に通曉し、對策は優秀の成績を以て登第した。操守も堅固で義を重んじ、事に當つて屈撓しない。又知己でなければ敢て應接するを好まなかつた。その博覽な事は、寧ろ道融・三船の上にあつた。されば弘仁五年、小野岑守が嵯峨帝の勅を奉じて「凌雲集」(別項)を編した時、菅原清公・勇山文繼等と議して、「賀陽朝臣豐年は當代の大才なり」と上表中にも稱揚し、又病中の豐年に就いて親しく問うて撰修した。それ等によつて博學宏才を知る事が出來よう。加ふるに、彼が岑守の父小野永見に示した「白眼對三公」の文の如きは、ただ「日本後紀」卷二十四(弘仁六年六月廿七日の條)に題のみ見えて、その詩全部を知る由はないが、これによつて貴族階級の憎しみを受けた事は事實である。併しこの事實といひ、又職を守つて追從に與らないことなどは、當時稀に見る侃諤の士であつた事を想はせる。時人は「天爵餘りあつて人爵足らず」と言つた。その性格の致すところで、寧ろその高潔を偲ばせる。

【參考】經國集卷十一・十三〇凌雲集〇日本後紀卷二十四(弘仁六年六月二十七日丙寅の條)〇芸亭院と賀陽豐年 新村出(典籍叢談)

〔山岸〕

豐宮崎文庫(とよみやさきぶんこ)「宮崎文庫」を見よ。

虎が石(とらがいし)

傳說

【解說】日本の傳說を發生學的に調べて見ようとする者には、これは最も手頃な、且つ便宜の多い題目と言つてよい。東海道の往來筋の一つの宿場の片脇に、この名の石が現はれたのは、比較的新しいことであつたらしく、しかも最初からこれに目を留めた好事の士が餘りに多かつた爲めに、傳說は成長しかけて終に一つの形に固定する暇がなかつた。淺井了意の「東海道名所記」(別項)が多分初めて、それから「一目玉鉾」(別項)、益軒の「吾妻路之記」、降つては「擊壤餘錄」や「海錄」「於路加於比」、さては十方庵の「遊歷雜記」まで、この事を記した書は搜せば數十種もあらうが、その記述は一つ一つ趣きを異にしてゐる。書いた人の出たらめではなく、土地の者が既に色々の事を謂つてゐたのである。さうしてその何れもが、大磯で作り上げた口碑でなく、必ず幽かなる無意識傳承によつて、方々からこゝへ持ち込まれたものであつた。問題は二つに分れて、我々の殊に面白く思ふのは、終始一貫してゐる石の名の起りであるが、今一つの傳說內容の方も、ぐら〳〵變つてゐたとは云ひながら、やはり大よそは由つて來たる所があつた。近代の虎が石は或る寺院の管理に歸し、人はその石を抱き試みて重さによつて石占をすることになつてゐたといふが、この俗信がもし眞面目なものであつたなら、實は最も古い形に近いのであつた。ところが以前の旅人はただ戲れにこれを玩んだだけで、美男が抱けばいと輕く揚がり、ぶをとこが持つと重かつたなどと笑ひ興ずるに過ぎなかつた。これは「本朝國語」にも見えた拘らず大磯といへば必ず虎が石を聯想せしめたのは、一つには曾我の流布の力でもあるが、又一つにはかういふ種類の石に、トラといふ名を附する古來の習はしがあつた爲めかと思ふ。「鄉土研究」(四卷五號以下)に、老女化石譚と題して、嘗て私はこの問題の解說を試みようとしたことがある。人の忘れた虎が石は、京都・關東その他の地に幾らもあり、大磯の虎御前が諸國を巡歷して、記念を留めたといふ名石も亦數多く、祐成の愛人以外にも別に亦虎姬虎御前といふ美女が、やはりその遺跡に石を存してゐる。問題は溯つて何故に或る種の婦女に、虎といふやうな名があつたか迄、考へて見なければならぬのであつた。福島の信夫山や富士の麓には、大磯の虎が尋ねて來て、空しく引返したといふ地に傳說の石がある。これと越中立山の中腹に、登らんとして石に

【性質】唐樂。新樂の大曲で、壹越調曲に屬する。序破急がある。舞があり六人で舞ふ。舞人は袍を着け、特殊の甲を冠る。劍を帶びない。諸曲「石橋」の末段の句に、「獅子とらでんの舞樂の砌」とあるところから見ると、或は獅子の狂ひを表はした舞踊と關係してゐるものかとも思はれる。答舞は「古鳥蘇(ことりそ)」を用ひる。【沿革】起原は明かでないが、一說に唐の則天武后の作であるといふ。

「文獻通考」による、唐の「散樂」の軟舞中に

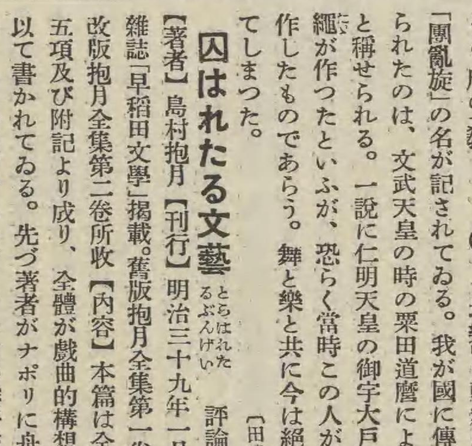
洲近代文明の概觀、ルネッサンス期の美術、沙翁劇、浪漫的時代の文藝思想等に論じ進む。第十章以下は、自然主義と標現主義(象徵主義)とについて詳論し、宗教的文藝に觸れて論旨を結ぶ。次に附記の一篇で、抱月自身の意見として、日本的・東洋的な國民的文藝の建設を獨逸の鄉土藝術と對照して提唱してゐる。言ふまでもなく、著者が歐洲各國を巡遊中に得た樣々の見聞と、歐洲近代の文學思潮と哲學などについての研究とを、ダンテの名に託して極めて劇的で且つ浪漫的な、調子の高い一文に綴つたものである。最後に「情趣的、宗教的、東洋的、この關係論はなほあるべきなり。「放たれたる文藝」を說いて更に我が想を尋ねん」と、この文章を結んでゐる。彼は原始からの文藝を知識の文藝と感情の文藝に區分し、その二つの流れが、現代まで交錯し、現代は知

なく、土地の者が既に色々の事を謂つてゐたのである。さうしてその何れもが、大磯で作り上げた口碑でなく、必ず幽かなる無意識傳承によつて、方々からこゝへ持ち込まれたものであつた。問題は二つに分れて、我々の殊に面白く思ふのは、終始一貫してゐる石の名の起りであるが、今一つの傳説内容の方も、ぐら〳〵變つてゐたとは云ひながら、やはり大よそは由つて來たる所があつた。近代の虎が石は或る寺院の管理に歸し、人はその石を抱き試みて重さによつて石占をすることになつてゐたといふが、この俗信がもし眞面目なものであつたなら、實は最も古い形に近いのであつた。ところが以前の旅人はただ戯れにこれを玩んだだけで、美男が抱けばいと輕く揚がり、ぶをとこが持つと重かつたなどと笑ひ興じてゐる。これは「本朝國語」にも見えた大和洞川のオイトシボ石と同じ例で、嘗て儛の石神に占問ひした習俗の、一旦零落した型がこゝへ移されたのである。虎女は大磯の產で「曾我物語」以來の有名な貞女であるが、唯これだけでは、餘りにも石との因緣が薄いので、後にはこの風習をそつちのけにして、別に虎御前の精靈が、化して道の隅の石となるといふ傳へも起つたと見えて、これを咏歎した詩が「錦里文集」には出てゐる。或は曾我十郎が路に仇人の襲撃を受けた時、この石が箭を防いだと謂つて、石の面に疵痕のあるのを示してゐたこともある。さうかと思ふとその石の凹みは、よく見ると男女の陰相を現じてゐるなどと謂つて、依然として巫娼傳道の痕跡を傳ふるものもあつた。この石の記述を見ると、石も昔から一つのものでなく、何度か次々に別のものへ名を遷してゐた。それにも拘らず大磯といへば必ず虎が石を聯想せしめたのは、一つには曾我の流布の力でもあるが、又一つにはかういふ種類の石に、トラといふ名を附する古來の習はしがあつた爲めかと思ふ。「郷土研究」（四卷五號以下）に、老女化石譚と題して、嘗て私はこの問題の解説を試みようとしたことがある。人の忘れた虎が石は、京都・關東その他の地に幾らもあり、大磯の虎御前が諸國を巡歴して、記念を留めたといふ名石も亦數多く、祐成の愛人以外にも別に亦虎姫虎御前といふ美女が、やはりその遺跡に石を存してゐる。問題は溯つて何故に或る種の婦女に、虎といふやうな名があつたか迄、考へて見なければならぬのであつた。福島の信夫山や富士の麓には、大磯の虎が尋ねて來て、空しく引返したといふ地に傳説の石がある。これと越中立山の中腹に、登らんとして石に化した若狹の登宇呂の姥、加賀の白山の登山口に於て、同じく女人結界の禁を破らうとして化石した融の尼、更に古く世に知られた吉野金峯山の都藍尼も、私の想像ではすべて一つの名で、上古の多くのタラシ姫と共に、神に仕へた一種の女性を意味した名かと思ふ。靈山の麓に在る多くの比丘尼石・姥石・モリコ等の類には、虎が石の名はなくても、押して登らうとして化石したといふ口碑なら無數にある。化石は現實でないから後の解釋であつて、以前はただ女巫の祈念場の標の石かと思ふ。さうして東海道の新驛へは、これはただ未完成の傳説として、運び込まれたに過ぎぬと思ふ。

〔柳田（國）〕

團亂旋（とらんでん）

雅樂舞曲【名義】その舞姿が亂れて旋轉するので、この名が出たといふが明かでない。【異稱】「團欒傳」「后帝團亂旋」



團亂旋

【性質】唐樂。新樂の大曲で、壹越調曲に屬する。序破急がある。舞があり六人で舞ふ。舞人は袍を着け、特殊の甲を冠る。劍を帶びない。諸曲「石橋」の末段の句に、「獅子とらでんの舞樂の砌」とあるところから見ると、或は獅子の狂ひを表はした舞踊と關係してゐるものかとも思はれる。答舞は「古鳥蘇（ことりそ）」を用ひる。【沿革】起原は明かでないが、一説に唐の則天武后の作であるといふ。「文獻通考」によると、唐の「教坊樂」の軟舞中に「團亂旋」の名が記されてゐる。我が國に傳へられたのは、文武天皇の時の粟田道麿によると稱せられる。一説に仁明天皇の御宇大戸眞繩（まなわ）が作つたといふが、恐らく當時この人が改作したものであらう。舞と樂と共に今は絶えてしまつた。

〔田邊〕

囚はれたる文藝（とらはれたるぶんげい）

評論【著者】島村抱月【刊行】明治三十九年一月、雜誌「早稻田文學」掲載。舊版抱月全集第一卷・改版抱月全集第二卷所收【内容】本篇は全十五項及び附記より成り、全體が戯曲的構想を以て書かれてゐる。先づ著者がナポリに舟がかりした一夜、ヴエスヴィアス山の熔岩流が赤々と染め殘してゐる夜空を眺めてゐると、「頭に頭巾を戴き、眞紅の長衣を垂れ」た異裝の者が一人現はれる。それはダンテで、彼はまづ古來の哲學の變遷發達を述べ、轉じて歐洲近代文明の概觀、ルネッサンス期の美術、沙翁劇、浪漫的時代の文藝思想等に論じ進む。第十章以下は、自然主義と標現主義（象徴主義）とについて詳論し、宗教的文藝に觸れて論旨を結ぶ。次に附記の一篇で、抱月自身の意見として、日本的・東洋的な國民的文藝の建設を獨逸の郷土藝術と對照して提唱してゐる。言ふまでもなく、著者が歐洲各國を巡遊中に得た様々の見聞と、歐洲近代の文學思潮と哲學などについての研究とを、ダンテの名に託して極めて劇的で且つ浪漫的な、調子の高い一文に綴つたものである。最後に「情趣的、宗教的、東洋的、この關係論はなほあるべきなり。『放たれたる文藝』を説いて更に我が想を尋ねん」と、この文章を結んでゐる。彼は原始からの文藝を知識の文藝と感情の文藝に區分し、その二つの流れが、現代まで交錯し、現代は知識の流れたる科學文藝、即ち自然主義の氾濫時代であると見る。そしてそれは科學に囚はれた文藝である。「文藝は囚はれたり。十九世紀の後半に於いて遂に精力非凡なる知識の爲めに囚はれたり。（中略）今の文藝は、一旦、全く知識の羈絆より切り放たるべし。而して其の放浪する所は情の大海なるべし」と説き、神祕主義乃至標現主義を推し延ばした宗教的文藝こそ、最後の解放さるべき文藝の碇泊所であらねばならぬと結論した。【批評】極めて客觀的且つ實證的で、その意味では、純粹に科學的でさへあつた批評家・學者としての一面と、同時に浪漫的すぎるほどの情熱と感傷の藝術家でもあつた抱月の他の側面をも窺ふに足りる長論文で、「新美辭學」（別項）などに現はれた冷徹な學究者としての抱月とは、全く別個の彼の風貌を見る。彼がこの論文で、

科學的文藝を否定したのは、當時の歐洲文壇の通念と共通するが、だからといつて、宗教文藝にその解放を求めようとしたのは、あの思索の深邃な抱月の批判力の典型を示すものとは云へない。併しこの浪漫主義的思想を強調した一文は、時恰も自然主義の擡頭期であつたので、當時の文藝界に、一大センセーションを捲き起した。殊に後に自然主義の理論家に轉じた著者の評論として意味深いものである。(近代文藝之研究參照)　〔武藤〕

鳥追歌　歌謠【名義】門附歌の一種。もとは田畑を啄む鳥を追ひ拂ふ動作に伴ふ歌で、田歌の一種かと思はれるが、それから變化して、田畑の豐年を祈る祝詞となり、やがて一般的なほめ詞の歌と變化して、門附歌になつたのである。【異名】「雍州府志」には、悲田寺の項に、「自二元日一至二十五日一著レ笠以二白布一覆レ面而敲レ手唱二祝語一。倚二門戸一請二米錢一。是號二敲與次郎一。又稱二鳥追一。元民間出レ自二追二拂田疇鳥一之辭一也。」とあるが、「人倫訓蒙圖彙」によると、叩の與次郎とは悲田寺に住した乞食非人の稱で、「二季の彼岸所々祭禮の比は、たゝきと云ひて口早なる事を云ひて物を貰ふ」と見える。卽ちこの叩の徒が、鳥追にも出たので、京洛では鳥追と叩とを混同して稱してゐるのである(敲參照)。【解說】「本朝世事談綺」に、鳥追は踏歌の遺風であると云ひ、延文の頃、三河國の長者の宅に、正月に遊行上人が宿つたところ、長者の田の鳥追を勤めとする人々が數人年頭の禮として、さゝらをすつて鳥追の歌を歌つた。これがその起原であると云ふが、疑はしい傳說である。鳥追の事は、早く謠曲「鳥追舟」や、三莊太夫傳說の中にも見えて、室町時代に盛んに行はれ、鳥追歌も亦この時代から存してゐた(三莊太夫參照)。江戸時代ではこれが門附となり、年頭に、長篇の歌を歌ひ歩いて門口に立ち合力を乞うた。大抵二人一團となり、三味線や鼓弓などに合せて歌つた。後には多く非人の女が出るやうになり、編笠を冠り、笠紐は赤い太いきれを用ひて顎に結び、美人が多かつたので、艶めかしい初春の情調を添へて、しばゝ艶聞も傳へられた。地方では、最近まで殘つてゐたが、都會では早く明治の初めに絕えた。【歌詞】元祿以前から存してゐた「やんら目出たや、やんら樂しや、千町や萬町の鳥追が參りて、福の神を祝ひこめ、白米もよんに洗ふ、眞白米もよんに洗ふ云々」と云ふ長篇の歌詞は、全文が「本朝文鑑」(享保二年刊)にも出で、近松作の淨瑠璃「天鼓」(別項)にも見える。この歌は、上方唄や江戸長唄(各別項)等に取り入れられて、種々なる歌が出來てゐる。又幕末には、この歌の初めの方だけが流行唄として行はれ、京の端唄として、現在も一部で行はれてをり、江戸にも輸入せられて、江戸端歌ともなつてゐる。その歌詞は、「京の鳥追」又は「上方鳥追」などと云ひ、「浮れ草」(文政五年成)以下の諸書に見える。以上は京阪の鳥追歌であるが、幕末に江戸で行はれた鳥追歌は次の如き歌であつた。

海上はるかに見渡せば、七福神の寶船、綾や錦の帆を上げて、紫檀の艫櫂に舵を取る
一夜あくれば松飾り、門に羽根つく手鞠唄、春風さそふ振の袖、鶴と龜との染模樣
蓬萊山に鶴と龜、千代萬歲のお目出たや、寶盡しや島の臺、仲睦まじくじやうとうは
御湯殿始め着衣始め、作る殿方姫方の、梅や柳の色比べ、春風さそふ戀衣

三下りの歌で、全くの祝儀歌と化してゐる。「歌謠字數考」には、「冒頭に、海上遙かに見渡せば七福神の寶船といふ言葉を歌ひてあとは唯賑はしき三絃に合はせて、何くれとなく、歌ふことなれば」とある。【註釋書】古い鳥追歌を註解した書には、浪花の狻猊子(入江昌喜)が著はした「青陽唱詁」がある。(一名「鳥追歌の解」安永八年刊。自筆稿本も存す。雜誌「歌舞音曲」三ノ一以下所載の「鳥追唱歌の解」、「書物往來叢書歌謠篇」所收)　〔藤田〕

鳥追阿松海上新話　草雙紙。三編九册【著者】久保田彦作【畫工】陽州齋周延【刊行】明治十一年一月—三月、錦榮堂。明治十七年四月の改竄省略の一册本(歌川芳重畫)がある。明治文學名著全集本(東京堂)もある。

【梗概】お松は、京橋木挽町采女ヶ原の雪駄直し定五郎の娘であつたが、毎日母親と三味線抱へて春は鳥追ひ、平素は鶴賀節の女太夫となつて、商家の軒下や勤番長屋の窓下などに立つた。當時慶應から維新にかけて江戸に屯集してゐた諸藩の兵士間に、この母子の仇姿が評判であつた。中でも丸の内徵兵隊濱田正司はお松の色香に迷ひ、母子の罠にかゝり三百餘圓も騙り取られ、それが隊長に知れて禁足となる。その頃今一人お松を慕ふ若者で淺草の呉服屋の番頭忠藏といふ者があつて、切なる思ひで密會してゐる所へ、豫て情夫の雪駄直し大坂吉が、馴れ合の出刃庖丁騒ぎで、忠藏の持合せてゐた主家の金百圓で示談となる。かうした狂言がお上に知れて、大坂吉とお松の兩人は大阪へ逃げようとして、品川で仲間の密告から大坂吉は召捕られ、お松は闇に紛れて逃げ、六郷の土手に來かゝつた時、縊死しようとしてゐる忠藏に出會ひ、二人手を携へて忠藏の郷里大阪に赴く途中、忠藏は病氣となり、路銀までも盜まれたので、二人は途方に暮れてゐた矢先、同じ宿屋に泊り合せた府中の藝者屋定五郎は、深切ごかしで忠藏夫婦を欺き、お松を藝者にしようと、當座凌ぎの身の代金三十圓を渡し、お松を駕籠に乘せて連れ出した。藝者屋主人實は甲州無宿の作造といふ無賴漢で、言葉巧みにお松を人里離れた海岸におびき出し、手籠にしようとした。お松は驚いて海に飛び込んでしまふ。折柄通りかゝつた汽船に救ひあげられ、神戸に行く。そこでお松は、忠藏の親忠兵衞を大阪に訪ね、いろ〳〵甘言をもつて忠兵衞夫婦を欺き、暫く此所に落ちつくこととなつた。そこへ、今では大阪に來て重き役目を掌る濱田正司が現はれ、お松を捕縛した上何處ともなく連れ行き、後に權妻にした。お松は情夫大坂吉が濱田の馬丁となつて住み込んでゐるのに偶然出會ひ、人目忍んで密會するうち、濱田の正妻の忠僕佐吉に知られ、身の安全を計るため、正妻お安を無實の罪に陷れ、佐吉を苦しめたので、佐吉は呵責に堪へず、自ら舌を噛んで死ぬ。お松と大坂吉はます〳〵不義の淫樂を續けてゐた。偶々正司は罪科露顯して獄に繫がれ、そこで死んだ。お松・大坂吉の二人は、その家財を奪ひ、東京さして逃げ行く途中、山路に迷ひ、先年お松を勾引さうとした甲州無宿の作造に出會ひ、格闘するうち、大坂吉は谷底深く墜落され、お松は心ならずも作造の意に從つた。一日作造に連れられて出獵し、男の油斷を見すかして狙撃したが彈は外れた。作造は怒つて山刀を拔かうとした時、大熊が現はれて彼を喰ひ殺した。お松は驚いて逃げる際谷底へ落ちてしまふ。そこを通りがかつた旅僧日海に救はれる。あたりを見廻すと、小笹の中に雪に埋もれた男の死體があつた。それは作造のために蹴落された情夫大坂吉であつた。つく〴〵身の因果の恐るべきを覺り、それより日海の弟子となり、煩惱のきづなを斷つために、顔に燒十能をあてた。甲州日海の寺で三年間辛抱したが、惡念再發、師の金を盜み取らうとして見咎められ、寺男や檀家の者にしたゝか打擲されたのが原因で、さきに顔にあてた燒痕から膿汁がしたゝり、打擲された箇所は黑紫に腫れ上り、世間からは忌み嫌はれ、身の置き所もなく、乞食しながら東京橋場汐入堤の母の許へたどりついたが、病が重くなつて、犬の如く狂ひ死んだ。

【批評】本書は、明治初期の毒婦小說中の壓卷

二つを擧げてゐる。現存本が何れに屬するかに就いては各說がある。山岡俊明は、「今とりかへばや」とし、黑川春村は「古とりかへばや」は鎌倉以前で「今とりかへばや」は鎌倉中期の作とし、又「風葉集」に見えてゐる七首のうち、現存本には三首が見えないから、新古の二本が一部づつ混つて今の本となつてゐるとし、岡本保孝はこの二種の本共に亡佚して傳はらず、現存のものは「風葉集」以後ではないかと疑ひ、藤岡作太郎は「今とりかへばや」は「古とりかへばや」の一部を修正したもので、現存のそれも出來ない。春宮には未だ若宮がないので、名高い大納言の姫君を入內させるやうに頻りに仰せられるが、御承諾申上げない。帝御讓位あつて朱雀院にましまし、亡き御后の腹にただ一人の一の宮を女ながら春宮に立てさせらる。關白も入道したので、大納言は左大臣關白となり、侍從(女)は三位中將となる。やがて四の君と婚し、權中納言に進み、左衞門督を兼ねる。漸く普通の人と異つた我が身に氣がつくがどうすることも出來ない。妹姫(男)は春宮の後見として宣耀殿に入り尙侍となる。中納言と共に身の憂さを嘆く。或る時宰相中將忍び入つて密かに四の君に會ふ。やがて遂に懷妊する。中納言(女)これを知り遁世を志す。さて先帝の三の皇子渡唐して歸り吉野の院にいます。唐人との間に出來た姫宮二人を伴ひ給ふ。中納言吉野に入つて宮に會

り、男女取り違へる事も同樣であるが、筋の上で大分相違してゐるやうである。【諸本】明治以前に刊本はない。日本文學全書・國文大觀・國文學叢書・日本文學大系・況齋叢書等に收められてゐる。寫本は多いが殆ど同一系統の本で、內閣文庫・靜嘉堂文庫・松井簡治博士等の藏本は、山岡俊明本の寫しでその序があり、他に無窮會・帝國圖書館・宮內省圖書寮・佐佐木信綱博士・前田家等の藏本がある。又刈屋圖書館には五册本、四册本二部、三册本都合四本を藏し、京大國文研究室・藤井乙男博士各一本、神宮文庫には第四卷の缺けたものと山岡俊明本の寫本の二部を藏してゐる。【梗概】何時の頃か、權大納言で大將を兼ねた人があつて、北の方が二人あつた。

禮の比は、たゞきと云ひて口早なる事を云ひて物を貫ふ」と見える。即ちこの叩の徒が、鳥追にも出たので、京洛では鳥追と叩とを混同して稱してゐるのである（蔽參照）。【解說】「本朝世事談綺」に、鳥追は踏歌の遺風であると云ひ、延文の頃、三河國の長者の宅に、正月に遊行上人が宿つたところ、長者の田の鳥追を勸めとする人々が數人年頭の禮として、さゝらをすつて鳥追の歌を歌つた。これがその起原であると云ふが、疑はしい傳說である。鳥追の事は、早く謠曲「鳥追舟」や、三莊太夫傳說の中にも見えて、室町時代に盛んに行はれ、方鳥追」などと云ひ、「浮れ草」（文政五年成）以下の諸書に見える。以上は京阪の鳥追歌であるが、幕末に江戸で行はれた鳥追歌は次の如き歌であつた。

海上はるかに見渡せば、七福神の寶船、綾や錦の帆を上げて、紫檀の艫櫂に舵を取る
一夜あくれば松飾り、門に羽根つく手鞠唄、春風さそふ振の袖、鶴と龜との染模樣
蓬萊山に鶴と龜、千代萬歲のお目出たや、寶盡しや島の景、仲睦まじくじやうとうは
御湯殿始め着衣始め、作る殿方姫方の、梅や柳の色比べ、春風さそふ戀衣

が評判であつた。中でも丸の內徵兵隊濱田正司はお松の色香に迷ひ、母子の罠にかゝり三百餘圓も騙り取られ、それが隊長に知れて禁足となる。その頃今一人お松を慕ふ若者で淺草の呉服屋の番頭忠藏といふ者があつて、切なる思ひで密會してゐる所へ、豫て情夫の雪駄直し大坂吉が、馴れ合の出刃庖丁騷ぎで、忠藏の持合せてゐた主家の金百圓で示談となる。かうした狂言がお上に知れて、大坂吉とお松の兩人は大阪へ逃げようとして、品川で仲間の密告から大坂吉は召捕られ、お松は闇に紛れて逃げ、六鄕の土手に來かゝつた時、佐吉は呵責に堪へず、自ら舌を噛んで死ぬ。お松と大坂吉はます〳〵不義の淫樂を續けてゐた。偶々正司は罪科露顯して獄に繫がれ、そこで死んだ。お松・大坂吉の二人は、その家財を奪ひ、東京さして逃げ行く途中、山路に迷ひ、先年お松を勾引さうとした甲州無宿の作造に出會ひ、格鬪するうち、大坂吉は谷底深く蹴落され、お松は心ならずも作造の意に從つた。一日作造に連れられて出獵し、男の油斷を見すかして狙撃したが彈は外れた。作造は怒つて山刀を抜かうとした時、大熊が現はれて彼を喰ひ殺した。お松は驚いて逃げる際

谷底へ落ちてしまふ。そこを通りがかつた旅僧日海に救はれる。あたりを見廻すと、小笹の中に雪に埋もれた男の死體があつた。それは作造のために蹴落された情夫大坂吉であつた。つく〳〵身の因果の恐るべきを覺り、それより日海の弟子となり、煩惱のきづなを斷つために、顏に燒十能をあてた。甲州日海の寺で三年間辛抱したが、惡念再發、師の金を盜み取らうとして見咎められ、寺男や檀家の者にしたゝか打擲されたのが原因で、さきに顏にあてた燒疵から膿汁がしたゝり、打擲された箇所は黑紫に腫れ上り、世間からは忌み嫌はれ、身の置き所もなく、乞食しながら東京橋場汐入堤の母の許へたどりついたが、病が重くなつて、犬の如く狂ひ死んだ。

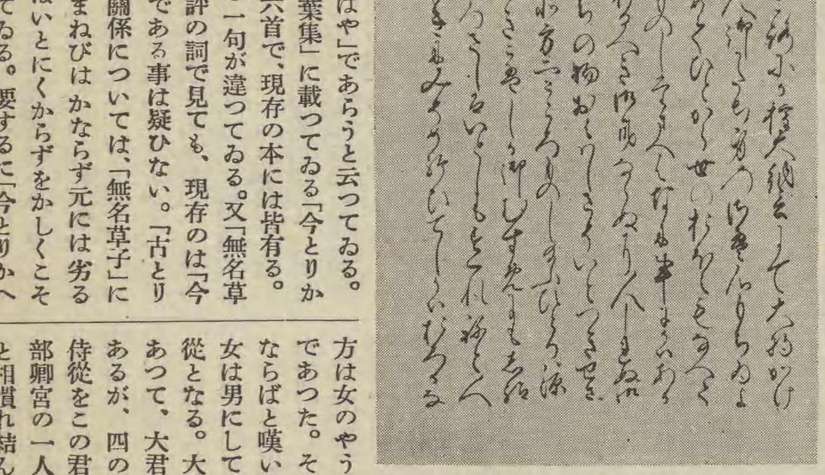
【批評】本書は、明治初期の毒婦小說中の壓卷たるばかりでなく、いろ〳〵の意味に於て注目すべきものがある。卽ち當時新聞に出た續物が單行本として刊行された嚆矢であり、明治毒婦物の最初でもあり、明治式合卷草雙紙の代表作でもあつたなどの諸點である。主人公及び他の人物の性格描寫も、この時代のものとしては可なり成功して居り、全體を通じて無理がなく、文章の流麗なのも特色の一つである。

【參考】明治文學名著全集第十卷　【石川（巖）】

鳥追舟（とりおひぶね）　「夫婦物（めとものの）の諸曲」を見よ。

とりかへばや物語　物語　四卷

【作者】不詳　【名稱】異腹の姉弟が、姉は男のやうで、弟は女のやうな性質であるのを、父君が「とりかへばや」と思はれたと云ふ所から出てゐる。【成立・由來】「とりかへばや」の名は「拾遺百番歌合」に見え、また「風葉集」「無名草子」には、「とりかへばや」「今とりかへばや」の二つを擧げてゐる。現存本が何れに屬するかに就いては各說がある。山岡俊明は、「今とりかへばや」とし、黑川春村は「古とりかへばや」は鎌倉以前で「今とりかへばや」は鎌倉中期の作とし、又「風葉集」に見えてゐる七首のうち、現存本には三首が見えないから、新古の二本が一部づつ混つて今の本となつてゐるとし、岡本保孝はこの二種の本共に亡佚して傳はらず、現存のものは「風葉集」以後ではないかと疑ひ、藤岡作太郎は「今とりかへばや」は「古とりかへばや」の一部を修正したもので、現存の



とりかへばや物語（池田龜鑑氏藏）

り、男女取り違へる事も同樣であるが、筋の上で大分相違してゐるやうである。【諸本】明治以前に刊本はない。日本文學全書・國文大觀・國文叢書・日本文學大系・況齋叢書等に收められてゐる。寫本は多いが殆ど同一系統の本で、內閣文庫・靜嘉堂文庫・松井簡治博士等の藏本は、山岡俊明本の寫しでその序があり、他に無窮會・帝國圖書館・宮內省圖書寮・佐佐木信綱博士・前田家等の藏本がある。又刈屋圖書館には五册本、四册本二部、三册本都合四本を藏し、京大國文研究室・藤井乙男博士各一本、神宮文庫には第四卷の缺けたものと山岡俊明本の寫本の二部を藏してゐる。【梗概】何時の頃か、權大納言で大將を兼ねた人があつて、北の方が二人あつた。一人は源宰相の娘、その腹に男君一人。他の一人は藤中納言の娘で、一人の姫君があつた。この男君と姫君は不思議な位似てゐて美しかつたが、妙な事に男君の方は女のやうで、姫君の方は男のやうな性質であつた。それで大納言はいつも取りかへたならばと嘆いてゐたが、仕方なくて男は女に、女は男にして育てて行つた。やがて女君は侍從となる。大納言の兄右大臣に四人の姫君があつて、大君は女御、中の君は春宮の女御であるが、四の君は美しいので名高い。それで侍從をこの君にと思つてゐる。帝の御叔父式部卿宮の一人子宰相中將は容貌美しく、侍從と相慣れ結んで共に世に持て囃されてゐる。妻には侍從の妹君か四の君かと思つてゐるが、それも出來ない。春宮には未だ若宮がないので、名高い大納言の姫君を入內させるやうに頻りに仰せられるが、御承諾申上げない。帝御讓位あつて朱雀院にましまし、亡き御后の腹にただ一人の一の宮を女ながら春宮に立てさせらる。關白も入道したので、大納言は左大臣關白となり、侍從（女）は三位中將となる。やがて四の君と婚し、權中納言に進み、左衞門督を兼ねる。漸く普通の人と異つた我が身に氣がつくがどうすることも出來ない。妹姫（男）は春宮の後見として宣耀殿に入り尙侍となる。中納言と共に身の憂さを嘆く。或る時宰相中將忍び入つて密かに四の君に會ふ。やがて遂に懷妊する。中納言（女）これを知り遁世を志す。さて先帝の三の皇子渡唐して歸り吉野の院にいます。唐人との間に出來た姫宮二人を伴ひ給ふ。中納言吉野に入つて宮に會ひ、やがて位を極めんと豫言され、暫し止まつて京に歸る。四の君は女子を生む。夏の暑い頃中納言が衣を脫いでゐる所へ中將來り、その女なる事を見表はして强ひて契る。中納言嘆けども詮方ない。間もなく懷妊。中納言（女）は翌年春右大將となる。中將は中納言に進む。大將（女）は吉野に行き七月晦日の頃は必ず來らんと言ひ置いて歸り、尙侍（男）等に餘所ながら暇乞ひして產のために宇治の中將の別莊に籠る。都では大騷ぎとなり、四の君も密通の事露見し勘當される。尙侍は退つて男姿にかへり、大將の行方を尋ね吉野に入つて消息を送る。宇治にて對面すれば、既に男君を生んでゐる。或る夜關白の夢に僧が現はれて、天狗の祟りで今迄のやうな事になつてゐたが、祈に依つて直つたと告げる。翌朝男君から吉報があり、姉弟は吉野に籠つて互に

代り合はうとして各々その修行をする。やがて京に歸つて、中納言の事で一度吉野にかくれたが、關白の望に依つて歸つたと披露する。やがて夫々元の男女に復して參り仕ふ。然るに春宮(女)と、元の尚侍(男)との間に男御子生まれ給ふ。これは關白方に預けらるゝ事となり、春宮は宮中を出でられる。大將は二條に邸を造り、吉野の宮の姉宮を妻とし、四の君をも住ます。妹宮は中納言の北の方とする。女君の尚侍はやがて御子を生み、女御中宮となる。中納言はこの度の大將は明かに男なるを見て不審に堪へないが遂に解らず、宇治から行方知れずになつた人の事を常に偲ぶ。元の春宮の御子は童殿上して時には母の院にも參る。大將はこれを愛する。宇治で生れた男君も同じく童殿上して、中宮これを見て悲しみ且つ愛せられる。やがて關白は入道し、右大臣は太政大臣に、大將は左大臣關白に、式部卿の中納言は先に大納言になり、今又内大臣兼大將となる。かくて平穩に皆々榮えた。

【構想】構想としては特殊な興味がある。最初に二人の容貌の酷似してゐる事を說いてとりかへて後のために用意してゐる。けれど原因を天狗の祟りとした所に、當時の時代思潮が見え、且つ幼稚さがある。成長すると共に、それを正すことが出來難くなつた事は、當時の風習がどんなものであつたかを明かに示すものである。このまゝ尋常に行つては父君の言の通り、二人共出家しなければならぬところへ、式部卿の中納言を配して混亂を生ぜしめ、それに依つて筋を發展させてゐる。戀愛談としても、變形のために特殊の面白さを加へるが、要するに根柢に乏しい恨がある。併し他の神仙談と較べて、努めて現實味を持たさうとしてゐる點が異なる。最後が目出度しで結ばれ、且つ佛教的色彩の極めて薄い點は、この作品の成立が比較的平安朝に近い事を示してゐる。なほ吉野山のところは源氏八の宮の事に倣つてゐる。【價値】この作の價値は、その構想の特異な點に在る。平安朝・中世を通じて唯一無二である。且つその基調に於て極めて中世的ならぬ事は、この時代に於て珍らしい事で、一脈現代のナンセンス味に通ふ所がある。この點「堤中納言物語」(別項)の特異なユーモアと好き一對で、蓋し現代の價値標準を以てすれば有數の作であらう。

【參考】新とりかへばや考證岸本由豆流〇取替ばや物語考(關根正直家藏)岡本保孝　〇國文學全史藤岡作太郎〇古物語類字抄黒川春村　〇近古小說解題平出鏗二郎　【小木】

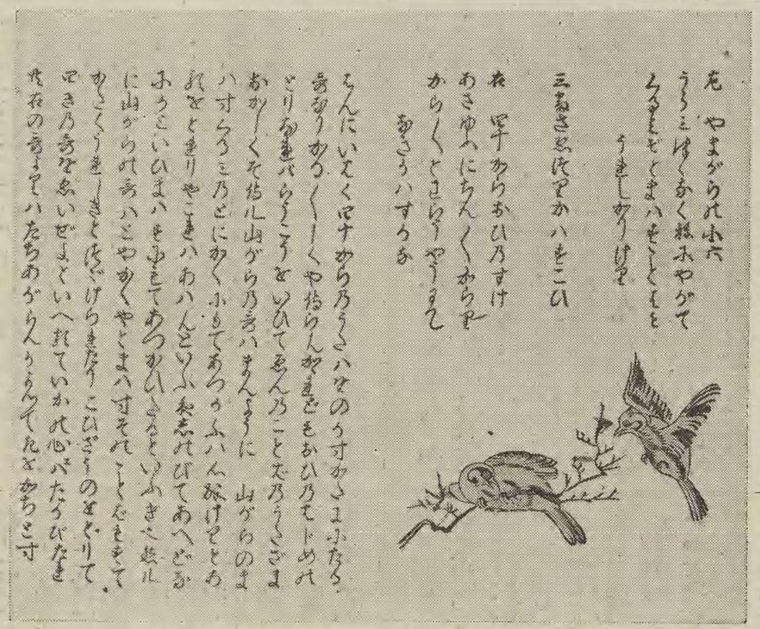
鳥十五番歌合　とりじふごばんうたあはせ　「鳥歌合」を見よ。

執次詰所御系圖　とりつぎづめしよごけいづ　「系譜」を見よ。

杜律詳解　とりつしやうかい　註釋書　三卷【著者】津坂孝綽【刊行】天保六年【解說】杜甫の七言律を漢文で解釋したもので、詳解の名に背かない。邦人詩解中の白眉である。【佐久】

鳥の迹　とりのあと　歌集　六卷　【撰者】戸田茂睡【成立】元祿十三年【刊行】元祿十五年【諸本】戸田茂睡全集に收む。また校註國歌大系の近代諸家集第一卷には、「戸田茂睡歌集」として本書及び「紫の一本」「不求橋梨本隱家勸進百首」より茂睡の作歌を拔抄してある。【解說】元祿十三年五月十八日の茂睡の序文がある。山名玉山が江戸の人々の詠歌の撰集を編まうとして成らず、茂睡はその志をついで、玉山の作歌二萬五千七百二十四首を集めた家集を參考としたのを初めとして、その詠歌を第一に書き入れ、その他同流諸家の作、又自詠を集めてこの書を成した。題名は淸水宗川が江戸の新歌を選んだ撰集に、水戸黄門光圀が「正木のかづら」と云ふ名を下された跡を慕つて、かく名づけたといふ。また茂睡の奥書があり、刊本には書林燕雀堂の奥書があり、熱心なる人々の希望を容れて選歌を增補し、歌數八百餘に達すると云ふ。初めの四卷は四季、後の二卷は雜で、雜上には哀傷・述懷の歌があり、雜下には戀・神祇の歌がある。(茂睡參照)　【佐佐木】

鳥歌合　とりのうたあはせ　御伽草子　一卷　【作者】未詳【名稱】「鳥十五番歌合」とも。【成立】德川初世か。「蟲歌合」(別項)のことが書中に見えるから、同書以後の作。「班女物語」(別項)にこの書を引いてあるから、それ以前のもの。



【影響】假名草子「あだ物語」(別項)の前身「ふくろふ」(別項)乃至「鶯姫物語」は、本書から出この作の特徴は、幕あくと直ぐ竹本の淨瑠璃になることである。即ちこの作が終始チョボをつかつてゐることである。既に「浪花の春雨」に於て試みてはゐるものの、この作者としては、かゝる形式はめづらしい。初演以

たものかと思はれる。少くとも密接な交涉がある。【鳥津】

鳥邊山心中　とりべやましんぢゆう　脚本　一幕　世話物　【作者】未詳【名稱】狂言本によると、名題の下に「つれなく冥土の鳥時鳥、よねのきやら戀の煙競べ」と並書がある。又題簽には「御評判心中」と記す。【興行】寶永三年正月、京、都萬太夫座切狂言として上演。

【役割】梅垣源五兵衞(小野川宇源次)、長谷川勘介(藤川武左衞門)、妹おまん(龍井半之助)、志津の孫太郎(坂田藤十郎)、母親(玉川千之丞)、車屋七兵衞(山下京右衞門)、大黒屋まつ(山本かもん)等。

同年夏、大阪岩井半四郎座に於ても、同名題で上演された。心中の二人は、大和山甚左衞門と山下宇源太、浪人が山下又四郎、不心中は中村四郎五郎と芳澤あやめ等の配役。【諸本】京八文字屋當年出版正言本が現存する。元祿が此處で死んでは同罪になると諭されて心ならずも駈落する。侍は源五の兄分であつた。(鍛冶屋志津孫太郎住居)源五は、おまんを巡禮娘に仕立てて兄の孫太郎を訪ね、金の無心を賴んだが、城内からの報知が來た爲め、おまんが密婦であると覺られ、源五は二階へ、おまんは外へ引き分けられてしまつた。その夜、源五は忍び寄つたおまんに合圖して碓を足場に、二階から下りて共に最期の場へと志す。(道行)鳥邊山の奥へと辿り着く。(鳥邊山中)二人は書置と上衣を松の枝にかけて自害した。同時に、車屋七兵衞とお山のまつとの不心中が演ぜられた。

【解說】簡單な筋であるが、全幕の起伏は興味深く、おまんの兄の件の如き、全く挿話に過ぎぬが、これあるがために城門外の場と鍛冶屋の場との對照が成功したと言へる。源五もそらうと決心した。そのためには家重代の刀を【作者】岡本綺堂【初演】大正四年九月、東京本鄕座。

【役割】菊地半九郎(市川左團次)、坂田市之助(中村又五郎)、坂田源三郎(市川壽美藏)、八介(市川米左衞門)、與兵衞(市川左升)、おそめ(市川松蔦)、お花(市川米藏)等。

【諸本】岡本綺堂戲曲集・現代戲曲全集所收。

【題材】別項「鳥邊山心中」參照。

【梗概】(都祇園の茶屋)寬永三年十二月將軍家上洛のお供の數に加はつた菊地半九郎は、旅寢のつれ〴〵を友達の坂田市之助と、連夜、祇園の色酒に浸つた。そしておそめといふ遊女に馴染を重ねた。半九郎は、おそめのまだ廓馴れない初々しさに、戀といふよりも不憫さを感じ、將軍家が急に江戸表へ下向と事決つた時、おそめを請け出し、親許へ戻してやらうと決心した。そのためには家重代の刀を去るやうに勸めた。半九郎は、さしたる意趣遺恨もないのに同僚を殺した上は、潔くその罪を引きうけて死ぬのが武士の道だといつた。それを聞いたおそめは、それなら一しよに死なせてくれと賴む。といふのも、店出しの宵から揚げ詰めにされて汚れのない自分の身は、お前一人を夫として淸い一生を送りたいと歎いた。その眞情に動かされて、半九郎は、ともに二人で死ぬことを誓つた。そして二人は、廓の習ひの、春着のためにと對にこしらへた濃い紫と黒綸子の晴小袖を死裝束にして鳥邊山へと急いだ。

【解說】この作の特徴は、幕あくと直ぐ竹本の淨瑠璃になることである。即ちこの作が終始チョボをつかつてゐることである。既に「浪花の春雨」に於て試みてはゐるものの、この作者としては、かゝる形式はめづらしい。初演以

たものかと思はれる。少くとも密接な交渉がある。【鳥津】

鳥邊山心中（とりべやまのしんぢゅう）　脚本　一幕

世話物　【作者】未詳　【名稱】狂言本によると、名題の下に「つれなく冥土の鳥時鳥、よねのきやら戀の煙競べ」と並書がある。又題簽には「御評判心中」と記す。【興行】寶永三年正月、京、都萬太夫座切狂言として上演。

【役割】梅垣源五兵衞（小野川宇源次）、長谷川勘介（藤川武左衞門）、妹おまん（龍井半之助）、志津の孫太郎（坂田藤十郎）、母親（玉川千之丞）、車屋七兵衞（山下京右衞門）、大黒屋まつ（山本かもん）等。

同年夏、大阪岩井半四郎座に於ても、同名題で上演された。心中の二人は、大和山甚左衞門と山下宇源太、浪人が山下又四郎、不心中は中村四郎五郎と芳澤あやめ等の配役。【諸本】京八文字屋當年出版狂言本が現存する。元祿歌舞伎傑作集下卷所收。【題材】實説として信ぜられるものはないが、一説に當時、京都二條城普請奉行附人菊地半九郎と祇園茶屋女お染との心中があつた等とも傳へられる。當時心中狂言が流行したが、以前にこの心中が脚色されてない事から見て、或は前年頃、事實があつたのではないかと思はれる。

【梗概】（城の裏門外）近習梅垣源五兵衞と腰元おまんとは豫て契つた仲とて、今日も樋の口から忍び出て睦言を交してゐた。突然鐵砲の音がしたので、驚き隱れると、一人の男が現はれて鵠の鳥を抑へた。やがて侍が馳せつけ、源五おまんが誤り捕へられたが、朋輩ではあり、密通は見逃された。併し忽ち見出された科人は、父の重病を癒す料にと鵠の鳥を覗つたおまんの兄勘介であつた。勘介は自白すると共に毒藥を服して自害した爲め、兩人が此處で死んでは同罪になると諭されて心ならずも駈落する。侍は源五の兄分であつた。

（鍛冶屋志津孫太郎住居）源五は、おまんを巡禮娘に仕立てて兄の孫太郎を訪ね、金の無心を賴んだが、城内からの報知が來た爲め、おまんが密婦であると覺られ、源五は二階へ、おまんは外へ引き分けられてしまつた。その夜、源五は忍び寄つたおまんに合圖して碓を足場に、二階から下りて共に最期の場へと志す。（道行）鳥邊山の奥へと辿り着く。（鳥邊山中）二人は書置と上衣を松の枝にかけて自害した。同時に、車屋七兵衞とお山のまつとの不心中が演ぜられた。

【解説】簡單な筋であるが、全幕の起伏は興味深く、おまんの兄の件の如き、全く挿話に過ぎぬが、これあるがために城門外の場と鍛冶屋の場との對照が成功したと言へる。源五もその身分相應の性格がよく描かれてゐる。これと反對の立場から見られる破綻が心中物に於ける不心中一件の添加であらう。これによつて、源五おまんの心中への同情がかなり薄らいでゐる。お染半九郎は實説の人物であらうが、おまん源五の名は「薩摩歌」の人物を借りたに過ぎないのである。道行の詞章は當時既に評判であつたと見え、狂言本に全文がある。これを多少改訂したものが、「歌系圖」に近松門左衞門作と記す上方唄の「鳥邊山」である。これが更に書き替へられて、蘭八節「鳥邊山」となつた。豐後節「不心底鬪鮑」は、七兵衞おまつの件を綴つたものである。今日は新内節で傳はつてゐる。主人公がお染半九郎に改まり、新解釋を加へられたのが、岡本綺堂氏作の「鳥邊山心中」（別項）である。【守隨】

鳥邊山心中（とりべやまのしんぢゅう）　脚本　一幕二場

【作者】岡本綺堂【初演】大正四年九月、東京本鄉座。

【役割】菊地半九郎（市川左團次）、坂田市之助（中村又五郎）、坂田源三郎（市川壽美藏）、八介（市川米左衞門）、與兵衞（市川左升）、おその（市川松蔦）、お花（市川米藏）等。

【諸本】岡本綺堂戲曲集・現代戲曲全集所收。

【題材】別項「鳥邊山心中」參照。

【梗概】（都祇園の茶屋）寛永三年十二月將軍家上洛のお供の數に加はつた菊地半九郎は、旅寢のつれ〴〵を友達の坂田市之助と、連夜、祇園の色酒に浸つた。そしておそめといふ遊女に馴染を重ねた。半九郎は、おそめのまだ廓馴れない初々しさに、戀といふよりも不憫さを感じ、將軍家が急に江戸表へ下向と事決つた時、おそめを請け出し、親許へ戻してやらうと決心した。そのためには家重代の刀を手放しても惜しくないと思つて、市之助にそれをうち明けて相談した。が、凡庸な遊蕩兒でしかない市之助は笑つてそれを斥けた。半九郎は慰まない心に强ひて酒を飲んだ。そのとき、庭先から市之助の弟の源三郎が留める仲居を突きのけて入つて來た。そして市之助のふしだらな所行を難詰し、無理にも連れて歸るといきり立つた。半九郎は見かねてこれを制したところ、源三郎は、今度は半九郎に向つていひたい三昧をいつた揚句、江戸の侍の面汚しとまで罵つた。もと〳〵短氣な性質のところへ、でなくても前からのもや〳〵に氣を腐らせてゐた半九郎は、「河原へ來い」とばかり突然立ち上つた。（四條河原）二人は河原で眞劍の勝負をした結果、半九郎は源三郎を討ち果した。おそめは後から驅けつけてそのさまを見、驚いて半九郎に、そのまゝこの場を去るやうに勸めた。半九郎は、さしたる意趣遺恨もないのに同僚を殺した上は、潔くその罪を引きうけて死ぬのが武士の道だといつた。それを聞いたおそめは、それなら一しよに死なせてくれと賴む。といふのも、店出しの宵から揚げ詰めにされて汚れのない自分の身は、お前一人を夫として清い一生を送りたいと歎いた。その眞情に動かされて、半九郎は、ともに二人で死ぬことを誓つた。そして二人は、廓の習ひの、春着のためにと對にこしらへた濃い紫と黑繻子の晴小袖を死裝束にして鳥邊山へと急いだ。

【解説】この作の特徴は、幕あくと直ぐ竹本の淨瑠璃になることである。卽ちこの作が終始チヨボをつかつてゐることである。既に「浪花の春雨」に於て試みてはゐるものの、この作者としては、かゝる形式はめづらしい。初演以來頻繁に上演され、强記の作者にしてなほその回數を覺えてゐなかつたといふ。松筵戲曲十種の一。【久保田】

鳥部山物語（とりべやまものがたり）　御伽草子　一卷

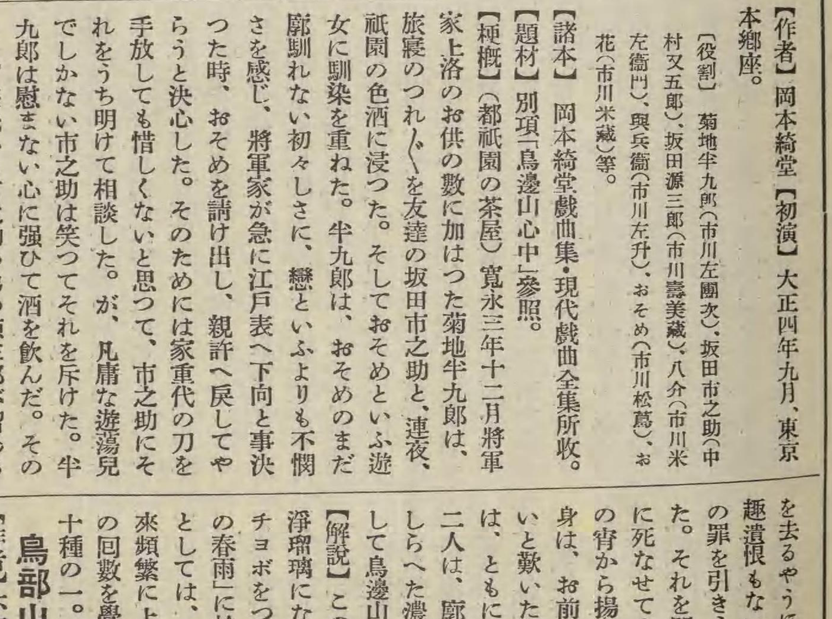
【作者】不明【成立】不詳。室町中期の作か。

【諸本】群書類從卷三一一・日本文學大系所收

【梗概】武藏の國のさる寺、なにがしの和尚の弟子に民部卿と云ふ人があつた。容色も淸らかに才學も優れてゐる。その頃、帝何かの御修法のために諸國の高僧を召される事があつて、この和尚も上京する事になり、民部卿も供の中に加はつて夏立つ頃京に上る。年も改まつて空の景色漸く春めく頃、民部卿は友達と北山の方へ遊びに行つたが、その途中二八にも足らぬ程の美しい少年を見る。思はず心迷ひして見惚れたが、他人の見る目を思つてその日は歸つて來たが、夜も晝もその俤が眼

茂睡【成立】元祿十三年【刊行】元祿十五年【諸本】戶田茂睡全集に收む。また校註國歌大系の近代諸家集第一卷には、「戶田茂睡歌集」として本書及び「紫の一本」「不求橋梨本隱家勸進百首」より茂睡の作歌を拔抄してある。

【解説】元祿十三年五月十八日の茂睡の序文がある。山名玉山が江戶の人々の詠歌の撰集を編まうとして成らず、茂睡はその志をついで、玉山の作歌二萬五千七百二十四首を集めた家集を參考としたのを初めとして、その詠歌を第一に書き入れ、その他同流諸家の作、



川初世か。「蟲歌合」（別項）のことが書中に見えるから、同書以後の作。「班女物語」（別項）に

【影響】假名草子「あだ物語」（別項）の前身「ふくろふ」（別項）乃至「鶯姬物語」は、本書から出

（丹緑本活字本）

て、魚族と鳥類とに正式の挨拶をなした上、開始する事となつた。判者は鷲で、俳諧歌體に依り、一番噲太に口說く戀、左鳶のきんすけ、右烏田のくろ助、二番野山を尋ぬる戀、左山鳥の鏡のかみ、右廣野雉右衞門以下十五番の組合せ、何れも戀の題で勝負を爭つた。

につく。廻り逢ふ事もあらうかと毎日方々をまどひ歩く中、四條坊門のあたりで、木立の深い公卿の邸を見つけ、ふと門の傍へ寄つて見ると、過ぎし日の美少年が勾欄に倚つてゐた。一入增さる思ひを抱いて歸つて來たが、そのまゝ病の床に臥す。民部卿の從者に事の次第を知つた者があつて、枕許にさしより、彼の君は某の中納言の御子で、その東隣に住む老翁は自分の知人であるから、暫く其處へ住まれたら、よい都合も出來るだらうと語る。そこで和尚の許を得てかしこへ宿る。翁の子に情ある若い男があつて、民部卿の話に同情し、自分は隣家に出入し、彼の少年藤の辨と云ふにも仲よくしてゐるから文の取次をしようと云ふ。その媒によつて遂に民部卿は藤の辨と契る。夢のやうに春も過ぎて夏になる。和尚は東へ歸る事になつたので、仕方なく民部卿も盡きぬ別れを嘆きながら隨つて東に赴く。辨はその後、日に增す思ひに堪へかねて嘆きの日夜を送つてゐる。乳母はその由を尋ね、仔細を兩親に告げる。父母も愛する一人子のこととて、民部卿を迎へに乳母を東へやる。乳母と民部卿と連れ立つて上京の途中、土山へ着いて翌日は都へと喜んでゐる時、京からの文がつく。それは藤の辨が遂に昨日の暮に亡くなつた知らせである。二人の嘆き云ふばかりなく、ともかく急ぎ都へ上る。父母は几帳の外まで走り出で民部卿を迎へて共に嘆く。七日鳥邊野に會して今更涙を新にし、民部卿はかねて決心した事とて自殺しようとするが、人々に止められる。かくて北山に庵を結んで行ひ濟ましてゐたが、「あらぬ道に迷ふも嬉し迷はずばいかでさやけき月をみましや」の歌を詠ずる程の心境に達した。そして

又何方とも知れず去つた。

【解說】稚兒物語の一種で、愛する稚兒ゆゑ、眞の佛道に入つた筋は珍らしいものでなく、文章も取立てていふ程のものではないが、ただ「花の緣」(別項)の原本として記憶さるべきものである。　〔小木〕

採物（とりもの）　「神樂歌」を見よ。

屠龍之技（とりようのぎ）　俳句集　大本一册【著者】酒井抱一【刊行】文化十年【諸本】近世俳話句集(俳書大系)・俳文俳句集(日本名著全集)に帝國圖書館本を收む。【由來】寬政の初め頃から晩年までの、抱一自筆の句日記が「輕擧觀句藻」と題して二十册に達してゐる(岩崎家靜嘉堂文庫藏)。その中から拔抄上梓したのが本書である。抱一自身板下を書いてゐるのがこの集の珍重される一因である。【異本】普通本は文化九年までのものであるのに、同十二年までの發句を含んでゐるものがある。これを檢討するに、「うめの立枝」の條中「歸去來」と題した「歸なむ居酒一と口菊寂ぬ」の句と、「古田高麗の茶盌を畫にうつし其上に讃しておくるとて」と題した「幾時雨ふるやふる田のかたみ哉」の句との間に、「春興」と題した「うぐひすの口明く影や下地窓」の句より「至日」と題した「むりやりに咲や一鉢冬至梅」の句までの百三十八句(原本十四枚)を挿入したものである。この百三十八句は、文化十年・十一年・十二年の三ケ年に亙るものであるから、文化十年に一度上梓したものへ、同十三年頃これを追加したものであらうと考へられる。帝國圖書館本はこの異本に屬する。【內容】寬政の初め頃より文化九年までの約二十年間の年次的發句集である。「こがねのこま」「かぢのおと」「みやこどり」「椎の木がけ」(得度及び上京の句がある)、「千づかのいね」(千束村住居のころ)「潮のおと」「かみぎぬた」「花ぬふとり」(根岸住居のころ)、「うめの立枝」の見出しの下に年代順に輯錄してある。文化九年十月龜田鵬齋漢文の序、春來窓の跋、文化十年清明後日大田南畝漢文の跋がある。

【著者小傳】抱一、名は忠因、姫路侯の次男として神田小川町の中屋敷に生れた。兄の雅樂頭忠以は宗雅と號して茶道・狂歌に長じ、狩野風の畫を善くしたので、抱一は兄に就いて畫道の手ほどきを受け、のち狩野永德の門に入り、又歌川豐春に浮世繪を、宋紫石に明畫を學び、或は谷文晁の說を聽き、若しくは光琳風の筆意を探るなど、繪畫に就いて深く研鑽する所があつて、遂に獨自の畫風を拓いた。俳諧は馬場存義に學び、初め濤花、のち杜陵と改め、更に屠龍の文字に改めた。金春流の太鼓を打ち、楊弓は江戸一の名を博し、刀劍鑑定に於ては本阿彌をして舌を捲かしめたといふほど多藝多能であつた。寬政九年九月九日、三十七歲の時、病身のため西本願寺の弟子となつて京に住むべく請願したので、酒井家ではこれを容れ、千石五十人扶持を給することとなり、折柄江戸へ下つてゐた西本願寺文如上人によつて薙髮、等覺院文詮暉眞の得度名を與へられ、准連枝を以て遇せられ、權大僧都に任ぜられた。同年十一月三日京へ上つたが、滯在僅かに十二日にして病氣と稱して江戸へ歸つた。この頃から酒井家からの扶持も停止されたので、淺草の千束村に住んだ頃は、書料の收入によつて生計を支へたといふ。新吉原へ足繁く出入し、遊女達を畫の弟子にしたのも、主としてこの時代であつた。後、根岸に移つて營村書所と稱した。雨華庵抱一・庭柏子・輕擧道人の諸號も、この前後から用ひたものである。文政十一年十一月二十九日六十八歲で歿し、築地本願寺に葬られた。　〔暨川〕

トルストイズム　【名義】ロシヤのレオ・トルストイの著書及びその實生活に現はれた思想傾向を一括してトルストイズムといふ。こゝでは主としてその主義がいかなる影響を明治からその後までの文學思想に與へたかを述べる。【解說】トルストイズムは、大ざつぱに(一)戀愛及び性慾論、(二)非戰論及び平和主義、(三)人道主義、(四)宗教觀、(五)勞働奉仕及び簡易生活觀、(六)民衆藝術觀、(七)トルストイの人格禮讃等に分けられ得る。第一は明治二十八年八月、小西增太郎・尾崎紅葉共譯の名で、「國民之友」に載つた小說「クレーツエロウの名曲」があり、性慾は罪惡であり、性慾ぬきの聖愛こそ夫婦愛の理想であるといふ彼の性道德を主張したもの、厨川白村の戀愛論等を生む元になつた。第二は日露戰爭當時、幸德秋水の「トルストイの非戰論を評す」(週刊平民新聞)がある。秋水は、日露戰爭にあたり、非戰論の主唱者である。トルストイの非戰論の提唱を「感嘆崇敬措く能はず」と一應認めた上で、ただ彼が、戰爭の原因を個人の墮落に歸するのに贊成しない。「吾人社會主義者は、戰爭の原因を以て經濟的競爭に歸する」點で、彼と違ふと說いてゐるが、非戰論の底に潛む平和論は、內田魯庵や武者小路實篤等の思想に採り入れられた。第三は、中澤臨川が長篇論文「トルストイ」によつて、彼を「偉大な誠實の連續の一生」として賞讃し、ニーチエ、ロオラン、ベートーベン等と同一線上の巨人としてその人道主義を賞讃した。また德富健次郎は、明治三十年に、民友社刊

行の「十二文豪」(別項)の第十卷として、「トルストイ」を著はし、「侵略主義、壓制主義、迷信、敗德の露國に、四海同胞を唱へ、無限の自由を唱へ、實行的宗教を唱ふるトルストイ翁云々」と述べてゐる。明治三十四年の彼の小說「思ひ出の記」(別項)は、トルストイの「幼年」「少年」「青年」から暗示を得たものだといはれ、三十九年四月には、エルサレム順禮の歸途、ヤスナヤ・ポリアナにトルストイを訪うて歸國したが、前年、健次郎の兄蘇峰もまた、歐米漫遊の歸途、ロシヤを過ぎてトルストイを訪ひ、トルストイの聲名は、ます〳〵日本に知られた。健次郎の後年の田園生活は、トルストイの感化によるものだと云はれる。トルストイの人道主義は、大正年間の白樺派(別項)に最も多く繼承された。彼が貴族に生れて、勇敢な自由思想の提唱者であつたことも、他を邦譯した外、絶えずトルストイの業績を記述した。　〔千葉〕

泥人形（どろにんぎやう）　小說　【作者】正宗白鳥【發表】明治四十四年七月、「早稻田文學」【刊行】春陽堂より單行。現代日本文學全集(正宗白鳥集)所收。

【梗概】中產階級のインテリゲンチヤである守屋重吉は、放埒な獨身生活を續けながら三十を越しても相かはらず無爲の日を送つてゐるうちに、ふと有樂座の名人會へ行つて美しい丸髷の女を見た。それは一年前に見合ひまでして而も斥けた女だつたので、後悔に似た感じで自分の目の鈍さを嘲つた。結婚して着實な生活に入るやうに、七年越し親身に世話を燒いてくれる友人の矢澤夫婦を訪ねると、今交涉中だつた緣談が先方から破れたと云つて、更に新しい口を持つて來た。二十歲になぎないもので、心の融け合ふこともなく、重吉には緣も由緒もない娘を預かつてゐるやうに思はれてならなかつた。夫婦揃つて甲府へ里歸りして歸つても、その狀態に變りはなかつた。しかし花嫁は、淋しい悲しい思ひを一度だつて近親へも打明けなかつた。多年愛讀してゐる「淑女の美德」や「婦人の鑑」に教へられて、夫がどういふことをしようと、又「如何に夫が無情なりとも、眞心を以て盡しなば、やがて愛情を以て酬いらるゝことあらん」と日記に書いてゐた。そして夫の出歩いてる留守に、よく近所の「お釋迦樣」へ行つては、夫の身體の健かになるやう、自分に對して愛情の增すやうにと祈るのだつた。重吉の氣付かぬ間に、この「奧樣のお釋迦詣で」が近所の噂となつた。

【批評】結婚、家庭生活、妻などに對する世間

水島は暫く素人に歸つた花鳥の中里佐保と三日間、樂しく暮したが、彼女は前途をはかなみ自殺しようとするのを、水島は驚いて押止め、將來は必ず自分の妻とするからと諭して、小田原へゆく彼女を見送つた。

【批評】素人に歸つた花鳥と三日間、箱根で遊ぶといふ事が本篇のヤマである。例の健筆で面白く讀ませるといふ外に取立てて云ふべき節もない。大體に於て無難の作である。併し取り上げた世界が變つても居り、發表當時は、可なりの好評であつた。　〔高須〕

不問語（とはずがたり）　隨筆　三卷【著者】篠崎維章【成立・由來】享保十八年の作。自序の中に、「そらに覺へし事をかたはしよりあぢきなき筆のすさびにかいやりすて侍る。實に他の目には面白からぬ言の葉を、我ひとりのとはず語りとぞ」とあるが、まさかに諧記のみによ

行の「十二文豪」（別項）の第十卷として、「トルストイ」を著はし、「侵略主義、壓制主義、迷信、敗德の露國に、四海同胞を唱へ、無限の自由を唱へ、實行的宗教を唱ふるトルストイ翁云々」と述べてゐる。明治三十四年の彼の小說「思ひ出の記」（別項）は、トルストイの「幼年」「少年」「青年」から暗示を得たものだといはれ、三十九年四月には、エルサレム順禮の歸途、ヤスナヤ・ポリアナにトルストイを訪うて歸國したが、前年、健次郎の兄蘇峰もまた、歐米漫遊の歸途、ロシヤを過ぎてトルストイを訪ひ、トルストイの聲名は、ます〳〵日本に知られた。健次郎の後年の田園生活は、トルストイの感化によるものだと云はれる。トルストイの人道主義は、大正年間の白樺派（別項）に最も多く繼承された。彼が貴族に生れて、勇敢な自由思想の提唱者であつたことは、貴族出の多い白樺派の人々に強い渴仰を受け、殊にその中心たる武者小路實篤は、十九歲の時、邦譯「我が宗教」「我が懺悔」を讀んで、トルストイの飜譯を一生の主なる仕事にしようとしたとまで告白してゐる。學習院在學中からトルストイ研究に着手し、初期の論文・小說・戲曲は、トルストイズムの人道主義觀が强烈に現はれてゐる。新らしき村の建設もその影響である。外に倉田百三も亦その一人である。第四は、江原小彌太・倉田百三・岸上畔造・加藤一夫等の著作に現はれる。第五は、加藤一夫・江渡狄嶺（幸三郎）・西田天香等によつて宣傳され、もしくは實行された。第六は、大正六年から八年に亙り、民主主義の氾濫時代、ロマン・ロオランのそれと共に、彼の「藝術論」が、加藤一夫・富田碎花等によつて敷衍された。その外內田魯庵は、「復活」その他を邦譯した外、絶えずトルストイの業績を記述した。（千葉）

泥人形（どろにんぎやう）　小說　【作者】正宗白鳥　【發表】明治四十四年七月、「早稻田文學」　【刊行】春陽堂より單行。現代日本文學全集（正宗白鳥集）所收。

【梗概】中產階級のインテリゲンチヤである守屋重吉は、放埒な獨身生活を續けながら三十を越しても相かはらず無爲の日を送つてゐるうちに、ふと有樂座の名人會へ行つて美しい丸髷の女を見た。それは一年前に見合ひまでして而も斥けた女だつたので、後悔に似た感じで自分の目の鈍さを嘲つた。結婚して着實な生活に入るやうに、七年越し親身に世話を燒いてくれる友人の矢澤夫婦を訪ねると、今交涉中だつた緣談が先方から破れたと云つて、更に新しい口を持つて來た。二十歲になる田舍の初心なその娘とも見合ひをしても別に氣乘りがしなかつたが、心の底には柔い愛情を欲しい氣持も漸く湧いて來たし、矢澤夫婦の勸めるまゝに結婚することになつた。以前は自分の身も心も投げ込んで愛しも愛されもする女が、何處かに潛んでゐさうに思はれてならなかつたが、今はそんな幻も消えた。新宅へ移つて祝言の日を迎へたが、花嫁の姿にも三々九度の盃にも重吉は何の興味も持てなかつた。「おれの家が嫌だつたら、何時でも、さつさと田舍へ歸つてしまふさ」、これがその翌日、花嫁に對して云つた言葉だつた。彼の口からは懷かしい甘い言葉も洩れず、散步に連れて行かうともせずに、十日も立たぬうちにふらりともと遊んだ待合へ出かけて、一人寢の床に快よく一夜を眠つて來りした。かうして新家庭も、別々の人間が住んでゐるに過ぎないもので、心の融け合ふこともなく、重吉には緣も由緒もない娘を預かつてゐるやうに思はれてならなかつた。夫婦揃つて甲府へ里歸りして歸つても、その狀態に變りはなかつた。しかし花嫁は、淋しい悲しい思ひを一度だつて近親へも打明けなかつた。多年愛讀してゐる「淑女の美德」や「婦人の鑑」に教へられて、夫がどういふことをしようと、又「如何に夫が無情なりとも、眞心を以て盡しなば、やがて愛情を以て酬いらるゝことあらん」と日記に書いてゐた。そして夫の出步いてる留守に、よく近所の「お釋迦樣」へ行つては、夫の身體の健かになるやう、自分に對して愛情の增すやうにと祈るのだつた。重吉の氣付かぬ間に、この「奧樣のお釋迦詣で」が近所の噂となつた。

【批評】結婚、家庭生活、妻などに對する世間なみの浪漫的な考を極度に打挫いだ作品で、わが新妻を一個の泥人形に過ぎないと觀ずる重吉の頹廢的なニヒリスティックな氣持があらゆる行間を充たして、作者の特異を代表すべきすぐれた中篇小說を成してゐる。發表當時非常な好評を以て迎へられたのも當然である。前年の「微光」（別項）に次ぐこの作は、作者に所謂新進の域を脫せる確然たる作家的地位を與へたと云つてもよい。（水木）

泥水清水（どろみづしみづ）　小說　【作者】江見水蔭　【發表】明治二十九年四月「文藝倶樂部」　【梗概】文學者水島山三郎が馴染んだ品川の娼妓に花鳥といふのがあつた。水島は將來を考へて、花鳥と離れようと思ふが、未練があつて出來ない。その中、花鳥は小田原に住み替へすることとなつたので、水島は名殘りを惜しむ心から、塔の澤へ夫婦氣取りで遊んだ。水島は暫く素人に歸つた花鳥の中里佐保と三日間、樂しく暮したが、彼女は前途をはかなみ自殺しようとするのを、水島は驚いて押止め、將來は必ず自分の妻とするからと諭して、小田原へゆく彼女を見送つた。

【批評】素人に歸つた花鳥と三日間、箱根で遊ぶといふ事が本篇のヤマである。例の健筆で面白く讀ませるといふ外に取立てて云ふべき節もない。大體に於て無難の作である。併し取り上げた世界が變つても居り、發表當時は、可なりの好評であつた。（高須）

不問語（とはずがたり）　隨筆　三卷　【著者】篠崎維章　【成立・由來】享保十八年の作。自序の中に、「そらに覺へし事をかたはしよりあぢきなき筆のすさびにかいやりすて侍る。實に他の目には面白からぬ言の葉を、我ひとりのとはず語りとぞ」とあるが、まさかに諧記のみによつたとは想はれぬ。【諸本】大田南畝がその所編の「續三十輻」中に編入したのを、大正六年國書刊行會で該叢書を校訂複製したので、本書も上刊された。「三十輻」第二册中にある。

【解說】國史・地理・制度・詩歌・文字等に關する斷片的考說で、往々一章數言に過ぎぬものがある。上卷にその原ふせやの里以下百二十八則、中卷に官司の四分配當以下四十六則、下卷に不夜城以下五十五則を收めてゐる。

【著者小傳】篠崎維章。字は子文、通稱金吾、東海と號した。儒學を伊藤東涯に受け、業成つて小幡藩に賓師の禮を以て遇されたが、後、獨立して生徒に教授し、漢學・國學に兼ね通ずるを以て聞えた。元文五年（一七四〇）七月一日歿。享年五十四。（和田）

不問語（とはずがたり）　隨筆　三卷　寫　【著者】尾崎守昌（傳未詳）　【解說】著者が子孫のため

る。乳母と民部卿と連れ立つて上京の途中、土山へ着いて翌日は都へと喜んでゐる時、京からの文がつく。それは藤の辨が遂に昨日の暮に亡くなつた知らせである。二人の嘆き云ふばかりなく、ともかく急ぎ都へ上る。父母は几帳の外まで走り出で民部卿を迎へて共に嘆く。七日鳥邊野に會して今更涙を新にし、民部卿はかねて決心した事とて自殺しようとするが、人々に止められる。かくて北山に庵を結んで行ひ濟ましてゐたが、「あらぬ道に迷ふも嬉し迷はずばいかでさやけき月をみましや」の歌を詠ずる程の心境に達した。そして

かたみ哉」の句との間に、「春興」と題した「うぐひすの口明く影や下地窓」の句より「至日」と題した「むりやりに咲や一鉢冬至梅」の句までの百三十八句（原本十四枚）を挿入したものである。この百三十八句は、文化十年・十一年・十二年の三ケ年に亙るものであるから、文化十年に一度上梓したものへ、同十三年頃これを追加したものであらうと考へられる。帝國圖書館本はこの異本に屬する。【內容】寬政の初め頃より文化九年までの約二十年間の年次的發句集である。「こがねのこま」「かぢのおと」「みやこどり」「椎の木がけ」（得度及び

家ではこれを容れ、千石五十人扶持を給することとなり、折柄江戶へ下つてゐた西本願寺文如上人によつて薙髮、等覺院文詮暉眞の得度名を與へられ、淮連枝を以て遇せられ、權大僧都に任ぜられた。同年十一月三日京へ上つたが、滯在僅かに十二日にして病氣と稱して江戶へ歸つた。この頃から酒井家からの扶持も停止されたので、淺草の千束村に住んだ頃は、書料の收入によつて生計を支へたといふ。新吉原へ足繁く出入し、遊女達を畫の弟子にしたのも、主としてこの時代であつた。後、根岸に移つて營村書所と稱した。雨華庵抱一・庭

トイの非戰論の提唱を「感嘆崇敬措く能はず」と一應認めた上で、ただ彼が、戰爭の原因を個人の墮落に歸するのに贊成しない。「吾人社會主義者は、戰爭の原因を以て經濟的競爭に歸する」點で、彼と違ふと說いてゐるが、非戰論の底に潛む平和論は、內田魯庵や武者小路實篤等の思想に採り入れられた。第三は、中澤臨川が長篇論文「トルストイ」によつて、彼を「偉大な誠實の連續の一生」として賞讚し、ニーチエ、ロオラン、ベートーベン等と同一線上の巨人としてその人道主義を賞讚した。また德富健次郎は、明治三十年に、民友社刊

に身を修め知を擴める料として書き集めたもので、天明以前に見聞した事實の記載が多い。概ね俗書に據つた俗説で、識者を利するに足る記事は少い。上卷に父母の恩、心の動附塞翁將門朝臣之事、人間眞僞附欲道、婦人の辨附安達が原殺生石、聖德太子附憲法、和歌の感附梶原父子等十條、中卷に東福寺涅槃像之説、樗蒲一之説、春日大明神之由來、細川幽齋古今集傳授附二十一代集之事、永樂錢通用之事等十四條、下卷に四生附獅子・虎・狐・土龍之沙汰、非事は疑之説、歌により名を求めし人、野馬臺之詩附衣通姫、神樂坂敵打之次第、江戸中家數人別等十八條を收め、若干の挿圖がある。天明四年の自序の末に、「於武州岡部官舍編集之もの也」とある。　〔和田〕

不問語（とはずがたり）　隨筆　一卷　【著者】中井誠之　【刊行】寛政三年　【解説】著者の感想數十項を雅文體に記したもので、寓言もあり、實話もあり、概ね實踐倫理上の訓戒に係る。著者の男中井積善の跋（寛政三年）に、「其學行之正、孝友之孚、立志之堅、守分之安、憂國恤民之切、處事接物之周且篤、則篇内諷如、有不可揜焉者、云々」と述べてある通り、洵に筆者の人格を窺知するに足るものがある。誠之甦庵の歿後三十餘年に、竹山・履軒二子、故翁の舊麗を搜つて校刊に及んだと云ふ。

【著者小傳】中井誠之。字は叔貴、通稱四郎、又忠藏、號は甦庵、播磨國龍野の人。儒學を三宅石庵に學び、業成つて懷德堂を大阪に創立し、その二子積善（竹山）・積德（履軒）に至りこれを大成した。寶曆八年（一七五八）六月十七日歿。享年六十六。　〔和田〕

頓阿（とんあ）　歌人　【姓名】二階堂貞宗　【法號】泰嶽・泰尋等と云ひ、後に頓阿又は頓阿彌と呼ぶ。晩年、感空とも稱してゐたらしい。【生歿】正應二年に生れ、文中元年（一三七二）三月十三日に歿す。享年八十四。【墓所】京都東山雙林寺　【家系】異説異傳多き中に、「尊卑分脈」を參照し、比較的正確と思はれるものの一を揚げる。

藤原是公……二階堂行政（朝臣　政所執事　二階堂祖）……行實―宗實―光貞―貞宗（頓阿）

この系譜の二階堂光貞の子（弟との異説がある）となすもの以外、藤原道長の曾孫大納言能實の六世、或は八世の孫とする説も有力である（能實―忠顯―全春―仁春―承辨―源全―良阿―頓阿）。但しこれは法系を混同した嫌ひがあり、特に師實（能實父）を祖とさしたところは、二條派との緣に牽强附會した跡が著しい。若し二階堂説を採るなら、祖は藤氏であるが、永く武家として續いた家系であり、光貞も下野守であつた。但し祖に行遠の如き歌名を傳へたものがあり、全然文事と無緣ではない。【閲歷】幼より和歌の道を好み、私かに二條派の嫡流爲世の家風に私淑してゐたものらしい。家集に傳へられる作で古いものは、二十三・四歳頃詠んだ應長百首のうちの三首のもの、平懷な詠風にその後年の傾向を豫兆してゐる。當時爲世は持明院統御在位の時代に當り、甚だ不遇であつたが、頓阿は二十四歳の年、斷然出離の決意を遂げ、叡山に登り、刻苦精勵、佛學を修めた。しかし長く留まらなかつたことは、正和四年三月五日龜岡花下會に、淨辨・慶運等十六人と爲世に率ゐられて歌を詠んでゐることや（龜岡花下會花十首寄歌）、同五年三月十九日、爲世が子息を伴ひ、春日詣を試みたのに加はつて唯誂論句歌を奉納してゐる記事等（頓阿法師詠・祢春記）で臆測される。但し西行の跡を敬慕した彼は、諸國修行に出掛け、東下り等をも遂げてゐる。武藏野まで足迹を及ぼしたことは、醒が井・善光寺・田子の浦・鈴鹿山等が家集並に「頓阿法師詠」の詞書に出てゐるが、この事はやゝ後年に屬するかのやう推斷される。宇津の山で蔦の苗を採つて歸り、草庵に植ゑおいたものが成長して立派に紅葉すると云ふことも語られてゐる。文保二年正月十一日禁中和歌會始には、公卿の末席に加へられ、當座三十首など詠んでゐる。頓阿の三十歳時代は、ほぼ東山靈山附近に送られたものかと思ふ。爲世の孫爲定よりは二三歳の長で、親交深く、當時皇室には、後宇多上皇・後醍醐天皇の如き才藻優れ給へる方々があつて、師の爲世は、元應二年「續千載」奏覽後、家の榮達を祝うて住吉詣をした際など、頓阿等門下を率ゐ、その社頭で五首歌講を試みてゐる（頓阿三十二歳）。二條大納言一日千首、龜山殿千首、龜山殿七百首等纏まつた撰歌集も次々に出された。又「續後拾遺集」の撰進が、爲世の子爲藤に命ぜられたなども、當時の和歌隆盛の一斑を示すものである。この爲藤には、頓阿は殊に親昵してゐた。正中元年、爲藤の他界に際しては、「いはぬより思ひこそやれとにかくに一方ならずぬるゝ袂を」と云ふ頓阿の哀傷は、二條派歌人の齊しく同感したところである。

頓阿筆　賢積經（實積經）

ことや（龜岡花下會花十首寄歌）、同五年三月十九日、爲世が子息を伴ひ、春日詣を試みたのに加はつて唯誂論句歌を奉納してゐる記事等（頓阿法師詠・祢春記）で臆測される。但し西行の跡を敬慕した彼は、諸國修行に出掛け、東下り等をも遂げてゐる。武藏野まで足迹を及ぼしたことは、醒が井・善光寺・田子の浦・鈴鹿山等が家集並に「頓阿法師詠」の詞書に出てゐるが、この事はやゝ後年に屬するかのやう推斷される。宇津の山で蔦の苗を採つて歸り、草庵に植ゑおいたものが成長して立派に紅葉すると云ふことも語られてゐる。文保二年正月十一日禁中和歌會始には、公卿の末席に加へられ、當座三十首など詠んでゐる。頓阿の三十歳時代は、ほぼ東山靈山附近に送られたものかと

同じうした。當時頓阿・淨辨・慶運及び兼好の四人を和歌四天王と呼稱したやうであるが、かの兼好が歌席に行を共にしたのもこの頃に始まるものらしい（室町日記）。高野山金剛三昧院奉納和歌に、兼好・頓阿が名を列ねてゐるのは有名なことであるが、恰も康永三年のことである。北朝には貞和時代、毎月三度の百首會が催されたこともあり、これ等に四天王連の加はつてゐた次第は、「近來風體抄」の記事にその證左がある。かくて逸速（いらはや）き時の流の中に、その兼好・淨辨・尊氏も亡き人數に入り、頓阿も夙く六十の坂を越え、或は「遠島百首鈔」をものし、「後普光院園殿御百首跋」（北朝文和元年）を書くなど、動かし難き歌壇の大長老となつてゐた。正徹は、「頓阿は六十已後名を得たるなり」（徹書記物語）と晩成の人の如く云つよい。「草庵集」（別項）は將軍に奉り、その推賞を受くるや、「歎かずよ人はすつとも和歌の浦のもくづを玉と君し照らさば」と無上の感激の念に泣いてゐる。「新拾遺集」完成と共に、彼は生前既に五勅撰集の作者となり得た譯である。得意さ併せて想ふべく、「玉津島入江こぎ出づるいづ手船五たびあひぬ神やうくらむ」とも詠んだ。その晩年は文字通り多祥であつた。蘊堅のもとに贈つた歌にも、「人ならばはかなくぞみむ八十（やそぢ）まで和歌の浦波立ちまじる身を」とある。「迎陽記」は、大往生の際、頓阿五句願文（弟子經賢自）なるものを殘し傳へてゐる。なほ彼の住居は、東山雙林寺であつたらうと臆測されてゐるが、四條道場・金蓮寺・仁和寺の庵・伊賀三田村等、それ〴〵或る時期の止錫の地であつたことは、諸文獻の證する

天賦の才藝を努力と精進により、練りあげ造りあげた大文人とでも稱してよいか。「さびしさを老となるまで忍びきぬ今はみ山に住みや果てまし」と云ふ類の隱逸讃美の歌も殘つてはゐるが、やはり孤獨を守りきれないのが彼の本性だつたと思はれる。【作品・編著】頓阿の歌の勅撰集に載るのは、「續千載」「續後撰」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新續古今」の六集で、計四十四首である。〇草庵和歌集（別項）〇頓阿詠五十首和歌一卷（寫本）（神宮文庫藏、延文元年の源意の奥書によれば二十歳時代初期の歌集）〇頓阿法師詠一卷（寫本）（圖書寮藏、延文二年新千載集撰定にあたり、頓阿の獻上した自撰歌集で三百六十首）〇頓阿句題百首一卷（寫本）（五玉集、即ち頓阿の外、良守・良春・頓宗・周嗣の五人が遙案帶睨體、その他五言一句の題により百首歌を詠じたものの一。内閣文庫・圖書寮等藏。圖書寮本は

同じうした。當時頓阿・淨辨・慶運及び兼好の四人を和歌四天王と呼稱したやうであるが、かの兼好が歌席に行を共にしたのもこの頃に始まるものらしい（室町日記）。高野山金剛三昧院奉納和歌に、兼好・頓阿が名を列ねてゐるのは有名なことであるが、恰も康永三年のことである。北朝には貞和時代、毎月三度の百首會が催されたこともあり、これ等に四天王連の加はつてゐた次第は、「近來風體抄」の記事にその證左がある。かくて逸速き時の流の中に、その兼好・淨辨・尊氏も亡き人數に入り、頓阿も夙く六十の坂を越え、或は「遠島百首鈔」をものし、「後普光院園殿御百首跋」（北朝文和元年）を書くなど、動かし難き歌壇の大長老となつてゐた。正徹は、「頓阿は六十已後名を得たるなり」（徹書記物語）と晩成の人の如く云つてゐるが、これ地下人として勅撰集の如き公事に與らなかつたと云ふ意に解すべきで、歌名の如何ではない。延文の初め「新千載集」撰定の勅あるや、頓阿は三百六十首の自選集を提出し（圓太曆目錄）、その草稿を彈正宮の御目に入れたりしてゐる（家集詞書）。白樂天は、「余年七十一不事於吟哦」と云つたが、頓阿もこの句より「今はわれ心もよせじなゝそぢに越えぬる後の和歌の浦なみ」と詠みつつ、七十歳以後の彼の和歌精進は却つて一層痛切のものとなつた。道嗣その他公卿連の師範として活動し（愚管記等）、良基との歌學研究は貞治二年の「愚問賢註」によりて傳へられ、二條爲明がその翌年「新拾遺集」撰定の半ばに斃れた際、その完成の業が頓阿に依囑されたことは、如何に七十六の彼が精力的であつたかを物語る。なほ五言古詩句百首題は延文末の作であり、「草庵正集」も、大體七十餘歳の輯錄と考へてよい。「草庵集」（別項）は將軍に奉り、その推賞を受くるや、「歎かずよ人はすつとも和歌の浦のもくづを玉と君し照らさば」と無上の感激の念に泣いてゐる。「新拾遺集」完成と共に、彼は生前既に五勅撰集の作者となり得た譯である。得意さ併せて想ふべく、「玉津島入江こぎ出づるいづ手船五たびあひぬ神やうくらむ」とも詠んだ。その晩年は文字通り多祥であつた。蘊堅のもとに贈つた歌にも、「人ならばはかなくぞみむ八十まで和歌の浦波立ちまじる身を」とある。「迎陽記」は、大往生の際、頓阿五句願文（弟子經賢白）なるものを殘し傳へてゐる。なほ彼の住居は、東山雙林寺であつたらうと臆測されてゐるが、四條道場・金蓮寺・仁和寺の庵・伊賀三田村等、それ〴〵或る時期の止錫の地であつたことは、諸文獻の證するところである。

【性格】彼は、實力發揮の許された時代に於ける稀有な大成者の一人である。常に倦まず撓まず進むといふその眞摯の精神は、作風にも反映するところが著しい。彼は西行を思慕してゐるが、兩者その性格を異にしてゐることは云ふ迄もない。康永元年法勝寺炎上の際、烏有に歸した西行自筆の「山家集」に對し、周嗣が複本を作つた努力を激賞し（家集）、西行舊蹟の雙林寺に「跡占めてみぬ世の春を忍」び、忌日々々に「山の櫻をたを」つたとしても、彼は到底二世西行の名に値しない。彼と兼好の交誼は或る點まで深かつたらしい。頓阿は兼好に比し年下であつたのみならず、可なり融通の利く社交性をも有してゐたやうに考へられる。書道に巧みで「圓太曆」にも推賞され、出離以前は琵琶を愛した事も知られる。資料乏しい中に彼の性格を敢て綜合するならば、天賦の才藝を努力と精進により、練りあげ造りあげた大文人とでも稱してよいか。「さびしさを老となるまで忍びきぬ今はみ山に住みや果てまし」と云ふ類の隱逸讃美の歌も殘つてはゐるが、やはり孤獨を守りきれないのが彼の本性だつたと思はれる。【作品・編著】頓阿の歌の勅撰集に載るのは、「續千載」「續後撰」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新續古今」の六集で、計四十四首である。○草庵和歌集（別項）○頓阿詠五十首和歌一卷（寫本）（神宮文庫藏、延文元年の源意の奥書によれば二十歳時代初期の歌集）○頓阿法師詠一卷（寫本）（圖書寮藏、延文二年新千載集撰定にあたり、頓阿の獻上した自撰歌集で三百六十首）○頓阿句題百首一卷（寫本）（五玉集、卽ち頓阿の外、良守・良春・頓宗・周嗣の五人が遙峯帶暎靈、その他五言一句の題により百首歌を詠じたものの一。內閣文庫・圖書寮等藏。圖書寮本は頓阿自筆本の轉寫。頓阿加點のもので類從卷一七五に採られてゐるものもある。延文四・五年の交詠出されたもの）○頓阿百首一卷（寫本）（神宮文庫本。これは、前揭の古集句題百首と別に、一般の句題百首との兩種を編したもの）○井蛙抄（別項）○水蛙眼目（水蛙抄參照）○愚問賢註（別項）○頓阿勝負付歌合一卷（續類從四一二所收。四十八番、中に歌闕のもの六首あり。判のみにて詞なし）○新拾遺和歌集（別項）○新續歌仙（頓阿編といふは誤傳）○高野日記一卷（續類從五二三及び扶桑拾葉集に收む。僞作）○十樂庵記一卷（類從卷四八〇に收む。北朝貞治三年二月下旬作。卽ち當時、伊賀國阿山郡三田村に閑居してゐた關係、附近の古社寺の名、訪ひくる人物等につき、心覺えまでに書き止めて遺したもの）○三十番歌合頓阿判（類從卷二一三所收）。

【作風】「草庵集」（別項）は、實に四千餘首の歌を含み、一家の集としては稀に見る大歌集である。「憂き身には思ひでぞなき敷島の道に忘れぬむかしならでは」（續集）と頓阿自ら詠んでもゐる通り、彼の終生は歌に始まり歌に終つてゐ、「愚管記」の記者近衞道嗣等から「末代之數寄者」と畏敬されたのは無理からぬ。その作風は、手硬く輕薄でない。何處までも質實一本で押し通してゐる。「梅の花にほひや空にみちぬらん夜わたる月に春風ぞ吹く」「いづかたと聞きだにわかで過ぎにけり寢覺の空の山ほとゝぎす」彼の誠實は、同じ內容の作を幾種にも詠み返してゐる例多きにも知られる。彼には澤田の頓阿と云ふ諢名がある。卽ち「月宿る澤田の面にふす鴨の氷より立つ明方の空」の名歌によるとされてゐる。彼の特質は、長短共に繫かつて三代調的詠風に存してゐると云つてよい。夙に良基が、「ことゞ〴〵しくなく」と評し（近來風體抄）、近世に至り、伴高蹊が探幽の畫風に相通ふとして嘉賞してゐる如き（皇都午睡の引）、いづれもその長所を穿ち得たものである。これ等に反し、了俊が「一節詠みたる姿のほかをばつや〳〵よみ侍らず」（落書露顯）と貶し、「十首に七八首は古歌を多分に用ゐよみ」（和歌所不審條々）と難じてゐるのは、頓阿の他面、甘受すべき短所に相違ない。浩瀚な彼の家集を繙くものは、餘りにも主觀的態度に偏し、偏知的のトリックを玩弄し、更に緣語・掛語類の措辭の矯飾に墮してゐる點、これは了俊等反對派の歌人ならずとも認めざるを得ないであらう。併し頓阿が定家以後の二條派歌人の中に、巍然として聳立する所以は、その淡雅な內面性と實生活から生れ出た數十首の詠にある。「しきみつむ山路くれぬといそぐかな我がすむ方の鐘のひびきに」「立歸りいつ越えむとも白雲のたなび

不可撓焉者、云々」と述べてある通り、海に筆者の人格を窺知するに足るものがある。誠之甦庵の歿後三十餘年に、竹山・履軒二子、故翁の舊籠を搜つて校刊に及んだと云ふ。

【著者小傳】中井誠之。字は叔貴、通稱四郎、又忠藏、號は甦庵、播磨國龍野の人。儒學を三宅石庵に學び、業成つて懷德堂を大阪に創立し、その二子積善（竹山）・積德（履軒）に至りこれを大成した。寶曆八年（一七五八）六月十七日歿。享年六十六。（和田）

頓阿（とんあ）　歌人　【姓名】二階堂貞宗　【法號】泰嶽・泰尋等と云ひ、後に頓阿又は頓阿彌

のがあり、全然文事と無緣ではない。【閱歷】幼より和歌の道を好み、私かに二條派の嫡流爲世の家風に私淑してゐたものらしい。家集に傳へられる作で古いものは、二十三・四歳頃詠んだ應長百首のうちの三首のもの、平懷な詠風にその後年の傾向を豫兆してゐる。當時爲世は持明院統御在位の時代に當り、甚だ不遇であつたが、頓阿は二十四歳の年、斷然出離の決意を遂げ、叡山に登り、刻苦精勵、佛學を修めた。しかし長く留まらなかつたことは、正和四年三月五日龜岡花下會に、淨辨・慶運等十六人と爲世に率ゐられて歌を詠んでゐる

爲世は、元應二年「續千載」奏覽後、家の勢運を祝うて住吉詣をした際など、頓阿等門下を率ゐ、その社頭で五首歌講を試みてゐる（頓阿三十二歳）。二條大納言一日千首、龜山殿千首、龜山殿七百首等纏まつた撰歌集も次々に出された。又「續後拾遺集」の撰進が、爲世の子爲藤に命ぜられたなども、當時の和歌隆盛の一斑を示すものである。この爲藤には、頓阿は殊に親昵してゐた。正中元年、爲藤の他界に際しては、「いはぬより思ひこそやれとにかくに一方ならずぬるゝ袂を」と云ふ頓阿の哀傷は、二條派歌人の齊しく同感したところであ

歌席などにも出なかつたと見え、時の主上は二條良基を通じ、一層歌道に精進すべきを勸め諫め給うたと云ふ。「勅なれば思ひなすてそ敷島の道に物うき心ありとも」と答へ奉つてゐる。良基（別項）は頓阿の門人として北朝に仕官し、尊氏や義詮等と相計り、文化隆運の上に貢獻するところ頗る偉大であつた歌人である。從つて頓阿また尊氏の寵顧をうけ、或は尊氏の八幡詣（北朝曆應四年）や北野詣（北朝康永二年）等に扈從し、或は百人一首談義（曆應四年）、難波遊覽（康永三年）に出會、尊氏と席を

く山をかさねてぞゆく」これ等には仄かながら西行の詠風が生き、「難波がた雲の夕ゐる波のうへに遠き生駒の山ぞのこれる」「我門の板井の水やあまるらむ刈田のおもに水草ゐにけり」の叙景には、單に古今調と云ふ如き概念によつて説明し難き本質的の映發が感ぜられる。「愚問賢註」の中心思想たる「心を面影のかすかなる所にとゞめて、人のふるさぬ所を案ずべし」とは、まさにこの心境を指してゐたものとしてよい。【影響】歌道に於ける世襲的權威が轉落した時代とはいへ、勅撰集撰定の業を地下より出でて繼承することは、ひたすらその豐かなる才藻と圓熟した德望とに係つてゐる。從つてその學統下に良基を生み、やがて常緣や宗祇（各別項）を持ち得た譯であり、その二條家（別項）再興の功は、やがて近世に連なる堂上派（別項）の新基礎を造つた。後世、「草庵集」及び「愚問賢註」の普及も著しきものあり、細川幽齋も「再び和歌の道起れり、これ頓阿の力なり」（「詠歌大概抄」）と云つてゐる。連歌に關する功績も尠くないが、その作の一部は「草庵集」續編に附載されてゐる。

【參考】尊卑分脈○扶桑拾葉集系圖○二階堂家系圖○玉石雜誌○草庵集○愚問賢註○徹書記物語○和歌所不審條々○南山巡狩錄○愚管記○兼載雜談○近來風體抄○室町日記○圓太曆○和歌所祕傳抄○和歌難波津○遠碧軒記○皇都午睡○麟女唔言○大日本史○野史○類聚人物考○扶桑隱逸傳○先進繡像○歌道人物誌○山城名勝志　【齋藤（清）】

鈍根草（どんこんさう）　能狂言　【名稱】板本「狂言記」には、「どごんさう」と讀ませてあるが、江戸初期の古寫本には、既に「どんごん草」とある。

【梗概】鞍馬の多聞天へ參詣した主と冠者は、宿坊へ立ち寄ると、馳走に茗荷の鮨が出る。主はそれは鈍根草といつて食べれば愚になる物だから食べぬと言ひ、冠者に與へる。主は蓼の生えてゐるのを見つけ、あれは利根草だから食はうとて冠者に取らせて食ふ。いよいよ下向することになつて、主は小刀を忘れるが、冠者は密かに拾つて隨ふ。路で主は氣が付いて、是非に取つて來いと命ずる。そこで冠者は仔細らしく利根草と鈍根草の由來を語つて、こなたは利根草を召されたが刀を忘れさせられ、私は鈍根草を食べても物を拾つたと言つて刀を出す。

【解說】和泉流では「眞ノ形」になると一番習になつてゐるが、普通は入門式と言ふのだから、隨分違つた演じ方をするわけである。茗荷を食すると愚になるとの俗說の典據は不明である。「世說故事苑」には、「據を知らず。按ずるに、是生薑のことなるべし」として、「東坡志林」に、「生姜多食損智」との本草の說を擧げた劉貢父の逸話を載せてゐる。　【龜田】

飛だ噂の評（とんだうはさのひやう）　滑稽本　一册

【作者】風來山人【成立】安永七年【諸本】風來六々部集（寬政十二年刊、四册）。風來山人傑作集（帝國文庫）・滑稽文學全集第十二卷所收。

【題材】五代目市川團十郎が、市川八百藏の後家おるやと密通した事件が讀賣となり、飛だ事〳〵と評判された。この密通事件に關して「八百藏が後家へさんじやうつかまつり」といふ落首のあつたことを、蜀山人が「俗耳鼓吹」に記してゐる。【解說】風來山人のところへ或る人が來て、飛んだ事だ〳〵と言ひながら、團十郎と八百藏の後家との姦通事件を話す。山人は團十郎とは誰だと聞く。その人も腹を立てて、團十郎を知らぬといふことがあるかと言ふ。山人は世間の女達は役者贔屓に憂身をやつしてゐる。偶々その後家が名高い役者の後家であつたから評判にもなつてゐるが、世間並の女なら別に評判にもならない筈だ。團十郎とて儒者でもあれば格別、飛んだ噂だと言ふほどのことでもないと語る。對手は益々怒つて無態な理窟だと言ふ。そこで山人は、人間はどうせ完全なものでないから間違ひもあらうが、なすべき事となすべからざる事があるとて、門人の餞別に與へた戒めの書を引き、盜・博奕・密夫はなすべきでない。さうして自分の首の落ちないやうに用心するがよいと語る。噂に對する批評に過ぎないが、矢張り彼の面目の躍如たるものがある。彼の不滿から出た悟りとでもいはうか。　【小柴】

とんだ茶釜（とんだちやがま）　黑本　二册　十丁　十三圖　【作者・畫工】富川房信　【名稱】「新版化物」の角書がある。「とんだ茶釜」は「思ひがけない」といふ。當時の流行語によつた外題。後年、「化物とんだ茶釜」と改題再摺。【刊行】寶曆十三年、村田屋板。【題材】「ぶんぶく茶釜」（近藤清春畫作、ゑつゝや刊、赤本）及び「ぶんぶく茶釜」（鱗形屋刊、赤本）に據る。

【梗概】「上卷」昔々、道樂寺の野干（やかん）和尚は、談義に役者の聲色をまぜ、後家や蓮葉な娘をたらす。和尚は雞の吸物でしたゝか飲んだ歸りに美女に行き會ひ、その家に伴はれる。美女實は狸で、目覺めると美女の家と思つたのは野原である。二匹の狸が逃げ出すのを捕へようとした處、一匹は逃げ遲れて茶釜に化ける。和尚はその茶釜を持つて歸る。饂飩粉に土をまぜて美濃紙にのし、魚の骨を拔く妙藥と言つて賣る。御邸の若殿が鰌汁（どじやう）で咽喉に刺をたてたのを治療して謝禮金を貰ふ。茶の湯の師匠の娘お幸を、深井嘉十郎が見染める。「下卷」和尚は嘉十郎に賴まれて、お幸を嘉十郎の妻にさせようと計畫する。お幸は既に父の門弟龜井大助と深い仲となつてゐる。お幸の手前で嘉十郎に茶をすゝめる席へ、白裝束の大助が出て、お幸を妻に出來なければ切腹すると言ふ。そこでお幸の父は大助にお幸を與へる。失敗した和尚は嘉十郎の機嫌をとるために、野原で拾つた例の釜で茶をたてる。釜が動き出して逃げる。大助・お幸は、結婚して榮える。

【解說】ゑつゝ屋刊・鱗形屋刊の「ぶんぶく茶釜」は、ぶんぶく茶釜の傳說を取扱つた類似の作品である。併し後者は前者を粉本としてゐるが、前者よりは遙かに發達してゐる。但し技巧上に斑（むら）があり、趣向に惱みが見える。「とんだ茶釜」は、これ等の後をうけて從來の型を破り、文福を破戒の僧野干とし、その行動に趣向があり、茶釜の陰翳はうすれ、戀愛關係が有力となり、竹齋物の色彩も加はるなど、赤本の世界を離れてゐる。唄や詞には當世風のところが見える。房信の畫作としては初期の作で、未熟な點が認められる。流行の通言による外題に落をとつたらしく、鳥居清經にも「とんだ茶釜」（村田屋刊、黑本）の作がある。

【備考】「ぶんぶく茶釜」（清春畫作）東山殿のお茶坊主文福は狐を捕へる。料理されるところを狐は逃げたが、追はれて茶釜になる。茶釜を火にかけたので正體を現はして逃げ去る。狸は狐に賴まれ、復讐に文福を化したが捕へられる。　【小池】

鈍通與三兵衞（どんつうよさべゑ）　「津打治兵衞」を見よ。

どんぶりこ　「桶昔噺」を見よ。

な

內閣文庫（ないかくぶんこ）　【解說】現在內閣書記官室の管轄の下に、內閣所藏の圖書を收容してゐる文庫。東京市麴町區丸ノ內大手門內にある。【沿革】明治十七年十一月二十四日、太政官布達第十一號の「太政官に文庫を設け、各官廳の藏書を蒐集の上管理すべし」と云ふ告示に基いて創設された。當時太政官は赤坂離宮にあつたから、その一隅に文庫を設け、文書局記錄課文庫掛に於てその事務を管掌した。同時に宮內省を初めとして各省及び元老院・會計檢査院・修史館等より圖書を引

たので、一時元の千代田文庫に移すこととなつたが、同四十四年四月に、大手門內に文庫を新築し、同年十一月に、一切の書籍をこゝに搬入した。

【藏書】主なるものは、和書に於ては德川光圀校訂の「古事記」（寫本）三册、慶長寫本の「日本書紀」三十卷十册（元紅葉山文庫藏、德川家康が林道春並に僧崇傳に命じて五山の僧侶をして寫さしめたもの）、同じく慶長寫本の「續日本紀」四十卷並に「續日本後紀」二十卷、同じく「文德實錄」十卷、「三代實錄」五十卷、「西宮記」二十卷等で、漢書に於ては、慶長活字版「群書治要」五十卷（內四・十三・二十卷缺）、蘇東坡眞蹟の「石鐘山」一軸、智永の「眞草千字文」、明版「文獻通考」、朝鮮活版「治平要覽」等があり、洋書に於ては佛蘭西の布告類集三十册（一八三三年版）、英國の法令集等である。大正十四年三月末現

何に依つて異なるであらう。上記片上伸の如きは、所謂辨證法的唯物觀の社會批評を以て、この外在批評の極致としたやうで、彼は頻りに「內在批評以上のもの」、卽ち外在批評の必要を說いたのである。併しこの提唱は、文學批評に社會的關心を濃厚にしようと云ふ一風潮を現はしたものだと云ふ以外には、少くも內在外在を對立させることは、學理的に的確なものとは思はれない。と云ふのは、文學個々の作品の形式・技巧・主題に關する批評が、文學を社會的現象として觀察するといふことと毫末も矛盾しないばかりでなく、事實に於ては、それと一致することが多いからである。それに、內在批評・外在批評といふ言葉そのものも、この場合妥當ではないし、事實また、この言葉はただ文壇の一時的造語であつて、批評學上の術語ではない。　【本間】

は年頭・歲暮・節句の祝儀、官職の御禮物等に對する謝禮に用ひた。

爲肥後國守護職祝儀、太刀一腰則房、刀一腰清麿、弓一張、征矢一腰、腹卷一領糸毛、馬一疋鹿毛、鐙鞍、黃金參十兩到來候訖、尤以目出候、太刀一振家助遣之候、猶時光可申候也、

八月廿六日　（花押）○足利義晴

大友修理大夫とのへ

江戸時代の內書には、花押と印章との兩方がある。　【伊木】

內新好（ないしんかう）　洒落本・黃表紙作者　【通稱】內田屋新太郎、或る時は小林新太郎　【別號】內魚堂・魚堂・魚堂主人・魚道・魯堂・新江・白銀臺一丸等。【生歿】未詳　【閱歷】元茅場町に住み、帆綱商を營む。一時零落して神田小柳町に住み、幕府御用達小林筑後の養子となり、小林姓を名乘つたが離緣となり、晩年は本

家系圖○玉石雜誌○草庵集○愚問賢註○徹書記物語○和歌所不審條々○南山巡狩錄○愚管記○兼載雜談○近來風體抄○室町日記○圓太曆○和歌所祕傳抄○和歌難波津○遠碧軒記○皇都午睡○隣女晤言○大日本史○野史○類聚人物考○扶桑隱逸傳○先進繡像○歌道人物誌○山城名勝志　【齋藤(清)】

鈍根草（どんこんさう）　能狂言　【名稱】　坂本「狂言記」には、「どごんさう」と讀ませてあるが、江戸初期の古寫本には、既に「どんごん草」とある。

【作者】　風來山人　【成立】　安永七年　【諸本】　風來六々部集（寬政十二年刊、四册）。風來山人傑作集（帝國文庫）・滑稽文學全集第十二卷所收。

【題材】　五代目市川團十郎が、市川八百藏の後家おるやと密通した事件が讀賣となり、飛だ事〳〵と評判された。この密通事件に關して「八百藏が後家へさんじやうつかまつり」といふ落首のあつたことを、蜀山人が「俗耳鼓吹」に記してゐる。【解說】　風來山人のところへ或る人が來て、飛んだ事だ〳〵と言ひながら、團十郎と八百藏の後家との姦通事件を話す。山人は團十郎とは誰だと聞く。その人も腹を

な

內閣文庫（ないかくぶんこ）　【解說】　現在內閣書記官室の管轄の下に、內閣所藏の圖書を收容してゐる文庫。東京市麴町區丸ノ內大手門內にある。【沿革】　明治十七年十一月二十四日、太政官布達第十一號の「太政官に文庫を設け、各官廳の藏書を蒐集の上管理すべし」と云ふ告示に基いて創設された。當時太政官は赤坂離宮にあつたから、その一隅に文庫を設け、文書局記錄課文庫掛に於てその事務を管掌した。同時に宮內省を初めとして各省及び元老院・會計檢査院・修史館等より圖書を引繼ぎ、その册數約四十萬に達したと云ふ。同十八年六月文庫掛は文庫課となり、その年十二月には太政官に代つて內閣が設けられ、記錄局の下に文庫課が置かれることになつた。同二十二年に內櫻田門內に書庫が新築され、藏書の一部をこれに移したが、更に同二十三年三月內務省の所管に係る千代田文庫の引繼ぎを受け、次いで同二十四年三月に至つて太政官文庫並に宮內省より託せられた紅葉山文庫の圖書を擧げて、これに藏むることとなつた。その後紅葉山文庫本は特殊の沿革を有するものであるから、最も貴重なるもの「周易傳義大全」以下二萬九千九百五十六册を宮內省圖書寮へ移すこととなつた。同二十六年內閣所屬職員官制が改定され、記錄局は廢止されて新に記錄課が置かれ、內閣書記官室の所屬となつた。翌二十七年六月には震災のため、內櫻田門內の文庫は可なり被害が甚だしかつたので、一時元の千代田文庫に移すこととなつたが、同四十四年四月に、大手門內に文庫を新築し、同年十一月に、一切の書籍をこゝに搬入した。

【藏書】　主なるものは、和書に於ては德川光圀校訂の「古事記」（寫本）三册、慶長寫本の「日本書紀」三十卷十册（元紅葉山文庫藏、德川家康が林道春並に僧崇傳に命じて五山の僧侶をして寫さしめたもの）、同じく慶長寫本の「續日本紀」四十卷並に「續日本後紀」二十卷、同じく「文德實錄」十卷、「三代實錄」五十卷、「西宮記」二十卷等で、漢書に於ては、慶長活字版「群書治要」五十卷（內四·十三·二十卷缺）、蘇東坡眞蹟の「石鐘山」一軸、智永の「眞草千字文」、明版「文獻通考」、朝鮮活版「治平要覽」等があり、洋書に於ては佛蘭西の布告類集三十册（一八三三年版）、英國の法令集等である。大正十四年三月末現在によれば圖書册數五十一萬七十九册、一萬一千九百二十二枚、七百三十軸である。

【參考】　桔梗門の中から　樋口龍太郎（圖書館雜誌七四·七五）　【植松】

內在批評（ないざいひひやう）　文學論　【解說】　內在批評及び外在批評と云ふのは、大正の末から昭和の初めにかけて、我が批評壇で一時用ひられた言葉である。內在批評と云ふのは、その當時よくこの言葉を使用した片上伸の說によると、「文學個々の作品の形式や技巧や主題の性質やに關する批評」である。言葉を換へて云ふと、文學を文學として批評する批評法と云ふ意味であつたらしい。外在批評と云ふのは、文學を一個の社會的現象として觀察し、社會學的立場から批評すると云ふ批評法であつて、從つてこの立場に立つ實際の具體的批評は、批評者各自の社會學的人生觀の如何に依つて異なるであらう。上記片上伸の如きは、所謂辨證法的唯物觀の社會批評を以て、この外在批評の極致としたやうで、彼は頻りに「內在批評以上のもの」、卽ち外在批評の必要を說いたのである。併しこの提唱は、文學批評に社會的關心を濃厚にしようと云ふ一風潮を現はしたものだと云ふ以外には、少くも內在外在を對立させることは、學理的に的確なものとは思はれない。と云ふのは、文學個々の作品の形式·技巧·主題に關する批評が、文學を社會的現象として觀察するといふことと毫末も矛盾しないばかりでなく、事實に於ては、それと一致することが多いからである。それに、內在批評·外在批評といふ言葉そのものも、この場合妥當ではないし、事實また、この言葉はただ文壇の一時的造語であつて、批評學上の術語ではない。　【本間】

內侍宣（ないしのせん）　古文書　【解說】　勾當內侍など、天皇側近の女官が聖旨を奉じて出す文書。太寶令規定の詔勅は比較的重大なる場合のもので、中務省と太政官とを經て施行せられたが、この內侍宣はこれ等の諸官省に交涉なく、日常の小事に用ひられた。桓武天皇の御代から見えてゐる。

內侍宣、奉　勅、進奏之紙、皇惡者多、自今以後、簡淸好者、應宛奏紙、若不改正、執奏之少納言必罪之者、當番案主、宜知意勘之、不可遺忘、

延曆九年五月十四日

なほ宣命體で書いた例もある。後世足利時代に至り、女房奉書（別項）がこれに代ることとなつた。　【伊木】

內書（ないしょ）　古文書　【解說】　足利氏以後、將軍或は將軍級の武將が內々の意味を以て遣す文書。軍用·感狀·受領等にも使つたが、多くは年頭·歲暮·節句の祝儀、官職の御禮物等に對する謝禮に用ひた。

爲肥後國守護職祝儀、太刀一腰則房、刀一腰淸綱、弓一張、征矢一腰、腹卷一領糸毛、馬一疋鹿毛、鞭、黃金參十兩到來候訖、尤以目出候、太刀一振家助遣之候、猶時光可申候也、

八月廿六日　（花押）　○足利義晴

大友修理大夫とのへ

江戸時代の內書には、花押と印章との兩方がある。

內新好（ないしんかう）　洒落本·黃表紙作者　【通稱】　內田屋新太郎、或る時は小林新太郎　【別號】　內魚堂·魚堂·魚堂主人·魚道·魯堂·新江·白銀臺一丸等。【生歿】　未詳　【閱歷】　元茅場町に住み、帆綱商を營む。一時零落して神田小柳町に住み、幕府御用達小林筑後の養子となり、小林姓を名乘つたが離緣となり、晚年は本所石原に住み、俳諧の宗匠となつた。世話する妻子もなかつたのか、鹿島屋と云ふ商人に引取られ病歿したと云ふ。內新好は通稱を洒落れて內親王に通はせたので、これと白銀臺一丸は狂歌の號である。彼の處女作は、洒落本に於て「一目土堤」（天明八年）、黃表紙で「妹（ひし）退治」（同八年）である。爾來發表した作品數種あるが多作家ではない。文化三年以後作品がないのは、それ以後病歿したか、本所に隱遁したのであらう。彼の洒落本は滑稽を主としたもので、狂歌師らしいものである。同時に可なり通人らしい肌合が强烈に現はれて居り、それも氣障に感ぜられる位である。併し「一目土堤」は、本所一つ目の岡場所を描いた珍しい題材の書で、同じ題材の「にやんの事だ」（天明元年）と共に珍重すべき書である。

【著作】　【洒落本】　一目土堤○中洲之華美（各別の作で、未熟な點が認められる。流行の通言による外題に落をとつたらしく、鳥居淸經にも「とんだ茶釜」（村田屋刊、黑本）の作がある。

【備考】　【ぶんぶく茶釜】（淸春書作）東山殿のお茶坊主文福は狐を捕へる。料理されるところを狐は逃げたが、追はれて茶釜になる。茶釜を火にかけたので正體を現はして逃げ去る。狸は狐に賴まれ、復讐に文福を化したが捕へられる。　【小池】

鈍通與三兵衞（どんつうよさべゑ）　「津打治兵衞」を見よ。

どんぶりこ　「楠昔噺」を見よ。

項)。〔滑稽本〕鳴通力(寛政元年)○怪談文草(同十年)。〔黄表紙〕妹退治○名代振袖(寛政三年)○敎訓指相撲(同年)○明花春爲化(享和二年)○金降豐歲貢(同年)○鼠嫁入(享和三年)(別項)○花紅葉二人飯鯀(文化二年)○早替平氣之景清(同年)等。　〔山崎〕

內省的心理學的美學　ないせいてきしんりがくてきびがく　「心理學的美學」を見よ。

內的形象　ないてきけいしやう　藝術論　〔英〕Inner Form　〔獨〕Innere Gestalt　〔解說〕藝術の客觀的具象形式に對して內面的形式を云ふ(美的形式參照)。ゲーテは、「內面的形式は凡ゆる形式を含み、手では把握することが出來ない。唯感ぜられるのみである」と云ふ。この場合は藝術の表現內容の把握の仕方を云つてゐるのであつて、內面的形式とは材料に固有する形式法則を直觀的に感得せしめる感情をいふのである。テオドール・マイヤアは、藝術家は內部から卽ち體驗の胚種からして形成する。而して藝術は有機的統一を獲得することを以てその極致とする。そして藝術家が體驗したところのものに、かくの如き特質的形體化を與へる能力に就いて、內面的形式化の活動を認めてゐる。卽ち內面的形式は、作家の個人性を通じて體驗の胚種に統一を與へ、而も外面的表出の力を藏するものとする。かくて外面的作品は、內面的形式の證左に外ならぬと云ふ。(「創作の心理」を見よ)　〔村田〕

內的摸倣　ないてきもはう　藝術論　〔獨〕Innere Nachahmung　〔解說〕美的受用の心理を規定する槪念でグロースの用語である。我々の美的受用に於ては、對象が與へる知覺的形式に順應して內面的追構成が行はれる。卽ち身體的な摸作が行はれる。このやうな現實的活動が根柢となり、媒介となつて現實の知覺と主觀感情との融合が可能となるのである。かくて現實的な美的感情は客觀化されるといふ。而して內面的追體驗の過程に關係する身體的活動は、主として運動感覺が擧げられてゐるのであるが(ヴァノン・リー夫人は、身體の均衡・呼吸・血行を擧げてゐる)、かくの如き身體的共鳴が劇觀照の場合などに、俳優の動作表情等に順應して現はれ、美的翫賞を助けることの多いことは事實である。リップスの感情移入說(別項)では、感情の客觀化の過程は全く心理的にのみ解釋され、生理的要素・有機感覺が加はることを全く拒んでゐる。併し形式知覺に伴ふ身體的現象は、一般に美的經驗について認容されることであるから、この點で彼の考は偏狹といふべきである。例へば繪畫の線を觀照する場合などには有機的感覺が關係する。併しグロースの內的摸倣說(別項)にも幾つかの批評が加へられる。主な批評點を擧げれば(一)美的觀照に於て、それがたとひ劇觀照の場合であつても、凡ての人が身振につれて身體的共鳴を感ずるとは限らない。(二)摸倣といふ以上は、身振に對しては身振を以てするといふ意味になるが、正當にその再現が可能であるか否かは疑はしい。(三)また身體的共鳴・追體驗といふことは、藝術的印象の一種の獨創的な再構成であるとも云へる。(四)有機的感覺の快が常に美的快感を構成するとは限らない。(內的摸倣說・感情移入參照)　〔村田〕

內的摸倣說　ないてきもはうせつ　藝術論　〔獨〕Theorie d. Innere Nachahmung　〔解說〕グロースの美學說。內的摸倣は動物生得の本能であるとし、美的受用(翫賞)の心理を說明する說である。一面リップスの感情移入說に通ずる點があり(對象感情・美的共感參照)、他面藝術活動に於ける創造的想像活動の說明を生理學的に說明してゐる點、及びランゲの所謂感情外周說を美的受用の說明に導き入れた點等に特色がある。(遊戲說・內的摸倣參照)　〔村田〕

內轉　ないてん　「韻鏡」を見よ。

內包美　ないはうび　藝術論　〔獨〕Gehaltschönheit　〔解說〕美的對象の內包に基く美をいふ。形式美(別項)と對する槪念である。卽ち一般に美的樣態(別項)の美を指す。例へば崇高美・悲壯美の如きは內包美である。その特殊な用語の點に關しては「美的樣態」のフォルケルトの學說參照。　〔村田〕

內包美學　ないはうびがく　藝術論　〔獨〕Gehalts-Aesthetik　〔解說〕美の成立の根據を美的對象の內包にありとする美學。形式主義的美學の對語。卽ち美は實在又は理念が、感官的現象の內容として現はれることによつて成立するので、感官的現象の形式如何によるのではないといふ考へ方。主として、ヘーゲル(Hegel)の美學に由來する多くの形而上學的美學者の考へ方である。　〔渡邊〕

內面描寫　ないめんべうしや　文學論　〔解說〕外面描寫(別項)に對する語。個々の人の心理的動きを探つて書くといふ行き方であつて、單に外面に現はれた行爲を描くといふだけで滿足せず、一步突き込んで、その心理までも說き、人間の行動の深いところに達しようとする描寫法である。日本での內面描寫に優れた最初の作品に、二葉亭四迷の「浮雲」(別項)がある。外國ではゴンチャロフ、ドストエフスキー、トルストイなどがあるが、二葉亭のものにはこれ等外國作家の、殊にゴンチャロフの「オブロモフ」や「通常人の一生」などの影響が見られる。勿論、內面描寫と外面描寫とは、必ず別々に行はれるものではない。全體は外面描寫でありながら、處々に內面描寫を試みてゐる作も少くない。フロオベルの「マダム・ボヴリイ」やモウパスサンの「女の一生」などはその好例である。又手法は外面描寫に似てゐるが、實は內面描寫になつてゐるといふやうな作品もある。ハウプトマンの「使徒」はその例である。この作品は、一篇が空想・情緒・煩悶と云つたやうな內面の心理を表はさうとしたものであるが、それを飽く迄も普通の平面描寫で解剖的にやつてゐる。心理狀態・氣分・心の微妙な動きなどを描き出すのであるから、その意味では心理描寫ともいふ。だが描寫であるから、飽くまでも心理の說明ではない。心理描寫は外面的な描寫を生けるがまゝに描く如く、內面卽ち心理の動きを眼に見得るやうに描き出すものでなければならぬ。其處に作者の技倆が大切になつて來る。最近の英國に於ける新心理學派乃至精神分析學派の作家には、この方面に一新境地を開いた巧みな者がゐる。例へばヴアージニア・ウルーフ、ディ・エイチ・ローレンス、ジェームス・ジョイス、レヴェッカ・ウェストの如きがそれである。又現代の日本では、夏目漱石の諸作、殊に「明暗」(別項)、里見弴・志賀直哉の或る作品には、內面描寫の冴えた技倆が窺はれる。　〔宮島〕

內容美　ないようび　藝術論　〔獨〕Inhalt-Schönheit　〔解說〕形式美(別項)に對立する槪念。美的內容(別項)を心理的に分析すれば、(一)表象內容・知的聯想內容と、(二)感情內容とに分けることが出來る。感情內容のみに美を認めるのは一般の內容美學の傾向であるが、直喩・隱喩による聯想內容は、美意識を豐かにする。溫雅な描寫でよく整頓してゐるがやゝ生彩に乏しい。　〔田中(一)〕

といふ點で、一般に表象的內容を美的內容に入れるのが穩當である。なほ題材・材料(素材)そのものは、藝術的形成を受けない限り非美的であり、藝術作品の彼方にあるものであるから、動因として作品の形式を規定する一面の意義はあるが、嚴密な意味で美的內容ではない。同樣に翫賞の素材的興味も美的享受に役立つのであつて、それ自身は美的享受の本質的內容ではない。　〔村田〕

直兄　なほえ　歌人　〔姓〕松田氏　〔號〕藤園　〔生歿〕天明三年京都に生れ、嘉永七年(一八五一四)二月二十一日歿す。享年七十二。〔學統〕賀茂季鷹の門下　〔閱歷〕賀茂の縣主である。正四位下伊豫守に叙任せられた。小澤蘆庵などの影響をうけて、「古今集」を作歌のよりどころとし、自然の歌風を喜んだ。歌學書「言葉の直路」(別項)は、文政四年、直兄三十は語の響ではなく、音のひびきであるといつて、直兄の論を駁してゐる。又八田知紀は、直兄の論は餘りありのまゝであるべきことに偏り過ぎて、理想の方面が忘れられてゐるといつて、同じく「直路」を攻擊してゐる。〔著書〕言葉の直路○藤園雜歌等。　〔窪田〕

直江版　なほえばん　「刊本」を見よ。

直養　なほかひ　國學者　〔姓名〕高橋氏。後西田氏。通稱庄三郎、字は浩然。〔號〕筱舍　〔生歿〕寬政五年に生れ、元治二年(慶應元年)(一二五二五)歿す。享年七十三。〔閱歷〕直養は豐前の人、高橋元義の第四子として生れたが、文化五年出でて西田氏を嗣ぎ、その姓を冒した。西田家は小倉藩に仕へ、二百五十石を食んだ。直養三十六歲にして勘定奉行となり、それより諸役を經て、京都・大阪の留守居となり、つひに用人格に至り、加增して二百八十石を賜はり、禍を直したまふ御靈の謂なり」(記傳)と解してゐるが、この義を書名にしたものである。〔成立〕明和八年　〔諸本〕文政八年版の單行本の外、「古事記傳」の第一卷に收む。〔內容〕本書は、先づ我が上代には道といふ言擧もなかつたが、惟神の大道が自ら行はれて、天下はよく治まつてゐた。然るに後世外來文化の影響を受けて、人々惡しき思想を抱くやうになつた。されど天照大御神が照臨まし〳〵て、世界無比の神道行はるれば、禍津日神も如何ともすることが出來ず、直日靈によつて國家平安なる所以を說いたのである。〔影響〕本書出づるや、市川匡麻呂は「末賀能比連」(別項)を著はしてこれを反駁し、宣長は更に「葛花」(別項)を著はしてその說を辯駁したが、更にこの論爭に關しては、沼田順義は「級長戶風」(別項)を著はし、會津正志は「讀直毘靈」を出してゐる。

直幹申文繪詞（酒井忠

といふ點で、一般に表象的内容を美的内容に入れるのが穏當である。なほ題材・材料（素材）そのものは、藝術的形成を受けない限り非美的であり、藝術作品の彼方にあるものであるから、動因として作品の形式を規定する一面の意義はあるが、嚴密な意味で美的内容ではない。同樣に翫賞の素材的興味も美的享受に役立つのであつて、それ自身は美的享受の本質的内容ではない。　〔村田〕

直兄（なほえ）　歌人　【姓】松田氏　【號】藤園　【生歿】天明三年京都に生れ、嘉永七年（一八五一四）二月二十一日歿す。享年七十二。　【學統】賀茂季鷹の門下　【閲歷】賀茂の縣主である。正四位下伊豫守に叙任せられた。小澤蘆庵などの影響をうけて、「古今集」を作歌のよりどころとし、自然の歌風を喜んだ。歌學書「言葉の直路」（別項）は、文政四年、直兄三十九歳の時に成つたものである。直兄はこの書で、歌の大旨は「古今集」の序文にありとし、序文を懇に釋してゐる。この書の特色は、歌が時代によつて變化するといふことは認めるが、つまり、歌が時代と密接な關係を持つてゐるといふことは認めるが、時代と關係がある以上に、土地と關係があると説いてゐるところにある。京都の地に優雅な歌が生れ、奈良の地に素朴な歌の生れたのは當然で、京都に住する自分が、古今調を詠むのは、これもまた當然で、非難すべきことではないといつてゐる。また調を論じては、調は自ら物に備はつたもので、これを約して言へば、語の響である。だから、語をよく響くやうに寫せばよい。調を第一に説いたりするのはどうかと言つて、景樹の歌學を難じてゐる。景樹の門下三宅意識は、「言葉の直路辨」を著はして、調は語の響ではなく、音のひびきであるといつて、直兄の論を駁してゐる。又八田知紀は、直兄の論は餘りありのまゝであるべきことに偏り過ぎて、理想の方面が忘れられてゐるといつて、同じく「直路」を攻撃してゐる。【著書】言葉の直路○藤園雜歌等。　〔窪田〕

直江版（なほえばん）　「刊本」を見よ。

直養（なほかひ）　國學者　【姓名】高橋氏。後西田氏。通稱庄三郎、字は浩然。【號】筱舍　【生歿】寛政五年に生れ、元治二年（慶應元年）（一二五二五）歿す。享年七十三。　【閲歷】直養は豐前の人、高橋元義の第四子として生れたが、文化五年出でて西田氏を嗣ぎ、その姓を冒した。西田家は小倉藩に仕へ、二百五十石を食んだ。直養三十六歳にして勘定奉行となり、それより諸役を經て、京都・大阪の留守居となり、つひに用人格に至り、加增して二百八十石を賜はつた。直養は初め漢學を石川彦岳に、和歌を秋山光彪に學び、後、更に江戸では太田錦城に、大阪では筱崎小竹に就いて質疑した。直養は交游極めて廣く、當時の三都知名の士は、大方識つてゐたやうに思はれる。性格洒脱にして事物に拘泥せず、書畫・古器・點茶・音樂・演劇等、その趣味もまた多方面に亙つてゐた。【著作】金石年表一册（天保九年刊）○筱舍集二册　○筱舍漫筆二十卷（日本隨筆大成所收）○咏歌眼目一册（嘉永七年刊）。その他未刊の稿本も多い。　【參考】西田直養略傳　伊東尾四郎（歷史地理一五ノ一・二）　〔森〕

直毘靈（なほびのみたま）　國學書　一卷　【著者】本居宣長　【名義】「古事記」の禍津日・直毘の二神の成られた所で、宣長は、「此二柱は穢より清にうつる間に成坐る神にして、直毘とは、禍を直したまふ御靈の謂なり」（記傳）と解してゐるが、この義を書名にしたものである。【成立】明和八年　【諸本】文政八年版の單行本の外、「古事記傳」の第一卷に收む。　【内容】本書は、先づ我が上代には道といふ言擧もなかつたが、惟神の大道が自ら行はれて、天下はよく治まつてゐた。然るに後世外來文化の影響を受けて、人々惡しき思想を抱くやうになつた。されど天照大御神が照臨まし〳〵て、世界無比の神道行はるれば、禍津日神も如何ともすることが出來ず、直日靈によつて國家平安なる所以を説いたのである。　【影響】本書出づるや、市川匡麻呂は「末賀能比連」（別項）を著はしてこれを反駁し、宣長は更に「葛花」（別項）を著はしてその説を辯駁したが、更にこの論爭に關しては、沼田順義は「級長戸風」（別項）を出してゐる。著はし、會津正志は「讀直毘靈」を出してゐる。なほ宣長の著「玉匣」（別項）は、本書と併せ見るべき「道」に關する考察である。　〔西尾〕

直幹申文繪詞（なほもとまうしぶみえことば）　繪卷　【解説】酒井伯爵藏一卷、詞繪共各四段。文章博士橘直幹は、天曆八年に民部大輔の職が缺けたので、その職を兼任せん事を望んで小野道風清書の申文を奉つたが、その中に恨みがましい文句を書き過ぎた爲めか、天皇の御氣色惡しく、兼任の御沙汰もなかつた。その後、天德四年内裏燒亡の際、天皇が「直幹の申文は取り出でたりや」と御尋ねあつたので、世の人々有り難きことに語り合つたといふ。この事は、「十訓抄」などにも見える名高い話で、これを繪卷にしたのがこの一卷である。詞は慶運法師、書者は土佐光顯と傳へられるが確證はない。光顯は南北朝頃の人といふが、畫風から見て製作年代はまづその頃とすべきである。温雅な描寫でよく整頓してゐるがやゝ生彩に乏しい。　〔田中（一）〕

直幹申文繪詞（酒井忠正伯藏）

直好（なほよし）　歌人　【姓名】熊谷信實、後直好。通稱八十八、後助左衞門　【生歿】天明二年周防國岩國に生れ、文久二年（一八五二）八月八日歿す。享年八十一　【法名】不識庵香一居士　【墓所】大阪西念寺　【學統】香川景樹門。間島冬道はその門下である。　【家系】直好の家は周防岩國藩の世臣で、直好は熊谷家の總本家熊谷清家の弟、熊谷有賀七世の後である。父は右衞門直昌といひ、軍學に精しかつた。

といふ意味になるが、正當にその再現が可能であるか否かは疑はしい。（三）また身體的共鳴・追體驗といふことは、藝術的印象の一種の獨創的な再構成であるとも云へる。（四）有機的感覺の快が常に美的快感を構成するとは限らない。（内的摸倣説・感情移入參照）　〔村田〕

内的摸倣説（ないてきもはうせつ）　藝術論　〔獨〕Theorie d. Innere Nachahmung　【解説】グロースの美學説。内的摸倣は動物生得の本能であるとし、美的受用（翫賞）の心理を説明する説である。一面リップスの感情移入説に通ずる點もあるが、一面ヴェッカ・ウェストの如きがそれである。又現代の日本では、夏目漱石の諸作、殊に「明暗」（別項）、里見弴・志賀直哉の或る作品には、内面描寫の冴えた技倆が窺はれる。　〔宮島〕

内容美（ないようび）　藝術論　〔獨〕Inhalts-Schönheit　【解説】形式美（別項）に對立する概念。美的内容（別項）を心理的に分析すれば、（一）表象内容・知的聯想内容と、（二）感情内容とに分けることが出來る。感情内容のみに美を認めるのは一般の内容美學の傾向であるが、直喩・隱喩による聯想内容は、美意識を豐かにする描寫（別項）に對する語。個々の人の心理的動きを探つて書くといふ行き方であつて、單に外面に現はれた行爲を描くといふだけで滿足せず、一歩突き込んで、その心理までも説き、人間の行動の深いところに達しようとする描寫法である。日本での内面描寫に優れた最初の作品に、二葉亭四迷の「浮雲」（別項）がある。外國ではゴンチャロフ、ドストエフスキー、トルストイなどがあるが、二葉亭のものにはこれ等外國作家の、殊にゴンチャロフの「オブロモフ」や「通常人の一生」などの影響が見ら

【閲歴】直好は若い時から物頭役を奉じ、又究方を勤めてゐた。罪人を取しらべる際には、口供を書記に筆記させず、口供が終つたあとで自分で記した。要點は一つも洩らさなかつたといふことである。當時「法曹至要抄」を熟讀し、註解・頭書を作つてゐる。文政五年、師景樹の使者が岩國に來て、景樹と景嗣との間の紛議を訴訟した。景嗣とは景樹が別れて出たあとの香川家へ、景樹の代りに養子として入つた人である。岩國は香川家の宗家の在る地であつた。直好はこの爭ひの裁きに與つたが、ことは景樹の不利に終り、以後直好の身は、藩と師家との間にあつて、苦しい立場におかるゝに至つた。文政八年(四十四歳)、つひに意を決し、「世の中を思ひ定めし朝より雲と水とにゆく心かな」の一首を殘し、妻子を携へて藩を脱走してしまつた。藩主吉川謙光は、直好を師としてゐたが、これを聞いて、「直好は鯉魚の如し、ちさき池にては養ひ難し」と嘆いたといふ。直好に教へを受けた熊谷直輔は、この出來事を悲しんで歌數首を作つてゐる。かくて直好は京都に住まうとしたが、のち難波に下り、歌の師匠をして、そこで生涯を送つた。管絃の道にも精しく、花園三位から大曲を許されるまでになつた。「梁塵後抄」を著はしたのもこの點から首肯される。又茶道をも樂しんだ。直好は身長が甚だ高く、髯を大きく結んでゐたといふことである。【著書】法曹至要抄註解○古今集正義序註追考○古今集正義總論補註○古今集正義總論註論辨○梁塵後抄(別項)○船路日記 ○船路のゆき○嚴島日記○浦の汐貝(別項)○浦の汐貝拾遺。【人物・業績】幼時から文才があり、學を好んだ。初め鄉人吉田嘉太郎といふ人について歌を學び、雪の題で、「夜なれど土の白きはしら雪のほどろほどろに降ればなりけり」と詠み、嘉太郎をして舌を巻かせたといふ。十六歳で景樹の門に入り、周防から歌を送つた。景樹は添削のあとへ、「實にならむ秋を思へば小山田のいね難きまで嬉しかりけり」と記して送り返したといふ。十九歳の時京都に上り、景樹のもとに一年ばかり留まつて學んだ。その折、かたはら相國寺の誠拙和尚に參じて禪を修業し、悟入して香一居士の號を授けられた。景樹に親しく接してからは、直好は幾度も鄉里と京都との間を往復してゐる。その行路を寫した、瀨戸内海を渡航した折の文が殘つてゐる。それは二十六歳の時に書いたもので、その歌に見る如く、淡々として水のやうな名文である。この年直好は、外に阿元と嵐山に花見を共にした文、景樹に從つて湟槃詣をした文の二つを殘してゐる。景樹の「新學異見」(別項)は、文化八年直好三十歳の時に成つた。この書の稿は、ひとり直好のために講じつつ成つたものだと言はれてゐる。天保十三年(六十一歳)から僅かの間に、「古今集正義序註追考」以下、三つの歌學書を著はしてゐる。景樹の論に註をほどこしたもの及びそれに類したもので、いづれにも直好の澄んだつつましい心境が覗はれる。歌集は死後門人等の集めたものである。直好は、歌はしらべあげた時は用を足してしまつたものだといつて、書きとめなどしておかなかつたといひ、生前歌を纏めなかつたのもさうした氣持からであつたらう。直好の歌は、「歌は誠實の自然の現れた調である」といふ、景樹の歌論の一點を強調し、それを實行に移したもので、直好にそれが出來たのは、一つには直好の人柄によるのである。直好は俊才木下幸文(別項)と共に、桂園門下十哲の中での雙璧とされ、景樹に師事すること實に四十年にわたつた。【緯田】

荷井風

永井荷風 小説家 【本名】壯吉 【別號】金阜、また石南 【閲歴】明治十二年十二月三日、父久一郎の長男として東京市小石川區金富町四十五番地に生れた。父は當時帝國大學書記官の職にあり、後文部大臣祕書官・文部省會計局長に歴任したが、諱は匡溫、字を耐庵・禾原と號して詩を善くし、漢・洋の學に通じた人だつた。荷風は明治十六年お茶の水東京高等師範學校附屬幼稚園に通つてから小石川黒田小學校・尋常師範學校附屬小學校を經て、高等師範學校附屬中學校に入學、十九歳にして卒業。この間書を岡三橋に、畫を岡不倒に、又漢詩を岩溪裳川に就いて學ぶと共に、神田錦町の東京英語學校に通つて志賀剛川等の教へを受け、更に荒木竹翁・福城可童等に尺八の指南を乞うた。明治三十年中學卒業、たま〳〵父が官を辭して日本郵船會社の社員となり、上海支店長として赴任するに隨つて南支に遊び、三ケ月餘にして歸朝した。直ちに東京高師附屬外國語學校に入り、支那語を修めること三年に及んだが、遂に業を終へずして廢學した。それは文藝の道に志した爲めで、二十歳の時、短篇小説「簾の月」の未定稿を携へて、當時最も崇拜してゐた廣津柳浪を訪ひ、請うて門生たることを許された。翌三十二年一月に處女作「おぼろ夜」が雜誌「よしあし草」に載つたのを初めとして、漸くその作品が世に出始めた。而もこの頃は一面、清元・踊・尺八等游藝の稽古場通ひに忙しく、且つ落語家朝寢坊むらくの弟子となつて寄席の高座へも出る始末であつた。更に翌年六月には狂言作者福本破笠の請人で、福地櫻痴の門下生として歌舞伎座の作者部屋に入り、殆ど一ケ年を過して後、櫻痴が日出國新聞の主筆となれるに從つて同社に入つた。約一年にして解雇される迄の間に、長篇小説「野心」及び「地獄の花」(別項)を出した。後、曉星學校の夜學に通つて、專心佛蘭西語の學修に努めた。三十六年二十五歳の秋、米國に渡航、初めタコマにある事一年、後古屋商會の一員となつて萬國博覽會開催中のセントルイスに轉じ、ミシガン州カラマヅの大學に入學して、哲學及び佛蘭西語を專攻した。半年にして日本公使館の下級官吏となつて華盛頓に赴き、更に横濱正金銀行の支店員となつて紐育に止まつた。一年半後、四十年に正金銀行リヨン出張所詰を命ぜられ、宿望を達して憧憬の地佛蘭西に入ることを得た。半歳後、銀行を辭して巴里に遊び、翌四十一年夏歸朝、大久保余丁町の邸に入る。時に年三十歳。六年に亙る外遊中の業績たり記念たるものに、「あめりか物語」「ふらんす物語」(各別項)がある。歸朝後は專念創作の筆を執つたので、作品漸く多きを加へ、「歡樂」「すみだ川」「冷笑」(各別項)等の名作が相次いで生れた。四十三年慶應義塾大學文學科の刷新に際し、聘されてその教授となり、機關雜誌「三田文學」を主宰することになつたが、所謂三田派(別項)の文學はこれに據つて興り、當時自然主義文學全盛の時代にあつて、清新にして異色ある一文藝陣を

敷いたのである。彼は小説の創作以外に、隨筆又は江戸藝術の研究にも筆を染めた。隨筆「紅茶の後」「大窪多與里」、東京散策記「日和下駄」、浮世繪その他を論じた「江戸藝術論」等の所産がある。大正二年、父を失ひ、五年に至り健康勝れざるの故を以て教職を退き、同時に「三田文學」の主幹をも辭して、個人雜誌とも云ふべき「文明」「花月」を二年に亙つて次ぎ次ぎに出した。大正七年末、「斷腸亭」たり「十里香館」たる大久保の家を去り、一時假寓の後、大正九年、麻布市兵衛町に洋館を新築して「偏奇館」と名づけ、爾來こゝに居住して興來れば筆を執る自適の生活を送つてゐる。初め某氏の女を娶つたが和せずして去り、尋いで新橋の妓を納れたが、これもまた去つて、今知命を超えて獨棲をつづけてゐる。著作としては前記の外、約十篇の戯曲の創作があり、「平

盛んなる中にあつて、主觀的享樂主義的の優れた作品を投じ、無味單調に墮したわが文壇に清新雅醇な異色ある詩境を拓いた。彼の洗練された官能と享樂的本能は、雜駁皮相な現代の生活を呪うて、これと當面して痛烈な批評となり、目を轉じては江戸文化の憧憬となつた。小説「冷笑」や「偏奇館漫錄」等は、その前者の代表であり、「江戸藝術論」や「散柳窓夕榮」等は、後者の所産である。而して僅に江戸の名殘を留める世界を狹斜の巷に見出しては「新橋夜話」以下の花柳小説を成し、これを風土に求めて「日和下駄」の散策記を著はした。その性向から現代と軌を一にして進むを屑しとせざる彼は、必然的に文壇一般の風潮を超越して、常にひとりの道を歩み續けて獨自の藝術を大成させて來た。なほその文章は、正

川春町【名稱】長生をしてかゝる世相を見度いとの意であるが、また先蹤の書、「無益委記」を響かせてゐる。「見度記」「無益委記」(別項)は、ともに「未來記」のもぢりである。【刊行】天明三年、蔦屋板。【諸本】黄表紙百種(續帝國文庫)・黄表紙名作集・本黒本青本(名著文赤庫)・黄表紙二十五種(日本名著全集)所收。【梗概】(上册)(1)自序。(2)三度目御禮帳

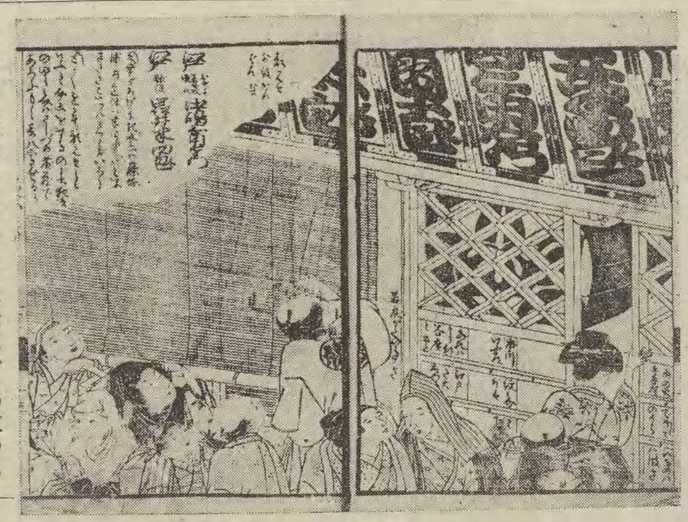
長生見度記

時鳥は山にばかり居たさうなどと語つてゐる。(6)雨の中の角力の觸太鼓、雨天三十日興行といふのが定めである。(中册)(7)座敷幟を飾る。(8)大川の涼み、見番舟といふ大屋形舟を繋いでおいて、舟から舟へ藝者を出してやる。(9)高輪の茶屋、兩側となつて向ふが岡へて、客ども暑がつてゐる。(10)女の石尊參り男より多くなり、大木太刀を擔いでゆく。(11)七夕の短册を書いて賣る。また短册をつけた七夕竹を賣り歩く。(12)八月の月見、吉原は見世を引いて休んでゐる。(下册)(13)深川の萩寺、客人荻の上風を聞いて樂しんでゐる。(14)江戸芭蕉翁三十三所廻りの流行、俳人達御發句といふものに節づけして唱へながら歩く。(15)顔見世前紋看板を掲げる。(16)春興入大小、名開の刷

敷いたのである。彼は小説の創作以外に、隨筆又は江戸藝術の研究にも筆を染めた。隨筆「紅茶の後」「大窪多與里」、東京散策記「日和下駄」、浮世繪その他を論じた「江戸藝術論」等の所産がある。大正二年、父を失ひ、五年に至り健康勝れざるの故を以て教職を退き、同時に「三田文學」の主幹をも辭して、個人雜誌とも云ふべき「文明」「花月」を二年に亙つて次ぎ次ぎに出した。大正七年末、「斷腸亭」たり「十里香館」たる大久保の家を去り、一時假寓の後、大正九年、麻布市兵衞町に洋館を新築して「偏奇館」と名づけ、爾來こゝに居住して興來れば筆を執る自適の生活を送つてゐる。初め某氏の女を娶つたが和せずして去り、尋いで新橋の妓を納れたが、これもまた去つて、今知命を超えて獨棲をつづけてゐる。著作としては前記の外、約十篇の戲曲の創作があり、「平維盛」「秋の別れ」「夜網誰白魚」等を左團次が上演し、また「伯爵」(原題「暴君」)「三柏葉樹頭夜嵐」「旅愁思掛稻」等が帝國劇場で上場された。「三田文學」を主宰した當時、小山內薰等と謀つて「古劇研究會」を興し、誌上に斯道の研究を發表した。大正十年松竹合名社が女優の養成を企つるや、その講師の任に當つた。なほ市川左團次と相好く、七草會の一員としてその有力な助言者となつてゐる。【著作】荷風全集六卷(春陽堂)があり、その他明治大正文學全集(第三十一卷)・現代日本文學全集(第二十二卷)・日本戲曲全集(第四十卷)等に作品が收められてゐる。

【作風】初めゾラの寫實主義を奉じて「地獄の花」等を以て文壇に見えたが、外遊中の「あめりか物語」「ふらんす物語」以來、その作品に著しく抒情味を加へ、歸朝後は自然主義の流行盛んなる中にあつて、主觀的享樂主義的の優れた作品を投じ、無味單調に墮したわが文壇に清新雅醇な異色ある詩境を拓いた。彼の洗練された官能と享樂的本能は、雜駁皮相な現代の生活を呪うて、これと當面して痛烈な批評となり、目を轉じては江戸文化の憧憬となつた。小說「冷笑」や「偏奇館漫錄」等は、その前者の代表であり、「江戸藝術論」や「散柳窓夕榮」等は、後者の所産である。而して僅に江戸の名殘を留める世界を狹斜の巷に見出しては「新橋夜話」以下の花柳小說を成し、これを風土に求めて「日和下駄」の散策記を著はした。その性向から現代と軌を一にして進むを屑しとせざる彼は、必然的に文壇一般の風潮を超越して、常にひとりの道を步み續けて獨自の藝術を大成させて來た。なほその文章は、正に當代の逸品として讃嘆に値する。日本語の情味と漢文の豐麗とラテンの明朗とを兼ね具へ、而も雅俗・硬軟・新古の語彙を自由に驅使して些の苦澁を見せない。更に微妙な音律的な調子と、新鮮な感覺的分子に富んでゐて、快き感銘が人を醉はしめずには措かない。小說以外に「紅茶の後」等の小品隨筆の類が珍重せらるゝ所以は、この文章のすぐれた魅力に由ると云はなければならない。歸朝當時の文章は、やゝ調子づいた響高い多彩的なものだつたが、漸次靄然たる趣を呈し來つて、今は淡々たる筆致の裡に無限の情趣を漂はしてゐる。なほ譯詩を集めた「珊瑚集」(別項)がある。その文字の柔媚と清婉と、また他に求むべからざるものであつて、詩壇に小說家として彼ほど大きな影響を與へた者はない。【永木】

長生見度記 ながいきみたいき 黃表紙 三冊 十五丁十七圖【作者】朋誠堂喜三二【畫工】戀川春町【名稱】長生をしてかゝる世相を見度いとの意であるが、また先蹤の書、「無益委記」を響かせてゐる。「見度記」「無益委記」(別項)は、ともに「未來記」のもぢりである。【刊行】天明三年、蔦屋板。【諸本】黃表紙百種(續帝國文庫)・黃表紙名作集・本黑本青本(名著文赤庫)・黃表紙二十五種(日本名著全集)所收。【梗概】(上册)(1)自序。(2)三度目御禮帳と書いた禮帳を下げてゐる家、正月の三つある年、母親に子供たちがいろいろのねだりを言ふ。母親正月の五つある年まで待てとたしなめてゐる。(3)彼岸の物貰ひ雨に濡れてゐる。彼岸は天氣惡しく、中日は大に荒れることになつてゐる。(4)女奉公人の目見え、その頃は女奉公人の給金が男より高くなつてゐる。(5)時鳥の會に大勢集まつてゐる。昔は



長生見度記(加賀鼈三郎氏藏)

時鳥は山にばかり居たさうなどと語つてゐる。(6)雨の中の角力の觸太鼓、雨天三十日興行といふのが定めである。(中册)(7)座敷幟を飾る。(8)大川の涼み、見番舟といふ大屋形舟を繫いでおいて、舟から舟へ藝者を出してやる。(9)高輪の茶屋、兩側となつて向ふが岡へて、客ども暑がつてゐる。(10)女の石尊參り男より多くなり、大木太刀を擔いでゆく。(11)七夕の短册を書いて賣る。また短册をつけた七夕竹を賣り步く。(12)八月の月見、吉原は見世を引いて休んでゐる。(下册)(13)深川の萩寺、客人萩の上風を聞いて樂しんでゐる。(14)江戸芭蕉翁三十三所廻りの流行、俳人達御發句といふものに節づけして唱へながら步く。(15)顏見世前紋看板を揭げる。(16)春興入大小、名開の刷物などを賣つてゐる。(17)顏見世切落しで陳皮を買ひあるく。(18)師走鏡餠飾り物類を賣つてゐる。二十一日頃から年忘れの女郎買に出かける。

【解說】當時の社會の情景を材料として、その傾向を誇張し、或はその裏面を穿つことによつて、滑稽を恣にすると共に、多少の諷刺を試みたのである。たとへば、時鳥の會、深川の萩寺の如きは、當時の飼鳥の流行、また萩寺の萩見物の流行によつて、その滑稽を解すべく、江戸芭蕉翁三十三所廻りの如きは、江戸に於ける芭蕉翁建立の流行と、八十八所廻りの類の流行を其礎とした滑稽に合はせて、當時の俳人の態度を揶揄したものとして見るべきであらう。作者は縱橫の空想を以て未來の世相の豫想をなし、得意がつたのであるが、今日から見

れば、何の諧謔も見出されないものが多い。世相の變遷と照し合はせると、また別意の興味を將來する作である。安永八年の戀川春町作の「無益委記」の意匠を踏襲したものであるが、五年も後出の書であるだけに、風俗人情の觀察、また諷刺に於ても精細を加へられたことが注意される。前作と共に大に歡迎せられ、更にその翌年の天明四年には、竹杖爲輕の「夫從以來記」（別項）を上梓させるに至つた。この三者を世に黄表紙の「三未來記」と稱してゐる。共に三馬の所謂名作二十三部の中に數へられてゐる。【山口】

永井堂龜友（ながゐだうきいう）　浮世草子作者【本名】不詳【別號】兵作堂・其邑【閲歴】京都の人。南嶺の後をうけた八文字屋本の作者で、その傳は詳かでない。【著書】風流蟲合戰（寶曆十二年）○大和言葉風俗誹人氣質（同十三年）（別項）○當世銀持氣質（明和七年）（別項）○風流茶人氣質（同上）（別項）○風雅講釋孝行娘袖日記（同上）○風流酒吸石龜（同八年）○赤烏帽子都氣質（同九年）（別項）○世間姑氣質（安永二年）（別項）○小兒養育氣質（同上）（別項）○風流行脚噺（同上）○町家繁昌世間旦那氣質（同三年）（別項）○笑談醫者氣質（同上）（別項）○世間仲人氣質（同五年）○立身銀野蔓（同六年）。【作風】其磧以來、平凡に墮した氣質物の後を忠實に傳承した作家で、何等の清新味なく獨創を缺き、ただ先人を摸倣して平板に流れてゐる。一體に筋立に誇張のあとが少く、氣質物の要素たる教訓的言辭の强調せられてゐないところをとる。中で「世間姑氣質」（別項）を佳とすべきか。明和安永の頃は文學の中心が諸般の文化と共に、上方より江戸に東遷しつつあつた過渡時代で、八文字屋としては寶曆四年に其笑・瑞笑合作の「世間長者氣質」（別項）が出たが、同年江戸では、升瓢の「世間御旗本氣質」（別項）が出てゐる。そこに文藝東遷の機運がうかがはれる。この寶曆から明和安永にかけて八文字屋系の氣質物は次々と刊行せられ、量に於ては最盛時をなしてゐる。龜友は多作といふ點から見ても、この頃の代表作家である。【吉田】

長歌（ながうた）　歌謠【名稱】雜藝（ざふげい）（別項）の一種であるが、平安時代の末に、「古今集」の長歌を短歌と云ひ、短歌形式の歌を長歌と云つて、歌學者の間にやかましい論があつた。それでこゝに長歌と云ふのも、その說によつたもので、普通の短歌の事に過ぎない。或は神歌や今樣（各別項）が何れも息を短くつづめて歌つたに對し、この歌の歌ひ振が長く聲を引いた爲めに生じた名で、和歌の方で短歌を長歌と云ふのは、この雜藝の名によつて誤られたものかも知れぬ。古代の大歌に、長埴安扶理・短埴安扶理と云ふ名があるが、この長短の相違は、長歌の名稱と同意かと思はれる（埴安扶理參照）。【出典】「梁塵祕抄」（別項）卷一に出づ。【解說】大概勅撰集に出た和歌を取つたものである。その歌ひ出しに「そよ」と云ふ囃子詞を入れてゐるのが特徵である。

そよ大原や朧の清水世にすまば又も逢ひ見ん面變りすな

これは「袖中抄」に引用した古歌である。二句神歌と形は同じであるが、內容曲節は甚だ異なつてゐる。寧ろ朗詠の和歌に近いもので、或は漢詩文の朗詠に對して、和歌の朗詠とはこの類のものであつたかも知れず、又古代の和歌披講風の曲節であつたかも知れない。兎に角、他の雜藝が多く民衆的氣分の多分にあるに拘らず、この歌のみは最も貴族的な歌謠であつたと思はれる。

長歌（ながうた）「上方歌」を見よ。

長唄（ながうた）「江戸長唄」を見よ。

長哥古今集（ながうたこきんしふ）　歌謠書　一册【刊行】天和二年正月、わしや板。【諸本】稀書複製會複製本がある。日本歌謠集成卷六所收【解說】江戸吉原に行はれた流行長歌二十二篇（その中に端歌が一篇ある）を集めたもので、目錄は次の如くである。

西國道行・美人揃長歌・身のうきわざ道行・はうた長歌次左衞門・淸成寺道行・金澤八景・吉原名寄・貴船・うらみ長歌河內・形身の櫻・命の爭ひ・はやり長歌・たゞのり姫道行・本貴船道行・白拍子善光寺詣・四國落

吉原はやり道行・うた道行・吉原美人揃・今川智略道行・大庭の八郎ためむね・蓮生山谷入・淸玄七年の亡魂・今川花見車。

多くは歌舞伎歌で、また淨瑠璃物もあり、道行・景事・揃の類の歌が大部分である。その歌は「古今役者物語」等の書に見えるものと同一の歌が多く、彼此比較するに都合がよい。全十四丁。序と跋とを除いて、歌詞には每丁表裏に遊女の姿繪が描かれ、舞踊その他の風俗の參考となる。卽ちこれは歌舞伎歌より出でて、吉原などで流行した歌であつて、それには踊の伴つたものもあつたのであらう。その繪は菱川師宣の筆かと云はれる。著者は不明であるが、序文によつて見るに、古鏡が池の近くに住んだ人であらうと云ふ。【價値】この本は甚だ稀覯書に屬し、師宣の筆とすれば、繪畫の方でも浮世繪史の上に甚だ價値を持つてゐるが、歌謠書としても、長歌本の最も古きものとして、また當時の吉原の流行歌を知り、歌舞伎歌との交涉を考へ、或は歌舞伎・淨瑠璃そのものを考察する上にも、逸すべからざる貴重な資料である。中に端歌次左衞門の歌つた端歌の一首が出てゐるのも珍重するに足る。この人は、同じ頃の天下一播磨芝居の看板に、「上がたふし　次左衞門」とあるのと同じ人であらうか（倚古造紙揷・年藝古雅志）。

【備考】跋文によると、同じ著者が、別に端歌を集めて「小歌萬葉集」と云ふ書を撰んでゐるやうであるが、その書の存在は、未だ明かでない。

仲枝（なかえ）　漢學者・國學者【姓名】宮地氏。通稱幷藏（へいざう）【號】水溪【生歿】明和五年に生れ、天保十二年（一二五〇三）歿す。享年七十四。【閲歴】仲枝は宮地春樹（別項）の長子、幼より谷眞潮に學び、少壯更に江戸に出でて諸家に出入し、又塙保己一に從つてその群書類從編纂を輔けた。文政中、事に坐して祿を奪はれ、城北久菓村に屛居したが、後また赦されて高知に還つた。仲枝は博聞を以て聞えたが、なほ武技を嗜み、諸藝に巧みだつたといふ。その門からは鹿持雅澄（別項）が出てゐる。【著作】山內家年代略記（寫本）○藝覽公遺事（寫本）等。【參考】土佐偉人傳　寺石正路【藤田】

中江兆民（なかえてうみん）　思想家・評論家【本

外史」「十八史略」「孟子」等の佛譯を出した。明治七年歸朝、元老院書記官に補せられ、次いで外國語學校長に任ぜれたが、幾くもなく辭して麴町番町に佛學塾を開いた。當時の塾生に小鳥龍太郎・酒井雄三郎・小山久之助等があつた。時恰も自由民權熱の勃興期に當り、西園寺公望・松田正久等と結んで東洋自由新聞を創立し（明治十四年三・四月）、また雜誌「敎理叢談」（同十五年二月、佛蘭塾）を創刊、ルーソーの民約論を譯載し、盛んに佛蘭西流の自由平等の政治論を主張して政府を攻擊した。また十四年、自由黨組織の際にはその創立に參畫した。同二十年、保安條例が發布されて、東京を追放され、十二月大阪に移つた。翌二十一年、同志と共に東雲新聞を

中

創刊、主幸

每夕新聞の主筆となり、次いで國民同盟會成るや、自ら投じて大に奔走したが、紀州遊說中、喉頭癌にかゝり、翌年泉州堺に寓居して病を養ふ。醫より餘命一年半と宣告され、生前の遺稿として「一年有半」の筆を執る。九月歸京、小石川の自邸に入り、「續一年有半」を執筆、十月刊行。十一月病いよ〳〵篤く、翌月長逝した。【著作】ショーペンホウエル道德大原論○維氏美學（別項）○氏約譯解（別項）○理學治革史（フイエー原著）○理學鉤玄（明治十九年）○革命前佛蘭西二世記事　○三醉人經綸問答○平民の目ざまし（別項）○憂世慨言○選擧人の目ざまし　○四民の目ざまし　○一年有半（別項）○續一年有半（同上參照）。【批評】佛蘭西に學んだころは、ルーソーの民主主義的自由主義の政治思想並にオーギュスト・コント派の實證論哲學の感化影響に育つた。秋水の「基督抹殺論」には、その思想の傳統が認められる。（平民の目ざまし參照）【武藤】

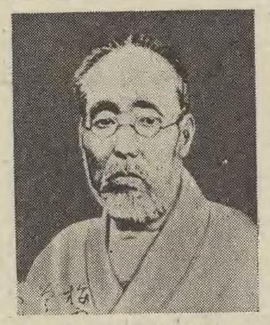
仲雄王（なかをわう）　漢學者【閲歴】未詳。ただ「文華秀麗集」の序によつて、弘仁中、大舍人頭兼信濃守となり、又從五位下行內膳正となつた事が知られる。恐らく弘仁七年より九年迄の間である事が、「文華秀麗集」撰者たる仲雄王以外の人々の官位によつて推察せられる。その他弘仁十三年十月八日、山崎なる河陽館への行幸に從ひ、嵯峨帝の河陽十詠に和した詩や、譚を蒙つて外にゐて逃懷した詩などもある。それ等に據つて閲歴の一斑を僅に想像し得るのみである。或は弘仁十三四年頃歿したのかも知れない。漢學者であり詩人であつて、「文華秀麗集」の序を書いてゐるが、その外には「賦得漢高祖」や「廢肩辭」等がある。【參考】兆民先生　幸德秋水【武藤】

ない。

仲枝（なかえ）　漢學者・國學者　【姓名】宮地氏。通稱荘藏（しょうぞう）【號】水溪【生歿】明和五年に生れ、天保十二年（一二五〇三）歿す。享年七十四。【閲歴】仲枝は宮地春樹（別項）の長子、幼より谷眞潮に學び、少壯更に江戸に出でて諸家に出入し、又塙保己一に從つてその群書類從編纂を輔けた。文政中、事に坐して祿を奪はれ、城北久萬（くまの）村に屏居したが、後また赦されて高知に還つた。仲枝は博聞を以て聞えたが、なほ武技を嗜み、諸藝に巧みだつたといふ。その門からは鹿持雅澄（別項）が出てゐる。【著作】山内家年代略記（寫本）○彝蒐公遺事（寫本）等。

【參考】土佐偉人傳　寺石正路　【藤田】

中江兆民（なかえてうみん）　思想家・評論家【本名】篤介。幼名竹馬【別號】青陵・秋水・南海仙漁・木强生【生歿】弘化四年、高知城下新町に生れ、明治三十四年十二月十五日、東京小石川武島町の自宅に歿す。享年五十五。【閲歴】舊土佐藩士。慶應元年、十九歳で同藩留學生として長崎に赴き、平井義十郎に就いて佛語を學んだ。同三年、外國船に搭じて江戸に出で、村上英俊の塾に入つて佛蘭西學を學んだが、後破門された。明治元年、箕作麟祥の門に入つた。又一時大學南校の助教となつた。翌二年福地源一郎の日新社の塾頭となる。同四年司法省に出仕、佛蘭西留學を命ぜられ、岩倉大使に隨行して渡歐した。巴里に於ては西園寺公望・光妙寺三郎等と交遊した。當時ナポレオン三世の帝政瓦解の後で、巴里コンミユンの動亂にも際會し、民主主義的自由主義思想の深い感化を受けた。佛蘭西留學中は實證論哲學及び史學・文學を學び、また「日本外史」「十八史略」「孟子」等の佛譯を出した。明治七年歸朝、元老院書記官に補せられ、次いで外國語學校長に任ぜれたが、幾くもなく辭して麴町番町に佛學塾を開いた。當時の塾生に小島龍太郎・酒井雄三郎・小山久之助等があつた。時恰も自由民權熱の勃興期に當り、西園寺公望・松田正久等と結んで東洋自由新聞を創立し（明治十四年三・四月）、また雜誌「政理叢談」（同十五年二月、佛學塾）を創刊、ルーソーの民約論を譯載し、盛んに佛蘭西流の自由平等の政治論を主張して政府を攻撃した。また十四年、自由黨組織の際にはその創立に參畫した。同二十年、保安條例が發布されて、東京を追放され、十二月大阪に移つた。翌二十一年、



中江兆民

同志と共に東雲新聞を創刊、主宰した。又壯士芝居を創案して、その顧問となつた。二十二年、憲法發布と共に保安條例が解かれ、再び東京に移り、後藤象二郎の「政論」の主筆となつたが、後藤の入閣により解體し、同志と共に自由黨を再興し、自由新聞・立憲自由新聞・民權新聞等を主宰して專ら民黨の糾合に努めた。二十三年、國會開設に際し、大阪水平社に擁せられて代議士に當選したが、間もなく辭職した。同二十六年頃より實業界に入り、諸種の會社に關係したが何れも失敗した。三十一年、伊藤内閣の自由黨と提携するに及び、國民黨を組織し、雜誌「百零一」を發行して在野黨聯合、藩閥討滅を主唱したが、資金に乏しく間もなく潰散した。三十三年秋、毎夕新聞の主筆となり、次いで國民同盟會成るや、自ら投じて大に奔走したが、紀州遊説中、喉頭癌にかゝり、翌年泉州堺に寓居して病を養ふ。醫より餘命一年半と宣告され、生前の遺稿として「一年有半」の筆を執る。九月歸京、小石川の自邸に入り、「續一年有半」を執筆、十月刊行。十一月病いよ〳〵篤く、翌月長逝した。【著作】ショーペンホウエル道德大原論○維氏美學（別項）○民約譯解（別項）○理學沿革史（フイエー原著）○理學鈎玄（明治十九年）○革命前佛蘭西二世記事　○三酔人經綸問答○平民の目ざまし（別項）○憂世慨言○選擧人の目ざまし　○四民の目ざまし　○一年有半（別項）○續一年有半（同上參照）。

【批評】佛蘭西に學んだころは、ルーソーの民主主義的自由主義の政治思想並にオーギュスト・コント派の實證論哲學の感化影響に育つたが、後年に及んでは獨自の唯物論の哲學體系を建てるに努め、自らナカエニズムと名づけた。兆民の自由民權論の指導理論を見るには「平民の目ざまし」と「三酔人經濟問答」を讀まねばならぬ。この唯物論の思想は哲學といふよりも一種獨特の科學的唯物論と云はるべきである。自然科學と社會科學の全體系を總括して、獨特の科學的唯物論の立場から組織しようと努めたらしいが、方法論的にも不十分な點が多く、反對の立場からの異論をも挿む餘地が少くないが、その方法の根本態度には、十分の卓見を含んでゐる。而も唯心論の宗教思想やカント派の批判哲學は勿論、在來一切の觀念論的及び實證論的の哲學思想をすべて否定して、純粹の科學的唯物論を建てようとした意圖は、注目すべきである。「續一年有半」は彼の思想の歸結を語つてゐるが、秋水の「基督抹殺論」には、その思想の傳統が認められる。（平民の目ざまし參照）

【參考】兆民先生　幸德秋水　【武藤】

仲雄王（なかをわう）　漢學者　【閲歴】未詳。ただ「文華秀麗集」の序によつて、弘仁中、大舍人頭兼信濃守となり、又從五位下行内膳正となつた事が知られる。恐らく弘仁七年より九年迄の間である事が、「文華秀麗集」撰者たる仲雄王以外の人々の官位によつて推察せられる。その他弘仁十三年十月八日、山崎なる河陽館への行幸に從ひ、嵯峨帝の河陽十詠に和した詩や、譴を蒙つて外にゐて述懐した詩などもある。それ等に據つて閲歴の一斑を僅に想像し得るのみである。或は弘仁十三四年頃歿したのかも知れない。漢學者であり詩人であつて、「文華秀麗集」の序を書いてゐるが、その外には「賦得漢高祖」や「燒肩辭」等がある。燒肩は豚の肩の肉で樊噲の故事、何れも漢高祖の鴻門の會の事であるが、漢書によつて作つたものである。藴蓄あり鋭敏な碩學であつたと思はれる。　【山岸】

【參考】凌雲集○文華秀麗集○經國集（卷十四）

中書（なかがき）連歌　【解説】中古に於て私の連歌會では、發句以下附句全部を書き取らずに、各自前句に附けた自分の句ばかりを書き取つて持ち歸る習はしで、この各自の擧書を中書と稱した。晴の會ではかゝる事はしなかつたと「連歌辨義」に見えてゐる。　【編井】

長崎派（ながさきは）繪畫　【名稱】江戸時代に於ける日本畫の一派。九州長崎の地を中心として榮えたるを以て、この稱呼を生じた。【解説】長崎は當代の外國文化藝術流入の門戸であつて、こゝを中心に外國藝術の感化多き畫人が輩出したが、普通長崎派と呼ばるゝ中に

は、前後の二時期を劃し得る。〔前期長崎派〕明末の亂を避けて來舶した支那の黃檗僧等の一團を先驅として榮えるに至つたもので、就中、正保年間この地に來つた黃檗僧逸然は、實にこの派の祖と言はれる。逸然の門人には當時長崎の唐繪目利の役を勤めた渡邊秀石及び鏤金術で一家を成した河村若芝の二人があり、渡邊秀石門には、上杉桂翁・廣渡一湖等の外、弟に秀岳、子に秀朴があり、その後元周・秀溪・秀彩等、一家相次いで秀石の畫系を繼承した。河村若芝〈號道光〉の流は、釋一山・河村若元・山本若麟・蔦塚若鳳等相繼いでこれを傳へた。又秀石門下には小原慶山があり、一格を成してその子克紹〈號巴山〉以下相傳へ、慶山の弟子石崎元德〈號昌山〉、又その弟子篠島元琪・安田元系もそれ〴〵この地に畫名を馳せた。これ等の前期長崎派は要するに明朝北畫の一樣式を傳へたもので、長崎の地には、以後江戸時代を通じて長く繼承されてゐたが、日本畫壇にとつては、既に足利以來圓熟し來つた漢畫が榮えてゐた當時であつて、別に大局にはさしたる感化を及ぼさなかつた。ただ長崎には和蘭等から移入された西洋寫生畫の感化が一般に行き亙つてゐたので、その傾向を肯像畫等に發揮した畫人としては、喜多元規が最も著聞してゐるが、かゝる西洋寫生畫の一派は南蠻風俗畫にも興味深き發展を見、所謂長崎繪の流行ともなつたが、これは又やがて亞歐堂田善や司馬江漢の洋風畫とも聯關するものである。〔後期長崎派〕享保十六年十二月より同十八年九月まで、この地に滯在した清朝の畫家沈南蘋の畫風を祖述するものである。南蘋は宋代以後榮えた院體花鳥畫の流に棹さす所謂鈎花點葉體の華麗な寫生畫を得意とした人である。南蘋門人としては長崎の人熊代繡江〈熊斐と稱す〉あり、その子繡山・繡濟及びその門人江越繡浦・宣村蘆江・草場佩川等長崎の地に在つてこの一派を繼いだ。更に南蘋の流を江戸に傳へた畫人としては黑川龜玉を嚆矢とし、これに次いでは熊斐の門人宋紫石が著名である。その子に紫山、その孫に紫岡、その門人に董九如・諸葛監等があり、皆紫石の流を承け繼いだが、又江戸の地には熊斐門の建部凌岱・林松林、南蘋に私淑せる鏑木梅溪、その子雲潭等あり、これ等の畫人中には長崎人もあるが、皆江戸で畫名を馳せた人々である。泝瀫の地に於ける南蘋派としては長崎人の黃檗僧鶴亭を以て初めとするが、これに相次いで三熊花顚・勝野范古等あり、皆花鳥寫生畫に於て著名である。如上の長崎・江戸・京都以外にも、この系統に屬する畫人が各地に散在してこの派を弘めたが、その中では因幡の土方稻嶺〈紫石門〉、松前の大原呑響〈南蘋に私淑〉、肥前鹿島の天龍道人〈熊斐門〉、羽後横手の佐々木草因〈松林門〉等が著しい。素よりこれ等の諸作家は、南蘋派として描寫樣式上共通する點多く、又前期長崎派とも氣脈を通じてゐるが、その間自ら夫々の特色を異にする點も尠くない。殊に當代南宗文人畫隆盛の機運に伴うて、その同じく支那新來の清新味多きに併せて、又同じく長崎を誕生地としてゐる關係もあり、旁々北畫系統とも見るべき南蘋の寫生畫は、我が國に於ては却つて南宗文人畫の中に攝取せられ、漸次この派の一要素となり行く傾向が顯著であつた。〔田中(一)〕

仲實　なかざね　歌人【姓】藤原【生歿】生年未詳。元永元年〈一一一八〉歿す。享年六十三〈日本歌學史〉。【閱歷】承曆二年の頃、丹後守（内裏歌合）、康和二年の頃、備中守〈仲實朝臣女子根合歌〉、康和年中越前守兼中宮權大進に任じ、正四位下に敍した〈堀河院太郎百首〉。長治三年藏人頭から參議に陞つた重資が未だ頭であつた頃、殿上の人々をあまた具して大井川に逍遙した時、彼も俊頼・隆源・敦隆等と共に隨行したが〈散木弃歌集〉、官は中宮亮とある。その後天仁三年の頃も中宮亮であつた〈山家五番歌合〉。その後永久四年の頃は無官にて前越前守と稱した〈六條宰相家歌合〉。「散木弃歌集」の外、「基俊集」「國基集」にもその名が見え、俊頼を初め基俊・國基・隆源等と同輩としての交りのあつた事がわかる。そして俊頼と特に親しかつたもののやうに思はれる。

藤原宇合……┬能成―仲實―郎忠
　　└公義〈天喜二年卒〉―國親―實賢

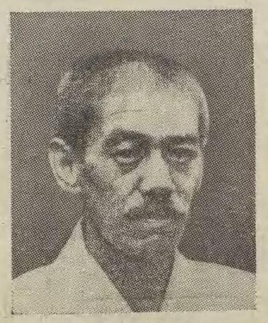
【著作】綺語抄三卷〈別項〉○類聚抄五十卷〈散佚〉○古今和歌集目錄二卷〈別項〉○歌は金葉集以下勅撰集に入るもの凡そ二十二首、堀河院御時百首、永久四年百首、前記の歌合歌集等に見えるもの等がある。

【附記】「勅撰作者部類」に、歿年を天仁元年とあるのは、「尊卑分脈」卷三〈四十三頁〉に貞嗣流永業の子に仲實があつて、嘉承三年〈天仁元年〉歿とあるのと一致するが別人であらう。また「日本文學者年表」に、保安二年薨、正二位權大納言とあるのは公季流實季の子にて、地位身分が甚だしく相違する。「綺語抄」の著者は俊頼等と同輩にて、備中守・中宮亮・越前守等に任じた人で、「尊卑分脈」に歌人とある仲實を指すのであらう。

【參考】日本歌學史佐佐木信綱○國文學研究史〈西下〉野村八良

仲實綺語抄　なかざねきごしょう　「綺語抄」を見よ。

中澤臨川　なかざわりんせん　評論家【本名】重雄【生歿】明治十一年十月、信州上伊那郡南向村に生れ、大正九年八月十日歿。享年四十三。【閱歷】生家は有名な「養命酒」の釀造本家鹽澤家である。明治二十五年、松本中學校に入學、文藝愛好の念は當時から非常に深く、吉江喬松等と交つた。又數學が得意で夙に電氣科學が志望であつた。同三十年松本中學卒業、第二高等學校に入學。この頃、長野縣南安曇郡梓村の中澤家の養子となつた。同三十四年東京帝大工科大學に入學、電氣學を專攻。在學中、窪田空穗・小山内薰等と雜誌「山比古」を發行、又島崎藤村・國木田獨歩・田山花袋・柳田國男・蒲原有明等と交遊した。同三十七年大學卒業、東京電氣鐵道會社技師となり、後、京濱電車技師長となつた。晩年、松本市外に工場を建設し、中澤電氣株式會社を經營した。又一時雜誌「文藝復興」を出したこともある。【著作】鬘華集〈感想・文藝美術の評論〉○舊き文明より新しき文明へ○破壞と建設〈以上論文集〉○トルストイ○ベルグソン〈以上評傳〉○露西亞印象記〈ブランデス原著〉○近代思想十六講〈生田長江共著〉○新社會の基礎○嵐の前〈以上評論集〉○臨川全集〈大正十二年春陽堂、第二卷まで以下未完〉。外にロシヤ文學に關する研究評論、又ニイチェ、ロマン・ロオラン、ベルグソン、タゴール、ダ・ヴンチ等に關する研究紹介がある。


中澤臨川

【批評】自然科學殊に理論物理學に造詣が深

かつた彼は、その認識と世界觀に立脚した純粹の科學的態度をもつて、文藝の批評・研究等にも臨んでゐた。單に文藝のみならず廣く最近思潮、殊にトルストイ、ニイチェ、ベルグソン、ロマン・ロオラン等の思想哲學等には深い興味と理解をもつて研究した。文藝時評の如きも、當時の文藝界を動かすものがあり、「新ハムレットと新ドン・キホーテ」や、「思想か實行か」などの如きは、その代表的な論評であつた。後年、文明批評・社會批評に筆を染めてからは、當時の世界大戰前後の思想的不安動搖の中に、新しき理想と光明とを發見すべく努めた。吉江喬松氏は「或は死か再生かを說き、中年期の心理狀態の變化に對する叡智の目醒めを說き、時には、冷たい夕の霧の中に浮ぶバザロフの墓を、やがて大地の愛を、そしては

後、加藤千浪に就いて歌道を磨き、兼ねて書道にも巧みで、上下の信望厚く、三十年の長きに亙つて後生を敎へ、歌道の振興に力を盡した。樋口一葉〈別項〉の如きも、その敎を受けた一人である。後日本女子大學に聘せられ、又御歌所に奉職すべく內意があつたが、蒲柳の質の故を以て遂に受けなかつた。肋膜肺炎で歿し、特旨を以て從七位に叙せられた。歌集を「萩のしづく」といふ。歌は平明、特に稱すべきものではない。〔相原〕

中洲雀　なかずすずめ　洒落本　一册【作者】道樂散人無玉とある。【名義】水中の洲に住む雀切。中洲の岡場所を描いたので附けた名。また吉原雀に對した名である。【刊行】序に丁酉〈安永六年〉とある。【諸本】江戸時代文藝資料第一編・洒落本代表作集〈近代日本文學大系所收〉。【題材】自序に「近き比を以て中洲

を描いた遊里案內風のものがある。本書はそれに屬し、單に近年賑かになり出した中洲の狀況を狂文で綴つたもので、筋も何もない。風來山人の最も得意とした狂文、「放屁論」「天狗髑髏鑒定緣起」〈各別項〉等、「風來六々部集」の狂文に共通せるもので、篇中に見える流行物は絶好の風俗資料であらう。〔山崎〕

中洲之華美　なかずのはなび　洒落本　一册【作者】內新好【畫工】無署名【名稱】中洲であげる納涼の煙火と繁榮とをもぢつたのである。內題には單に「假里擇」とあり、序文には「假里擇中洲の華美」とある。【刊行】天明九年〈寬政元年〉【諸本】德川文藝類聚第五所收。【題材】天明七年十一月九日吉原角町から出火、廓中全燒し、深川・大橋側と共にその中洲に假宅が出來た。その繁昌を描かんとしたのだ。中洲は安永元年埋立、四年に納涼

たのだと云ふ。一同禮拜する中に、芙蓉は特に一心に祈願をこむる樣子であつたが、忽ち亡靈の姿と變じ、妾はこの三つ叉で殺された高尾の靈である、今如來の利益を蒙つて佛果を得たと云つて昇天し、如來も紫雲に乘つて飛び去つた。

【解說】洒落本に背景に因みある神佛を現はすのは、本書以前既に田螺金魚作「一事千金」〈安永七年〉、無氣しつち作「女鬼產」〈安永八年〉がある。共に兩國回向院に善光寺の開帳があつたのに因んでゐる。本書は、これ等の影響を受けたものらしい。淺草並木の假宅が中洲に轉じた事情を如來に託して說明したのである。單に中洲の岡場所を描いた洒落本には、「中洲雀」〈安永六年〉、「大抵御覽」〈安永八年〉〈各別項〉があるが、特にその地の假宅を描いたのは本書と「女郎買之糠味噌汁」〈天明八年〉とであ

かつた彼は、その認識と世界觀に立脚した純粹の科學的態度をもつて、文藝の批評・研究等にも臨んでゐた。單に文藝のみならず廣く最近思潮、殊にトルストイ、ニイチェ、ベルグソン、ロマン・ロオラン等の思想哲學等には深い興味と理解をもつて研究した。文藝時評の如きも、當時の文藝界を動かすものがあり、「新ハムレットと新ドン・キホーテ」や、「思想か實行か」などの如きは、その代表的な論評であつた。後年、文明批評・社會批評に筆を染めてからは、當時の世界大戰前後の思想的不安動搖の中に、新しき理想と光明とを發見すべく努めた。吉江喬松氏は「或は死か再生かを說き、中年期の心理狀態の變化に對する叡智の目醒めを說き、時には、冷たい夕の霧の中に浮ぶバザロフの墓を、やがて大地の愛を、そしてはつきりとつかみ得た一層確かなる自己の姿によつて明るい悅びを、プラグマチストとしての自己の態度を、言ひ換へれば、自分の理想の徐々に、極めて徐々に實現せられるかすかなる悅びを說いてゐる」と述べ、又「その純情は小兒の如く、その熱誠——天才のみの持ち得る眞の熱誠——は、ニイチェその人の如くであつた」と述べてゐる。〔武藤〕

中島歌子（なかじまうたこ）　歌人【幼名】とせ【生歿】天保十二年江戸日本橋北鞘町に生れ、明治三十六年一月三十日歿す。享年六十二。【閲歷】中島又左衞門の次女である。文久元年十八歳で、水戸藩士にして天狗黨の一人なる林忠右衞門に嫁したが、忠右衞門は武田耕雲齋・藤田小四郎等と共に玉事に盡し、遂に下野國部田野原に戰死し、歌子もために捕へられて獄に投ぜられた。在獄數月、悠々自適して少しも憂ふる色がなかつたといふ。放免の後、加藤千浪に就いて歌道を磨き、兼ねて書道にも巧みで、上下の信望厚く、三十年の長きに亙つて後生を敎へ、歌道の振興に力を盡した。樋口一葉（別項）の如きも、その敎を受けた一人である。後日本女子大學に聘せられ、又御歌所に奉職すべく內意があつたが、蒲柳の質の故を以て遂に受けなかつた。肋膜肺炎で歿し、特旨を以て從七位に叙せられた。歌集を「萩のしづく」といふ。歌は平明、特に稱すべきものではない。〔相原〕

中洲雀（なかずすずめ）　洒落本　一册【作者】道樂散人無玉とある。【名義】水中の洲に住む雀切。中洲の岡場所を描いたので附けた名。また吉原雀に對した名である。【刊行】序に丁酉（安永六年）とある。【諸本】江戸時代文藝資料第一編・洒落本代表作集（近代日本文學大系）所收。【題材】自序に「近き比（ころ）を以て中洲埋めて納涼所となりしより」とある。中洲の埋め立てられたのは安永元年で、これを大川中洲新地と稱した（日本橋區中洲町）。その中洲に岡場所の出來たのを描いたもので、當時の流行物を列擧したのは、前年出た「風俗問答」などに暗示を得たのであらう。【梗概】因果地藏の作者への諡しの言葉の中に、「何とかして金を取る考案をしたらよからうが、皆趣向は古い、當世はとかく人の思ひつく事でなければ流行せぬ」といはせて、それから當時流行の物を列記し、江戸四季の行樂も、春は上野・飛鳥・道灌山・日暮し、夏は何處々々とあげ、さて今流行する場所は、月にも納涼にも中洲であると、それから中洲の近況、遊里の風俗、料理屋、食物の品目、見世物、大道藝人等を詳細に述べてある。【構想】洒落本の一種に、狂文體で遊里の狀況を描いた遊里案內風のものがある。本書はそれに屬し、單に近年賑かになり出した中洲の狀況を狂文で綴つたもので、筋も何もない。風來山人の最も得意とした狂文、「放屁論」「天狗髑髏鑒定緣起」（各別項）等、「風來六々部集」の狂文に共通せるもので、篇中に見える流行物は絕好の風俗資料であらう。〔山崎〕

中洲之華美（なかずのはなび）　洒落本　一册【作者】內新好【畫工】無署名【名稱】中洲であげる納涼の煙火と繁榮とをもぢつたのである。內題には單に「假里擇（かり）」とあり、序文には「假里擇中洲の華美」とある。【刊行】天明九年（寬政元年）【諸本】德川文藝類聚第五所收。【題材】天明七年十一月九日吉原角町から出火、廓中全燒し、深川・大橋側と共に此の中洲に假宅が出來た。その繁昌を描かんとしたのだ。中洲は安永元年埋立、四年に納涼地・岡場所として繁昌を極め、寬政元年取拂はれるまで續いた。書中朝日如來の現はるゝのは、吉原京町二丁目丸屋甚右衞門方の持佛。高尾解脫は、中洲は三つ叉と稱し、仙臺侯に高尾が斬られたと云ふ傳說のある所から案出したもの。【梗概】先づ中洲の繁昌が假宅のため、愈々繁昌せる光景を記し、並木の假宅が中洲に移轉した事から、大橋・永代の二通人が大文字屋に入る樣子を描いた。兩人盛んに假宅へ移轉して來た妓樓の通をならべる。一家のお職芙蓉（すがた）に如來と云ふ客が來た。假宅通で竝んだ妓樓を順に云つたりする。火鉢にくべた玉子が如來の額に飛び出して當ると、通人姿が變じて佛像となり、我は朝日如來である、並木町の釋迦如來に依賴され、そこの假宅を當地に移すやう盡力し、あらゆる遊女濟度のために來たのだと云ふ。一同禮拜する中に、芙蓉は特に一心に祈願をこむる樣子であつたが、忽ち亡靈の姿と變じ、妾はこの三つ叉で殺された高尾の靈である、今如來の利益を蒙つて佛果を得たと云つて昇天し、如來も紫雲に乘つて飛び去つた。【解說】洒落本に背景に因みある神佛を現はすのは、本書以前既に田螺金魚作「一事千金」（安永七年）、無氣しつち作「女鬼產（おにうぶ）」（安永八年）がある。共に兩國回向院に善光寺の開帳があつたのに因んでゐる。本書は、これ等の影響を受けたものらしい。淺草並木の假宅が中洲に轉じた事情を如來に託して說明したのである。單に中洲の岡場所を描いた洒落本には、「中洲雀」（安永六年）、「大抵御覽」（安永八年）（各別項）があるが、特にその地の假宅を描いたのは本書と「女郎買之糠味噌汁」（天明八年）とである。この假宅を追想的に書いたものに、京傳作「傾城買四十八手」（寬政元年）（別項）、「志羅川夜船」（同年）がある。〔山崎〕

仲藏狂亂（なかぞうきやうらん）　所作事　狂亂物【名稱】初代中村仲藏が演じた狂亂のため。【本名題】「狂亂雲井袖」【初演】天明四年十一月十三日初日、江戸桐座「重重人重小町櫻（じゅうにひとえこまちざくら）」第一番目五立目【作詞】初代瀨川如皐【曲節】長唄【作曲】初代杵屋正次郎【立唄】初代松永忠五郎【振附】二代西川扇藏【傳來】曲・振とも傳存。【諸本】日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）・長唄全集（日本音曲全集）等所收。【題材】「定家葛」を骨子としたもの。【內容】小野良實（初代中村仲藏）は息女小町姬が王子に無態の入內を强ひられた爲め、密かに小町姬を落したが、行方が知れなくなつてゐたので、上使としてその詮議に來た文

が一般に行き亙つてゐたので、その傾向を肯像畫等に發揮した畫人としては、喜多元規が最も著聞してゐるが、かゝる西洋寫生畫の一派は南蠻風俗畫にも興味深き發展を見、所謂長崎繪の流行ともなつたが、これは又やがて亞歐堂田善や司馬江漢の洋風畫とも聯關するものである。〔後期長崎派〕享保十六年十二月より同十八年九月まで、この地に滯在した清朝の畫家沈南蘋の畫風を祖述するものである。南蘋は宋代以後榮えた院體花鳥畫の流に棹さす所謂鉤花點葉體の華麗な寫生畫を得意とするが、その間自ら夫々の特色を異にする點も尠くない。殊に當代南宗文人畫隆盛の機運に伴うて、その同じく支那新來の清新味多きに併せて、又同じく長崎を誕生地としてゐる關係もあり、旁々北畫系統とも見るべき南蘋の寫生畫は、我が國に於ては却つて南宗文人畫の中に攝取せられ、漸次この派の一要素となり行く傾向が顯著であつた。〔田中（一）〕

仲實（なかざね）　歌人【姓】藤原【生歿】生年未詳。元永元年（一七七八）歿す。享年六十三（日本歌學史）。【閲歷】承曆二年の頃、丹後守永業の子に仲實があつて、嘉承三年（天仁元年）とあるのと一致するが別人であらう。また「日本文學者年表」に、保安二年薨、正二位權大納言とあるのは公季流實季の子にて、地位身分が甚だしく相違する。「綺語抄」の著者は俊頼等と同輩にて、備中守・中宮亮・越前守等に任じた人で、「尊卑分脈」に歌人とある仲實を指すのであらう。【參考】日本歌學史佐佐木信綱○國文學研究史　野村八良

仲實綺語抄（なかざねきごしやう）　「綺語抄」を見よ。　〔西下〕

ともある。【著作】藝術集（感想・文藝美術の評論）○舊き文明より新しき文明へ　○破壞と建設（以上論文集）○トルストイ　○ベルグソン（以上評傳）○露西亞印象記（ブランデス原著）○近代思想十六講（生田長江共著）○新社會の基礎○嵐の前（以上評論集）○臨川全集（大正十二年春陽堂、第二卷まで以下未完）。外にロシヤ文學に關する研究評論、又ニイチェ、ロマン・ロオラン、ベルグソン、タゴール、ダ・ヴンチ等に關する研究紹介がある。【批評】自然科學殊に理論物理學に造詣が深

屋秋津（初代尾上松助）に問ひ糺された窮餘の一策に、俄かに狂氣を粧うて狂ひ廻る。續狂言の一幕中に挾まれた短い舞踊が、現行の如く獨立的舞踊になつたもので、狂亂物としては贋狂亂の形式である。【價値】江戸の顏見世狂言には長い一幕を緩和するために、折々半途で短い舞踊が挿入されたが、それ等の好適例として見るべく、また曲・振ともに澁く深い滋味がある。「關の扉」（別項）と同一狂言中に出來たものである。

【參考】役者年始帖〇繪本番附〇評釋名曲選　高野辰之（名著文庫一九）　【秋葉】

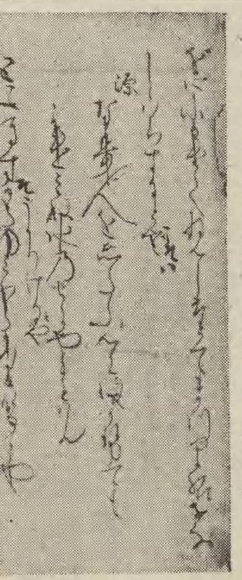
長田王（ながたのおほきみ）　歌人　【本名】「長田」は普通ナガタと稱してゐるが、細井本「萬葉集」、溫故堂本「萬葉集」ではヲサタとよんである。【生歿】生年は不明。天平九年（一三九七）六月歿（續日本紀）。「續日本紀」天平十二年冬十月の條に、「從四位下長田王授二從四位上一」とあるのは、同名異人であらう。【家系】不明。一般には長皇子（天武帝と大江皇女との第一の皇子。弓削皇子の兄弟）の御子と考へられてゐる。が、これは岸本由豆流の「萬葉集攷證」に、第一卷山邊御井ノ歌の解釋中に言つてゐる如く、果して信ずべきか否か疑はしい。【閲歷】「續日本紀」の元明帝の和銅四年四月の條に「從五位上長田王授二正五位下一」とあるのが初見である。次は「萬葉集」卷一に、「和銅五年壬子夏四月、遣二長田王于伊勢齋宮一時、山邊御井作」歌。山の邊の御井を見がてり云云」とあるので、この年何等かの官命を帶びて伊勢へつかはされたものと見える。それ以後、元明帝の和銅八年四月正五位上を、元正帝の靈龜二年正月從四位下を授けられ、同十月近江守となつた。聖武帝の神龜元年二月に從四位上、天平六年三月に正四位下、同年九月衞門督となり、四年十月攝津大夫となり、天平九年薨去された。「萬葉集」卷三の作品によれば、二十六年の短生涯の間、一度筑紫へ遣はされて今日の熊本縣の南部葦北郡の邊まで赴かれた事が知られる。【作品】すべて「萬葉集」に出づ。卷一の最後に近く伊勢の山邊御井の作がある。前述の題詞に歌數を記さないから、題詞の次に續け載せてある三首を王の作とすべきやうであるが、内容が御井に於ての作と思はれないから、既に左註の文に於て王の作であるまいと疑つてゐる。故に第二第三首は今除いておく。次に卷三に、筑紫に遣はされて肥後の水鳥で作る歌が二首、又同所で作る歌が一首。確實な作は總計四首である。皆短歌で旅の歌である。【作風】「萬葉集」の他の旅の歌のやうに、故郷や家人の懷しさを歌はず、また景色の寫生をもやつてゐない。言はば自己の行動を寫してゐる。類のない旅の歌である。「山の邊のみ井を見がてり神風の伊勢處女（をとめ）ども逢ひ見つるかも」（卷一）、「葦北の野坂の浦ゆ船出して水鳥に行かむ波立つなゆめ」（卷三）、皆同類の作風である。旅の歌としては、最も素朴な原始的な種類のもので、天平の時代にかくの如き作家の有ることは珍らしい。尤も「聞きし如（ごと）貴く奇（くす）しくも神さび居（を）るか此れの水鳥」の一首だけは、己の行動でなく島の樣を寫してゐる。然るにこれとても、他の作家の旅の歌のやうな純粹な叙景、生き生きした自然の活寫の如きは見られない。若しこの歌を叙景歌とすれば、叙景歌のうちでの最も素朴な類の作と言ふべきである。要するに、長田王の作風は、「萬葉集」の中期から末期へかけての作家中で、最も古朴な歌風を代表するものと言ひ得る。

長田秀雄（ながたひでを）　【森本】　戲曲家・小說家　【閲歷】明治十八年五月十三日、東京神田區神保町に生れた。祖父は熊本縣菊池神社の社司で歌人として聞えてゐた。父の名は足穗、開業醫であつた。富士見小學校を經て獨逸協會中學校に學んだ。年少の頃から文藝に志し、後繼者たらしめようとする父の希望に反いた。明治四十二年、自由劇場（別項）の創立に際し、木下杢太郎・吉井勇等の盟友と共に、新劇運動に投じた。處女作「歡樂の鬼」は、同四十四年六月、自由劇場によつて有樂座に上演された。この作は、その作家的地位を定めたものである。爾來劇作に耽り、大正九年以來市村座に入り、演劇の實際方面に携はつてゐたが、昭和三年同座を退き、專ら創作の生活に入つた。なほ劇作生活に入る以前に、詩友木下杢太郎・北原白秋と共に、「明星」（別項）に詩を發表し、「スバル」「屋上庭園」（各別項）の頃にまで及んだ。而してその詩は冷艷沈痛の響を成した。怪奇を好み、思索的傾向が多分にあつた。主要作は「阿蘇山の賦」「帝國劇場」「水仙」「紅娘（ホンニャン）」「鷲々（インイン）」等である。長田幹彦はその弟である。【著作】處女作以來「死骸の哄笑」（大正三年）「飢渇」（別項）「大佛開眼」（別項）「先夫の子」（大正十年）「石山開城記」（大正十二年）等の外にも劇作多く、また創作小說並に新聞小說の執筆もある。現代戲曲全集第十卷（國民圖書株式會社）・脚本叢書（新潮社）・日本戲曲全集現代篇第四十一卷（春陽堂）に代表作が收められてゐる。【作風】「歡樂の鬼」は、純然たるイプセン系統の寫實主義的近代劇である。以來彼の作劇術は近代劇正系のリアリズムに終始してゐる。彼が自身書いてゐる所によつても、イプセンの社會劇の影響感化に育つた以外、チエホンに傾倒した時代もあつたといふ。併しその後彼自身の道を發見し、且つ現代劇以外に歷史劇乃至は文化史劇の分野にも新しい地步を進め、「大佛開眼」「石山開城記」等の大作を發表した。彼の作風には自然主義系統の陰鬱な運命觀と、チエホフに一脈相通ずる情趣乃至は感傷とが特色づけられてゐる。　【北原・武藤】

長田幹彦（ながたみきひこ）　小說家　【閲歷】明治二十三年三月、東京市麹町區九段中坂に生れた。長田秀雄の弟である。麹町富士見小學校・東京高師附屬中學校を經て、早稻田大學英文科に入學、專ら英・佛・露の文學を學んだ。明治四十二年頃から、學半ばにして漂泊生活に入り、北海道に遊んでは、或る時は鐵工夫夫の群に入り、或る時は炭坑の木賃宿に投じ、終には旅役者の一團に投ずることになつた。併しその經驗は空しからず、四十四年の暮、東京に戻り、かの旅役者の生活を題材とした短篇「澪（みを）」を「スバル」に揭載した（明治四十五年）。この作に依つて、彼は岩野泡鳴・正宗白鳥等から推擧され、一般文壇からも認められて、作家的生活の第一步を踏み出すことが出來た。その年の四月に、當時文壇の檜舞臺となつてゐた「中央公論」に、短篇「零落」を發表するに至り、一躍人氣作家となり、爾來十七年間雜誌に新聞に多くの作品を揭げ、その著書百卷近くに及んでゐる。一時は、自然派作家の衰頽の後を受けて、谷崎潤一郎と共に人氣を背負つてゐたが、中途から通俗小說に赴き、文壇の中心的勢力から離れるに至つた。

【作品・作風】出世作「澪」「零落」は、ともに作者が北海道を流浪した當時の經驗に題材を得たもので、「澪」は丁度港の澪のやうに、所定

めずふは〳〵と浮き沈んで流れ行く旅役者の一團の中で、田之助といはれる美貌の若者が、小樽の運送問屋の娘に思はれ、且つ誘惑されて東京へ逃げようとする途中に摑まつて、また元の一座に落ち着くやうになつたが、一體かういふ旅役者の末はどうなるかといつた儚さを、流暢に感傷的に描き出した作である。「零落」も亦前作と同じやうに、種々な旅役者の境涯を描いて、讀者に「詩のやうな美しい廢滅の句」を傳へようとしたものである。これ等の出世作を初め、短篇「昇昇の話」（大正二年）、「鰊ころし」（同三年）等には、儚なき者、捨てられ者、日陰者等、人生の消極的方面に對する作者の人間的同感が强く表はれてゐて、讀者に深い感銘を與へるが、彼の作風は次第に享樂的・頽廢的となり、主として鴨川情緒とか、



長親　親範　（保）　蹟

卑分脈」「扶桑拾葉集系圖」等によつて系譜を示して置く。長賢は權中納言となり、元要は

師信―師賢―家賢―長賢―元要
　　　　　　　　　　―長親

明に入り、法を求めた（新葉和歌集）。【學統】祖父・父、共に「新葉集」の作者で、長親も家に於て歌學の修行を積んだ。且つ宗良親王の指導に與るところも多かつた。【閲歷】長親の生年は明確でないが、應永二十一年、六十餘歲であつたと云ふ自記その他から考證して、正平ぞ」と云ふ當時の詠出には、哀痛の情が溢れ出てゐる。而も彼を慰めた唯一のものは文學への一路であつた。折しも南風競はず、これまで各地に轉戰し給うた宗良親王は、吉野に還り給うたので（文中三年）、歌道に於ける新たなる師を求めることを得、「南朝五百番歌合」（天授元年）にも參じ、「新葉和歌集」の撰定にも關與した。文章博士となり、「耕雲千首」（別項）を編したのは、天授二年のことであるが、宗良親王はその翌年再び吉野を脫出し給ひ、信濃に赴き給うたが、事志と違ひ、長谷寺で祝髮し給ふと云ふ南方衰微の狀況であつた。その間長親は弘和三年內大臣、元中二年從一位右大臣と云ふやうに、地位は累進していつたけれども、心なほ安んぜず、江國耕雲寺で終つた。何の目的で東下したか考證し難い。一說に上野の妙義山に終ると云ふやうな傳へもある。

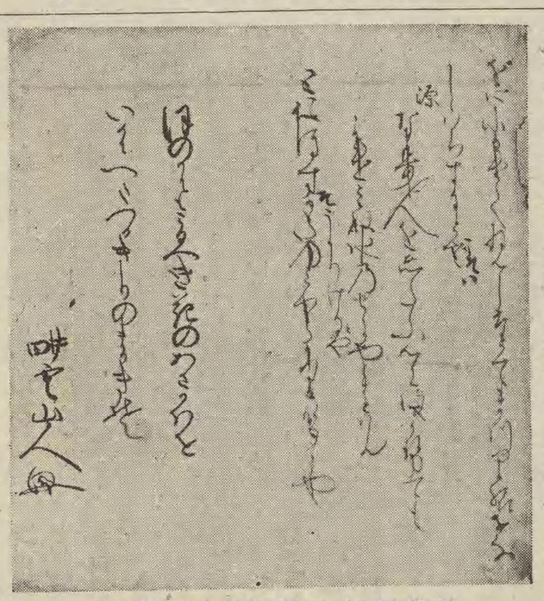
【著書】耕雲口傳（「一すぢめ」、また「和歌抄」ともいふ）（別項）〇耕雲歌卷一軸（寫、圖書寮藏。短章のものであるが、歌序の中に佛教的文學觀の一層濃厚になつてゐるのを見る。晩年京の西山にゐた時のものらしい）〇耕雲千首一卷（續類從三七八に收む）（別項）〇耕雲百首一卷（寫、彰考館藏）〇摘題和歌集三卷（寫、「鹽尻」に耕雲の撰定の由出てゐる。主として俊成・定家時代の佳作を三千六百餘首選び、これを春夏（上）・秋冬（中）・戀雜（下）に類題したものである。耕雲自らの作を加へてゐる點、注目すべきである）〇兩聖記一卷（類從・扶桑拾葉集の中、菅公と無準とのことを記す）〇源氏小鏡三卷（「源氏物語」の解說及びその大意を叙べた童蒙書で、足利義持に獻じたものだといふ。その他、「倭片假名

めずふは〳〵と浮き沈んで流れ行く旅役者の一團の中で、田之助といはれる美貌の若者が、小樽の運送問屋の娘に思はれ、且つ誘惑されて東京へ逃げようとする途中に摑まつて、また元の一座に落ち着くやうになつたが、一體かういふ旅役者の末はどうなるかといつた儚さを、流暢に感傷的に描き出した作である。「零落」も亦前作と同じやうに、種々な旅役者の境涯を描いて、讀者に「詩のやうな美しい廢滅の匂」を傳へようとしたものである。これ等の出世作を初め、短篇「昇昇の話」(大正二年)、「鍊ころし」(同三年)等には、儚なき者、捨てられ者、日蔭者等、人生の消極的方面に對する作者の人間的同感が強く表はれてゐて、讀者に深い感銘を與へるが、彼の作風は次第に享樂的・頽廢的となり、主として鴨川情緒とか、花柳生活とかを描き、延いては「情話文學」なるものの流行を齎すやうにもなつた。その方面の代表作としては、「祇園夜話」(別項)「祇園情話」等がある。

【宮島】

長親（ながちか） 學者・歌人 【姓】藤原 【氏】花山院 【字】子育 【號】畊雲。自筆と信ずべき零本「源氏物語」(保坂潤治氏藏本)の奥に見える識語に畊雲山人とある。山人は散人とも、又畊の字は耕ともあてられる。【法號】明魏・魏公上人 【生歿】生年未詳。永享元年(一四二九)七月十日寂。享年八十餘(蘆菔記)。【墓所】遠州槇谷耕雲寺にあり(南山巡狩錄注書)とも、上野國妙義山にあり(兵家茶話)とも云はれるが不詳。【家系】祖父は師賢、父は家賢。家賢は正平十九年、三十五歳にして正二位内大臣となり、同二十一年(貞治五年)五月、三十七歳にして薨じた。時に長親は、從三位權中納言左中將であつた。今「南朝公卿補任」「尊卑分脈」「扶桑拾葉集系圖」等によつて系譜を示して置く。長賢は權中納言となり、元要は明に入り、法を求めた(新葉和歌集)。【學統】祖父・父、共に「新葉集」の作者で、長親も家に於て歌學の修行を積んだ。且つ宗良親王の指導に與るところも多かつた。【閲歴】長親の生年は明確でないが、應永二十一年、六十餘歳であつたと云ふ自記その他から考證して、正平

師信―師賢―家賢―長親―長賢―元要



長親筆蹟（保坂氏藏「源氏物語」書入）

の初め、卽ち四條畷の戰の行はれた前後、吉野の行宮地に於て生れたものと考へられる。七八歳頃から父に歌の手ほどきを受けてゐたが、父が内大臣に任ぜられると間もなく薨去した(正平二十一年)。未だ三十七歳の壯年であつただけ、長親の受けた打擊は大きく、矢叫びの絶え間ない亂世といひ、早く遁世の望を抱いたものかと云ふ。而も父の喪にゐるその翌々年、後村上天皇の崩御に際會した。「三年まで干さぬ涙の藤衣こはまたいかにそほる袂ぞ」と云ふ當時の詠出には、哀痛の情が溢れ出てゐる。而も彼を慰めた唯一のものは文學への一路であつた。折しも南風競はず、これまで各地に轉戰し給うた宗良親王は、吉野に還り給うたので(文中三年)、歌道に於ける新たなる師を求めることを得、「南朝五百番歌合」(天授元年)にも參じ、「新葉和歌集」の撰定にも關與した。文章博士となり、「耕雲千首」(別項)を編したのは、天授二年のことであるが、宗良親王はその翌年再び吉野を脫出し給ひ、信濃に赴き給うたが、事志と違ひ、長谷寺で祝髮し給ふと云ふ南方衰微の狀況であつた。その間長親は弘和三年内大臣、元中二年從一位右大臣と云ふやうに、地位は累進していつたけれども、心なほ安んぜず、元中九年南北兩朝の合一を機とし、天皇に陪して歸洛したまゝ直ちに落飾、三光國師の門に入り、白河に隱棲した(四十歳頃)。その後暫く全然世俗から離れてゐたが、應永十五年に至り、東山華頂山下の耕雲庵に移り、更に南禪寺禪西院に住した。當年彼の獨自の性理說と佛說とを加味した歌論を著はし、世にこれを「耕雲口傳」(別項)と呼ぶ。當時歌壇は頓阿・良基相繼いで歿し、ひとり了俊のあるのみで、全くの衰微期に入つてゐた。「博覽强記老而不衰」と評された彼は、强ひても歌界の重鎭に推され、貴賤混合「七百番歌合」(應永二十一年)には判者となり、その序を書いてゐるやうに、諸會の點者たる場合が多かつた。室町幕府に召されることもあつたらしい。正長元年にはなほ在京してゐたが、その翌永享元年遠江國耕雲寺で終つた。何の目的で東下したか考證し難い。一說に上野の妙義山に終ると云ふやうな傳へもある。

【著書】 耕雲口傳(「一すぢめ」、また「和歌抄」ともいふ)(別項)○耕雲歌卷一軸(寫、岡書寮藏。短章のものであるが、歌序の中に佛教的文學觀の一層濃厚になつてゐるのを見る。既年京の西山にゐた時のものらしい)○耕雲千首一卷(續類從三七八に收む)(別項) ○耕雲百首一卷(寫、彰考館藏) ○摘題和歌集三卷(寫、「鹽尻」に耕雲の撰定の由出てゐる。主として俊成・定家時代の佳作を三千六百餘首選び、これを春夏(上)・秋冬(中)・雜(下)に類題したものである。耕雲自らの作を加へてゐる點、注目すべきである)○兩聖記一卷(類從・扶桑拾葉集の中、菅公と無準とのことを記す)○源氏小鏡三卷(「源氏物語」の解說及びその大意を叙べた童蒙書で、足利義持に獻じたものだといふ)。その他、「倭片假名反切義解」(別項)の著があり、「源中最祕抄」を抄出し、「仙源抄」を書寫し、「源氏物語」を校訂して所謂畊雲本を作つてゐる。

【作風】 南朝の歌調は二條家(別項)の正系を傳へてゐる。殊に長親の師事した宗良親王は、二條爲世の女爲子の腹に出られ、血統すらも繼ぎ給うてゐられる。併し南朝諸人士の生活的體驗、わけても行宮の實情は、二條派の尙ぶ歌心と矛盾するところ尠くなかつた。その兩面の反映するところとなつて作り出されたものが新葉和歌調である。長親の作は、二十五首をその中に算することが出來るが、二條派に對する不滿さは、それにすら歷々と窺ふことが出來よう。

春きても川風さむしみかの原たつや霞のころもかせやま

月のころ嶺の梢は明けやらで風にわかるゝ花のよこぐも

荻の葉のたよりもつらき嵐かな軒端の梢いろかはるころ

晩年の作には、信仰の輝きの溢れ出した類のものが多い。應永二十七年、日御崎靈神奉納歌三首を掲げる。

白波のなきさによせてあらし山神しまもれはうごきやはせし

今ぞみるながれしみづのかしは島しづみもはてぬ神の光を

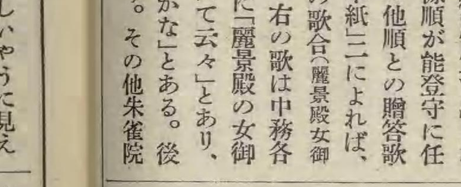
あきつしまの外まで照らせ日の御崎くもらぬ御代の光をへつゝ

【史的地位】混亂的環境の中に、未だ革命的運動を遂げる力は彼に與へられてゐなかつた。但し了俊などと等しく啓蒙的先覺者であつた地位は認むべきである。文運の社會化は、さうした人々の暗々の努力に依つて、意外に速く伸展せしめられたのであつた。殊に佛教的文學觀は、長親に於て特に注目すべき方面が多い。【以上齋藤(清)・池田】

【國語學上の業績】五十音及び伊呂波を研究した最も古い一人である。その著「倭片假字反切義解」(別項)は、假名の起原・沿革及び五十音の音韻組織、平假名・片假名の字源等を說いた最古のものであつて、江戸時代に於ける假名の研究に大きな影響を與へたものである。この外に「以呂波之傳」(一卷、寫本。別名「耕雲伊呂波口傳」「伊路波傳授」)がある。伊呂波の字源を說いたものである。因みに、從來「仙源抄」(長慶天皇御撰)を明魏の作と誤つてゐた。而して同書の跋に、定家假名遣(假名遣參照)の說が頗る杜撰で、信頼し難いものなることを指摘してあるので、明魏を以て假名遣研究史上の偉勳者と見做してゐた。併し「仙源抄」は明かに長慶天皇の御撰であるから、假名遣に於て從來明魏が負うてゐた名譽は、當然長慶天皇に歸し奉らねばならぬものである。【以上龜田】

【參考】大日本史○野史○南山皇胤錄附錄長親傳(菅政友全集)○南朝公卿補任○畊雲老人壽像贊○鹽尻○南方紀傳○仙源抄の二證本 山脇毅(藝文一五ノ九・一一・一二)

中務 なかつかさ 歌人(三十六歌仙の一)【本名】未詳【稱呼】父君敦慶親王が中務卿であつた(後には式部卿)からであらう。【家系】「本朝皇胤紹運錄」には、敦慶親王の御子、母は伊勢とあり、「歌仙傳」もこれと同じであるが、



親王と伊勢との御關係に就いては疑ひの餘地がある。但し伊勢に女のあつたことは、「伊勢集」に依つてわかる。中務にも女子のあつたことは、「拾遺集」卷一に「子にまかりおくれて侍りける頃東山にこもりて」とあり、同卷二十に「むすめにおくれ侍りて」「うまごに後れ侍りて」とあるによつてわかる。【生歿】未詳。【閱歷】未詳。家集に「朱雀院の御時歌めすに奉る」とあり、「村上の先帝の御屏風云々」とあり、更に天元二年(圓融天皇)源順が能登守に任じて下る時の歌がある。その他順との贈答歌は、集中に多く見える。「袋草紙」二によれば、天曆十年齋宮女御(徽子女王)の歌合(麗景殿女御歌合)に於て、左の歌は兼盛、右の歌は中務各一人にて讀んだとあり、家集に「麗景殿の女御中宮に奉り給ふ扇にあしでにて云々」とあり、「前齋宮の五十賀の御屏風わかな」とある。後者は恐らく天元元年であらう。その他朱雀院の女一宮(昌子內親王)の御誕生(天曆四年か)や中納言(兼通か)などの名が集中に見える。更に「後撰集」卷三には貫之との贈答歌があり、實頼に送つた歌、仲平の邸に行つた時の歌などがある。「拾遺集」卷十三に兼盛の贈答歌があり、「後撰集」卷十一、「拾遺集」卷十四によつて源信明と關係のあつたことがわかる。又「拾遺集」卷十七には、天祿四年五月の歌、同集卷十七に天曆の御時「伊勢集」を奉つた時の歌がある。【作品】家集に「中務集」(別項)があり、勅撰集に入る歌は後撰集七首、拾遺集十四首、詞花集以下凡そ四十首、合計凡そ六十一首である。【批評】天分はあつたかも知れないが、これを境地や表現に於て練ることは、さまで苦心努力してゐないやうに見える。時には古い表現や構想を襲用して、歌としては熟してゐない不徹底さも見える。【西下】

中務集 なかつかさしふ 私家集 一卷【作者】中務【撰者】未詳【諸本】群書類從卷二七三所載本と歌仙歌集本とがある。前者は歌の數二百五十四、後者は二百四十三で、大部分は共通の歌であるが、前者のみにある歌は十六首、後者のみにある歌は五首である。歌の順序は全く一致する。【內容】部類はなく漫然と書き集められてをり、屏風の歌が多い。詞書中興味のあるものは、「蛙のかれたるをおこせて」「後撰の哥ども書きて人につかはすに」などがある。【西下】

中務內侍 なかつかさのないし 歌人【本名】未詳【稱呼】詳しくは伏見院中務內侍といふ。【生歿】未詳【家系】左大臣冬嗣の後、父永經(冷泉と號す)は「公卿補任」永仁二年散位の部に、「從三位、藤永經、四月十三日叙、元前宮內卿、故大藏少輔從四位下範昌朝臣二男云々」とある。【人物・閱歷】歌文の才あり、歌は「玉葉集」春下に一首、戀五に一首(勅撰作者部類)、著作には「中務內侍日記」(別項)がある。その書出しは弘安三年季冬であるが、宮仕は數年前であらう。正應の頃、病のために一時里にさがつた事もあつた。明細な經歷は不明。【野村】

中務內侍日記 なかつかさのないしにつき 假名文日記一卷【作者】伏見院中務內侍の作と傳へられる。【成立】その時々の日記ばかりではなく、後年の追補が多いと云ふ說が行はれてゐる。【諸本】寫本は少く、內閣文庫・彰考館・無窮會文庫・靜嘉堂文庫、その他の藏本があるが、系統は同一のものである。「扶桑拾葉集」卷十三並に群書類從日記部に收む。その他、日本文學全書・國文大觀・有朋堂文庫等所收。【內容】弘安三年、伏見院の御懺法の事から書き始めて、正應五年病重くして、里にさがつたまでの事を載せてゐる。主として宮廷の公事に關する記叙であるが、どちらかと云ふと、「辨內侍日記」(別項)よりは筆づかひが詳密である。文章は概して古雅で、古文や古歌を引用した所も多い。【批評】冒頭でも分るやうに、いろ〳〵な體驗をした中年者の心の惱みを遡へたと云ふ趣が一卷を貫いてゐる。人間苦を味ひつつ、なほ解脫の域に入り得ない境地を叙べてゐるので、一種陰森な瞑想的な表現の文學と見られる。そして或る無常觀に支配せられ、頗る儚げな述懷が尠くない。これには、彼女の內面生活に、何か心を淋しくさせた事情があつたであらうし、一方には佛教的敎養が與つたのであらう。

【參考】類標(國書寮の藏本で語句索引)○宮廷女流日記文學 池田龜鑑 【野村】

長塚節

長塚節 ながつかたかし 歌人・小說家【號】櫻芽【生歿】明治十二年四月三日、茨城縣結城郡岡田村國生に生れ、大正四年二月八日福岡九州大學病院にて結核症で歿した。享年三十七【流派】正岡子規門人。アララギ派【閱歷】水戸中學を中途退學。明治三十三年三月二十八日(二十二歲)、正岡子規の門に入り、和歌・俳句・寫生文を學ぶ。子規歿後、雜誌「馬酔木」の同人となり、多くの作歌と歌論・寫生文等を發表した。なほ節は寫生文から脈をひいた所謂ホトトギス派の小說を作つた。左千夫流の甘美な抒情味に乏しいやうに見えるが、よく注意すれば、芭蕉の俳句に流れてゐるやうな味ひを感受することが出來る。殊に晩年の作、「鍼の如く」に於て、その特色を見る。小說・寫生文も、すべて細い描寫に終始し、彼一流の見方をもつて貫いてゐるが、それでも、當時勃興しつつあつた自然主義の手法から見れば、やゝ異なる點があつた。これ彼をして餘り有名にしなかつた點でもあるが、今から見れば、當時評判になつた自然主義作家のものに比しても、左程遜色はない作品を遺してゐる。【齋藤(茂)】

【參考】長塚節の藝術論 藤川忠治(國語と國文學 八ノ一・二・三)○アララギ二百號記念

長塚節歌集 ながつかたかしかしふ 歌集【編者】古泉千樫主として編輯。【刊行】大正六年、春

有職故實に精通した人であつた。【著書】本邦刀劍考一卷(百家叢說第二編所收)○中古甲冑製作辨三卷(別項)(寬政十三年刊)○東鑑異本考○東鑑部類索引○東鑑要目集成○江戸誌○駿河國誌等。

永年 ながとし 故實家【姓名】春田氏。通稱は播磨。字は靜甫・甲壽【號】平山・壽廉堂【生歿】寶曆三年尾張に生れ、寬政十二年(二四六〇)五月二十九日歿した。享年四十八。【閱歷】幕府の具足師で、清水濱臣の門に入り、有職故實に通じてゐた。【著書】延喜式工事解三卷(文化三年刊。續々群書類從法制部所收。延喜式兵庫寮の武器粢漆の制及び作法を解說せるもの。その子元長の跋がある)○延喜式工事通解一卷(同上所收。當時の度量衡に就き記せるもの)○溫故叢一卷(寬政七年成。染革を細論したもので、【儀式】大嘗祭の起原は、太古にあるのであるが、時代を經ると共に漸く盛大に行はれ、平安朝初期に於て完備した。「貞觀式」及び「延喜式」によれば、大嘗祭は十一月下の卯日に夜を徹して行はれ、その翌日辰日から、午日に至る三日に亙つて節會が行はれる。辰日の節會を悠紀の節會、巳日のを主基の節會、午日のを豐明の節會と云ふ。節會は主上が新穀で作つた御酒・御膳を聞し食すと共に、これを群臣にも頒ち給ふ公宴であつて、「中臣壽詞」の奏上は辰日の節會に行はれる。當日主上は豐樂殿の悠紀の御帳に出御せられ、皇太子・親王・皇族以下百官が參入して所定の席に就くと、中臣が榊を捧げて儀鸞門の東の戸から參進し、版に就き跪いてこの壽詞を奏上する。【本質】壽詞は、吉詞の義であつて祝賀の詞で

長塚節（ながつかたかし）　歌人・小說家　【號】櫻芽【生歿】明治十二年四月三日、茨城縣結城郡岡田村國生（こつやう）に生れ、大正四年二月八日福岡九州大學病院にて結核症で歿した。享年三十七【流派】正岡子規門人。アララギ派【閲歷】水戸中學を中途退學。明治三十三年三月二十八日（二十二歲）、正岡子規の門に入り、和歌・俳句・寫生文を學ぶ。子規歿後、雜誌「馬酔木（あしび）」の同人となり、多くの作歌と歌論・寫生文等を發表した。なほ節は寫生文から脈をひいた所謂ホトトギス派の小說を作つた。家にあつては農事を勵み、父が政治に熱中して家事を顧みる暇がなかつたので、彼は自ら代つて竹林の栽培等をもなした。また旅行を好み、歿年に至るまで多くの土地に足跡を印し、歌もそれによつて得たものがその大半を占めてゐる。晚年に東洋の造形美術に思ひを潛め、歌の上にも、「氣品」「冴え」を強調するに至つた。【著作】長塚節全集六卷（春陽堂）がある。【歌集】長塚節歌集（別項）【歌論】萬葉集卷十四〇東歌餘談〇萬葉口舌〇寫生の歌に就いて〇枯桑漫筆等。【短篇小說】芋掘り〇開業醫〇おふさ〇教師〇隣室の客〇太十と其犬〇炭燒の娘等。【長篇小說】土（別項）。【寫生文】佐渡が島〇鉛筆日鈔〇彌彦山〇才丸行き〇須磨明石等。

長塚節

【批評】歌風は、手堅い寫生をなすに、蒼古なる萬葉調を以てしたものである。これを伊藤左千夫（別項）の作に比するに、線がやゝ細く、左千夫流の甘美な抒情味に乏しいやうに見えるが、よく注意すれば、芭蕉の俳句に流れてゐるやうな味ひを感受することが出來る。殊に晚年の作、「鍼の如く」に於て、その特色を見る。小說・寫生文も、すべて細い描寫に終始し、彼一流の見方をもつて貫いてゐるが、それでも、當時勃興しつつあつた自然主義の手法から見れば、やゝ異なる點があつた。これ彼をして餘り有名にしなかつた點でもあるが、今から見れば、當時評判になつた自然主義作家のものに比しても、左程遜色はない作品を遺してゐる。【齋藤（茂）】

【參考】長塚節の藝術論　藤川忠治（國語と國文學　八ノ一・二・三）〇アララギ二百號記念

長塚節歌集（ながつかたかしかしふ）　歌集　【編者】古泉千樫主として編輯。【刊行】大正六年、春陽堂。次いで島木赤彦增補、大正十五年六月、長塚節全集第三卷に收む。【內容】節の歌風は萬葉調であるが、夙くから寫生の歌を唱へ、手堅い子規風の見方、表はし方に加ふるに、萬葉人の息吹と芭蕉等の感慨とを以てした。晚年に、歌の「冴え」といふことを強調するやうになつてからは、滓渣が盡くなくなり、人生悲哀の深祕に觸るゝに至つた。「病床雜詠」「鍼の如く」の幾十首の歌は卽ちそれである。又彼は早くから、東歌・神樂・催馬樂等の調子を吟味して、おのづから長塚節調を創造するに至つた。【齋藤（茂）】

長俊（ながとし）　故實家　【姓名】榊原氏。通稱は一學。字は子章・五陵。【號】香山・忘筌齋【生歿】享保十九年生れ、寛政九年（一四五七）十一月二十日歿。享年六十四【墓所】江戸谷中感應寺中子院寺【閲歷】世々幕府に仕へ、伊勢貞丈（別項）の門に入つて學び、儒學者で有職故實に精通した人であつた。【著書】本邦刀劍考一卷（百家叢說第二編所收）〇中古甲冑製作辨三卷（別項）（寛政十三年刊）〇東鑑異本考〇東鑑部類索引〇東鑑要目集成〇江戸誌〇駿河國誌等。【石村】

永年（ながとし）　故實家　【姓名】春田氏。通稱は播磨。字は靜甫・中壽【號】平山・壽廉堂【生歿】寶曆三年尾張に生れ、寛政十二年（二四六〇）五月二十九日歿した。享年四十八。【閲歷】幕府の具足師で、淸水濱臣の門に入り、有職故實に通じてゐた。【著書】延喜式工事解三卷（文化三年刊。續々群書類從法制部所收。延喜式兵庫寮の武器粮漆の制及び作法を解說せるもの。その子元長の跋がある）〇延喜式工事通解一卷（同上所收。當時の度量衡に就き記せるもの）〇溫故叢一卷（寛政七年成。染革を細論したもので、舊記等に徵し、名稱・染色・用法等を詳記す。別に染革を着色した圖一卷が添つてゐる）〇甲組類鑑一卷（鎧の威毛に就いて記したもので、國史・舊記の文を摘記して解說を加へ、鎧の袖形に着色の圖を揭げてある）。【石村】

中臣氏（なかとみし）　「神祇の四姓」を見よ。

中臣祓（なかとみのはらひ）　「大祓詞」を見よ。

中臣壽詞（なかとみのよごと）　壽詞　【名義】大嘗會に中臣が奏上する御代壽ぎの詞。【成立】現存する中臣壽詞は、平安朝末期に近い康治元年十一月に記錄せられたものであるが（台記別記）、最初に制作せられたのは極めて古い時代であることは、その文章・用語・內容等によつて明白である。恐らく祝詞（別項）中の最古の文章と共に上古に成立したのであらうが、その時代を明瞭にすることは出來ない。而して「台記別記」に收錄せられるまでに、辭句の改修せられたところ少くなからうと思はれる。【儀式】大嘗祭の起原は、太古にあるのであるが、時代を經ると共に漸く盛大に行はれ、平安朝初期に於て完備した。「貞觀式」及び「延喜式」によれば、大嘗祭は十一月下の卯日に夜を徹して行はれ、その翌日辰日から、午日に至る三日に亙つて節會が行はれる。辰日の節會を悠紀（ゆき）の節會、巳日のを主基（すき）の節會、午日のを豐明（とよのあかり）の節會と云ふ。節會は主上が新穀で作つた御酒・御膳を聞し食すと共に、これを群臣にも頒ち給ふ公宴であつて、「中臣壽詞」の奏上は辰日の節會に行はれる。當日主上は豐樂殿の悠紀の御帳に出御せられ、皇太子・親王・皇族以下百官が參入して所定の席に就くと、中臣が榊を捧げて儀鸞門の東の戸から參進し、版に就き跪いてこの壽詞を奏上する。【本質】壽詞は、吉詞の義であつて祝賀の詞である。而して中臣壽詞は吉詞の言靈の活動により、御代の長久を壽き奉るものであつて、その冒頭に「現御神止大八島國所知食須、大倭根子天皇我御前仁、天神乃壽詞遠稱辭定奉良久止申須」とあるから、高天原に起原を發する天神の壽詞を皇御孫命なる現御神に奏上するものである（祝詞參照）。【文章・用字】文章は純粹の和文で、形式的修飾に重きを置いて古雅であり、森嚴莊重の氣を帶びてゐる。用字は漢字の音訓を混用假借し、手爾乎波は眞假名を用ひて細書し、稀に漢文の語法を借りてゐる。これ等の點は祝詞と異る所がない。【內容】一篇の組織は三節から成る。第一節の內容は神話で、神漏岐神漏美の命が、天孫を降臨せしめられるに當つて、「天つ御膳の長御膳の遠御膳」として、齋庭の瑞穗を依ざし給うたことを語り、次に中臣の遠祖天兒屋根命が、その子天忍雲根神を天の二上（高天原に在る二

幸並び立つ山）に上らせて、皇孫に獻るべき御膳つ水を天神に請はしめた事を語つてゐる。第二節は右の神話を承けて、今の大嘗祭に於ける悠紀・主基の國郡卜定のことを述べ、その齋田に奉仕する男女の役目を擧げて、それ等の者が瑞穗を耕作し御酒を釀すに當つて、清淨を極め鄭重を盡したことを表示し、次いで今日の卯日に獻る黑酒・白酒の大御酒を聞し食す天皇が、皇神たちの加護によつて、堅磐に常磐に御代を知し召すやうにと壽詞を奏上することを叙べてゐる。而して第三節は第二節に附け加へた詞であつて、「又申さく」に始まつて、親王・諸王・百官以下天下萬民が、この盛儀を歡び祝して益々榮えて奉仕すべき壽詞を諸々聞き給へと告げて文を終る。【價値】かく壽詞は他の古い祝詞と相似た文體・組織・内容を有し、その神話及び故事を述べたのは、大嘗祭に悠久遠大の感を起さしめるために效果があり、第二節は壽詞の主部として、御代の長久を壽ぐ精神が辭句の上に繰返し述べられ、神話的叙述と相俟つて一篇の壽詞を莊重嚴肅にしてゐる。要するに、文章・用語も極めて古雅であり、内容は遠大で森嚴の氣に滿ちてゐる。「祝詞式」中の二三の名篇と共に我が上代散文の貴重なものの一である。

【註釋書】「中臣壽詞講義」「祝詞」參照。〔次田〕

中臣壽詞講義（なかとみのよごとかうぎ）　註釋書　二卷【著者】鈴木重胤【成立】天保十五年に稿成り、嘉永五年に訂正淨書。【諸本】國文註釋全書中に祝詞講義の附錄として收む。【解說】「中臣壽詞」の本文の勘校並に略註は、宣長の「玉勝間」卷一（本居宣長全集所收）に初めて見えてゐるが、重胤は更に進んでこの周密な研究を遂げたのである。本書は上卷に於て踐祚大嘗祭の諸儀式を極めて詳細に考證し、下卷に於ては「中臣壽詞」の起原・意義等を解說した後に、訓義に就いて精細なる解釋を述べ、從來世人の注意を率かなかつたこの一篇の貴重な古文獻に基礎的研究を下してゐる。〔次田〕

中西梅花（なかにしばいくわ）　詩人【本名】幹男【別號】落花漂絮・梅花道人【生歿】安政三年江戸淺草千束村に生れ、明治二十四年發狂して日露戰爭前後に歿した。【閱歷】漢法醫の家に人となり、天性の詩才があつた。佛語を學んだ事もあるといふ。學歷は殆どなく、常に「萬葉集」を愛誦し、又俳諧をよくした。幸田露伴の紹介で讀賣新聞社に入り、記者生活を營んだ。その新體詩を作り始めたのも露伴のすゝめに基く。在社二年にして去り、明治二十三年東京をはなれて尾濃の間に放浪し、虎溪山に龍居參禪した。後、歸つて入谷に居を定めたが、遂にそこで歿した。「新體梅花詩集」（明治二十四年刊）（別項）がある。

【批評】梅花道人の位置は、その詩集がよく物語つてゐるが、その發行當時には、既にいはゆる「文學界」運動の機運が勃として漲溢し始めた時分で、すでに彼の存在は時代錯誤たらんとする頃であつた。畢竟「新體詩鈔」時代以後、透谷や藤村の生れるまでの過渡期の一詩家であつて、山田美妙と梅花とは、この二十年代初葉に並稱すべき二詩人であり、湯淺半月・磯貝雲峰・北邨散士（矢崎嵯峨之舍）・戸川殘花・大西操山等と共に、この時期の詩壇の成員をなしてゐた。美妙齋はかつて評して、「溫雅な雲峰子、端麗の殘花子、一種飄逸の梅花入道云々」といつたが、この過渡時代には先づ似たり寄つたりの詩才の集合で、一人として衆才にぬきんづる詩的光燿を發揮し得たものはなかつた。梅花の飄逸は生來の性癖で、この時代に多い前時代よりの通性の繼續者の一人でもあつた。詩が大成しなかつたのは賦才の小に基いたのである。〔日夏〕

中根淑（なかねきよし）　國學者【姓名】舊姓曾根氏、幼名は造酒（みき）。字は君艾【號】香亭【生歿】天保十年二月十二日生れ、大正二年一月二十日歿す。享年七十五。【閱歷】淑は曾根直の第二子として江戸に生れた。朝川善庵の外孫である。幼少の時から幕臣中根氏の養子となつた。長じて武藝を好み、傍ら研學したが、別に師と云ふべきものはない。德川幕府に仕へて徒目付（かちめつけ）となり、轉じて步兵指揮官になつた。明治元年（三十歲、幕府の命で駿河に移り、沼津兵學校の教授になつた。明治五年徵せられて陸軍參謀局に出仕し、次いで少佐になつたが、同八年（三十七歲）重病に罹り職を辭した。それより日本文法の書を著はした。後、文部省編輯局に出仕したが、數年にして辭した。爾後仕官せず、文筆を弄して悠々自適の生活をしてゐた。淑の妻（西村氏）及び子（彪）は共に淑に先立つて歿したが、敢て後繼者を作らず、爾後家を捨て諸方を浪遊し、風月を友としてゐた。晩年は駿河の興津に居り、此處で病歿し、火葬したが、遺言して墓を造らしめなかつた。【著書】〔文法に關するもの〕日本文典二册（明治九年三月刊）○日本小文典二册（明治九年八月刊）○日本文典考證二册（明治十二年刊）〔その他〕中根香亭藏草一册（大正三年刊。香亭の歿文集）○歌謠字數考一册（別項）○香亭遺文一册（大正五年八月刊。淑の歿後に遺稿を集めて出したもの）。

【業績】淑は中年以後、俗界を超越した生活をしてゐたが、明治十年前後に出した文法書は國語學界に裨益する事が少くない。就中その最初に公けにした「日本文典」は、當時の學界に少からぬ刺戟を與へた名著である。本書は文字・言語・文章・音調の四部から成るものであるが、その前に前論として（一）人種語脈論、（二）上古文字有無論、（三）文字音訓論、（四）日本語外國語論、（五）假名文字論、（六）字書煩簡論、（七）俗字論、（八）日本外國言語正否の論の八項に就いて論じてゐる。これ當時の國語學界の重要問題を論じたものであつて、所說穩健で注意すべきものである。その本論は西洋文法に範を取つたものであつて、外形は田中義廉の「小學日本文典」（別項）と似てゐるが、内容は遙かに進んでゐて、甚だ詳密で而も正確である。勿論、今日から見れば缺點もあるが、當時としては頗る名著と稱すべきものであつて、爾後の國語學界に大なる貢獻をなしたものである。なほ本書は明治二十年頃まで學校の教科書として廣く用ひられた。

【參考】中根香亭自敍傳（香亭遺稿）〔龜田〕

仲文（なかぶみ）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】藤原【別名】國茂【生歿】貞元三年（一六三八）歿す。享年七十一。【家系】藤原宇合の後、公葛（一說に興範）の子。【閱歷】貞元二年上野介に任じ正五位下に叙した。公任の近くに住つて歌の贈答があり、天延二年周防に下る元輔と歌を贈答し、能宣（別項）に車の鼈を乞うた。【作品・作風】勅撰集に入る歌は拾遺三、その他凡そ五首。○藤原仲文集。歌數は群書類從二四九所載本は六十四首、歌仙歌集本は五十四首、共通の歌は三十一首、前半は大略等しいが後半が相違する。詞書中には三人稱が用ひられ、「仲文」「同じ人」等もあり、歌仙歌集本の後半には「國茂」の名が見える。作風には生活

を享樂してゐる所があつて、契沖が「おほよそ俳諧なり」と指摘してゐるのは當つてゐる。又紀伊國の郡名七つをよみこんだ歌もある。〔西下〕

【參考】歌仙傳○河社

長町女腹切（ながまちをんなのはらきり）　淨瑠璃　世話物　三段【作者】近松門左衞門【興行】「外題年鑑」に元祿十三年正月六日とあるが、高野辰之氏が本作の中卷に、「賣買高い此節二貫目ぢかい廿兩」及び「あれは澤村長十郎、あつたら男をやがて大阪へ下り舟、歌流金子も難波津へ」の句あるを、銀相場の變動及び役者移動の上から考證して、元祿說を否定し、更に水谷弓彦・黑木勘藏氏等がこれを補說して、正德二年秋の上場と推定してゐる。【諸本】八行三十七丁本、山本九兵衞板。諸種の近松集及び世話淨瑠璃大全（下）に收む。【題材】實說は明かでなく、「戲場年表」に、「元祿十二年八月七日、の一家に祟つたことのあるものであるが、今かうして再び手に觸れる不思議さを、叔母はしみじみと半七に語つて聞かせる。〔中之卷〕（石懸町井筒屋）井筒屋太郎左衞門は、お花の繼父九兵衞を呼んで、近く年季の明けるお花を二十兩でもう一年の切ましを勸める。そこで九兵衞は、折から二階で坊主客の相手をしてゐたお花を呼んで得心させようとするが、半七と添はうとしてゐるお花は、いつかな承知しない。九兵衞は怒つて散々半七を罵つた上、お花を打擲する。偶々門口でこの樣子を聞いてゐた半七は堪りかねて跳り出で、二十兩の小判を叩きつけるが、九兵衞は受取らず、半七は、井筒屋の男たちに追ひ出される。（西石懸茶屋）坊主客は氣分を替へて騷がうといふので、お花等を伴つて西石懸の關東屋に行く。お花は少しも氣が浮かず、若しや半七が つて來た樣子に、急いで二人を長持の中へ匿す。血眼になつて駈け込んだ夫の一伍一什の話に、叔母ははつと胸塞がり、途方に暮れたが、今更我が家に祟るといふ妖刀を、亡き兄から預つた大事の甥に渡した責任感、並に夫の身まで破滅に導いた申譯から、罪を我が身一つに引受けようと、突然、そこに置いてあつたかのすりかへの脇差を腹に突きたてる。半七・お花は驚いてとび出し、あくまで服罪しようとするのを、甚五郎は叔母を犬死させるなと二人を逃す。

【解說】「外題年鑑」に、元祿十三年正月の興行としてあるため、近松が最初の世話物といふ事になつてゐたが、その誤れることは洗練された文章によつても窺はれる。但しお花半七の情事と老婆の切腹との繼ぎ合せに、やゝ無理がある事は否めない。寶曆十四年五月竹本座上場の「おはな半七京羽二重織分身」は本篇の改てある。

【參考】歌舞音曲考說（高野辰之）○近松傑作全集解題（水谷弓彦）○近松名作集解題（黑木勘藏）○大近松全集解說（木谷蓬吟）○近松全集解題（藤井乙男）○正・續歌舞伎年代記○演藝書報（五ノ四）

仲光（なかみつ）　「源氏物の諸曲」を見よ。

中村秋香（なかむらあきか）　歌人【號】不盡之屋・槐陰雪屋・乾坤廬・今かくれが・松下庵等。【生歿】天保十二年九月駿州靜岡に生れ、明治四十三年一月二十九日興津別莊松の下庵に歿す。享年七十。【墓所】東京駒込染井墓地【閱歷】父は靜岡藩士で名を錄翁といふ。秋香十五歲にして歌學を松本直秀に、漢學を戸塚積齋に受けたが、後更に八田知紀に學んだ。明治六年以後、教部・内務・文部の各省に奉職し、大學事務官を經て同二十三年第一高等學校教授となり、同三十年御歌所寄人を命ぜられて逸年に及んだ。歌集を「秋香集」といふ。

を享樂してゐる所があつて、契沖が「おほよそ俳諧なり」と指摘してゐるのは當つてゐる。又紀伊國の郡名七つをよみこんだ歌もある。

【參考】歌仙傳○河社　〔西下〕

長町女腹切（ながまちをんなのはらきり）　淨瑠璃　世話物　三段　【作者】近松門左衞門　【興行】「外題年鑑」に元祿十三年正月六日とあるが、高野辰之氏が本作の中卷に、「賣買高い此節二貫目ぢかい廿兩」及び「あれは澤村長十郎、あつたら男をやがて大阪へ下り舟、歌流金子も難波津へ」の句あるを、銀相場の變動及び役者移動の上から考證して、元祿說を否定し、更に水谷弓彦・黑木勘藏氏等がこれを補說して、正德二年秋の上場と推定してゐる。【諸本】八行三十七丁本、山本九兵衞板。諸種の近松集及び世話淨瑠璃大全(下)に收む。【題材】實說は明かでなく、「戲場年表」に、「元祿十二年八月七日、大阪にてお花半七情死。歌舞妓井筒屋かめ抱お花情人道修町刀屋半七と云。此情死男は咽を突死に切れずして三日目に死す。女は腹を切り後咽を突立即死す」とあるが信じ難い。

【梗概】〔上之卷〕（京堀川、刀屋石見內）石懸町井筒屋のお花は、情人刀屋半七に種々身の上の相談をしたが、その後暫く顏を見せないので、首尾を案じて、大阪なる叔母と稱して半七の親方石見の店を訪れる。石見は少しも氣付かなかつたが、偶々眞實の叔母が訪ねて來た爲め暴露し、主人は半七を打擲するが、萬事を察した叔母が氣轉を利かせて、その場を治める。この叔母は兩親のない半七にとつて、親にも代るべき人である。叔母の所用といふのは、さる屋敷から依頼された信國の脇差のこしらへを半七に託するためであつた。併しこの脇差は、嘗て龜山藩士であつた半七の一家に祟つたことのあるものであるが、今かうして再び手に觸れる不思議さを、叔母はしみじみと半七に語つて聞かせる。〔中之卷〕（石懸町井筒屋）井筒屋太郎左衞門は、お花の繼父九兵衞を呼んで、近く年季の明けるお花を二十兩でもう一年の切ましを勸める。そこで九兵衞は、折から二階で坊主客の相手をしてゐたお花を呼んで得心させようとするが、半七と添はうとしてゐるお花は、いつかな承知しない。九兵衞は怒つて散々半七を罵つた上、お花を打擲する。偶々門口でこの樣子を聞いてゐた半七は堪りかねて跳り出で、二十兩の小判を叩きつけるが、九兵衞は受取らず、半七は、井筒屋の男たちに追ひ出される。〔西石懸茶屋〕坊主客は氣分を替へて騒がうといふので、お花等を伴つて西石懸の關東屋に行く。お花は少しも氣が浮かず、若しや半七が見えるかと、二階から往來に氣を配つてゐると、確かにそれらしい姿が番屋の蔭に佇んでゐる。お花は幸ひ豆腐を買ひに行く阿彌陀籤に當つたので、わざと迷惑さうにして出て、半七の許へ走りよる。半七はさつきの二十兩は、先度の脇差の中身をすりかへたその賣りへぎの金であると打明け、とても遁れぬ身の上なれば、相携へて大阪まで逃れ、事情を叔母に告げて死なうといふ。「お花半七道行」。〔下之卷〕（大阪長町甚五郎內）二人が叔母の家を訪れて見ると、果して叔母の夫甚五郎は、お屋敷から脇差について急な御用とて召されたまゝ、未だに歸らぬとの事であつた。胸に應へた半七は、少しも早く事情を打明けようとするが、叔母は又半七が遊女を伴れて來たので、夫が甥に對する信用を失ひはしないかと氣が氣でない。そこへ甚五郎が遽だしく歸つて來た樣子に、急いで二人を長持の中へ匿す。血眼になつて駈け込んだ夫の一伍一什の話に、叔母ははつと胸塞がり、途方に暮れたが、今更我が家に祟るといふ妖刀を、亡き兄から預つた大事の甥に渡した責任感、並に夫の身まで破滅に導いた申譯から、罪を我が身一つに引受けようと、突然、そこに置いてあつたかのすりかへの脇差を腹に突きたてる。半七・お花は驚いてとび出し、あくまで服罪しようとするのを、甚五郎は叔母を犬死させるなと二人を逃す。

【解說】「外題年鑑」に、元祿十三年正月の興行としてあるため、近松が最初の世話物といふ事になつてゐたが、その誤れることは洗練された文章によつても窺はれる。但しお花半七の情事と老婆の切腹との繼ぎ合せに、やゝ無理がある事は否めない。寶曆十四年五月竹本座上場の「おはな半七京羽二重娘氣質」は本篇の改作。歌舞伎では多少本篇を改作し、享保十六年正月大阪角座で「雙紋刀銘月」と題して興行した。お花・半七の狂言は、この他上方にも江戸にも多いが、原作とは餘程遠いもののみである。但し明治四十四年三月の東京明治座中幕狂言「長町女腹切」は、本作の上之卷と道行と下之卷とを上演したもので、叔母が澤村源之助、半七が中村又五郎、お花が市川莚若、甚五郎が市川左團次といふ配役であつた。小說にも多く、京山の合卷のみでも數部を數へる。なほ部分的な趣向を取つたのでは中之卷井筒屋の場で、半七が九兵衞に小判を投げつけるところを、「冥途の飛脚」（別項）の忠兵衞の封印切に用ひ、又「伊勢音頭戀寢刃」（別項）の刀の祟り、又はお紺が貢の伯母に化けて行つて、眞實の伯母と鉢合せをするところなどに用ひてある。

【參考】歌舞音曲考說　高野辰之○近松傑作全集解題　水谷弓彦○近松名作集解題　黑木勘藏○大近松全集解說　木谷蓬吟○近松全集解題　藤井乙男○正・續歌舞伎年代記○演藝書報（五ノ四）　〔高野（正）〕

仲光（なかみつ）「源氏物の謠曲」を見よ。

中村秋香（なかむらあきか）　歌人　【號】不盡之屋・槐陰雪屋・乾坤廬・今かくれが・松下庵等。【生歿】天保十二年九月駿州靜岡に生れ、明治四十三年一月二十九日與津別莊松の下庵に歿す。享年七十。【墓所】東京駒込染井墓地【閥歷】父は靜岡藩士で名を錄翁といふ。秋香十五歲にして歌學を松本直秀に、漢學を戶塚積齋に受けたが、後更に八田知紀に學んだ。明治六年以後、敎部・內務・文部の各省に奉職し、大學事務官を經て同二十三年第一高等學校敎授となり、同三十年御歌所寄人を命ぜられて晩年に及んだ。歌集を「秋香集」といふ。【歌風】明治三十一年十一月「新體詩歌自在」を出した作者は、當時の詩歌の舊態に安んじて居られなかつたらしく、新味をその歌にも出さうとしたのであつたが、未だ舊い殼を破るに至らなかつた。晚年、新題を詠じて新時代に伴はうと計つたが、穿きちがへた新しさで多く失敗に終つた。叙景の歌に次のやうな清新見るべきものがあつた。

小車は今やつゝみにかゝるらむ幌の上する靑柳の　【相原・金子】

中村歌右衞門（なかむらうたえもん）「金澤龍玉」を見よ。

中村花瘦（なかむらくわさう）　小說家　【本名】中村壯（そう）、本姓篠崎氏　【別號】柳園・雪後　【生歿】慶應三年江戶赤坂藥研坂に生れ、明治三十二年二月七日牛込新小川町の寓居に歿す（肺患）。享年三十三。【閥歷】父は篠崎德影（のりかげ）、舊幕臣、以後、透谷や藤村の生れるまでの過渡期の一詩家であつて、山田美妙と梅花とは、この二十年代初葉に並稱すべき二詩人であり、湯淺半月・磯貝雲峰・北邨散士（矢崎嵯峨之舍）・戶川殘花・大西操山等と共に、この時期の詩壇の成員をなしてゐた。美妙齋はかつて評して、「溫雅な雲峰子、端麗の殘花子、一種飄逸の梅花入道云々」といつたが、この過渡時代には先づ似たり寄つたりの詩才の集合で、一人として衆才にぬきんづる詩的光耀を發揮し得たものは處で病歿し、火葬したが、遺言して墓を造らしめなかつた。【著書】〔文法に關するもの〕日本文典二冊（明治九年三月刊）○日本小文典二冊（明治九年八月刊）○日本文典考證二冊（明治十二年刊）【その他】中根香亭藏草一冊（大正三年刊。香亭の歌文集）○歌謠字數考一冊（別項）○香亭遺文一冊（大正五年八月刊。淑の歿後に遺稿を集めて出したもの）。

【業績】淑は中年以後、俗界を超越した生活をしてゐたが、明治十年前後に出した文法書は

維新後鳥取縣權大書記官を經、日本銀行金庫課長となる。母久子、居區氏。少時四谷にあつて小學教育を受け、某漢學塾に學び、その頃から漢詩に特別な嗜好をもち、又叔父大竹昌德に就いて、夙に雪門の俳諧に遊んだといふ。弱冠の頃神田に移り、一ツ橋の高等商業學校に入學したが、正規の學課よりも文筆讀書の方により多く親しんだ。同窓には飯田旗軒・丸岡九華などがゐた。九華の紹介で、硯友社(別項)に入つてからは、文筆の方が面白くて、遂に學校を退いてこれに專心することになつた。小說としての處女作は「谷間の雪」(二十四年八月—十一月、都の花)であらうが、文壇にその名を認められたのは「離れ蕊」(二十四年八月、新著百種第十七號)であらう。爾後、讀賣新聞・山陽新報等に小說を寄稿し、硯友社の中堅作家の一人として相應人氣を集めた。前者に寄稿したものでは「晒し井」、後者へは「陽炎」などが有名であつた。日淸戰爭の際には春陽堂の依囑を受けて、獨力「日淸交戰錄」の編輯に當つた。戰爭後、やまと新聞社に入り、轉じて萬朝報記者となり、傍ら「新小說」「文藝俱樂部」「少年世界」等に小說を寄稿した。就中「薄けふり」(明治三十年六月、新小說)「抓み鹽」(三十一年七月、同上)等は好評を得た作であつた。晩年は不幸續きで、妻と二兒を先立て、次いで翌年歿した。萬朝報に揭載された「三人若衆」はその絕筆である。その漢詩の嗜好は大分後まで續いてゐた。また俳諧には素養があつたので、硯友社の句會の紫吟社でも、錚々たる作者であつた。英語が讀めただけに、英米の小說を耽讀してはよく飜案した。【作品】「五少年」(少年物、明治二十四年四月)、「離れ蕊」(二十四年八月)、「陽炎」(二十六年九月)、「こぼれ萩」(二十六年十月、「晒し井」外一篇)、明治文庫第七花痩集(二十七年二月)、「ぬくめ鳥」(二十七年十月)(以上單行本)等。その他匿名探偵小說數篇。

【批評】小說家としての花痩を論ずる際に、第一に見逃し難いことは、彼が探偵小說界の先驅者の一人であつたことである。處女作の「谷間の雪」からして既にさうであるが、地方新聞へ寄稿したものは大抵探偵小說であつた。本來は探偵小說でないものにも好んで探偵小說的分子を採用してゐる。今日彼の名が文學史に殘つてゐるのは、主として硯友社中堅の一人としてであるが、この背景がなくとも、探偵小說界の先驅者として、彼の名は當然文學史上に載錄される値ひがある。

〔柳田(泉)〕

中村吉藏 なかむらきちざう

劇作家【幼名】常治【號】春雨【閱歷】明治十年五月十五日、石見國津和野町大字後田の商家に生れた。明治二十八年(十九歲)大阪に出で、三十二年上京、早稻田專門學校哲學科に入學、且つ廣津柳浪に師事し、三十四年小說「無花果」(別項)を發表。三十六年改稱早稻田大學卒業。三十九年六月米國に渡り、ブリストン大學及びコロンビア大學に學び、後英獨地方を旅し、露西亞を經て四十二年歸朝、四十三年社會劇「牧師の家」を發表、爾來春雨の號を廢して實名を用ひた。四十四年文藝協會(別項)に島村抱月と共に「人形の家」の演出に當つた。翌大正二年協會解散、藝術座(別項)成立に際し、抱月に招かれて同座舞臺監督となつた。「剃刀」「飯」「帽子ピン」「眞人間」、その他の社會劇を同座のために執筆上演した。また「白隱和尙」「淀屋辰五郎」の二作をも發表した。七年抱月逝き、同座解散の後は、專ら劇作に耽り、大正九年「井伊大老の死」、同十年「大鹽平八郎」、十一年「錢屋五兵衞父子」等の三つの長篇歷史劇及び「地震」「牛と鬪ふ男」「無籍者」「道化役者」などの現代劇、或は「星亨」「讒言者日蓮」「人鮫」等をそれ〴〵發表刊行、且つ上演した。十四年以來、早稻田大學文學科講師としてギリシャ劇史・現代劇史を講じ、昭和三年度から沙翁劇研究の講座をも擔任した。

【人物・作風】處女作「無花果」をもつて文藝界に現はれた頃の彼は、新敎的の基督敎思想に立つてゐた。當時は宗敎的乃至基督敎的の思想運動が、靑年知識人の中に廣く橫溢してゐたのである。その後、彼が外遊中、歐米の近代思想に感化影響をうけ、就中、イプセン以來の近代劇の實演を觀、且つその戲曲に親しんで、思想の上にもその藝術表現の上にも、全く近代劇傳統の新しき演劇を創始する決心を固めて歸朝した。その後、恰も新劇運動の勃興に際會し、彼の新しき演劇に關する理論並に創作の實踐的效果を着々收めることになつた。後年、作者の思想が次第に民主主義的傾向を帶びて、一時は科學的社會主義に近づいたこともあるが、その後若干の變化を示して來てゐる。劇作家としての彼が新しき社會劇・歷史劇、及び最近の諸作の如き傾向のそれにまで進展して來た經過については、一々こゝに述べる暇がないが、彼の理論及び創作に於て、舞臺的劇場的に見て甚だ實踐的效果が多いといふ事は、他の新しき劇作家と比較して、種々な點で彼の特色とされなければならない。なほ歐洲演劇、就中イプセン劇・希臘劇・沙翁劇に關する研究及び作劇術、並に舞臺・劇場に關する研究等の理論と實際の兩方面に於ける造詣が深く、且つその方面の論著にも見るべきものが少くない。

〔武藤〕

中村敬宇 なかむらけいう 「中村正直」を見よ。

中村憲吉 なかむらけんきち

歌人【號】霧村草堂主人【流派】伊藤左千夫門人。アララギ同人。【閱歷】明治二十二年一月二十五日、廣島縣雙三郡布野村上布野中村修一の次男として生る。大正四年東京帝國大學法科大學經濟學科を卒業。同年十一月結婚。同五年十月まで東京に住み、歸國して家業に從ふ。同九年春兵庫縣西宮に假寓し、同十一年大阪每日新聞社經濟部に入り、同十五年退社歸村。家督を相續して再び家業に從つた。明治四十一年故堀內卓造の誘導により初めて作歌し、伊藤左千夫の門に入り、アララギ發刊と共にその同人となつて現在に及び、同派歌人の重鎭である。丁寧執拗の實相寫生と、新鮮の感覺と、萬葉調に加ふるに一種幽微な調べを以てその歌風の特色とする。第三歌集「しがらみ」頃から、もつと實相に深く參入した歌を作るに至り、故村の漫吟、比叡山の連作の如きその特色を發揮してゐる。特に比叡山の連作は、直接に大きい廣い生命に向つて自己の感動を開放して歌はうとしてゐる。【著書】〔歌集〕馬鈴薯の花(島木赤彦合著、大正二年)○林泉集(同五年)○中村憲吉選集(同十一年)○しがらみ(同十三年)○松の芽(同十四年)等。その他、古歌評釋・歌論・隨筆等がある。

〔齋藤(茂)〕

中村重助 なかむらぢゆうすけ

脚本作者【初代】〔別名〕俳名、故一。作者名として、嘉門とも稱したといふが、如何か。〔生歿〕寶曆五年(一七五五)八月三十日歿。享年五十八〔法名〕隨意院穩齋日道〔墓所〕東京本所番場妙源寺〔閱歷〕五代中村勘三郎の三男に生れ、表仕切場・樂屋等の取締や、三階の提書・席札等を始めたといふ。次兄中村仁右衞門が、表仕切場屋五兵衞父子」等の三つの長篇歷史劇及び「地震」「牛と鬪ふ男」「無籍者」「道化役者」などの現代劇、或は「星亨」「讒言者日蓮」「人鮫」等をそれ〴〵發表刊行、且つ上演した。十四年以來、早稻田大學文學科講師としてギリシャ劇史・現代劇史を講じ、昭和三年度から沙翁劇研究の講座をも擔任した。

【人物・作風】處女作「無花果」をもつて文藝界に現はれた頃の彼は、新敎的の基督敎思想に立つてゐた。當時は宗敎的乃至基督敎的の思想運動が、靑年知識人の中に廣く橫溢してゐたのである。その後、彼が外遊中、歐米の近代思想に感化影響をうけ、就中、イプセン以來の近代劇の實演を觀、且つその戲曲に親しんで、思想の上にもその藝術表現の上にも、全く近代劇傳統の新しき演劇を創始する決心を固めて歸朝した。その後、恰も新劇運動の勃興に際會し、彼の新しき演劇に關する理論並に創作の實踐的效果を着々收めることになつた。後年、作者の思想が次第に民主主義的傾向を帶びて、一時は科學的社會主義に近づいたこともあるが、その後若干の變化を示して來てゐる。劇作家としての彼が新しき社會劇・歷史劇、及び最近の諸作の如き傾向のそれにまで進展して來た經過については、一々こゝに述べる暇がないが、彼の理論及び創作に於て、舞臺的劇場的に見て甚だ實踐的效果が多いといふ事は、他の新しき劇作家と比較して、種々な點で彼の特色とされなければならない。なほ歐洲演劇、就中イプセン劇・希臘劇・沙翁劇に關する研究及び作劇術、並に舞臺・劇場に關する研究等の理論と實際の兩方面に於ける造詣が深く、且つその方面の論著にも見るべきものが少くない。

〔武藤〕

等の法規を定めたと傳へるから、これに基いたものであらう。中村家の出であるところに特殊の威令も行はれた事と思ふ。主として狂言の仕組等に關與して、作者無人の時のみ筆を執つた。從つて名作といふものも聞えぬ。但し仁右衞門は、せり出し・廻り道具等を工夫したといふところから見ても、彼には狂言作者たるべき素質があつたのであらう。

【二代】〔作者外に帳元のみを勤めた重助を二代と認める說もあるが、今これに從はぬ〕〔別名〕俳名、故一。作者名にも用ふ。初め笹林堂助、また金井三平。故門とも傳へるが、如何か。〔生歿〕享和三年(一八〇三)九月二十日歿。享年未詳。〔法名〕起念院千泉鶴子〔墓所〕初代に同じ。〔閱歷〕三代中村七三郎の伜、壕越榮陽(別項)について作道を學んだとあるが、早くは金井三笑に就いたかと思はれる。寶曆十一

源氏貢振袖(天明二年顏見世、中村座。與州攻・善知鳥・愛染明王)○初曆開曾我(天明四年春、森田座。曾我と夕霧、二番目遽飛胸とおさん茂兵衞の二日替り)○雪嬌竹振袖源氏(天明五年顏見世、中村座。爲朝)○雲井花吉野兜士(天明六年霜月、中村座。吉野櫛)○「今川本領貢入船」(天明七年八月、中村座。今川に御未刻太鼓)○菊伊達大門(寬政四年霜月、市村座。伊達秀衡)等がある。時代から世話へと作柄の展開した傾向が認められるが、漸次に輕味が加はつた。作意に風流があると評された所以である。(淨瑠璃)常磐津富本に名を擧げた。○樹花繼浮船(常磐津、安永五年顏見世、市村座。茶釜賣淺妻船)○夫婦酒替奴中仲(富本、安永六年十一月、市村座。鞍馬獅子)○夢似而富士白妙(常磐津、安永七年二月、市村座)○風曲江戶妓(富本、天明五年十一月、中村座。爲朝)○浮名草月小夜衣(常磐津、天明七年八月、中村座。おさん等の下について、文政中から作者として名が出たが、その末年に立作者となつた。主として淨瑠璃・長唄等に筆を執つた。常磐津「彌生の花淺草祭」(三社祭、又は善玉惡玉。天保三年三月、中村座)や長唄「內裡模樣源氏染」(田舍源氏。天保九年三月、市村座)等がある。〔守隨〕

【參考】新刻役者全書○芝居乘合話中村重助○作者名目三升屋二三治○狂言作者概略

中村春雨 なかむらしゆんう

「中村吉藏」を見よ。

中村星湖 なかむらせいこ

小說家・飜譯家【本名】將爲【閱歷】明治十七年二月十一日、山梨縣南都留郡河口村に生る。甲府中學を經て早稻田大學英文科に學び、四十年七月卒業。直ちに「早稻田文學」記者となる。その前年夏長篇小說「少年行」(別項)を脫稿、「早稻田文學」の懸賞募集に應じた。四十年四月選者長谷川二葉亭・島村抱月に依つて、その當選が公けに

等の法規を定めたと傳へるから、これに基いたものであらう。中村家の出であるところに特殊の威令も行はれた事と思ふ。主として狂言の仕組等に關與して、作者無人の時のみ筆を執つた。從つて名作といふものも聞えぬ。但し仁右衞門は、せり出し・廻り道具等を工夫したといふところから見ても、彼には狂言作者たるべき素質があつたのであらう。

【二代】（作者外に帳元のみを勤めた重助を二代と認める説もあるが、今これに從はぬ）〔別名〕俳名、故一。作者名にも用ふ。初め笹林堂助、また金井三平。故門とも傳へるが、如何か。〔生歿〕享和三年（一八〇三）九月二十日歿。享年未詳。〔法名〕起念院千泉鶴子〔墓所〕初代に同じ。〔閲歴〕三代中村七三郎の倅、壕越桑陽（別項）について作道を學んだとあるが、早くは金井三笑に就いたかと思はれる。寶暦十一年の頃から金井三平を以て名を現はし、時に中村清三郎や櫻田治助等の次席に列したが、明和元年十一月重助と改め、同五年霜月、森田座で立作者となつた。以來三座を往來し、櫻田治助と相並んで新進作者として大に氣を吐いた。四十年間ほど奮闘の後、大酒のために身を果したといふ。名作者の名を擧げたのはこの重助である。〔作品〕〔脚本〕繰返會我鰹（明和七年春、森田座。下り山下金作の女工藤とお千代半兵衞、女鳴神。夏まで續いた當り）○都染妓王被（明和七年顔見世、森田座。下り中村富十郎の女暫と白拍子妓王）○惠方會我年々曆（明和八年春、森田座。鹺五郎と草摺引・夕霧）○菊慈童酒宴の窟（酒呑童子と山姥・暫。三ヶ津の役者を三幕に配した顔見世の趣向）○兒華表飛入河紫（安永六年霜月、市村座。源氏十二段）○濃木交高尾會我（安永七年春、市村座。會我と伊達騒動・夕霧）○五代源氏貢振袖（天明二年顔見世、中村座。奥州攻・善知鳥・愛染明王）○初暦問會我（天明四年春、森田座。會我と夕霧、二番目戀飛脚とおさん茂兵衞の二日替り）○雪嬌竹振袖源氏（天明五年顔見世、中村座。爲朝）○雲井花吉野壯士（天明六年霜月、中村座。吉野櫛）○「今川本領貢入船」（天明七年八月、中村座。今川に御末刻太鼓）○菊伊達大門（寛政四年霜月、市村座。伊達秀衡）等がある。時代から世話へと作柄の展開した傾向が認められるが、漸次に輕味が加はつた。作意に風流があると評された所以である。〔淨瑠璃〕常磐津富本に名を擧げた。○樹花繰浮船（常磐津、安永五年顔見世、市村座。茶釜賣淺妻船）○夫婦酒替奴中仲（富本、安永六年十一月、市村座。鞍馬獅子）○夢似而富士白妙（常磐津、安永七年二月、市村座）○風曲江戸妓（富本、天明五年十一月、中村座。爲朝）○浮名草月小夜衣（常磐津、天明七年八月、中村座。おさん茂兵衞）○想中二世の臘夜（哄笑瑠璃。寛政四年十一月、市村座。冥途の道行）その他數多ある。〔著作〕「芝居乘合話」（別項）が彼の著作と傳へる。江戸歌舞伎一般に亙つた記事であるが、作者道の衰へを歎き、女方の心得の變化を憂ふる等、彼の人物を知る材料が見られる。

【三代】〔本名〕未詳。〔生歿〕文化二年（一八〇五）十二月十二日。享年未詳。〔法名〕義全院武仁善榮。〔閲歴〕八代守田勘彌の妹三津五郎の妻が再緣した事があるが、家系については明かでない。墓所は、初代・二代に同じ。作の見るべきものも傳はらぬ。

【四代】〔別名〕幼名、勝太郎。十助とも書く。故門。〔生歿〕天保十二年（一八四一）七月二十九日。享年未詳。〔法名〕故說院現乘日法〔墓所〕本所法恩寺中寶泉院〔閲歴〕四代中村七三郎の倅で、初め櫻田治助・松井幸三・勝俵藏等の下について、文政中から作者として名が出たが、その末年に立作者となつた。主として淨瑠璃・長唄等に筆を執つた。常磐津「彌生の花淺草祭」（三社祭、又は善玉惡玉。天保三年三月、中村座）や長唄「内裏模様源氏染」（田舍源氏。天保九年三月、市村座）等がある。〔守隨〕

【參考】新刻役者全書○芝居乘合話中村重助○作者名目三升屋二三治○狂言作者概略

中村春雨（なかむらしゅんう）「中村吉藏」を見よ。

中村星湖（なかむらせいこ）小說家・飜譯家【本名】將爲（まさため）【閲歴】明治十七年二月十一日、山梨縣南都留郡河口村に生る。甲府中學を經て早稻田大學英文科に學び、四十年七月卒業。直ちに「早稻田文學」記者となる。その前年夏長篇小說「少年行」（別項）を脱稿、「早稻田文學」の懸賞募集に應じた。四十年四月選者長谷川二葉亭・島村抱月に依つて、その當選が公けにされた。五月、脚本當選作たる佐野天聲の「意志」と共に、「早稻田文學」臨時增刊號に發表さるゝや、一躍新進作家の列に加はり、以後作家として、又「早稻田文學」記者として活躍した。四十一年二月短篇集「半生」の出版を初めとして、短篇集「星湖集」（四十三年四月）、「漂泊」（大正二年八月）、「女のなか」（三年九月）、「失はれた指輪」（八年七月）及び「島原の尼」（十一年）等があり、又大正十二年には、長篇小說「藤巻順吉」を福岡日日新聞に連載した。同三年四月には、相馬御風と共に早稻田文學普及會を起し、文學講話叢書を刊行すると同時に、後には會員を指導する任にあたつた。外國作家の中では特に佛蘭西のフローベルに私淑し、大正六年六月「ボヴリイ夫人」の飜譯を出版して直ちに發賣禁止の厄にあつたが、九年十一月、その禁が解けて新潮社から改譯出版された。またモウパッサン、アンドレーフなどの飜譯も數種ある。昭和三年五月渡歐、主として佛蘭西にあつてその地の文學、特に農民藝術を研究し、四年六月歸朝した。【作品】長篇の代表作としては、處女作「少年行」、短篇では、自然主義的なものとして「星湖集」の諸篇、自然主義に象徴主義的要素を加味した「失はれた指輪」の諸篇を擧げることが出來る。【批評】作家としての全體の特色は、客觀的に事象人物の動きを描き出す點にある。時とすると、初期の作品には、平面的描寫に過ぎる點があつたが、中期の作品にはその缺點が全くなくなつた。併しそれと同時に、單に描寫で滿足せず、象徴的筆致を用ひ、又事象人物の意味づけに重きを置く傾向が見えて來た。これは自然主義に對する作者の不滿の表はれとも見られる。現在では、その不滿が、未だ何處にも落着を見出し得ない。〔宮島〕

中村清五郎（なかむらせいごらう）脚本作者【別名】幼名玄之助。俳名了雀【生歿】享保三年（一七一八）正月二十四日歿。享年未詳。【閲歴】元祿年代には役者として奮闘してゐたが、後、中村傳七（別項）の門に入り、作者に轉じて遂に立作者にまで昇り、寶永年代に名を殘した。その妻が生島新五郎の妹であつた關係から、彼も綺島事件に連坐して、正德四年遠島に處せられて病死した。【作品】現在知られてゐる彼の作品は極めて尠いが、時代をやつす作柄に、獨特の持味を示した。「女帝愛護若」（愛護若の書き替へ。寶永四年三月、中村座）や「中將姫京雛」（別項）等がある。〔守隨〕

【參考】狂言作者概略○日本演劇史 伊原敏郎

中村清三郎（なかむらせいざぶらう）脚本作者【初代】【別名】中村明石清三郎。幼名藤吉、俳名重助（なかむらぢゅうすけ）脚本作者【初代】【別名】俳名、故一。作者名として、嘉門とも稱したといふが、如何か。〔生歿〕寶暦五年（一七五五）八月三十日歿。享年五十八〔法名〕隨意院穆齋日道〔墓所〕東京本所番場妙源寺〔閲歴〕五代中村勘三郎の三男に生れ、表仕切場・樂屋等の取締や、三階の捉書・席札等を始めたといふ。次兄中村仁右衞門が、表仕切場に進展して來た經過については、一々ここに述べる暇がないが、彼の理論及び創作に於て、舞臺的劇場的に見て甚だ實踐的效果が多いといふ事は、他の新しき劇作家と比較して、種々な點で彼の特色とされなければならない。なほ歐洲演劇就中イプセン劇・希臘劇・沙翁劇に關する研究及び作劇術、並に舞臺・劇場に關する研究等の理論と實際の兩方面に於ける造詣が深く、且つその方面の論著にも見るべきものが少くない。〔武藤〕

〔齋藤（茂）〕

十三年）○松の芽（同十四年）等。その他、古歌評釋・歌論・隨筆等がある。

名藤橘、後、蓮營と改めるとの傳もある。〔生殁〕寛保三年（一七四〇三）二月十七日殁との説がある。享年未詳。〔閲歴〕二代中村明石勘三郎の妾腹の子といひ、一説に二代の孫説もあり、中村清五郎の娘を娶るとも傳へる。異母姉が中村七三郎の妻である關係からも、初めは役者であつたらうと想像されるが、分明でない。作者としては、元祿年代中村座に勤め、中村七三郎・三升屋兵庫・中村清五郎等と合作した。〔作品〕作風に關する所傳はないが、江戸歌舞伎に世話種の抒情的要素を入れたのは、彼の力に由るかと思ふ。知られてゐる作品は、左の數種に過ぎぬ。○子子子子子子（元祿九年十一月、中村座。女鳴神、猫の所作で有名）○參會名護屋（別項）○百合若大臣（元祿十年、同座）○「兵根元曾我」（別項）○龍女三十二相（元祿十一年、同座）等。

〔二代〕〔閲歴〕作者名を明石清三郎、又は藤橘とも名乘つてゐて、寛延寶曆頃、中村座に勤めてゐる。立作者の地位にゐるが、名を殘した程の名作は餘り傳はらぬ。幼名を藤吉、俳名を藤橘といつた。寛保三年に殁した清三郎が、二代かとも疑はれぬでもない。さうすると、寶曆年代の清三郎は三代に當るが、この間の代數は明確を缺いてゐる。〔守隨〕

〔參考〕狂言作者概略○日本演劇史 伊原敏郎

中村雪後（なかむらせつご）「中村花痩」を見よ。

中村傳九郎（なかむらでんくらう） 俳優 〔初名〕中村勘太郎。又四代中村勘三郎〔俳名〕舞鶴〔生殁〕寛文二年生れ、正德三年（一七一三）十月二十五日殁す。享年五十二〔法名〕本住院道觀日法〔墓所〕本所荒井町妙源寺〔閲歴〕父は初代中村勘三郎の長男で、二代勘三郎の兄中村勘九郎。延寶六年、三代勘三郎が夭折し、その實子幼きため、入つて宗家をつぎ、四代勘三郎となる。この時僅に十七歳。貞享元年、竹松を五代勘三郎とし、己れは太夫元をやめてただの俳優となり、初めて中村傳九郎といふ。元祿元年三月、中村座で「奴朝比奈大磯通」に朝比奈三郎をつとめ、糸鬢頭に、頬へ鎌髭をつけ、顔に猿隈と稱する化粧をなし、臺詞に關東訛りのモサ言葉をつかひ、坊主小兵衛といふ俳優を供奴にして、「丹前」の藝を演つたのが世好に投じて、今日まで彼の朝比奈は團十郎の五郎、七三郎の十郎と共に歌舞伎劇の典型となつてゐる。〔藝風〕體格は小兵だつたが、所作事が上手で、且つ武道や荒事もよく出來たのみならず、前にいつた朝比奈のモサ言葉と同じく、破格の關東訛りと、一種の警句をセリフにいつて觀客を悦ばすのが、その特色であつた。例へば「貴殿の一言、耳に蹴込んで、喜悦殆ど淺からぬ仕合」「數盃汲んで、土手ツ腹がよじりを返す」の類である。これを傳九郎の「名言」といつた。〔傳系〕〔二代〕八代勘三郎と同人。〔三代〕十一代勘三郎と同人。〔四代〕初名は大谷德五郎。三代大谷謹治の養子、中村勘三郎の婿である。〔五代〕十二代中村勘三郎と同人。〔伊原〕

中村傳七（なかむらでんしち） 脚本作者 〔別名〕幼名傳次郎。俳名角止。〔殁年〕享保十年（一七二五）か、十一年か。享年未詳。〔法名〕觀應院法譽日傳〔墓所〕東京本所妙源寺〔閲歴〕四代中村勘三郎事元祖中村傳九郎の門人として、初め役者であつたが、後、作者となり、元祿後享保中頃まで主として中村座の作者として働いた。江戸に於ける作者專業の嚆矢であると傳へる外、劇場内部の法式を定めるなど、漸く内容充實の機運に向つた江戸歌舞伎のために、大なる功勞者である。引道具・せり出し・押出し等の大道具の活用を盛んに見せて、當時の觀衆を驚歎せしめた。〔作品〕作風につき、木に竹をついだやうだとの惡評があるが、これは一には江戸狂言の通弊でもあり、特徴でもあるところで、二には狂言によつて慰安を與へるといふ彼の主義からでもある。かくて時代世話の混淆等が全然問題にされぬ作柄が多いのである。享保に入つてからは、村瀬源三郎との合作が多い。主な當り狂言には、女楠天下太平記（大根演。正德三年十一月、中村座）○万民大福帳（顔見世に暫の初めと傳へる。正德四年十一月、同座）○坂東一壽曾我（時宗の虚無僧。正德五年正月、同座。大當り七月まで續く。七月より切に鳴神）○一富士禮拜曾我（享保五年正月、同座）○松餝鎌倉開（鍾馗、蒙古征伐。享保九年正月、同座）○入船隅田川（隅田川。享保九年二月、同座）○太平御國歌舞妓（太平記。同年十一月、同座）○舩伊豆日記（伊豆日記。享保十年正月、同座）等。なほ脇踊の「焙烙賣」と「酒呑童子」とが彼の作といふ説も傳はつてゐる。〔守隨〕

〔參考〕歌舞伎事始 爲永一蝶 ○狂言作者概略○紙屑籠 三升屋二三治 ○劇場訓蒙圖彙 式亭三馬

中村富十郎（なかむらとみじふらう） 俳優 〔初代〕〔家號〕天王寺屋〔俳名〕慶子、また琴嶺舍。〔生殁〕享保四年に生れ、天明六年（一七八六）八月三日殁す。享年六十八。〔法名〕蓮華院慶寿日榮〔墓所〕大阪中寺町藥王寺。また一心寺〔閲歴〕初代芳澤あやめの三男。中村新五郎に養はれ、享保十四年冬、養父と共に江戸へ來り、十六年春、市村座で子役として初舞臺をつとむ。同年冬、京都へ上り、初めて女方として出で、これより三都の劇場を去來し、瀬川菊之丞と共に女方の二大巨星だつた。〔藝風〕容貌美しく、藝も多方面であつた。實父あやめは地藝專門だつたが、彼は地藝と所作とを兼ね、娘方・傾城・奥方・長幼・尊卑等の悉くに巧みで、殊に女武道事を得意とした。「女朝比奈」「女由良之助」「女非人仇討」「女景清」などがそれである。晩年には更に男子に扮し、「揚羽の蝶吉」「大藏卿」「藤屋伊左衛門」「竹抜き五郎」「景清」などをしてゐる。所作事での當り藝は「石橋」と「道成寺」で、今日行はれてゐる「娘道成寺」は彼が創めた曲である。

〔二代〕〔家號〕八幡屋〔初名〕市川熊太郎・中村三光・三代中村松江〔俳名〕慶子〔生殁〕天明六年京都に生れ、安政二年（一八五五）二月十三日殁した。享年七十。〔法名〕妙案院高林三光日暉〔墓所〕大阪寺町正法寺〔閲歴〕はじめ四代市川團藏の門下甚之助の弟子となり、子供芝居へ出たが、文化九年冬、三代歌右衛門の門に入つて三光といひ、大阪の大劇場へ現はれ、文化十年冬、松江と改めて江戸の中村座へ下つた。天保四年十一月、富十郎の名を繼ぎ、同十四年、生活が贅澤だといふので、大阪を追放され、堺を根據として京都の劇場をつとめてゐたが、嘉永六年九月、江戸の市村座へ下り、堺へ歸つてから死んだ。〔藝風〕容貌は揚らなかつたが、姿勢よく、音聲すぐれ、やはり初代と同じく地藝と所作とを兼ね、地藝では時代物も世話物もよく出來、且つ音曲や唱歌も上手だつた。大阪では難波に住したので、俗に「難波の太夫」といつた。

〔三代〕〔初名〕中村梅太郎〔家號〕八幡屋〔生殁〕安政六年大阪に生れ、明治三十四年二月二十一日殁す。享年四十三。〔法名〕梅林院高圓大光日富〔墓所〕東京小石川白山大乘寺〔閲歴〕中村鶴助の弟子。明治十九年、鳥熊に

伴はれ、東京の春木座（後、本郷座）へ來り、二十三年十一月、富十郎の名をついだ。〔伊原〕

中村尚輔（なかむらなおすけ） 〔號〕蘚舍〔生殁〕文化六年生れ、明治十二年七月七日殁す。享年七十一。〔閲歴〕讃岐高松の藩士で、初め武を以て家名を顯はさうと思つて槍術を學び、その奥義を極めた。後、友松良介に從つて歌文を學んだ。詠歌に巧みで、又手鞠波語格に精しかつた。明治初年の頃は、皇學寮で教鞭を執つてゐた。〔著書〕尚輔は本居派の流を汲んだ人で、宣長の「詞の玉緒」（別項）を增補訂正して、「玉の緒繼添」三卷（詞の玉緒參照）を著はし、又宣長の「古今集遠鏡」（別項）に倣つて「拾遺集遠鏡」を著はした。この他、「雅語摘要解」「蘚の露」「蘚舍歌集」等の著がある。

た。五歳の時から就いた句讀の師岩崎多右衛門は、大にその才を愛して教導懇篤を極め、十歳の時勸めて昌平黌の素讀吟味を受けさせたが、成績拔群の故を以て白銀三枚の賞に與かつた。この事は子供心にも學問に多大の趣味を感じ、他日偉大なる學者たらしめた轉機となつた。十五歳の時井部香山の塾に入る。學ぶこと三年、十八歳の時、昌平黌寄宿寮に入つた。これから後の勉强は非常なもので、彼はあらゆる漢籍を諳誦し、一字も謬らなかつたことを以て有名であり、これとあの立派な文章とは、昌平黌時代の修養の賜に外ならぬ。安政二年五月には、二十四歳の若さで學問所教授方出役を命ぜられ、四年中賊呼ばはりをされ、身邊の危險に迫つた時代もあつた。文久二年正月箕作阮甫の懇請に依り、箕作奎吾・同大六（菊池大麓）を門人に取つた。彼は奎吾がほぼ英學に通じてゐるので、來塾の度毎に人なき一室に請じて、發音・譯解等を質したと言ひ傳へられてゐる。彼が手寫した英漢辭書十册が傳はつてゐる。勝海舟の所藏を借り、慶應元年夏九十餘日を費して筆寫せるものである。時勢に目醒めた幕府は、慶應二年俊秀の少年十二人を選んで英國に留學せしむるに當り、監督として敬宇は川路太郎と共に同行を命ぜられ、十月二十六日、英國商船で横濱を出帆した（留學生の中には後年の外山正一・林董・菊池大麓等がゐた）。然るに留まる事僅に一年餘、幕府が倒れて學資の途絶え、慶應四年四月倫敦發、六月末横濱着、江戸に入つまで勤續した。これより先き十年八月、東京大學文學科教師を囑託され、十二年一月には東京學士會院會員に、十四年教授に任ぜられ、二十一年六月文學博士の學位を受けた。十九年元老院議官に任じ、二十三年貴族院議員に勅任された。その間市會又は區會の議員となつたこともある。併しこの方面に於ては眞面目に職務を見たと云ふ以外、格別特記すべき程のことはない。二十四年六月二日俄に舌根に異常を覺え、七日午後安らかに長逝した。

〔著作〕西國立志編十一册（譯、明治四年刊）○自由之理六册（譯、明治四年刊）○英譯漢語一册（譯、明治四年刊）○共和政治三册（譯、明治六年刊）○西國童子鑑二册（譯、明治六年刊）○西稗雜纂二册（譯、明治七—九年刊）○西洋品行論十二册（譯、明治十一年刊）○拿破崙童時事童子鑑（譯、

の間の代數は明確を缺いてゐる。【守隨】

【參考】狂言作者概略○日本演劇史 伊原敏郎

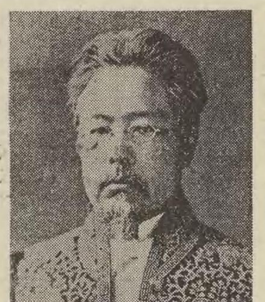
中村雪後（なかむらせっご）「中村花痩」を見よ。

中村傳九郎（なかむらでんくらう） 俳優 【初名】中村勘太郎。又四代中村勘三郎【俳名】舞鶴【生歿】寛文二年生れ、正德三年(一三七三)十月二十五日歿す。享年五十二【法名】本住院道觀日法【墓所】本所荒井町妙源寺【閲歷】父は初代中村勘三郎の長男で、二代勘三郎の兄中村勘九郎。延寶六年、三代勘三郎が夭折伴はれ、東京の春木座(後、本郷座)へ來り、二十三年十一月、富十郎の名をついだ。【伊原】

中村尚輔（なかむらなおすけ） 國學者【通稱】與三【號】蘐舍【生歿】文化六年生れ、明治十二年七月七日歿す。享年七十一。【閲歷】讃岐高松の藩士で、初め武を以て家名を顯はさうと思つて槍術を學び、その奥義を極めた。後、友松良介に從つて歌文を學んだ。詠歌に巧みで、又手爾波語格に精しかつた。明治初年の頃は、皇學寮で教鞭を執つてゐた。【著書】尚輔は本居派の流を汲んだ人で、宣長の「詞の玉緒」(別項)を增補訂正して、「玉の緒繰添」三卷(詞の玉緒參照)を著はし、又宣長の「古今集遠鏡」(別項)に倣つて「拾遺集遠鏡」を著はした。この他、「雅語摘要解」「蘐の露」「蘐舍歌集」等の著がある。

【參考】香川縣史 【龜田】

中村正直（なかむらまさなお） 學者 【姓名】幼名釼太郎。後、敬輔に改む(靜岡に在る間濵主齒之助に憚り一時敬太郎と稱す)。【號】敬宇。幼時鶴鳴・梧山の號を用ひた。【生歿】天保三年五月二十六日江戸麻布に生れ、明治二十四年六月七日江戸川の私邸に逝く。享年六十。【墓所】谷中天王寺【家系】父は通稱武兵衞、京都二條城交番同心、母松村氏。家貧にして父は眞綿を伸す手內職を營みつつ正直の教育に力を注いだと云ふ。安政五年四月高橋氏鐵子を娶る(明治三十九年六月九日歿)。一女に、親族の一男を迎へて家を嗣がせた。【閲歷】傳ふる所に依れば、三歳にして句讀を葛馬茂右衞門に、書を鹽田龍潭に學ぶ。鶴鳴は卽ち龍潭先生の與へた雅號。後、石川梧堂に就き書道大に進み、その與ふる所の雅號梧山は、直に神童中村氏を連想させ、名門貴紳爭うて揮毫を乞うた。五歳の時から就いた句讀の師岩崎多右衞門は、大にその才を愛して教導懇篤を極め、十歳の時勸めて昌平黌の素讀吟味を受けさせたが、成績拔群の故を以て白銀三枚の賞に與かつた。この事は子供心にも學問に多大の趣味を感じ、他日偉大なる學者たらしめた轉機となつた。十五歳の時井部香山の塾に入る。學ぶこと三年、十八歳の時、昌平黌寄宿寮に入つた。これから後の勉强は非常なもので、彼はあらゆる漢籍を諳誦し、一字も謬らなかつたことを以て有名であり、これとあの立派な文章とは、昌平黌時代の修養の賜に外ならぬ。安政二年五月には、二十四歳の若さで學問所教授方出役を命ぜられ、四年六月には、學問所勤番に進んだ。同十一月に至り、甲府徽典館學頭の命を受く。徽典館は幕府の譴を蒙つて移住せる旗下の子弟を教導する所、生徒は往々驕傲で教官を苦しめた事も稀でなかつた。敬宇、少壯の身を以てこの大任を拜し、勉學躬行遂に生徒の畏服する所となり、學風も頓に刷新されたと云ふ。六年春罷めて再び江戸に歸り、學問所勤番組頭勤方を拜命し、萬延元年には儒者勤向見習となり、文久元年儒者見習に進み、翌二年終に儒者に列し、大御番の上に班するに至つた。元治元年將軍家茂の上京に陪從したが、幾くもなく父駕に從つて東歸し、これより專心子弟の薰陶に當つた。彼は又早く昌平黌內に在つて熱心に洋學を研究した。ために浪士輩から國賊呼ばはりをされ、身邊の危險に迫つた時代もあつた。文久二年正月箕作阮甫の懇請に依り、箕作奎吾・同大六(菊池大麓)を門人に取つた。彼は奎吾がほぼ英學に通じてゐるので、來塾の度每に人なき一室に請じて、發音・譯解等を質したと言ひ傳へられてゐる。彼が手寫した英漢辭書十册が傳はつてゐる。勝海舟の所藏を借り、慶應元年夏九十餘日を費して筆寫せるものである。時勢に目醒めた幕府は、慶應二年俊秀の少年十二人を選んで英國に留學せしむるに當り、監督として敬宇は川路太郎と共に同行を命ぜられ、十月二十六日、英國商船で横濱を出帆した(留學生の中には後年の外山正一・林董・菊池大麓等がゐた)。然るに留まる事僅に一年餘、幕府が倒れて學資の途絶え、慶應四年四月倫敦發、六月末横濱着、江戸に入つた。時に將軍慶喜は恭順を表して駿遠の地に退く。幕府の舊臣これに隨ふ者多く、敬宇も亦八月靜岡に移つた。やがて藩學學問所の一等教授となり、明治五年六月の東上まで勤續した。この間、かの有名なる「西國立志編」(別項)「自由之理」の邦譯を公にした。五年の東上は、勝安房を介して時の大藏大輔井上馨の懇請に由るものである。新設飜譯局を主宰すべき囑命は固辭したが、在宅の儘仕事に從つても差支なしとの條件で、遂に同八月「大藏省飜譯御用申付候事」の辭令を受けた。これ明治政府へ仕官した初めで、東上後の第一着の事業に、同六年二月の同人社の設立がある。大藏省の方は飜譯局の廢せらるゝと共に罷め、暫く閑散の身であつたが、同八年十一月、東京女子師範學校の設立せらるゝに及び、强ひて請はるゝ儘攝理の依囑に應じ、十三年一旦辭任したが、十七年再び校長の命を承け、逝去の時まで勤續した。これより先き十年八月、東京大學文學科教師を囑託され、十二年一月には東京學士會院會員に、十四年教授に任ぜられ、二十一年六月文學博士の學位を受けた。十九年元老院議官に任じ、二十三年貴族院議員に勅任された。その間市會又は區會の議員となつたこともある。併しこの方面に於ては眞面目に職務を見たと云ふ以外、格別特記すべき程のことはない。二十四年六月二日俄に舌根に異常を覺え、七日午後安らかに長逝した。



中村正直

【著作】西國立志編十一册(譯、明治四年刊)○自由之理六册(譯、明治四年刊)○英譯漢語一册(譯、明治四年刊)○共利政治三册(譯、明治六年刊)○西稗雜纂二册(譯、明治七—九年刊)○西洋品行論十二册(譯、明治十一年刊)○拿破崙童時事童子龜鑑(譯、明治十七年刊)○西洋節用論一册(譯、明治十九年刊)○報償論一册(著、明治二十一年刊)。なほ外に門人等の編纂した「敬宇先生詩文偶抄」(松村操編、明治十四年刊)、「敬宇中村先生演說集」(木平謨編、明治二十一年刊)がある。以上のうち「西國立志編」(別項)が最も廣く讀まれ、これに次いで「自由之理」が讀まれ、以て異常な感化を當時の青年に與へた。【人物】第一に感服すべきは、その刻苦勵精、進んで熄まざるの好學的態度である。恐らく儒者として殆ど完成に近き逸品で、而も時勢の刺戟に應じ、獨學を以て蘭・英に通じ、晚年に及んではゲーテを讀み、又法華經の眞髓を探らんとして梵語を學び、頗る通ずる所があり、博識强記、嚢中に物を探るが如しと云はれた。第二には德行高潔で幾多の逸話がある。第三に宗教心である。彼は恐らく所謂基督信徒ではなかつたらう。ただ彼は謙虚の心を以て道を求めた。儒

中村傳七（なかむらでんしち） 脚本作者 【別名】幼名傳次郎。俳名角止。【歿年】享保十年(二三八五)か、十一年か。享年未詳。【法名】觀應院法譽日傳【墓所】東京本所妙源寺【閲歷】四代中村勘三郎事元祖中村傳九郎の門人として、初め役者であつたが、後、作者となり、元祿後享保中頃まで主として中村座の作者として働いた。江戸に於ける作者專業の嚆矢であると傳へる外、劇場內部の法式を定めるなど、漸く內容充實の機運に向つた江戸歌舞伎【家號】天王寺屋【俳名】慶子、また琴嶺舍。【生歿】享保四年に生れ、天明六年(一七八六)八月三日歿す。享年六十八。【法名】蓮華院慶子日榮【墓所】大阪中寺町藥王寺。また一心寺【閲歷】初代芳澤あやめの三男。中村新五郎に養はれ、享保十四年冬、養父と共に江戸へ來り、十六年春、市村座で子役として初舞臺をつとむ。同年冬、京都へ上り、初めて女方として出で、これより三都の劇場を去來し、瀨川菊之丞と共に女方の二大巨星だつた。【藝風】容貌は揚らなかつたが、姿勢よく、音聲すぐれ、やはり初代と同じく地藝と所作とを兼ね、地藝では時代物も世話物もよく出來、且つ音曲や唱歌も上手だつた。大阪では難波に住したので、俗に「難波の太夫」といつた。【三代】【初名】中村梅太郎【家號】八幡屋【生歿】安政六年大阪に生れ、明治三十四年二月二十一日歿す。享年四十三。【法名】梅林院高圓大光日富【墓所】東京小石川白山大乘寺【閲歷】中村鶴助の弟子。明治十九年、鳥熊に

者流の排外思想に遠ざかつたのは洋學のお蔭であらうが、洋行後は敢然として信者以上に熱心なる基督教の提灯持となつた。要するに彼は一個の徹底した舊時代の典型的君子であつて、新時代を指導すべき大先覺ではなかつた。併し著作を通じての新時代への影響に就いて見れば福澤諭吉のそれにも匹敵する。

【業績】敬宇の事業の中には、前記官歴に示されたる教授教育の公務の外、訓盲啞院の創立と云ふのがある。東京築地に在留せる醫師英國人ホールドの主唱を翼賛し、數名の友人を誘つて樂善會を組織したのは明治八年五月、翌六月初めて訓盲啞院設立を出願し、九年三月その許可を得た。教育を始めたのは十三年二月だが、これが我が國に於けるこの種事業の嚆矢であり、實にまた今日の東京盲學校幷に東京聾啞學校の前身をなすものである。併し敬宇の事業として最も著名なるは、寧ろ同人社の創設であらう。彼の東上後、靜岡に在つた時の門人や又都下の學生で、就いて教を願ふ者が多かつたので、六年二月、遂に邸内に家塾を設けることにした。これが即ち後に慶應義塾と並び稱せられた同人社である。主として英學を授け、創立當初は塾生僅かに十八人であつた。日を經るに從ひ、入門者漸く多く、後には生徒數常に數百人を下らなかつたが、彼の他界と共に湮滅に歸した。次に彼の大事業は、數多き著譯と共に「同人社文學雜誌」（別項）である。

【參考】中村正直傳　石井研堂　【吉野】

中村武羅夫（なかむらむらを）

小説家・評論家

【閲歴】明治十九年十月四日、石狩國岩見澤町に生れた。小學卒業後、土地の小學校長田村顯に就いて、國語・漢文・算術などを三ケ年間學んだ。十七八歳の頃札幌に出で、畫を志して日本畫家佐々木泉溪に二ケ年餘り學んだ。また二十歳より二十二歳まで、小學校の代用教員ともなつたが、小栗風葉の「青春」（別項）を讀んで文學熱を刺戟され、明治四十年（二十二歳）の春、文學者たらんとして上京、大町桂月の紹介で風葉の門下生となつた。又當時田山花袋編輯の「文章世界」に投書した關係で、同じく桂月の紹介で花袋と相知り、その他、徳田秋聲・眞山青果などとも相知つた。翌年「新潮」の訪問記者となり、明治四十四五年頃よりその編輯を託せられて今日に及んでゐる。その間大正十四年より昭和三年まで、文藝雜誌「不同調」を發行經營したこともある。【著作】【長篇小説】人生（第一部惡の門・第二部獸人。大正九年十一月新潮社刊。處女作）○渦潮（時事新報所載）○女王○女人群像○夜の潮○嘆の都○處女（以上講談社刊）○愛憎の彼方へ（春陽堂刊）○群盲（大正十二年九月、讀賣）○瑠璃鳥○綠の春。その他「現代長篇三人全集」（新潮社刊）中の十册に收められた作品がある。【評論・隨筆】文壇隨筆　○誰だ？　花園を荒す者は○中村武羅夫讀物全集等。

【批評】終始一貫、名編輯者として活躍して來たが、その間、風葉門にあつて長篇の筆を磨き、長い雌伏の後に目覺しい雄飛をなし、長篇作家として一家を成した。その作風は線が飽くまで太く、その構想は寧ろ粗雜と思はれるまでにスケールが大きく、遮二無二描破して行くところに特徴がある。この作風は彼の性格の反映でもあると思はれる。なほ彼は創作の傍ら文藝批評・時事評論・社會時評、その他映畫・音樂など、あらゆる分野に亙つて覇氣に滿ちた健筆を揮つてゐる。　【高須】

長屋王（ながやわう）

詩人・歌人　【生歿】天武帝の四年に生れ、聖武帝の天平元年（一三八九）二月十二日に死を賜はる。享年五十四。【系圖】天武帝―高市皇子―長屋王　【閲歴・人物】歌人であり又詩人である。「懷風藻」の詩に據れば、晩秋に詩人を會して新羅の客を宴し給ふことが多く見える。それ等の點から推するに、詩人としては歌人としてよりも一層傑出し給うたやうである。天武帝の御孫として當時の新知識であり、權勢をも有せられた事は當然である。故に藤原氏の人々には邪魔物扱ひにせられたのは已むを得ないが、同情すべきである。即ち天平元年二月十一日に中臣東人が、王は左道を學んで國家を傾けようとすると讒した（續紀）。その裏面には、勿論藤原氏一族が王に對しての反感が存在する。翌十二日、藤原武智麿が王の邸を急に圍んだので、實は憤激して王は自殺せられたのである。しかし天平十年七月には、王の遺臣大伴子虫が中臣東人を斬り殺した。その時に、「長屋王を誣告したのは汝だ」と稱してゐる。又「日本靈異記」卷中には、「有二姨妬人一讒二天皇一奏二長屋謀傾一社稷一將レ奪二國位一」とも記してゐる。結局長屋王は、藤原氏のために除かれたものである。左道とは佛教に結びつけた妖術で、當時流行したものらしく、「續紀」の天平元年四月三日の條にこれを禁止した事も見えてゐる。

【參考】懷風藻○日本靈異記　【山岸】

永愷（ながやす）

長好（ながよし）

歌人　【姓名】望月氏。廣澤氏とも。名は別に兼友とも稱し、後には長孝とも書く。【號】小狹野屋・桂雲　【生歿】元和五年に生れ、延寶九年（一三四一）三月十五日歿。享年六十三（六十四歳説もある）。【學統】細川幽齋―松永貞德―望月長好　【閲歴】近世歌人中、閲歴不明の一人である。早く信濃から上洛し、貞門に於て詠歌の修行を積んだものと見られる。貞德の門下には註釋の事に携はつたやうな學者の多かつた中に、彼は眞に出藍の歌人であつた。いつ頃か洛西廣澤池畔に菴を結び（家集に、萬治元年彼の四十歳當時、この小狹野屋で詠んだ作が遺つてゐる）、それを小狹野屋と呼んだ。「此秋もまた世にかよふ草の戸にさせてふ蟲の聲ぞ悲しき」と云ふ菴での歌が有名になり、飛鳥井雅章が激賞したと云ふ逸話も傳へられてゐる。その菴が或る年の大風に吹き飛ばされたことが、家集に見えるところからしても、全くの一小菴であつたものらしい。併し歌人らしい歌人に乏しい時代に於て、彼を慕ふ人々との間に相當の往來もあつた。木下重胤・參議實量・飛鳥井雅直・木下順庵・權僧正隨庸等の名が、同門以外に彼の家集に出てゐる。「けふもまた垣ねのうばらつたひきて霜ふむ鳥の跡はありけり」と云ふ彼の詠によつて、その閑居が「霜ふむ鳥の庵」と呼ばれたとか、「よしや吹け秋の草木の嵐山月のかつらも雲にしをるゝ」と云ふ名月の夜の雨を憾んで詠んだ歌のために、桂雲の諢名を獲たとかいふ逸話は、彼の社會的聲譽のほどを裏書するものと解することが出來る。なほ彼が單なる厭世的隱者でなかつたことは、家集第四卷中の文集によつても、その交誼の廣さを證することが出來よう。【著作】廣澤輯藻（別項）○桂雲集類題（廣澤輯藻中の歌、並にその集に洩れ傳へられた歌の類題で、天明元年長好の百回忌に有賀長收が校正出版）○詠歌大本祕訣五卷（寫）（門人長雅に傳へた詠歌上の口傳書で、卷一に歌の三義、卷二・三に詠歌大概の註、卷四・五に歌制詞が載せられてゐる）○古今集仰戀十卷（寫）○極大極祕五字傳一卷（寫）等。

【歌風】萎靡して振はない當時の歌壇に於て、注目すべき歌人の一たるを失はない。彼の實生活の反映の妙趣と共に、いかにも技巧の妙味が存してゐる。

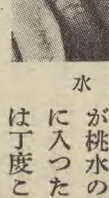
つらかりし夜の嵐も忘られて明くれは拾ふ庭のさゝ栗

夕嵐木のはをさそふ聲のうちに行秋送る入相のかね

彼の交友には漢詩人があり、屢々和漢聯句を試みてゐる。「鐘聲送秋」とか「閑居聞蟄」とか云ふ多くの歌題が既にそれを反映してゐるが一般に辭句が引緊つて居り、體言止が多い。

すゞしさや月みぬ宿も夕がほの雪の花垣ならの下風

いへばえにいはぬ心を山ぶきの花にやさわぐ岸の



半井桃水

半井桃水（なからゐとうすい）

小説家　【生歿】萬延元年十二月二日生れ、大正十五年十一月二十一日歿。享年六十七。【墓所】東京市本郷區片町養昌寺　【閲歴】對馬國嚴原の人。上京して尺振八の共立學舍に學び、明治二十一年、東京朝日新聞記者となつた。翌二十二年、同紙上に「啞聾子」を載せ、次いで「しぐれ緣」「海王丸」などを掲げて、新聞小説家として名を馳せた。次いで二十四年に書いた「胡砂吹く風」は通俗小説として上乘のものと稱せられた。樋口一葉（別項）が桃水の門に入つたのは丁度この頃であつた。一葉の處女作「闇櫻」は桃水の校閲を經たもので、一葉の處女作「闇櫻」は桃水の校閲を經たもので、その情熱的な巢窟を脫して、

「竹澤先生と項羽と劉長」

「竹澤先生といふ人」

志を承け繼ぐことに努力し、一方「演劇新潮」の同人となつた。昭和初年の大患後は、昔日の如き活動を示さなくなつた。【著作】【選集】明治大正文學全集第三十四卷○日本戯曲全集第四十四卷○現代戯曲全集第九卷。【單行本】盲目の川○彼等の運命○或る人々○明るい部屋○生活の花○結婚の前○陸奥直次郎○青銅の基督○春田の小説○平野○二週間○或る社會主義者○竹澤先生といふ人○春の訪問○求むる心　○エピクロスの快樂　○項羽と劉邦（別項）○韓信乃死　○賴朝○三戯曲　○陶淵明○文明主義者○一人旅する者等。代表的な作品としては「盲目の川」「陸奥直次郎」「青銅の基督」「竹澤先生と項羽と劉長」を擧げる。

【史的地位】遲れて自樺同人となつてゐる、〇古今集仰戀十卷（寫）〇極大極祕五字傳一卷（寫）等。

【歌風】萎靡して振はない當時の歌壇に於て、注目すべき歌人の一たるを失はない。彼の實生活の反映の妙趣と共に、いかにも技巧の妙味が存してゐる。

つらかりし夜の嵐も忘られて明くれは拾ふ庭のさゝ栗

夕嵐木のはをさそふ聲のうちに行秋送る入相のかね

彼の交友には漢詩人があり、屢々和漢聯句を試みてゐる。「鐘聲送秋」とか「閑居聞蟄」とか云ふ多くの歌題が既にそれを反映してゐるが一般に辭句が引緊つて居り、體言止が多い。

すゞしさや月みぬ宿も夕がほの雪の花垣ならの下風

いへばえにいはぬ心を山ぶきの花にやさわぐ岸の

てゐる。〇古今集仰戀十卷（寫）〇極大極祕五字傳一卷（寫）等。

【歌風】萎靡して振はない當時の歌壇に於て、注目すべき歌人の一たるを失はない。彼の實生活の反映の妙趣と共に、いかにも技巧の妙味が存してゐる。

つらかりし夜の嵐も忘られて明くれは拾ふ庭のさゝ栗
夕嵐木のはをさそふ聲のうちに行秋遙る入相のかね

彼の交友には漢詩人があり、屢々和漢聯句を試みてゐる。「鐘聲送秋」とか「閑居聞蟲」とか云ふ多くの歌題が既にそれを反映してゐるが一般に辭句が引緊つて居り、體言止が多い。

すゞしさや月みぬ宿も夕がほの雪の花垣ならの下風
いへばえにいはぬ心を山ぶきの花にやさわぐ岸のしら浪

【參考】近世畸人傳　【齋藤（清）】

長與善郎（ながよよしを）　劇作家・小說家　【號】

【閥歷】明治二十一年八月六日、東京麻布に生る。父は醫學博士長與又郎。學習院高等科に進む時、彼は法科を選んだが、後、文科に轉じた。明治四十一年卒業、東大英文科に入學したが、中途退學。法科志望から文科に轉じたのは、後の白樺派（別項）同人等の影響が多かつた。從つてトルストイ、イブセン、メエテルリンク等に親しみ、「白樺」の熱心な愛讀者であつたが、創刊後一年ほどの後には、遂にその同人となつた。大學在學當時、同誌上に短篇小說などを發表したことがあるが、同人となつてからは、多く力作長篇を發表して、間もなく同派の重要な作家の一人となつた。「白樺」廢刊後數年の大正十三年四月には、雜誌「不二」を創刊して「白樺」の意志を承け繼ぐことに努力し、一方「演劇新潮」の同人となつた。昭和初年の大患後は、昔日の如き活動を示さなくなつた。【著作】【選集】明治大正文學全集第三十四卷〇日本戲曲全集第四十四卷〇現代戲曲全集第九卷。【單行本】盲目の川〇彼等の運命〇或る人々〇明るい部屋〇生活の花〇結婚の前〇陸奥直次郎〇青銅の基督〇春田の小說〇平野〇二週間〇或る社會主義者〇竹澤先生といふ人〇春の訪問〇求むる心〇エピクロスの快樂〇項羽と劉邦（別項）〇韓信乃死〇賴朝〇三戲曲〇陶淵明〇文明主義者〇一人旅する者等。代表的な作品としては「盲目の川」「陸奥直次郎」「青銅の基督」「竹澤先生といふ人」「項羽と劉邦」「夜の戲曲」「賴朝」などが擧げられよう。

長與善郎

【人物・作風】柔道二段とか三段とかの腕前があつたばかりか、エネルギッシュな、正義派的な、激しい情熱家であつた。從つて白樺派の同人として、無理解な周圍と最も激しく論難し合つたのは、彼であつた。さう云ふ激しい情熱が、この作者の作品に、重厚壯大な味ひを有たせもすれば、息詰まるまでの壓迫的・强調的な力强さを感じさせもする。が、短い作品の中には輕くて明るい、朗かな味ひのあるものも決して少くはない。併しさうしたものは、必ずしもこの作者の本領とは云へなかつた。飽くまでも作者は局面の廣い、骨組のがつしりした、そして材料の中にグン〳〵と入つて行つて、寧ろあくどい感じがする迄にこれを掘り下げて行く。題材的には彼はよく人間の力を取り上げ、それの破綻を描いた。從つて作品は多く悲劇的であるが、それも色々な人間の性格の相剋よりも、强い力に生きるものの運命的な破綻を描いたものが多い。其處にこの作者の一種の宿命觀があつた。徹底的に個性を伸ばすことが、宿命に、言ひかへれば天の思召しに、撞着することになるといふのは、徹底的に個性を伸ばすことその事のうちに、天の思召しがあるとする個性尊重主義の、最も根本的な想念への明確な把握を、まだこの作者が十分に得てゐなかつたからである。併し「竹澤先生」以後の作品には、さうした悲劇的な世界を一步踏み出して、作者はも一つ高い天の調和を靜かに見詰めようとしてゐる。【史的地位】遲れて白樺同人となつたけれども、その情熱的な果敢な態度を以て周圍と闘つたことや、特に彼の有する鋭い善惡意識や倫理感が、第二義的にではあつたが、大に白樺派といふ集團を特色附けた點から云つて、この派では武者小路實篤（別項）に次いで、重要な役割を果した。それだけこの派内では重視されてゐたが、當時、文藝界一般が、靜かに落着いた作品を好む風潮に支配されてゐたので、力瘤で固まつたやうな彼の作風は、餘り好意的には受取られなかつた。從つて直接この作者からの影響は、一般文藝界に現はれてゐない。ただ後の新現實主義末期の作家犬養健は、初めこの作者から若干の指導を受けたらしい。

【參考】長與善郎論　西宮藤朝（文章世界）〇長與善郎論片岡良一（國語と國文學六〇）〇小傳（明治大正文學全集三四附錄）　【片岡】

半井桃水（なからゐたうすゐ）　小說家　【本名】冽　【別號】菊阿彌　【生歿】萬延元年十二月二日生れ、大正十五年十一月二十一日歿。享年六十七。【墓所】東京市本鄉區片町養昌寺　【閥歷】對馬國嚴原の人。上京して尺振八の共立學舍に學び、明治二十一年、東京朝日新聞記者となつた。翌二十二年、同紙上に「啞孃子」を載せ、次いで「しぐれ綠」「海王丸」などを掲げて、新聞小說家として名を馳せた。次いで二十四年に書いた「胡砂吹く風」は通俗小說として上乘のものと稱せられた。樋口一葉（別項）が桃水の門に入つたのは丁度この年である。一葉の處女作「闇櫻」は桃水の校閲を經て、雜誌「武藏野」に出したのであつたが、二十五年六月、一葉は一身上の事情から桃水の門を離れた。後期の作として特に傑出してゐるのは、福島の義民齋藤彥内を主人公とした「天狗廻狀」で、老練の筆は能く篇中の人物・光景を描き出してゐる。一生の作品三百餘篇、珍らしい多作家だつた。なほ平生音樂を嗜み、俗曲歌詞の作も亦少くない。　【高須】

半井桃水

長柄長者黃烏墳（ながらちやうじやうぐひずづか）　讀本　六卷　【作者】栗杖亭鬼卵　【挿畫】石田玉山　【名義】長柄長者一家を中心に、鶯の報恩物語の意。　【刊行】文化八年　【諸本】繪入文庫所收。

【梗概】加賀國富樫家の臣佐々木源太左衞門は、公金費消の廉で、京都の留守居を免ぜられて歸國の途中、將軍家より淀川浚の召に推參する河内の郡司で、同姓同名の佐々木源太左

多く、後には生徒數常に數百人を下らなかつたが、彼の他界と共に湮滅に歸した。次に彼の大事業は、數多き著譯と共に「同人社文學雜誌」（別項）である。

【參考】中村正直傳　石井研堂　【吉野】

中村武羅夫（なかむらむらを）　小說家・評論家

【閥歷】明治十九年十月四日、石狩國岩見澤町に生れた。小學卒業後、土地の小學校長田村顯に就いて、國語・漢文・算術などを三ケ年間き、長い雌伏の後に目覺しい雄飛をなし、長篇作家として一家を成した。その作風は線が飽くまで太く、その構想は寧ろ粗雜と思はれるまでにスケールが大きく、遮二無二描破して行くところに特徴がある。この作風は彼の性格の反映でもあると思はれる。なほ彼は創作の傍ら文藝批評・時事評論・社會時評、その他映畫・音樂など、あらゆる分野に亙つて覇氣に滿ちた健筆を揮つてゐる。　【高須】

流行したものらしく、「續紀」の天平元年四月三日の條にこれを禁止した事も見えてゐる。

【參考】懷風藻〇日本靈異記　【山岸】

永幢（ながやす）　「能因」を見よ。

長好（ながよし）　歌人　【姓名】望月氏。廣澤氏とも。名は別に兼友とも稱し、後には長孝とも書く。【號】小狹野屋・桂雲　【生歿】元和五年に生れ、延寶九年（二三四一）三月十五日歿。享年六十三（六十四歲說もある）。　【學統】細川ふ送詞は、彼の祖舍白屋響のほどを事書するものと解することが出來る。なほ彼が單なる厭世的隱者でなかつたことは、家集第四卷中の文集によつても、その交誼の廣さを證することが出來よう。【著作】廣澤輯藻（別項）〇桂雲集類題（廣澤輯藻中の歌、並にその集に洩れ傳へられた歌の類題で、天明元年長好の百回忌に有賀長收が校正出版）〇詠歌大本祕訣五卷（寫）（門人長雅に傳へた詠歌上の口傳書で、卷一に歌の三義、卷二・三に詠歌大概の註、卷四・五に歌制詞が載せられ

衞門と大井川の邊りで同宿し、具足櫃の間違ひから遺恨となり、河内の源太左衞門は生駒山寶山比丘の豫言が的中して討たれたので、一子源之助は母渚と共に、重代の寶刀旭丸と系圖を持ち仇を探すことになつたが、伯父源吾に渚を殺され、系圖を奪はれて家を横領された。然るに源之助は偶々長柄長者の娘梅ケ枝の愛する鶯唐琴を救つたのがもとで、その婿となるが、長者の後妻環と情夫大仁坊とに毒殺されようとし、身の大望を梅ケ枝姉妹に語つて難を遁れた。その夜大仁坊と環は惡事の露顯を恐れ、梅ケ枝を殺して館を出奔し、長者をも慘殺した。その後源之助は鶯唐琴に梅ケ枝の死を告げられ、且つその導きで仙醫洞仙實は父の仇加州の源太左衞門の家に到り、その弟子實は長柄長者の甥で、嘗て勘當された十三郎と相知り、こゝに目出たく洞仙を斬つて父の仇を報いた。かくて源之助は歸國して母の再生したのに遭つて喜んだが、また淀の城主木村與惣左衞門の援助を得て、源吾・大仁坊及び環を討ち、源之助は梅ケ枝の妹櫻木を、十三郎は彼のために死んだ遊女九重の妹八重を娶り、佐々木・長柄兩家を再興した。

【解說】勸善懲惡の作意に、復讐物語を主として驚の奇談を交へた。讀本の末期のものに見る餘りに奇を求める事なく、平淡な筆である。

【參考】繪入文庫解說　〔笹野〕

長流（ながる）　「長流（ちやうりう）」を見よ。

奈河龜輔（なかはかめずけ）　脚本作者　【別名】龜助、龜祐とも記す。屋號は永長堂、又遊泥居とも。【生歿】未詳、但し寛政頃に歿か。【閱歷】奈良の商人出らしく、放蕩の果、河内の知己を賴つたが、この頃遊里・劇場に通ふ中、狂言作者を志して並木正三（別項）に入門した。奈良と河内を漂ふ身とあつて、奈河と稱したといふ。正三門下で並木を稱へないが、正三との交涉には別段の事情もなかつたらしい。ただ龜輔には經濟上の後援者があつたので、役者等に對しても、十分作者としての權威を揮ひ得たので、それ等の事情はあつたかと思ふ。明和年中から天明に及ぶ二十餘年間の作者生活を送つて、立作者として京大阪に活躍し、數十種の當り作を得て、當代正三につぐ名聲をあげたので、その業績も正三門下に於て尤なるものである。天明八年、江戸の番附に彼の名を見出すものがあるが、單にその名聲を利用されたに過ぎず、勿論彼の江戸下りはなかつた。彼と交涉のあつた役者は、正三からの歌右衞門を初め、三五郎あり雛助ありで、卽ち彼の作の範圍の廣さと、關係した劇場の多さを語るものである。歌舞伎講釋と名付けて、後世の本讀（ほんよみ）（別項）を創めたのも、上方では彼であると傳へる（天明初年）。親友の難波新地吉田卯兵衞は彼の案で、その聚螢庵の庭を風流に構へ、安永年中は遊人がこゝに群つたといふ。天明五年、彼はこの庵に唐物を陳列し、唐の開帳と稱へて人々を招いて悅んだ。又時には在邊に麥飯を商つたりした。彼の人物にはこの種の趣味性が十分見出される。この點では正三と全く相反してゐたやうにも思はれる。門下の秀才としては、奈河七五三助（別項）が最も名高い。龜輔の名は七五三助の高弟奈河篤助によつて繼がれた。【作品】正三は淨瑠璃をも書いたが、龜輔は凡て歌舞伎の脚本であつた。但し當り作を讀本淨瑠璃に綴つて印行した事はあるが、これは例外である。現在まで五十篇足らずの脚本の名題が知れてゐるが、世話物は十篇ほどで、他は悉く時代物と見られる。名篇と思はれるものを擧げる。〔世話物〕伏見京橋諱實錄（安永六年七月、大阪中の芝居。實說種）○蟇花の地蒙傑會合（安永七年七月、同座。双蝶々と五人男）○丑天神血染宮入（天明二年七月、角の芝居。いろは新助）○つれ〴〵噺（天明三年九月、中の芝居。揚卷助六）等。〔時代物〕競伊勢物語（別項）○北條五代記會說（安永五年二月、中の芝居。元惡）○伊賀越乘掛合羽（別項）○伽羅先代萩（別項）○大自在雷子寶貸（安永六年十一月、同座。天神記）○けいせい大内の雛形（安永九年正月、京都龜谷早雲合座。大内騷動、素袍璽の前篇）○加々見山廓寫本（別項）○殿下茶屋聚（別項）○二王門端歌雜錄（天明二年四月、同座。石川五右衞門）等。右のうち、「伊勢物語」「伊賀越」「先代萩」「加々見山」「殿下茶屋」は彼の五大傑作ともいふべきで、古來喧傳され、今日まで生命のあるものである。又「伊勢物語」は直に彼によつて、讀本淨瑠璃に綴られて世に迎へられた。又その他の數作が淨瑠璃に書き替へられて、操芝居の當り狂言となつたものもある。正三の作と共に、龜輔の傑作も、後世繪入根本（別項）として盛んに行はれた。時代物と世話物とを問はず、おどけ狂言をもよく綴つた。「萬惠天目山」（安永四年十一月、中の芝居）、「源氏鐵打出槌」（安永五年十一月、同座）の如きはこれである。安永・天明の交は、七五三助を屢々合作者としてゐた。

【作風】並木正三が出て、時代淨瑠璃の脚色と舞臺裝置を歌舞伎に採り入れた爲めに、時代歌舞伎の意義が確立し、社會の歡迎を受けたのであつたが、これを脚色の態度から見る時は、正三の場合はまだ淨瑠璃の樣式から離脫し切らなかつたといへる。完全に歌舞伎の時代物が成立したのは、龜輔に俟たねばならなかつた。正三の作に於て最もうけた舞臺技巧による演出法を、龜輔は第二にして、寧ろ自然な、人事や社會の問題から、直接取材する態度をとつた。このために龜輔によつて開拓された題材の分野は講釋の方面であつた。故に舊作の增補は別として、彼の作には眞の書卸しが多く、時代物にはお家騷動を好んで選んだので、範圍の手廣い、又錯節した脚色による感興の漲る上に、正三物に發見されなかつた自然味に富む效果を得たのであつた。又彼が四番續の脚色法に大綱を定めたと傳へるのも、漸く彼を俟つて歌舞伎脚本に、戲曲論的自覺を得たと言ひ得るからであらう。かくして時代歌舞伎は龜輔によつて完備したと見られ、當年の上方は、當にその流行期と言ひ得る。化政度に至ると、流石に彼の作は煩雜に過ぎるといふ非難を浴びた。名題の訓み方に特殊な案を用ひた事は、正三に倣つたかとも思はれるが、當時の流行でもあつた。前揭の類の外に、「大當百足山」「もふ〳〵よかろ丑の御執達」の類も多い。

【參考】戲財錄並木五瓶○南水漫遊　濱松歌國○傳奇作書西澤一鳳○京攝戲作者考木村默爺○狂言作者考○近世戲曲研究　守隨憲治○江戸歌舞伎同上（日本文學聯講）　〔守隨〕

奈河七五三助（なかはしめずけ）　脚本作者【本名】幼名金次郎（一說に新次郎）【號】洗口【生歿】文化十一年（二四七四）十月二十日歿す。享年六十一。【閱歷】大阪道頓堀の茶屋福新に生れたが、長じて日本橋に旅宿を業とし、三ツ星末廣屋といつたと傳へられる。奈河龜輔（別項）について狂言作者となつたのは明和・安永の頃か。安永年中は屢々龜輔の下に屬して時代物に筆を練つた。天明元年冬は、中の芝居に於て「連歌茶屋聲文臺」を出して角の芝居の龜輔作「天下茶屋」に相對し、共に大當りを得た。この頃から七五三助は獨立し、その名も謳はれて、やがて當時の上方作者界に龜輔高弟として、十輔・五兵衞（五瓶）等と肩を並べたのであつた。寛政六年以後、十年間ほど江戸に下つてゐたが、屢々火災に遇ひ、文化三年歸阪して再び上方に活躍してゐた。彼の江戸に下つてゐた間に、並木五瓶や辰岡萬作（各別項）等が地盤を築いてゐたので、以前ほどの鮮かさはなかつた。彼の門からは奈河篤助（別項）・同十八助・同九二助等が出た。

【作風・作品】作者生活は比較的長かつたが、龜輔に就いても彼程の大いさを享け得なかつたらしく、脚色は舊作の添削や綯ひ交ぜが多く、言はれた。彼には「作意編」の著があつて、作道を說いたが、役者の演出を重しとする意見が述べられてゐる。

【參考】言狂作書西澤一鳳○南水漫遊　濱松歌國○狂言作者考　○近世日本演劇史伊原敏郎○江戸歌舞伎守隨憲治（日本文學聯講）　〔守隨〕

奈河晴助（なかはるすけ）　脚本作者　【通稱】宮島屋嘉兵衞【別號】豐晴助【生歿】文政九年（二四七二）正月二十九日歿。享年四十五【閱歷】夙く素人俄狂言の作等を好み、奈河篤助と言はれたといふ。寛政年中より京大阪の各座に活躍するうち、當時の劇界の大立者三代中村歌右衞門に接して、初代歌右衞門の俳號一洗を貰つたが、後、交を絕つて一洗を返し、剃髮して金龜堂一泉と稱し、以後、主に濱芝居に作を提供したといふ。その頃、二代奈河龜助を繼いだが、龜助に似て彼も本讀みにかゝるものは甚だ多い。濱松歌國とは特殊な交涉があつたかして、歌國の名は常に彼の下位に見える。作風は甚だ明快であつて、寧ろ七五三助に似てゐると評された。

【參考】作者店おろし三升屋二三治　○言狂作書西澤一鳳○狂言作者考　〔守隨〕

泣尼（なきあま）　能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作（狂言不審紙）。【格式】一番習といつて、中習と大習との間の物になつて居り、又替裝束、眞の形となると大習になつてゐる（和泉流）。「狂言不審紙」には「此狂言年若にて難勤云々」とある。【題材】「古今著聞集」の興言利口第二十五の說話が、粉本と認められる。

【梗概】或る田舍者が、親の三年忌に談義を乞はうと上京し、某寺の長老に布施の相談も調

て時代物に筆を練つた。天明元年冬は、中の芝居に於て「連歌茶屋饗文臺」を出して角の芝居の龜輔作「天下茶屋」に相對し、共に大當りを得た。この頃から七五三助は獨立し、その名も謳はれて、やがて當時の上方作者界に龜輔高弟として、十輔・五兵衞（五瓶）等と肩を並べたのであつた。寛政六年以後、十年間ほど江戸に下つてゐたが、屢々火災に遇ひ、文化三年歸阪して再び上方に活躍してゐた。彼の江戸に下つてゐた間に、並木五瓶や辰岡萬作（各別項）等が地盤を築いてゐたので、以前ほどの鮮かさはなかつた。彼の門からは奈河篤助（別項）・同十八助・同九二助等が出た。

【作風・作品】作者生活は比較的長かつたが、龜輔に就いても彼程の大いさを享け得なかつたらしく、脚色は舊作の添削や綯ひ交ぜが多いため、一部からは洗濯屋と呼ばれた。併し場面の配合に就いては一種の妙味を示す外、特殊な寫實的描寫に成功した爲め、當り作も尠からずあつた。「隅田川續俤」（天明四年三月、角の芝居）×（別項）、「けいせい北國曙」（寛政元年一月、中の芝居。柴田勝家）、「大振袖粧湖」（同年三月、同座。關ヶ原合戰）、「いろは假名四十七訓」（寛政三年九月、角の芝居。鎌腹や鳩の平右衞門等）、「壘礎花大樹」（寛政四年一月、角の芝居。太閤記）、「色競續箭戰」（寛政四年五月、角の芝居）等は傑作に屬する。彼の作風に注目される所は、時代に世話に、極めて廣く自由な筆致を見せた點にある。龜輔に比して時代物にも輕快な運びを見せた事は、時勢に應じた故もあるが、又彼としての進歩でもあらう。

【參考】戲財錄並木五瓶　○作者店おろし三升屋二三治　○言狂作書　西澤一鳳　○狂言作者考○江戸歌舞伎　守隨憲治（日本文學聯講）　【守隨】

奈河篤助　脚本作者　【別名】初め十九助と記す。一洗堂とも號して、略して一洗、又は一泉といふ。金龜堂・奈河龜助等。

【生歿】天保十三年（二五〇二）二月三日歿。享年七十九　【法名】釋達應　【閲歷】もと泉州の一向宗の僧であつたが、還俗して狂言作者たらんと志し、大阪に上つて奈河七五三助（別項）の門に入つたと傳へる。七五三助から十九助の名を貰つたが、頭髪の赤いために、猩々の篤助と言はれたといふ。寛政年中より京大阪の各座に活躍するうち、當時の劇界の大立者三代中村歌右衞門に接して、初代歌右衞門の俳號一洗を貰つたが、後、交を絶つて一洗を返し、剃髪して金龜堂一泉と稱し、以後、主に濱芝居に作を提供したといふ。その頃、二代奈河龜助を繼いだが、龜助に似て彼も本讀みに巧妙であつた爲め、京都にあつては、正本講釋を以て屢々客席に招かれたといふ。老後、洛東山眞葛原に茶店を開き、一服一泉といつた。彼の門からは奈河晴助（別項）が出た。

【作品・作風】晩年の濱芝居時代も名作があつたが、大芝居時代に好評を得た作は次の如きものである。「川崎踊拍子」（寛政八年八月、京早雲座。伊勢音頭と競演の九人斬り）、「けいせい忍逢淵」（享和元年正月、角の芝居。石川五右衞門）、「けいせい薺佳節」（文化三年一月、中の芝居。天草攻）、「けいせい品評林」（文化五年一月、中の芝居。京傳の稻妻表紙）、「復讐高音鼓」（文化五年八月、角の芝居。馬琴の三國一夜物語）、「東都名物錦繪始」（文化八年一月、江戸中村座。おこま才三と加賀見山）、「臺頭霞彩幕」（文化九年一月、同座。三勝半七）等。三都を往來して、七五三助に似て脚色の幅廣く、上方脚本界の末期を飾つた一人である。手堅い作風は、師の七五三助より寧ろ龜輔に近いと言はれた。彼には「作意編」の著があつて、作道を說いたが、役者の演出を重しとする意見が述べられてゐる。

【參考】言狂作書西澤一鳳　○南水漫遊　濱松歌國　○狂言作者考　○近世日本演劇史伊原敏郎　○江戸歌舞伎　守隨憲治（日本文學聯講）　【守隨】

奈河晴助　脚本作者　【通稱】宮島屋嘉兵衞　【別號】豐晴助　【生歿】文政九年（二四二六）正月二十九日歿。享年四十五　【閲歷】夙く素人俄狂言の作等を好み、奈河篤助（別項）の門に入つて、京因幡藥師芝居に作者となつてゐたが、西澤利右衞門に招かれて大阪に下り、初めて大芝居に出た。文化七年篤助の江戸下りによるその補充の意味かと思はれる。初め德叟や七五三助の下にゐたが、やがて立作者となつて活躍した。二代嵐吉三郎や璃寬のために多くの作をなした。作の當りは、彼を初め嵐小六・淺尾工左衞門等によつてよく演生かされた爲めとも傳へる。

【作品・作風】作者生涯の短かつた割に當り作を多く出した。「敵討義戀柵」（文化九年九月、角の芝居。熟睡亭の獨搖新話）、「けいせい筑紫歎」（文化十一年一月、角の芝居）（別項）、「敵討浦朝霧」（文化十二年九月、中の芝居。說經の女盜賊と巡禮殺し）、「園雪戀組題」（文化十三年正月、中の芝居。薄雪）、「油商人廓話」（同年七月、同座。芝叟の油）、「濃紅葉小倉色紙」（同年九月、同座。小倉騒動）、「遠江潟戀賊」（文政二年九月、京南側芝居。日本駄右衞門）等がある。なほ文政五年正月、中の芝居「けいせい染分總」（とん〳〵三吉）は、金澤龍玉（別項）事歌右衞門の作であるが、三幕目とん〳〵の場は、晴助の筆で好評を得た。但しこの作について、龍玉の橫暴を憤つて刺し違へんとしたともいふ。その他に龍玉の名の下に彼の作にかゝるものは甚だ多い。濱松歌國とは特殊な交涉があつたかして、歌國の名は常に彼の下位に見える。作風は甚だ明快であつて、寧ろ七五三助に似てゐると評された。

【參考】作者店おろし三升屋二三治　○言狂作書　西澤一鳳　○狂言作者考　【守隨】

泣尼　能狂言　【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作（狂言不審紙）。【格式】一番習といつて、中習と大習との間の物になつて居り、又替裝束、眞の形となると大習になつてゐる（和泉流）。「狂言不審紙」には「此狂言年若にて難勤云々」とある。【題材】「古今著聞集」の興言利口第二十五の說話が、粉本と認められる。

【梗概】或る田舍者が、親の三年忌に談義を乞はうと上京し、某寺の長老に布施の相談も調へて同道する事になる。長老は談義が下手で參詣人のないのを慮り、談義を聽いて泣いてくれる尼に、布施を山分けと定めて連れて行く。やがて在所に着いて談義を始めるが、尼は居眠りをしてゐて泣かない。一座の談義果てて長老はそこを辭し、尼の仕打を苦々しく思つてゐる所へ、尼が現はれる。長老は大喝一聲、憎い奴め、談義の折に泣けかしと思ふ時には泣かいで、今ほえたとて何の役に立たうぞと、喧嘩になつて尼を打倒す。尼は長老をやるまいぞ、やるまいぞと追ひ込む。

【構想】粉本たる「古今著聞集」の方では、說經の始まるか始まらぬに尼が泣き、後に導師の詭計を發く落ちになるのが滑稽の中核である。處がこの作では、泣けかしと思ふ時に居眠りばかりしてゐて、談義が濟んでから泣いたので、長老が怒るといふ作意になつてゐる。又僧も尼も檀徒の布施に夢中であつた世相の

て鷺の奇談を交へた。讀本の末期のものに見る餘りに奇を求める事なく、平淡な筆である。

【參考】繪入文庫解說　【笹野】

長流　「長流」を見よ。

奈河龜輔　脚本作者　【別名】龜助、龜祐とも記す。屋號は永長堂、又遊泥居とも。【生歿】未詳、但し寬政頃に歿か。【閲歷】奈良の商人出らしく、放蕩の果、河內の知己を賴つたが、この頃遊里・劇場に通ふ中、狂言作者を志して並木正三（別項）に入門した。はこの種の趣味性が十分見出される。この點では正三と全く相反してゐたやうにも思はれる。門下の秀才としては、奈河七五三助（別項）が最も名高い。龜輔の名は七五三助の高弟奈河篤助によつて繼がれた。【作品】正三は淨瑠璃をも書いたが、龜輔は凡て歌舞伎の脚本であつた。但し當り作を讀本淨瑠璃に綴つて印行した事はあるが、これは例外である。現在まで五十篇足らずの脚本の名題が知れてゐるが、世話物は十篇ほどで、他は悉く時代物綴つた。「源氏鶯打出槌」（安永五年十一月、同座）の如きはこれである。安永・天明の交は、七五三助を屢々合作者としてゐた。

【作風】並木正三が出て、時代淨瑠璃の脚色と舞臺裝置を歌舞伎に採り入れた爲めに、時代歌舞伎の意義が確立し、社會の歡迎を受けたのであつたが、これを脚色の態度から見る時は、正三の場合はまだ淨瑠璃の樣式から離脫し切らなかつたといへる。完全に歌舞伎の時

歌舞伎同上（日本文學聯講）　【守隨】

奈河七五三助　脚本作者　【本名】幼名金次郎（一說に新次郎）　【號】洗口　【生歿】文化十一年（二四七四）十月二十日歿す。享年六十一。　【閲歷】大阪道頓堀の茶屋福新に生れたが、長じて日本橋に旅宿を業とし、三ツ星末廣屋といつたと傳へられる。奈河龜輔（別項）について狂言作者となつたのは明和・安永の頃か。安永年中は屢々龜輔の下に屬し

狂言作者考　○近世劇曲研究　守隨憲治　○江戸

反映せられてゐるのも皮肉である。〔野村〕

長刀應答（なぎなたあしらひ）　能狂言【名稱】今「なぎなたあしらひ」と呼んでゐる。【格式】小習（和泉流）。

【梗概】或る家の主が參宮を思ひ立ち、冠者を呼び出して、今は庭の花も盛りであるから、留守の間に知音の方がお訪ねなさつたならば、長刀應答せよと言ひ付けて旅に出る。冠者は長刀應答の意を知らぬので、不用心だから長刀で誰彼の別なく追ひ返せとはいゝ思ひ付きだと言つて留守をしてゐる。其處へ入り代り知人が訪ねて來るのを、冠者は長刀で追ひ拂ふ。仕樣もなくて知人達は冠者を抱きすくめて長刀を奪ひ取り、歸つて行くのを、冠者はそれを取られては、客人をあひしらふ物がないと言つて追ひ入る。

【解說】和泉流以外に、未だ所見はない。薙刀挨拶とか薙刀應答とかいつて、受けつ流しつする應答の謂ひを、一曲展開の種にした狂言である。「犬子集」十一にも、「鑓おとかひの人はあやにく、と絶つゝとふを長刀あしらひに」と見え、「吾吟我集」にも、「或時はやりとめにしつ或時はつらき薙刀あひしらひかな」とあるから、古くからの俗言であらう。和泉流では、この狂言は所謂御斷狂言といつて、「御家始へ御斷申上相勤ザル」狂言になつてゐたものである。〔龍田〕

泣不動緣起（なきふどうえんぎ）　繪卷【解說】三井寺の證空が、その師知空の病重るや身を以てこれに代らんことを祈つたところ、證空が日頃信心する不動明王の靈像が證空の志に感じ、涙を流して遂に又證空の身代りとなつたといふ物語は、證空の傳記や「曾我物語」などにも見える著名な話であるが、これを繪卷としたものは「泣不動緣起」「不動利益緣起」又は「證空繪詞」といひ、京都清淨華院所藏の一卷や青地幾次郎氏所藏の一卷が世に知られてゐる。青地本には詞書あり、清淨華院本には全くこれを挿入しないが、圖樣に至つては殆ど相近いものである。青地本は慶恩筆と傳へられてゐるが、畫致から見れば、南北朝頃の製作かと思はれる。清淨華院本は、青地本よりも更に少しく下る足利初期の製作であらう。「考古畫譜」には、慶恩筆と傳ふる一卷本以外に、光茂筆といふ二卷本を擧げてをり、清淨華院本に逸した詞書の一卷を添へて想像すれば、或はこれに相當するものでないかとも考へられるが詳かでない。而して主題は、三井寺の不動信仰に伴ふ物語で、「類燒阿彌陀緣起」などと同じく、神佛が人間の身代りとなる筋合ひの如きは、時代的所産としても興味がある。〔田中（一）〕

泣不動緣起（清淨華院藏）

投節（なげぶし）　歌謠【名義】雅樂の風俗等にも、投節の名稱があつたらしい。これは一句の終を投げて歌ふ事で、「紫の一本」にも、「投節と云ふ事往古にもなきに非ず、鄙曲にも是あり。逍遙院殿御歌に、思ふ事投節聲に歌ふなりめでたや松の下に群れゐて」と、「雪玉集」の歌を引いてゐるが如くである。これと同樣に、江戸時代の流行歌にも、歌の終を「ヤン」と歌ひ捨てるものがあつたので、かく名付けたのである。風俗の「大鳥」の歌に、「大鳥の羽根にヤレナン」などとある歌ひ方の脈絡を引くものと解する說もある（日本歌謠史）。古く、これは梆節（なぎぶし）と云ふ名稱の變化したものと云ふ說があつた。梆節とは、狂言小歌の「ここ通る熊野道者の、手に持つたも梆の葉、笠にさいたも梆の葉云々」と云ふ歌のことで、「好色大鑑」の作者（「色道大鑑」の作者畠山箕山の事か）が、これを作り替へて、「逢ひた見たさは飛び立つばかり籠の鳥かや怨めしや」と云ふ歌を作つた。これが近代投節の祖であると云ふ說があるが、これは信じられない（「野傾友三味線」「養笠雨談」所引「男女色競馬」）。「好色伊勢物語」には、「聲を投げて唄ふ故此名あるか、一說に梆節、伊豆のお山の梆の葉と唄ひ出してよりの名といへり」とあり、これは「今度ござらばもて來てたもれ伊豆のお山の梆の葉を」と云ふ歌をもつて、この名稱の起原としたのであるが、恐らく、この說の如くで、これより投節の一名を梆節と云ふ名稱も生じたのであらう。狂言小歌に梆節があり、それより投節が出たのではあるまい。また考へるに、投節はすべて宴席などで、醉興に乘じて投げやりに、出たら目に歌を歌ふこと、江戸時代では、嬉客などが、そゞめき歩いたりする時に、投げやりに歌ふ歌を云ふもので、正式の歌ひ方に對し、よい加減に歌ふ意であるとも解せられる。前述の「雪玉集」の「投節聲」も、この意に解した方が妥當であり、江戸時代には、投節と云ふ說は、種々なる形式の各種の歌謠に用ひられてゐて、必ずしも特定の、或る一種の流行唄にのみ使用せられてゐるのではない。要するに投節とは、遊里歌謠の一般名稱であると思はれる。そゝり節・そゝり歌・そゞめき節・そゞめき歌・かすり歌・地廻り節などと云ふのと、同じ意味で使用せられた語であらう。「歌曲考」「嬉遊笑覽」等に、隆達小歌のことを投節と云つてゐるのも、隆達小歌が節の終りを投げ捨てる歌ひ方をしたからであるとも解釋せられるが、寧ろ右の流行歌謠に對する一般名稱から來てゐるものと解すべきであらう。

【沿革】明曆・萬治頃に、京島原柏屋又十郎の抱への女郎河內が、歌ひ始めたものである（一目千軒）。「好色二代男」にも、京島原の事を敘して、「はや隣にはひいて投節河內と聞えた」と記してゐる。「松の葉」に「大阪屋河內風」とあるのは誤であらう。これは江戸弄齋（弄齋節參照）を變化して、歌ひ出したもので、さらりとした小意氣な歌であつたから、大に世に行はれて、流行歌謠の代表的なものとなり、投節の名稱をも獨占したのである。古くは京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の籬節を三名物と稱した（「傾城色三味線」序、「新町細見澪標」「一目千軒」）。三都で盛んに歌はれたが、元祿を經て、寶永・正德に至り、衰へを見せた。

享保十五年刊「史林殘花」の「投節曲」の項に、「異國山吹之後不レ得二其人一（中略）其統既泯矣」とあつて、江戸吉原では、異國や山吹の如き遊女が、その名人であつたらしいが、享保頃には既に亡んでゐた。京都では、正德頃に三文字屋左衞門方のよし松が名人で名聲あり、その後、山本屋つや方の小倉と云ふ女郎が上手で、寬保頃まで存在し、後、長くこの歌が存續したと云ふ（一目千軒）。「日本童謠大全」「俚謠集拾遺」の京都市のところに、投節として、「渡り比べて世の中見れば阿波の鳴戸に波もなし」の如き、「松の葉」所載の投節と同樣の歌詞を載せてゐるのは、今日も古昔の投節が繼承せられてゐるのであらう。「熊野民謠集」に「熊野投節」と題して、「きくのきかぬのきいたのきくの、ばかなからしぢやあるまいし」の物相の手撥數も少く、歌の止りは節にて言ひ棄て、ゆう〳〵と聞え侍る」、また「音聲しめやかに調子は低き方よし」、又「近頃歌の下の句、三字目の節を下げて歌ふ事、伊達にてよろし。此歌の曲節、急ならず序破に止まりて靜かなる方なり。よりて上の句次の七文字の初二句、又は返しの初二字を寄せて歌ふべし。唱歌に映ありて面白き事なり」と云ふ（以上「松の葉」に據る）。【收載書】「淋敷座之慰」（投節四首）、「大幣」（當世投節七首）、「當世小歌揃」（新投節十六首）、「新投節」（刊本、四十八首）、「新町當世投節」（刊本、六十七首）、「松の葉」（投節百首）。諸書にて重出再出あり。以上の外、「歌曲手染糸」投節「河內」と題する一册の書も刊行せられたらしい（明和九年刊「大增書籍目錄」）。

【備考】江戸では、享保頃に投節は絶えたらしく、「戻り駕」の「又古へに」、常本節「其俤淺間嶽」、「風に柳の」、「玉菊」の「夕べ〳〵の」、「清元節「北州」の「松の位」の條などに用ひられる。又これと別種の節附の投節があり、これより可なり遲れて發生した純粹の江戸風の曲節である。新內節「尾上伊太八」の「俺等は今から」、「道中膝栗毛赤坂の段」の「此の彌次さん」、常磐津節「釣狐」の「昨日北風」、常磐津長唄掛合の「角兵衞獅子」の「親兄弟に」、清元節「權八」の「逢ひた見たさに」、「吉原雀」の「深山の奥の」の條などに用ひられ、前者の優雅なのに比べて、傳法な歌ひ方である。これによつても、投節が特定の歌の名稱ではなく、時代的變遷に從ふ流行歌謠の一般的な名稱であつたことが分る。

【參考】嬉遊笑覽○日本歌謠史高野辰之○近代歌謠集藤田德太郎○江戸時代音樂通解町田博

まで大阪毎日新聞。【刊行】大正二年七月、春陽堂。明治大正文學全集（柳川春葉篇）所收。

【梗概】一人の子供をめぐる生みの母と、生さぬ仲なる繼母との愛の葛藤を描いたもの。東洋漁業會社の社長渥美俊策は、根がお坊ちやん育ちのため、一旦衰へかゝつた社運を如何ともする事が出來なかつた上、妻眞沙子の父親赤澤亮輔（俊策は彼の後楯によつて社長の椅子を贏ち得てゐた）が社のために謀つた策が却つて會社を一層行詰らせて了ふ。俊策は自暴自棄に陷り、酒色に身を溺らしてゐる時、突然先妻諸岡珠江が出現した。彼女は新橋の藝者であつたのを俊策に落籍され、滋といふ子まで生んだに拘らず、家出して外人の妻となり、海外に去つたのだが、今莫大な遺產を手に入れて歸朝したのである。そして實子滋を自分の手に渡すなら渥美家を窮境から救つてやると言

始へ御斷申上相勤ザル」狂言になつてゐたものである。〔龍田〕

泣不動緣起（なきふどうえんぎ）　繪卷　【解說】三井寺の證空が、その師知空の病重るや身を以てこれに代らんことを祈つたところ、證空が日頃信心する不動明王の靈像が證空の志に感じ、淚を流して遂に又證空の身代りとなつたといふ物語は、證空の傳記や「曾我物語」などにも見える著名な話であるが、これを繪卷とした小意氣な歌であつたから、大に世に行はれて、流行歌謠の代表的なものとなり、投節の名稱をも獨占したのである。古くは京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の籬節を三名物と稱した（「傾城色三味線」序、「新町細見潛標」「一目千軒」）。三都で盛んに歌はれたが、元祿を經て、寶永・正德に至り、衰へを見せた。

作かと思はれる。清淨華院本は、青地本よりも更に少しく下る足利初期の製作であらう。「考古畫譜」には、慶恩筆と傳ふる一卷本以外に、光茂筆といふ二卷本を擧げてをり、清淨華院本に逸した詞書の一卷を添へて想像すれば、或はこれに相當するものでないかとも考へられるが詳かでない。而して主題は、三井寺の證空が、その師知空の病重るや身を以てこれに代らんことを祈つたところ、證空が日頃信心する不動明王の靈像が證空の志に感じ、淚を流して遂に又證空の身代りとなつたといふ物語は、證空の傳記や「曾我物語」などにも見える著名な話であるが、これを繪卷と

享保十五年刊「史林殘花」の「投節曲」の項に、「異國山吹之後不レ得二其人一（中略）其統既泯矣」とあつて、江戸吉原では、異國や山吹の如き遊女が、その名人であつたらしいが、享保頃には既に亡んでゐた。京都では、正德頃に三文字屋左衞門方のよし松が名人で名聲あり、その後、山本屋つや方の小倉と云ふ女郎が上手で、寬保頃まで存在し、後、長くこの歌が存續したと云ふ（「一目千軒」）。「日本童謠大全」「俚謠集拾遺」の京都市のところに、投節として、「渡り比べて世の中見れば阿波の鳴戸に波もなし」の如き、「松の葉」所載の投節と同樣の歌詞を載せてゐるのは、今日も古昔の投節が繼承せられてゐるのであらう。「熊野民謠集」に「熊野投節」と題して、「きくのきかぬのきいたのきくの、ばかなからしぢやあるまいし」の如き歌を揭げてゐるのも、古代の投節に關係があるであらうか。

【曲節】詞形は三四・四三・三四・五の近世調で、この形式は、投節に至つて最も完成せられたものとなつたのであるが、その實際の歌ひ方は、次の如くであつた。

上ふし　逢ひた見たさは、中持飛び立つナアはかり（この間三味線合の手入）籠の鳥か、はるふし　やアナ怨めしやン（この間に合の手入）下　中持鳥か、やなア籠の（この間に合の手入）下　上持　はるふし　籠の鳥か、やナアうら、めしやン（合の手入）

合の手の三味線の譜は「大幣」に詳しく記されてゐる。三味線は、本調子であるが、後には二上りの調子も出來、これは本調子と連彈きをするとよいと云ふ。節廻しは、人によつて差違あり、古今の變遷が甚だしかつた。河內風の歌ひ方は、「上下の句さらりと、三味線あひしらひも短く、歌のとまりやんと歇ひしなり」であつたが、「今樣は節のたけ緩やかに、鳴し物相の手撥數も少く、歌の止りは節にて言ひ棄て、ゆう〳〵と聞え侍る」、また「音聲しめやかに調子は低き方よし」、又「近頃歌の下の句、三字目の節を下げて歌ふ事、伊達にてよろし。此歌の曲節、急ならず序破に止まりて靜かなる方なり。よりて上の句次の七文字の初二句、又は返しの初二字を寄せて歌ふべし。唱歌に映ありて面白き事なり」と云ふ（以上「松の葉」に據る）。【收載書】「淋敷座之慰」（投節四首）、「大幣」（當世投節七首）、「當世小歌揃」（新投節十六首）、「新投節」（刊本、四十八首）、「新町當世投節」（刊本、六十七首）、「松の葉」（投節百首）。諸書にて重出再出あり。以上の外、「歌曲手染糸投節　河內」と題する一册の書も刊行せられたらしい（明和九年刊「大增書籍目錄」）。

【備考】江戸では、享保頃に投節は絕えたらしいが、その後にも、遊里では一種の投節が存してゐた。

藝者投節、馴れし廓の起き臥しや、夜ごとに變る枕の塵も、積る思の憂き劒（享和二年刊。傾客新學問）

投節歌、馴れし廓の憂きふしや、夜ごとに變る枕の塵も、拂ふは君に逢ふ夜半の、床に積りしさゞめ言（享和二年刊。起承轉合）

などと見えるのがそれである。併しこれも、もとは京都の投節から導かれたものかも知れない。一中節の古曲「夕霞淺間嶽」の「馴れし廓も今日ばかり」のところが、投節の節附であるから、これより出たものかとも思はれる。この投節のことを、後に大津投節（略して大津ナゲ）とも云つて、近江大津の遊廓で行はれた流行唄に基いてゐると云ふ。この節附を用ひた現存曲は、河東節の助六物の「しんぞ命」、長唄「吉原雀」の「馴れし廓」、常磐津節「關の扉」の「ゆくも歸るも」、「古山姥」の「馴れし廓」、「戻り駕」の「又古へに」、富本節「其俤淺間嶽」の「風に柳の」、「玉菊」の「夕べ〳〵の」、清元節「北州」の「松の位」の條などに用ひられる。又これと別種の節附の投節があり、これより可なり遲れて發生した純粹の江戸風の曲節である。新內節「尾上伊太八」の「俺等は今から」、「道中膝栗毛赤坂の段」の「此の彌次さん」、常磐津節「釣狐」の「昨日北風」、常磐津長唄掛合の「角兵衞獅子」の「親兄弟に」、清元節「權八」の「逢ひた見たさに」、「吉原雀」の「深山の奥の」の條などに用ひられ、前者の優雅なのに比べて、傳法な歌ひ方である。これによつても、投節が特定の歌の名稱ではなく、時代的變遷に從ふ流行歌謠の一般的な名稱であつたことが分る。

【參考】嬉遊笑覽○日本歌謠史　高野辰之○近代歌謠集　藤田德太郎　○江戸時代音樂通解　町田博三○校註松の葉解說　藤田德太郎　〔藤田〕

名古屋音頭（なごやおんど）　踊　【名稱】尾張名古屋で行はれた音頭歌。【解說】寶永頃、京の蔦山音頭の流を汲むと思はれる一流が、名古屋に入り、一種の踊音頭を生じた。寶永七年刊の「繪入今樣くどき」と題する書がそれで、作者は京蔦八郎兵衞とあり、名古屋駿河町下、萬屋清左衞門の刊行である。十五篇の歌を集めた土地の風俗が詠み込まれてあり、中には順の子節（じゅんこぶし）と云ふ滑稽な掛合歌もある。これも盆踊として行はれたのであらう。歌ひ手と三味線彈と踊子の樣を描いた口繪がある。

【參考】紙魚（第十四册）○日本歌謠史　高野辰之○日本歌謠集成卷七○近代歌謠集　藤田德太郎○甘露堂文庫稀覯本攷覽　尾崎久彌　〔藤田〕

生さぬ仲（なさぬなか）　小說　四册　【作者】柳川春葉　【發表】大正元年八月から二年四月まで大阪每日新聞。【刊行】大正二年七月、春陽堂。明治大正文學全集（柳川春葉篇）所收。

【梗概】一人の子供をめぐる生みの母と、生さぬ仲なる繼母との愛の葛藤を描いたもの。東洋漁業會社の社長渥美俊策は、根がお坊ちやん育ちのため、一旦衰へかゝつた社運を如何ともする事が出來なかつた上、妻眞沙子の父親赤澤亮輔（俊策は彼の後楯によつて社長の椅子を贏ち得てゐた）が社のために謀つた策が却つて會社を一層行詰らせて了ふ。俊策は自暴自棄に陷り、酒色に身を溺らしてゐる時、突然先妻諸岡珠江が出現した。彼女は新橋の藝者であつたのを俊策に落籍され、滋といふ子まで生んだに拘らず、家出して外人の妻となり、海外に去つたのだが、今莫大な遺產を手に入れて歸朝したのである。そして實子滋を自分の手に渡すなら渥美家を窮境から救つてやると言つた。慾に眼のくらんだ俊策の母は、獨斷で眞沙子を離緣して了つた。彼女は實家へ歸らずに夫の友人日下部の所へ一時身を寄せた。その後、滋は無理矢理に珠江の所へ連れて行かれたが、却つて彼は生さぬ仲の眞沙子を慕つて何うしても珠江には馴れつかぬ。一方眞沙子は世間の誤解を恐れて一旦實家へ歸つたが、元赤澤家の下女であつたお冬の家に移り、仕立物などでさゝやかな暮しを立てゝゐるとお冬の母親が頻りと再婚を勸めるので、堪りかねてその家を飛び出す。そして或る神社の境內で、實母の家を出て彼女の跡を追つてゐた滋の姿をチラリと見て追掛けようとすると通行の巡査に淫賣婦と疑はれて留置される。釋放された後も彼女は當もなく街を彷徨（さまよ）つてゐるうちに、或る日淸島町の停留場で行倒れとなり、夕刊賣の男の子に助けられたが、思ひあるのは誤であらう。これは江戸弄齋（弄齋節參照）を變化して、歌ひ出したもので、さらりとした小意氣な歌であつたから、大に世に行はれて、流行歌謠の代表的なものとなり、投節の名稱をも獨占したのである。古くは京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の籬節を三名物と稱した（「傾城色三味線」序、「新町細見潛標」「一目千軒」）。三都で盛んに歌はれたが、元祿を經て、寶永・正德に至り、衰へを見せた。

懸けなくもそれは滋であつた。其處で二人は世を儚んで親子心中をしようとすると、偶然にも日下部の手によつて助けられた。珠江は飽く迄も滋に對する愛着から、いろ〳〵と術策を弄するが、遂に育ての親の愛に打勝ち難いのを知つて淋しく旅に出る。折柄收監されてゐた俊策も罪を解かれて歸り、眞沙子も元の枝へ歸つて、再び濵美の家には平和な春が回つて來る。

【解說】場面の變化を企んで、讀者の興味をそそるため、あまりに偶然が多い。二つの違つた母性愛を描いた點に同感が持たれるが、結局、勸善懲惡主義で一切を解決してゐるために、彫りの淺い憾みがある。併し少年滋の哀れ深き描寫には、流石にこの作者の滋味ある筆ならではと思はせる。本篇が大毎・東日の兩新聞に連載さるゝや熱狂的な歡迎を呼び、ために同紙は少からず部數を增すに至つたので、彼を同新聞社の專屬作家として優遇するに至つた。

【以上高須】

【上演】(一)大正二年二月、大阪浪花座。俳優は、秋月桂太郎・村田正雄・井上正夫・嵐德三郎・片岡我童等の新舊大合同と銘打つた一座で、五十餘日間打通しの大當りだつた。同時に、關西到る處にこの作が流行した。(二)東京では、同年十月、新富座で市川猿之助・市川壽美藏・市川松蔦・市川左升・中村又五郎・坂東秀調等の手でこれを上演した。(三)大正六年二月、歌舞伎座で新派が眞山青果の新脚色でこれを上演した。役割は、前に新富座で松蔦の眞沙子を喜多村綠郎、秀調の珠江を河合武雄、又五郎の日下部正也を東辰夫、左升の卷野大造を松本要次郎、荒次郎の赤澤を後藤良介、壽美藏の濵美俊策を伊井蓉峰がした。

【參考】國文學全史平安朝篇藤岡作太郎　○國文學研究史　野村八良　【西下】

梨本集（なしもとしふ）　歌論書　五卷　【著者】戸田茂睡　【成立・刊行】元祿十一年五月成る。同十三年刊。【諸本】續々群書類從第十五所收。【內容】序文の冒頭に「歌は大和こと葉なれば、人のいふといふ程の詞を、歌によまずといふことなし」とあるが、これは寬文五年、この著者のかいた宣言書の文句を髣髴せしむるものであるが、かの宣言書に於て、制詞禁詞を打破して、「萬葉集」「三代集」によんだ詞は遠慮なくよむべきであると說いたのを、ここには一々實例をあげて、つぶさに制詞・禁詞のいはれなきことを論證してゐる。序文の中には、「萬葉」には俗語多く、就中長歌には平懷な詞が多いが、「古今」の頃から、こは〳〵しくきぐるしい詞はよまなくなつて、詞の善惡を生じ、私の好惡から、僻言多くなり、末々には先達の僻言を道の格式とし、益々僻言をいふに至り、「歌の詞に制といふ事を書出し、五てんの詞、主ある詞、よむまじき詞、遠慮すべき詞、俊成の好みよむべからずと宣ひし詞、定家卿の不二庶幾一と宣ひし詞、にくしといふ詞、いとしからずといふ詞」などいひ、言葉に關をするて人の赴き難きやうに道を狹くするに至つたが、これは以ての外の邪道で歌の零落の端である。二條家(別項)の僻說をやぶり、歌の正道にかへさねばならぬといふ意味をのべてゐる。本論は、「初五文字におくべからずといふ詞」「終りにいふまじきといふ詞」「遠慮すべきといふ詞」「ぬしある詞といふ事」「よむまじきといふ詞」の五項に分ち、制詞・禁詞をした言葉の例を一々あげ、その他に用ひられた實例をあげたりして、その不可を駁してゐる。【價値】二條家歌學の僻說は、自由研究の精神によつて破碎さるべき必然の運命であつたとはいへ、その先鞭をつけた功勞者として、木瀨三之・下河邊長流・僧契沖(各別項)及びこの著者の如きは、忘るべからざる人々である。就中この著者が、この書に於て大膽に、明快に、二條家歌學の制詞・禁詞の不合理を、確實な其礎の上に立ち、豐富な例證を以て論證し、用語の自由を主張したのは、實質的に最も注目すべき業績である。在滿の「國歌八論」(別項)(そこには建設的方面が多分に見られるが)に於ける中世歌學の攻擊と共に、最も注意さるべきである。而もこの書が當時文化の盛んであつた京阪の地に生れずして、江戸で現はれた爲めもあつて、歌界の影響も、さして大きくなかつた。併し中世歌學を破壞する最も有力な議論をはやく示した人で、近世歌學の爛漫たる盛花期を導いた人ともいふべく、同じ著者の「百人一首雜談」「僻言調」等と共に、この書は近世歌論の初期のものとしては最も注目すべきである。

【參考】戸田茂睡論　佐佐木信綱　【藤川】

奈須與一（なすのよいち）　能狂言　【格式】小習(和泉流)。【題材】流布本「平家物語」卷十一の那須與一の事をそのまゝ採つたもので、喜劇的脚色を以てしたものではない。

【梗概】源平屋島合戰の折、判官義經の軍勢は陸に構へてゐる處に、沖から小船が尋常に飾つてこちらへ漕いで來て止まる。見ると傾城(けいせい)が一人立つて扇を船の背欅(せがい)に立ててゐる。判官は後藤兵衞實基の進言によつて、那須の與一を射手に選ぶ。與一は一應は辭退したが遂に神明に祈つてこの大任を全うし、あつぱれ敵味方の喝采を博する。判官大滿足の態で、「いとほしの與一や、よう射させた。けなもの、こちへ來て餅を飮(の)うで、酒を食(く)へとの御詞あつたとぞ申しける」と落す。

【解說】これは語(かたり)と稱するもので、判官には判官の位、與一には與一の格で、仕形がある。この類に「鱸庖丁」や「朝比奈」の語がある。那須の語は、狂言と同樣獨立して行はれるが、能の「八島」(別項)の中入に使はれることもある。歌舞伎所作事の「素襖落(すおうおとし)」に取り込まれてゐる。(素襖落參照)

【野村】

那須與一（なすのよいち）　幸若舞曲　(三十六番の一)一卷　【成立】室町期　【諸本】古板本は寬永十二年板(十行本)。上田萬年校訂「舞の本」、同再刻名著文庫本「舞の本」(富山房)。新群書類從第八舞曲部に收めてある。又節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【內容】平曲物。屋島扇の的の武勇譚。

【島津】

何故話（なぜばなし）　【英】Why so Stories

【解說】民譚の最も古風なる形態の一つ。「書紀」卷二の「此世人所謂反矢可畏之緣也」といふが如き例の、上古の記錄にも多かつたのを見ると、多分は既に神話の時代に始まつてゐたのである。日本には餘りその數が澤山にはないやうに言はれたのは、單に蒐集がまだ盛んでなかつた爲めかと思はれる。分布の最も弘い現在の例としては「蕎麥の莖はなぜ赤い」があり、或は又蚤と虱の由來などがある。いはれ因緣故事來歷といふ言葉もあるから、いはれと呼ぶのが適當かも知れぬが、どこの國

本には又一つの重要なる特色が見出される。例へば雀は親孝行で、御齒黑を附けかけて親の臨終の床へ飛んで行つた故に、今でも頰は汚れてゐるが穀類を容易く得られる。燕は黑繻子の帶をさがしてゐたから、啄木鳥は伊達の衣裳を着かへてゐて、親の死目におくれた故に、今でもその罰に食物を見つけるのに辛苦するといふやうに、敎訓を含み且つ多くは死といふ事を聯想させ、話は必ずしも常に滑稽談話ではない。時鳥は殊にこの話に富んだ鳥であるが、近代最もよくいふ弟殺し、夫繼しと啼くといふ話から、古くは死出の田長や齊手鳥小鍋燒きの話に至るまで、悉く前生の因緣を語り、また亡靈の長く昔の悲歎を記憶してゐることを叙べるのである。これは「なぜ話」の童幼のために、發明されたものでない確かな證據と言つてよいのみならず、同時に又

釣舟の三吉實は道具屋清七(七代市川團十郎)、三河屋義平次實は足輕八內(澤村四郎五郎)、奥女中琴浦(市川團之助)、大島佐賀右衞門(大谷門藏)、腰元お纖(三條浪江)、玉島若黨彌市(花井才三郎)、玉島兵太夫(淺尾與次兵衞)、團七娘お市(岩井松之助)、番頭傳八(嵐新平)、義平次女房お虎(市川宗三郎)、藝者お磯(吾妻藤藏)、大和屋德兵衞(三代坂東三津五郎)。

【諸本】大南北全集第四卷所收。【題材】當時飯田橋にあつた蚊帳のために死んだ事件と、入谷田圃の女殺し一件とを夏祭の世界に盛り込む。

【梗概】【序幕】(道具屋裏手)釣舟の三吉は、勘當された親の家から、茶器を盜み出す。(向兩國茶見世)大島佐賀右衞門は藝者お磯に迷つて浪人とまでなり下つたが、お磯に逢つて恨みを云つてゐると、三河屋義平次に金を催

義平次と共謀して追ひ返し、その上金の抵當に、お梶を義平次に賣らうとするが諸かぬので、鐵弓で折檻すると、お梶の顏に疵がつく。義平次は代りに娘のお市を連れて行く。お梶は義理ある仲とて追つて行く。(入谷田圃)お梶は駕籠を追つて來たが、團七が駈けつけて支へ、お市をやつた跡で遂に自分が兵太夫を殺した事實を吐いてお梶を殺し、强請りかける合摺りの傳八をも井戸へ突き落す。大和屋德兵衞と女房お辰が來かゝる。【大詰】(深川大和屋)お辰は三吉とお磯の仲を取持つ。團七は友達の喧嘩から入り込んで、お辰を中に德兵衞との達引になり、お辰の父義平次も來て、三吉へお梶殺しの罪を塗りつけんとするが、順禮のお虎婆の口から義平次は元兵太夫の若黨で、子供の折お辰を誘拐したことが露顯し、お辰はお梶の妹と判明する。お梶の

本」、同再刻名著文庫本「舞の本」（富山房）。新群書類從第八舞曲部に收めてある。又節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【内容】平曲物。屋島扇の的の武勇譚。　【島津】

何故話（なぜばなし）【英】Why so Stories

【解說】民譚の最も古風なる形態の一つ。「書紀」卷二の「此世人所謂反矢可畏之緣也」といふが如き例の、上古の記錄にも多かつたのを見ると、多分は既に神話の時代に始まつてゐたのである。日本には餘りその數が澤山にはないやうに言はれたのは、單に蒐集がまだ盛んでなかつた爲めかと思はれる。分布の最も弘い現在の例としては「蕎麥の莖はなぜ赤い」があり、或は又蚤と虱の由來などがある。いはれ因緣故事來歷といふ言葉もあるから、いはれと呼ぶのが適當かも知れぬが、どこの國でも今では「なぜ話」と謂つてゐるから、將來はこの語を採用するのが便利であらう。起原が古いだけに民族の特徵がよく現はれてゐるが、一旦神話の領域から出てしまふと、寧ろ「大話」（別項）などの影響を受けて、到底有り得べからざる事實を說く點に、話術の技巧を求めようとし、從つて夙く童話に化し易かつたのである。その中で、特に今後の採集者に注意せられてもよいのは、小鳥の世界を說いて見ようとした一群の由來談である。雀・燕・鷓鴣・啄木鳥・百舌・時鳥、それから鴉・梟などもこの仲間に加はつてゐるのみならず、なほ今日餘り眼にふれぬ鳥類までが、皆それ〴〵の昔話を持つてゐる。アイヌの部落にも鳥の話は非常に多く、一部分は我々のもつものと似てゐることは、前に吉田巖氏が細かな報告（鄉土研究一ノ六七二頁以下）を出してゐるが、日本には又一つの重要なる特色が見出される。例へば雀は親孝行で、御歯黑を附けかけて親の臨終の床へ飛んで行つた故に、今でも頰は汚れてゐるが穀類を容易く得られる。燕は黑繻子の帶をさがしてゐたから、啄木鳥は伊達の衣裳を着かへてゐて、親の死目におくれた故に、今でもその罰に食物を見つけるのに辛苦するといふやうに、教訓を含み且つ多くは死といふ事を聯想させ、話は必ずしも常に滑稽談話ではない。時鳥は殊にこの話に富んだ鳥であるが、近代最もよくいふ弟殺し、夫戀しと啼くといふ話から、古くは死出の田長や杜手鳥小鍋燒きの話に至るまで、悉く前生の因緣を語り、また亡靈の長く昔の悲歎を記憶してゐることを叙べるのである。これは「なぜ話」の童幼のために、發明されたものでない確かな證據と言つてよいのみならず、同時に又鳥が空の世界の使であり、その言葉が靈の神祕であつた時代の遺產と認むべきものかも知れないのである。東北六縣の處々の田舍には今でも盲の巫女が一定の祭の日のみに、特に美しい韻律の語を以て、小鳥の話をする地方がある。卽ちこれが神話として行はれてゐた痕跡は、我が國に於てはまだ相應に顯著だと言ふべきである。　【柳田（國）】

謎帶一寸徳兵衛（なぞのおびちよつととくべゑ）　脚本

三幕七場　世話物【作者】四代鶴屋南北【通稱】「大島團七」【別名題】「恨蚊帳復讐奇談」【名稱】際物を脚色するため、「夏祭浪花鑑」の世界を借りたので、一寸德兵衞を持ち出して名題を洒落れたもの。【興行】文化八年七月十八日初日、江戸市村座上演。

【役割】浪人大島團七（五代松本幸四郎）、團七女房お梶・德兵衞女房お辰（五代岩井半四郎）、船頭釣舟の三吉實は道具屋清七（七代市川團十郎）、三河屋義平次實は足輕八内（澤村四郎五郎）、與女中琴浦（市川團之助）、大島佐賀右衞門（大谷門藏）、腰元お繼（三條浪江）、玉島若黨彌市（花井才三郎）、玉島兵太夫（淺尾與次兵衞）、團七娘お市（岩井松之助）、番頭傳八（嵐新平）、義平次女房お虎（市川宗三郎）、藝者お磯（吾妻藤藏）、大和屋德兵衞（三代坂東三津五郎）。

【諸本】大南北全集第四卷所收。【題材】當時飯田橋にあつた蚊帳のために死んだ事件と、入谷田圃の女殺し一件とを夏祭の世界に盛り込む。

【梗概】〔序幕〕（道具屋裏手）釣舟の三吉は、勘當された親の家から、茶器を盜み出す。（向兩國茶見世）大島佐賀右衞門は藝者お磯に迷つて浪人とまでなり下つたが、お磯に逢つて恨みを云つてゐると、三河屋義平次に金を催促される。玉島兵太夫がそれを扱ふが、佐賀右衞門は大島團七に計られて却つて兵太夫を恨む。團七は番頭傳八と計つて三吉から浮牡丹の香爐を捲きあげる。（本所石原）佐賀右衞門は兵太夫に斬りかけたが、團七が駈けつけて兩人とも斬り倒し、兵太夫が所持の千壽院の刀を盜む。娘お梶は叔母琴浦、若黨彌市、腰元お繼と共に通りかゝり、父の橫死を嘆く所へ團七出て、言葉巧みに勸めるので、遂に仇討助太刀の約束で、お梶はお市といふ子まである團七の妻になる。團七は藝者お辰を德兵衞に取られたので、お辰と瓜二つのお梶をかうして手に入れたのである。〔二幕〕（入谷團七住居）團七は病氣になつたお梶を苛酷に扱ふが、お梶は夫を父の仇と知らぬので辛抱してゐる。彌市・お繼が、お梶を見舞ふ。三吉は香爐について團七に掛合ひに來るが、團七は義平次と共謀して追ひ返し、その上金の抵當に、お梶を義平次に賣らうとするが諾かぬので、鐵弓で折檻すると、お梶の顏に疵がつく。義平次は代りに娘のお市を連れて行く。（入谷田圃）お梶は義理ある仲とて追つて行く。（入谷田圃）お梶は駕籠を追つて來たが、團七が駈けつけて支へ、お市をやつた跡で遂に自分が兵太夫を殺した事實を吐いてお梶を殺し、强請りかける合摺りの傳八をも井戸へ突き落す。大和屋德兵衞と女房お辰が來かゝる。〔大詰〕（深川大和屋）お辰は三吉とお磯の仲を取持つ。團七は友達の喧嘩から入り込んで、お辰を中に德兵衞との達引になり、お辰の父義平次も來て、三吉へお梶殺しの罪を塗りつけんとするが、順禮のお虎婆の口から義平次は元兵太夫の若黨で、子供の折お辰を誘拐したことが露顯し、お辰はお梶の妹と判明する。お梶の靈はお市に乘り移つて團七の惡事を告げる。（仲町裏手）德兵衞・お辰は團七を討つて父姉の仇を報じる。

【脚色】短い世話物だけに複雜の弊に陷らず、三吉の件がやゝ不用と思はれる以外は、首尾一貫して上乘の脚色振りである。殊に二幕目の段取りや、お梶・お辰を早替りに演ぜしむる手際などは、南北の長所を發揮してゐる。全體の構想と二幕目の蚊帳の技巧、御家人生活の描寫などは、後の同人作「東海道四谷怪談」（別項）の原據となつた。【價値】惡のエッセンスともいふべき大島團七の性格描寫の巧みさは稱讚の價値がある。傑作の割に上演度數の少かつたのは、初演が俳優病氣の關係から不入りだつたのと、「東海道四谷怪談」に株を奪はれた爲めである。大正十一年九月明治座に復活されて好評を得た。　【遲美】

京では、同年十月、新富座で市川猿之助・市川壽美藏・市川松蔦・市川左升・中村又五郎・坂東秀調等の手でこれを上演した。（三）大正六年二月、歌舞伎座で新派が眞山青果の新脚色でこれを上演した。役割は、前に新富座で松蔦の眞沙子を喜多村綠郎、秀調の珠江を河合武雄、又五郎の日下部正也を東辰夫、左升の卷野大造を松本要次郎、荒次郎の赤澤を後藤良介、壽美藏の濱美俊策を伊井蓉峰がした。

同十三年刊。【諸本】續々群書類從第十五所收。【内容】序文の冒頭に「歌は大和こと葉なれば、人のいふといふ程の詞を、歌によまずといふことなし」とあるが、これは寬文五年、この著者のかいた宣言書の文句を髣髴せしむるものであるが、かの宣言書に於て、制詞禁詞を打破して、「萬葉集」「三代集」によんだ詞は遠慮なくよむべきであると說いたのを、ここには一々實例をあげて、つぶさに制詞・禁詞

木瀨三之・下河邊長流・僧契沖（各別項）及びこの著者の如きは、忘るべからざる人々である。就中この著者が、この書に於て大膽に、明快に、二條家歌學の制詞・禁詞の不合理を、確實な基礎の上に立ち、豐富な例證を以て論證し、用語の自由を主張したのは、實質的に最も注目すべき業績である。在滿の「國歌八論」（別項）（そこには建設的方面が多分に見られるが）に於ける中世歌學の攻擊と共に、最も注意さるべきである。而もこの書が當時文化の盛

【解說】これは語と稱するもので、判官には判官の位、與一には與一の格で、仕形がある。この類に「鱸庖丁」や「朝比奈」の語がある。那須の語は、狂言と同樣獨立して行はれるが、能の「八島」（別項）の中入に使はれることもある。歌舞伎所作事の「素襖落」に取り込まれてゐる。（素襖落參照）　【野村】

那須與一（なすのよいち）　幸若舞曲　（三十六番の一）一卷　【成立】室町期　【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）。上田萬年校訂「舞の

納蘇利（なそり）　雅樂舞曲　【名稱】納蘇利の字義不明（大槻如電は地名ならんと言つてゐる）。また「なつそり」ともいひ、双龍舞・落蹲（らくそん）（一人舞の時の名。二人舞ならば、決して落蹲といはない）等の異稱がある。【性質】高麗樂。新樂、小曲。高麗壹越調曲に屬す。舞があり普通二人で舞ふ（屢々一人で舞ふこともある）。舞人は胡服を着し、帽をかぶり、動物に似たる假面をつけ、手に桴を持つて舞ふ。假面は金青色のものを常に用ひ、綠青色のものは一人舞に用ふと「續教訓抄」に記してある。この舞を双龍舞と呼び、これを双龍の舞であるとなすが、その假面から見ると、獸類に屬するやうに見える。番舞は「陵王」を用ひる。【沿革】起原・傳來共に不明。或は「陵王」（龍王）と結び附いて、林邑樂（別項）として傳はつたものを、後に右方樂に改作したものではないかと思はれる。平安朝に至つては、競馬節會などに用ひられた。

納蘇利（面）

【田邊】

名垂（なたり）　和學者　【姓名】澤田氏。通稱は友治、後、新右衞門。名は成祐（しげすけ）・蕃（しげり）。【號】五家園・木隱の翁・和氣在躬・花圃　【生歿】安永四年奥州會津に生れ、弘化二年（二五〇五）四月歿す。享年七十一　【閲歷】奥州會津藩の世臣で、幼より學を好み、和歌を嗜んで、同藩の和學師範安部井武氏に從つて二條風の歌を學び、後上京し、芝山大納言持豐の門に入つて更にその奥義を極めた。常に藩主に近侍して歌を詠んだが、藩命に依つて「日新館童子訓」「新編會津風土記」の編輯に與り、又和學師範の命を受けて學政の順序を選述して上進したこともあつた。中にも故實の學に精しきを以て知られた。【著者】家屋雜考（別項）○和歌體六種辨○古字考○爲政雜談○五家園雜記○無名歌集等。多く明治の兵燹に燒けて傳はらないといふ。

【石村】

夏神樂（なつかぐら）　舞踊　【名稱】夏に行ふ神樂の義。【解說】神樂は元來冬の夜、火を焚いて演ずるのが習ひであるが（御火焚參照）、夏、川の瀨に榊四本を立てて柱とし、篠竹を柵として供物を供へ、これを河社（かはやしろ）と呼び、こゝで神樂を演ずるのが夏神樂である。みそぎの意味であらうか。火は焚かぬが法である。なほ四月の内侍所の神樂は、この夏神樂の作法に依ることになつてゐた。（神樂參照）

【小寺】

夏草（なつぐさ）　詩集　【著者】島崎藤村　【刊行】明治三十一年十二月、春陽堂。【内容】全十四篇二十八章。「晩春の別離」を佳篇とする。處女作以上の優れた詩境の展開がない。ただ農人を歌つたことが素材の上での一變化であり、現實詩材の轉向と見られる。但し作そのものは佳作とは稱されぬ。藤村の第三詩集である。

【日夏】

夏小袖（なつこそで）　小說　【作者】尾崎紅葉　【發表】明治二十四年十二月、讀賣新聞に連載。【刊行】同二十五年八月、春陽堂。紅葉全集第二卷所收。

【梗概】灰吹屋五郎右衞門は、名代の吝ん坊で鴛め込み一方の頑固老爺である。麥飯を食はせてゐる癖に、人使ひが荒く、それで何か胡麻化されはしないかと、大根葉さへ土藏の中に干して鍵をかけて不寢番をする。年頃になつた息子德之助と娘おそめは、一方が近所の娘お八重と出來てゐるし、一方は手代の和七といふ仲になつてゐるが、親爺が慾の塊りの分らずやなので、とても夫婦になれまいから、いつそ二組一緒に駈落して、隣同士の長屋暮しでもしようかと相談する。そこへ降つて湧いたやうに老爺が後妻を迎へることになり、見合ひに來た當の相手といふのは、何にも知らずに母に強ひられたお八重だつた。その上おそめにも緣談があつて、千圓の支度金に惚れこんだ五郎右衞門は、成り上り者の五十男へ是非嫁に行けと云ふ。兄妹とも一時に身の上の一大事に直面した。折角息子は、あることないことお八重の惡口を云つて破談にさせようとするが、親爺が承知しないので、すつかり途方に暮れてゐると、番頭の佐助が計らずも活路を開いてくれた。それは五郎右衞門が誰にも知られぬやう桐の木の下に、三千圓の大金を瓶に入れて隱してゐることを發見したのだつた。息子と番頭は首尾よくこれを手に入れたが、五郎右衞門は金の紛失を知つて地團駄を踏んで失望落膽して泣き出す。物蔭から息子が出て來て、自分の働きで金を見つけて上げるからお八重を自分の嫁にし、またおそめと和七を添はせてくれるかと訊くと、「金さへ出るなら」とすべての交換條件を承諾し、誓約書さへ書く。やがて番頭佐助の手で金貨が運ばれ山のやうに積まれるので、五郎右衞門は狂喜する。德之助もおそめも和七も番頭も、銘々の喜びで、目出たい目出たいと喚めく中に、五郎右衞門も金貨の上に腹這ひになつて、白髮頭を振り立てながら「目出たい目出たい」。

【批評】この作は、モリエールの名作たる「守錢奴」（L'avare）を飜案したものである。題材や境遇が未だ十分に日本的にこなれてゐない憾みがあると共に、題名をも「夏小袖」の俚諺から取つたのにも知られるごとく、單に滑稽洒脫の趣を主にして原作の鋭い諷刺の一面は失はれてゐる。併しそれだけに廣く愛讀されると共に、ひと頃の舞臺に好適の臺本となり得て、初演後十年間にも亙つて新派の出し物となり、その輕妙な會話が常に喝采を博して來た。

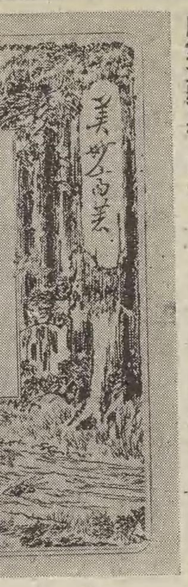
【以上水木】

【上演】明治三十年十月、東京眞砂座で「滑稽演劇、いろ〳〵」と名づけて上演。この時、落語家の眞似をするものとして寧ろ評判は惡かつたが、伊井一座の重要な演目の一つになつたのは、小島（後の兒島文衞）のお染が傑作であつたからであつた。三十六年一月、近松の「壽門松」と鷗外の「玉篋兩浦嶼」とをもつて、眞砂座から市村座へ、この一座の晴の進出をした時でも、大切にこの作を上演した。そしてその結果は、三木竹二をして「先づ新演劇始まつて以來の俳優の作物として、お染などは、最上に位するものであらうと信ずる」といはしめ、後にまた、尾崎紅葉をして「高田の荒尾讓介の出來は、これをかの夏小袖の小島のお染と兩々相對して、新演劇の双璧と謂つても可ならんか」とさへいはしめた。その後に至つても、種々な劇團で、屢々この作は上演される機會をもつた。が、大正五年四月、本鄕座で、久々にて伊井一座が木村操のお染でこれを出して以來、最近では、全くその上演を絕つた。

【以上久保田】

夏木立（なつこだち）　小說集　【著者】山田美妙　【刊行】明治二十一年八月、金港堂。

【内容】第一篇と第二篇とあるが、普通はただその有名な第一篇のみを指していふ。第一「籠の俘囚（とりこ）」、第二「玉屋の甍」、第三「花の茨、茨の花」、第四「柿山伏」、第五「仇を恩」、第六「武藏野」（別項）、以上の短篇六種を收めてある。この六篇のうち、第一と第二とは未發表の作と思はれるが、第三から第六までは何れも舊稿で、第三は「我樂多文庫」第十五・十六號（明治二十年十二月、二十一年二月）に、第四は同文庫第九號以下（明治十九年十一月より、原題「嘲戒



ジニアを見染め、父が戰場に出てゐる留守中に、役人のクロウヂアスを買收して、バアジニアを役所の一室に拘禁して思ひを遂げる。父はこの報に急いで救ひに來るが既に遲い。娘は怨みを呑んで父の手で死ぬ。第二「玉屋の甍」は、或る玉屋の店で、贋金剛石が練物の珊瑚を相手に氣焰をあげて、眞物を罵倒し板張硝子に嗜められるといふ諷刺的對話。第三「花の茨、茨の花」は、獨逸物の飜案と斷つてゐる。或る牧羊少年が笛の音が仲介となつて、牧場の傍のお城に閉ぢ籠められてゐる若君と遊び仲間になる。この若君はさる遠い國の王子で、臣下の惡漢のため國を横領されてゐる。少年はお城の贅澤な部屋で喜んで何日か過したが、やがて父母が戀しくなり、そこを逃げ出さうとする。或る夜若君に暇乞ひをして、故郷に歸つて來ると、父は戰死し、母は病死し、家は荒れ果てゐる。少年は悲嘆の餘り、自殺しようとするが、ふと思ひ直して、再び若君の許に歸つて來ると、若君は王位を回復してゐる。少年は若君の恩賞を辭して、故郷に歸つて、父母の墓を守つて暮す。第四「柿山伏」は、柿の木に登つて柿を盜み喰ひしてゐる山伏を、百姓が欺して、木の上に縛りつけ、その上に小便をかけるといふ滑稽的な話。第五「仇を恩」は、或る國の王子が、敵國の王子の爲に、父王を殺され、國を奪はれ、自分は敵國の王子の爲に救はれ、その王子の爲に父王の仇を討ち、國を回復するといふ話。第六「武藏野」は、武藏野の風景を敍した文章と、當時として足りない。「籠の俘囚」は骨を折つてゐる割合に、作爲の痕が露骨に見え、バアジニアの言動もいかにも芝居じみてゐる。「玉屋の甍」と「仇を恩」は暫く措く。「柿山伏」は一種の駄洒脫で取るに足らぬ。「花の茨、茨の花」は可憐な散文詩めいた物語で、やゝ讀むに足るが飜案である。描寫手法と文章とは、當時として兎に角清新と認めてよい。浮調子で甚しく西洋臭いのと、造語・比喩に幾多の非難があるのは蔽はれぬ。

【附記】「夏木立」第二編は明治二十三年四月刊行され、依田學海の「應天門」、春亭花友の「あやしき赤繩」、櫻（何人なるか未詳）の「哀々」が收められてゐる。

【柳田（泉）】

夏祭浪花鑑（なつまつりなにはかがみ）　淨瑠璃　九段世話物　【作者】並木千柳・三好松洛・竹田小出雲　【名稱】角書に「團七九郎兵衞・釣船三婦・

【諸本】十行六十一丁本・七行目一丁本。淨瑠璃名作集下（名著全集）所收。【題材】魚屋團七の親殺しの件は、元祿年代の事實であるらしく、同十一年に、大阪片岡仁左衞門座に上演されてゐる「宿無團七」に團七・三ぶ・德兵衞三人とも現はれ、この後、屢々上演されたので、これによつたものである。もと無賴漢であつたらしい者が、俠客物流行の大阪歌舞伎によつて、俠客に書き替へられて來たものと思はれる。但し延享元年冬に、堺の魚賣の長町裏での双傷事件があつたから、この巷說の流布に乘じて仕組まれたものらしく、お辰燒鐵の件は了然禪尼の事實に據つたと傳へる。

【梗概】【序】（色の水上汲分けた御鯛茶屋の鹽竈）堺のお鯛茶屋に、賴光跡目論の鹽竈遊覽の場を演じて遊興に耽けるのは、豫て乳守の太夫琴浦を身請けした濱田家中の諸士頭玉

夏木立（なつこだち）　小說集　【著者】山田美妙　【刊行】明治二十一年八月、金港堂。　【内容】第一篇と第二篇とあるが、普通はただその有名な第一篇のみを指していふ。第一「籠の俘囚（とりこ）」、第二「玉屋の麾」、第三「花の茨、茨の花」、第四「柿山伏」、第五「仇を恩」、第六「武藏野」（別項）、以上の短篇六種を收めてある。この六篇のうち、第一と第二とは未發表の作と思はれるが、第三から第六までは何れも舊稿で、第三は「我樂多文庫」第十五・十六號（明治二十年十二月、二十一年二月）に、第四は同文庫第九號以下（明治十九年十一月より、原題「嚇戒小說天狗」）に、第五は「以良都女」第七號（明治二十一年一月）に、第六は讀賣新聞（明治二十年十一月）に發表されたものである。美妙の小說「風琴調一節」（明治二十年七月）の序語によると、第二の「玉屋の麾」は原題を「贋金剛石（にせダイヤモンド）」といつたものらしく思はれ、隨つて制作年代も明治二十年七月より以前と推される。文體は六篇とも言文一致「だ」「した」「居た」「あつた」の調。第一「籠の俘囚」は、沙翁の「レイプ・オヴ・リュクレシア」の燒き直しめくもの。羅馬の惡貴族アッピアスは、平民バアジニアスの娘バアジニアを見染め、父が戰場に出てゐる留守中に、役人のクロウヂアスを買收して、バアジニアを役所の一室に拘禁して思ひを遂げる。父はこの報に急いで救ひに來るが既に遲い。娘は怨みを呑んで父の手で死ぬ。第二「玉屋の麾」は、或る玉屋の店で、贋金剛石が練物の珊瑚を相手に氣焰をあげて、眞物を罵倒し板張硝子に嗜められるといふ諷刺的對話。第三「花の茨、茨の花」は、獨逸物の飜案と斷つてゐる。或る牧羊少年が笛の音が仲介となつて、牧場の傍のお城に閉ぢ籠められてゐる若君と遊び仲間になる。この若君はさる遠い國の王子で、臣下の惡漢のため國を橫領されてゐる。少年はお城の贅澤な部屋で喜んで何日か過したが、やがて父母が戀しくなり、そこを逃げ出さうとする。或る夜若君に暇乞に行くともう死んでゐた。少年は無事父母の許に歸つたが、二度とお城の華美な生活を羨まなかつた。第四「柿山伏」は、函根の湯治場でデモ小說家那須意外の駄法螺を眞に受けた翁大臣野馬勇は、意外に政治小說の代作を賴む。意外はそれを得意で引受けたが、出來て出版したところ、散々の不評で、意外も野馬も大恥をかく。第五「仇を恩」は、仇を仇で返さず恩で返したら又恩で返されたといふ小話。第六「武藏野」（別項）。　【批評】美妙の名は前年「武藏野」（別項）の一篇によつて少數の具眼者には驚異となつたが、更にこの「夏木立」が出て一躍文壇の花形となつた。明治文學では、古典的作品の一つである。だが「夏木立」の好評も實は「武藏野」の一篇によるので、他の五篇は小說としていふに足りない。「籠の俘囚」は骨を折つてゐる割合に、作爲の痕が露骨に見え、バアジニアの言動もいかにも芝居じみてゐる。「玉屋の麾」と「仇を恩」は暫く措く。「柿山伏」は一種の駄洒脫で取るに足らぬ。「花の茨、茨の花」は可憐な散文詩めいた物語で、やゝ讀むに足るが飜案である。描寫手法と文章とは、當時として兎に角清新と認めてよい。浮調子で甚しく西洋臭いのと、造語・比喩に幾多の非難があるのは蔽はれぬ。　【附記】「夏木立」第二編は明治二十三年四月刊行され、依田學海の「應天門」、春亭花友の「あやしき赤繩」、櫻（何人なるか未詳）の「哀々」が收められてゐる。　（柳田（泉））

夏木立（表紙）

夏祭浪花鑑（なつまつりなにはかがみ）　淨瑠璃　九段世話物　【作者】並木千柳・三好松洛・竹田小出雲　【名稱】角書に「團七九郎兵衞・釣船三婦・一寸德兵衞」とある。脚色中に高津宮祭を入れたので、夏祭と据ゑ、夏祭を難波の名物とする心と、内容の男俠を父その心として續けた語である。　【興行】延享二年七月十六日初日、竹本座上演。非常な當り作で、年の暮まで續いた。直ちに歌舞伎芝居に入り、八月には京都の都萬太夫座に、翌年にかけて大阪の三座に上演され、甚だ評判をあげた。　【太夫】（序）竹本此太夫・同百合太夫・同仙太夫・同其太夫、（二段目）竹本紋太夫、（三段目）竹本錦太夫、（四段目）竹本政太夫、（五段目）竹本紋太夫・同仙太夫、（道行）竹本百合太夫、（六段目）竹本島太夫、（七段目）竹本政太夫・同錦太夫、（八段目）竹本此太夫、（九段目）竹本島太夫・同仙太夫。　【人形】團七九郎兵衞・お辰（吉田文三郎）、釣船三婦（桐竹勘十郎、竹川七郎次ともも）、一寸德兵衞（吉田才治）、義平次（桐竹門三郎）、大島佐賀右衞門（吉田彦三郎）等。　【諸本】十行六十一丁本・七行百一丁本。淨瑠璃名作集下（名著全集）所收。　【題材】魚屋團七の親殺しの件は、元祿年代の事實であるらしく、同十一年に、大阪片岡仁左衞門座に上演されてゐる「宿無團七」に團七・三ぶ・德兵衞三人とも現はれ、この後、屢々上演されたので、これによつたものである。もと無賴漢であつたらしい者が、俠客物流行の大阪歌舞伎によつて、俠客に書き替へられて來たものと思はれる。但し延享元年冬に、堺の魚賣の長町裏での双傷事件があつたから、この巷說の流布に乘じて仕組まれたものらしく、お辰燒鐵の件は了然禪尼の事實に據つたと傳へる。　【梗概】〔序〕（色の水上汲分けた御鯛茶屋の鹽竈）堺のお鯛茶屋に、賴光跡目論の鹽竈遊覽の場を演じて遊興に耽けるのは、豫て乳守の太夫琴浦を身請けした濱田家中の諸士頭玉島兵太夫の倅磯之丞である。同家中の大鳥佐賀右衞門は磯之丞を失脚させようとして、殊更磯之丞を煽てる。玉島家の恩を被る肴屋團七の女房おかちは、奥方の内命を受け、巧みにその慈愛を感ぜしめて、磯之丞はやうやく屋敷に歸る事となつた。〔二段〕（殿の諫意を卷込んだおやま繪の拜領物）濱田館の大殿の歸國につき、家老介松主計より諸士へ土產が配られる。磯之丞へは傾城の一軸が渡されて戒むるところがあつたが、これによつて兵太夫は磯之丞を勘當に處した。佐賀右衞門の策が成就したのである。此度の御慶びに乘じ、おかちの奔走により、佐賀右衞門の下郎と喧嘩した爲めに入牢してゐた團七も放たれることとなつた。兵太夫はそれとなく倅を賴む。〔三段〕（出入の珠數をつまぐつた珠數三昧の男作）無賴漢の釣船の三ぶも、今は心改まり、

珠數を爪繰つてゐるが、住吉の濱邊を通りがかりに、駕籠屋にねだられてゐる磯之丞を見てこれを助け、放免の良人團七を迎へに來たおかち親子を見つけて、磯之丞に引合はす。磯之丞を追つて來た琴浦に佐賀右衞門が窺ひ寄つたが、放免された團七が現はれた爲めに、忽ち彼に逐はれてしまふ。佐賀右衞門から頼まれた一寸德兵衞が團七をねらつたところ、おかちが落ち合つての物語で、心氣一轉してわれと生國を同じうする玉島家のために、磯之丞を隱まふこととなる。琴浦は三ぶが引き受ける。〔四段〕(手代が戀を揚出した浮牡丹の箱入娘)九郎兵衞と名を替へた團七は、磯之丞を內本町道具屋孫右衞門店に勤めさせて清七と言はせた。清七はいつか娘お中と契つたが、かねてお中に想ひを寄せた手代傳八は、仲買彌八と共謀して香爐を求める武士客を使つて、清七から主家の金五十兩をまき上げた上、その罪を被せて、この家から逐ひ出す。偶々來た團七は、その武士と見せたのが舅義平次であつたと知る。夜に入つて忍び寄つた清七はお中と謀し合ふうち、外の番屋で彌市を刃にかけ、それと氣の付かぬ傳八から金を奪つて立ち退く。〔五段〕(道行妹脊の走書)清七とお中は、松屋町を一筋に安居天神の森に辿りつく。(跡)最期を遂げんとしたが、三ぶに救はれる。傳八も尋ねて來たが、誤つて自ら縊る。〔六段〕(男の意地を立てぬいた燒鐵の女房作)高津の夏神樂で賑やかな折柄、松屋町の三ぶは、磯之丞を又も他家へ隱すために腐心の最中、德兵衞女房お辰が訪ねてその役を申出たが、三ぶはお辰の美貌の故に躊躇した。お辰はわれと顏に燒鐵を當てて決心を示した。三ぶが佐賀右衞門の手下を追つて出た留守中、團七からの使として義平次が來て琴浦を預つてゆく。磯之丞はお辰の船で備中へやる。あとに來た九郎兵衞は、又義平次の惡心を見てとり跡を追ふ。〔七段〕(舅が慾を止め兼ねた紅粉絞の色入帷子)宵宮の賑ひの中を、細引でからげた駕籠を急がせる義平次に長町裏の畠中で追ひついた九郎兵衞は、舅の心が改まらず、機でその耳をそいだ事から、遂に義平次を殺してしまふ。〔八段〕(友達に心を碎いた石割雪沓の合印)七日過ぎてまだ義平次殺しの下手人はあがらぬといふ。田島町の九郎兵衞は、妻子のために悶えてゐる。德兵衞が玉島へ下る暇乞にかこつけ、九郎兵衞を訪ねてその心を察し、罪を引き受ける心を示したが、何うしても打明けぬ。終に德兵衞はおかちを口說くと見せ、兩人斬り合ふ時、三ぶが飛び込んでこれを抑へ、團七の胸を讀んで妻子の離緣狀をとる。そこへ捕手が寄せた。德兵衞は召捕を承はつて屋根に追ひつめ、巧みに九郎兵衞を落す。〔九段〕(親と子の緣を繫いだ貫ざしの捕繩)介松主計が德兵衞內に磯之丞を尋ね、お家の重寶力王の太刀紛失の疑のためとて引いてゆく。三ぶがおかちと手枷をかけられた侭を連れて來て、親子三人を落さうとしたが、既に手が入つた。佐賀右衞門が來かゝる磯之丞を見て討ち取らんと拔いた太刀は、力王の太刀であつた。佐賀右衞門は召捕られ、磯之丞はその功によつて先知に戻る事となる。九郎兵衞は德兵衞の手で繩についたが、磯之丞は身に代へて救はんと誓ふ。

【構想】本曲は世話物九段續きの最初として、世話淨瑠璃に一期を劃した作で、世話物が時代物と對立すべき機運を具體化したものである。大阪は古來俠客氣質の流行地であつたから、これを以て世話物の複雜化を計るのは賢明な策であるが、作者はやはり苦心して、玉島家といふ武家屋敷を相當に働かせてゐる。よつて五段目までは、磯之丞を中心とする時代世話物であり、その後が團七による世話物であるやうに感ぜられぬでもない。併し團七の伏線として、先づおかちを現はし、おかちによつて三ぶや德兵衞の姿を見せてゆく手法は、誠に自然に運ばれて作者の手腕が十分に窺はれる。角書によると三人の俠客が併立するのであるが、何れもその行爲に於て、結局武士氣質に似た俠客氣質を以て終始してゐるのと、彼等の女房がまた悉く女俠客的行爲を示してゐるのとで、本曲は完全な俠客狂言としての統制を得てゐる。女俠客は歌舞伎畑からの移入があるが、色氣を含むところに世話物としての重要性を示してゐる。箇々の脚色の上に特に注目される事は、歌舞伎式手法によつて效果を目指した部分にある。三段目住吉で、團七が佐賀右衞門との出會ひには、床店の暖簾越しに佐賀右衞門の利腕を摑んで現はれる如き、四段目の清七お中が、番屋で勘七を倒し、次いで傳八を自害せしめる運びの如き、その著しいものである。但し作者のかゝる態度に出でたのは、或は當時最も豪勢を誇つた吉田文三郎の案も加はつてゐはしまいかと想像される。事實、文三郎の演出によつて本作の價値の高まつたと思はれる部分も甚だ多い。人形に帷子衣裳を着せて遣ひこなした事や、義平次殺しに本泥本水をかけた事等、珍しく言ひ囃された。又衣裳の模樣に目新しさを加へて、團七縞・德兵衞縞の名を殘し、或はお辰の風俗を定めたり、人形の頭には、和藤內を應用した「團七」を後世に留めた如き、皆彼の手腕に俟つたのである。かくして作者と演出家との隔意なき提携によつて、夏狂言としては、從來見ない內容の充實に成功したのである。【影響】七段目・八段目が著名であつたが、七段目は特に殺し場として獨特の流行を見、歌舞伎の舞臺にも屢々上演された。本曲の書替として女團七を生んだのは、立役を女方でゆく歌舞伎の一時的の現象によつたものと思ふ。並木正三の名作「大坂神事揃」や「宿無團七時雨傘」(各別項)等も一影響と見られるであらうが、全的に當代の俠客物に刺戟を與へた事は尠くないのである。

【參考】淨瑠璃譜○新刻役者全書卷之下○脚色餘錄三編下西澤一鳳○攝陽奇觀卷六濱松歌國○淨瑠璃名作集下解題 黑木勘藏 〔守隨〕

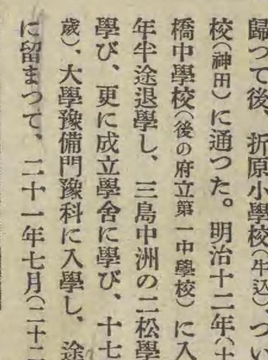
夏目漱石(なつめそうせき) 小說家・俳人【本名】金之助【別號】漱石枕流・漱虛碧堂・破障子。但し述作にはすべて漱石の號を用ひた(明治四十二年頃までは自ら嗽石と記した)。【生歿】慶應三年正月五日、江戶馬場下(今の牛込區喜久井町)で生れ、大正五年十二月九日、牛込區早稻田南町七番地で歿した。胃潰瘍。享年五十。【法名】文獻院古道漱石居士【墓所】東京雜司ケ谷墓地【家系】先祖は甲州の武田氏滅亡後浪人して武州に移り、江戶開府以前に牛籠の鄕士として土着し、元祿以來馬場下の名主役を世襲して明治維新に及んだ。生地の今の町名は、家の定紋(井桁に菊)から來たと云はれてゐる。父は夏目小兵衞直克(明治三十年六月八十四歲にて歿)。母は千枝(明治十四年一月五十三歲にて歿)。漱石は四男で末子であつた。三歲の時鹽原昌之助の養子となり、數年後實家に歸つたが、戶籍の上では明治二十二年一月(二十二歲)まで養家の姓を名乘つてゐた。同二十五年四月、分家して北海道平民となり、大正二年東京府に復籍した。明治二十九年六月(三十歲)、貴族院書記官長中根重一長女鏡子(十九歲)と任地熊本で結婚し、二男四女あり、外に一女があつたが夭折した。【閱歷】初等教育は初め養家から戶田小學校(淺草)に通ひ、實家に歸つて後、折原小學校(牛込)、ついで錦華小學校(神田)に通つた。明治十二年(十三歲)、一ツ橋中學校(後の府立第一中學校)に入學し、十四年半途退學し、三島中洲の二松學舍で漢籍を學び、更に成立學舍に學び、十七年九月(十八歲)、大學豫備門豫科に入學し、途中一度原級に留まつて、二十一年七月(二十二歲)、本科に進級し、二十三年七月

夏目漱石(二十四歲卒業)

東京大阪朝日新聞社員となり、出勤せずして文藝的述作の發表をすることを契約し、逝去の時までその實行をつづけた。四十二年十一月より四十四年十月まで、東京朝日新聞文藝欄を擔任した。【病氣】その半生は殆ど病患と戰つた半生であつた。大學豫備門入學後、先づ蟲樣突起炎を病み、トラホームをも患つたことがあり、大學卒業の翌年あたり、肺部に故障を生じて療養のため弓術を始めたりもした。ロンドン滯在中に强度の神經衰弱症に罹り、その症狀は歸國後まで續いてゐたが、同時にその頃は慢性の胃病に惱まされ、糖尿病の症狀をも呈してゐた。朝日新聞入社一二年後は胃酸過多症の徵候が殊に著しく、四十三年八月、修善寺溫泉で療養中、胃潰瘍のため吐血して重態に陷つたが、その前後數ケ月は長與胃腸病院で事した。翌年二月退院して藝の兩界に通ずる趨勢に鑑みて學位制度の功少くして弊多きを信じてゐた。〔交友〕中村是公・狩野亨吉・大塚保治・嘗虎雄等とは親交最も長く、學生時代に米山保三郎と親しかつたが早世した。併し藝術的に影響する所の最も大きかつたのは正岡子規(別項)であつた。その交遊は一高在學中からで、後、子規は退學して文壇人となつたが、漱石も明治二十二年頃から作句し、二十七八年には著しき進境を示し、三十年には俳壇の錚々たる者として碧梧桐・虛子等の名と共に、子規に依つて擧げられた。漱石は病床の子規を慰むるために、

夏目漱石

倉圓覺寺釋宗演の下に參禪したことがあり、釋宗活と知つたのもその時であつた。晩年には、神戶祥福寺の青年禪僧鬼村元成・富澤敬道の敬慕に對しても少からざる關心を示した。葬儀は宗演禪師が導師であつた。〔文學〕文壇に緣を持つた最初は大學學生時代で、上級には尾崎紅葉・川上眉山・石橋思案等があつて華々しき文壇的活動をしてゐたとき、漱石は或は子規と俳句を論じ、或は漢詩を作り、或は「方丈記」を英譯し、或は「老子の哲學」を論じ、卒業の前年には、藤代禎輔・松本文三郎等と「哲學雜誌」を編輯してホヰットマンを研究したり、又は英詩人の自然觀について講演したりしてゐた。それから十餘年間の沈默の讀書時代(尤も、その間も俳人としては現はれてゐたが)が挾まつて、「吾輩は猫である」



夏目漱石

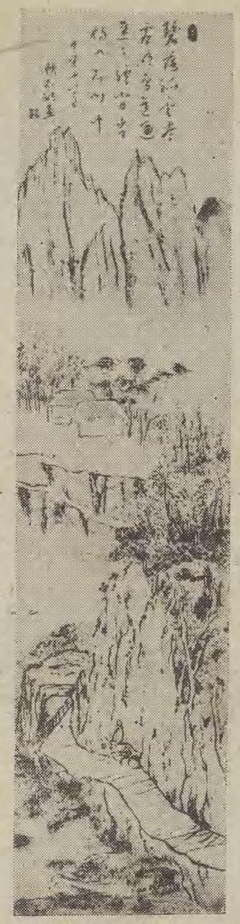
十二歳）まで養家の姓を名乘つてゐた。同二十五年四月、分家して北海道平民となり、大正二年東京府に復籍した。明治二十九年六月（三十歳）、貴族院書記官長中根重一長女鏡子（十九歳）と任地熊本で結婚し、二男四女あり、外に一女があつたが夭折した。【閲歴】初等教育は初め養家から戸田小學校（牛込）、ついで錦華小學校（神田）に通つた。明治十二年（十三歳）、一ツ橋中學校（後の府立第一中學校）に入學し、十四年半途退學し、三島中洲の二松學舎で漢籍を學び、更に成立學舎に學び、十七年九月（十八歳）、大學豫備門豫科に入學し、途中一度原級に留まつて、二十一年七月（二十二歳）、本科に進級し、二十三年七月（二十四歳）卒業、帝國大學文科大學に入學して英文學科を專攻し、二十五年特待生となり、二十六年七月卒業した（二十七歳）。大學豫備門在學中、江東義塾に、大學在學中、早稲田專門學校に教鞭を執つたことがあつたが、それは學資補給のためであつた。大學卒業後、同年十月、東京高等師範學校講師囑託、二十八年四月、松山中學校教諭となり、二十九年四月、第五高等學校教授に任命せられ、三十三年六月、現職のまゝ英語研究のため二箇年間英國に留學を命ぜられ、三十六年一月歸國。同年四月第一高等學校教授、東京帝國大學文科大學講師（英文學擔任）任命。三十七年明治大學講師囑託。四十年三月、すべての教職を辭し、同年四月東京大阪朝日新聞社員となり、出勤せずして文藝的述作の發表をすることを契約し、逝去の時までその實行をつづけた。四十二年十一月より四十四年十月まで、東京朝日新聞文藝欄を擔任した。【病氣】その半生は殆ど病患と戰つた半生であつた。大學豫備門入學後、先づ蟲樣突起炎を病み、トラホームをも患つたことがあり、大學卒業の翌年あたり、肺部に故障を生じて療養のため弓術を始めたりもした。ロンドン滯在中に强度の神經衰弱症に罹り、その症狀は歸國後まで續いてゐたが、同時にその頃は慢性の胃病に惱まされ、糖尿病の症狀をも呈してゐた。朝日新聞入社一二年後は胃酸過多症の徴候が殊に著しく、四十三年八月、修善寺温泉で療養中、胃潰瘍のため吐血して重態に陷つたが、その前後數ケ月は長與胃腸病院で暮した。翌年二月退院して八月大阪で講演し、又胃潰瘍で倒れて湯川病院で治療し、九月に痔の手術を受け、翌年また痔を手術し、大正二年三月「行人」（別項）執筆中胃潰瘍で病床に就き、翌三年十月にもまた同じ病症で臥床し、四年三月にもそれを繰返し、五年十一月には「明暗」（別項）執筆中遂に最後の胃潰瘍を發して、二回の大出血の後臥蓐十九日にして永眠した。【旅行】かくの如く病患の身體であつたが、相當の旅行家で、官命で二ケ年間英國へ留學したことを別にしても、明治四十二年、滿鐵總裁中村是公の招待に應じて、朝鮮と南滿洲を二ケ月間漫遊したのを初め、一生を通じて旅行した數は少くなかつた。そのうちの或るものは作品の材料となつた。同四十四年二月學位辭退事件があつた。それは文部大臣が文學博士を授與したのを受けなかつたことである。當時彼は學問文藝の兩界に通ずる趨勢に鑑みて學位制度の功少くして弊多きを信じてゐた。【交友】中村是公・狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄等とは親交最も長く、學生時代に米山保三郎と親しかつたが早世した。併し藝術的に影響する所の最も大きかつたのは正岡子規（別項）であつた。その交遊は一高在學中からで、後、子規は退學して文壇人となつたが、漱石も明治二十二年頃から作句し、二十七八年には著しき進境を示し、三十年には俳壇の錚々たる者として碧梧桐・虚子等の名と共に、子規に依つて擧げられた。漱石は病床の子規を慰むるために、「倫敦消息」を雜誌「ホトトギス」に寄稿した。後、「猫」の中篇も子規の靈に捧げられた。後進には寺田寅彦・松根東洋城・森田草平・鈴木三重吉・阿部次郎・安倍能成・野上豊一郎・小宮豊隆（これは全集編纂者として發表された連名である）。その他、眞鍋嘉一郎・速水滉・内丸最一郎等があり、又周圍に集まつた人々には、野間眞綱・皆川正禧・野村傳四・松浦一・坂元雪鳥・中川芳太郎・和辻哲郎・津田青楓・岩波茂雄・瀧田樗陰・赤木桁平・芥川龍之介・松岡譲・久米正雄・菊池寛・成瀬正一・松浦嘉一等があつた。宗教に關しては大學學生生活を終つた頃、鎌倉圓覺寺釋宗演の下に參禪したことがあり、釋宗活と知つたのもその時であつた。晩年には、神戸祥福寺の青年禪僧鬼村元成・富澤敬道の敬慕に對しても少からざる關心を示した。葬儀は宗演禪師が導師であつた。【文學】文壇に緣を持つた最初は大學學生時代で、上級には尾崎紅葉・川上眉山・石橋思案等があつて華々しき文壇的活動をしてゐたとき、漱石は或は子規と俳句を論じ、或は漢詩を作り、或は「方丈記」を英譯し、或は「老子の哲學」を論じ、卒業の前年には、藤代禎輔・松本文三郎等と「哲學雜誌」を編輯してホキットマンを研究したり、又は英詩人の自然觀について講演したりしてゐた。それから十餘年間の沈默の讀書時代（尤も、その間も俳人としては現はれてゐたが）が挾まつて、「吾輩は猫である」（別項）を以て一躍して文名を轟かした。明治三十八年（三十九歳）、彼はすでに認められたる學者であり、思索家であり、且つ一流の俳人でもあつた。

夏目漱石自畫像

【著作】【短篇物語】倫敦塔（別項）（明治三十八年一月、帝國文學）○カーライル博物館（同年同月、學鐙）○幻影の盾（別項）（同年四月、ホトトギス）○琴のそら音（同年七月、七人）○一夜（同年九月、中央公論）○薤露行（同年十一月、中央公論）○趣味の遺傳（同三十九年一月、帝國文學）（以上七篇「漾虚集」（別項）と題して同三十九年五月大倉・服部兩書店より發行）○坊つちやん（別項）（同三十九年四月、ホトトギス）○草枕（別項）（同年九月、新小說）○二百十日（別項）（同年十月、中央公論）（以上三篇「鶉籠」と題して同四十年一月、春陽堂より發行）○野分（別項）（同四十年一月、ホトトギス）（これは「坑

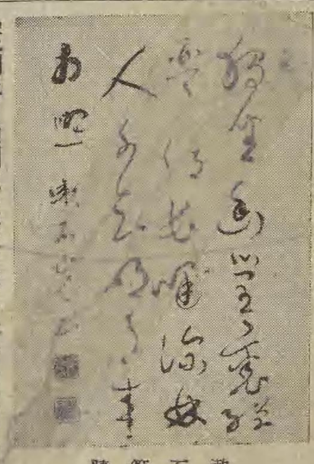
夫」と合せ、「草合」と題して同四十一年九月、春陽堂より發行）（以上十一篇、漱石全集第二卷・普及版漱石全集第二・三卷）。〔長篇小説〕吾輩は猫である（明治三十八年一月より同三十九年四月まで）○虞美人草（同四十年六月二十三日より十月二十九日まで朝日新聞に連載）○坑夫（同四十一年一月一日より四月六日まで朝日新聞連載）○三四郎（同四十一年九月一日より十二月二十九日まで朝日新聞連載）○それから（同四十二年六月二十七日より十月十四日まで朝日新聞に連載）○門（同四十三年三月一日より六月十二日まで朝日新聞連載）○彼岸過迄（同四十五年一月一日より四月二十九日まで朝日新聞連載）○行人（大正元年十二月六日より朝日新聞に連載）○心（同三年四月二十日より八月十一日まで朝日新聞に連載）○道草（同四年六月三日より九月十四日まで朝日新聞に連載）○明暗（同五年五月二十六日より朝日新聞に連載し、十二月十四日、即ち歿後五日にて稿盡きて未完成）（以上各別項）。〔小品・隨筆・紀行〕夢十夜（明治四十一年七・八月）○永日小品（同四十二年一・二月）○滿韓ところ〴〵（同十一―十二月）（以上三篇いづれも朝日新聞で發表され、後「文鳥」と共に「四篇」と題して同四十三年五月、春陽堂から發行）○思ひ出す事など（同四十四年一・二月、朝日新聞に載せられ、後、隨筆評論十二篇と共に「切抜帖より」と題して春陽堂から發行）○硝子戸の中（大正四年一・二月、朝日新聞）。

以上の外、なほ多くの小品隨筆と評論を輯めて漱石全集第九卷に收められてゐる（普及版漱石全集第十三卷小品、第十四卷評論雜篇）。〔詩・歌・俳句〕漢詩百七十六首（五言・七言・絕句・律、明治二十二年より大正五年に亙る。殊に大正五年八月十四日より十一月二十日まで殆ど一日一首を作つてゐる）○俳句二千餘句（明治二十二年より大正五年に及び、春の句が最も多い）。外に連句（虛子・四方太・漱石）・俳體詩（虛子と合作のものもあり）・新體詩等がある。皆明治三十八年以前のものである。和歌は八首、英詩は十一篇。以上は「猫」以前の文章・飜譯と共に漱石全集第十卷所收（普及版第十五卷）。〔研究書〕文學論（明治四十年五月、大倉書店）○文學評論（同四十二年三月、春陽堂）（各別項）○漱石全集第八卷、普及版第十一卷・第十二卷）。以上の外、日記・感想斷片・書簡・講演談話筆記等がある。漱石全集第十一卷乃至第十三卷及び別冊に收む（普及版第十六―二十卷）。



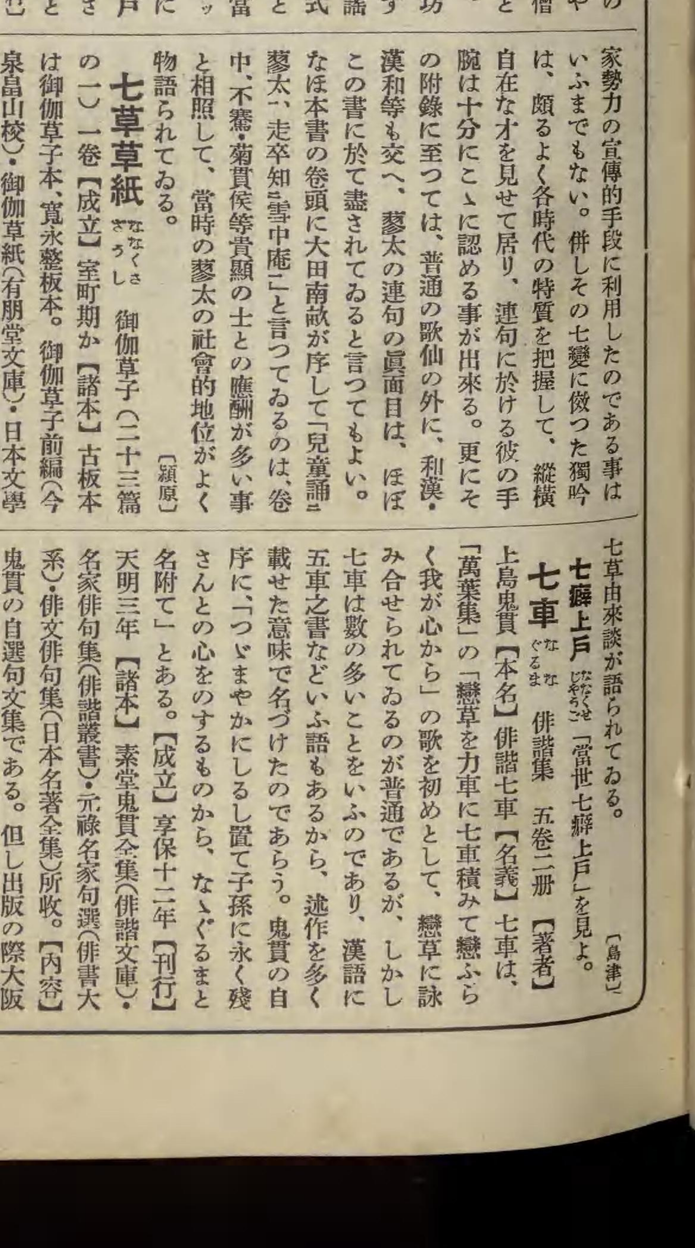
【作風・思想】初めは著しく浪漫的な色彩に富んだものが多く、當時の文壇の主潮ともいふべき所謂自然主義的傾向の外に、超然として筆を驅つてゐた。「倫敦塔」「幻影の盾」「草枕」等がその代表作であつた。同時に寫實主義的成分も次第に發達して、「カーライル博物館」「坊つちやん」「二百十日」及び「吾輩は猫である」等を作り出し、「三四郎」「それから」「門」に至つては、もはや浪漫主義の句ひはあまり殘つてゐない。表現の上では「虞美人草」を頂點として浪漫的色調は淡くなり、次の「坑夫」に於ては、寧ろ思ひきつて散文的なものにさへなつてゐる。しかし「坑夫」は、作者のあたまに湧いたものでなく、他人の經驗についての一種の聞書であるから、例外としてもよい。とにかく作者は、「三四郎」「それから」「門」以後、漸く本質的の礦脈に掘り當てたやうに、それ以來は、ひたすらに內へ內へと深く掘り下げて行つた。それは心理解剖の鶴嘴で掘り下げて行く人性研究の礦脈であつた。「彼岸過迄」「行人」「心」「道草」、さうして最後の「明暗」（これは不幸にして未完成のまゝ遺されたが）、一作は一作より深く強く掘り下げられた。かくの如くして作者の發見したものは、人間の性格に根づよく培はれてゐる自我主義（エゴイズム）であつた。自我主義の發見は、作者をますゝ厭世家にし、人間嫌ひにした。けれども最後の「明暗」を書く頃、作者は心的に更に一飛躍をして、私を去つて天に則れといふ廣い人間愛の方へ考へ方が向いてゐた。それは出發當初の反抗的思想、憎人的傾向に比して著しい變化であつた。文壇に立つて十二年、長篇をものすること十一、その徑路を考へて見ると、初めは人の登らぬ山道を辿つてゐたやうであつたが、いつしか人界を低く見下す高さに達してゐたかの如き觀がある。殊に「心」「道草」は最もよくその標高を示すものである。

【附記】漱石は、小説を書くことを本業としたが、それだけ苦しみも多かつたらしく、併し詩や俳句を作るのは樂しみのやうであり、書畫に至つては更に樂しみのやうであつた。文壇的に有名になつてからは揮毫を依頼する者が多く、或は斷り、或は進んで書き、その書いた俳句の數は短册だけでも相當の數に上つたであらう。畫は「猫」の時代に水彩畫を試みてあまり成功せず、後、油繪で寫生をしたがこれも成功せず、文人畫風の繪を始めて一家の風韻を發揮するやうになつたのは、大正二三年以後のことである。その傑作と稱すべき半折の山水凡て九あつた。（一）「南山松竹圖」（大震火災にて燒失）、（二）「閒來放鶴圖」（夏目家藏）、（三）「煙波縹渺圖」（同上）、（四）「孤客入石門圖」（野上豐一郎藏）、（五）「一路萬松圖」（夏目家藏）、（六）「秋景山水圖」（同上）、（七）「青嶂紅花圖」（同上）、（八）「山下隱栖圖」（眞鍋嘉一郎藏）、（九）「花開水自通圖」（長與又郎藏）。書では、「隸書大字辭」（草書）と「般若心經」（草書）が大作である。


漱石筆蹟

【參考】夏目漱石赤木桁平○文章道と漱石先生（上卷森田草平○漱石の思ひ出夏目鏡子○文豪夏目漱石（新小説大正六ノ一）○漱石先生追悼號（雄辯大正六ノ三）○故夏目漱石（大調和昭和三ノ一〇）○夏目漱石小宮豐隆（岩波講座「日本文學」）○夏目漱石研究 森田草平（日本文學講座）○夏目漱石（小野高尚【別名】「夏山雜談」。夏山のこと草しげき物語の意。【諸本】國書刊行會叢刊本。隨筆大觀・日本隨筆全集等所收。【解説】高尚が平直方といふ名の下に編述したもので、神道・官制・有職・故實・古言・書法、その他舊慣先例ある事物を考説したもの。著者の序に據ると、元文戊午（三年）に大阪天王寺に參詣して舞樂聽聞の席で知合になつた、もと京都の大臣家に侍を勤めた秋山色樹（退身後、嘯樂と改名）の巷を鳥羽の里に訪問して日を重ねる間に、公事を初め萬のことを聞き糺したのを書き付けたものが、この一篇を成したと云ふことになつてゐる。終りに「寛保辛酉（元年）八月上澣平直方」と署してある。「大鏡」などの序言に似せて言ふ所を見ると、全くの寓言らしい。併し本文は、神國・神祇等の標題を設けて眞面目に簡潔の説明をしてゐる。各卷數十百項を收めてゐる。殊なる發明等は少いやうだが、知識を博くする料にはなるであらう。【和田】

名取川（なとりがは）　能狂言【格式】小習。但しカケリ入といふ小書（こがき）附になると、一番習といつて、かなり重い物に屬する（和泉流）。【題材】陸前の名取川は歌枕として名高く、「みちのくにありといふなる名取川無き名取りては



られたと推し、名を返せと迫る。何某はこのあきれた言ひがかりに、稀代な事をおつしやる、不祥な所に來かゝつたと當惑すると、僧は、そのきたい坊にふしやう坊が私の名だと言つて二つの名を取返し、本國さして歸る。【構想】「泣尼」（別項）と同じく、魯鈍な田舍坊主を主要人物としてゐる。古文學を背景とする名取川を題材とした「川盡し」の文句は、謠ひ物として當時行はれてゐた一種の文學形式（物盡物揃參照）で興味がある。川に取られたと思つた名前を、何某のふとした詞から思ひ當るといふ、少々わざとらしくはあるが、ウイットを一の趣向としてゐる。【影響】この作に含まれてゐる「川盡し」の文句は、その儘江戸長唄に用ひられてゐる。寶曆九年七月刊行された「歌撰集」に、七變化の一として「傾城名と り川」が載つてゐる。【野村】

家勢力の宣傳的手段に利用したのである事はいふまでもない。併しその七變に倣つた獨吟は、頗るよく各時代の特質を把握して、縱横自在な才を見せて居り、連句に於ける彼の手腕は十分にこゝに認める事が出來る。更にその附錄に至つては、普通の歌仙の外に、利漢・漢和等も交へ、蓼太の連句の眞面目は、ほぼこの書に於て盡されてゐると言つてもよい。なほ本書の卷頭に大田南畝が序して「兒童誦蓼太、走卒知雪中庵」と言つてゐるのは、卷中、不齋・菊貫侯等貴顯の士との應酬が多い事と相照して、當時の蓼太の社會的地位がよく物語られてゐる。【穎原】

七草草紙（ななくさざうし）　御伽草子（二十三篇の一）一卷【成立】室町期か【諸本】古板本は御伽草子本、寬永整板本。御伽草子前編（今泉島山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學

七草由來談が語られてゐる。【島津】

七癖上戸（ななくせじやうご）　「當世七癖上戸」を見よ。

七車（ななぐるま）　俳諧集　五卷二册【著者】上島鬼貫【本名】俳諧七車【名義】七車は、「萬葉集」の「戀草を力車に七車積みて戀ふらく我が心から」の歌を初めとして、戀草に詠み合せられてゐるのが普通であるが、しかし七車は數の多いことをいふのであり、漢語に五車之書などいふ語もあるから、述作を多く載せた意味で名づけたのであらう。鬼貫の自序に、「つゞまやかにしるし置て子孫に永く殘さんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て」とある。【成立】享保十二年【刊行】天明三年【諸本】素堂鬼貫全集（俳諧文庫）・名家俳句集（俳諧叢書）・元祿名家句選（俳書大系）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【内容】鬼貫の自序に、

樂聽聞の席で知合になつた、もと京都の大臣家に侍を勤めた秋山色樹（退身後、曦樂麿と改名）の蔕を鳥羽の里に訪問して日を重ねる間に、公事を初め萬のことを聞き糺したのを書き付けたものが、この一篇を成したと云ふことになつてゐる。終りに「寛保辛酉（元年）八月上澣平直方」と署してある。「大鏡」などの序言に似せて言ふ所を見ると、全くの寓言らしい。併し本文は、神國・神祇等の標題を設けて眞面目に簡潔の説明をしてゐる。殊なる發明等は少いやうだが、知識を博くする料にはなるであらう。〔和田〕

名取川（なとりがは）　能狂言　【格式】小習。但しカケリ入といふ小書（こがき）附になると、一番習といつて、かなり重い物に屬する（和泉流）。【題材】陸前の名取川は歌枕として名高く、「みちのくにありといふなる名取川無き名取りてはくるしかりけり」（古今集）の歌は、最も人口に膾炙してゐる。この作では、評判を得る意味の名取を詞通りに名前を取る意としてゐる。【梗概】戒壇の地を踏み受戒までした僧、或る寺へ參つて大兒（おほちご）から「きたい坊」、小兒（こちご）から「ふしやう坊」と名附けられた。急いで國許へ歸らうと述べ、道々その名を忘れようとするのを、きたい坊にふしやう坊、きたい坊にふしやう坊と吟じ、或は謡節に、或は舞節に、若しくは小歌節に唱へ、更に勤行節（ごんぎやうぶし）に誦する。やがて大河に到り、これを渡る。水中で轉んだ拍子に、はて何やら落した。珠數あり、笠あり、扇あり、したが名を忘れたと、拍子にかゝつても思ひ出せず、然る處に何某が出て、殺生禁斷の所であるのに何をするかと詰（なじ）る。僧は殺生をしないと辯じ、且つこの川は名取川で、何某は名取の何某だと聞き知り、己が名を取られたと推し、名を返せと迫る。何某はこのあきれた言ひがかりに、稀代な事をおつしやる、不祥な所に來かゝつたと當惑すると、僧は、そのきたい坊にふしやう坊が私の名だと言つて二つの名を取返し、本國さして歸る。【構想】「泣尼」（別項）と同じく、魯鈍な田舍坊主を主要人物としてゐる。古文學を背景とする名取川を題材とした「川盡し」の文句は、謡ひ物として當時行はれてゐた一種の文學形式（物盡物擬參照）で興味がある。川に取られたと思つた名前を、何某のふとした詞から思ひ當るといふ、少々わざとらしくはあるが、ウイットを一の趣向としてゐる。【影響】この作に含まれてゐる「川盡し」の文句は、その儘江戸長唄に用ひられてゐる。寶暦九年七月刊行された「歌撰集」に、七變化の一として「傾城名とり川」が載つてゐる。〔野村〕

七柏集（ななかしふ）　俳諧集　四册　【編者】雪中庵蓼太　【名稱】また「しちはくしふ」ともいふ。【刊行】天明元年五月の序、江戸西村源六刊。【諸本】中興俳諧名家集（俳書大系）所收。【解説】蓼太が慶長以來元祿に至るまでの俳風を「貞德」「檀林」「次韻」「虚栗」「續虚栗」「未來記」「炭俵」の七時代に分ち、自らその各時代の句風に倣つて、獨吟歌仙一卷づつを卷き試み、以てその變遷の跡を明かにしたもので、なほ蓼太が門人連中と興行した連句百餘卷を附錄として添へてある。分量からいへば附錄の方が遙かに多いが、その本體は題名によつても明かな通り、勿論俳風七變の意を悟らせるにある。ために附言として牛歌坊沙羅佛の筆で七變の歌仙流行の趣を記してある。而してその「猿蓑」を取らないで「未來記」を以て一時代を代表させてゐる如きは、蓼太が自家勢力の宣傳的手段に利用したのである事はいふまでもない。併しその七變に倣つた獨吟は、頗るよく各時代の特質を把握して、縱橫自在な才を見せて居り、連句に於ける彼の手腕は十分にこゝに認める事が出來る。更にその附錄に至つては、普通の歌仙の外に、和漢・漢和等も交へ、蓼太の連句の眞面目は、ほぼこの書に於て盡されてゐると言つてもよい。なほ本書の卷頭に大田南畝が序して「兒童誦ニ蓼太一、走卒知ニ雪中庵一」と言つてゐるのは、卷中、不蠹・菊貫侯等貴顯の士との應酬が多い事と相照して、當時の蓼太の社會的地位がよく物語られてゐる。〔穎原〕

七草草紙（ななくさざうし）　御伽草子（二十三篇の一）一卷　【成立】室町期か　【諸本】古板本は御伽草子本、寛永整板本。御伽草子前編（今泉島山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷等所收。【解説】孝行物語、由來談。正月七日に七草を摘んで帝の供御に供へる由來。昔支那の楚國に大しうと云ふ者があつて、天性至孝、百歲に及ぶ老父母が眼も霞み、耳も聞えぬのを悲しみ、とうこう山（ざん）に登つて兩親の若くなるやうに三七日天に祈つた。滿願の暮方に帝釋天が天降つて納受の由を告げ、正月六日の夜酉の時から、芹・薺・御行・田平子・佛の座・菘・淸白の七草を、柳の木の盤に載せて玉椿の枝で打ち、東方の井から汲んだ若水を以て白鷺鳥の渡らぬ前に服するならば、八千年も長生するこの鳥の壽を轉じて忽ち若返ると教へたので、その言葉の如くすると、兩親共俄に二十歲許りに若返つた。奇特を聞召した帝は大しうを召して位を讓られた。七草の行事は、この孝德を記念するためであると云ふ。「松風村雨」にも、ほぼ同じ七草由來談が語られてゐる。〔島津〕

七癖上戶（ななくせじやうご）　「當世七癖上戶」を見よ。

七車（ななぐるま）　俳諧集　五卷二册　【著者】上島鬼貫　【本名】俳諧七車　【名義】七車は、「萬葉集」の「戀草を力車に七車積みて戀ふらく我が心から」の歌を初めとして、戀草に詠み合せられてゐるのが普通であるが、しかし七車は數の多いことをいふのであり、漢語に五車之書などいふ語もあるから、述作を多く載せた意味で名づけたのであらう。鬼貫の自序に、「つゞまやかにしるし置て子孫に永く殘さんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て」とある。【成立】享保十二年　【刊行】天明三年　【諸本】素堂鬼貫全集（俳諧文庫）・名家俳句集（俳諧叢書）・元祿名家句選（俳書大系）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【内容】鬼貫の自選句文集である。但し出版の際大阪の書肆興文堂高橋平助が、鬼貫の門人高橋只川の後裔であるといふ緣故から、稿本「七車」の所藏者荒木氏と謀り、三宅嘯山に託して既に太祇の「鬼貫句選」（別項）に抄錄されたものを除去して刊行したのである。内容は、卷一、春之部發句百二十八、附句一、表三句一。卷二夏之部發句八十三。卷三、秋之部發句八十八、附句二、表三句一。卷四、冬之部發句五十八、表三句一。卷五、序跋類十三篇、贈辭記讃類十一篇、哀傷類九篇の文章より成つてゐる。享保十二年三月鬼貫自序、天明三年八月三宅嘯山の跋がある。【價値】太祇の「鬼貫句選」と合せて鬼貫の自選句文集全部をなす譯になるので、鬼貫の句文を最も確實に知るには、句選と共になくてならぬ第一史料である。鬼貫の自序は、主として彼の俳歷の一部を語るものであり、嘯山の跋は、鬼貫の傳記を相當精

筆・紹行」（夢十夜（明治四十一年七・八月）○永日小品（同四十二年一・二月）○滿韓ところ〴〵（同十一―十二月）（以上三篇いづれも朝日新聞で發表され、後「文鳥」と共に「四篇」と題して同四十三年五月、春陽堂から發行）○思ひ出す事など（同四十四年一・二月、朝日新聞に載せられ、後、隨筆評論十二篇と共に「切拔帖より」と題して春陽堂から發行）○硝子戶の中（大正四年一・二月、朝日新聞）。

以上の外、なほ多くの小品隨筆と評論を輯めて漱石全集第九卷に收められてゐる（普及版漱

〜き所謂自然主義的傾向の外に超然として筆を驅つてゐた。「倫敦塔」「幻影の盾」「草枕」等がその代表作であつた。同時に寫實主義的成分も次第に發達して、「カーライル博物館」「坊つちやん」「二百十日」及び「吾輩は猫である」等を作り出し、「三四郎」「それから」「門」に至つては、もはや浪漫主義の匂ひはあまり殘つてゐない。表現の上では「虞美人草」を頂點として浪漫的色調は淡くなり、次の「坑夫」に於ては、寧ろ思ひきつて散文的なものにさへ

【附記】漱石は、小説を書くことを本業としたが、それだけ苦しみも多かつたらしく、併し詩や俳句を作るのは樂しみのやうであり、書畫に至つては更に樂しみのやうであつた。文壇的に有名になつてからは揮毫を依頼する者が多く、或は斷り、或は進んで書き、その書いた俳句の數は短册だけでも相當の數に上つたであらう。書は「猫」の時代に水彩畫を試みてあまり成功せず、後、油繪で寫生をしたがこれ

○夏目漱石小宮豐隆（岩波講座「日本文學」）〔野上〕○夏目漱石研究（森田草平（日本文學講座）○夏

夏山閑話（なつやまかんわ）　隨筆　五卷　【著者】小野高尙　【別名】「夏山雜談」。夏山のこと草しげき物語の意。【諸本】國書刊行會叢刊本。隨筆大觀・日本隨筆全集等所收。【解説】高尙が平直方といふ名の下に編述したもので、神道・官制・有職・故實・古言・書法、その他舊慣先例ある事物を考説したもの。著者の序に據ると、元文戊午（三年）に大阪天王寺に參詣して舞

しく語るものとして、合せ見るべきものである。ただ喃山の跋は時代のやゝ降るものであるだけに、檢討の餘地があることは云ふまでもない。

【萩原】

七つのや「切字」を見よ。

七つ面（なゝつめん）　脚本（歌舞伎十八番の一）【作者】津打治兵衞・藤本斗文【初演】元文五年三月、江戸市村座春狂言「姿視隅田川（すがたみすみだがは）」第二番目【沿革】次いで寛保二年七月、大阪大西芝居「星合桑景清（ほしあひのくはかげきよ）」第四番目に景清が頽朝を討たんため、面打大和の元興寺（がごぜ）赤右衞門（市川海老藏）と名を替へて、本作を演じたのが大當りで、後世に行はれたのはこの時のに據つてゐる。海老藏（二代市川團十郎）歿後、本作を演じた主なる俳優は、九代市村羽左衞門・四代五代市川團十郎等である。【傳來】廢滅。但し九代市川團十郎が、福地櫻痴に新作させて「新七つ面」として復活上演（明治二十六年十一月、歌舞伎座）。これは海老藏の「七つ面」にヒントを得て、新たに能がかりに改作したものである。これが新歌舞伎十八番の一として現行されるものである。【題材】柏莚（二代團十郎）が寶生太夫宅で能面を種々見せられた時に暗示を得て、後、脚色させたものと傳へられる。

【梗概】面打元興寺赤右衞門實は粟津六郎左衞門（市川海老藏）が、淺黄頭巾の上に懸烏帽子・素袍の下のみを附け、左手で櫻の枝を肩に擔ぎ、右手に扇を持つて出る。舞臺の東方に面箱が五つ並べてある。吉田少將惟貞（八代市村宇左衞門）の所作があつて、野上の班女（玉澤才次郎）に面を見せんと、初めの箱を開くと笑尉の面が出る。次に吉田少將御臺櫻姫（龕中歌川）に面を見せようと蓋をとると、鹽吹の面が出る。その次に班女と櫻姫とが互に少將をいどみ、嫉妬深いのが般若のやうだと意見のために箱を開けると凄い般若の面が出る。次は姥の面、最後に武惡の面が出て口をくわつと開いた所へ、粂の平内兵衞（二代松本幸四郎、後の四代團十郎）と勅使太宰の熊主（村山次郎右衞門）とが、惡事を相談して都鳥の一卷を盜んで來て出す所へ、人の足音に彼の一卷を他に見せじと後へ廻すと、武惡の面が卷物を引喰へて取る。平内これはと驚いて振り返ると、面箱の蓋はチャンと閉つて押しても開かない。これ等の面はどれも眉毛唇などを動かしたので、海老藏の早替り扮裝と知られた。

【解說】勿論、純粹な所作事ではなく、所作の加味せられた一種の變化物式な型物で、柏莚が扮裝術の巧妙を應用した卽ち扮裝早替りの鮮かな妙技を見せるのが主眼で、內容の至つて乏しいものである。

【附記】大阪所演の面は、笑尉・釣眼・鹽吹き・武惡・黑髭・般若であつた。なほ竹柴金作作の「新曲七つ面」（昭和三年十月、歌舞伎座）があるが、これは落語の狸を舞踊化したもので、お伽噺式の極くたわいのないものである。

【參考】壽十八番歌舞妓狂言考（石塚豐芥子（新燕石十種第三））○劇代集（二代櫻田治助編）○歌舞伎圖說（守國憲治・秋葉芳美共編）

【秋葉】

難波（なにはえ）「神事物の諸曲」を見よ。

難波江（なにはえ）　隨筆　七卷十四册【著者】岡本保孝【諸本】百家說林續編所收。【解說】卷一に於烏の假字以下四十條、卷二に復古學之譜以下四十條、卷三に國號以下四十條、卷四に北條氏略譜以下四十條、卷五に源氏物語新釋以下四十條、卷六に權柄宜レ在二皇統一といふ事以下四十條、卷七に日吉山王以下四十條を收め、每卷を上下二册に分つてある。國史・國語・國文・有職に關する事項の考證で、殊に音韻・語法に係るものは精到を極めてゐる。「にとへとのわかち」「にとをと同じ意に通ふ例」「さときとの辨」「邇と遠とのてにをは」「のとにと近し又をにも近し」「すら、だに、さへ」の諸項の類がそれである。また古典籍の傳來・解題等について、後世に益ある文字もある。

【和田】

難波潟猫の舊語（なにはがたねこのむかしがたり）　「復讐猫股屋敷」を見よ。

浪速人傑談（なにはじんけつだん）　傳記【著者】政田義彥【刊行】安政二年【諸本】續燕石十種（國書刊行會）所收。【解說】天和以降、浪速で殘した一能一技に長じた人々七十三人を、德行・皇朝學・儒家・武技・新刀名家・書家・畫家・天學・算學・卜筮・物產・相學・醫家・俳諧・戲家・拾遺・茫芴の十七項目に分けて傳記を記したもの。その傳記の根據として序文に「悉、正しき書籍より拔萃し、又は篤實なる老人の物語せしを譯す、かならず予が妄誕とする事なかれ」と謂つてゐる。

【土井】

浪華人物誌（なにはじんぶつし）　傳記　一册【編者】毛生正華【本稱】「新刻浪華人物誌」【刊行】文政七年【解說】當時の藝苑に關係ある人々の姓名・通稱・居所等を記したもので、儒家・醫家・和歌・天學家・易學家・書家・畫家・篆刻家・文雅の九門に分け、約四百名を收載してゐる。本書は同編者に依る「浪花鄉友錄」二册（安永四年刊、寬政二年刊）「續浪花鄉友錄」一册（文政六年刊）の續編と見るべきものである。各編を通じてほゞ同數の人名を、同樣な部門に分類してゐる。記すところは何れも簡易であつて、人名辭書としてよりは、寧ろ或る手がかりを供するものであらう。

【土井】

浪速叢書（なにはそうしょ）　十五卷　索引一卷【編者】浪速叢書刊行會【刊行】大正十五年十二月以降順次刊行。【解說】大阪の地理・商業・風俗等に關する叢書で、一卷から六卷までは攝陽奇觀（澀井太室）、七・八卷は攝津名所圖會大成（曉鐘成）、九卷は大阪商業史資料（諸組合仲間問屋及びその規約、商業工業諸職沿革、外國貿易幷商業上の慣例）、十・十一卷は大阪訪碑錄、十二・十三卷は地誌で、十二卷には蘆分船（二無軒道治）・難波鑑（同上）・難波十二景（山本洞雲）・難波十觀（同上）・浪花のながめ（白緣齋梅好）・浪花の梅（同上）・附大阪地圖、十三卷には堺鑑（衣笠一閑）・全堺詳志（高志芝巖）・住吉名勝圖會（岡田玉山）・天保山名所圖會（曉鐘成）を收めてある。十四卷は風俗と題して浪花繁昌記（平亭銀鵞）・浪花街能噂（平亭銀鵞）・虛實柳巷方言（看具屋先生著）・狂哥夜光玉（如亭栗洞及び門人棗由亭貧米）・浪花色八卦（外山翁）・浪花今八卦（備四軒）・浪花花街今いま八卦（放蕩軒）・煙華漫筆（著者未詳）・月華餘情（同上）・浪花青樓志（墨江閑）・澪標（李秀）・浪華十二月書譜（狂言堂春のや繰月）を收め、十五卷は演藝と題して浪花其末葉（竹遊三笑）・女大名東西評林（著者未詳）・戲場樂屋圖會（松好齋半兵衞）・樂屋圖會拾遺（同上）・大歌舞伎外題年鑑（著者未詳）を收め、十六卷は索引となつてゐる。

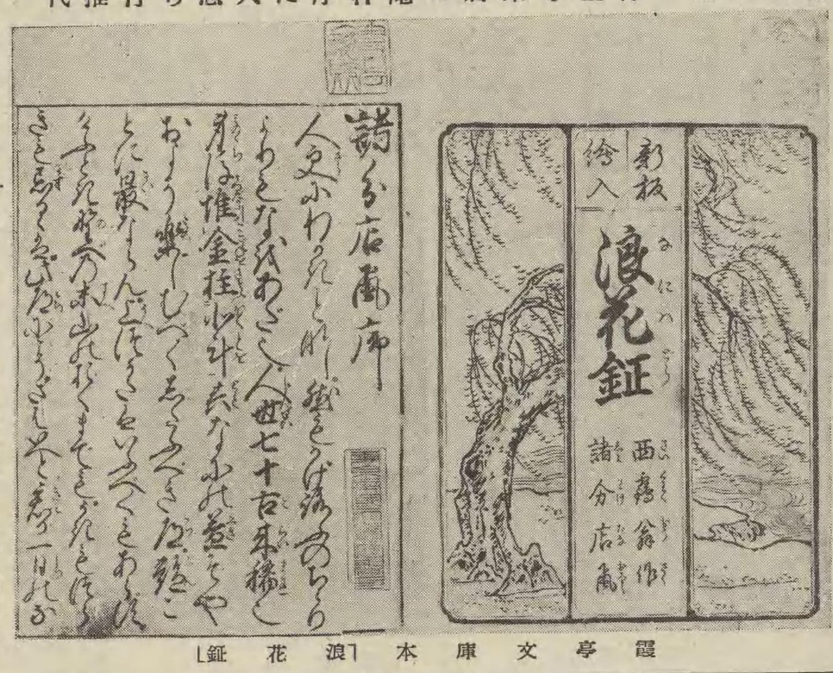
【石村】

難波鉦（なにはどら）　假名草子　六册【作者】酉水庵無底居士（傳未詳）。【名稱】詳しくは、「諸分難波鉦」、後、改題して「好色醫粟鹿子」、また「諸分店蔥」とも云ふ。【成立・刊行】本書初刊本には、初頭に「徒然草」の口調をまねた假名の序があり、終りに「延寶八申三月日水月庵迷色居士」と記し、次に漢文の後序がある。その要點を抄譯すると、傾城買は老若を問はず何人もするが、客の心得卽ち諸分座配の情意に通じたものは誠に鮮い。近頃これに關する書が類りに出るが、皆邪道に墮し、兎角穴さがしに終り、益するところ少きを慨し、酉水庵無底居士一書を撰し、その妙諦を示す。分ちて六卷となし、諸分難波鉦と名く云々、延寶八年春日、一生軒不埒とある。又六卷の終りには、漢文の跋があり、洛下南華軒と記してある。故に成立刊行は、延寶八年春とみて大過なからう。また酉水庵無底居士・水月庵迷色居士・一生軒不埒・南華軒等、何れも皆一時の假名であらう。【諸本】流布本にはまだ刊記のあるものを見ぬ。元祿七年に、「醫粟鹿子」と改題、更に後「諸分店蔥」と改めて刊行したが、この

霞亭文庫

律に判斷することは出來ないが、併し元來が女郎は職業であるから、賢愚・粹不粹の差別はあるにしても、其處には又一定の法則がなくてはならぬ。この法則は姉女郎から妹女郎、それからそれへと傳へられて、口傳もの卽ち遊女の六韜三略になつてゐる。その韜略の奧意味であり、又二卷「空蟬……妻崎」とあるのは、空蟬は既に女郎が客を有してゐる時、偶々馴染客が來て會はねばならぬといふ場合に、竊かに座敷を拔け出す手段をいひ、その解答を妻崎がしたことになつてゐる。かやうに百種の質問が發せられたに對し、新町現在の太夫二十六人・天神七十四人・都合百人の女郎が、皆それ〴〵客の質問に應じて、解答したやうに見せたものので、これに由つて色里の仕掛が悉皆判るといふ仕組である。この構想は、萬治三年刊「吉原鏡」に、既にその一端が現はれてゐる。例せば或る人が水月不粹とのけぢめを問ひ、高雄がこれに答へ、又伽羅卷金の無心に對し、金太夫が解答を與へてゐる。この先例に倣つたのであるが、「吉原鏡」は僅かに二十四問であるに對し、「難波鉦」は實に百問の多きに達し、而も內容が充實し、難問答の解決が頗る多い。遊客手

雲行和尙の機智で助かる話。（三）儉約著財の雜話。【卷之二】（一）一つの連續した物語で、金澤屋左五衞門の軒に彳んだ法師が、十文字屋九一といつた昔の色懺悔をする。【卷之三】（一）澤屋宗軒といふ老人、子供のためを思つて死後に小判形の眞鑄の作り物を殘した話。（二）九文字屋仁助方の振舞に、宿老が鯉を攫まうとして傷ついた話。（三）撞木町の火事に傾城の逃げる話。【卷之四】（一）利右衞門といふ男、朝起して往來の落し物を拾つて生計を立てる話。（二）四條の芝居見物中の十二屋の新太の妻が、新太と妾の間の子供をあやすうち、子供が楊枝で咽を突いて傷くので、妻妾の間に爭が起るが、太夫元のとりなしで和解する話。（三）松ケ根屋福右衞門、一度沒落したが、黑大豆を少しづつ貰つて歩いたり、釣錢を誤魔化したりなどして、人並に生活した話。【卷



に通じたものは誠に鮮い。近頃これに關する書が頻りに出るが、皆邪道に墮し、兎角穴さがしに終り、益するところ少きを慨し、酉水庵無底居士一書を撰し、その妙諦を示す。分ちて六巻となし、諸分難波鉦と名く云々、延寶八年春日、一生軒不埒とある。又六巻の終りには、漢文の跋があり、洛下南華軒と記してある。故に成立刊行は、延寶八年春とみて大過なからう。また酉水庵無底居士・水月庵迷色居士・一生軒不埒・南華軒等、何れも皆一時の假名であらう。【諸本】流布本にはまだ刊記のあるものを見ぬ。元祿七年に、「醜菜鹿子」と改題、更に後「諸分店蔵」と改めて刊行したが、この二本には假名序にある水月庵迷色居士の名と、跋の南華軒との名が削られ、漢文の後序が全文削除されてをり、更に「店蔵」には、六巻の挿繪狀入の圖一面が省かれてゐる。思ふに、風紀問題のためであらう。この點から「店蔵」の版行は、正德・享保の改革當時と推定される。「店蔵」は江戸時代文藝資料第四に收めてある。

【解説】大阪新町の遊女の名寄であり、又かねて諸分の書でもある。諸分といふ事は、取捌きの意味で、女郎の對客關係を云ふ。例へば客をはめるには如何。又これを振るにはどうと所謂手管とか魂膽とかの仕方で、素より生きた人間相手の事であるから、定木を以て一律に判斷することは出來ないが、併し元來が女郎は職業であるから、賢愚・粹不粹の差別はあるにしても、其處には又一定の法則がなくてはならぬ。この法則は姉女郎から妹女郎、それからそれへと傳へられて、口傳もの即ち遊女の六韜三略になつてをる。その韜略の奥義を披瀝したものが諸分書で、「難波鉦」は、その諸分書中の尤なるものである。その趣向は、大盡が問題を課して、女郎からいろ〳〵口傳を探り出すといふ仕組で、例せば一巻松の部で「初冠……井筒」とあるは、初冠即ち初會の客に對する女郎の心持を井筒から聞いた意味であり、又二巻「空蟬……妻崎」とあるのは、空蟬は既に女郎が客を有してゐる時、偶々馴染客が來て會はねばならぬといふ場合に、竊かに座敷を拔け出す手段をいひ、その解答を妻崎がしたことになつてをる。かやうに百種の質問が發せられたに對し、新町現在の太夫二十天神七十四人都合百人の女郎が、皆それ〳〵六人客の質問に應じて、解答したやうに見せたもので、これに由つて色里の仕掛が悉皆判るといふ仕組である。この構想は、萬治三年刊「吉原鏡」に、既にその一端が現はれてをる。例せば或る人が水月不粹とのけぢめを問ひ、高雄がこれに答へ、又伽羅巻金の無心に對し、金太夫が解答を與へてゐる。この先例に做つたのであるが、「吉原鏡」は僅かに二十四問であるに對し、「難波鉦」は實に百問の多きに達し、而も内容が充實し、難問答の解決が頗る多い。遊客手引草として、最も優れた作の一である。なほ初めに開口の一文があつて、大盡が遊里に出掛ける際、丁稚の彌之介を呼び出し、又乳母を呼んで、いろ〳〵仕度を命ずる所は、狂言の大名と太郎冠者の口吻を學んだもので、以下すべて口語體の一問一答に、話を進める例は、後、其磧などが評判記の開口に學んだ所で、一の新例と言つてよい。【水谷】

【參考】吉原書籍目錄（柳亭種彦）（新群書類從第七）

浪花の田鶴　なにはのたづ　浮世草子　五巻

【作者】序に「そこの國そのこと何氏のそれがし」とあるが未詳。【刊行】元祿八年【諸本】浮世草紙（同刊行會刊）第二巻所收。

【梗概】〔巻之一〕（一）明石屋の與三といふ男、夜遊びの歸りに女の振袖を誤つて着て戻り親仁に抱き付かれた話。（二）尾花木工太夫なる男、死んだ馴染の女郎の幽靈に惱まされたが、雲行和尚の機智で助かる話。（三）儉約著財の雜話。〔巻之二〕一つの連續した物語で、金澤屋左五衞門の軒に彳んだ法師が、十文字屋九一といつた昔の色懺悔をする。〔巻之三〕（一）滿屋宗軒といふ老人、子供のためを思つて死後に小判形の眞鑄の作り物を殘した話。（二）九文字屋仁助方の振舞に、宿老が鯉を摑まうとして傷ついた話。（三）撞木町の火事に傾城の逃げる話。〔巻之四〕（一）利右衞門といふ男、朝起して往來の落し物を拾つて生計を立てる話。（二）四條の芝居見物中の十二屋の新太の妻が、新太と妾の間の子供をあやすうち、子供が楊枝で咽を突いて傷くので、妻妾の間に爭が起るが、太夫元のとりなしで和解する話。（三）松ケ根屋福右衞門、一度沒落したが、黒大豆を少しづつ賣つて歩いたり、釣錢を誤魔化したりなどして、人並に生活した話。〔巻之五〕（一）藤岡屋金左衞門の禍福七轉八起の話。（二）佐久間屋半久、古稀に達して遊興を止めたが、五十匁の前銀を失つて騒ぐ夫婦に一歩一摑みを取らせ、「此一つの物こそ大事の上の調法」と悟る話。

【解説】各種雜多の世上の物語を集めたもので、特に中心思想といふやうなものは汲み取り難い。併し詞章も拙劣ではなく、かなりの健筆と思はれ、物語の内容は、さして面白いものはないが、この頃のものとしてさう劣つた作品ではあるまい。【增田】

難波みやげ　なにはみやげ　浮世草子　五巻

【作者】未詳。類原退藏氏は俳諧師の手すさびであらうと言つてゐる。【刊行】傾城寶永七年【諸本】近世文藝叢書第五巻所收。

【梗概】〔巻之一〕（一）淀の下り舟を王城の福の神の使が呼び止める。その教に從ひ、舟に

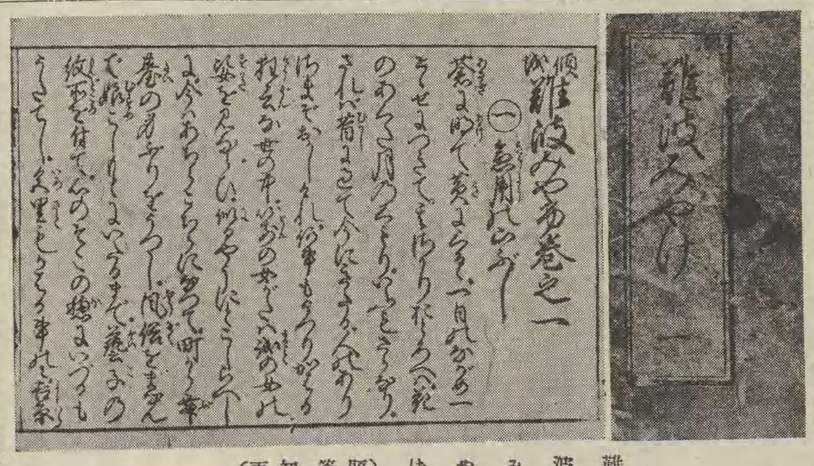
儒門（市川海老藏）が、淺黄頭巾の上に懸烏帽子・素袍の下のみを附け、左手で櫻の枝を肩に擔ぎ、右手に扇を持つて出る。舞臺の東方に面箱が五つ並べてある。吉田少將惟貞（八代市村宇左衞門）の所作があつて、野上の班女（玉澤才次郎）に面を見せんと、初めの箱を開くと笑尉の面が出る。次に吉田少將御臺櫻姫（龕中歎川）に面を見せようと蓋をとると、鹽吹の面が出る。その次に班女と櫻姫とが互に少將をい

難波　なにはえ　「神事物の諧曲」を見よ。

難波江　なにはえ　隨筆　七巻十四册　【著者】岡本保孝【諸本】百家說林續編所收。【解說】巻一に於烏の假字以下四十條、巻二に復古學之譜以下四十條、巻三に國號以下四十條、巻四に北條氏略譜以下四十條、巻五に源氏物語新釋以下四十條、巻六に權柄宜レ在二皇統一といふ事以下四十條、巻七に日吉山王以下四十條を收め、每巻を上下二册に分つてある。國家・醫家・和歌・天學家・易學家・書家・畫家・篆刻家・文雅の九門に分け、約四百名を收載してゐる。本書は同編者に依る「浪花郷友錄」二册（安永四年刊、寛政二年刊）「續浪花郷友錄」一册（文政六年刊）の續編と見るべきものである。各編を通じてほぼ同數の人名を、同樣な部門に分類してゐる。記すところは何れも簡易であつて、人名辭書としてよりは、寧ろ或る手がかりを供するものであらう。【土井】

難波鉦　なにはどら　假名草子　六册　【作者】酉水庵無底居士（傳未詳）。【名稱】詳しくは、「諸分難波鉦」、後、改題して「好色醜菜鹿子」、また「諸分店蔵」とも云ふ。【成立・刊行】本書初刊本には、初頭に「徒然草」の口調をまねた假名の序があり、終りに「延寶八申三月日水月庵迷色居士」と記し、次に漢文の後序がある。その要點を抄譯すると、傾城買は老若を問はず何人もするが、客の心得即ち諸分座配の情意

おし乘つた三人の山伏に咒文を示すと、三人とも河中に落ち込んだ。三人は貧乏神の末社連で、舟に殘した笈の中には、「賣家」と書いた札を三千枚づつ持つてゐた。舟中の比丘尼の提案で、乘合の者が種々の諸國咄を試みる。(二)四つ橋の商家の六十一になる隱居、「打老兒丸」を服して、精力絶倫となつた話。(三)越後町の太夫、いやな男に身請けされ、戀しい男にあひたさに狐憑の眞似をしたがくすべ殺され、幽靈となつて戀人に文を渡す話。(四)堺の三得といふ大盡、敵娼きり山の身請に世評を憚つて苦心した話。〔卷之二〕(一)「わるくちをかきしあを表紙」の中の遊里・劇場等の雜話。(二)江戸のばゝそだちの大盡と巴屋の勝山が馴れ染めの話。(三)京のげんぶく大盡の遊興の話。(四)江戸の醫者の倅、遊興して勘當されたが「朝起丸」を賣りひろめて許され、二代の法橋となり、種々の病人に接して江戸の廣さを痛感する話。〔卷之三〕(一)茨木屋幸齋方で、座敷普請の事から二人の大盡及びその敵娼間に面倒が起りかけたが「粋」な心からめでたく納まつた話。(二)大盡の諸相、揚屋の主が女郎の受けた大盃を助けるのを怒る大盡など。(三)伊丹の男、扇屋の太夫を請出す前に、太夫の以前からの客全部に暇乞の文を書かせた話、外、諸客の諸相。(四)大阪屋の太夫に通ふ南清・東又といふ二人の大盡があつた。東又の末社かん八が、太夫の前で、「清大盡の羽織は短かすぎる」と言つたのを、東又は怒つて出入を止める。かん八はわざと南清の末社となつて種々の奸策を用ひ、太夫と南清の手を切らせて東又の手に入れたが、東又はなほも勘當を許さなかつたといふ「粹大盡」の話。〔卷之四〕(一)大阪の大盡が江戸に下るに際して末社連を太夫の横目役に殘したが、太夫の無分別から一騒ぎの起る話。(二)大盡の本妻の召使おさん、大盡の妾宅通ひを止めんと苦心し、若衆仕立で妾宅に乘り込む話。(三)十九といふ大盡が遊興に耽けるので、妻の親が千兩調へて商賣に轉向させようと計るが無效。(四)傾城が客から金をねだる方法など。〔卷之五〕(一)遊興を止め若法體をして商賣に成功した男と、おろかな大盡に賴みかの三得といふ大盡、敵娼きり山の身請に世評を憚つて苦心した話。〔卷之二〕(一)「わるくちをかきしあを表紙」の中の遊里・劇場等の雜話。(二)江戸のばゝそだちの大盡と巴屋の勝山が馴れ染めの話。(三)京のげんぶく大盡の遊興の話。(四)江戸の醫者の倅、遊興して勘當されたが「朝起丸」を賣りひろめて許され、二代の法橋となり、種々の病人に接して江戸の廣さを痛感する話。〔卷之二〕(一)茨木屋幸齋方で、座敷普請の事から二人の大盡及びその敵娼間に面倒が起りかけたが「粹」な心からめでたく納まつた話。(二)大盡の諸相、揚屋の主が女郎の受けた大盃を助けるのを怒る大盡など。(三)伊丹の男、扇屋の太夫を請出す前に、太夫の以前からの客全部に暇乞の文を書かせた話、外、諸客の諸相。(四)大阪屋の太夫に通ふ南清・東又といふ二人の大盡があつた。東又の末社かん八が、太夫の前で、「清大盡の羽織は短かすぎる」と言つたのを、東又は怒つて出入を止める。かん八はわざと南清の末社となつて種々の奸策を用ひ、太夫と南清の手を切らせて東又の手に入れたが、東又はなほも勘當を許さなかつたといふ「粹大盡」の話。〔卷之四〕(一)大阪の大盡が江戸に下る



雜波みやげ　(題簽・初頁)

盡」の讃辭を列ねる。

【解說】言ふ迄もなく色里物で、大盡・幇城が中心をなしてゐる。各々說話として特に面白いものもなく、卷之三の第一章及び第四章など多少筋があるといへるが、同じく第五章の伊丹の男を「上々吉の粹男」と褒めた作者の意圖は、この兩章を「粹大盡」の典型として描いたに違ひなく、この心持は跋文にも見られるやうに、實に全作と通じてのものであらう。個々の說話中から、形式的な文化史・風俗史方面の資料も拾ひ出せるであらうが、文藝作品として價値の低いに拘らず、この「粹の讃美」が主潮となつてゐる所、この作品の最も重要な方面と認めたい。勿論この作品が他に比し特殊の地位にあるとはいへまいが、通と粹との時代相を知る好資料であらう。〔增田〕

難波土産（なにはみやげ）　雜俳集　一册　【刊行】元祿五年　【諸本】德川文藝類聚雜俳第十一所收。【解說】西鶴・豐流・遠舟より京都の常牧・和及、及び江戸の不角・調和等の高點句を集錄した珍書。〔西原〕

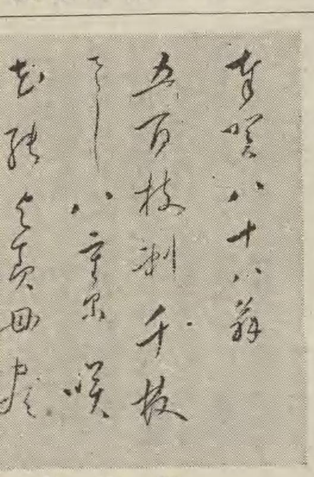
難波土産（なにはみやげ）　演劇書　五卷　【著者】穗積以貫　【名稱】淨瑠璃芝居の根據地たる難波の土産といふ義か。角書に、「淨瑠璃文句評註」とある。內題は「淨瑠璃評註」。【刊行】元文三年春　【諸本】新群書類從第六・近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）所收。外に單行本（上田萬年校）もある。【內容】著者は當代の儒者であつたが、淨瑠璃芝居等を好むまゝに、年來院本數種を讀む中、要所の辭句等を摘出して、自ら註を加へ、博識にも尋ねてゐたが、書肆の乞ふに委せてこれを刊行したものであると序に記してある。收められた作品は、「御所櫻堀川夜討」「お初天神記」（卷一）、「安倍宗任松浦卷」「北條時賴記」（卷二）、「大內裏大友眞鳥」（卷三）、「國姓爺合戰」「苅萱桑門筑紫轢」（卷四）、「蘆屋道滿大內鑑」「大塔宮曦鎧」（卷五）であつて、卷一には初めに發端を添へてゐる。各段はまづ名題の解說から、本文中の辭句に對する說明と、時に評を添へ、最後に總評とも見るべきものを置き、整然たる形式が見られる。近松作の道行文に對しては比較的詳細な註と評を加へてゐるが、他の作品の道行の場合には註を省いてゐる。これに就いて彼は、近松の道行の氣高さを失つた他の作者の場合に註を加へる如きは潔しとせぬと論じてゐる等、氣概の見るべきものがある。「苅萱桑門紫筑轢」の場合をとつて、名題文字を評し、奇數たらしむべき態度は認めるにせよ、徒らに造字の弊に陷る事は考ふべきであると說く等も注目すべきである。又淨瑠璃のそら事も、眼前の事實は十分調査の上にてあるべしと述べ、近來の作者の不吟味を痛擊する所がある。「國姓爺」などは完全といふべきも、「樓門」の場で錦祥女に讓鏡を遣はす條は、甚だ審しと指摘した。語句の解を主としてゐるが、その基調に人形の働きを認めてゐる態度が、興味ある註書たらしめた。發端の條は淨瑠璃の由來と近松との問答によつて成立してゐるが、そこに近松は淨瑠璃の文章が、人間ならぬ人形を働かすものたる立場から、十分考究さるべきことを述べ、且つそのための作文の態度としては、虛と實との間を捉ふべきことを論じてゐる。近松の藝術觀を知るための資料としては、この部分は數行の文字にすぎぬが、甚だ貴重な文獻となつてゐる。（近松門左衞門參照）〔守隨〕

莫告藻（なのりそ）　隨筆　七卷（現存三卷一册）　【著者】本多忠憲　【解說】卷一に有職故實

その他種々事物の稱謂等に係る雜考を收め、卷二に知名の人々の作文・作歌等を抄寫し、卷三に再び故實、その他尙古の雜說を收めてゐる。著者の自序がある。

【著者小傳】本多忠憲。通稱は甲馬、號は華陽。伊勢國神戶藩主忠統（德齋公）の孫で、國學に通じてゐた。歿年不詳。「源氏物語不拂塵」「宇津保物語不拂塵」「塵泥」（別項）等の著述がある。〔和田〕

魚彥（なひこ）　國學者　【姓名】本姓は伊能。楫取と名乘る。通稱は茂左衞門。初名景豐、後に景良、更に魚彥。【號】青藍・茅生庵【生歿】享保八年三月二日に生れ、文明二年（一三〇）三月二十三日歿。享年六十。【法名】光雲院楫浦魚彥居士【墓所】下總國香取郡牧野村觀滿寺【家系】祖先は豐後の人尾形三郎維義、その四世の孫神兵衞大輔景能が、下總國



楫取魚彥

從ひ學ぶ者二百餘人。諸侯にして弟子の禮を執つた者もあつた。【著作】古言梯一卷（別項）（明和元年八月成、同二年刊）○萬葉集千歌二卷（安永三年成）○續冠辭考一卷（舊版賀茂眞淵全集第二所收。眞淵の冠辭考の續撰。七十四語を追加）○冠辭懸緒一卷（安永八年成、冠辭五十の解釋）○楫の嬬手四卷（別に序目錄一卷。嘉永四年刊。古語を五十音順に排列した辭典）○楫取魚彥家集（安永五・六兩年の作品）（別項）○大船楫取魚彥雜集（明

以て終始し、古語古調を自由に驅使し、同音語同一語を反覆した歌調にすぐれてゐた。その外、旋頭歌・長歌を作り、催馬樂調にも手を染めてゐる。

【參考】近世三十六家集略傳（河喜多眞彥）○楫取魚彥家集序（清水濱臣）〔西尾〕

鸚訓歌字盡（おうむうたじづくし）　黃表紙　三册　十五丁二十二圖　【作者】式亭三馬　【畫工】歌川豐廣　【名稱】「一人娘二人婿」の角書があり、外題は「小野篁歌字盡」のもぢりで、「鸚訓」は內容を暗示しながら「歌字盡」にふれる。【刊行】文化二年泉市刊。

【題材】「狂言末廣榮」（京傳作歌麿畫、天明八年刊）、「扮接銀煙管」（京傳作政演畫、天明八年刊）、「山鵲鴟蹴轉破瓜」（京傳作政美畫、寬政二年刊）等によつてゐる。

鸚訓歌

惡く、伊勢の方にある身體が苦しむ。伊勢の方では竹齋に診察させた處、一服の粉藥を日向の國へ持たせてやり、それを飮まずに口に銜へさせる。これは鐵粉であつて尻にあてた大磁石の力で、伸びた首をちぢめ、頭を伊勢へ引戻す。治郎兵衞は伊勢へ來て訴へた處、半月づつ久松と傘之介に添はせる事になる。娘は久松と駈落の支度をしてゐるうちに傘之介の番になり、遂に傘之介と出奔する。閻魔は娘を眞中から二分し、魂魄も二等分して二人

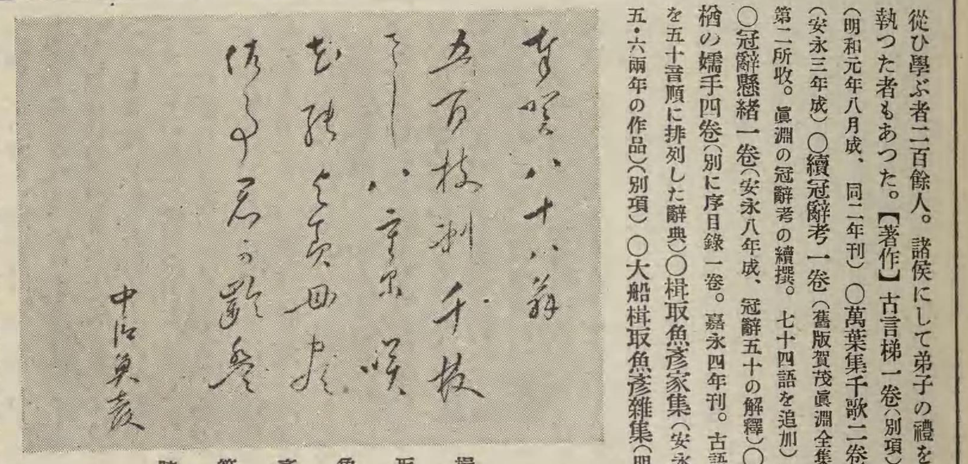
その他種々事物の稱謂等に係る雜考を收め、巻二に知名の人々の作文・作歌等を抄寫し、巻三に再び故實、その他尚古の雜說を收めてゐる。著者の自序がある。

【著者小傳】本多忠憲。通稱は甲馬、號は華陽。伊勢國神戸藩主忠統（猗蘭公）の孫で、國學に通じてゐた。歿年不詳。「源氏物語不拂塵」「宇津保物語不拂塵」「塵泥」（別項）等の著述がある。

【和田】

魚彦（なひこ）

國學者　【姓名】本姓は伊能。楫取と名乘る。通稱は茂左衞門。初名景豐、後に景良、更に魚彦。【號】青藍・茅生庵（ちぶあん）【生歿】享保八年三月二日に生れ、文明二年（一一三〇）三月二十三日歿。享年六十。【法名】光雲院楫浦魚彦居士【墓所】下總國香取郡牧野村觀滿寺【家系】祖先は豐後の人尾形三郎維義、その四世の孫神兵衞大輔景能が、下總國香取郡大須賀莊の地頭となつて伊能村に住居し、里の名を以て氏とした。景能から二十四世因幡守朝辰（薙髪して眞白（さねふ）と）は國分氏の孤子を援け、上總の正木某と戰つて死んだ。その子守胤、弓箭の道を捨てて同郡佐原に移住してから七世に至つて魚彦が生れた。父は景榮、母は土子氏。【閲歷】魚彦六歳の時父を失ひ、母に養育せられたが、幼少から讀書執筆を好んで自ら群童に異なる所があつた。明和二年家を子景序に讓り、江戸に出て濱町山伏井戸に居住し、眞淵を師とし、朝夕親炙してその歌風を承け、古學研鑽の道に入つたが、特に「萬葉集」を尊び、古語研究に力を盡した。又書を建部綾足に學んだが、法を古に求め、姿形を目前の寫生にとり、自ら一家の風を成した。就中梅と鯉魚とを得意とした。更に又俳諧連歌を好み、青藍と號した。眞淵歿して後、彼に從ひ學ぶ者二百餘人。諸侯にして弟子の禮を執つた者もあつた。【著作】古言梯一卷（明和元年八月成、同二年刊）○萬葉集千歌二卷（安永三年成）○續冠辭考一卷（舊版賀茂眞淵全集第二所收。眞淵の冠辭考の續撰。七十四語を追加）○冠辭懸緒一卷（安永八年成、冠辭五十の解釋）○楢の嬬手四卷（別に序目錄一卷。嘉永四年刊。古語を五十音順に排列した辭典）○楫取魚彦家集（安永五・六兩年の作品）（別項）○大船楫取魚彦雜集（明和七年編著。續日本歌學全書第八編所收）○ならの葉○筆のさきこと○百人一首略傳○雨夜の燈火等。



楫取魚彦筆蹟

【批評】彼の「古言梯」は、歷史的假名遣の研究であつて、方法は科學的である。彼の語學思想は、眞淵の「語意考」に觸發され、契沖の「和字正濫抄」の影響を受けたもので、後世の語學者足代弘訓・田中延香・岡本保孝等の著に基礎を與へてゐる。詠歌に於ても眞淵の上代風を以て終始し、古語古調を自由に驅使し、同音語同一語を反覆した歌調にすぐれてゐた。その外、旋頭歌・長歌を作り、催馬樂調にも手を染めてゐる。

【參考】近世三十六家集略傳河喜多眞彦○楫取魚彦家集序　清水濱臣

【西尾】

鞦訓歌字盡（なぶるもよみとうたじづくし）

黃表紙　三册　十五丁　二十二圖　【作者】式亭三馬　【畫工】歌川豐廣　【名稱】「一人娘（ひとりむすめ）二人婿（ふたりなこ）」の角書があり、外題は「小野篁歌字盡」のもぢりで、鞦訓（なぶるもよみ）は內容を暗示しながら「歌字盡」にふれる。【刊行】文化二年泉市刊。

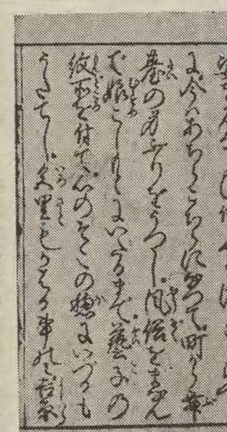
【題材】「狂言末廣榮」（京傳作歌麿畫、天明八年刊）、「扮接銀煙管」（京傳作政演畫、天明八年刊）、「山鷸鴾蹴轉破瓜」（京傳作政美畫、寬政二年刊）等によつてゐる。

【梗概】伊勢の國の油屋太郎兵衞の娘お染は、丁稚の久松と深くなり、日向國の茶屋の治郎兵衞の娘お梅は、寺小姓の粂之介を戀する。何れの親達も折を見て結婚させようと思つてゐる。流行の麻疹で、お染・お梅は死んだ。お染の死は定業であるが、お梅は閻魔の手落ちからである。なきがらは既に火葬にしたので、據なく、お染の屍にお梅の魂魄をかへす。蘇生したお染は、魂魄がお梅であるから、日向の親里を慕ふ。日向から迎へに來たが、身體はお染であるために、太郎兵衞は引渡さず、身體を引張り合つて爭つた處、首が飴のやうに伸び、治郎兵衞は首から上を連れて日向に歸る。日向の方での食ひ合せが惡く、伊勢の方にある身體が苦しむ。伊勢の方では竹齋に診察させた處、一服の粉藥を日向の國へ持たせてやり、それを飮まずに口に銜へさせる。これは鐵粉であつて尻にあてた大磁石の力で、伸びた首をちぢめ、頭を伊勢へ引戻す。治郎兵衞は伊勢へ來て訴へた處、半月づつ久松と粂之介に添はせる事になる。娘は久松と駈落の支度をしてゐるうちに粂之介の番になり、遂に粂之介と出奔する。閻魔は娘を眞中から二分し、魂魄も二等分して二人に與へ、左甚五郎と竹齋とで不足の半分を作り、お染・お梅は各々一人前の身體となり、それぞれ結婚する。

鞦訓歌字盡（帝國圖書館藏）

【解說】三馬は冒頭に、一部の大意と題してそ

前に、太夫の以前からの客全部に暇乞の文を書かせた話、外、諸客の諸相。（四）大阪屋の太夫に通ふ南淸・東又といふ二人の大盡があつた。東又の末社かん八が、太夫の前で、「淸大盡の羽織は短かすぎる」と言つたのを、東又は怒つて出入を止める。かん八はわざと南淸の末社となつて種々の奸策を用ひ、太夫と南淸の手を切らせて東又の手に入れたが、東又はなほも勘當を許さなかつたといふ「粹大盡」の話。【巻之四】（一）大阪の大盡が江戸に下るけられて、自分は酒の飮み死にをした男の話。（二）若後家の不行跡が家を亡ぼす話。（三）新町の女郎屋の物牢「寄木村屋又次郎の驕奢生活が過ぎて仕置にあふ話。（四）跋文風に、「粹大



註」とある。内題は「淨瑠璃評註」。【刊行】元文三年春　【諸本】新群書類從第六・近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）所收。外に單行本（上田萬年校）もある。【內容】著者は當代の儒者であつたが、淨瑠璃芝居等を好むまゝに、年來院本數種を讀む中、要所の辭句等を摘出して、自ら註を加へ、博識にも尋ねてゐたが、書肆の乞ふに委せてこれを刊行したものであると序に記してある。收められた作品は、「御所櫻堀川夜討」「お初天神記」（巻一）、「安倍宗任松浦簪」「北

問答によつて展開してゐる。淨瑠璃の文章が、人間ならぬ人形を働かすものたる立場から、十分考究さるべきことを述べ、且つそのための作文の態度としては、虛と實との間を捉ふべきことを論じてゐる。近松の藝術觀を知るための資料としては、この部分は數行の文字にすぎぬが、甚だ貴重な文獻となつてゐる。（近松門左衞門參照）　【守隨】

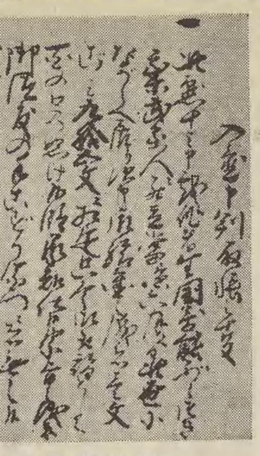
莫告藻（なのりそ）

隨筆　七巻（現存三巻一册）　【著者】本多忠憲　【解說】巻一に有職故實

の趣向の據るところを記し、明の李卓吾の「山中一夕話」、梅塢散人の「婦人やしなひ艸」「お染・久松」「お梅・粂之介」等の淨瑠璃、八文字屋本の「竹齋物語」等に據る旨を記してゐるが、それは衒學的に根據を和漢の先行作品に附會したのみであつて、實は山東京傳の「狂言末廣榮」の轆轤頸、「山鵲鷸蹴轉破瓜」の戀爭、「扮接銀煙管」の一體二人格の人物等を取合せたのみである。竹齋は「狂言末廣榮」の大坂平庵であり、お染の身體にお梅の魂魄を入れたことは、「扮接銀煙管」の娚之介、「狂言末廣榮」のお六、「山鵲鷸蹴轉破瓜」のからたけ等を結合しただけである。「山鵲鷸蹴轉破瓜」の九郎助稻荷と朝日如來のするところを、左甚五郎と竹齋とになさしめる。作の山は竹齋の療治にあるが、それは京傳の眞似で、京傳が鐵の櫛をさゝせ、鐵粉入の油を附けて髮を結はせ、それを磁石で引寄せる案じに比較すると劣つて居り、魂魄を二等分するのは「山鵲鷸蹴轉破瓜」（狩壽仁王參參照）の洒落れた趣向には及ばない。一人物を二人で爭ふ事なども、京傳の作には及ばない。本書には敵討物の流行によつて、春町・喜三二以來の黃表紙の本質が失はれた事を嘆じてゐるが、それも京傳などの作品には遙かに早く見えるところであつて、三馬によつて始めて唱道されたものではない。【備考】【狂言末廣榮】大坂平庵は頓才で難病を治療し、かさはり長者の娘お六の首が、戀人を慕つて京都までのびた治療にも成功する。【扮接銀煙管】男の方は半兵衞、女の方はお夏と名づけられた二頭一體兩性の一人物は、和蘭流の首つぎの名人の治療で、完全な二人物となり、それ〴〵戀人と結婚する。【小池】

鍋八撥　なべやつばち　能狂言　【別名】「羯鼓炮碌」【格式】本神文濟相傳の部（大藏流）。【解說】目代が出て、新市をお立てなされるがために、一の店についた者に市司を仰せ付け、又萬雜公事を御免なされるとの高札を打つ。そこへ羯鼓を商ふ者が來て、一の店を飾らうと思ふがまだ夜深いから暫く休まうと寢てしまふ。所へ、わさ鍋賣が來て側へ寢る。やがて羯鼓賣が眼を覺まし、場所爭ひの喧嘩になる。目代が騷ぎを聞きつけ仔細を尋ねると、二人共同じ事を言つて埒があかぬ。そこで何か勝負をする事になり、いろ〳〵勝負するうち、鍋賣は羯鼓賣の眞似をし、車返りをして鍋を割つてしまふ。しかし數が多くなつて目出たいことだといふ筋。古來有名な狂言で、壬生狂言などにも利用されてゐる。趣向は「牛馬」などと同樣で、市を扱つたところに當代風俗の反映が見られる。大藏流では玄惠の作と稱せられてゐる。【龜田】

酩酊氣質　なまゑひかたぎ　滑稽本　二册　【作者】無而七癖亭三馬【名稱】と角書がある。八文字屋の所謂氣質物に倣つた命名で、無くて七癖有つて四十八癖といふ俚諺に基いて、角書を附したものである。【成立・刊行】自序によれば、文化二年の三月一日に一晝夜で作つたもので、出版は文化三年の春。【諸本】三馬傑作集（帝國文庫）・式亭三馬集（近代日本文學大系）・滑稽文學全集等所收。【題材】酒に醉うた間に現はれる人の氣質、性格にはいろ〳〵ある。本編はこれをかつぎ上戶、あくたい上戶、面白くない上戶、くどい上戶、小言上戶、なき上戶、異見上戶、ねち上戶、理窟上戶、腹立上戶、騷ぎ上戶、しやべり上戶の十二の上戶に分つてゐる。【梗概】「かつぎ上戶」しといふ音が不吉であるとして、忌む男が芝新門前の新道白子屋四郎兵衞樣新春の御慶申入れやすと言つて來た手代新吉に對して、元日早々緣起惡しと管を巻き、よばよん門前のよん道よろ子屋よ郎兵衞樣よん春の御慶申入れますと言ひ直せといひ、新吉をよん吉と呼び、御新造を御よん造と、白木の三方をよん木の三方、仕方をよ方といふ。「あくたい上戶」俺は醉はないと言ひながら、對手に向つて憎まれ口を叩く。それがために口論となり、仲直りをする。「面白くない上戶」老齡の老爺が咳をしながら、ひよろつく足を踏みしめて招待された家へ來る。そして主人の煙草入を批評し、煙草を貰つて飲む。馳走になつた米の相場や酒の値段などを聞いて不愉快な感を抱かせて圖々しく坐りこむ。「くどい上戶」人間僅か五十年、樂しむ所は二十年といふ文句を幾度となく繰返して女房を困らせる。「小言上戶」蛭子講をして人を招待し、小僧や女中に盃臺の置き方、酒のつぎ方、料理の順序など、細かい點に一々小言を言ふ。「なき上戶」酒を飲むと泣きたがる老婆、昔の事までいひ出して死んだ娘の愚癡、物領の不身持、二番目の息子が養家先から離緣になつた事など、くど〳〵と取止めもなくいひ出して泣く。「異見上戶」若い者を捕へて先づ酒の講釋をする。若い者が獨身でゐては惡い、妻帶せねばならぬ。而も器量選みをしては駄目だなどと異見をする。「ねち上戶」すつかり醉ひつぶれて、誰から盃を貰つたかわからぬが、なほも對手になりて人を苦しめる。「理窟上戶」物識り顏に出たらめの講釋をする。酒は天の美祿といふが、天ではなくて天であるとか、酒好まざらんは玉の盃の底なきが如しといふ文句は、平親王淸盛入道前關白太政大臣の弟宮に、吉田の少將といふ人があり、その若君の石堂丸が、俵宗太といふ人買ひに殺されたのを悲しんで出家した吉田の兼好法師が、つれ〴〵草といふ草に書いたものだなど。「腹立上戶」酒を飲むとつまらぬことに腹を立てる。甚兵衞さんも客なら藤兵衞さんも客だらうス。ほんの事だがコレ。八右衞門さんが客ならば傳八さんも客だんべい。呼ぶからにやア客でなくつてどうするもんか。それならおれも客ぢやアねへかといふ風に。「騷ぎ上戶」醉うて無性に騷ぎたがる。俗惡な流行唄や義太夫を語つて、獨り悅に入つてゐる。「しやべり上戶」酒を飲むと噪ぎたがつて、べら〳〵と留めどもなくしやべる。歌を歌ひ、地口を連發して駄辯を弄する。【構想】凡例に「希はくば甚幸が身振にて見給へ。作意あらはれてをかしみ又讀むにまさる。彼甚幸は慈悲成門人芝西應寺町居予が幼少の頃聞及びし、一飄、白兎、三樂に等しき身振の達者、物眞似の名人也。余かれを愛する事久し。故に此書を授くといふ」とある通り、櫻川甚幸がために、彼の身振をも豫想して書いたものである。一種の自問自答體で、落語の影響がある。【史的地位】戲作者として立つた三馬には進むべき道はいくつもあつた。併し彼の成功は勿論滑稽本にあつた。寫實的に人間の性癖乃至性格を寫して滑稽を表はすにあつた。その途に進んだ第一の作としては本篇あたりが注意される。勿論深い意味の心理描寫ではないが、彼の爾後展開して行つた方針を立てた源は、こゝらに考へらるべきである。【影響】三馬が新境地を見出したものだけに、影響は彼自身の作の上に多い。直接間接に「當世七癖上戶」「雜所調膝栗毛」「浮世風呂」「浮世床」（各別項）などの上にこれを認めることができる。（滑稽本挿畫參照）【小柴】



奈蒔野馬乎人

奈蒔野馬乎人　なまけのばかひと　黃表紙・洒落本作者【本名】鈴木氏。通稱、庄之介【別號】志水燕十・し水るん十・志水裏町・淸水つばくら・志水裡町齋・子津奈蒔野馬乎人・臺閣西の隱士。【生歿】未詳【閱歷】四方赤良・朱樂菅江等の友人で、忍岡歌麿・唐來參和とは特に親交があり、幕臣であつたらしい。「江戶作者部類」は、「仙事に依つて罪を蒙り終る所を知らず」（各別項）などの上にこれを認めることができる。【小柴】

奈蒔野馬乎人　なまけのばかひと　黃表紙・洒落本作者【本名】鈴木氏。通稱、庄之介【別號】志水燕十・し水るん十・志水裏町・淸水つばくら・志水裡町齋・子津奈蒔野馬乎人・臺閣西の隱士。【生歿】未詳【閱歷】四方赤良・朱樂菅江等の友人で、忍岡歌麿・唐來參和とは特に親交があり、幕臣であつたらしい。「江戶作者部類」は、「仙事に依つて罪を蒙り終る所を知らず」（各別項）などの上にこれを認めることができる。（滑稽本挿畫參照）【小柴】

男信　なましな　語學書　三卷三册　【著者】東條義門【成立】天保六年夏。但し初稿は文化五年に成り、初めは「撥韻假字考」と題した。【刊行】天保十三年三月刊。著者の奥書は天保六年六月二十二日。雲華院大含の序は同九年夏。【內容】本書は古くムとンの區別があつた事を論究したものである。義門は（一）我が上古にもン音があり、言葉にも用ひたであらうと推定し、殊に漢字の韻で鼻にかゝるものを、「身貌大通神略緣起」の如きは、三張半に亙つて、通を內容としてゐる。洒落・地口にも遊里的色彩が濃い。黃表紙作者としての態度は「唵多羅取帳」（別項）に於て完成してゐる。通人としての冴えは勿論認められるが、丸味の籠つた作風である。「唵多羅取帳」以後の作品は未見。挿繪は多く歌麿が畫いてゐる。【小池】

【參考】江戶作者部類

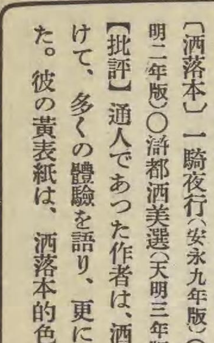
男信　なましな　語學書　三卷三册　【著者】東條義門【成立】天保六年夏。但し初稿は文化五年に成り、初めは「撥韻假字考」と題した。【刊行】天保十三年三月刊。著者の奥書は天保六年六月二十二日。雲華院大含の序は同九年夏。【內容】本書は古くムとンの區別があつた事を論究したものである。義門は（一）我が上古にもン音があり、言葉にも用ひたであらうと推定し、殊に漢字の韻で鼻にかゝるものを、對する反駁論十二條を自ら設けて、これを解決し、（五）次に韻鏡に依つてムを識別する方法を記し、更に日常使用する漢字を五十音順に揭げてンムの別を示し、悉曇に遡つてンムの別を論じ、併せて「ン」「ん」の字源を說いてゐる。なほ「男信」の題號は上野國利根郡に男信（なましな）と云ふ鄕名があつて、ンとムとの區別を示す實例として適切である爲に、これを用ひたのである。【價値・影響】ン音が上代國語に存したか否かと云ふ事は國語音韻上の重大問題である。本居宣長は、「字音假字用格」「地名字音轉用例」「漢字三音考」「呵刈葭」（各別項）等に於て、ン音はム音から轉じて後世に生じた不正の音と主張したのであつて、當時上田秋成はこれに反對したけれども、その論據薄弱であつて、宣長の說が殆ど定說として認められてゐた。然るに義門は確實な論據と周到な信存疑」一卷（寫）の著がある。この書は「男信」の稿本の時に、その說の不備誤謬を指摘したもので、義門は保孝の說に從つてゐるところ多く、男信の成立には重要な關係を有するものである。

【備考】「男信」も「傭字例」も共にンとム、即ちnとmのみについて研究したものであるが、釋行智は更に一步進んで、その名著「悉曇字記眞釋」（寫本）の中に、語尾のnについて研究してゐる。これは吾が音韻學史上特に注意すべき事柄である。【龜田】

並木　なみき　小說　【作者】鳥崎藤村　【發表】明治四十年六月、「文藝俱樂部」。【刊行】同四十一年、短篇集「藤村集」（博文館）に收む。藤村全集第五・藤村創作選集下卷（春陽堂）所收。【梗概】近頃相川の怠ることは、會社でも評判になつてゐる。彼はもはや四十に近い。彼が

床」（各別項）などの上にこれを認めることができる。（滑稽本插畫參照）　〔小柴〕

奈蒔野馬乎人（なまけのばかひと）　黄表紙・洒落本作者【本名】鈴木氏。通稱、庄之介【別號】志水燕十・し水ゑん十・志水裏町・清水つばくら・志水裡町齋・子津奈蒔野馬乎人・臺閣西の隱士。【生歿】未詳【閲歷】四方赤良・朱樂菅江等の友人で、忍岡歌麿・唐來參和とは特に親交があり、幕臣であつたらしい。「江戸作者部類」は、「仙事に依つて罪を蒙り終る所を知らず」と記してゐるが、天明三年以後の作品は見當らない。【作品】〔黄表紙〕化物二世物語（天明元年版）○身貌大通神略緣起（天明元年版、忍岡歌麿畫）○哖多雁取帳（天明三年版）（別項）。〔洒落本〕一騎夜行（安永九年版）○山下珍作（天明二年版）○滑都洒美選（天明三年版）。



奈蒔野馬乎人筆蹟（蜀山人判取帳）

【批評】通人であつた作者は、洒落本に手をつけて、多くの體驗を語り、更に黄表紙に入つた。彼の黄表紙は、洒落本的色彩を多分に持ち、「身貌大通神略緣起」の如きは、三張半に亙つて、通を内容としてゐる。洒落・地口にも遊里的色彩が濃い。黄表紙作者としての態度は「哖多雁取帳」（別項）に於て完成してゐる。通人としての冴えは勿論認められるが、丸味の籠つた作風である。「哖多雁取帳」以後の作品は未見。挿繪は多く歌麿が畫いてゐる。　〔小池〕

【參考】江戸作者部類

男信（なまなし）　語學書　三卷三册【著者】東條義門【成立】天保六年夏。但し初稿は文化五年に成り、初めは「撥韻假字考」と題した。【刊行】天保十三年三月刊。著者の奥書は天保六年六月二十二日。雲華院大含の序は同九年夏。【内容】本書は古くムとンの區別があつた事を論究したものである。義門は（一）上古にもン音があり、言葉にも用ひたであらうと推定し、殊に漢字の韻で鼻にかゝるものは一樣ではないのであるから、これを寫す際に凡てムとする事はあるまいとし、（二）我が國の古書には、ンに用ひたと思はれる字と、ムに用ひたと思はれる字とには明かに區別があり、その區別は韻鏡の法則に一致してゐる。卽ち韻鏡十六攝の中、臻及び山に攝せられる文字の韻は「古事記」「日本書紀」「萬葉集」等に於て、ナ・ニ・ヌ・ネ・ノに轉用した例多く、又ラ行音、カ行の濁音及びチ、イに轉用してゐる。而して深及び咸に攝せられる文字の韻は、マ・ミ・ム・メ・モの音及びカ行の濁音に轉用してゐる。居り、この兩種は截然と區別せられてゐる。（三）古い地名・人名等に就いて見ると、上記の區別は嚴然と存在してゐると說いて例證を擧げ、臻山所攝の字はン、深咸所攝の字はムとなると斷定した。以上でンムの研究の主要の點は終つたのであるが、（四）更にンム兩存說に對する反駁論十二條を自ら設けて、これを解決し、（五）次に韻鏡に依つてンムを識別する方法を記し、更に日常使用する漢字を五十音順に揭げてンムの別を示し、悉曇に遡つてンムの別を論じ、併せて「ン」「ん」の字源を說いてゐる。なほ「男信」の題號は上野國利根郡に男信（なまなし）と云ふ鄉名があつて、ンとムとの區別を示す實例として適切である爲に、これを用ひたのである。【價値・影響】ン音が上代國語に存したか否かと云ふ事は國語音韻上の重大問題である。本居宣長は、「字音假字用格」「地名字音轉用例」「漢字三音考」「呵刈葭」（各別項）等に於て、ン音はム音から轉じて後世に生じた不正の音と主張したのであつて、當時上田秋成はこれに反對したけれども、その論據薄弱であつて、宣長の說が殆ど定說として認められてゐた。然るに義門は確實な論據と周到な研究とに依つて、宣長の說の誤りを指摘し、ンム兩音が古代から存した事を立證したのであつて、その國語音韻研究史上の功績は忘るべからざるものである。後に出た寛蔭の「音韻假字用例」（別項）は本書に依ることが少くない。「男信」よりも少しく遲れて刊行せられた關政方の「傭字例」（關政方參照）は、「男信」ほどに詳細ではないが、同じくンム兩存說を唱へたものである。義門は自說と符合する點多く、又自分の考へ及ばなかつた點を政方が解決した點もあつたので、大に喜び、「傭字例」の批評並に「男信」を政方に贈つた。その翌年（天保十四年八月）義門歿後、政方は「奈万之那の中にいさゝか疑はしと思ふふしををろ〳〵書出て、もし上人世にいまそからば、かくぞ問はましと思ふ」まゝをしるしつけたものが、「男信質疑」一卷（寫）である。この外に岡本保孝に「男信存疑」一卷（寫）の著がある。この書は「男信」の稿本の時に、その說の不備誤謬を指摘したもので、義門は保孝の說に從つてゐるところ多く、男信の成立には重要な關係を有するものである。

【備考】「男信」も「傭字例」も共にンとム、卽ちnとmのみについて研究したものであるが、釋行智は更に一步進んで、その名著「悉曇字記眞釋」（寫本）の中に、語尾のnについて研究してゐる。これは吾が音韻學史上特に注意すべき事柄である。　〔龍田〕

並木（なみき）小說　【作者】烏崎藤村【發表】明治四十年六月、「文藝倶樂部」。【刊行】同四十一年、短篇集「藤村集」（博文館）に收む。藤村全集第五・藤村創作選集下卷（春陽堂）所收。

【梗概】近頃相川の怠ることは、會社でも評判になつてゐる。彼はもはや四十に近い。彼が仕事に倦み、前途のことを案じて、思ひ疲れてゐるところに舊友原が訪ねてきた。原は金澤の學校に勤めてゐたが、八年間の地方生活を引上げて上京して來ることになつたのである。その日相川は、勤めから歸りがけに古本屋をひやかしながら、久しく逢はない舊友たちの上を思つた。翌日は例によつて缺勤して約束通り訪ねてきた原を迎へた。二人は思ひ思ひのことを考へながら、散步をつづけて日比谷に出てみる。そこには中年者の目には異樣に映る新しい時代の風俗がある。殊に地方に暮した原にとつては、見るものが珍らしかつた。彼等は「まだ〳〵吾儕の時代だと思つてゐるうちに、何時の間にか新しい時代が來てゐる」といふ感慨を語り合ふ。友達に分れて歸りながら相川は、原などの老い込んだのを笑へない氣がしてくる。その翌日、社の歸

馬によつて始めて唱道されたものではない。

【備考】〔狂言末廣榮〕大坂平庵は頓才で難病を治療し、かさはり長者の娘お六の首が、戀人を慕つて京都までのびた治療にも成功する。〔扮接銀煙管〕男の方は半兵衞、女の方はお夏と名づけられた二頭一體兩性の一人物は、和蘭流の首つぎの名人の治療で、完全な二人物となり、それ〴〵戀人と結婚する。　〔小池〕

鍋八撥（なべやつばち）　能狂言　【別名】「鞨鼓炮」（かつこつぱう）　〔梗概〕〔かつぎ上戸〕しといふ音が不吉であ

作集（帝國文庫）・式亭三馬集（近代日本文學大系）・滑稽文學全集等所收。【題材】酒に醉うた間に現はれる人の氣質、性格にはいろ〳〵ある。本編はこれをかつぎ上戸、あくたい上戸、面白くない上戸、くどい上戸、小言上戸、なき上戸、異見上戸、ねち上戸、理窟上戸、腹立上戸、騷ぎ上戸、しやべり上戸の十二の上戸に分つてゐる。

【梗概】〔かつぎ上戸〕しといふ音が不吉であつて先づ酒の講釋をする。若い者が獨身でゐては惡い、妻帶せねばならぬ。而も器量選みをしては駄目だなどと異見をする。〔ねち上戸〕すつかり醉ひつぶれて、誰から盃を貰つたかわからぬが、なほも對手になりて人を苦しめる。〔理窟上戸〕物識り顔に出たらめの講釋をする。酒は天の美祿といふが、天ではなくて天であるとか、酒好まざらんは玉の盃の底なきが如しといふ文句は、平親王清盛入道前滑稽本にあつた。寫實的に人間の性癖乃至性格を寫して滑稽を表はすにあつた。その途に進んだ第一の作としては本篇あたりが注意される。勿論深い意味の心理描寫ではないが、彼の爾後展開して行つた方針を立てた源は、こゝらに考へらるべきである。【影響】三馬が新境地を見出したものだけに、影響は彼自身の作の上に多い。直接間接に「當世十癖上戸」「雖所謂四十八癖」などから「浮世風呂」「浮世

りがけに自分たちが腰辨街道と名づけてゐる道を通りながら、丁度この濠端に同じ高さに揃へられ、枝も葉も切り捨てられて各自の特色を延ばすことの出來ない並木の柳を見て、「あゝ、並木だ」と相川は腰辨の生涯を胸に浮べた。「もつと頭を擧げて歩け」、かう彼は口の中でいつて見て、塵埃だらけになつた人々の群を眺め入つた。

【批評】淡々と書き流したやうな描寫の中に、胸を壓するやうな一脈の憂鬱を描いてゐる。チェホフが好んで描くやうな中年者の無氣力と哀愁が滲んでゐる。この作は作者の當時の感慨をもらしたやうな作で、すべての情熱や感傷を底にひそめて、只管にあるがまゝの現實そのものを見つめようとした時代の作品を代表してゐる。

【武藤】

並木永輔（なみきえいすけ）　脚本・淨瑠璃作者

【通稱】綿屋治右衞門。別名、永助・榮助・榮輔等とも記す。【生歿】未詳　【閲歴】綿商の傍ら劇作をなしたものと見られる。並木丈輔（別項）の弟弟子として宗輔の門に出で、並木正三（別項）等の先輩である。丈輔と同樣に、操芝居にも歌舞伎芝居にも作の筆を執つたが、丈輔とは反對に、歌舞伎芝居の作者として、古く享保末より關係してゐて、操芝居の方は、寶曆四年から明和四年に至る十四五年間であつた。この間、豐竹座の退轉もあつて、豐竹座の淨瑠璃作者としては最後を勤めた一人と見られる。宗輔門下に丈輔と並び稱されたが、丈輔からは遙に後輩で、淨瑠璃の作は宗輔の死後に發表してゐる。豐竹座退轉の間、一時竹本座に聘されたが、やはり豐竹座の作者と見るべきである。

【作品・作風】〔脚本〕女夫星浮名天神（元文三年正月、角の芝居。おはつ德兵衞）○今織吉貫島（寶保元年十二月、中の芝居。木津勘助）○二橋死出渡（延享四年二月、中の芝居。高麗橋の妻敵討）○九州苅萱關（寶曆二年三月、中の芝居。苅萱道心）○文月恨切子（明和元年八月、中の芝居。若野殺し）等。以上は、書卸し後數回上演されてゐるので、皆當代の名狂言である。時代に世話に、かなり自由な筆致が窺はれる。脚色範圍の廣い點については、後輩正三以上と思はれるが、舞臺裝置の規模の大なる點で、社會的名聲は正三に越され、最後的成功を彼に奪はれるに至つたと見られる。合作者としては、並木笛風・松屋來助・松屋久右衞門・安田蛙文・中田萬助等が古く、後には並木正三・並木十輔等がゐる。淨瑠璃の方面では、「相馬太郎孝文談」（寶曆四年二月）を最初として、「星兜弓勢鑑」（明和四年正月）まで五六篇ある。その間、竹本座で「小夜中山鐘由來」（明和三年七月）を近松半二の下に綴つた外は、彼が常に立作者であつた。淺田一鳥・豐竹應律・黑藏主等が合作者である。書替物等が多く、歌舞伎脚本に比して、その價値は相當劣つて見える。作者としては歌舞伎脚本に得意であつたらうと思はれる。

【參考】並木正三一代咄（戲財錄並木五瓶）○言狂作書（西澤一鳳）○京攝戲作者考（木村默翁）○聲曲類纂（齋藤月岑）　【守隨】

並木五瓶（なみきごへい）（初代）　脚本作者

【本名】未詳　【別號】五八・吾八・五平・五兵衞・並木舍・淺草堂等。【生歿】文化五年（一四六八）二月二日歿。享年六十二　【法名】彩嶽英藥信士　【墓所】東京深川靈巖寺塔中正覺院（大阪四天王寺西門前納骨堂の傍にも墓碑あり）　【閲歷】大阪道修町の人。和泉屋と言ふ役木戸の倅で、煙草屋を營み、後、今宮で酒屋を開いた。並木正三（別項）の門であるが、辰岡萬作（別項）とも何等かの關係があつたやうである。大芝居に作者としてその名を現はしたのは、安永元年十一月大阪角芝居小川吉太郎座（日本萬歲寶積山）が最初であり（二十六歲）、立作者となつたのは、安永四年度の京早雲長太夫座（二月「けいせい鐘鳴渡」）に於てであると言はれる（伊原氏說）。爾後主として大阪角芝居に在つて、尾上菊五郎・嵐雛助・中山文七・尾上新七・澤村國太郎・中村富十郎、及び淺尾爲十郎・四代市川團藏等のために筆を執つた。寬政六年冬には江戸に下つて都座の三代澤村宗十郎に屬し、八年度よりは桐座に轉じて寬政十一年度には共に大阪中座に出勤したが、同十二年度よりは再び團藏と結んで江戸中村座に活躍、更に宗十郎の遺兒源之助を擁し、瀨川菊之丞並に五代松本幸四郎と相携へて長く市村座に籠つたが「反古籠」に所謂「近來精力薄く、加ふるに去にしより老病こもごも至つた」ためであらうか、文化四年度を以て市村座を退き、河原崎座にスケとしてその名を連ねたが、幾許もなくして歿した。江戸に於ては大門通高砂町に住して淺草堂と號した。淺草並木の雷神門に因んで、門人並木陸六を雷次、同高柳宗次を風治と名づけて藥見世を營んだ事は有名である。江戸座の俳諧を嗜み、劇書「戲財錄」（別項）の外に、「俳諧通言」（文化四年）の著がある。

【作品】五瓶の作として、その名を知り得るものは百十餘篇に達するが、主なる作品を列記する。【上方時代】天滿宮菜種御供（別項）○鍋祭貞婦競（安永六年七月角座）○日本花赤城鹽竈（安永六年十二月角座）○金門五山桐（樓門參照）○袖簿播州廻（安永八年三月角座）○女節用衣紋考見（安永九年四月角座）○南詠戀抄書（同年同月同座切狂言）○歸命曲輪敦（別項）○けいせい黃金鱗（別項）○けいせい倭莊子（天明四年正月中座）○思恭街容性（天明四年八月角座）○洛陽見物左衞門（天明四年九月角座）○義經千本櫻（書き替。天明五年十一月角座）○けいせい忍術池（天明五年十二月）○大湊戀憶當（天明六年三月大西芝居）○仇討寶永祀（天明七年七月大西芝居）○大都會見取曾我（天明七年十一月角座）○けいせい含箇條（天明八年三月角座）○娼風俗文選（寬政元年三月京龜屋座）○漢人韓文手管始（別項）○入間詞大名賢儀（寬政四年正月中座）○雨下知桔梗旗上（寬政四年四月中座）○五人切五十年廻（同上切狂言）○比翼鳥邊山（寬政四年六月京龜屋座）○平井權八吉原衢（寬政五年三月角座）○島廻戲聞書（五大力繼緘參照）。

【江戸時代】閻訥子名歌譽（寬政六年十一月都座）○江戸砂子慶曾我（五大力繼緘參照）○遊君操吉原養育（寬政七年七月都座）○源平柱礎曆（寬政七年十一月桐座）○隅田春妓者容性（別項）○靑樓詞合鏡（寬政九年正月桐座二番目）○月武藏野秋狂言（寬政九年七月桐座）○富岡戀山開（別項）○澪標浪花眺（寬政十年三月桐座）○傀儡淺妻船（寬政十一年正月大阪中座。傳奇作書附錄上卷「新大橋復讐新聞」「同歌舞妓凋色の話」參照）○幡隨長兵衞（寬政十二年正月中村座）○男哉女將門（享和元年十一月市村座）○江戸紫由緣十德（享和三年正月二番目）○略三五大切（文化三年正月市村座二番目）○河原曠京諺（同上）。

【作風・史的地位】元祿期に完成した現實主義の文藝思潮は享保期を經て上方に沈滯固定したが、これを再び整理したものが明和・安永以後寬政に至る江戸文藝の思潮であつた。本質的には全く非現實主義的であるが外形的には寫實主義的な態度が一般に要求されてゐる。

五瓶の持つ瑣末的な寫實主義的態度と、常識的な合理主義的態度とが江戸劇壇に迎へられた理由がこゝに在る。彼の狂言作者としての生涯は、「黃金鱗」や「衣紋考見」に端的に示されてゐるロマンチックな古典的傾向から「五大力」や「富岡」に現はれてゐる寫實的傾向への展開の過程を明示するものであつて、結局上方後期の文藝思潮が江戸前期の文藝思潮に推移する道程を一身に體現してをり、この點に彼の文藝史的重要性があり、上方狂言の江戸への移入者と謂はれる所以でもある。次期の南北が五瓶と江戸根生えの治助との統一であり、更に默阿彌が五瓶と南北との統一であつた點も、五瓶の寫實主義と合理主義とが示す知的傾向が、江戸劇壇に殘存してゐた固有の感覺主義・非知的傾向を克服して行つた必然の歷史的展開として始めて理解される。

明和五年江戸に生れ、文政二年（一四七九）七月七日同地に歿す。享年五十二　【墓所】深川靈巖寺中正覺院　【閲歷】本所割下水の旗本、野々山大膳の二男、放蕩の結果劇界に入り、初代並木五瓶の門弟となつて、初名篠山正三郎、後に篠田金治と改め、三代坂東彦三郎に隨身してゐたが、文化十三年中村座の顏見世に立作者に昇進、文政元年、師名を相續して間もなく歿した。【作品】不破名古屋雪掃（文化十三年十一月中村座。伊達騷動の顏見世狂言）○頃櫻曾我湊（文化十四年三月中村座。黑船忠右衞門と清水清玄）○旦首尾鳴戶白浪（文化十四年九月中村座。阿波の十郎兵衞）。　【湯淺】

並木五瓶（なみきごへい）（三代）　脚本作者

【別號】並木舍　【生歿】寬政二年江戸に生れ、安政二年（二五一五）十月十四日同地に歿す。享年六十七。【墓所】深川靈巖寺中正覺院　【閲歷】曾根崎新地に貸座敷を營んだが、後、狂言作者に轉じ、文政二年（一四一九）の頃櫻曾我湊（別項）○旦首尾鳴戶白浪（別項）○天竺德兵衞聞書往來（別項）○鍋祭貞婦競（別項）○袖簿播州廻（別項）○女節用衣紋考見（別項）○南詠戀抄書（別項）○大都會見取曾我（別項）○娼風俗文選（別項）○入間詞大名賢儀（別項）○雨下知桔梗旗上（別項）○五人切五十年廻（別項）○比翼鳥邊山（別項）○島廻戲聞書（別項）○江戸砂子慶曾我（別項）○源平柱礎曆（別項）○隅田春妓者容性（別項）○靑樓詞合鏡（別項）○月武藏野秋狂言（別項）○富岡戀山開（別項）○澪標浪花眺（別項）○傀儡淺妻船（別項）○江戸紫由緣十德（別項）○河原曠京諺（別項）○男哉女將門（別項）○幡隨長兵衞（別項）○義經千本櫻（別項）○けいせい忍術池（別項）○大湊戀憶當（別項）○仇討寶永祀（別項）○けいせい含箇條（別項）○けいせい黃金鱗（別項）○けいせい倭莊子（別項）○洛陽見物左衞門（別項）○弓勢金平孃（別項）○思恭街容性（別項）○けいせい忍術池（別項）○けいせい含箇條

五瓶の持つ瑣末的な寫實主義的態度と、常識的な合理主義的態度とが江戸劇壇に迎へられた理由がこゝに在る。彼の狂言作者としての生涯は、「黃金鱗」や「衣紋考見」に端的に示されてゐるロマンチックな古典的傾向から「五大力」や「富岡」に現はれてゐる寫實的傾向への展開の過程を明示するものであつて、結局上方後期の文藝思潮が江戸前期の文藝思潮に推移する道程を一身に體現してをり、この點に彼の文藝史的重要性があり、上方狂言の江戸への移入者と謂はれる所以でもある。次期の南北が五瓶と江戸根生えの治助との統一であり、更に默阿彌が五瓶と南北との統一であつた點も、五瓶の寫實主義と合理主義とが示す如的傾向が、江戸劇壇に殘存してゐた固有の感覺主義・非知的傾向を克服して行つた必然の歷史的展開として始めて理解される。

【參考】戲財錄（續燕石十種第一）○晴翁漫筆（浪速叢書第十二）○攝陽奇觀（同上第一以下）○傳奇作書（新群書類從第一）○京攝戲作者考（續燕石十種第一）○紙屑籠（同上第二）○反古籠（同上第一）○金曾木（日本隨筆大成第一期第三卷）○作者棚おろし（新群書類從第三）○並木五瓶の事を記す三木竹二（つきくさ）所收）○演劇通史花房義實○名人忌辰錄關根只誠○狂言作者の傳統（第六）伊原青々園（早稻田文學明治二九ノ一七）○近世日本演劇史同上○世話狂言の研究小山內薰・吉井勇・長田秀雄（古劇研究會）○歌舞伎狂言傑作集第三卷解說坪內逍遙○五瓶・南北とその時代近藤忠義（早稻田文學昭和二ノ七）○並木五瓶研究伊原青々園（新潮社版日本文學講座）

【近藤】

並木五瓶（なみきごへい）（二代）脚本作者【通稱】野々山正三郎【別號】葛葉山人【生歿】明和五年江戶に生れ、文政二年（一八二五）十月十四日同地に歿す。享年六十七。【墓所】深川靈巖寺中正覺院【閱歷】二代並木五瓶の門人で、初め篠田惣六といひ、中頃、師の舊名を襲うて篠田金治となり、天保四年十一月、三代並木五瓶となり、同時に立作者に昇進した。【著作】【脚本】四天王劇場寄初（天保四年十一月森田座。二代源氏の顏見世狂言）○當平家世盛（天保九年十一月河原崎座。清盛と熊坂）○御攝曳綱坂（天保十年十一月河原崎座。二代源氏の顏見世狂言）○勸進帳（天保十一年三月河原崎座。歌舞伎十八番）○騎銃忠臣鞍（天保十一年五月河原崎座。忠臣藏の前篇。由良之助の夢）。【草雙紙】五十三驛梅東路（嘉永元年、二世歌川豐國・歌川貞房畫。弘化四年市村座所演「尾上梅壽一代噺」を綴る）○伊呂波藏水滸傳（嘉永二年、二世歌川豐國畫。赤穗義士傳）○五十三驛錦繪双紙（嘉永六年、二世歌川國貞畫。五十三驛狂言改作）。

【渥美】

並木十輔（なみきじふすけ）脚本作者【別名】十助とも記す。【生歿】未詳【閱歷】並木正三（別項）の門下に、並木翁輔と並び稱され、京阪の歌舞伎芝居に活躍した作者である。正三に何時からついたかは明かでないが、奈河龜輔・並木五瓶（各別項）よりも先輩ではあるまいか。寶曆年中より天明年代に至るまで、一方の立作者として名作を發表してゐる。【作品】「けいせい嶋玉川」（明和四年正月、中の芝居）（別項）や「けいせい咬噛吧戀文」（明和七年二月、中の芝居。大內騷動）等は傑作の部に屬する。正三の「天竺德兵衞聞書往來」（別項）や龜輔の「殿下茶屋聚」（別項）等には、彼もその一部に執筆してゐる。

【守隨】

【參考】言狂作書西澤一鳳○脚色餘錄同上

並木丈輔（なみきぢやうすけ）淨瑠璃・脚本作者【別名】丈助とも記し、豐丈助ともいふ。本名未詳。【生歿】未詳【閱歷】曾根崎新地に貸席を業としてゐたと傳へられる。享保年中の末頃から寬延年代にかけて、豐竹座の淨瑠璃作者として活躍した傍、大阪の歌舞伎芝居の立作者に昇進、文政元年、師名を相續して間もなく歿した。【作品】不破名古屋雪掉（文化十三年十一月中村座。伊達騷動の顏見世狂言）○頃櫻曾我湊（文化十四年三月中村座。黑船忠右衞門と清水清玄）○旨首尾鳴戶白浪（文化十四年九月中村座。阿波の十郎兵衞）。

【渥美】

並木五瓶（なみきごへい）（三代）脚本作者【別號】並木舍【生歿】寬政二年江戶に生れ、安政二年（一八五五）十月十四日同地に歿す。享年六十七。【墓所】深川靈巖寺中正覺院【閱歷】二代並木五瓶の門人で、初め篠田金治といひ、中頃、師の舊名を襲うて篠田金治となり、天保四年十一月、三代並木五瓶となり、同時に立作者に昇進した。【著作】【脚本】四天王劇場寄初（天保四年十一月森田座。二代源氏の顏見世狂言）○當平家世盛（天保九年十一月河原崎座。清盛と熊坂）○御攝曳綱坂（天保十年十一月河原崎座。二代源氏の顏見世狂言）○勸進帳（天保十一年三月河原崎座。歌舞伎十八番）○騎銃忠臣鞍（天保十一年五月河原崎座。忠臣藏の前篇。由良之助の夢）。【草雙紙】五十三驛梅東路（嘉永元年、二世歌川豐國・歌川貞房畫。弘化四年市村座所演「尾上梅壽一代噺」を綴る）○伊呂波藏水滸傳（嘉永二年、二世歌川豐國畫。赤穗義士傳）○五十三驛錦繪双紙（嘉永六年、二世歌川國貞畫。五十三驛狂言改作）。

【渥美】

並木十輔（なみきじふすけ）脚本作者【別名】十助とも記す。【生歿】未詳【閱歷】並木正三（別項）の門下に、並木翁輔と並び稱され、京阪の歌舞伎芝居に活躍した作者である。正三に何時からついたかは明かでないが、奈河龜輔・並木五瓶（各別項）よりも先輩ではあるまいか。寶曆年中より天明年代に至るまで、一方の立作者として名作を發表してゐる。【作品】「けいせい嶋玉川」（明和四年正月、中の芝居）（別項）や「けいせい咬噛吧戀文」（明和七年二月、中の芝居。大內騷動）等は傑作の部に屬する。正三の「天竺德兵衞聞書往來」（別項）や龜輔の「殿下茶屋聚」（別項）等には、彼もその一部に執筆してゐる。

【守隨】

【參考】言狂作書西澤一鳳○脚色餘錄同上

並木丈輔（なみきぢやうすけ）淨瑠璃・脚本作者【別名】丈助とも記し、豐丈助ともいふ。本名未詳。【生歿】未詳【閱歷】曾根崎新地に貸席を業としてゐたと傳へられる。享保年中の末頃から寬延年代にかけて、豐竹座の淨瑠璃作者として活躍した傍、大阪の歌舞伎芝居の立作者に昇進、文政元年、師名を相續して間もなく歿した。【作品】不破名古屋雪掉（文化十三年十一月中村座。伊達騷動の顏見世狂言）○頃櫻曾我湊（文化十四年三月中村座。黑船忠右衞門と清水清玄）○旨首尾鳴戶白浪（文化十四年九月中村座。阿波の十郎兵衞）。

【渥美】

並木五瓶（なみきごへい）（三代）脚本作者【別號】並木舍【生歿】寬政二年江戶に生れ、安政二年（一八五五）十月十四日同地に歿す。享年六十七。【墓所】深川靈巖寺中正覺院【閱歷】本所割下水の旗本、野々山大膳の二男、放蕩の結果劇界に入り、初代並木五瓶の門弟となつて、初名篠山正三郎、後に篠田金治と改め、三代坂東彦三郎に隨身してゐたが、文化十三年中村座の顏見世に立作者に昇進、文政元年、師名を相續して間もなく歿した。【作品】不破名古屋雪掉（文化十三年十一月中村座。伊達騷動の顏見世狂言）○頃櫻曾我湊（文化十四年三月中村座。黑船忠右衞門と清水清玄）○旨首尾鳴戶白浪（文化十四年九月中村座。阿波の十郎兵衞）。

【渥美】

並木五瓶（なみきごへい）（初代）脚本作者【本名】未詳【別號】五八・吾八・五平・五兵衞・並木舍・淺草堂等。【生歿】文化五年（一八〇八）二月二日歿。享年六十二【法名】彩嶽英藥信士【墓所】東京深川靈巖寺塔中正覺院（大阪四天王寺西門前納骨堂の傍にも墓碑あり）【閱歷】大阪道修町の人。和泉屋と言ふ役木戶の伜で、煙草屋を營み、後、今宮で酒屋を開いた。並木正三

曲類纂齋藤月岑

【守隨】

諧を嗜み、劇書「戲財錄」（別項）の外に、「俳諧通言」（文化四年）の著がある。

【作品】五瓶の作として、その名を知り得るものは百十餘篇に達するが、主なる作品を列記する。【上方時代】天滿宮菜種御供（別項）○鍋祭貞婦競（安永六年七月角座）○日本花赤城鹽竈（安永六年十二月角座）○金門五山桐（樓門參照）○女節用衣紋考袖簿播州廻（安永八年三月角座）○女節用衣紋抄書（同年同月同月市村座）○江戶紫由緣十德（享和三年正月二番目）○略三五大切（文化三年正月市村座二番目）○河原曠京談（同上）。

【作風・史的地位】元祿期に完成した現實主義の文藝思潮は享保期を經て上方に沈滯固定したが、これを再び整理したものが明和・安永以後寬政に至る江戶文藝の思潮であつた。本質的には全く非現實主義的であるが外形的には寫實主義的な態度が一般に要求されてゐる。

【作品・作風】淨瑠璃は十篇ほど殘へられるが、享保年度の分は、宗輔を立作者とした合作である。「萬屋助六二代稱」（享保二十年五月）や「苅萱桑門筑紫鰹」（別項）等は有名である。彼が立作者となつてからのものでは、「容競出入湊」（寬延元年正月、黑舟）、「八重霞浪花濱荻」（同二年三月、かしくと南部屋敷の心中と神崎渡場の喧嘩）、「十帖物ぐさ太郎」（同二年十一月、千利休）等は名篇といふべきで、歌舞伎にも屢々上演された。「八重霞」は事件より十日以內で書卸し上演したので大評判をあげた。「出入湊」も非常な當り作であるが、これは既に歌舞伎でも評判を擧げたものである。彼が立作者時代の合作者としては、安田蛙文・淺田一鳥等がゐる。脚本では「形見噂浮名奧島」（寬保三年五月、中の芝居）や「東會我富士見鄕」（延享元年十一月、大西芝居）等も知られた作であるが、最も名作と思はれるものは、「黑船一世一代男」（寬保三年正月、大阪中の芝居）である。馬子頭の庄兵衞が、衆道の儀で根津四郎右衞門と達引があつた事實を脚色したので、四郎右衞門の註文もあつたと傳へ、姉川新四郎の案も加はつたらしく、稀に見る當り狂言であつた。前述の如く淨瑠璃に書き替へられて好評を得たのも當然と思はれる。脚本の方面での合作者には、澤村文治・松屋來助等がゐる。かくて彼の作風は淨瑠璃と脚本とを問はず、時代より世話に得意であつたやうである。爾後、世話物が從來の切狂言式の簡單な構想に止まらず、規模を大に、複雜なる構想を持つに至つたので、それ等の傾向を示した丈輔等の功績は十分認められねばならぬ。並木正三もその出發當時は、丈輔等に注目したところ、尠からぬものがあつたと思ふ。

【參考】戯財錄並木五瓶○諸事聞書往來○南水漫遊松歌國○言狂作書西澤一鳳○京攝戯作者考不村默翁○整曲類纂齋藤月岑○淨瑠璃大系圖竹本長門太夫

並木正三（なみきしやうざう）

【守隨】脚本作者【本名】幼名は久太郎。通稱高砂屋平左衞門【別號】當正軒。作者名として初め泉屋正三を名乘り、後、大西庄(正)三ともいつた。【生歿】安永二年(一七三三)二月十七日歿。享年四十四。【法名】當譽正三居士【閲歷】正三の父は、初め雲州侯に仕へてゐたが、辭して大阪に到り、堀江に住んで植物から油を搾る法を研究してこれを業としてゐたといふ。奴正兵衞と呼ばれて人にも知られ、道頓堀扇子屋に遊ぶ頃、その娘との仲に久太郎を儲けたが、後、故ありてその妹と芝居茶屋泉屋に入聟となつたので、久太郎は泉屋で育てられた。かくして幼時は歌舞伎芝居や操芝居に出入して、この社會で成長した。延享元年、父正兵衞が出羽芝居に關係した時、少年の彼は、手づま機巧の水船仕掛を工夫して人目を驚かしたといふ。處女作は寛延元年八月十一日初日、大西芝居の「鍛冶屋娘手追噂」である。この時は泉屋正三と名乘つた。寛延三年、並木宗輔(別項)に入門して並木と改め、一時豐竹座に抱へられたが、院本作者としてよりも、歌舞伎脚本作者として奮闘し、以來、主として大阪の三座に働いた。早くは、坂東豐三郎・三桝大五郎等のために、後には中村歌右衞門のために多くの作を書いた。家業として菓子屋を營み、高砂屋と稱し、宗右衞門町に長く住んで町年寄をも勤めてゐた。孝心あつく、二階に座敷を造り井戸を構へて老父を慰めたといふ。寶曆十年の頃は吉左衞門町に住んだ。安永元年秋から胸を病んだが、臥床する程でもなく年を越し、翌年春、「日本第一和布苅神事」を書いたのを最後とする。上演は歿後一月過ぎであつた。子は淺尾正三と名乘つた。寛政中、中の芝居前の茶屋の主人が二代目正三を繼いだが、一篇の自作もないと傳へる。但し古狂言に對する物知りのため重寶がられて、俗に正三隱居といはれたといふ。十三回忌には主な門弟によつて追善本讀會が催された。正三は宗輔に就いて作劇法を學んだが、歌舞伎作者として終始したので、正三を以て歌舞伎作者の並木系の祖とする。爾來並木系は、主として上方に於ける作者界の一大勢力を成した。並木翁輔・同十輔(別項)・同利助・奈河龜輔(別項)・並木五瓶(別項)等は門弟中、名の聞こえたものである。

【著作】歌舞伎脚本を主として、他に淨瑠璃數種がある。〔脚本〕現在までに名題の知れた作は百種以上に上るが、この中には書替等も少くない。世話物が三十餘種、他は時代物に屬する。名作と思はれるもののみを揭げる。(一、時代物)大和國井手下紐(寛延二年十二月大西芝居。織田騒動に唐金茂右衞門)○幼稚子敵討(寶曆三年)(別項)○けいせい天羽衣(同年十二月)(別項)○敵討一休噺(寶曆四年九月中の芝居。上杉騒動)○道中千貫樋(同年十二月)(別項)○天竺德兵衞聞書往來(同七年正月)(別項)○三十石艤始(同八年十二月)(別項)○霧太郎天狗酒醼(同十一年正月)(別項)○竹箆太郎怪談記(同十二年七月角の芝居。竹箆太郎傳說)○惟喬親王魔術冠(明和三年三月中の芝居。惟喬惟仁御位爭)○けいせい桃山錦(明和五年二月早雲座。豐臣軍記)○東山殿女狩(明和七年二月角の芝居。足利將軍)○桑名屋德藏入船物語(明和七年十二月)(別項)○三千世界商往來(安永元年正月)(別項)○近江源氏艤講釋(同年三月同座。近江源氏)○日本第一和布苅神事(安永二年三月、中の芝居)。(二、世話物)戀淵岨絞染(寛延元年十二月角の芝居。かしく)○高臺橋岐烏(寶曆三年閏二月角の芝居。雷電の喧嘩)○四橋出入の勝閧(明和元年六月布袋屋座。古手屋八郎兵衞)○往古大坂村在所由來(明和三年十一月角の芝居。お染久松)○宿無團七時雨傘(明和五年七月)(別項)。外に所作事も相當に綴つた。地は宮薗節が多い。又時代といはず、世話といはず、おどけ狂言をも書いてゐるので、彼の作劇の範圍は極めて廣い。世話物には一夜漬の狂言が多くて、それ等は正しく彼の創作と認められるであらうが、一體には淨瑠璃との交涉が深く、淨瑠璃の當り作を書き替へた類も相當に見出される。宗輔に入門し、豐竹座作者としても活動した正三としては當然であるが、彼の作劇法には淨瑠璃操芝居から得た部分が甚だ著しい。大道具に機巧を應用して屢々觀衆を驚歎させた事もその一である。「けいせい天羽衣」「三十石艤始」「東山殿女狩」の如きは、それ等の代表作に屬する。ぶん廻し卽ち後世の廻舞臺は、彼の發明と傳へて名高い。部分的な脚色法に想像以上の手段を用ひたのも、當時の淨瑠璃界の影響が少からぬと思ふ。「男女相生鐙」や「大坂神事揃」等、その尤なる例である。これ等の案は、一面彼の性質に根ざす點も見逃す譯にいかぬ。狂言の名題にその例を見る事も多い。「三十石艤始」は最も有名であるが、「東西合見臺」「大松百助壽六法」「中陸妖龍宮島臺」「尾上菊五郎不登噺」等、人の意表に出でた類である。彼の作には、後世「繪入根本」(別項)として出版されたものが甚だ多い。

〔淨瑠璃〕宗輔についたが、忽ちその死にあつた爲めか、宗輔の遺命により、一時、豐竹座に留まつたとも傳へるが、作者生活は短い。○增補日蓮上人御法海(寶曆元年十月豐竹座。宗輔作の增補)○一谷嫩軍記(寶曆元年十二月)(別項)○四天王寺伽藍鑑(近松作の改作。但し寶曆七年四月、大松百助座の當り狂言を讀本淨瑠璃に改めたもの)○新舞臺連管の三番叟○壽館狐馬驟○容競唐土噺○當世模樣浮名楓○關取二代勝負附(以上明和五年九月龜谷芝居)等。これらの作に於て脚本との交涉は極めて密接であつて、脚本の當り作が後世淨瑠璃に書き替へられた類も少くない。〔雜著〕數種ある中に、化粧法を記した「容顏美艷考」が當時相當に流行して有名であつた。

【人物・作風】歌舞伎作者としては、拔群の稱讃を得て、作劇法について近松門左衞門(別項)と並び、才智の點で櫻田治助(別項)と較べられたが、これ等は淨瑠璃の名作者たる宗輔を襲ふこと尠からぬものがあるためもあり、他面、父親正朔から繼ぐ性質の然らしむるところもあると思ふ。彼は譯文の名人とも言はれて、書替狂言の才を認められたが、卽ち原作の筋が發見されながら、新たな脚色に十分な價値を認められたので、こゝに淨瑠璃に通じた型が巧妙に描寫されてゐる。而してそれ等を活躍させるに成功した機巧の應用は、彼の中に潜む才智に據ると思はれる。彼の所謂名作は多くはこの方面を主とした脚色に成功したものであり、觀衆を驚歎させたのであつた。かやうにして彼の脚色法は、歌舞伎方面で從來經驗せぬ驚異であつたが、その成功のためには、彼の人物が持つ篤實の點が、大に作用するかに察せられる。父親に對して孝子であつた逸話が傳へられ、歌右衞門との親交が記されてゐること等は、よくこの點を物語つてゐる。從來この社會に瀰漫してゐた役者側の橫暴は、彼の前に極めて從順に統一されたので、作を成功に導いた一の動機ともなつたと信ずる。かくて宗輔から讓られた作劇法によつて彼の成就したものは時代歌舞伎であつた。操芝居の隆昌によつて元祿後の歌舞伎脚本が、淨瑠璃の上演又は書き替へのみに僅かに命脈を保つて來たものが、彼の奮闘により、操芝居の衰運にも乘じて、その後歌舞伎芝居の全盛期を招いたことは、偉大な功績である。彼の門葉は、更にその缺を補つて行つたので、歌舞伎脚本史上の彼の地位は甚だ高いものがある。(並木丈輔・並木永輔參照)

【參考】並木正三一代咄○戯財錄並木五瓶○京

璃作者として一貫した生涯を了へた。西澤一風の後をうけ、豐竹座の立作者として竹本座の竹田出雲・文耕堂・三好松洛等に對抗して、よく豐竹座のために奮闘したのであつたが、寛保元年の頃から、何等の譯あつてか、執筆は一時稀れになつて、爲永太郎兵衞(別項)がこれに代つてゐたが、やがて延享二年、聘せられて作者無人の竹本座に轉じた。當時は最も好調に、彼一代の上からも、淨瑠璃史上からも、名作を多く書いた。歿する年再び豐竹座に勤め、「一谷嫩軍記」(別項)の三段目を書きながら、華やかな一代を結んだと傳へる。その間、寛保元年、豐竹越前少掾(別項)の一行に加はつて、江戸肥前座に下つたが、居ること一年で上阪した。作者としての並木姓は宗輔に起るので、爾來操芝居・歌舞伎芝居に於ける

文庫)等がある。作の傾向を見るに、合作者によつて自ら次の如く三區分せられる。(一)合作者安田蛙文時代。享保十一年から同十七年に至る。一風指揮の下に執筆を初めたが、宗輔のためには修業時代の觀もある。大體題材も南北朝以前に選び、專ら時代物を書いた。名篇としては次の如きものがある。「北條時賴記」(別項)(一風作と認められる)、「攝津國長柄人柱」(別項)、「尊氏將軍二代鑑」(享保十三年二月、足利直義謀反)、「後三年奥州軍記」(同十四年正月)、「忠臣金短冊」(同十七年十月、義士)等。(二)合作者並木丈輔又は單獨作時代。享保十八年から延享元年に至る。但し寛保年中は、執筆から遠ざかつてゐるから、元文までとも見られる。世話物の修練期とも考へられて、時代世話の傾向が發見される。「莠伶人吾妻雛

好松洛)、「假名手本忠臣藏」(竹田出雲・三好松洛)、「雙蝶々曲輪日記」(合作者同)、「源平布引瀧」(合作者、三好松洛)(各別項)等は、悉く竹本座のために書いた。絶筆の「一谷嫩軍記」(別項)とその前の「日蓮上人御法海」(別項)とは、再び豐竹座に戻つての作である。

【作風】右の如き合作者の變遷によつて、大體の作風の變化も窺はれるが、又宗輔自身の作者としての展開の跡を辿ることも出來る。安田蛙文とは相弟子らしいが、作の傾向は相違してゐたやうで、蛙文との合作には堅さが著しく見える。殊に丈輔の場合と比較するに、後者にはかなり抒情的傾向が認められる。これ等の時代を經たことが宗輔自身の筆力を圓熟させたとも考へられるので、「和田合戰女舞鶴」や、「釜淵雙級巴」に於ける情味の濃い時代

た逸話が傳へられ、歌右衛門との親交が記されてゐること等は、よくこの點を物語つてゐる。從來この社會に瀰漫してゐた役者側の横暴は、彼の前に極めて從順に統一されたので、作を成功に導いた一の動機ともなつたと信ずる。かくて宗輔から讓られた作劇法によつて彼の成就したものは時代歌舞伎であつた。操芝居の隆昌によつて元祿後の歌舞伎脚本が、淨瑠璃の上演又は書き替へのみに僅かに命脈を保つて來たものが、彼の奮闘により、操芝居の衰運にも乘じて、その後歌舞伎芝居の全盛期を招いたことは、偉大な功績である。彼の門葉は、更にその缺を補つて行つたので、歌舞伎脚本史上の彼の地位は甚だ高いものがある。(並木丈輔・並木永輔參照)

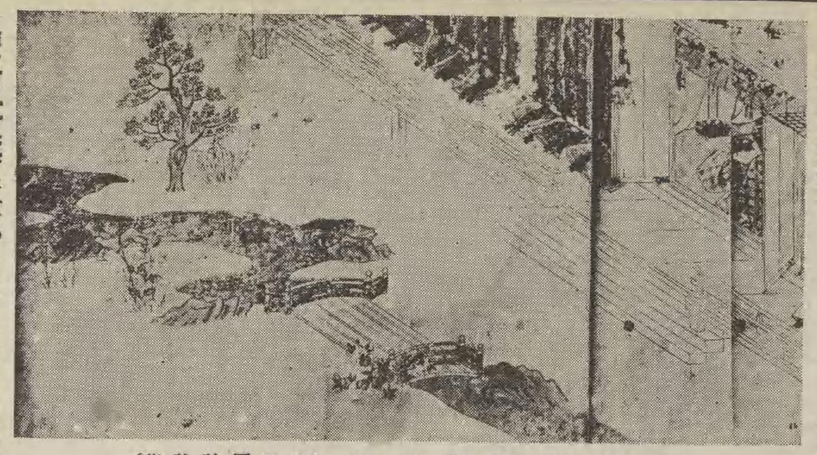
【參考】並木正三一代咄〇戯財錄並木五瓶〇京攝戯作者考木村默翁〇言狂作書西澤一鳳〇浪速人傑談政田義彦〇近世戯曲研究守隨憲治〇江戸歌舞伎同上(日本文學聯講)〔守隨〕

並木宗輔(なみきそうすけ) 淨瑠璃作者 【通稱】松屋宗介【別名】享保年中は作名を主に宗助と記し、竹本座時代は並木千柳と稱した。【雅號】舍柳・市中庵など。【歿年】寶曆元年十一月中旬か(年代に寛延二年、或は三年説がある外、月日にも九月七日説がある)。享年五十七。【法名】未詳【墓所】未詳【閲歴】大阪の人。もと俳諧の嗜みから戯作道に入つたかと思はれる點があるが、斯道の素養は明かでない。豐竹座の名作者といはれた西澤一風(別項)につき、淨瑠璃作者として名を出したのであるが、別に竹田出雲の門との説も傳へられてゐる。享保十一年豐竹座に、師一風の下に相弟子たる安田蛙文と共に、「北條時賴記」に名を連ねたのが最初である。爾來二十六年間、大體淨瑠璃作者として一貫した生涯を了へた。西澤一風の後をうけ、豐竹座の立作者として竹本座の竹田出雲・文耕堂・三好松洛等に對抗して、よく豐竹座のために奮闘したのであつたが、寛保元年の頃から、何等の譯あつてか、執筆は一時稀れになつて、爲永太郎兵衛(別項)がこれに代つてゐたが、やがて延享二年、聘せられて作者無人の竹本座に轉じた。當時は最も好調に、彼一代の上からも、淨瑠璃史上からも、名作を多く書いた。歿する年再び豐竹座に勤め、「一谷嫩軍記」(別項)の三段目を書きながら、華やかな一代を結んだと傳へる。その間、寛保元年、豐竹越前少掾(別項)の一行に加はつて、江戸肥前座に下つたが、居ること一年で上阪した。作者としての並木姓は宗輔に起るので、爾來操芝居・歌舞伎芝居に於ける作者道の一系祖をなす。門葉には、並木丈輔・同永輔・同鯨兒・同正三(別項)その他の名が擧げられる。歌舞伎作者としては正三が成功したので、その方面では正三が並木の系祖と見られてゐる。並木千柳の名が後世歌舞伎方面で繼がれてゐる。彼自身も歌舞伎作者として名を連ねた事もあるが、名作は出なかつた。

【作品】一生の作品四十餘篇が擧げられてゐて、大體は時代物である。尤も脚色の發達によつて時代世話の作柄のものも相當見うけられる。世話物と認められるのは、「和泉國浮名溜池」(合作者安田蛙文。享保十六年四月、近松の五十年忌歎念佛の改作)、「萬屋助六二代橋」(添創。作者並木丈輔。享保二十年五月)、「茜染野中の隱井」(添削。作者原田由良助。元文三年十月。梅屋誠淨名色揚の改作)、「夏祭浪花鑑」(別項)、「雙蝶々曲輪日記」(別項)等である。選集に「並木宗輔淨瑠璃集」(續帝國文庫)・「海音・半二・出雲・宗輔傑作集」(有明堂文庫)等がある。作の傾向を見るに、合作者によつて自ら次の如く三區分せられる。(一)合作者安田蛙文時代。享保十一年から同十七年に至る。一風指揮の下に執筆を初めたが、宗輔のためには修業時代の觀もある。大體題材も南北朝以前に選び、專ら時代物を書いた。名篇としては次の如きものがある。「北條時賴記」(別項)(一風作と認められる)、「攝津國長柄人柱」(別項)、「尊氏將軍二代鑑」(享保十三年二月、足利直義謀反)、「後三年奥州軍記」(同十四年正月)、「忠臣金短册」(同十七年十月、義士)等。(二)合作者並木丈輔又は單獨作時代。享保十八年から延享元年に至る。但し寛保年中は、執筆から遠ざかつてゐるから、元文までとも見られる。世話物の修練期とも考へられて、時代世話の傾向が發見される。「莠伶人吾妻雛形」(享保十八年七月。騙法師から材をとつて、後の「攝州合邦辻」を生む)。「南鐐鐵後藤目貫」(別項)、「苅萱桑門筑紫鰒」(別項)、「和田合戰女舞鶴」(別項)。「安部宗任松浦簪」(單獨作。元文二年正月。後に「奥州安達ヶ原」を生む)、「釜淵雙級巴」(別項)、「狹夜衣鴛鴦劍翅」(單獨作。元文四年八月、熙谷判官と高師直。「假名手本忠臣藏」に暗示を與へた)、「鶴山姫捨松」單獨作。元文五年二月、當麻中將姫の改作)等の相當な名篇が見える。淺田一鳥との合作「道成寺現在蛇鱗」(寛保二年八月)は歌舞伎に影響した。(三)竹本座時代と晩年。從來の傾向を集中させた時代で、淨瑠璃作者としての完成期と見られる。柔剛宜しきを得て、道義を尚ぶ間に、よく人情を漂はせた作を綴つた。「軍法富士見西行」(合作者、竹田小出雲・小川半平)、「夏祭浪花鑑」(合作者、三好松洛・竹田小出雲)、「菅原傳授手習鑑」(合作者、竹田出雲・三好松洛・竹田小出雲)、「義經千本櫻」(竹田出雲・三好松洛)、「假名手本忠臣藏」(竹田出雲・三好松洛)、「雙蝶々曲輪日記」(合作者同)、「源平布引瀧」(合作者、三好松洛)(名別項)等は、悉く竹本座のために書いた。絶筆の「一谷嫩軍記」(別項)とその前の「日蓮上人御法海」(別項)とは、再び豐竹座に戻つての作である。

【作風】右の如き合作者の變遷によつて、大體の作風の變化も窺はれるが、又宗輔自身の作者としての展開の跡を辿ることも出來る。安田蛙文とは相弟子らしいが、作の傾向は相違してゐたやうで、蛙文との合作には堅さが著しく見える。殊に丈輔の場合と比較するに、後者にはかなり抒情的傾向が認められる。これ等の時代を經たことが宗輔自身の筆力を圓熟させたとも考へられるので、「和田合戰女舞鶴」や、「釜淵雙級巴」に於ける情味の濃い時代物を産んだ所以である。又一面に於て當時既に「狹夜衣鴛鴦劍翅」の如き構想上の成功をも收めたのは、彼自身の筆力の習熟にもよるが、相反する二傾向を持つた蛙文と丈輔との如き作者との交渉が、大に作用してゐる所もあると思ふ。竹本座に於ける出雲・松洛等に伍して何等の遜色なく、淨瑠璃史上稀に見る名篇の出現時代を齎したのも當然であらう。「手習鑑」に於て、松洛と千柳と出雲とで、二段目三段目四段目の別れを書き分けた趣向は、また各々三樣の作風を示してゐるとも見られる。宗輔の師一風の特徴は、好んで改作をなし、又その巧妙さにあつた。彼も亦これを學んだが、彼に於てはそれが改作以上のものに到達してをり、ために構想の複雜化、内容の照應等に十分成功したのであつた。彼が時代物の名作者として、海音・出雲・文耕堂と共に、淨瑠璃四天王と呼ばれたのも當然である。

【參考】聲曲類纂○戯財錄並木五瓶・齋藤月岑○京攝戯作者考烏有山人○傳奇作書初篇西澤一鳳○嘯窓漫筆曉鐘成○江戸時代戯曲小説通志鼇木園主人○淨瑠璃名作集上解説　黒木勘藏○近世邦樂年表　【守隨】



奈與竹物語繪卷（金比羅神社藏）

雙樹落葉（なみきのおちば）　隨筆　三卷　【著者】名島政方　【刊行】天保十二年　【解説】本書は曩に文政年中「晤語」（名島隨筆）（別項）と題して刊行した二卷本を三卷に更めたもので、内容は同じである。谷川士清閲、河喜多眞彦校。文政七年淸水濱臣、同四年柴田以文の序、同九年高橋知周の跋及び天保十二年河喜多眞彦の識語がある。　【和田】

名見崎德治（なみさきとくぢ）　「富本節」を見よ。

名寄（なよ）　「物盡し物揃へ」を見よ。

奈與竹物語（なよたけものがたり）　「鳴門中將物語」を見よ

奈與竹物語繪卷（なよたけものがたりえまき）　繪卷　【解説】讃岐金刀比羅宮所藏一卷。後嵯峨のみかどと或る女房との繼物語を畫いたもので、この話は「古今著聞集」にも見えてをり、群書類從にも「鳴門中將物語」（別項）の名を以て載錄されてゐる。寛政十二年の奥書によれば、後深草天皇が讃岐白峯寺に寄進せられたもので、繪は隆能、詞は爲家と傳へられてゐるが、勿論明かでない。詞繪とも各七段、濃彩の描寫で、大和繪が漸く類型化せられて來た鎌倉最末葉の製作と思はれる。なほ後世住吉如慶や浮田一蕙が、この繪卷を摸寫したものも世に傳はつてゐる。　【田中（一）】

奈良繪本（ならゑほん）　「刊本」「挿繪」を見よ。

奈良時代文學（ならじだいぶんがく）　「大和時代文學」を見よ。

奈良柴（ならしば）　音樂書　一卷　【著者】原盛和（原武太夫）　【別名】三絃根元記　【名義】卷末に記す著者の詠歌中の語による。【成立】もと幕下の武士であつた著者が、若い頃から諸流淨瑠璃を究め、唄三絃から歌舞伎の三絃にまで達したが、元文元年八月十五夜に、わが才の足らぬを憾んで、三絃唄本まで悉く燒却したのであつたが、その後、彼に頼つて江戸の淨瑠璃三絃等に關し、その由來や内容を質した數名の人々に對して、自ら書き送つて教へ傳へたことがあつた。その數包の書留を輯め編んだものが本書である。この成立の年は明和四年であらうか。現在所傳のものは、後人の追記が加はつてゐるらしい。故に形式的に整理された結果は見られないが、所傳の稀な江戸淨瑠璃や唄について、肯綮に中る言説も尠からず、甚だ貴重な文獻である。【諸本】自筆本によつて傳へられたものが、「燕石十種」に收められてから世に擴まり、活版にも飜刻され、温知叢書第八編にも收む。【解説】まづ淨瑠璃節の發生から、江戸淨瑠璃の系統を説いたが、薩摩派を擧げず、杉山丹後掾（別項）を江戸淨瑠璃の根元とする等、注目すべき所説がある。次いで半太夫操座の流れ物名題を詳細に列擧し、更に江戸節三絃の由來から、名手山彦源四郎を稱へ、俱舍論舞の詞章、七月芝居風流踊の解説、小舞十六番の歌詞を記し、七段獅子由來に亙つて江戸歌舞伎の傳統に及んだ。中に凡て淨瑠璃は操を體とすべしといひ、歌舞伎に於て徒らに狂ひ廻るは、踊りであつて所作ではないと喝破した如き、傾聽に値ひする。　【參考】温知叢書第八編解説　【守隨】

奈良朝文法史（ならてうぶんぱふし）　語學書　一册　【著者】山田孝雄　【刊行】大正二年五月　【内容】本書は著者の「日本文法論」（別項）を前提とし、日本文法史通論の第一編として、專ら記錄に現はれたものに依つて、藤原朝・奈良朝の文法を研究したものである。序論に歴史的日本文典編纂には、先づ第一に記錄に現はれた語法の變遷を精査せねばならぬと云ひ、次に文法變遷の跡を概觀するに、（一）奈良朝以前、（二）奈良朝期、（三）平安朝期、（四）院政鎌倉期、（五）室町期、（六）江戸期に分ち得ると云ひ、各時代の文法資料、文法の變遷を簡單に記し、次に現代文の亂雜であることを指摘し、文法史研究の必要を述べ、次に文法の歴史的研究に當り、品詞により變遷の著しいものと然らざるものとあるといひ、著者の所謂單語の四大綱のうち、用言と助詞は頗る變遷が多いが、體言と副詞は變化極めて少い。卽ち名詞及び數詞には文法的變化は殆どない。代名詞及び副詞には多少の變化があるといつてゐる。次に本論に入つて、奈良朝（藤原朝を含む）文法の研究資料としては、金石文・古文書及び書籍の類があるが、直ちに文法研究の資料となるものは、金石文では佛足石歌のみ、正倉院文書では寺院の緣起、宣命の草案など一二に過ぎない。書籍では「記紀」では歌謠及び僅少の假名書の部、「續紀」では宣命及び少數の歌謠のみ、「風土記」「法王帝説」「延喜式」等も亦上記のものと同樣であり、「古語拾遺」以下は、若干參考になると云ふに過ぎない。かくして當代文法の直接資料としては「萬葉集」一部があるに過ぎない。而もその「萬葉集」も直ちに資料になるのは、假名書の部分たる卷四・十四・十五・十七・十八・二十の六卷だけであつて、確實な資料は極めて僅少であると云ひ、次にこの時代には話語と文語との區別はなかつただらうと考へられるから、今この區別を立てないと記してゐる。次に愈々當代文法の研究に入つて、（第一）語論（一、代名詞。二、用言。三、副詞。四、助詞。五、語構成の大要）（第二）句論（一、句の形式及び成分。二、句の組織。三、句の接合と排列）（第三）東歌にあらはれたる特殊なる語法、と章をわかち、多數の用例を擧げて歸納的に研究してゐる。【價値】文法史研究の必要は何人も痛感しながら、從來何人も着手しなかつた。著者はこの必要にして而も困難な事業を、初めてなしたものであつて、多少の不備や缺點はあるけれども、新事實を闡明したものもあり、日本文法史の起點となる時代の文法を全般的に明かにして、國語史

の研究（及び國語系統の研究）に貴重な資料を提供するものであつて、國語學上に貢獻するところ實に甚大なものがある。

【備考】本書はもと「平安朝文法史」（別項）と併せて一書にする考で著作されたものであり、殊に本書の補遺が「平安朝文法史」の卷末に載せられてゐるから、「平安朝文法史」を併せ見るべきである。　【龜田】

奈良傳授（ならでんじゅ）　「歌道傳授」を見よ。

奈良版（ならばん）　「刊本」を見よ。

成田山分身不動（なりたさんぶんじんふどう）　脚本　五幕八場　時代物　【作者】三桝屋兵庫（市川團十郎）　【名義】團十郎の信仰佛たる成田山不動が一體分身の靈驗を示す幕切れの場面による。角書の「少將百夜車（蝙蝠通小町）」は三番目による。【諸本】正本屋小兵衛版繪入狂言本一册が現存す

成田山分身不動

風」「昭君」（序）、「草紙洗小町」（二）、「一角仙人」「通小町」（三）、「天鼓」「角田川」（四）、「關寺小町」（五）等である。一角仙人の件は、既に「鳴神」（別項）として、從來歌舞伎に好評を博した脚色である。（源平盛衰記參照）

【梗概】（序幕）（須磨の浦）流刑中の在原行平は汐汲女に馴染みて、はかなく慰められてゐたが（汐汲）、この度、召還の宣旨下り、勅使として紀貫之・文屋康秀等が下り、在原の執權竹の内武勇之介も從つた。同じく流刑に處せられてゐる岸態大とんなる惡人は、行平が馴染んでるとて集を見せる。少將は傍から驚く小町に勸めて、草紙を洗はしたところ、正しく書き入れたものと判り、黒主は冠裝束を剝がれる。（行平館）松風が若衆にやつして訪ね、既に戀慕の情を斷つたと告げる。然るに行平が村雨と盃を交すと、その松風の姿は大蛇となり、止めると元の姿となつた。實は神泉苑の龍王と明かし、眞の松風は須磨で終つた由を告げ、又黒主が惡計の暴露されたのも水の故であるとなし、熊野に籠つて龍神を封じたから、急ぎ下つて色を以て誑すべしと小町に教へる。（三幕）（那智山）黒主の行法中、喜撰は通風仙人、猿丸太夫は高陽仙人と稱して仕へる。小町は女柴賣となつて黒主に近づき、小町に似てゐると噂され、小町に似てゐると噂されて

雙樹落葉（なみきのおちば）　隨筆　三卷　【著者】名島政方　【刊行】天保十二年　【解說】本書は曩に文政年中「晤語」（名島隨筆）（別項）と題して刊行した二卷本を三卷に更めたもので、內容は同じである。谷川士清閱、河喜多眞彥校。文政七年清水濱臣、同四年柴田以文の序、同九年高橋知周の跋及び天保十二年河喜多眞彥の識語がある。　【和田】

にまで達したが、元文元年八月十五夜に、わが才の足らぬを憾んで、三絃唄本まで悉く燒却したのであつたが、その後、彼に賴つて江戶の淨瑠璃三絃等に關し、その由來や內容を質した數名の人々に對して、自ら書き送つて教へ傳へたことがあつた。その數包の書留を輯め編んだものが本書である。この成立の年は明和四年であらうか。現在所傳のものは、後人の追記が加はつてゐるらしい。故に形式的に整理された結果は見られないが、所傳の稀な

的日本文典編纂には、先づ第一に記錄に現はれた語法の變遷を精査せねばならぬと云ひ、次に文法變遷の跡を概觀するに、（一）奈良朝期、（二）平安朝期、（三）平安朝以前、（四）院政鎌倉期、（五）室町期、（六）江戶期に分ち得ると云ひ、各時代の文法資料、文法の變遷を簡單に記し、次に現代文の亂雜であることを指摘し、文法史研究の必要を述べ、次に文法の歷史的研究に當り、品詞により變遷の著しいものと然らざるものとあるといひ、著者

（第二）句論（一）句の形式及び成分。二句の組織。三、句の接合と排列）（第三）東歌にあらはれたる特殊なる語法、と章をわかち、多數の用例を擧げて歸納的に研究してゐる。【價値】文法史研究の必要は何人も痛感しながら、從來何人も着手しなかつた。著者はこの必要にして而も困難な事業を、初めてなしたものであつて、多少の不備や缺點はあるけれども、新事實を闡明したものもあり、日本文法史の起點となる時代の文法を全般的に明かにして、國語史

の研究（及び國語系統の研究）に貴重な資料を提供するものであつて、國語學上に貢獻するところ實に甚大なものがある。

【備考】本書はもと「平安朝文法史」（別項）と併せて一書にする考で著作されたものであり、殊に本書の補遺が「平安朝文法史」の卷末に載せられてゐるから、「平安朝文法史」を併せ見るべきである。　【龜田】

奈良傳授（ならでんじゅ）　「歌道傳授」を見よ。

奈良版（ならばん）　「刊本」を見よ。

成田山分身不動（なりたさんぶんじんふどう）　脚本　五幕八場　時代物　【作者】三桝屋兵庫（市川團十郎）【名義】團十郎の信仰佛たる成田山不動が一體分身の靈驗を示す幕切れの場面による。角書の「少將百夜車（蟾娘通小町）」は三番目による。【諸本】正本屋小兵衞版繪入狂言本一册が現存する。元祿歌舞伎傑作集上卷所收。【初演】繪入狂言本の刊行によると、元祿十六年四月興行と見えるが、「金の揮」や「江戶芝居年代記」によると、二月から開演され、不動の部分は七月まで持越したやうにもある。江戶森田座。淨瑠璃、薩摩掾外記。ワキ、左平太。

【役割】紀貫之（鈴木平吉）、竹の內武勇之介（森田勘彌）、村雨（市川竹之助）、中納言行平（村山四郎次）、松風（歌村十次郎）、深草の少將（多門庄左衞門）、在原業平（橋本金作）、小野小町（荻野澤之丞）、大伴の黑主・胎藏界の不動（市川團十郎）、大伴のたきとう（坂東又九郎）、空海・金剛界の不動（市川九藏）、下人とり助（西國兵介）等。

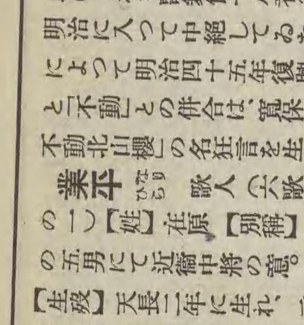
【題材】團十郎の當り藝たる不動尊を拉し來つてはゐるが、實はその靈驗談ではなく、最後に靈像の示現があるだけで、松風行平と小野小町とが主な題材を成してゐる。而も部分的に見れば、諸曲種といふこともできる。「松風」「昭君」（序）、「草紙洗小町」（二）、「一角仙人」「通小町」（三）、「天鼓」「角田川」（四）、「關寺小町」（五）等である。一角仙人の件は、既に「鳴神」（別項）として、從來歌舞伎に好評を博した脚色である。（源平雷傳記參照）

【梗概】〔序幕〕（須磨の浦）流刑中の在原行平は汐汲女に馴染みて、はかなく慰められてゐたが（汐汲）、この度、召還の宣旨下り、勅使として紀貫之・文屋康秀等が下り、在原の執權竹の內武勇之介も從つた。同じく流刑に處せられてゐる岸熊大とんなる惡人は、行平が馴染んだ村雨に迫り、肯んぜぬのを怒つて鹽釜に打込んだが、危く武勇之介に救はれた。行平の上洛に、村雨の姉松風も歎きに沈み、同行を乞うたので、武勇之介は姉妹の帶を汐に浮かべて判じたところ、松風の帶は沈んだので、村雨のみ伴ふ事となつた。〔二幕〕（禁裏）彌生も末なるに花が咲かぬため、待花の題で詠歌の宴が催される。然るに、小町が「待つ花に霞や關の戶のくらし、ほのかに照らせ國の櫻木」と詠ずると花が開いた。人々の悅ぶ時、大伴の黑主が現はれて、「萬葉集」に見える古歌であるとて集を見せる。少將は傍から驚く小町に勸めて、草紙を洗はしたところ、正しく書き入れたものと判り、黑主は冠裝束を剝がれる。（行平館）松風が若衆にやつして訪ね、既に戀慕の情を斷つたと告げる。然るに行平が村雨と盃を交すと、その松風の姿は大蛇となり、止めると元の姿となつた。實は神泉苑の龍王と明かし、眞の松風は須磨で終つた由を告げ、又黑主が惡計の暴露れたのも水の故であるとなし、熊野に籠つて龍神を封じたから、急ぎ下つて色を以て誑すべしと小町に敎へる。〔三幕〕（那智山）黑主の行法中、喜撰は通風仙人、猿丸太夫は高陽仙人と稱して仕へる。小町は女柴賣となつて黑主に近づき、小町に似てゐると嚊される小野のお通と名乘り、遂に黑主の心を蕩かし、醉ひ倒させて注連繩を切つたので、龍は飛び去つた。小町は歸洛する。（小野良種館）少將は百夜通ひの約束で忍び入つたが、小町の寢間には隱男が臥してゐた。小町の兄良種が眺めると、添臥は蟾蜍であつた。と、傍らの壺の內から黑主が現はれて小町にかゝつた。〔四幕〕（住吉社）小町は數度の不思議にも別條のなかつた事は、神の守護による所とて參詣する折柄、黑主の父たきとうが來て、黑主は戀の病で枕もあがらぬ由を訴へ、小町の妹狹衣の前から與へられた綾の鼓を打つたが、終に音の出ぬを悲しみ、傍の鼓が瀧へ身を投げる。（渡船場）黑主は成田不動へ參詣せんと、僧形にかへて渡船に乘つた。偶々乘り合はせた妻子にも姿を隱したが、鼓の音が響くと共に、船頭實は父たきとうが現はれ、一同に親子の名乘りをさせて消えた。併し黑主は小町を思ひ切れぬとて、自ら劍に貫かれて果てる。〔五幕〕（禁裡）歸朝した空海が參內し、荒海障子に筆を投げて龍字を書き、奇瑞を示す。（關寺の邊）小町が狂ひ廻つて現はれたが、良種等が來て、やう〳〵本復する。今迄の黑主は胎藏界の不動と現はれ、空海は金剛界の不動と現じた。

成田山分身不動（狂言本）

【構想】名題に謳つた不動その物は、「兵根元曾我」（別項）に於けると類似し、全脚色には殆ど交渉がない。事實は小町の戀物語とも見るべきで、小町對業平の戀愛と、小町對黑主の關係を並立させて、劇的な連鎖を遂げんと計つたものである。但し當年の江戶歌舞伎に通ずる脚色法から見れば、強ち一貫した主題を求めるでもなく、偏に各場相互の情緒の關係が效果的ならばよいのであつて、この點では本作も相當の上作といへよう。二幕目で緊張の感がやゝほぐれ、三幕目に亙つて濡れ場に肉慾感をそへたものが、次の四幕目では愁歎場となつて淚を求める。最後には狂ひを置いてゐる。業平よりは寧ろ黑主が活躍して各場を連絡させてゐる。一場面に最も多く情緒を盛つたのは三幕目の那智山であらうが、こゝは「鳴神」を挿入したものである。かく見ると、序幕が全く獨立してゐる事に氣付く。行平も松風・村雨も、この場の汐汲や帶引の所作を配する以外、全作に對して殆ど無用の題材たるに過ぎない。二幕目の盃事の場面は機巧の應用であらうが、甚だしく奇異な感を以て見られたであらう。又詞章は傳はらぬが、外記淨瑠璃が大に各場の所作を助けたであらう。

【附記】市川團十郎は生地を下總とも傳へ、よ



の歌を詠んだ事。「後撰集」巻十六には「思ふ心ありて前太政大臣（良房）によせて侍りける」歌がある。表面上藤氏と抗争したやうには見えぬ。(二〇)業平の家にある女に敏行が通つた事等である。「後撰集」に依つて知り得る事蹟は、(一一)伊勢と關係のあつた事。但し時代錯誤がある。(一二)「身の憂へ侍りける時津の國にまかりて住み始め侍りける」こと等である。而して「古今集」中、三十首の業平の歌は、すべて「伊勢物語」中に見えるが、「伊勢物語」中に見えない業平の歌は、「古今集」には一首もない。「後撰集」中、業平の歌は十一首にて、内三首は「伊勢物語」中に見えるが、九首は物語外の歌である。「古今」「後撰」の撰者は、何から業平の歌と認める歌並に相當に長い詞書を引用したであらうか。「土佐日記」には、「業平の君の山のは逃げて入れずもあらなむといふ歌なむおほゆる」とあつて、貫之は「古今集」撰修後約三十年にして、なほ業平の歌なるものを認めてゐる。「古今集」の場合は、「伊勢物語」が唯一の材料であつたとも考へられるが、「後撰集」には然らざる場合が考へられる。「古今」「伊勢」の前後は容易に決せられないが、現存「伊勢物語」の原形が「古今集」以前に存在してゐたと考へることは、必ずしも不合理ではない（伊勢物語參照）。「伊勢物語」のある部分が「古今集」の撰者によつて業平の歌と認められてゐることを以て推せば、「伊勢物語」にはなほ他の或る部分に業平の歌がある場合が考へられ、やがて「伊勢物語」全體が業平の事蹟を基礎としたものであると考へられるやうになり、業平の事蹟は豐富になり、業平が五條の后にも通じた（天鏡）ことになる。傳説化されてゐる業平と史實上の業平とを分離することは甚だ困難であるが、「大日本史」の如く消極的に傳説を認めなければ、事蹟そのものの中に文學的要素を含んでゐる業平の取扱ひとして不十分である。小野小町（別項）が傳説的美人として考へられてゐるに對し、業平は傳説的美男として考へられてゐるに拘らず、「三代實錄」には「體貌閑麗、放縱不拘、善和歌」と三つの性質を與へてゐる。「源氏物語」のモデルとして業平が選げられるのは、この三性質に起因し、從つて傳説化された爲めに、業平は吉野山に隱れて神仙となつたとさへ言はれるに至つたのである。

【作品】業平朝臣集（群書類從二四八所載本は短歌五十八首を收め、部類はない。このうち「伊勢物語」の歌四十九首、「古今集」の歌四十一首、「後撰集」の歌八首である。行平・仲平の歌も混入してゐる。「更級日記」に「中將の集には隅田川さぁり云々」さぁり。○勅撰集に入る歌は古今三十首、後撰十一首、拾遺三首、新古今以下凡そ四十三首、合計凡そ八十七首、私撰集に入るものは新撰和歌六首、金玉集二首。【批評】業平の歌は觀念的であるが、一方に於て、歌の調子はいづれかといへば緩漫であるが、一方に於て、歌の調子はいづれかといへば緩漫であるが、一方に於て、歌の調子はいづれかといへば緩漫

桓武天皇―平城天皇―阿保親王―行平
　　　　　　　　　　―守平―棟梁―元方
　　―伊登内親王　　―業平―師尚
　　　　　　　　　　―仲平―滋春（元慶元年薨）

との故を以て東下りを否定する説もある。奥州八十島にて小野小町の髑髏を弔うたといふ説話もある。(四)伊勢に下り、齋宮に通じた事。「本朝皇胤紹運錄」には、師尚・滋春の母を齋宮恬子内親王とし、内親王を文德天皇皇女、母は惟喬に同じとある。(五)布引瀧に遊んだ事、(六)紀有常の女に通つた事、(七)母が長岡に住んでゐた事、(八)紀利貞が阿波介に任じて下るのを送別した事、(九)貞觀十七年基經四十賀

貞觀七年右馬頭、元慶元年中將に任じ、從四位上に敍し、同三年藏人頭に任じた。「古今集」に依つて知り得る事蹟は、(一)惟喬親王のお供をして櫻狩に行き、貞觀十四年親王が御出家になつて小野に籠らせ給うたので、雪を冒し

てゐたと考へることは、必ずしも不合理ではない（伊勢物語參照）。「伊勢物語」のある部分が「古今集」の撰者によつて業平の歌と認められてゐることを以て推せば、「伊勢物語」にはなほ他の或る部分に業平の歌がある場合が考へられ、やがて「伊勢物語」全體が業平の事蹟を基礎としたものであると考へられるやうになり、業平の事蹟は豐富になり、業平が五條の后にも通じた（大鏡）ことになる。傳說化されてゐる業平と史實上の業平とを分離することは

【作品】業平朝臣集（群書類從二四八所載本は短歌五十八首を收め、部類はない。このうち「伊勢物語」の歌四十九首、「古今集」の歌四十一首、「後撰集」の歌八首である。行平・仲平の歌も混入してゐる。「更級日記」に「中將の集には隅田川とあり云々」とある）。○勅撰集に入る歌は古今三十首、後撰十一首、拾遺三首、新古今以下凡そ四十三首、合計凡そ八十七首、私撰集に入るものは新撰和歌八首、金玉集二首。【批評】業平の歌は觀念的でありながら情熱がこもつてゐる。彼は表現の完

成を求めようとしないで強く詠まうとしてゐるが、歌の調子はいづれかといへば緩漫である。貫之が「古今集」序に、「其の心あまりて詞たらず、しぼめる花の色なくて香のこれるがごとし」と評してゐるのは適切である。

【參考】三代實錄（元慶四年五月）○古今集目錄○歌仙傳○本朝皇胤紹運錄○大日本史二百十八○百人一首一夕話○伊勢物語○大和物語○古今集○後撰集○國文學全史平安朝篇○評釋業平全集　飯田季治　〔西下〕

業平（なりひら）　歌舞伎　【名稱】在原業平を題材とした作品をいふ。【解說】「伊勢物語」による傳說化された業平が初め題材となつたので、主に舞踊方面に於ける好題目であつたが、それ自身に於て展開の餘地はなかつた。元祿時代に入つて、劇的完成の機運に乘じ、始めて戲曲化されたのである。併し所謂王代物に屬するためと、配さるべき女性の小町が行平又は少將との交涉に移つた爲め、業平を中心とする戲曲には、餘り發展性がなかつた。

【種類】歌舞伎發生以來の樣式について見るに、野郎歌舞伎は、初期時代を(一)舞踊時代と(二)科白劇時代とに二分される。(一)にあつては、性質から(イ)踊と(ロ)舞とに分たれる。女歌舞伎の初期にあつて、女が男裝すべき要求の下に種々の態を演じた中に、業平狂亂ともいはるべきものがあつた。金の風折烏帽子に小袖を着、太刀を佩き、戀の小唄を歌ふのであつた。この時の小唄が業平に關するものなりや否やは明かでない。その後、遊女等の女歌舞伎流行期に入つて、「伊勢物語」に見えた「高安通」の件が取入れられ、即ち或る種の內容を持つやうになつて、組歌の形式を整へ、總踊式の舞臺が生れた。これ等はすべて(イ)であつて、その官能的な所に主體があつた。併し女歌舞伎には、他面狂言・小唄等の分子も入つたので、その系統を引いたものが、女歌舞伎時代の末には、特殊な小舞を生じたので、その中に「高安通」も採用された。こゝに於て(ロ)に屬する樣式が發生した。代表的なものを十六種（多少の出入はあるが）を限つて「小舞十六番」（別項）と稱し、舞藝の樣態の基本となした。これを又「業平踊」の語を以て總稱した。但しこの名稱は、女歌舞伎初期の業平の狂亂と直接交涉があるとも思はれぬ。「小舞十六番」は、主に稽古用のものとして傳授されてゐた爲め、一般には注目されなかつたが、若衆時代に入るや、その中の「高安通」から展開した演技として、玉川千之丞によつて演ぜられた「高安通」は甚だ有名であつた。こゝに漸くにして劇的樣式が加はり、業平と女と出て、夫婦愛の主題を現はすに成功したのである。併しこの作は、千之丞を主役としたところから、實際は業平側は脇役に廻つてゐる。こゝまでを(ロ)とし、(一)に屬する樣式である。(二)に於ては、脚色の作用を特徵とし、又本體とする。これに屬する作品を性質から分類して、(イ)戲曲と(ニ)所作事とする事ができる。年代からいへば元祿以後に及ぶので、業平を用ひた作品をあげる事になると、他の類よりは僅かであるが、相當な數に上つて來るので、代表的なものに止めるが、(ハ)に脚本と淨瑠璃との二方面がある。脚本としては、早い頃に富永平兵衞作「業平河內通」（元祿七年か。京、都萬太夫座上演。業平井筒の戀物語をお家騷動に入れた）が見える。當時としては興味ある作であつたが、元祿劇の型としては脚色その物の複雜味に劣り、後世への永續性はなかつた。これに代つて、騷動事件を主體とし、內容の興味を覗つた作として最後的の成功を遂げたのは、奈河龜輔作「競伊勢物語」（別項）である。時代物流行のただ中であり、歌舞伎の發達期に於ける產物であつただけに、歌舞伎脚本の傑作として後世への影響も亦大であつた。その外に、これ程の作が現はれなかつた爲めに、脚本としては、業平が主役に廻らなかつたが、この「競伊勢物語」を以て一貫した觀がある。更に淨瑠璃にも書き替へられて直ちに流行し、現在では淨瑠璃として命脈が保たれてゐる。但し淨瑠璃方面では、これより早く、近松門左衞門作「井筒業平河內通」（享保五年三月、竹本座上演。惟喬惟仁御位爭を主題とし、「競伊勢物語」の原據となる）（別項）があつたが、後世への流行は大したものでなかつた。(二)所作事としては、業平は屢々利用されたが、中で有名なのが、「化粧（けはひ）六歌仙」（六歌仙參照）である。初め嵐雛助によつて、寬政元年大阪に演ぜられてから、三都に歡迎されたが、業平は三番目に現はれて、小町に戀を訴へる趣向になつてゐる。小町が六人を連鎖する作用をなす關係からであり、勿論業平も歌仙中の一人として描かれたのである。この作は天保年中、中村芝翫によつて江戶風に書き替へられて、現在も上演されてゐる。かくて今日から顧みれば、題材としての傳統が極めて長いに拘らず、業平が演劇化された機會は、舞踊方面に多くあつたやうである。平安朝初期の人物として、半ば傳說化されてゐる上に、古代の貴族生活が後世の平民からは接觸し難い點が、かゝる結果を生んだのではあるまいか。　【守隨】

業平餅（なりひらもち）　能狂言　【別名】業平餅食（なりひらもちくひ）　【梗概】在原業平は和歌の道に交つてから、玉津島の明神に參つた事がないので、紀の路の旅に出て、とある濱邊の茶店に憩ふ。亭主が餅を勸めるが料足がないので、代りに歌を詠んでやると言つて、餅の威德を語つて聞かせたりなどするが聞き入れない。そのうちに業平であることが亭主に知れ、承り及んでゐる色好みのお方なれば、娘に宮仕をさせてくれと依頼される。業平は耳よりの話、早く本人を出せと言ふ。亭主が承知して呼びに行く間に、業平は餅を盜み食ひして咽喉につめる。いよ〳〵娘が出て來たのを見ると、意外の醜女、呆れ果てて一策を案じ、傘持の供に押付けようとするが、傘持も斷る。娘は飽くまで業平がいとしいと、逃げる業平を何處迄も追つて入る。

【解說】色好みの業平に、街道の餅屋を配し、貧乏公卿諷刺の意が含まれてゐるであらう。玉津島を出したのは、無論和歌三神の說に基く。寬正五年四月の「京紙河原勸進能」十日の演能番組中にも「餅クイ」と見えてゐる古い狂言である。今「女物」に屬してゐる。この狂言は初期歌舞伎狂言として東西で利用されたものの如く、「舞曲扇林」には、「大坂に餅業平・大小の上手といひし日本傳助」と見え、「八十翁物語」所揭の笠屋一座の女舞芝居木戶口の圖には、「なり平もちくひ」の建看板が見えてゐる。驚流正本では、名稱は「業平餅」であるが、人物は行平になつてゐる。もと他流の狂言に據つたがための遠慮でなければ、後人の改竄であらう。　【龍田】

成通（なりみち）　蹴鞠家　【姓】藤原　【法號】栖蓮　【生歿】承德元年生れ、平治元年（一一八一九）歿す。享年六十三　【家系】右大臣俊家の孫、權大納言宗通の第四子。　【閱歷】右近衞少將・

中將を歷て天承元年參議に任じ、長承三年從三位權中納言となつて侍從を兼ね、康治二年正二位に進み、久安五年權大納言に轉じ、平治元年に薙髮した。成通、人と爲り多才多藝で、笛・歌・詩・今樣より馬術に至るまでよく通達し、中にも蹴鞠の一技はその最も精通してゐたところで、「古今著聞集」にも、「侍從大納言成通卿の鞠は、凡夫のしわざにはあらざりけり」と歎稱してある。その妙技に關する傳說的說話は尠からず世に傳へられてゐる。「成通卿口傳日記」に、成通が鞠を好んで懸の下に立つこと七千日、その一千日に當つた日に、鞠の精がその姿を現はして種々物語つたことを記して後に、「今も昔も我ほどの鞠足あらじと覺ゆ。これよりのち出こん事もしりがたし。歌をよまむ所に人丸の影をもてなす。鞠をこのまむ人は末代といふとも、我事をおろそかにいふまじきなり」と述べてある。後人、この言に基いて、鞠の明神の社を成通の西洞院の故宅に建てて祭つたといふ事である。【著書】成通卿口傳日記一卷（群書類從卷三五四所收。初めに成通の修行等のことを述べ、次に蹴鞠に關する心得、「木のもとにたつ事」以下三十餘箇條を記し、奥書には、「建久六年十月廿六日、賜三鎌倉殿右六將御本一書畢、末代規撲物也、可レ祕二藏之一、努不レ可二他見一、謙倉若宮別當法眼定曉記之」とある。又初めの部分を「鞠譜」、後の部分を「三十箇條式」と呼んでゐるものもある）。

〔石村〕

鳴神（なるかみ）　脚本（歌舞伎十八番の一）【作者】初代市川團十郎【本名題】「門松四天王」【初演】天和四年二月十五日初日、江戸中村座【題材】賴光四天王の世界に、謠曲の「一角仙人」を交へ、鳴神上人に雲の絕間を配した。

【解說】この作は「遊女論」（不破參照）以來の大當りで、元祿七八年には「鳴神遊女論」などの名題で勤められ、元祿十一年八月、江戸中村座では「雲絕間源平雷傳記」（別項）と題された。初演の脚本は現存しないので、その內容は詳かでないが、「鳴神」の趣向等に於ては、現存する狂言本「源平雷傳記」や、「四座役者綸盡」（稀書複製會第二期刊）にある所作淨瑠璃等に見るものと、さほど相違するとは思はれない。それ等によると、後世のものと相違する要點は次のやうである。鳴神上人（市川團十郎）が絕間姬（伊藤小太夫）の容色に見惚れて窟より落つる所で、「傘の仙人」の如く、姬の布晒姿に見惚れて落つる段取になつてゐて、作は全體として肉感味が薄い。これを改作した元祿十六年「成田山分身不動」（別項）では、團十郎役の黑主の仙人（鳴神）が荻野澤之丞役の牛飼女實は小町（絕間）の膚に手を觸れるので、非常に肉感的になり、寧ろ後世の「鳴神」に接近してゐるものである。【沿革】「鳴神」は、當時非常に歡迎されたと見え、團十郎はその他の作にも飜案してゐるが、元祿九年十一月、江戸中村座では「女鳴神」（後出）が生れ、後世まで「鳴神」と相對して屢々上演された。次いで二代團十郎も數度勤めたが、享保十八年七月、江戸市村座で、津打治兵衞の改訂になる「相榮山鳴神不動」に鳴神上人（團十郎）と絕間姬（瀨川菊次郎）とで演じたのが、後世に殘されたものの原作で、「毛拔」「不動」等も取り入れてある。これを增補したのが寬保二年正月、大阪大西芝居「雷神不動北山櫻」（後出）である。「毛拔」（別項）「鳴神」「不動」（別項）の三部曲が融合集大成されたものであるが、後には再び分離進化し、且つ洗練されて今日の如く獨立したのである。この作は七月六日まで大入りで打通した當り狂言で、翌三年八月、大阪豐竹座では爲永太郎兵衞が、「鳴神」の條を取り入れて「久米仙人吉野櫻」と題して上場した。京阪では、この「北山櫻」によつて後世まで行はれ、江戸では寶曆元年三月、市村座で藤本斗文が添削した「鳴神上人北山櫻」（上人・絕間の配役は北山櫻に同じ）が系統の淨瑠璃で演じられる先蹤をなした。安永二年九月、江戸森田座「枡錦鳴神櫻」の時は、五代團十郎と二代山下金作で、長唄と唄淨瑠璃との掛合であつた。「歌舞伎十八番」の制定をした七代團十郎は、文化九年六月、江戸市村座「京詣雷神櫻」が初役で、天保五年三月、大阪角の芝居で、始めて「歌舞妓狂言盡十八番之內鳴神櫻」として名題を据ゑた。同七年三月、江戸森田座「歌舞伎十八番の內櫻鬢色鳴神を新狂言に取結て」（作者三升屋四郎、日本歌謠集成卷十一所收）は淸元節で、古典味が薄くなり、且つ所作事化された。同十四年六月及びその後數回の上演はあつたが、今日に傳存せず廢滅した。現行のものは岡鬼太郎が「北山櫻」によつて訂正した一幕物で、明治四十三年五月、東京明治座で、現市川左團次の鳴神上人と故澤村宗之助の絕間姬とで復活されたものを長唄で演じられた。因みに「鳴神」は、市川宗家では三代・六代・九代の三優はこれを勤めず、他家で勤めた主なるものは初代荻野伊三郎・初代佐野川市松・三代四代市川團藏・初代尾上菊五郎・九代市村羽左衞門・五代松本幸四郎（高麗藏當時）・初代三代中山新九郎・幾島重四郎・初代中村歌右衞門・七代片岡仁左衞門等である。

鳴神（嘉永四年五月市村座）

【雷神不動北山櫻】〔作者〕安田蛙文・中田萬助〔角書〕（際髮賤女逆髮姬君）〔別名題〕「櫻花雲鳴神不動」「鳴神上人北山櫻」「鳴神上人五穀雨」「鳴神上人行力櫻」等。〔初演〕寬保二年正月十六日初日、大阪大西芝居（座本佐渡島長五郎）。〔曲節〕小唄と淨瑠璃との掛合〔唄〕中川木四郎〔作曲〕瀧岡六三郎〔傳來〕北山岩窟の段のみ訂正を經て傳存。〔諸本〕歌舞伎新報（一五五一一五五四）・南水漫遊續編四の卷（新群書類從第二）・演藝書報（舊、第四ノ六）・雷神不動櫻（田村西男編）所收。〔內容〕五段續きの四段目の中と切が鳴神の條である。「毛拔」は三段目にある。鳴神上人（市川海老藏）はその祈願によつて、皇子御降誕あつたにも拘らず、比叡山に堂塔建立の御約束を朝廷が果されぬので、上人は怒つて南海下界の龍神を封じ込め、黑雲坊（佐渡島長五郎）と白雲坊（市川助五郎）とを從へて北山の龍神が岩窟に籠る。世は非常な旱魃となつた。陰陽師安倍淸行は上人の所行と判じたので、帝は美女雲の絕間（尾上菊五郎）をして北山へ登らしめ、色仕掛で上人を迷はして墮落させ、遂に龍神を封じ込めた注連を斷ち切る。欺かれた上人は顏色を變へ凄じい勢ひで絕間江戸山村座「一心女雷師」（元祿歌舞伎傑作集上卷所收。生島大吉の花山の尼君と松本兵藏の絕間姬）があり、その後多種多樣に演じられ、當初地藝を主として勤めたが、寶曆期以後は豐後系統の淨瑠璃を用ひて所作事として勤めるやうになつた。後世に影響を及ぼした作は、江戸では、初代瀨川菊之丞所演「鳴神思の瀧津瀨」（寬保三年三月中村座。作者津打治兵衞）、瀨川菊次郎所演「華瀧女鳴神」（寶曆二年三月市村座。作者嶺越二三治）、初代中村富十郎所演「鳴髮鐘入櫻」（同九年三月同座。作者並木良輔）、二代小佐川常世所演「戀衣緣初櫻」（寬政四年四月河原崎座。作者增山金八）等で京阪では中村富十郎所演「嬶髮歌仙櫻」（別項）二代山下金作所演「男我女鳴神」（天明三年六月大阪角の芝居。作者並木五兵衞、後の五瓶）等である。又この外「女鳴神」を勤めた主なる座）○雲鬢女鳴神（安政元年六月同座）○鐘入鳴神櫻（慶應二年正月江戸中村座）等。〔淸元節〕田舍三舛初女鳴神（明治十四年二月東京春木座）等。

【增補女鳴神】一幕三場〔作者〕福地櫻痴〔初演〕明治二十四年九月三日初日、東京歌舞伎座〔曲節〕常磐津〔太夫〕八代常磐津小文字太夫〔作曲〕六代岸澤式佐〔振附〕花柳壽輔〔內容〕（上の卷）片岡山麓達磨堂の場、同筒井順慶屋形の場。（下の卷）龍王ケ峰雨乞壇上の場。但しこの時新に泊瀨の前が絕間之助に對面する場面などを上の卷に書き加へたが、現今では上の卷は殆ど上演されず、下の卷の「女鳴神」のみである。常磐津節の「女鳴神」（弘化元年市村座）を修正したもの。鳴神尼（四代中村芝翫、現歌右衞門）實は松永彈正娘泊瀨で、父の仇織田信長を滅亡させんと龍神を窟に封じ初め德川春櫻（津の商人）に就いて俳諧を學び、次いで樋口嘉樹（松坂の商人）に就いて和歌を學び、後、足代弘訓に從つて和歌及び國語學を學んだ。又蘭學を獨學してゐる。正香は俳人としては一家を成し、俳諧に關する著書もあるが、最も力を注いだのは國語學である。しかし國語學に於ては、主として本居春庭（別項）の說を增補したのみで、特に注目すべき研究もなく、學界に大きな影響を與へるには至らなかつた。但し風俗史の方では、相當注意すべき研究がある。

【著書】〔國語學〕八衢鞆の響百卷（「詞八衢」（別項）の說に基いて、例證を頗る豐富に蒐集したもの）○辭の一道上・中二卷（元治元年刊。下卷未完成。「詞の通路」（別項）の詞の自他の說を敷衍して「ぬる」「つる」の手爾波に接續する語は、自動詞・他動詞に依

正を經て傳存。【諸本】歌舞伎新報(一五五一―一五五四)・南水漫遊續編四の卷(新群書類從第二)・演藝畫報(舊、第四ノ六)・雷神不動櫻(田村西男編)所收。【内容】五段續きの四段目の中と切が鳴神の條である。「毛抜」は三段目にある。鳴神上人(市川海老藏)はその祈願によつて、皇子御降誕あつたにも拘らず、比叡山に堂塔建立の御約束を朝廷が果されぬので、上人は怒つて南海下界の龍神を封じ込め、黒雲坊(佐渡島長五郎)と白雲坊(市川助五郎)とを從へて北山の龍神が岩窟に籠る。世は非常な旱魃となつた。陰陽師安倍清行は上人の所行と判じたので、帝は美女雲の絶間(尾上菊五郎)をして北山へ登らしめ、色仕掛で上人を迷はして墮落させ、遂に龍神を封じ込めた注連を斷ち切る。欺かれた上人は顔色を變へ凄じい勢ひで絶間を追駈けて來て捕へる。林傳内(山本京四郎)が現はれて上人を殺す(この上人の死靈が五ツ目で絶間と髑髏の所作になる―この所作は「二人淺間」に取り入れられてゐる)。絶間は文屋豊秀(柴崎民之助)に助けられて、桂圍之丞と立波官藏との竹輿に擔がれて歸る。五段目の大切に「不動」がある。【價値】原始的な科白劇としての一代表作であるが、對話の官能的描寫の優れてゐる點、現實と架空との交錯が融合調整されてゐる點、完璧に近い内容形式を備へてゐる點等に於て歌舞伎十八番中の傑作でもあり、近代劇と一味相通ずる所がある。殊にその對話は簡素で、輕妙で、諧謔に富み、而も音樂的に活々してゐるのが、この作の生命である。

【女鳴神】「鳴神」を女で見せる趣向は、元祿九年十一月江戸中村座の「子子子子子子子」(元祿十年版芝居訓蒙圖彙」作者中村明石清三郎、荻野澤之丞と袖岡政之助)が最初で、次いで同十二年六月江戸山村座「一心女雷師」(元祿歌舞伎傑作集上卷所收。生島大吉の花山の尼君と松本兵藏の絶間姫)があり、その後多種多樣に演じられ、當初地藝を主として勤めたが、寶暦期以後は豊後系統の淨瑠璃を用ひて所作事として勤めるやうになつた。後世に影響を及ぼした作は、江戸では、初代瀬川菊之丞所演「鳴神思の瀧津瀬」(寛保三年三月中村座。作者津打治兵衛)、瀬川菊次郎所演「華瀧女鳴神」(寶暦二年三月市村座。作者嶺越二三治)、初代中村富十郎所演「鳴髪鐘入櫻」(同九年三月同座。作者並木良輔)、二代小佐川常世所演「戀衣緣初櫻」(寛政四年四月河原崎座。作者壇山金八)等で京阪では中村富十郎所演「婿髪歌仙櫻」(別項)二代山下金作所演「男哉女鳴神」(天明三年六月大阪角の芝居。作者並木五兵衛、後の五瓶)等である。又この外「女鳴神」を勤めた主なるものは、二代三代五代瀬川菊之丞・二代吾妻藤藏・二代嵐和哥野・初代二代澤村國太郎・初代中山富三郎・芳澤いろは・六代岩井半四郎・坂東しうか・三代四代澤村田之助等である。

【主要種目】【義太夫節】鳴神思の瀧津瀬(前出。燕石十種第二所收)○男哉女鳴神(前出。長唄との掛合)○振袖嫁鳴神(享和元年七月大阪角の芝居。若衆の鳴神)等。【宮古路節】女鳴神振分曾我(寛保三年七月大阪角の芝居)○頃皐娘鳴神(寶暦七年五月江戸市村座)。【常磐津節】鳴髪鐘入櫻(前出)○戀衣緣初櫻(前出。德川文藝類聚第六所收)○雲帶千丈瀧(天保元年十一月江戸中村座)○立浮名大和(同四年十一月江戸市村座)○雲當麻天女嫁入(通稱鳴神。弘化元年十一月同座)等。【富本節】絲櫻山路俤(寶暦二年三月江戸中村座)○女鳴神瀬川帽子(通稱鳴神。安永九年三月江戸市村座)○御贔屓綱女鳴神(文政七年六月江戸河原崎座)○雲鬢女鳴神(安政元年六月同座)○鐵入鳴神櫻(慶應二年正月江戸中村座)等。【清元節】田舍三舛初女鳴神(明治十四年二月東京春木座)等。

【增補女鳴神】一幕三場(作者)福地櫻痴(初演)明治二十四年九月三日初日、東京歌舞伎座【曲節】常磐津【太夫】八代常磐津小文字太夫【作曲】六代岸澤式佐【振附】花柳壽輔【内容】(上の卷)片岡山麓達磨堂の場、同筒井順慶屋形の場。(下の卷)龍王ケ峰雨乞壇上の場。但しこの時新に泊瀬の前が絶間之助に對面する場面などを上の卷に書き加へたが、現今では上の卷は殆ど上演されず、下の卷の「女鳴神」のみである。常磐津節の「女鳴神」(弘化元年市村座)を修正したもの。鳴神尼(四代中村芝翫、現歌右衛門)實は松永彈正娘泊瀬で、父の仇織田信長を滅亡させんと龍神を窟に封じ込めるので、雲の絶間之助(坂東家橘)は、閻迦水の無心とて入り込み、稚兒登美若丸の名を僞はつて墮落させる趣向。荒れに佐久間信盛(市川八百藏、現中車)が出て押戻す。

【參考】劇代集二代櫻田左交○壽十八番歌舞妓狂言考石塚豊芥子(新燕石十種第三)○歌舞伎十八番考 山田春塘(舊、演藝畫報二ノ八)○歌舞伎圖說 守隨憲治・秋葉芳美共撰○鳴神伊原青々園(歌舞伎狂言傑作十二種、演藝畫報六ノ一)○鳴神の上場と其性格 市川左團次(舊、歌舞伎一二〇)○女鳴神藝談中村歌右衛門(舊、演藝畫報八ノ六・八)

【秋葉】

生川正香　なるかはまさか

國學者 【名】幼名茂五郎。後、熊五郎と云ひ、元服後は三郎助、晩年に正香と改む。【號】春明 【生歿】文化元年十二月に生れ、明治二十三年八月七日歿す。享年八十七。【閲歷】正香は伊勢國津市岩田町の藥種商生川清人の子(兄四郎は夭折)。初め德川春櫻(津の商人)に就いて俳諧を學び、次いで樋口嘉樹(松坂の商人)に就いて和歌及び國語學を學び、後、足代弘訓に從つて和歌及び國語學を學んだ。又蘭學を獨學してゐる。正香は俳人としては一家を成し、俳諧に關する著書もあるが、最も力を注いだのは國語學である。しかし國語學に於ては、主として本居春庭(別項)の說を增補したのみで、特に注目すべき研究もなく、學界に大きな影響を與へるには至らなかつた。但し風俗史の方では、相當注意すべき研究がある。

【著書】【國語學】八衢鞆の響百卷(詞八衢)(別項)の說に基いて、例證を頗る豊富に蒐集したもの)○辭の二道上・中二卷(元治元年刊。下卷未完成。「詞の通路」(別項)の詞の自他の說を敷衍して「ぬる」「つる」の手爾波に接續する語は、自動詞・他動詞に依つて區別がある事を說いたもの)○活語二葉草四卷(明治十六年成る。佐行四段活と佐行下二段活の動詞を古書から蒐集して意味・轉訛等を研究したもの)○日本小文典辨惑一卷(チヤンバレンの「日本小文典」(別項)を反駁したもの)○開化文章論一册(普通文の事を記したもの)○皇國語學自在二卷(刊)○祖翁發句係辭一覽一卷(刊)。【俳諧・其他】俳人大系圖一卷(刊)○俳諧古物語○校正宇治拾遺物語十五卷(寫本)○校正保元平治物語二卷(寫本)○小倉の山踏後の栞一卷(寫)○日本文典譯語引和蘭活字考一卷(寫)○八集類言(未定稿、寫本十餘卷)○近世女風俗考二卷(明治二十六年刊。日本隨筆大成第一期卷二所收)○近世男風俗考○奇遊職人考○好間貴賞○好間漫錄等。

【參考】生川正香翁(言語學雜誌一ノ四) 【龜田】

成島柳北　なるしまりうほく

【姓名】初めの名は淵、字は叔鷹、後名を惟弘、字を保民と改む。甲子の日生るゝを以て甲子太郎と

稱した。【號】確堂とも。柳北の號は柳原の北に家が在るに因る。又自ら謚して文靖といふ。私かに謝安に比するのである。【生歿】天保八年二月十六日淺草に生れ、明治十七年十一月三十日歿す。享年四十八。【墓所】本所小梅本法寺、また木母寺に碑があり、長命寺には半身像を刻した碑もある。【閲歷】幕臣成島稼堂の子。幼より穎悟、詩文を好み、八歳の時和歌集を著はす。安政元年、十八歳家を嗣ぎ、幕命を以て祖父東岳の著「東照宮實記」五百餘卷の編輯を督し、安政三年侍講となり、翌年布衣に叙せられ、父稼堂の著「後鑑」三百七十五卷の訂正をなし、萬延元年に完成し、黄金・時服を賜はつた。文久三年その言議幕吏の忌諱に觸れて閉門を命ぜられ、閉居の間專ら英學を修めた。慶應元年、歩兵頭並に擢でられ、次いで騎兵頭並となり、祿千石を受く。翌三年騎兵頭となり、俸を增して二千石となり騎兵奉行に進む。この年冬、議合はずして職を辭す。慶應四年外國奉行に任ぜられ、尋いで會計副總裁に進み、從五位下大隅守に叙せられた。官軍東下に際し、職を辭して隅田川の畔に閑居。明治五年歐米を漫遊し、六年歸朝。翌七年朝野新聞社長となり、雜錄數百篇を草し、文名大に揚がつた。又別に「花月新誌」の編輯を督した。明治九年、筆禍を得て入獄したが、出獄後筆硯愈々健、また山水を探り、錦心繡腸の文を屬し、或は花柳事情を書いて文名天下に高く、就中「柳橋新誌」(別

成島柳北

項)の著最も世に行はれた。【著書】柳北の詩文は朝野新聞・花月新誌に登載せられたるものが多く、單行本としては「柳橋新誌」(安政六年刊)、「柳橋新誌」二編(明治七年刊)がある。「柳橋新誌」第三編は明治九年の著であるが發行禁止となり、僅かに序文だけ傳はるのみである。○京猫一斑(明治七年刊)○柳北奇文(明治十一年刊)○明治新撰泉譜○柳北仙史熱海文藪(明治十七年出版)○柳北先生雜錄集(明治十八年出版)○柳北遺稿(明治二十三年出版)○柳北遺稿二册(明治二十五年出版)○柳北詩鈔(明治二十七年出板)○柳北全集(明治三十年「文藝倶樂部」臨時增刊)○航西日乘(明治十四年著「明治文化全集」外國文化篇)等。【批評】戲作者系統の地位の低かつた明治初年の文壇及び新聞記者界に投じ、その精錬した筆致を以て、硬軟行く所として可ならざるなき才筆は、天下を驚動せしめ、特に漫錄體なる一種の文體を以て時事を痛罵し、朝野新聞の名が漫錄に依つて喧傳されたのは、正に文壇及び新聞界に於て一新時期を劃したといふべきである。【尾佐竹】

【參考】二十一代先覺記者　大阪毎日新聞

成瀬無極（なるせむきょく）　飜譯家・評論家【本名】清【閲歷】明治十七年一月一日東京に生る。一高を經て東大獨逸文科を卒業。慶應義塾大學豫科に教鞭を執つた後、第三高等學校教授兼京都帝國大學文學部助教授となり、大正十年海外に留學して同十二年歸朝した。文學博士、現に京大文學部の教授である。その作家的活動は、主として明治四十年代から大正初頭に於てであり、折柄の新機運に際會し、「帝國文學」に據る有爲なる新進として幾多の小說戲曲を發表して來た。爾後は專攻の獨逸文學研究に籠つて創作の筆を收むるに至つたが、學問的業績に屬する評論紹介の外に、折に觸れての隨筆・小品の類を多く書いてゐる。永く京都に居住する關係から、講壇以外にも關西文藝界・新劇界のよき指導者となり、つねに新しき文化運動のために力を致してゐる。【著者】戲曲小說集「極光」、小品集「東山の麓より」「東山夜話」「夢を作る人」等、他に評論として「近代浪曼主義」「疾風怒濤時代と現代獨逸文學」の著がある。

鳴瀧音人（なるたきおとんど）　狂歌師【本名】池澤權右衞門【別名】古今亭・團栗庵・泥田房【生歿】享保三年生れ、寛政八年(一七四五六)六月歿す。享年七十八【閲歷】江戸京橋銀座二丁目の商人。天明の初めより赤良・菅江・眞顏・金埒・爲輕等と交り、天明五年に「狂文棒歌撰」三册、寛政八年には「休息歌仙」一册を著はしてゐる。一書に音人通稱中村常次郎とあるは、同家の手代で、初め青人と號し、後、古今亭を繼いだ二代目の音人である。【野崎】

鳴門中將物語（なるとちゅうじょうものがたり）　物語　一卷一册【作者】不詳【別名】奈與竹物語【名稱】「鳴門中將」の名は、本文の人物に附せられたる諢名。「奈與竹」は文中の歌「高くともなにゝかはせんなよ竹のひとよふたよのあだのふしをば」及び「あだに見しゆめかうつゝかなよ竹のおきふしわぶる戀ぞ苦しき」から出た。この書名が初めて見える吉野朝時代の「乳母草子」、二條良基の「思ひのまゝの日記」等には「なよ竹」と記してあるから、この方が古い名であらう。【諸本】讃岐琴平宮所藏の繪卷物一卷は、最も古いものである。池田龜鑑氏は別系統の繪卷の摸寫を藏してゐる。「古今著聞集」卷八好色の部にも入つてゐる。池田氏の繪卷及び「古今著聞集」には、物語の前に、後嵯峨天皇の御經歷を記した一條が附いてゐるが、これは流布の本には見えない。前田家藏の寫本には、「寛文六歳藤原爲尹卿以眞筆寫之」の奥書があり、東京帝大圖書館藏のは文政五年の寫本である。その他群書類從・國文大觀・日本文學全書等に所收。國文全書には岸本由豆流の考證が載せられてゐる。【成立】「古今著聞集」及び池田龜鑑氏藏の繪卷物の初め及び流布本の終りにも、後嵯峨天皇の御名があるから、文永九年以後の作であらう。これが「古今著聞集」に入つてゐる事は一つの問題で、岸本由豆流も、考證でこの事を言ひ、後人が「著聞集」に挿入したものだらうと云つてゐる。併し、近く池田龜鑑氏が得たといふ「古今著聞集」の古寫本には、この部が挿入である事の確證があるので、これは挿入と見て差支ない。「色葉集」及び「風葉集」に「なると物語」の名があるけれど、これとは別の物語で詳しい事はわからない。黒川春村は「古物語類字抄」に、「かれは一名なよ竹物語とも號して實記なれば風葉にも加へざるに依て此集にも省きぬ。但かのなよ竹は建長の始にいできしかど、實錄なれば風葉には載せぬを、故鎌倉柏園(由豆流)の考證には、風葉に載せぬをもて、文永後の物と思ひて其說いたく窮したり」と云つてゐるが、この說では、後嵯峨天皇の御名は後人が附け加へたとしなければならぬ。兎に角「乳母の草子」「思ひのまゝの日記」にその名がある事からすれば、文永九年後とするもそれより餘り遠くない頃に出來たものであらう。【梗概】彌生の頃、和德門の御壺で鞠の御遊があつた。見物の中に美しい女がゐるのを認められた後嵯峨天皇は、六位の藏人をしてその

後を追はしめ給うた。女は左衞門の陣の所で「なよ竹の」と申上げよ、その御返事を此處で待たうと云ふので、藏人は歸つてその詞を奏したが、誰も解き得なかつた。爲家卿に尋ねて、初めて「高くともなにゝかはせんなよたけのひとよふたよのふしはありとも」(大和物語)と云ふ歌の意である事が知れたが、再び行つて見ると女は既にゐなかつた。藏人は帝の御氣色も惡いので、一所懸命に搜したが解らず、遂にその頃有名な陰陽師文平に占つて貰つた所が、夏のうちに舊の場所で會ふと告げた。果して五月十三日最勝講の開白の日に左衞門の陣の邊で見つけたので、その跡をつけると、三條白川の某少將の家に入つた。帝から文を賜はつて事の由を知つた夫は、如何にせんと迷つたが、遂に女を諭して御返しを書かせた。然るに女は御文の「此の暮れに必ず」とある下

【批評】その詩は豪放奇麗、塵俗の氣なく、縱横甚だ過ぐるがために、動もすれば繩墨の外に逸する嫌ひがある。【佐久】

南郭（なんかく）　漢詩人【姓名】服部元喬。字は子遷。通稱は小右衞門【別號】芙蓉館。畫號、周雪・觀翁【生歿】天和三年九月二十四日京都に生れ、寶曆九年(一七五九)六月二十一日歿す。享年七十七【墓所】品川東海寺中少林院【閲歷】十四歳の時江戸に來り、十六歳で柳澤吉保に仕へた。壯年に及んで徂徠(別項)と相知り、遂にその門に入り、專ら詩文を攻め、後致仕して家塾を開いた。文名漸く高く、屢々諸侯に招かれ、殊に晩年に至りては、肥後侯禮を厚くして招き、文辭を問ひ、傍ら藩政を詢ねた。人と爲り風流溫藉、物と忤はず、快さがあり、又それがこの作の表現上の狙ひ所となつてゐる。

【參考】鳴門中將物語考證　岸本由豆流　(小木)

南留別志（なるべし）　隨筆　五卷三册【著者】荻生茂卿(徂徠)【名義】每則推定の意「なるべし」の語を以て終るのが多いところから、かく命名した。外題に「徂徠先生可成談」とある。【刊行】元文元年【諸本】寶曆十一年の刊本は「南留別志付和歌世話」と題し五册。明治二十一年の活版本は一册。百家說林・日本隨筆大成・日本隨筆全集所收。【解說】凡百の事物の稱謂・名目に就いて、その所由を說き語原を擧げ、轉訛を匡さうと試みたもので、漢字の訓、國語の語源に關する考說は、國語學上參考となるもので、著者一家の見識を窺ふに足るけれども、僻案と見られる場合も少くない。通編四百餘條、每條概ね簡單で一二行に止ま

後を追はしめ給うた。女は左衞門の陣の所で「なよ竹の」と申上げよ、その御返事を此處で待たうと云ふので、藏人は歸つてその詞を奏したが、誰も解き得なかつた。爲家卿に尋ねて、初めて「高くともなにゝかはせんなよたけのひとよふたよのふしはありとも」（大和物語）と云ふ歌の意である事が知れたが、再び行つて見ると女は既にゐなかつた。藏人は帝の御氣色も悪いので、一所懸命に捜したが解らず、遂にその頃有名な陰陽師文平に占つて貰つた所が、夏のうちに舊の場所で會ふと告げた。果して五月十三日最勝講の開白の日に左衞門の陣の邊で見つけたので、その跡をつけると、三條白川の某少將の家に入つた。帝から文を賜はつて事の由を知つた夫は、如何にせんと迷つたが、遂に女を諭して御返しを書かせた。然るに女は御文の「此の暮れに必ず」とある下に、只一字「を」と書き加へて奉つた。この意味が又解らないので人々は騒いだが、家隆卿の娘承明門院の小宰相の局が、小式部内侍の返事を引いて、人の召すのに「よ」といふは男の返事、「を」といふは女の返事と解き明かした。やがてその夜、女は密かに參つたが、身の嘆きを細やかに奏したので、明くれば家へ歸された。その後も時々密かに召されたが、男はやがて中將になり、近習の列にも加へられた。けれど祕密はともすればあらはれ易いもので、世人この男を諢名して鳴門中將と云つた。蓋し鳴門はよきめ（わかめと女をかけて）の出る所であるからである。

【解説】實記なので、構想といふべきものもないが、女が古歌を以て藏人の追跡を逃れ、又故事を以て御召しに答へて愈々御寵愛の心を深からしめた所に、近代の機智に見るやうな快さがあり、又それがこの作の表現上の狙ひ所となつてゐる。

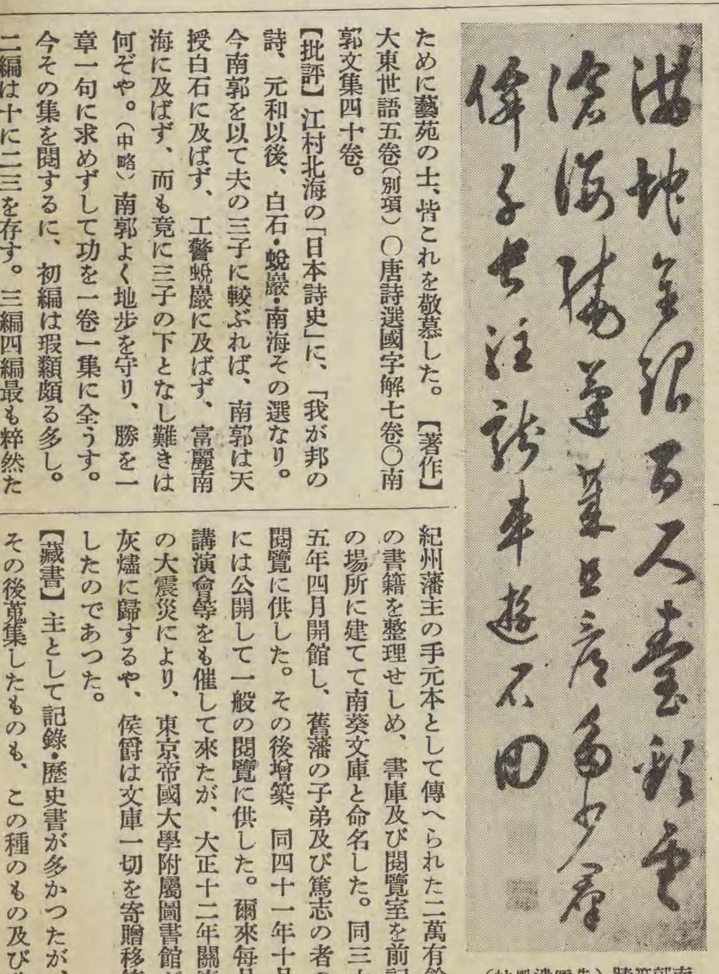
【參考】鳴門中將物語考證　岸本由豆流　（小木）

南留別志（なるべし）　隨筆　五卷三册　【著者】荻生茂卿（徂徠）　【名義】每則推定の意「なるべし」の語を以て終るのが多いところから、かく命名した。外題に「徂徠先生可成談」とある。　【刊行】元文元年　【諸本】寶曆十一年の刊本は「南留別志付和歌世話」と題し五册。明治二十一年の活版本は一册。百家說林・日本隨筆大成・日本隨筆全集所收。　【解説】凡百の事物の稱謂・名目に就いて、その所由を說き語原を擧げ、轉訛を匡さうと試みたもので、漢字の訓、國語の語源に關する考說は、國語學上參考となるもので、著者一家の見識を窺ふに足るけれども、僻案と見られる場合も少くない。通編四百餘條、每條概ね簡單で一二行に止まる。宇佐美惠所校。なほこの書を批評したものに、「可成三註」三卷（小林巴陵・篠崎東海・岩井笠澤共著。刊）、「非なるべし」二卷（富士谷成章著。刊）、「南留別志の辨」一卷（著者未詳。刊）、「あるまじ」一卷（伊勢貞丈著。刊）、「ざるべし」一卷（谷眞潮著。刊）等がある。　（和田・龜田）

南畫（なんが）　「南宗畫」（なんしゅうが）を見よ。

南海（なんかい）　漢詩人　【姓名】祇園瑜。字は伯玉。通稱は與市　【別號】蓬萊・鐵冠道人・箕踞山人　【生歿】延寶五年生れ、寶曆元年（一七四一）九月八日歿す。享年七十五。　【閲歷】家ではもと醫を業として紀藩に仕へた。父に隨つて江戸に來り、年十四の時、順庵（別項）の門に入つて學び、最も詩に長じ、兼ねて書畫を善くした。壯年幕府の儒員に擢んでられた。　【著作】詩學逢原一卷（別項）○詩訣一卷○一夜百首二卷○南海先生集五卷（田中由恭編）。

南郭（なんかく）　漢詩人　【姓名】服部元喬。字は子遷。通稱は小右衞門　【別號】芙蓉館。畫號、周雪・觀翁　【生歿】天和三年九月二十四日京都に生れ、寶曆九年（一七五九）六月二十一日歿す。享年七十七　【墓所】品川東海寺中少林院　【閲歷】十四歳の時江戸に來り、十六歳で柳澤吉保に仕へた。壯年に及んで徂徠（別項）と相知り、遂にその門に入り、專ら詩文を攻め、後致仕して家塾を開いた。文名漸く高く、屢々諸侯に招かれ、殊に晩年に至りては、肥後侯禮を厚くして招き、文辭を問ひ、傍ら藩政を詢ねた。人と爲り風流溫藉、物と忤はず、



南郭筆蹟（先儒遺墨帖）

【批評】その詩は豪放奇麗、塵俗の氣なく、縱横甚だ過ぐるがために、動もすれば繩墨の外に逸する嫌ひがある。　（佐久）

南留別志（なるべし）　隨筆　五卷三册　【著者】荻生茂卿（徂徠）　【名義】每則推定の意「なるべし」の語を以て終るのが多いところから、かく命名した。外題に「徂徠先生可成談」とある。　【刊行】元文元年　【諸本】寶曆十一年の刊本は「南留別志付和歌世話」と題し五册。明治二十一年の活版本は一册。百家說林・日本隨筆大成・日本隨筆全集所收。　【解説】凡百の事物の稱謂・名目に就いて、その所由を說き語原を擧げ、轉訛を匡さうと試みたもので、漢字の訓、國語の語源に關する考說は、國語學上參考となるもので、著者一家の見識を窺ふに足るけれども、僻案と見られる場合も少くない。通編四百餘條、每條概ね簡單で一二行に止まる。宇佐美惠所校。なほこの書を批評したものに、「可成三註」三卷（小林巴陵・篠崎東海・岩井笠澤共著。刊）、「非なるべし」二卷（富士谷成章著。刊）、「南留別志の辨」一卷（著者未詳。刊）、「あるまじ」一卷（伊勢貞丈著。刊）、「ざるべし」一卷（谷眞潮著。刊）等がある。　（和田・龜田）

南畫（なんが）　「南宗畫」（なんしゅうが）を見よ。

南海（なんかい）　漢詩人　【姓名】祇園瑜。字は伯玉。通稱は與市　【別號】蓬萊・鐵冠道人・箕踞山人　【生歿】延寶五年生れ、寶曆元年（一七四一）九月八日歿す。享年七十五。　【閲歷】家ではもと醫を業として紀藩に仕へた。父に隨つて江戸に來り、年十四の時、順庵（別項）の門に入つて學び、最も詩に長じ、兼ねて書畫を善くした。壯年幕府の儒員に擢んでられた。　【著作】詩學逢原一卷（別項）○詩訣一卷○一夜百首二卷○南海先生集五卷（田中由恭編）。

南郭（なんかく）　漢詩人　【姓名】服部元喬。字は子遷。通稱は小右衞門　【別號】芙蓉館。畫號、周雪・觀翁　【生歿】天和三年九月二十四日京都に生れ、寶曆九年（一七五九）六月二十一日歿す。享年七十七　【墓所】品川東海寺中少林院　【閲歷】十四歳の時江戸に來り、十六歳で柳澤吉保に仕へた。壯年に及んで徂徠（別項）と相知り、遂にその門に入り、專ら詩文を攻め、後致仕して家塾を開いた。文名漸く高く、屢々諸侯に招かれ、殊に晩年に至りては、肥後侯禮を厚くして招き、文辭を問ひ、傍ら藩政を詢ねた。人と爲り風流溫藉、物と忤はず、

南郭筆蹟（先儒遺墨帖）

【批評】その詩は豪放奇麗、塵俗の氣なく、縱横甚だ過ぐるがために、動もすれば繩墨の外に逸する嫌ひがある。　（佐久）

ために藝苑の士、皆これを敬慕した。　【著作】大東世語五卷（別項）○唐詩選國字解七卷○南郭文集四十卷。

【批評】江村北海の「日本詩史」に、「我が邦の詩、元和以後、白石・蛻巖・南海その選なり。今南郭を以て夫の三子に較ぶれば、南郭は天授白石に及ばず、工謇蛻巖に及ばず、富麗南海に及ばず、而も竟に三子の下となし難きは何ぞや。（中略）南郭よく地歩を守り、勝を一章一句に求めずして功を一卷一集に全うす。今その集を閲するに、初編は瑕纇頗る多し。二編は十に二三を存す。三編四編最も粹然たり」といひ、金曲園の「東瀛詩選」には、「子遷は物君茂卿の高弟たり。經學微しく逮ばざるに似たり。然れども、其の詩は則ち頗る出藍の歎あり。五七言古詩は氣韻高古、且詞藻あり。而して七律尤も長を擅にする所、沈雄博厚、儼然として少陵（杜甫）の遺韻あり。東國詩人中にありては、卓然として家を成す者なり」とある。　（佐久）

南學（なんがく）　「漢學」を見よ。

南葵文庫（なんきぶんこ）　文庫　【解説】德川賴倫侯の設立經營にかゝる公開圖書館で、麻布區飯倉町六丁目の邸内に在つたが、大正十三年七月、藏書を擧げて東京帝國大學圖書館に寄贈した。　【沿革】賴倫侯は明治二十九年外遊の際、各地の圖書館を見て感ずるところあり、紀州藩主の手元本として傳へられた二萬有餘の書籍を整理せしめ、書庫及び閲覽室を前記の場所に建てて南葵文庫と命名した。同三十五年四月開館し、舊藩の子弟及び篤志の者の閲覽に供した。その後增築、同四十一年十月には公開して一般の閲覽に供した。爾來每月講演會等をも催して來たが、大正十二年關東の大震災により、東京帝國大學附屬圖書館が灰燼に歸するや、侯爵は文庫一切を寄贈移管したのであつた。

【藏書】主として記錄・歷史書が多かつたが、その後蒐集したものも、この種のもの及び我

が國の哲學倫理に關する書が主であつた。小中村清矩の遺書五千餘册（陽春廬藏書）、坂田諸遠の藏書一萬五千册（坂田文庫）、島田篁邨の遺書一萬二百餘册（雙桂樓藏書）、宗伯爵家の記錄約二千枚、山井重章の遺書二千七百餘册、大木伯爵家の藏書七千百餘册等の和漢書があり、洋書には、カミング博士の遺書九千餘册、藏原惟廓の藏書二千册、中井芳楠の遺書七百餘册、伊達武四郎の遺書千三百餘册があつた。その外、寄託本には、本居家藏書・佐佐木家藏書・松浦武四郎遺書・依田學海遺書・勝海舟遺書等があつて、十餘萬册に及んでゐた。昭和三年十二月、帝大圖書館の新築が完成したので、藏書は全部こゝに移された。藏書目錄としては、「南葵文庫藏書目錄」（明治四十一年刊）、「南葵文庫圖書目錄 二」（大正二年刊）がある。

【參考】南葵文庫概要（齋藤勇見彥）（圖書館雜誌 一）○南葵文庫の方針（德川頼倫）（圖書館雜誌五）○南葵文庫の興廢（高木文）（好書雜載）　〔岩淵〕

南京遺響（なんきやうゐきやう）　註釋書　三卷　【著者】鹿持雅澄　【成立】上・中卷文政三年、下卷文政四年　【諸本】續史籍集覽第五所收。　【內容】「續日本紀」「日本後紀」「續日本後紀」「三代實錄」「古語拾遺」「熱田大神緣起」「日本靈異記」「聖德法王帝說」「聖德太子傳曆」「本朝月令」、常陸・丹後・播磨・肥前の四「風土記」「太神宮儀式帳」「佛足石歌碑」、以上十六書所載の歌謠通計八十首につき註釋したものである。その著作の趣旨は卷頭例言に明かである。

古事記日本紀萬葉集に載たる外に續日本紀よりこのかたの史典其他群籍どもの中に雜出（まじり）たる古風の歌どもをこたみ採摭（ひろひ）てそれがことのこゝろを考へしるして古學のたづきとす。

記・紀の歌を除きたるは宣長の「古事記傳」、契沖の「厚顏抄」、久老の「日本紀歌解」等があるからこれに讓つたのである。「萬葉集古義」（別項）著述後の作であり、「古義」に於けると同樣甚だ詳細周到を極めてゐる。先づ校字につきても諸本を漁つて校訂し、なほ聞え難い所は私案を加へてゐる事、また「古義」と同樣である。註釋は語釋と大意とより成つてゐるが、故事出典・人物履歷等の考證甚だ精細であり、又語釋については言語の時代的變遷にも意を拂つてゐる。なほ註釋に當つては、宣長の「歷朝詔詞解」及び「古事記傳」、久老の「續日本後紀槻の落葉」、野呂實夫の「佛足石歌傍注」、山川正宣の「佛足石歌集解」等の諸書を引用し、その他、契沖・宣長・士清・篤胤等諸家の說を參照して、殆ど遺漏なきを期してゐる。記・紀「萬葉」以外の古歌謠を蒐集したものには、今井似閑の「萬葉緯」（別項）があるが、註釋書では總括的なものとしては古今唯一のものである。而も內容懇切周到を極めてゐる點は、「萬葉集古義」と同樣、註釋史上に永く記念せらるべき書である。　〔中島〕

南京遺文（なんきやうゐぶん）　附卷共二册　【編者】佐佐木信綱・橋本進吉　【刊行】大正十年　【解說】上古文研究の資料として、奈良朝時代の文獻のうち、當時の實物の今に存するものの中から、全部萬葉假名を以て記した文及び助辭の類を萬葉假名で記した文（所謂宣命書の文を含む）を集輯して玻璃版に附したもので、更に國語學・國文學・文獻學等の參考資料として注目すべきものを選んで附載してゐる。卽ち奈良時代當時の原本又は原物と認められるもの十八種、原本ではないが奈良朝の書寫と認められるもの三種、併せて二十一種を收め、附載の部には、假名字源、漢字の字形及び音訓、國文脈の漢文、文學史料、典籍等に就いて、代表的なもの又は標本とすべきもの各一二種、すべて九種を收めてゐる。而して寫眞の大きさは大部分實物大であつて、一々の解說及び釋文は附卷に載せてある。上代の國語資料として豐富な實例を含む「記紀」「萬葉」「風土記」等の奈良朝時代の作品が、後世の轉寫本しか殘つてゐない今日、本書に收められたものは、上代の國語を研究する第一資料と云ふべく、又本書に收められたものの大部分は、正倉院御物に屬し、容易に披閱し難いものであつて、それ等が原本のまゝ複製してあると云ふ點に於て、我々の享ける利益は大きい。

【附記】本書に採錄漏れになつたもの十種、及びその後の發見に係る古鈔本「四分律音義」中の萬葉假名のある部分を集めたものが、「南京遺文拾遺」として、「南京遺芳」（佐佐木・橋本編、昭和二年刊、コロタイプ版）の卷末に附されてゐる。　〔岩淵〕

南溪（なんけい）　「北窓瑣談」を見よ。

楠公物の謠曲（なんこうもののえうきよく）　謠曲　【曲目】楠公父子の忠誠を描いた曲に、「湊川」（みなとがは）「楠露」（くすのつゆ）「櫻井」（さくらゐ）「花橋」（はなたちばな）等あるが、その中、現行のものは「楠露」だけである。　【諸本】觀世流謠本。謠曲叢書・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）所收。

【楠露】四番目　【作者】觀世淸廉節附。　【內容】楠正成（ツレ）は朝敵足利尊氏討伐のために兵庫の津に下つたが、戰死を覺悟して、わが子正行（子方）を故鄕へ歸すこととし、種々敎訓を與へた後、訣別の宴を催し、正行の傅恩地滿一（シテ）は舞を舞つた。そして正行は泣く泣く滿一と共に河內に歸る。　【題材】「太平記」卷十六「正成下向兵庫事」に據つた。一段劇能。觀世現行。

【構想】劇能としての脚色は整頓してゐるが、明治時代の新作で雅味に乏しい。

【參考】謠曲評釋（大和田建樹）○謠曲大觀第二卷（佐成謙太郎）　〔佐成〕

難語考（なんかう）　「山彥册子」を見よ。

難後拾遺（なんごしふゐ）　歌書　一卷一册　【著者】源經信。一說にはその子俊頼。俊頼の子俊惠はその妹が逝去した後、その遺品を調査したところ、父俊頼の遺草が少々あり、確かに俊頼の手跡に違ひない「難後拾遺」の草案をも發見したので、「難後拾遺」は俊頼作であるかも知れない事を淸輔に語つた。しかし淸輔は經信が口授して俊頼が筆記した場合を考へた（袋草紙二）。　【名稱】「難後拾遺抄」ともいふ。　【成立】通俊が獨占的に「後拾遺」を撰した事に對しては各方面の反對があつたが、中にも經信は、力量・聲望共に通俊に優るとも劣らなかつたので、大に不平であつた。依つてこの難を書いたものと思はれる。　【諸本】續群書類從四五五所載。南葵文庫本（一册）は、元祿十年八月契沖が松下見林本によつて書寫した奧書がある。　【解說】序文に「後拾遺とてこの比世にかき騷ぐ集あり、人の持たるを暇のひまに人に讀ませて聞きつれば」とあつて、勅撰集たる「後拾遺集」に對して傍觀的態度を示してゐる。次に集中には勿論善い歌もあるが、如何はしい歌もあるので、それ等を書き拔き批評を加へた、或は同意見の人があるかも知れないと記してゐる。卽ち春二十首・夏十一首・秋八首・冬一首・別離一首・哀傷四首・戀十六首・雜二十三首、合計八十四首（內一首は拾遺集、二首は無評）を揭げて、嚴重な難評を加へてゐる。これを作者別に分けて見ても、別に偏見

があるとも見えないが、公任の歌の批評には謙遜な態度を示し、序文にも「此の中にやんごとなき歌よみの詠めると書きつけられたる歌の、心得難きもあれば其れをも恐し乍ら書きつけたるなり」とあり、評の所にも「我が僻事にこそあらめ、及ばぬか」とことわつてゐる。批評は各方面からなされてゐる。例へば（一）「折らでただ語りに語れ山櫻風にちるだに惜しき匂を」は、寧ろ「折つて歸りたし、折りたくはなし」の情をよむべきであり、「君戀ふる心はちぐに碎くれど一つも失せぬ物にぞ有りける」が、千と一とを對比してゐるのは俗惡であるといふのは、全體の構想に就いての批評である。（二）「よそにてぞ覆たなびく古里の都の春はみるべかりける」は、都の外に出て見てゐる感じが出てゐない。「行き歸る旅に年ふる雁金はいくその春をよそにみるらん」は、花のあ

味が十分出てゐないもの、修辭の惡いもの、事實に相違した形容詞、本歌取の惡いものなどを指摘してゐる。概して批評が表現形式の上から論じられてゐるのは、當時の歌人が表現形式に苦心し、その完成に依つて想を磨き、境地を進めようとし、彼等の意識が主として形式の上にあつたからである。批評の根本觀念は幽（又は優）であり、批評の標準が一定してゐるので、個人的な批評ではあるが、當時の批評の傾向を知ることができる。

【參考】源經信の歌論（難後拾遺と後拾遺問答）久松潛一（心の花、昭和四ノ一・二・四）　〔西下〕

南宗畫（なんしうぐわ）　繪畫　【名義】東洋畫の一流派、略して南畫ともいふ。北宗畫（北畫）に對する名稱。南宗・北宗兩派區別の提唱は、明代以來の事で、殊に明の文人董其昌が代表的であるが、以後この兩派についての論議が頗

唐の王維に始まつて以後、張璪・荊浩・關同・郭忠恕・董源・巨然・米芾父子を經て、元末の四大家（王蒙・倪雲林・黃公望・吳鎭）に及ぶといふ。南宗畫の初めが、唐の王維まで溯り得るか否か、又その傳承の次第のごときも甚だ詳かでないが、併し元末四大家の後、やがて明淸に至つては、南宗畫極盛の機運を見るのであつて、支那の近代繪畫史の主潮は正にこの派によつて形成された。日本に於ては江戶時代の中葉以降に於て、始めて南宗畫の發達隆昌を見るに至つた。當時我が國文人の間に、この派の主義を鼓吹する學者輩出すると共に、外からは「芥子園畫傳」の舶載せらるゝあり、更に享保の頃には、長崎に淸の南畫家伊孚九・費漢源・江稼圃等相次いで來たので、その畫を學ぶ者頗る多く、長崎より京都・江戶に及びやがて全國にこの派の普及を見るに至つた。この派の畫人

所收。

【解說】每卷五章、すべて四十章より成る。但し第一卷第一章は、具體的說話を成さぬ序說の類である。前半の四卷は武士に關し、後半の四卷は歌舞伎子に關する說話より成る。共に變態なる性慾生活、好色生活を取扱つてゐるものとして、所謂好色物に屬すべきものである。但し武士の念友關係には、自ら義理・意氣地が生じて、敵討・果合ひ等を誘致することが多かつたので、本書前半の武士說話には、義理や意氣地に關する血腥き事件に及ぶものが多い。この點では武家物と共通性を持つてゐる。後半の歌舞伎子に關する說話も、純粹に性慾、好色生活を取扱つてゐるとはいひ難い。武士のそれに類した義理や意氣地を含んでゐるから、前半の武士說話に準ずるものとすることが出來る。而して說話中の歌舞伎子

があるとも見えないが、公任の歌の批評には謙遜な態度を示し、序文にも「此の中にやんごとなき歌よみの詠めると書きつけられたる歌の、心得難きもあれば其れをも恐し乍ら書きつけたるなり」とあり、評の所にも「我が僻事にこそあらめ、及ばぬか」とことわつてゐる。批評は各方面からなされてゐる。例へば(一)「折らでただ語りに語れ山櫻風にちるだに惜しき匂を」は、寧ろ「折つて歸りたし、折りたくはなし」の情をよむべきであり、「君戀ふる心はちぐに碎くれど一つも失せぬ物にぞ有りける」が、千と一とを對比してゐるのは俗惡であるといふのは、全體の構想に就いての批評である。(二)「よそにてぞ霞たなびく古里の都の春はみるべかりける」は、都の外に出て見てゐる感じが出てゐない。「行き歸る旅に年ふる雁金はいくその春をよそにみるらん」は、花のあることをよまねば春をよそにする感じがしつくり出ない。「曇る夜の月と我が身の行末とおぼつかなさは何れまされる」は、我が身のおぼつかない狀態が出てゐないなどといふのは、全體的な表現力に就いての批評である。(三)部分的な表現上の批評としては、「行き歸る旅に年ふる」は、道中で年を經るが如く、「池にはひさす藤の花」は、「池にはひかゝる藤の花」の意であらうが無理であり、「誰が袖に君がさぬらん唐衣よな〳〵我に片しかせつゝ」は、末句がいひさしのやうであるといふが如くである。(四)原作を改惡したものとして、「梅が香を夜半の嵐のふきためて槇の板戸のあくる待ちけり」(原作、よもの嵐)「逢坂の關うち越ゆる程もなく今朝は都の人ぞこひしき」(原作、まづは都の人ぞ)などを擧げてゐる。(五)その他歌になつてゐないもの、平凡なもの、實際の意味が十分出てゐないもの、修辭の惡いもの、事實に相違した形容詞、本歌取の惡いものなどを指摘してゐる。概して批評が表現形式の上から論じられてゐるのは、當時の歌人が表現形式に苦心し、その完成に依つて想を磨き、境地を進めようとし、彼等の意識が主として形式の上にあつたからである。批評の根本觀念は幽(又は優)であり、批評の標準が一定してゐるので、個人的な批評ではあるが、當時の批評の傾向を知ることができる。

【參考】源經信の歌論(難後拾遺と後拾遺問答)久松潛一(心の花、昭和四ノ一・二・四)　〔西下〕

南宗畫(なんしゆうぐわ)　繪畫【名義】東洋畫の一流派、略して南畫ともいふ。北宗畫(北畫)に對する名稱。南宗・北宗兩派區別の提唱は、明代以來の事で、殊に明の文人董其昌が代表的であるが、以後この兩派についての論議が頗る盛んであつた。南北名稱の由來は禪宗の南頓北漸に準ぜしむる說と、支那地理上の南北に歸着せしむる說と兩說あつて詳かでない。【性質】南北兩宗を區別するは、その描寫樣式に係つてゐる。卽ち南宗畫とは北宗の克明な形似や遒勁な氣格を主とするものと違つて、描法は比較的柔軟で錯落たる草筆多く、色彩よりも寧ろ水墨に親しみ、形象の如きも印象的な描寫を主眼としてをり、主題の如きも山水が最も多い。而してその表現するところに至つては、詩趣や氣韻を第一とし、詩畫一致の境地を理想としてゐる。この點に於て詩人文士の餘技に出づる所謂文人畫(別項)とその本質を同じうするものと言ひ得るが、その範圍に至つては、兩者の間におのづから出入あるを免れない。(北宗畫參照)

【沿革】南宗畫の發展は董其昌の說によれば、唐の王維に始まつて以後、張璪・荊浩・關同・郭忠恕・董源・巨然・米芾父子を經て、元末の四大家(王蒙・倪雲林・黃公望・吳鎭)に及ぶといふ。南宗畫の初めが、唐の王維まで溯り得るか否か、又その傳承の次第のごときも甚だ詳かでないが、併し元末四大家の後、やがて明淸に至つては、南宗畫極盛の機運を見るのであつて、支那の近代繪畫史の主潮は正にこの派によつて形成された。日本に於ては江戶時代の中葉以降に於て、始めて南宗畫の發達隆昌を見るに至つた。當時我が國文人の間に、この派の主義を鼓吹する學者輩出すると共に、外からは「芥子園畫傳」の舶載せらるゝあり、更に享保の頃には、長崎に淸の南畫家伊孚九・費漢源・江稼圃等相次いで來たので、その畫を學ぶ者頗る多く、長崎より京都・江戶に及びやがて全國にこの派の普及を見るに至つた。この派の畫人としては大雅・蕪村の兩家を初めとして、以後文人・志士等のこの派に屬する者輩出し、幕末より明治にかけ、その極盛時代を現出したが、やがてはその氣韻主義や印象描寫が偏重に過ぎて行き詰らねばならなかつた。　〔田中(一)〕

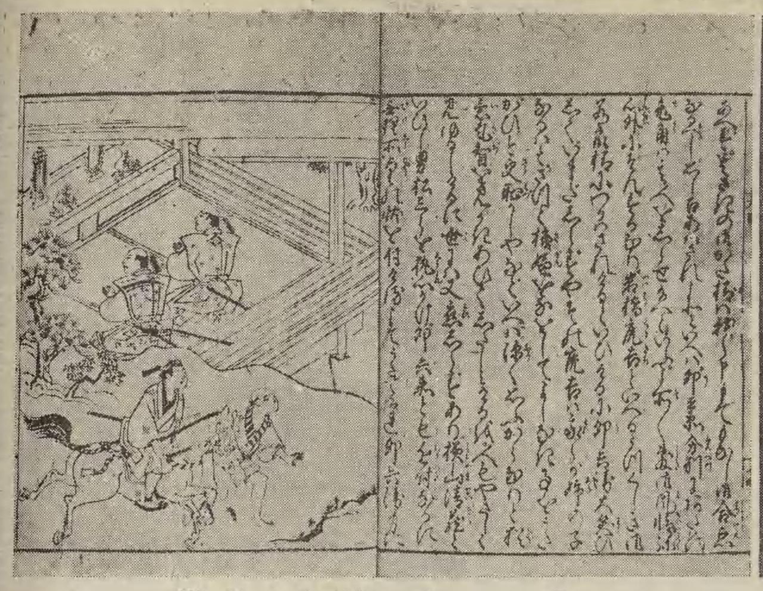
男色大鑑(なんしよくおほかがみ)　浮世草子　八册【作者】井原西鶴【名稱】目錄には男色大鑑の下に「本朝若風俗」と記し、題簽には「男色大鑑」の上に、丸の內に「本朝若風俗」と記してある。なほ序の終りに貞享四年龍集丁卯陬日と記し、「鶴永」「松壽」の二つの印がある。【刊行】貞享四年、大阪伏見吳服町淀屋橋南書林深江屋太郎兵衞、京二條通山崎屋市兵衞刊。右の外に江戶日本橋靑物町萬屋淸兵衞を加へた本もある。【諸本】本朝若風俗(惜玉文庫)・西鶴全集(帝國文庫)・西鶴名作集(日本名著全集)・西鶴全集(日本古典全集)・浮世草紙等に所收。

【解說】每卷五章、すべて四十章より成る。但し第一卷第一章は、具體的說話を成さぬ序說の類である。前半の四卷は武士に關し、後半の四卷は歌舞伎子に關する說話より成る。共に變態なる性慾生活、好色生活を取扱つてゐるものとして、所謂好色物に屬すべきものである。但し武士の念友關係には、自ら義理・意氣地が生じて、敵討・果合ひ等を誘致することが多かつたので、本書前半の武士說話には、義理や意氣地に關する血腥き事件に及ぶものが多い。この點では武家物と共通性を持つてゐる。後半の歌舞伎子に關する說話も、純粹に性慾、好色生活を取扱つてゐるとはいひ難い。武士のそれに類した義理や意氣地を含んでゐるから、前半の武士說話に準ずるものとすることが出來る。而して說話中の歌舞伎子は、その頃名を知られたものが多く、これを當時の「野郎評判記」に徵し、比較して見ると、ほぼそれ等をモデルにし、實際に就いて綴つたものと察せられる。花崎初太夫・平井靜馬・玉川千之丞・玉川主膳・玉村吉彌・伊藤小太夫・小櫻千之助・瀧井山三郎・大吉彌・鈴木平八・藤村半太夫・松島半彌・戶川早之丞・上村辰彌・嵐今京之助、その他なほ幾人かの名が見えてゐる。要するに、男色は多く女性から隔離された特殊社會に起る現象であるが、この時代は特に官能的享樂の解放的に行はれた結果として、常態を逸した性的享樂の風の行はれた社會の風習を反映したものであることは言ふまでもあるまい。而して義理や意氣地の結合も亦、當時の社會的事實を示したものである。

【史的地位】男色の社會的事實の起原は、文獻に徵しては知られないが、極めて古い時代に

在るであらう。我が國に於ても「古事談」「徒然草」などの記述より、遙か以前に在つたことは言ふまでもない。而してこれが文學の素材となつたのは、室町時代からである。尤もこれより以前にも和歌にそのことかと推察されるものはあるが、物語小説などの材となつたのは、室町時代を初めとする。即ち「秋の夜の長物語」「幻夢物語」「あしびき」「辨の草紙」「鳥邊山物語」「松帆浦物語」「嵯峨物語」(各別項)などがそれである。これ等は、物語の形態・文體を襲うてをり、内容は主として愛で、それに信仰を配してゐる。中には、武士の義理・意氣地より敵討ちに及んでゐるものもある。江戸時代に入つては、「よだれかけ」巻五の男色二倫書といふ男色に關する褒貶等の論議をなした書がある。これ等の後を承けた「男色大鑑」は、形の上では浮世草子の新しい形を取り、文體も亦物語のそれを離れてゐるが、内容に愛と共に義理・意氣地を持つてゐる點で、先蹤とさしたる相違はない。併しそれにも時代的なる新しみはある。歌舞伎伎子との關係に材を選んだのは創意であるが、それも精神に於ては、室町時代の作が寺小姓を選んでゐるのと似たものである。かく考へて來れば、本作は全然西鶴の創意から出たものとはいひ難いが、表現・描寫の技巧の優秀と清新の點では、先蹤の作は比較にならない。西鶴はこれより先き、「好色一代男」や「好色五人女」(各別項)の一部分に男色に關する事を書いてゐるが、ただ僅かの紙數を費してゐるに過ぎない。本作一度出でて世は初めて男色の文學に注意したらしい。即ちこの後「好色江戸紫」「好色俗むらさき」「男色比翼鳥」「男色木芽漬」(各別項)等續々男色を材とした浮世草子が現はれて、文學史家が所謂男色物の一目を設くるやうになつたのは、本作の影響として見るべき現象である。この點から見ても、浮世草子の歷史中に占むる本作の地位は、頗る重要なものといはねばならない。

男色大鑑 巻八 (小田久太郎氏藏)



上同 (本文・挿繪)

【參考】同性愛の文學 藤村作(上方文學と江戸文學)○西鶴名作集解説 山口剛(日本名著全集)

男色木芽漬 なんしよくきのめづけ 浮世草子 六册

【作者】漆屋圓齋自然坊の署名がある。【角書】【刊行】元祿十六年【解説】讃岐國屏風浦に住む兒玉團三郎は、十三歳の頃から居合劍術・取手早業・相撲・腕押・立廻りを習ひ覺え、風流の兒氣は去つたが、生來の美男であつた。十五の年に元服して衆道の達人になりたき心願を立て、近江の石山觀音に參詣して祈をこめようと思ひ立つ。途中淀の川舟で同船の禪門の物語から、鞍馬の毘沙門に參拜することに心をかへ、五條の橋に上陸する。と、先程の禪門が姿をかへて現はれ、自分は鞍馬に住む溝越天狗といふものである。汝衆道を志しながら田舍者の悲しさに、よしなき石山詣して女道に陷らんとするにより、毘沙門天の仰せを蒙り、今こゝに現はれたのであると告げる。團三郎感涙肝に銘じ、鞍馬に到り宿坊にたのみ、天狗の教へた童子の間に通夜する。童子の間とは、粟田の右大臣といふ人、うつくしき童子とこの間にてあひ、幸ありし室であるといふ。果してその夜天冠を着た美童子忽然とあらはれて團三郎と千夜を一夜と契る。これは毘沙門天の御門に住む百數足之介といふもので、毘沙門天の仰せにより團三郎と契をかはしたのである。足之介は團三郎に向ひ、衆道の大事は一生に念者一人、兒一人、若衆は兄分を二度持たず、念者は重ねて少年に約せず、これ衆道の根本極意であると示教し、巻物一巻を與へて消え失せる。この巻物は即ち男色木芽漬と題し、男色の種々相を描寫したものである(巻一の一)。讃岐國善通寺の住持照智坊は、生れついての女嫌ひであるところから、愚蒙の村人これを尊び敬つてゐた。或る時、村の世話役の重右衞門、村中の人を集めて相談するには、善通寺は弘法大師誕生の寺で、眞言祕密衆道の根本たるべき寺であるゆゑ、照智坊へも吾等の子供のうち器量のよいのを選んで童子として差上げねばならぬといふ。衆議は忽ち一決したが、照智坊は都にて修業の間に、宮河町建仁寺門前の陰間の許にも通つたことがあるので、田舍の童子に一向に眼を向けない。こゝに同村佛谷の孫三の一人娘おみつは、母親の言ひ付けで繁々寺に出入りする。照智坊も水木辰之助に似通うてゐるおみつの姿に次第に心をひきつけられる。或る日の暮、旅裝束の若衆が來て一泊を乞ふ。照智坊若衆振の美しさに思ひつき、懇の仲となる。それは弘法大師が照智坊の淺ましくも女色に陷ちんとするを救ふために、假に童子となつて現はれたのであつた(巻一の二)。都に住む茨木十郎左衞門は今年三十二、買ひつづけたる若衆千人切といはれ、號を千と稱した。買色は實に粋のもてあそぶべき事にあらずと一念發起して、三月二十五日の今日は、法然上人の誕生日なりと黒谷の方へ足を向け、敦盛塚を懇に拜しての歸途、平野敎千代といふ美童と道伴れになり、南禪寺の門などを共に見物し、遂に自宅に誘うて歸る。その夜首尾よく契をかはす。十日ばかりすぎた或る日、敎千代は故郷攝州に立ち歸るといふので、誘はれて十郎左衞門も共に發足する。伏見大阪と過ぎ、須磨寺の邊り門構への立派な屋敷に着く。その夜は種々の款待をうけた上、旅の疲れも出てぐつすり寢入つてしまふ。須磨寺の鐘の音に眼ざめてみれば、家も人もない敦盛塚の傍である。それより十郎左衞門は都新黒谷の上人に賴み、その弟子となつて、蓮生坊の蓮の字をとり蓮肉坊と名乘り、偏へに後生三昧に世を過した(巻一の三)。加賀國七尾の淨光院の弟子に春智坊といふ僧があつた。矢村の代官一宮十之丞の一子波之助は、十四の春より春智坊に學問の數をうけてゐたが、いつしが、春智坊が門を入つた時から、ひたと泣きやむ。その上左の手は生れた時より握りしめてゐて、どうしても開かないといふ。春智坊抱きあげてその左手をそつと指で押し開けると、何のこともなく開く。見ればかの波之助に與へた一寸名號を握りしめてゐたのである。春智坊は夫婦の勸めにより、こゝにしばらく足を留める(巻一の四)。以下各巻、いづれもこの類の四說話から成り、合計二十四說話の男色物語である。

男色子鑑 なんしよくこかがみ 浮世草子 五册

【作者】九思軒鱗長【角書】當流風俗【刊行】元祿六年【諸本】「和國小性氣質」(延享三年改題再板)、「噺千里新話」(寶曆十二年)がある。「和國小性氣質」は氣質全集(舊帝國文庫)所收。【解說】十五說話より成る。京の三條室町に若松の湯茶も一人では飲まぬほどの親密さとなつた(巻一の一)。都の分限者名古屋三郎は、歌舞伎若衆の吉三郎に入れ揚げ、財産を殘らず遣ひ果して家を出で、裸一貫の身を惡友善哲の近江の家に賴つて行く。そこで名古屋は魚捕る網をすきならひ、細々と暮してゐる。吉三郎は名古屋の事を忘れかねてゐるところへ、使が來てその文を屆ける。吉三郎は驚いて舞臺を休み、使と共に名古屋の行方を探し求めて、我が家に迎へ取り、裏座敷に住まはせて世話をする。吉三郎は病に罹りて不歸の客となり、名古屋は遂に行方知れずになつた(巻一の二)などの如く、衆道精神ともいふべき、義理・意氣地を表はしたものを主とし、以下巻二の一、和國にもあるかんたんの枕、巻二の二、川風にふるひ付きたる繼路、巻二の三、嬶子(別項)の巻之十一「宮守の妖」。

【梗概】【上】越前國湯尾峠は瓜生判官が嘗て城を構へた處である。數十年を經て、曹洞宗の僧團外和尚はそこに住み、或る夕暮に美しい若衆と道連になり、我が庵に伴ひ、迷ひの者と知り、罪障を懺悔させる。亡靈は語る、曆應年中、瓜生判官は新田義治に心を傾ける。その起りは、判官の弟義鑑坊が義治を繼慕し、兄を勸めて新田につかしめたが、後、判官は足利に從ふ。ただ義鑑坊のみは新田に屬し、義治を預つて男色關係を結ぶ。【中】判官は我が死後に寵愛の女うつせみの亂行もあらんかと憂へて、女の腕に蠟燭の生血を塗り、金崎城攻撃に向ふ。義鑑坊はこの女の力で判官兄弟を再び新田方に味方させる。判官は深山寺の闘をたばかり越え、高師泰の陣へ夜討をしか

童と道伴れになり、南禪寺の門などを共に見物し、遂に自宅に誘うて歸る。その夜首尾よく契をかはす。十日ばかりすぎた或る日、敦千代は故郷攝州に立ち歸るといふので、誘はれて十郎左衞門も共に發足する。伏見大阪と過ぎ、須磨寺の邊り門構への立派な屋敷に着く。その夜は種々の款待をうけた上、旅の疲れも出てぐつすり寢入つてしまふ。須磨寺の鐘の音に眼ざめてみれば、家も人もない敦盛塚の傍である。それより十郎左衞門は都新黒谷の上人に賴み、その弟子となつて、蓮生坊の蓮の字をとり蓮肉坊と名乘り、偏へに後生三昧に世を過した(卷一の三)。加賀國七尾の淨光院の弟子に春智坊といふ僧があつた。矢村の代官一宮十之丞の一子波之助は、十四の春より春智坊に學問の教をうけてゐたが、いつしか二人は兄弟の契深き仲となつてゐた。或る秋の日、二三日見えなかつた波之助が、春智坊の許を訪れ、窓越しに春智坊をよび、持參の惠心作の彌陀と春智坊所持の法然上人の一寸名號とを取替へてくれと賴む。春智坊了承して名號を渡すと、波之助は墓所の方へと歸つてゆく。春智坊不審に思ひ、後を追ひかけたが既に姿は見えない。十之丞の許を訪ねると、波之助が先刻寺に見えた刻限に、遽かにとりつめて亡き人となつたといふ。棺の蓋をあけてみると、左の手に春智坊から與へられた一寸名號らしい紙片を握りしめてゐた。春智坊は浮世の無常を觀じて諸國修業に出て、若松の湧通寺に三年ほど住んでゐたが、一度故郷に立ち戻らうとして、越後の村上より越前に向ひ、加賀の國に越えるため、有乳山の麓なる庄屋に一泊を乞ふ。その家の孩兒は生れた時より乳飲む間も泣きやまずに泣き續けてゐたが、春智坊が門を入つた時から、ひたと泣きやむ。その上左の手は生れた時より握りしめてゐて、どうしても開かないといふ。春智坊抱きあげてその左手をそつと指で押し開けると、何のこともなく開く。見ればかの波之助に與へた一寸名號を握りしめてゐたのである。春智坊は夫婦の勸めにより、こゝにしばらく足を留める(卷一の四)。以下各卷、いづれもこの類の四說話から成り、合計二十四說話の男色物語である。

男色子鑑（なんしよくこかがみ）　浮世草子　五册　【刊行】元祿六年　【諸本】「和國小性氣質」(延享三年改題再板)、「嚊千里新話」(寶曆十二年)がある。【作者】九思軒鱗長【角書】當流風俗【刊行】【解說】十五說話より成る。京の三條室町に若松屋平次郎といふ美童があつた。浪人明石文右衞門といふ男、平次郎と「念友の契約未來かけてのかため互におろそかならぬ」仲となる。然るに文右衞門は元來不屆者で、平次郎は堪忍ならず、今宵祇園林にて潔く果し合ひをなさうと果し狀を遣はす。文右衞門つての物種と、その日のうちに逐電する。平次郎はそれとも知らず、二親への書置き細々と認め、丁稚に提灯持たせて祇園林に急ぎ、か今かと待つてゐたが、文右衞門が來ないので丁稚を見せにやると、晝のうちに田舍に立してしまつたと分る。平次郎は胸を押沈めて是非なく宿に立ち歸り、惜しや十七の春に前髮を落してしまふ。こゝに青木山舟といふ男、零落して淸貧のうちに世を送つてゐる時、無二の親友の家に月待に赴き、つて平次郎の手に莫の吸殼を落したのが緣となり、衆道の契固く、影の形に添ふ如く一杯の湯茶も一人では飲まぬほどの親密さとなつた(卷一の一)。都の分限者名古屋三郎は、歌舞伎若衆の吉三郎に入れ揚げ、財産を殘らず遣ひ果して家を出で、裸一貫の身を惡友善哲の近江の家に賴つて行く。そこで名古屋は魚捕る網をすきならひ、細々と暮してゐる。吉三郎は名古屋の事を忘れかねてゐるところへ、使が來てその文を屆ける。吉三郎は驚いて舞臺を休み、使と共に名古屋の行方を探し求めて、我が家に迎へ取り、裏座敷に住まはせて世話をする。吉三郎は病に罹りて不歸の客となり、名古屋は遂に行方知れずになつた(卷一の二)などの如く、衆道精神ともいふべき、義理・意氣地を表はしたものを主とし、以下卷二の一、和國にもあるかんたんの枕、卷二の二、川風にふるひ付きたる繼路、卷二の三、やりて悔敷養子の二親。卷三の一、芭蕉に落ちし諷の聲、卷三の二、あらたなりける地藏の靈夢、卷三の三、冥途にしれし心中男。卷四の一、緣は朽ちせぬ二世の契、卷四の二、身を捨ててこそ浮む繼路、卷四の三、屍をさらす賀茂川の水、卷五の一、姿をかへてねらふ敵、卷五の二、思ひ出たり男山の昔、卷五の三、顏見世の切手ただもらうて高い物、卷五の四、後をしたうて若衆の張良などを含んでゐる。【小泉】

男色太平記（なんしよくたいへいき）　草雙紙　黒本・青本　三册　十五丁十九圖【作者】未詳【畫工】鳥居淸滿【名稱】明和八年鱗形屋刊行の黒本・青本には「湯尾峠孫杓子」の角書がある。【刊行・諸本】明和三年鶴屋刊と明和八年鱗形屋刊の二種があり、同樣に黒本・青本兩樣の體裁で刊行されてゐる。明和八年刊は再摺らしく、畫工は同樣に淸滿である。【題材】「御伽婢子」(卷之十「宮守の妖」)。【梗概】【上】越前國湯尾峠は瓜生判官が嘗て城を構へた處である。數十年を經て、曹洞宗の僧塵外和尚はそこに住み、或る夕暮に美しい若衆と道連になり、我が庵に伴ひ、迷ひの者と知り、罪障を懺悔させる。亡靈は語る、曆應年中、瓜生判官は新田義治に心を傾ける。その起りは、判官の弟義鑑坊が義治を繼嘗し、兄を勸めて新田につかしめたが、後、判官は足利に從ふ。ただ義鑑坊のみは新田に屬し、義治を預つて男色關係を結ぶ。【中】判官は我が死後に寵愛の女うつせみの亂行もあらんかと憂へて、女の腕に蠑螈の生血を塗り、金崎城攻擊に向ふ。義鑑坊はこの女の力で判官兄弟を再び新田方に味方させる。判官は深山寺の闕をたばかり越え、高師泰の陣へ夜討をしかけて大勝を得る。義治は疱瘡を患つたが、義鑑坊の祈で、もとの麗しい容貌となる。【下】義治は、判官・義鑑坊等に守り立てられて勢盛んになり、瓜生方は勝に乘つて足利方を追ひ、却つて谷底へ閉ぢ込められ、遂に判官・義鑑坊は自盡する。塵外和尚は目のあたり昔の樣を見て、かゝる名僧も色に迷ふかと憐み、「毘羅沙羅經」の文を書くと、數萬の蠑螈が一時に消えて成佛する。越後國湯尾峠の茶屋の軒に、大きな杓子をしるしにして、疱瘡を輕くすますお守を出す。【解說】「御伽婢子」の「宮守の妖」に精靈能のプロットを與へ、民間信仰や傳說にも觸れて構想したもの。外題は「宮守の妖」の依據である「太平記」卷第十七・十八を通して、もとの作品に歸つた案であらう。黒本・青本としては常套的のことながら、內容の性質上、經文の引用などによつて、特に佛教的色彩が强くあらなる。それは弘法大師が照智坊の淺ましくも女色に陷ちんとするを救ふために、假に童子となつて現はれたのであつた(卷一の二)。都に住む茨木十郎左衞門は今年三十二、買ひつづけたる若衆千人切といはれ、號を千と稱した。買色は實に粹のもてあそぶべき事にあらずと一念發起して、三月二十五日の今日は、法然上人の誕生日なりと黒谷の方へ足を向け、敦盛塚を懇に拜しての歸途、平野敦千代といふ美

草」などの記述より、遙か以前に在つたことは言ふまでもない。而してこれが文學の素材と

（繪插）

一代男」や「好色五人女」(各別項)の一部分に關する事を書いてゐるが、ただ僅かの紙

はれ、又漢學方面の色彩も濃い。「太平記」中の人物を男色に見立てたところが、やゝ思ひ付ではあるが、「御伽婢子」の何でもない記事を誤解し、作中に矛盾を含むなどは傑作とは云へぬ。

男色比翼鳥（なんしよくのとり）　浮世草子　六巻【作者】東乃紙子（序）。畫工政信の變名であらうと推定されてゐる。【畫工】奥村政信【刊行】寶永四年【諸本】江戸時代文藝資料

「男色比翼鳥」序文・挿繪（東大圖書館藏）

【梗概】松枝綠之助なる少年、親の敵栗原安左衞門を討たうと諸所を探すこと三年、丹波の切戸の文殊堂に參籠し、唐崎音羽之丞なる美少年と知り合ひ、文殊菩薩の靈夢を蒙り、共に比翼の鳥に乘つて江戸に下り、奥村幸手軒なる浪士を賴んで隅田川の邊りに隱れてゐる敵を討つ。

【解說】全體の筋は、以上のやうに極めて簡單であるが、内容の大部分を占めるものは、幸手軒が、友人なる市川源藏・山田半平兩人との男色女色優劣論、その例證として互に引用した和漢さまざまの物語であつて、全體の筋は要するに申譯的のものと思はれる。それ等の中には人口に膾炙した古來の傳說もあるが、また當時の巷說か乃至は作者の創作かと思はれるものもある。とにかく男色物乃至好色物の一つの異型と言へようか。作者「東乃紙子」が、政信なりや否やは別として、卷末に明かに署名ある政信筆の挿繪は味ふに足り、また芝居の内外を寫した場面など、その方面の參考ともならう。

【參考】新撰列傳體小說史（前編）水谷不倒　○江戸時代文藝資料第三解說【增田】

男色十寸鏡（なんしよくなすかがみ）　浮世草子　二巻【作者】序に、「洛陽之野人三夕軒好若處士」とある（穗彦の「好色本目錄」に夢軒好善居士とあるは誤）。勿論何人か明かでないが、同じ頃の「好色訓蒙圖彙」「好色貝合」（各別項）と似た類のものであり、書物の體裁、挿繪の畫風なども似て居り、又序文の署名などから見て、右二書の作者と推定される吉田半兵衞を擬するのも、必ずしも不當でないであらう。【刊行】貞享四年（序文）。

【解說】上卷は、「兄分勸學之卷」とあつて、「衆道得心第一儀」「衆道は只實を根本の事」「兄分風俗幷嗜の事」「若衆のために儀を思ふべし若恩の事」「若道の契誓紙にあり付り腕股ひき様」「若道の初戀艷書かきやう」「若衆えの心入幷教訓第一の事」「少年と初めての戀とりいりやう」「少年若道のしたて氣を通す事」「兒性小草履とりしたての事」「野郎參會の心得幷唐物うりが事」の諸節に分ち、龍陽概說から「兄分」たる者の種々の心得を說き示してゐる。下卷は「若衆勸學之卷」であつて「若衆得心第一儀」「身持たしなみの事」「伊達風情心得の事」「分て心がけ有べき事」「他所の若衆とつきあひ心得の事」「餘所え出る心得の事」「主人に愛せらるゝ若衆心得の事」「僧に愛せらるゝ若衆心得の事」「心を花車第一の事」「町人若衆心得の事」「人に物を借まじき事」「人に戀慕せられし時心得」「早く兄分をさだむべき事」「何事も兄分にとふべき事」「人に狀つけられし時の事」「手跡よき若衆心得の事」「萬食物心得の事」「句ひをとむる事」「若道床入の事」に分れ、相當艷書詳細である。かくの如き、いはば「龍陽讀本」は、「好色訓蒙圖彙」「好色貝合」（各別項）などと共に浮世草子の一異型をなすものであり、當時の遊興歡樂的精神と、訓蒙說明的思想の結び付いたものである。今日から見て、當時の社會風俗を察知するに便をなすことは言ふまでもない。【增田】

男色十寸鏡（東京帝大圖書館藏）

男色物（なんしよくもの）　浮世草子【性質】同性愛・同性性慾の生活を取扱つた浮世草子。端物集と續物とあり、また具體的描寫のものと說明的なものとある。端物に在つても、續物に在つても、純粹に同性愛や同性性慾のみを取扱つたものと、これに伴ふ義理・意氣地を併せ取扱つたものとがある。後者は一面好色本に通じ、一面武家物（別項）に通じてゐる。

【時代との關係】男色は男龍・若道・衆道・密道・義兄弟・念友などとも稱し、男性間に於ける同性愛・同性性慾關係を指すものである。この關係は僧侶・武士の間に多くあつたが、又遊蕩者と若衆野郎輩との間にもあつた。男色の對象となつたものを、世に若衆・美少年・少年・美童・少人・兒・垂髮・前髮・喝食・男娼・渡り小姓・香具賣・小草履取り・若氣・陰間・陰子・舞臺子・本子・飛子・かげろふ・色子・野郎・新部子などとも稱した。この俗の古く存したことは、和漢の古典籍に散見する所で知られるが、特に元祿期にかゝる文學を生み出したのは、素より時代と密接な關係を有したに相違ない。男色は生理的には、同性の有てる異性分に對する愛戀、性慾であるといはれるが、この不

卷三所收。但しこれは序文、卷頭とも「風流比翼鳥」とあるが、東大圖書館本（大田南畝・豐芥子・渡邊霞亭等舊藏）には、明かに皆「男色」とある。但し題簽はない。

部山物語」「松帆浦物語」「嵯峨物語」（各別項）等があるが、江戸時代の男色物は、これ等とは内容形式共に大に違ふ。室町時代のものは、從來の物語風の形に、變態的な戀愛生活を書いたものであるが、江戸時代のそれは先にいつた如く、所謂衆道を磨く男子の一分に關する意氣地又は義理から起る殺伐な敵討や果し合ひ等を含むものと、同性愛・同性性慾を中心とした好色生活を書いたものとあるが、併し後者にも、多少意氣地・義理の伴ふことも少くない。西鶴の「男色大鑑」（別項）は、その兩方に亙るものである。今主なる著作を擧げれば、「男色十寸鏡」「男色子鑑」「男色木芽漬」「男色比翼鳥」（各別項）、「野郎文反古」（色好龍軒作、寶永三年板、男色關係者間の諸書簡體に擬したもの）、「野白内證鑑」「野傾旅枕籠」（各別項）等であるが、「野

南楚・獻仙人楚間人。時には西村の印を用ひた。【生歿】寬延二年生れ、文化四年（一八〇七）三月九日歿す。享年五十九。【法名】只但受樂翁居士【墓所】東京芝區西久保心光院。【閱歷】芝宇田川町に住み、その職業には古來諸說があり、「江戸作者部類」は鞘師となし、「戲作者小傳」は書肆とし、墨川亭雪麿は芝神明邊に住居した醫師仙白であると言ひ、北齋翁は板木師なりとし、活東子は北齋說に賛成する。又手習師匠であつたとする說もある。

討敵

【作品】【黄表紙】敵討三味線由來（別項）○新錢戲樂通寶（政美畫風）（以上天明三年刊）○八橋調能流（政演畫、天明四年刊）○古渡日記帳（政美畫、天明七年刊）○賴光一代記（政演畫、天明八年刊）○鵺組政名歌芝（春朗畫、寬政四年刊）○敵討義女英（別項）（寬政七年刊）○三世相郎滿八算（豐國畫）○敵討姥捨山（豐國畫）○富士色板綛會我（豐國畫、寬政十一年刊）○娘敵討扇銀面（豐國畫、寬政十二年刊）○敵討梅之接（豐廣畫、享和元年刊）○儡討梛葉山（田形前編の角書がある。豐廣畫）○嬶窟出世談（田形後編の角書がある。豐廣畫）○敵討嚴間鳳尾艸（前編、豐廣畫）○嚴間之喬木（後編、豐廣畫）○伊豆日記旭源氏（春亭畫）（以上享和三年刊）○冬雪物語（親子塚前編と角書がある。豐廣畫）○春雪物語（親子塚後編と角書がある。豐廣畫）（以上文

通じ、一面武家物（別項）に通じてゐる。

【時代との關係】男色は男寵・若道・衆道・密道・義兄弟・念友などとも稱し、男性間に於ける同性愛・同性性慾關係を指すものである。この關係は僧侶・武士の間に多くあつたが、又遊蕩者と若衆野郎輩との間にもあつた。男色の對象となつたものを、世に若衆・美少年・少年・美童・少人・兒・垂髪・前髪・喝食・男娼・渡り小姓・香具賣・小草履取り・若氣・陰間・陰子・舞臺子・本子・飛子・かげろふ・色子・野郎・新部子などとも稱した。この俗の古く存したことは、和漢の古典籍に散見する所で知られるが、特に元祿期にかゝる文學を生み出したのは、素より時代と密接な關係を有したに相違ない。男色は生理的には、同性の有てる異性分に對する愛戀、性慾であるといはれるが、この不自然行爲は、生理的・心理的の病者・變質者に多い。而してこれを社會的に見ると、僧院・兵營・船艦・刑務所・寄宿舍・大奥などの、同性のみから成る變態の社會に流行する。併し元祿期に於ける流行は、以上の社會的理由のみでは解し難い。この享樂時代の荒淫が、異性間の好色生活に滿足し得ず、又これに飽きた結果として、この變態生活に依る刺戟を求めた意が多いであらう。彼の賣色の美青年卽ち若衆役者の類が存在して、富有なる享樂者の間に翫弄された事實は、蓋しこれを證するものである。而して又かゝる賣色者の存在は、益々この風を助長したに相違ない。元祿期に於ける男色物の流行は、かゝる意味を持つた男色の流行と密接な關係を持つて起つた現象に外ならない。

【作品】室町時代の男色物語には、「秋の夜の長物語」「幻夢物語」「あしびき」「辨の草子」「鳥部山物語」「松帆浦物語」「嵯峨物語」（各別項）等があるが、江戸時代の男色物は、これ等とは内容形式共に大に違ふ。室町時代のものは、從來の物語風の形に、變態的な戀愛生活を書いたものであるが、江戸時代のそれは先にいつた如く、所謂衆道を磨く男子の一分に關する意氣地又は義理から起る殺伐な敵討や果し合ひ等を含むものと、同性愛・同性性慾を中心とした好色生活を書いたものとあるが、併し後者にも、多少意氣地・義理の伴ふことも少くない。西鶴の「男色大鑑」（別項）は、その兩方に亙るものである。今主なる著作を擧げれば、「男色十寸鏡」「男色子鑑」「男色木芽漬」「男色比翼鳥」（各別項）、「野郎文反古」（色好龍軒作、寶永三年板、男色關係者間の諸書簡體に擬したもの）、「野白内證鑑」「野傾旅葛籠」（各別項）等であるが、「野傾」と冠したものは、遊女に關する說話を含むものである。なほこれ等の外にも、「好色江戸紫」（別項）の如き、「好色」と冠した書にもこれに屬せしめて然るべきものがある。（武家物・町人物・好色本參照）（藤村）

南水漫遊（なんすいまんいう）　演劇書　十五卷又は二十七卷【著者】濱松歌國【成立】文化末年か。【解說】主に歌舞伎・淨瑠璃關係の記事を收めた十五卷本が、記載整頓の工合から、他の雜事をも多く收めた二十七卷本よりも後に成つたらしいと言はれてゐる。新群書類從には十五卷本を飜刻してある。初編・拾遺・續編各五卷、演劇に關する種々の記事を集めてゐる。「傳奇作書」「脚色餘錄」（各別項）と並んで、主として大阪を中心とする演劇史料の重要な文獻である。【壇田】

南杣笑楚滿人（なんぜんせそまひと）　戲作者【本名】楠彦太郎【別號】志笥房・杣人・曾滿人・南楚・獻仙人楚間人。時には西村の印を用ひた。【生歿】寬延二年生れ、文化四年（一八〇七）三月九日歿す。享年五十九。【法名】只但受樂翁居士【墓所】東京芝區西久保心光院。【閱歷】芝宇田川町に住み、その職業には古來諸說があり、「江戸作者部類」は鞘師となし、「戲作者小傳」は書肆とし、墨川亭雪麿は芝神明邊に住居した醫師仙白であると言ひ、北齋翁は板木師なりとし、活東子は北齋說に贊成する。又手習師匠であつたとずる說もある。

敵討嚴間鳳尾艸

【作品】【黃表紙】敵討三味線由來（別項）○新錢戲樂通寶（政美畫風）（以上天明三年刊）○八橋調能流（政演畫、天明四年刊）○古渡日記帳（政美畫、天明七年刊）○賴光一代記（政演畫、天明八年刊）○鳩賴政名歌芝（春朗畫、寬政四年刊）○敵討義女英（別項）（寬政七年刊）○三世相郎滿八算（豐國畫）○敵討姥捨山（豐國畫）○富士色板綛賀我（豐國畫）（以上寬政九年刊）○敵討沖津白浪（豐國畫、寬政十一年刊）○娘敵討扇銀面（豐國畫、寬政十二年刊）○敵討梅之接（豐廣畫、享和元年刊）○儡討梛葉山（田形前編の角書がある。豐廣畫）○巖窟出世談（田形後編の角書がある。豐廣畫）○敵討巖間鳳尾艸（前編、豐廣畫）○巖間之喬木（後編、豐廣畫）○伊豆日記旭源氏（春亭畫）（以上享和三年刊）○冬雪物語（親子塚前編と角書がある、豐廣畫）○春雪物語（親子塚後編と角書がある。豐廣畫）（以上文化元年刊）○初編三組盃○中編三組盃○三編三組盃（豐廣畫、三編の續き物。文化二年刊）○昔語姑獲鳥仇討（豐廣畫）○仇報妹脊扇○後編妹脊扇（豐國畫）○渡邊綱一代記（春亭畫）（以上文化三年刊）。【合卷】三重忠孝貞（豐廣畫）○敵討雛木花王（豐廣畫）（以上文化四年刊）○復讎談御誓薩池（前編楚滿人、後編夫成作、豐廣畫、文化五年刊）○河州大森塚（初代楚滿人遺稿、關亭傳笑補、國滿畫、文化八年刊）。【讀本】

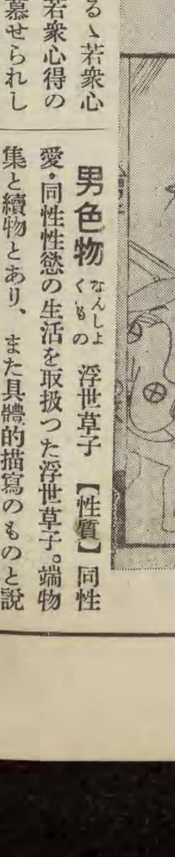
杣物語僊家花（楚滿人遺稿、豐國・國貞畫、文化六年刊）。

【作風・業績】岸田杜芳の「草雙紙年代記」（別項）に序してゐることなどから、楚滿人名の作品四種を出した天明三年には、既に當時の戲作者間には多少知られてゐた人物であるらしく、且つこれ等の作品が果して處女作であるか否かを疑はせる。敵討物に終始した彼も、當時の黃表紙の傾向には初めから沒交涉では

巻三所收。但しこれは序文、巻頭とも「風流比翼鳥」とあるが、東大圖書館本（大田南畝・豐芥子・渡邊霞亭等舊藏）には、明かに皆「男色」とある。但し題簽はない。

藝資料第三解說

男色十寸鏡（なんしよくますかがみ）　浮世草子　二卷【作者】序に、「洛陽之野人三夕軒好若處士」とある（種彦の「好色本目錄」に夢軒好善居士とあるは



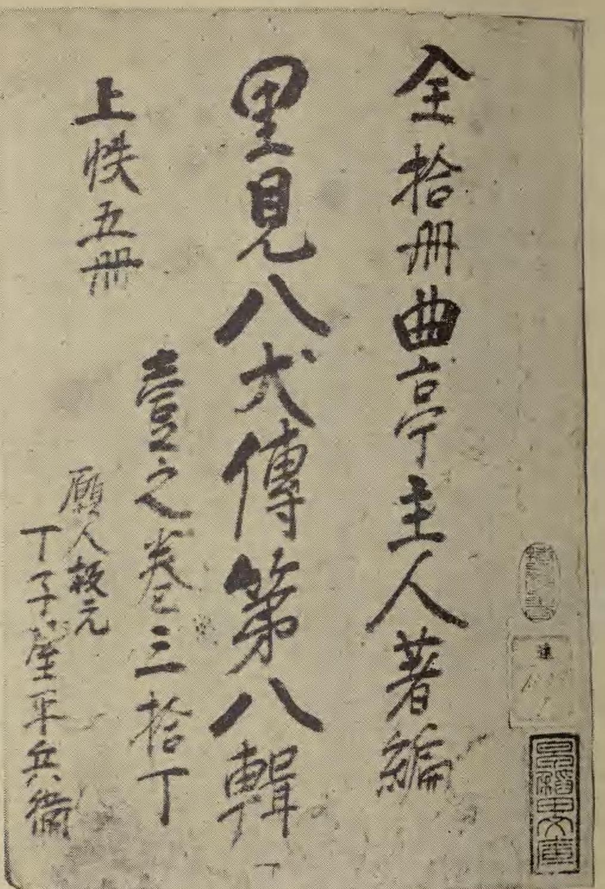
男色物（なんしよくもの）　浮世草子【性質】同性愛・同性性慾の生活を取扱つた浮世草子。端物集と續物とあり、また具體的描寫のものと說明的なものとある。端物に在つても、續物に在つても、純粹に同性愛や同性性慾のみを取扱つたものと、これに伴ふ義理・意氣地を併せ取扱つたものとがある。後者は一面好色本に

の若衆と所え出る心得の事」「主人に愛せらるゝ若衆心得の事」「心を花車第一の事」「町人若衆心得の事」「人に物を借まじき事」「人に戀慕せられし時心得」「早く兄分をさだむべき事」「何事も兄分にとふべき事」「人に狀つけられし時の事」「手跡よき若衆心得の事」「萬食物心得の事」「句ひをとむる事」「若道床入の事」に分れ、相

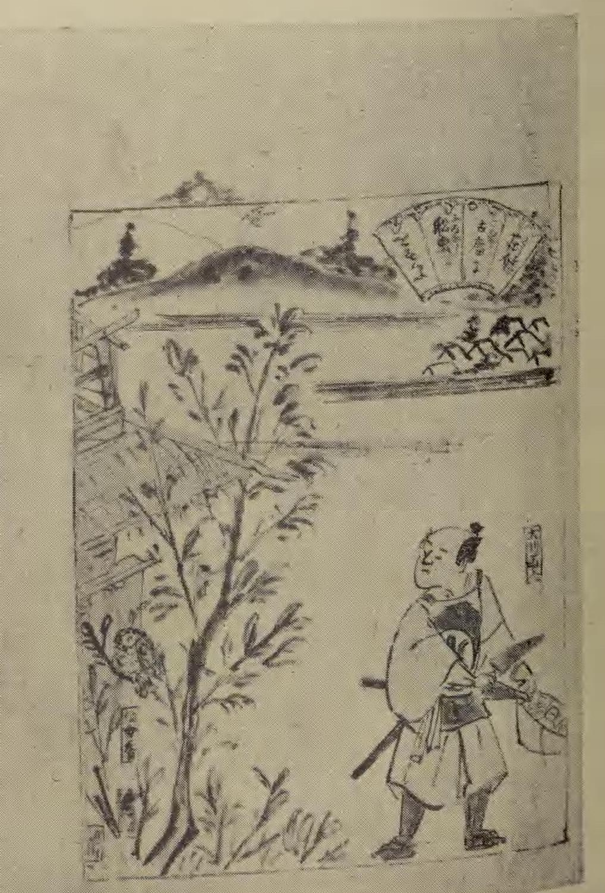
なく、「新錢戲樂通寶」の如きは、通人を主題として洒落本的色彩が強い。併しながら當世風の作品には殆ど齒が立たず、「敵討義女英」（別項）が世の喝采を博するや、この方面に自己の行くべき道が多少見えて來たらしく、これまでは、楚滿人の敵討物の準備時代であつた。「新錢戲樂通寶」は別として「敵討三味線由來」「八橋調能流」の如き敵討物と、「賴朝一代記」（天明三年刊、清長畫）「賴光一代記」「文麿一代記」（寛政五年刊、豐國畫）の如き一代記物と、「源平軍物語」（天明七年刊、政美畫）、「二代大中黑」（寛政五年刊、春英畫）、「苅萱染衣日記」（寛政五年刊、春英畫）の如き軍記物とがあり、いづれも黃表紙としては時代遲れのものであるが、音樂を取入れた敵討物はやゝ見られる作品である。作柄は多くは子供向の低級さで、且つ屢々修養の不足や戲作者としての素質の惡さを暴露する。「敵討義女英」の歡迎によつて楚滿人の創作態度に活氣を呈し、彼自身も古風であると意識し、京傳や全交に伍し得るものではないと思ひながらも、「三世相郎滿八算」の三世相、「今度者鬼息才」（寛政九年刊、豐國畫）の鬼と見世物、「化物大閉口」（寛政九年刊、豐國畫）の化物に進歩した人間社會の取り合せ、「一狂言狐書入」（寛政十一年刊、豐國畫風）の狐に化されての遊興の如く、やゝ世間並の作品をも出したが、それも漸減し、享和元年頃から本格的に敵討物となつてゐる。敵討の最大原因の怨恨には、多く青少年の戀をからませ、武器・寶物等の爭奪によるものもある。青年男女が多く活躍する初々しさに世の喝采があり、南方に起つた事件は江戸或は北方に移行して解決し、北方に起つた事件は南方に進めて解決する事が屢々である。作品中には殺害の方法を色々と趣向し、中には慘酷と思はれるものも見える。女性は多くは貞節で、後妻は屢々先妻に殺される。後年には幼女虐待の記事や年少者の孝行を特筆する。そして結末は類型的のお目出度で、結婚で結ぶ場合が多い。敵討物として筋を複雜にし、内容を充實させる必要上、黃表紙としては長篇に過ぎ、合卷的傾向の作品即ち前・後二篇、或は初・中・後の三篇の續き物が

楚滿人似顏繪（化物大閉口）

八犬傳」「八犬傳」などとも呼ばれる。下總里見家に仕ふる犬の文字を姓とする八人の豪傑の傳記をつづるに據る。【成立】成立の顚末は、本書の最後の總跋に代へた附錄「回外剩筆」に盡くされてゐる。これを成稿した作者晩年の文化十一年から天保十二年までの間の苦心は、尋常のものではなかつた。それは更に彼の日記や、屢々親友殿村篠齋に書き送つた手簡でも知られる。文政六年には妻と男宗伯とが患ひ、同十年には自身が大に病み、また天保四年夏頃から右眼の明を失つたところへ大病に罹り、引續いて神田同朋町に醫を業としてゐた宗伯が歿した。かく引續く不幸のうちに、また左眼も漸く見えなくなつて、天保十一年には全く失明してしまひ、次いで妹も歿し、妻にも先立たれた。その一家の處理はともかく、彼の失明は作家として如何にも悲慘であつた。嚢に「八犬傳」のみならず、多くの讀本・合卷等の述作を成してゐた精力絕倫を以てしても、視力が衰へては稿本を手さぐりに大字數行を書いて行き、漸く筆を絕つやうに見えたので、出版書肆文溪堂、貸本屋等がしきりに懇願し、宗伯の妻路女が少しく文字を知るのに、一字一句毎に敎へて書かせ、大團圓を遂ぐるに至つた。この時馬琴は七十五歲であつた。【刊行】文化十一年（第一輯）・同十三年（第二輯）・文政二年（第三輯）・同三年（第四輯）・同六年（第五輯）・同十年（第六輯）・同十二年（第七輯上帙）・同十三年（第七輯下帙）・天保三年（第八輯上套）・同四年（第八輯下套）・同五年（第九輯上帙）・同六年（第九輯中帙）・同七年（第九輯下帙下）・同八年（第九輯下帙中）・同九年（第九輯下帙上）・同十年（第九輯自卷二十九至卷三十二）・同十一年（第九輯自卷三十三至卷四十五）・同十二年（第九輯自卷四十六至卷五十三）。【諸本】第一輯より五輯まで山青堂（山崎平八）が刊行したが、他事に耽つて破產し、その刻版を湧泉堂（美濃屋甚三郎）に賣つた。然るにこれもその人を得ず、第六輯刊行後第七輯は文溪堂（丁子屋平兵衞）の助けで辛うじて刊行したが、遂に版權を手離し、文溪堂が買取つて續刻發行した。出版の度毎に裝幀を變へてゐるが、多く犬を象つた模樣で、半紙本である。この當時再版されたものには、第七輯卷之七の犬田小文吾が暴牛を駐むる圖がない。版木が轉じた時に失はれたものか、或る事情で削つたとも言はれてゐる。なほ永く版木が遺つてゐて、明治以降東京で兎屋（半紙本百六冊）・博文館（明治三十年、半紙本、三十七冊）等で再版され、また日本名著全集（菊半截、三冊）にも複刊されてゐる。また活版では東京稗史出版社本・兎屋本・帝國文庫・國民文庫・有朋堂文庫等がある。なほこの草稿の現存するもの、早稻田大學圖書館に三十八冊、そのうち、第八輯卷之一が稀書複製會で複製されてゐる。また馬琴が校訂した手澤本が帝國圖書館に藏せられてゐる。【題材】作者はよく序跋或は卷首、卷尾の附言に、典據・批評・考說・註解等をしてゐるが、それに題材等が暗示されてゐることがある。これは支那小說、特に「忠義水滸傳」（第二輯卷之二の末の附記等）、また「北條五代記」「甲陽軍鑑」「本朝三國志」（回外剩筆）「里見八劍士の故事」（書言事考等）を藉りてゐるが、最も「水滸傳」に多く據り、「里見記」「里見九代記」「里見軍記」「房總治亂記」「房總志料」等を參考して作り設けられたのである。また仔細に見れば「三國志演義」等の支那小說や、我が國の軍記及び記錄・地誌等に依據したものが多く、恰も

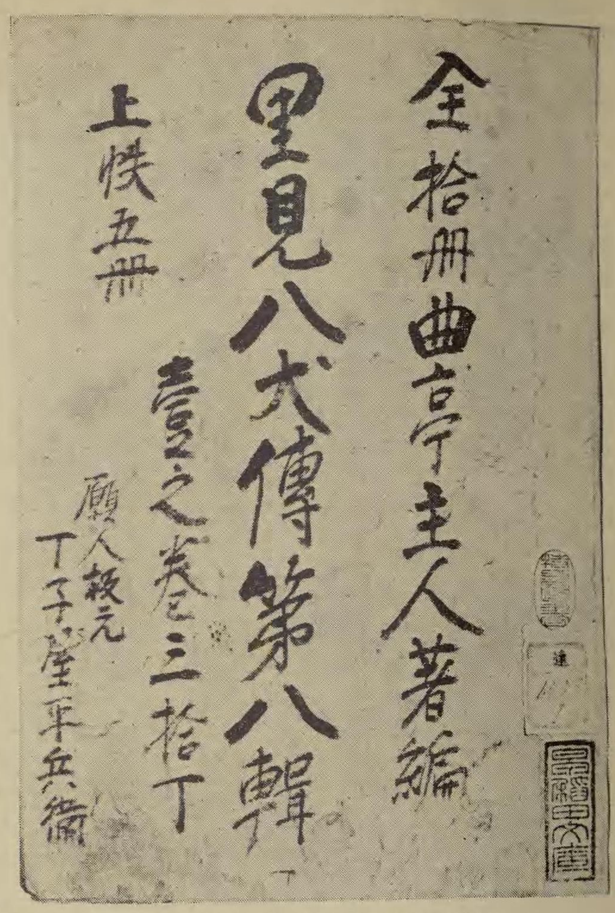


第八輯表紙（早大圖書館藏）

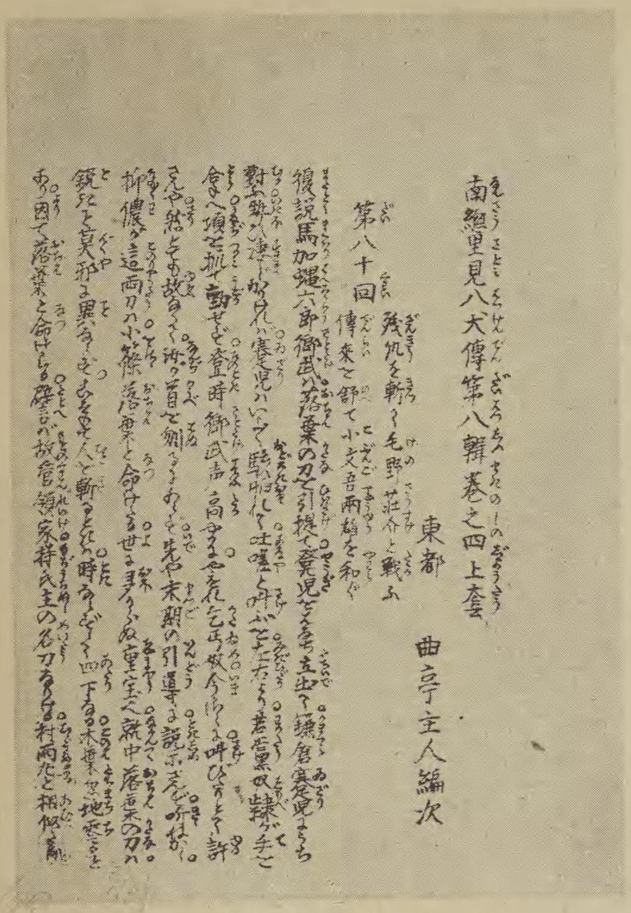


第八輯　卷之

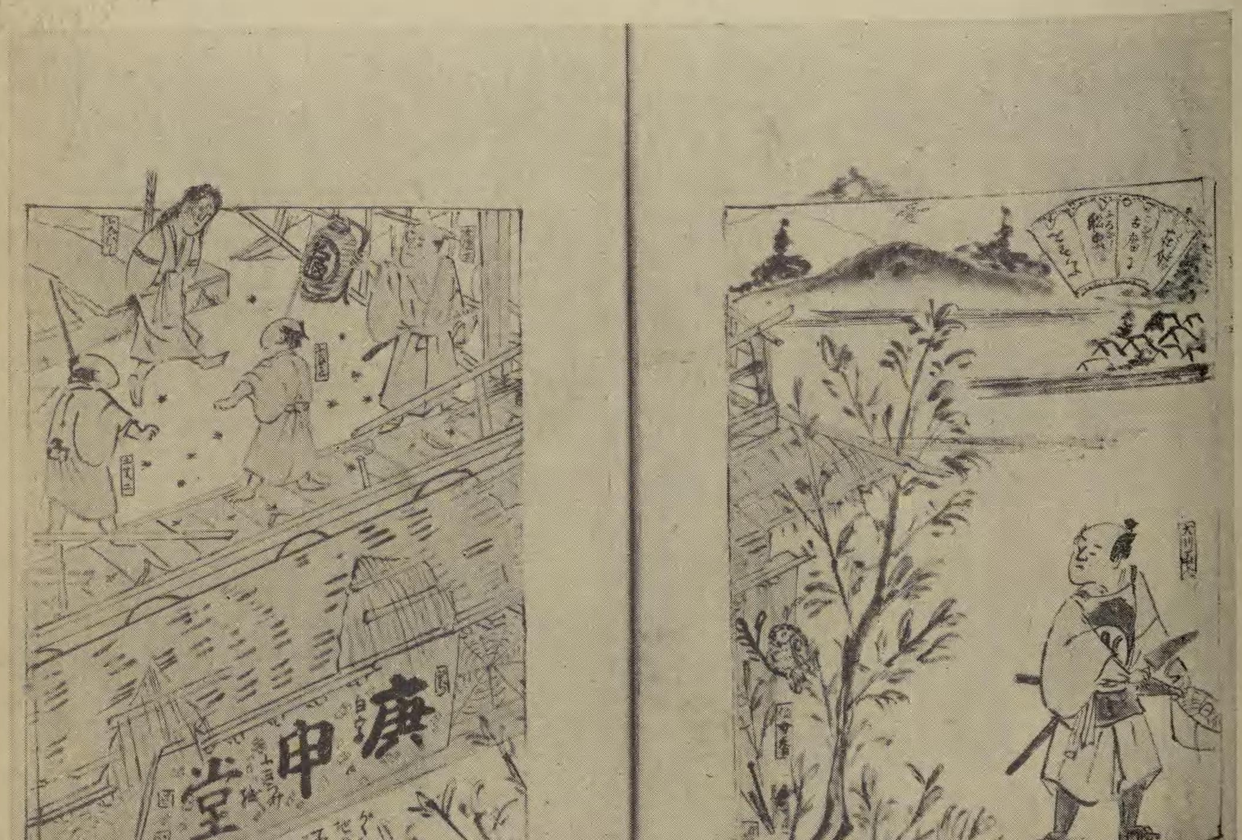
馬琴自筆八犬傳稿本


全拾冊曲亭主人著編
里見八犬傳第八輯
壹之巻三拾丁
上帙五冊
顧人板元
丁子屋平兵衛

第八輯表紙（早大圖書館藏）


南總里見八犬傳第八輯巻之四上套
東都　曲亭主人編次
第八十回
殘兇を斬る毛野莊介と戰ふ
傳來の舒て小文吾兩腕を和ぐ
猿說馬加蝮六郎御出張治藥の刀を引提て義兒を毛玉まで鏡倉巻兒
數人の連一ツ只れ養兒ハ一ツ野れて立嘻と叫ぶと上ゐ若黨奴隷が手ご
會へ頭を抓て動せを查時御武高高ゆる先や末期の引導ゴ說ぶさ
さんや然とそも故ぐく敵の首を劍うめそ
折儂が這両刀ハ小篠落葉と命けるせよ
鏡と莫邪と異物と思ふなよ
と言下る木遣や地突
あり因て落葉と命けらる歷々が故實領家持氏主の名刀なる村雨丸と相似て

第八輯本文（同上）



第八輯　巻之二挿繪（同上）

牛入閉口之貧士あり、豐國畫の作物に進歩した人間社會の取り合せ、「一狂言狐書入」（寛政十一年刊、豐國畫風）の狐に化されての遊興の如く、やゝ世間並の作品をも出したが、それも漸減し、享和元年頃から本格的に敵討物となつてゐる。敵討の最大原因の怨恨には、多く青少年の戀をからませ、武器・寶物等の爭奪によるものもある。青年男女が多く活躍する初々しさに世の喝采があり、南方に起つた事

の一方的の缺陷と長所とが合致したものであり、世の推移を洞察しての事ではなく、この偶然さが、實際以上に彼の名聲を高く評價させてゐる。

南總里見八犬傳（なんそうさとみはっけんでん）【小池】

九十八巻百六冊【作者】曲亭馬琴【畫工】柳川重信・溪齋英泉・二世柳川重信・玉蘭齋貞秀・歌川國貞等が分擔執筆。【名稱】略して「里見

であつた。【刊行】文化十一年（第一輯）・同十三年（第二輯）・文政二年（第三輯）・同三年（第四輯）・同六年（第五輯）・同十年（第六輯）・同十二年（第七輯上帙）・同十三年（第七輯下帙）・天保三年（第八輯上套）・同四年（第八輯下套）・同五年（第九輯上帙）・同六年（第九輯中帙）・同七年（第九輯下帙上）・同八年（第九輯下帙中）・同九年（第九輯下帙下）・同十年（第九輯自巻二十九至巻三十二）・同十一年（第九輯自巻三十三至巻四十五）・同十二年（第

支那小說、特に「忠義水滸傳」に據り（第二輯巻之二の末の附記等）、また「北條五代記」「甲陽軍鑑」「本朝三國志」（同外題等）「里見八劍士の故事」（書言事考等）を繙りてゐるが、最も「水滸傳」に多く據り、「里見記」「里見九代記」「里見軍記」「房總治亂記」「房總志料」等を參考して作り設けられたのである。また仔細に見れば「三國志演義」等の支那小說や、我が國の軍記及び記錄・地誌等に依據したものが多く、恰も

彼の知識と手法とを展開し、形象化するために、物語が作られたかの感がある。例へば、闘牛の知識を新たにすることがなかつたら、犬田小文吾の越後に於ける物語はなかつたであらうし、狸穴の考證を得なかつたら、〻大法師が結城に赴く途中の説話は、生れなかつたであらうし、殊更に九輯の大部分を親兵衛の附りの物語に費してゐる點や、冗長で銜氣に滿ちた考證を隨所に挿入してゐる點などから見ても、彼の知識・學殖の披露のために書かれたもののやうである。

【梗概】〔一輯〕關東管領足利持氏は、京都の將軍足利義敎と確執を生じ、永享十一年二月鎌倉で討たれた。下總の豪族結城氏朝は持氏の子を擁して結城城に據り、持氏恩顧の士多くこゝに集まつたが、衆寡敵せずして嘉吉元包の老黨蓼毛元頼が預る東條の城を抜き、翌日氏元を殘して後陣に備へ、義實は孝吉・貞行と共に二百餘騎を率ゐて瀧田に向ひ、途中千餘騎の義兵を得てひた押しに定包を圍んだ。定包は先づ岩熊鈍平・錆塚幾内を將として、五百餘騎にこれを迎へ擊たせたが、忽ち幾内は討たれ、鈍平は深傷を負ふ敗戰に、退いて固く城を守つた。これがため義實等は次第に糧食盡き、且つ定包は妻立戸五郎を遣はして安西・麻呂に援を請うたので、孝吉・貞行は各々奇策を以て急戰に出でんとしたが、良將義實はこれを止めて檄文を附けた鳩を放ち、城内の士氣を攪亂する計を施し、これが奏效して鈍平・戸五郎の兩人は、定包を殺して傭兵と共に義實に降つた。義實は卽ち城に入つて民のために倉廩を開き、孝吉に命じて鈍平・戸五郎・玉る水晶の珠數を得、これより姫は健かに美しく成長して行つたが、こゝに堀内貞行は東條よりの歸途、長狹郡富山に近い里の百姓技平の家に、狸に養はれた犬があることを聞き、これを瀧田の城に伴ひ來りて後園の番犬とし、名を八房と呼んだ。然るに伏姫十六歳の秋、景連は訥平を使者として凶作を告げ、米五千俵の借用と伏姫を養女にしたい由を申し入れたので、義實は米を貸與し、養女の義は卻けたが、翌年は里見領が凶作となつたので、孝吉の遺子金碗孝德を使として五千俵の返還を請はせると、景連は孝德を留めて急に兵を集め、自ら大軍を率ゐて義實の城を圍み、且つ潜入した。

〔二輯〕この間に伏姫は富山の洞窟に籠り、法華經を念じて妖犬を德化したが、物類相感の理によつて懐姙の身となり、一日山中に逢うた神童にこれを告げられるや、八房と共に自殺せんとして偶々孝德の銃彈に斃れた。折柄

伏姫深山に畜

彼の知識と手法とを展開し、形象化するために、物語が作られたかの感がある。例へば、闘牛の知識を新たにすることがなかつたら、犬田小文吾の越後に於ける物語はなかつたであらうし、狸穴の考證を得なかつたら、〻大法師が結城に赴く途中の説話は、生れなかつたであらうし、殊更に九輯の大部分を親兵衛の附りの物語に費してゐる點や、冗長で衒氣に滿ちた考證を隨所に挿入してゐる點などから見ても、彼の知識・學殖の披露のために書かれたもののやうである。

【梗概】〔一輯〕關東管領足利持氏は、京都の將軍足利義敎と確執を生じ、永享十一年二月鎌倉で討たれた。下總の豪族結城氏朝は持氏の子を擁して結城城に據り、持氏恩顧の士多くこゝに集まつたが、衆寡敵せずして嘉吉元年四月終に落城した。この時、結城勢の名將里見季基は、討死に際して嫡子義實の英才を惜しみ、杉倉氏元・堀内貞行の二臣を附けて戰場を落した。義實等はかくて血路を開いて遁れ、相模三浦から安房に渡らうとして白龍の昇天を見た。當時安房は館山の安西景連、平館の麻呂信時、瀧田の神餘光弘の三將に分割され、長狹・平群の二郡を領した光弘が最も旺んであつたが、彼は妖婦玉梓の愛に溺れて政を紊したので、奸臣山下定包は權勢を恣にして玉梓と通じ、遂に己に恨を含む杣木朴平・洲崎無垢三を欺いて光弘を殺させ神餘の家を奪つた。こゝに於て安西・麻呂は、共に定包を討たうと圖つた。その頃義實主從は景連を賴つて來たが、兩將は彼等を疑ひ、この國に產しない鯉魚を求めたので、義實等は長狹白鷺川の上りに釣して偶々神餘の忠臣金碗孝吉の流寓するに逢ひ、彼に導かれてその夜のうちに定包の老黨萎毛元賴が預る東條の城を抜き、翌日氏元を殘して後陣に備へ、義實は孝吉・貞行と共に二百餘騎を率ゐて瀧田に向ひ、途中千餘騎の義兵を得てひた押しに定包を圍んだ。定包は先づ岩熊鈍平・錆塚幾内を將として、五百餘騎にこれを迎へ擊たせたが、忽ち幾内は討たれ、鈍平は深傷を負ふ敗戰に、退いて罔く城を守つた。これがため義實等は次第に糧食盡き、且つ定包は妻立戸五郎を遣はして安西・麻呂に援を請うたので、孝吉・貞行は各々奇策を以て急戰に出でんとしたが、良將義實はこれを止めて檄文を附けた鳩を放ち、城内の士氣を攪亂する計を施し、これが奏效して鈍平・戸五郎の兩人は、定包を殺して傭兵と共に義實に降つた。義實は卽ち城に入つて民のために倉廩を開き、孝吉に命じて鈍平・戸五郎・玉梓等を成敗させたが、この時玉梓は深く義實・孝吉を恨み、彼等に祟りをなすと誓つて死んだ。一方定包の請に應じた安西・麻呂は、共に兵を進めて東條の氏元を圍んだが、景連は麻呂の所領を併せんと氏元に内通して信時を討たせ、自ら信時の居城平館を攻めて一擧に野望を達したので、氏元は蜑崎輝武に信時の首を持たせ、義實にこの由を報じた。やがて景連は老黨蕪戸訥平を使として義實に好を通じ來り、かくて嘉吉元年七月景連は安房・朝夷二郡を領し、義實は神餘の舊領を併せて安房は一時平定した。次いで義實は功臣を賞せんとしたが、金碗孝吉はこの時功成つて義を忘れず自殺した。その後義實は上總椎津の城主の女五十子を妻として娘伏姫、嫡子義成を儲けたが、伏姫に夜泣きの癖があつたので、三歳の時安房郡洲崎明神に祈り、役行者の示現に依つて仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の八字を彫れる水晶の珠數を得、これより姫は健かに美しく成長して行つたが、こゝに堀内貞行は東條よりの歸途、長狹郡富山に近い里の百姓枝平の家に、狸に養はれた犬があることを聞き、これを瀧田の城に伴ひ來りて後園の番犬とし、名を八房と呼んだ。然るに伏姫十六歳の秋、景連は訥平を使者として凶作を告げ、米五千俵の借用と伏姫を養女にしたい由を申し入れたので、義實は米を貸與し、養女の義は卻けたが、翌年は里見領が凶作となつたので、孝吉の遺子金碗孝德を使として五千俵の返還を請はせると、景連は孝德を留めて急に兵を集め、自ら大軍を率ゐて義實の城を圍み、且つ訥平に命じて東條の貞行を攻めた。これには流石の里見勢も應戰の暇なく、七日にして早や落城と見えたが、圖らず伏姫を與へようとの義實の戲言を信じた八房が、單身景連を殺して來たので奇勝を博し、間もなく訥平等も討たれて義實は全く安房を平定した。かくて義實は、持氏の末子管領成氏より京都に請うて治部少輔に任ぜられ、改めて安房の國主となつたが、八房は伏姫を欲して止まず、遂に因緣を悟つた伏姫は、八房に伴はれて兩親の城を出で永く富山に隱れた。これより先き孝德は景連の許を遁れ出で、成氏に援を請うて主家を救はんとしたが果さず、私かに歸城の機を狙つてゐたが、この怪聞を知つて八房を擊たうと獨り富山に潜入した。

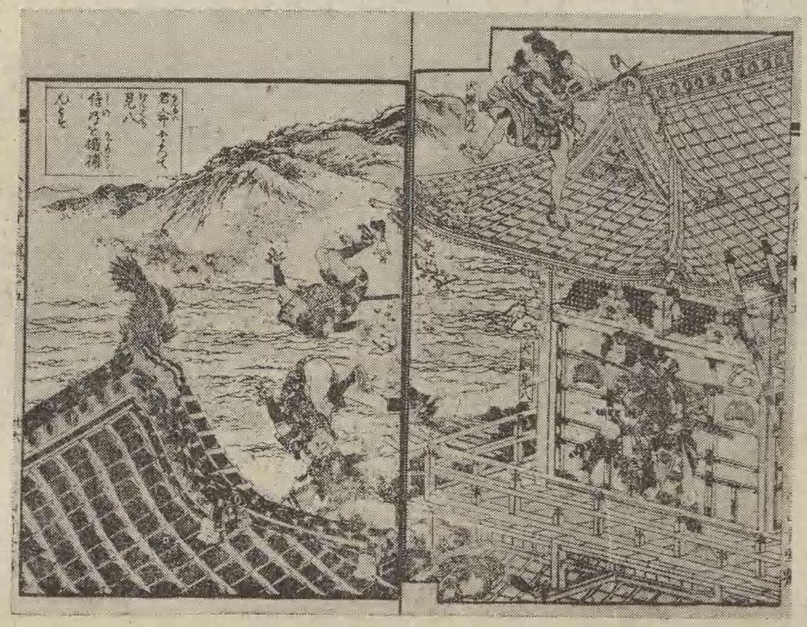
〔二輯〕この間に伏姫は富山の洞窟に籠り、法華經を念じて妖犬を德化したが、物類相感の理によつて懷姙の身となり、一日山中に逢うた神童にこれを告げられるや、八房と共に自殺せんとして偶々孝德の銃彈に斃れた。折柄義實は奥方の遺言と役行者の示現によつて、貞行を伴うてこの場に來り、かの八行の珠數に祈つて一度娠を甦らせたが、姫は自ら刄に伏して果て、その傷口から白氣が昇つて珠數を八方に飛び散らした。これやがて八犬士が諸方に生るべき前兆であるが、孝德はこの時

伏姫深山に畜生に伴はる（第一輯）

罪によつて出家し、大といひ、伏姫の後世を弔ひ、且つかの靈珠を集めんとて旅立つた。先に結城落城に際して、持氏の子春王・安王は管領滿方の將長尾因幡介の手に囚はれ、持氏の近習大塚匠作は主家の寶刀村雨丸をその子番作に託して親子亂軍の中を遁れたが、次いで春王・安王が、因幡介等の手で京に押送される途中、匠作は私かにこれを奪はんとして果さず、二君と共に青野ケ原に討たれた。この時彼等の跡を追うて來た番作は、直ちに因幡介の部下を斬り、木曾夜長獄の麓に遁れて君父の首を葬つたが、偶々賊僧蚊牛を討つて、許婚の結城の方人井丹三の娘手束とこゝに會し、共に筑摩の里に忍ぶこと三年にして番作の故郷武藏豐島郡大塚の莊に戻つた。然るに番作の家は義姉龜篠の夫彌々山蟇六のために奪はれてゐたので、番作等は百姓糠助を初め村人の深切に護られてこの里に佗住ひの身となつたが、やがて手束は瀧野川の辨天に祈つて懷姙し、一子信乃を生んだ。かくて信乃は十一歲の時母を失ひ、父に仕へて益々孝且つ俊敏であつたが、偶々飼犬與四郎が蟇六のために殺したことから蟇六は難題を構へて村雨丸を奪はうと圖るので、番作はこれがため自殺し、死を決した信乃が情けの刃で與四郎を斬ると、その傷口から孝の字を彫つた玉が飛び出して信乃のものになつた。そこで信乃は村人の讒を虞れた蟇六夫婦の許に養はれることになり、父の遺言によつて犬塚信乃戌孝と名乘り、同年輩の額藏といふ蟇六の小者と親しくなつた。これが伊豆北條の莊官犬川則任の遺子莊之助で、鎌倉の足利成氏、兩管領に攻められて滸我に退き、義教の四男政知、京より右兵衞督として伊豆に來り暴政を布くや、父則任はこれを諫めて讒死した。莊之助は母に伴はれて緣者なる里見の家臣蜑崎照武を頼つて行つたが、戰國の世とてこれを果さず、途中母が病歿したので、蟇六に養はれて今日に至つた者であることを知り、且つ額藏も出生の時に得た義の字のある信乃と同樣の玉を持つてゐたので、これと義を結び、額藏は莊介義任と名乘つた。

〔三輯〕その翌年、蟇六は信乃の喪の明けるのを待つて元服させ、養女濱路の聟とする由を披露し、信乃はうはべ許りの溫情に育つて十八歲となつた。時に文明九年、武藏豐島の城主豐島信盛は、越後の長尾景春に味方して弟練馬倍盛と共に山內・扇谷の兩管領に叛き、亘田持資・植杉刑部・千葉介自胤の三將に攻められて滅んだ。又この年に百姓糠助は、嘗て信乃等と同じ玉を持つ一子玄吉と葛飾行德で別れた旨を信乃に告げて病歿した。然るに翌年陣代簸上宮六は、巡視の途次屬官軍木五倍二・卒川蒐八等と蟇六の家に宿り、濱路を見染め、やがて五倍二を通じて婚を申入れたので、蟇六等は信乃を遠ざけようとして先づ扇谷の浪人網乾左母二郎、惡船頭土太郎等を語らひ、信乃を神宮川に誘うて村雨丸の寶刀を奪ひ且つ水中で殺さうとしたが果さず、翌日信乃は濱路の切なる情を卻け、額藏に送られて寶刀を成氏に獻ずるために滸我に赴いた。その夜蟇六は宮六と濱路の婚姻を結ばうとしたが、神宮川で村雨丸をすりかへた左母二郎は、豫て戀する濱路を奪つて逐電し、武藏本鄕に近い圓塚山で、追うて來た土太郎等三人の惡漢を斬り、濱路も信乃に節を立てて討たれた。折柄こゝで火定に入つた修驗者寂寞道人肩柳が現れて左母二郎を殺し、村雨丸を奪つたが、彼は練馬の老臣犬山道策の子道松で、扇谷定正とその臣竈門三寶平を君父の仇と狙ひ、家傳の忍術を以て修驗者となりすまし、軍資金を集めてゐた。濱路は實にその異母妹であつた。その時信乃に別れて此處に來た額藏は、事情を知つて信乃のために寶刀を奪ひ返さんと、道松今は犬山道節忠與と爭ふが、道節は火遁の術を以て遁れた。一方蟇六・龜篠は、婚姻を僞つたといふので、宮六・五倍二のために慘殺されたが、恰も歸宅した額藏は宮六を討つて主の仇を報じ、罪によつて宮六の弟社平の手に捕はれた。さて滸我に着いた信乃は重臣橫堀在村を通じて成氏に寶刀を獻ずる旨を述べ城中に招かれてから始めて村雨丸の盜難を知つたが時既に遲く、敵の間諜と誤まられて捕はれようとし、捕物にかけては滯中無双の勇士犬飼見八信道と芳流閣上に格鬪した。

〔四輯〕この時、信乃と見八は共に三層樓の屋根より坂東河の岸につないだ船に落ちて押し流され、葛飾行德の浦に到り、旅宿古那屋文五兵衞に救はれた。この文五兵衞はかの神餘光弘の橫死の際、主君を護つて討たれた那古七郎の弟で、伜小文吾、娘沼藺といふ子があり、沼藺は市川の船長山林房八に嫁いで、犬八といふ子をまうけてをり、小文吾は大力で物識犬太といふ土地の惡漢を懲してから犬田の小文吾と呼ばれ、近頃鎌倉の山伏先達念玉と修驗道觀得の所得爭ひの相撲に、妹聟の房八と爭つたことがある。また見八は文五兵衞の舊知の滸我の武士犬飼見兵衞に養はれた、かの糠助の遺子玄吉で、信の字の靈玉を持ち、小文吾も悌の字の玉を持つて共に信乃と宿緣ある由がわかつた。かくて兩勇士は、古那屋に潛むことになつたが、信乃はその夜から破傷風に罹つたので、見八改め現八は、武藏柴浦に名藥を求めに行つた留守中、在村の命を受けて信乃の詮索に來た新織帆太夫のために、文五兵衞は代官所に引かれ、小文吾獨り信乃を護つて窮地に陷つた。この事情を知つた房八は私かに先の相撲の遺



信乃・見八芳流閣上に格鬪す（第三輯）

恨に託して沼藺を返し、己は信乃を訴人する如く見せて小文吾の手にかゝり、信乃の身代りにならうと企て、母妙眞と圖つて巧みに小文吾を欺き、沼藺と共にその双に斃れた。房八のこの苦計は彼が光弘を殺した杣木朴平の後で古那屋のためには仇であつたところから出で、小文吾は意外な悲劇の展開に驚くが、この房八と沼藺の生血によつて信乃の破傷風は立ちどころに癒え、且つその場に現れた念玉と觀得は實にかの八つの靈玉を集めんとする金碗孝德のゝ大法師と、里見家のために勇士を求めて廻國する蜑崎輝武の子照文であつたので、因緣の奇遇は一層深いものとなり、ゝ大によつて房八の子大八が仁の字の玉と牡丹の痣とを持つて幼いながら犬士の一人である事實が明かとなるに及んで、一同の悲喜はその頂點に達した。翌朝小文吾は房八の首を

うと圖つた。一方額藏は、社平・蔥八・五倍二等のために水責め鞭責めの拷問に遭つたが、靈玉の加護によつて命を全うしてゐるうち、社平等の賄賂を受けた陣番丁田町進は、額藏を死罪に陷し、七月二日庚申塚で刑戮しようとした。その日信乃・現八・小文吾は、これを知つて一擧に刑場を破り、社平・蔥八・五倍二等を討つて額藏を救ひ、町進の追擊を、猎平とその子、力二郎・尺八の兄弟の援を藉りて遁れたが、力二郎・尺八は、この時町進を討つて共に命を落した。次いで四犬士は上野の國明巍山に赴いたが、やがて犬山道節を尋ねようと扇谷定正の居城白井を指して行く。こゝに一族山內顯定との不和により俄に鎌倉から白井に城を移した定正は、七月五日砥澤の山に狩競して、翌日多くの家臣を率ゐて歸城する途中、村雨丸の名刀を所持する千葉の浪人大出

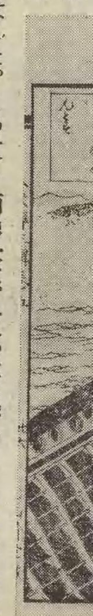
四郎今の猎平と戀に落ちて、力二郎・尺八をまうけ、道節の母お是非の方の情に救はれたが、池袋の戰の後に一家離散して今日に至つたのであつた。その夜四犬士と道節及び先の庚申塚の變に、屬役仁田山晋五の奸計により額藏と信乃として梟首された我が子、力二郎・尺八の首を奪つて來た猎平とは、期せずして音音の家に集り、互に事情を明かして再會を喜び、且つ共通の玉と痣によつて道節が犬士の一人であることも明かになつたが、早くも一同の動靜は定正の追手の知る所となり、その家は時を移さず亘田薪三郎の軍勢に取圍まれた。〔六輯〕已むを得ず、猎平夫婦は家に火をつけて遁れ、五犬士も各々血路を開いて落ちのびたが、小文吾に護られた曳手・單節は馬に縛りつけられたまゝ野武士に襲はれ、その折變異に遭つて行方知れずになつた。小文吾は夜ど

品七の物語により大記の舊惡を知つた。それは自胤が石濱の城主となつた當初、大記は自胤の兄實胤の長臣として赤塚の城下に威權を振つてゐたが、實胤が家督を弟に讓らうとするや、大記は自胤の老黨粟原胤度・籠山逸東太の二人に、勢を殺がれることを恐れ、胤度が主命を帶びて、名寶嵐山の尺八と小篠・落葉の名刀を携へて、赤塚に使せんとするに際して自胤に讒し、逸東太を謀つて途に胤度を討たせ、その折尺八と名刀を並四郎・船蟲に奪はせて、逸東太をも失脚させ、自ら二者の權勢を併せたのであつた。間もなく大記は小文吾を毒害せんとしたが、靈玉の奇特によつて果さず、又千葉家橫領の謀叛に誘はうと圖つたが、小文吾が肯かないので私かに刺客を派した。然るにこの刺客はこゝに招かれてゐた旦開野と知する女田典師のために擊たれ、次いで小文

恨に託して沼蘭を返し、己は信乃を訴人する如く見せて小文吾の手にかゝり、信乃の身代りになろうと企て、母妙眞と圖つて巧みに小文吾を欺き、沼蘭と共にその双に斃れた。房八のこの苦計は彼が光弘を殺した杣木朴平の後で古那屋のためには仇であつたところから出で、小文吾は意外な悲劇の展開に驚くが、この房八と沼蘭の生血によつて信乃の破傷風は立ちどころに癒え、且つその場に現れた念玉と覿得は實にかの八つの靈玉を集めんとする金碗孝德のゝ大法師と、里見家のために勇士を求めて廻國する蜑崎輝武の子照文であつたので、因緣の奇遇は一層深いものとなり、ゝ大によつて房八の子大八が仁の字の玉と牡丹の痣とを持つて幼いながら犬士の一人である事實が明かとなるに及んで、一同の悲喜はその頂點に達した。翌朝小文吾は房八の首を信乃の首と僞つて父を救ひ、信乃・現八は小文吾に送られて大塚に犬川莊介の額藏を訪ねて行くが、この三人がそのまゝ歸らぬので、ゝ大がその後を追ひ、照文が獨り文五兵衞・妙眞等と大八や佛を護つてゐた。然るに妙眞に懸想した市川の惡漢暴風の舵九郎に事を見破られさうになつたので、照文は妙眞と大八今は犬江親兵衞仁を安房に伴ひ行かうとし、途中舵九郎一味に襲はれるが、不思議にも親兵衞は黑雲に捲き上げられて神隱しに逢ひ、舵九郎は空中に裂かれて果てる。やがて照文は妙眞とその僕依介を伴うて一旦安房に歸り、文五兵衞は小文吾等を尋ねて大塚に向つた。

〔五輯〕先に大塚に赴いた信乃・現八・小文吾の三犬士は、武藏豐島の神宮河原に到り、猪平といふ漁夫に逢ひ、信乃出發後の變を知り、瀧野川の金剛寺に籠つて額藏の莊介を救ひ出さうと圖つた。一方額藏は、社平・菴八・五倍二等のために水責め鞭責めの拷問に遭つたが、靈玉の加護によつて命を全うしてゐるうち、社平等の賄賂を受けた陣番丁田町進は、額藏を死罪に陷し、七月二日庚申塚で刑戮しようとした。その日信乃・現八・小文吾は、これを知つて一擧に刑場を破り、社平・菴八・五倍二等を討つて額藏を救ひ、町進の追擊を、猪平とその子、力二郎・尺八の兄弟の援を藉りて遁れたが、力二郎・尺八は、この時町進を討つて共に命を落した。次いで四犬士は上野の國明巍山に赴いたが、やがて犬山道節を尋ねようと扇谷定正の居城白井を指して行く。こゝに一族山內顯定との不和により俄に鎌倉から白井に城を移した定正は、七月五日砥澤の山に狩競して、翌日多くの家臣を率ゐて歸城する途中、村雨丸の名刀を所持する千葉の浪人大出太郎と稱して行列に近づいた一人の武士が、突然定正を討つて、我こそは練馬倍盛の老黨犬山道策の一子道節忠與なりと名乘りを擧げた。併しこれは、豫め彼を謀らうとした定正の計で、道節に討たれたのは定正に扮した家臣越杉駄一郎であつたが、駄一郎は先に倍盛に直接槍をつけた者であつたので、道節はその首を奪ひ、また父道策を手にかけた寵門三寶平をも討ち、君父當座の仇の首級二つを得て、奮戰その場を逃れた。折から此處に來つた四犬士も追手の一隊に疑はれて双を合せたが、道節の術に救はれて散り〳〵に程近い荒芽山の山中に遁れ入つた。この荒芽山の麓には、晉音といふ老女が、曳手・單節といふ二人の嫁と侘び住ひをしてゐたが、晉音はかの猪平の妻で、嫁二人は力二郎・尺八兄弟の妻であつた。その昔、晉音は犬山道策の家中妮雪與四郎今の猪平と戀に落ちて、力二郎・尺八をまうけ、道節の母お是非の方の情に救はれたが、池袋の戰の後に一家離散して今日に至つたのであつた。その夜四犬士と道節及び先の庚申塚の變に、屬役仁田山晉五の奸計により額藏と信乃として梟首された我が子、力二郎・尺八の首を奪つて來た猪平とは、期せずして晉音の家に集り、互に事情を明かして再會を喜び、且つ共通の玉と痣によつて道節が犬士の一人であることも明かになつたが、早くも一同の動靜は定正の追手の知る所となり、その家は時を移さず亘田薪三郎の軍勢に取圍まれた。〔六輯〕已むを得ず、猪平夫婦は家に火をつけて遁れ、五犬士も各々血路を開いて落ちのびたが、小文吾に護られた曳手・單節は馬に縛りつけられたまゝ野武士に襲はれ、その折變異に遭つて行方知れずになつた。小文吾は夜どほし東を指して走り、武藏阿佐谷の里に到つて、手負ひ猪を倒して獵師並四郎を救ひその家に伴はれた。邪惡の並四郎は小文吾の所持する沙金に目をつけ、これを殺さうとして反つて討たれたが、並四郎の妻船蟲は、贓品の名寶嵐山の尺八の盜人と僞訴し、小文吾を役人畑上語路五郎の手に捕へしめた。併し小文吾は機智を以て巧に身の明かしを立て、賊婦船蟲は却つて召捕られた。折から國主千葉介自胤は小鳥獵の歸途、この事を聞き、語路五郎に船蟲を責めさせ、尺八と共に失はれた小篠・落葉の名刀の行方を詮索し、且つ小文吾に仕官を勸めよと命じて石濱に歸城した。然るに自胤の長臣馬加大記は、押送中の船蟲を奪つて語路五郎を獄死させ、小文吾を敵國の間者として自邸に幽閉した。かくて小文吾は、一年餘を囚はれの身として送つたが、偶々大記の僕品七の物語により大記の舊惡を知つた。それは自胤が石濱の城主となつた當初、大記は自胤の兄實胤の長臣として赤塚の城下に威權を振つてゐたが、實胤が家督を弟に讓らうとするや、大記は自胤の老黨粟原胤度・籠山逸東太の二人に、勢を殺がれることを恐れ、胤度が主命を帶びて、名寶嵐山の尺八と小篠・落葉の名刀を携へて、赤塚に使せんとするに際して自胤に讒し、逸東太を謀つて途に胤度を討たせ、その折尺八と名刀を並四郎・船蟲に奪はせて、逸東太をも失脚させ、自ら二者の權勢を併せたのであつた。間もなく大記は小文吾を毒害せんとしたが、靈玉の奇特によつて果さず、又千葉家横領の謀叛に誘はうと圖つたが、小文吾が肯かないので私かに刺客を派した。然るにこの刺客はこゝに招かれてゐた旦開野と稱する女田樂師のために擊たれ、次いで小文吾と脫出を議つて、旦開野は大記をも討ち果す。彼女は卽ち粟原胤度の遺子犬坂毛野胤智が仇討せんための假りの姿で、小文吾はかくて毛野と共にこの處を脫出するが、墨田河原で毛野を見失ひ、偶々忠僕依介に會つて、市川の變と安房に於ける父文五兵衞の病死を知り、一時故郷に歸つて後、毛野を尋ねて鎌倉に赴き、便を得ずしてまた旅を續けた。次に犬飼現八は、荒芽山から先づ行德を訪ねたが、小文吾の消息を聞かず、諸犬士の行方を求めて江戸から京に上り、擊劍を指南して三年を過して得るところなく、再び東に下つて下野國庚申山の麓に到り、茶店の老爺鵜平から奇談を聞いた。それに依れば、庚申山は豫て山賊・猛獸・妖怪の棲處として噂が高かつたが、これを憂へた赤岩村の赤岩一角武遠といふ武藝の譽れ高い鄕士が、變化を退治して處の難

濱路の切なる情を卻け、額藏に送られて寶刀を成氏に獻ずるために滸我に赴いた。その夜葛六は宮六と濱路の婚姻を結ばうとしたが、神宮川で村雨丸をすりかへた左母二郎は、豫て戀する濱路を奪つて逐電し、武藏本鄕に近い圓塚山で、追うて來た土太郎等三人の惡漢を斬り、濱路も信乃に節を立てて討たれた。折柄こゝで火定に入つた修驗者寂寞道人肩柳が現れて左母二郎を殺し、村雨丸を奪つたが、



儀を除かんものと高弟數人を隨へて山に登つた。途中門人等は恐怖に襲はれて下山し、一角獨り奥深く分け入つたが、そのまゝ姿を見せないので、一同は翌日里人をかり集めて捜索に赴き、一角の無事なのに逢ひ、喜んでこれを伴ひ歸つた。その後一角は後妻に牙二郎といふ子が生れてからは、今までに變つて先妻の子角太郎を憎むこと甚しいので、角太郎の實母の兄である犬村の璽守儀清が甥の不幸を憐んで我が家に引取り、角太郎が十八の春まで育て上げて娘雛衣に配せ、やがて儀清夫婦は前後して病歿した。一方牙二郎の母も牙二郎の幼時に頓死して、此處に流れ來た船蟲といふ女が一角の後妻となつた。この船蟲の惡心のために角太郎は雛衣との仲を割かれ、剩へ伯父から讓り受けた家産を奪はれて、今は赤岩村と犬村との間に草庵を結んで味氣ない日を送つてゐるといふ。現八はそこで今ほ妖怪の噂ある庚申山に分け登り、夜道を冒して、胎内窟と呼ばれる山中第一の石門に到ると、折からの月光を遮つて怪物が現れたので、その左眼を射てこれを退け、進んでとある洞窟に達すると、火を焚いて彼を待つ人があつた。これは眞の赤岩一角の亡靈で、彼は先年の登山の時この山に數百年を經た山猫のために嚙み殺され、山猫は一角に化けて牙二郎を生み角太郎を苦しめてゐたので、今現八に射られた怪物も、毎夜この山に遊行に來るその山猫であるから、角太郎を助けて仇を討つてくれと、證據の短刀と己が髑髏とを現八に託した。そこで現八は下山して角太郎を訪れ、その名より推して犬士の一人ではないかと訊ねると、果して角太郎も共通の痣と禮の字の玉を持つてゐたが、玉は先頃雛衣が病氣の際誤つて嚥み下したといふ。折から繼母船蟲が何故か角太郎を訪れて來た。

〔七輯〕船蟲は、昨夜左眼を傷つけられた夫一角のために氏神へ參詣の歸途、角太郎との不緣を悲しんで入水しようとした雛衣を救つて來たと言つて、先に自ら割いた角太郎と雛衣との夫婦仲を復緣させて戻つて行つた。彼女は馬加大記に助けられ、千葉の城下を逐電して後こゝに流れ來り、端なく贋一角の後妻となつて惡事を重ねてゐたのである。併し現八はこの船蟲の仕打を疑ひ角太郎等のために實情を探らうと、獨り赤岩の一角方を訪ねた。折から一角の許に一人の客があつた。彼は馬加大記に謀られて逐電し、一角の門弟となり、長尾景春に推擧されてゐた籠山逸東太で、この程景春の手に入つた木天蓼丸の短刀の鑑定を請はんため、主命を帶びて一角を訪ねて來たのである。一角は木天蓼丸の良材を得て眼藥にせんと密かに幻術を以てこれを掠めた。そこへ現八は旅人を裝うて入り來り、牙二郎・逸東太以下數人の内弟子に挑まれて武藝を現し、忽ち彼等を取りひしいだ。これを恨んだ一同は一角の奸計によつて現八を暗殺しようとするが、靈玉の加護によつて危機を知つた現八は奮闘して脫れ、角太郎の庵に退く。その後を追つて牙二郎と逸東太は角太郎に迫るが、一足遲れてその場に來つた一角と船蟲は兩人を卻け、豫て得た木天蓼の粉末と併せて雛衣の胎兒の肝を一角の眼傷の藥に用ひたいと、强ひて角太郎夫婦に迫つた。そこで哀れ雛衣は無理往生に割腹する。途端に雛衣の腹からは角太郎の靈玉が飛び出して一角を斃した。驚いた船蟲と牙二郎は角太郎に斬りかゝり、これがため薄傷を受けた角太郎の血を、現八はかの庚申山で託された髑髏に受けると、髑髏の主こそ角太郎の實父であると分つたので、角太郎に實情を告げ、卽ち山猫である一角・牙二郎をその場に討ち取つて、角太郎は父の恨を返し併せて赤岩の妖怪を除いた。やがて亡父と雛衣の弔ひを終へた角太郎は、犬村大角禮度と名乘り、他の犬士に會はうと現八と共に發足した。船蟲はこの時逸東太の證人として長尾家に曳かれる途中、杏掛の驛で逸東太を欺き、木天蓼丸と路銀を奪つて逃走した。話變つて犬塚信乃はその後甲州巨摩郡富野穴山の麓に到つた時、銃獵中の武田の家臣泡雪奈四郎とその僕媼内が賊を働かうとするのを懲し、その折兩人の助命を請うた村長四六城木工作が、信乃の外祖父井丹三の郎黨であつたことを知つてその家に逗留するうち、信乃の亡妻濱路の靈が乘り移つた木工作の養女濱路に戀されて聟に擬せられる。然るに豫て泡雪奈四郎と通じてゐた木工作の後妻夏引は、信乃・濱路を遠ざけんとして果さず、奈四郎は遂に木工作を銃殺し、程近い石禾の指月院に夏引と會して信乃に罪を轉嫁しようと圖つた。かくて夏引の訴へにより武田家の眼代甘利堯元は、翌日信乃と濱路を引立てて行つたが、意外にも堯元は指月院の沙彌念戒によつて夏引等の密計を知り、信乃を救ひに來た犬山道節であつた。これより先き、丶大法師は行德を立ち出で諸國を遍歷中、故あつて石禾の指月院に足を留め近在を德化してゐたのであるが、安房より更に犬士を尋ねに出でた蜑崎照文と會し、また荒芽山を遁れた道節は、犬川莊介と共にこの國に來つて丶大に會し、莊介が先に小文吾等を求めて旅立つた後、丶大・照文と共に、指月院に留まつてゐたのであつた。信乃と濱路はかくて指月院に伴はれ、各々久しぶりの物語をしたが、この時濱路は二歳の時驚に攫はれた里見義成の五の君濱路姫であることが分つた。一方、眞の甘利堯元は信乃等が出たあとを木工作方に赴き、奈四郎の奸策を看破して夏引と家僕出來介を召捕り、これを貫めて實情を知り、明君武田信昌に言上し、奈四郎を捕へんとしたが、奈四郎は早くも媼内を連れて逐電した。こゝに於て信昌は自ら指月院に赴いて、丶大・犬士に對面し、その智勇を知つて永く當國に留めようと圖つたが、信乃・道節はこれを避けて、濱路姫を安房に送る照文と同道して出で、途中武藏神田の原に於て奈四郎を討ち木工作の恨みを晴らした。その翌年の春、先に鎌倉を立ち去つた犬田小文吾は、伊豆の沖に難船して大島・三宅島に迷ひ、それより浪華を經て近畿・北陸道を巡つて後、越後刈羽郡小千谷の鄕に滯留中、處の俠客で角力の上手である宿の主石龜屋次團太に勸められて、小文吾は同國古志郡二十村に行はれる名物の鬪牛を見物に行き、偶々その日の呼び物の須本太牛が暴れ狂ふのを取り鎭めて勇名を轟かせた。

〔八輯〕その後小文吾は眼病に罹つて、次團太方に逗留してゐた。然るにかの毒婦船蟲はこの國に流れ來つて、古志野金倉山の山賊童子隱子酒顚二の妻となつてゐたが、計らず鬪牛の日に小文吾を見て阿佐谷の恨を返さんと附け狙ふ中、小文吾の病難を知るや贋按摩となつて近づき、刺し殺さうとしたが却つて小文吾に取押へられ、次團太等によつて山中の庚申堂に縛められた。話變つて甲斐の指月院を立ち出でた犬川莊介は、小文吾を尋ねて、行德から當陸・奥州を經巡つて越後に入り、恰も

この夜船蟲の囚はれた庚申堂に憩ひ、毒婦の巧言に欺かれて彼女を救ひ、酒顚二の山寨に伴はれて行つた。その夜のうちに石龜屋を襲撃しようとする酒顚二一味の惡計を知つて、共に石龜屋に赴き、折しも靈玉に祈つて病癒えた小文吾と力を併せて賊を皆殺しにした。この時船蟲はかの甲斐を逐電して酒顚二に從つてゐた泡雪奈四郎の惡僕媼内と山寨に火を放つて逃れたが、小文吾・莊介の兩人は、次團太の申立てにより、賊を滅した功で國主長尾景春の執事稻戸由充に請ぜられ、片貝の別館に赴くと意外にも由充の手に捕へられた。當時景春は上野白井に在城し、越後の政は專ら片貝の別館なる景春の母簸刀自の掌るところであつたが、武藏大塚の城主大石憲儀と石濱の城主千葉介自胤は共に簸刀自の女婿に當るので、兩家のために罹人たる二犬士を討ち取

篠・落葉を爭つて鬪ふが、後から畔五郎を討つて來た小文吾に止められて三人は不思議な對面をする。かくて毛野・小文吾・莊介は程近い青柳の宿に會しての物語に、毛野も共通の痣と智の字の玉を持つ犬士の一人であり、かの小篠・落葉の名刀は、本來莊介の家に傳はつたもので、莊介の父の歿後に賣られたのを毛野の父が鎌倉で買ひ求め、これを自胤に獻じて後、並四郎・船蟲に奪はれ、また賣られて行德で小文吾の手に入り、信乃に贈られて遂に莊介の手に戻つてゐたこと等が判明した。そして籠山逸東太を討つ一念急なる毛野は、翌日獨り二犬士に別れ去り、小文吾・莊介は甲斐の指月院へ向つた。さて犬村大角と犬飼現八は東海道を經巡ること三年に及んだが、他の犬士に逢ふことなく、共に赤岩に戻つて雛衣の三回忌と二父の弔ひを濟ませ、再び出でて武

共に犬江親兵衛を尋ねて甲斐の山地を探索する。その留守中、豫て結城の古戰場に結庵して諸將供養の大念佛をしようとしてゐたゝ大は、指月院を後住に渡して先づ穗北を志し、武藏豐島郡麻生の鄕を過ぎる折から、此處に妖術を用ひて良民を掠める長坂山の賊贄鰤坊を擊ち、次いでこの賊のために年久しき棲處を奪はれてゐた猫を救つて大德を現した。玆に又犬坂毛野は、武藏湯島の天神の境内で物四郎といふ放下師に身を代へて、仇の在處を探ねてゐた。或る日毛野に觀相を求めた旅人は、かの越後の石龜屋次團太の乾兒百堀鰡三で、次團太がその後妻嗚呼善と通じた乾兒泥海土丈二に謀られ、船蟲が殘し

に、善惡平・鬼四郎といふ者を殺したが、恰も甲斐を發つて通行中の犬田・犬川・犬村・犬飼四犬士のために捕へられ、積惡こゝに報いて媼内諸共慘殺された。四犬士は、また道節・信乃の二人とも會し、落鮎有種を加へて毛野の仇討と定正の討伐を合議した。

この夜船蟲の囚はれた庚申堂に憩ひ、毒婦の巧言に欺かれて彼女を救ひ、酒顚二の山寨に伴はれて行つた。その夜のうちに石龜屋を襲撃しようとする酒顚二一味の惡計を知つて、共に石龜屋に赴き、折しも靈玉に祈つて病癒えた小文吾と力を併せて賊を皆殺しにした。この時船蟲はかの甲斐を逐電して酒顚二に從つてゐた泡雪奈四郎の惡僕媼内と山寨に火を放つて逃れたが、小文吾・莊介の兩人は、次團太の申立てにより、賊を滅した功で國主長尾景春の執事稻戸由充に請ぜられ、片貝の別館に赴くと意外にも由充の手に捕へられた。當時景春は上野白井に在城し、越後の政は專ら片貝の別館なる景春の母館刀自の掌るところであつたが、武藏大塚の城主大石憲儀と石濱の城主千葉介自胤は共に館刀自の女婿に當るので、兩家のために罪人たる二犬士を討ち取れとの命を由充が受けた。併し由充は義に篤い武士で、刀自のこの擧を諫めたが、その甲斐なくて小文吾・莊介を捕へたが、その器量を惜しんで私かに酒顚二の手下溜六・穴八を殺し、その首に莊介の佩刀小篠・落葉と、嘗て簸上社平の佩刀であつた小文吾の刀を添へて刀自を欺き、二犬士を無事に脫れさせた。恰もその時大石・千葉兩家から館刀自への使者として、丁田町進の弟畔五郎と馬加大記の甥蜘六郎が來てゐたので、小文吾・莊介の贋首と佩刀は彼等の歸國の土産として遣はされ、兩人はこれを護つて信濃路を歸る途中、諏訪の湖畔に於て蜘六郎は落葉の斬れ味を試みようと居合せた鎌倉蹇兒といふ乞食を斬つたが、同じ乞食の相模小猴子と稱してこゝに潛んでゐた犬坂毛野のために殘仇として討ち取られた。更に毛野はこの二人の後を追つて來た莊介と、小篠・落葉を爭つて鬪ふが、後から畔五郎を討つて來た小文吾に止められて三人は不思議な對面をする。かくて毛野・小文吾・莊介は程近い青柳の宿に會しての物語に、毛野も共通の痣と智の字の玉を持つ犬士の一人であり、かの小篠・落葉の名刀は、本來莊介の家に傳はつたもので、莊介の父の歿後に賣られたのを毛野の父が鎌倉で買ひ求め、これを自胤に獻じて後、並四郎・船蟲に奪はれ、また賣られて行德で小文吾の手に入り、信乃に贈られて遂に莊介の手に戻つてゐたこと等が判明した。そして龍山逸東太を討つ一念急なる毛野は、翌日獨り二犬士に別れ去り、小文吾・莊介は甲斐の指月院へ向つた。さて犬村大角と犬飼現八は東海道を經巡ること三年に及んだが、他の犬士に逢ふことなく、共に赤岩に戻つて雛衣の三回忌と亡父の弔ひを濟ませ、再び出でて武藏千住河原に到り、二人の賊に逢つてこれを追うたことから、圖らず穗北の豪族氷垣夏行方に入つた賊と疑はれて捕へられ、私刑に行はれようとしたが、その夜夏行の娘重戸の夢枕に立つた伏姫の加護に救はれて脫れ出で、千住河の船中に道節・信乃の二犬士に逢つた。これより先、道節・信乃に捕へられてゐた河太郎・野良平の二賊を引立てて、四犬士は夏行の許に赴いて大角・現八の冤を雪いだので、夏行は罪を悔いて聟の落鮎有種と共に犬士の味方となることを誓ひ、永く四犬士を家に留めた。間もなく大角・現八は、この由をゝ大に報ずべく指月院に使し、信乃と共に殘つた道節は、有種が同じ練馬の殘黨であるを幸ひ、これと力を併せて、今は程近い五十子に在城する扇谷定正の動靜を窺つてゐた。指月院に着いた二犬士は、やがて莊介・小文吾と此處に會し、共に犬江親兵衞を尋ねて甲斐の山地を探索する。その留守中、豫て結城の古戰場に結庵して諸將供養の大念佛をしようとしてゐたゝ大は、指月院を後住に渡して先づ穗北を志し、武藏豐島郡麻生の鄕を過ぎる折から、此處に妖術を用ひて良民を掠める長坂山の賊鬢鐸坊を擊ち、次いでこの賊のために年久しき棲處を奪はれてゐた猫を救つて大德を現した。玆に又犬坂毛野は、武藏湯島の天神の境内で物四郎といふ放下師に身を代へて、仇の在處を探ねてゐた。或る日毛野に觀相を求めた旅人は、かの越後の石龜屋次團太の乾兒百堀鯽三で、次團太がその後妻嗚呼善と通じた乾兒泥海土丈二に謀られ、船蟲が殘した木天蓼丸の短刀に關して寃罪に陷ちたので、扇谷定正の室蟹目前の情に縋らうとして遙々來たのであつた。その時恰も五十子から社參に來た蟹目前が寵愛の猿を逃がしたので、物四郎は手練の早技を以て捕へ、功によつて鯽三のために次團太の助命を請ひ、また定正の忠臣河鯉守如に武藝を驗されて奸臣龍山免太夫こと實はその後定正の寵臣となつてゐた毛野の仇龍山逸東太を討つべき密命を受けた。この時道節は物蔭にあつてその始終を聞いてゐた。これより先き媼内と共に越後を逐電した船蟲は、武藏司馬濱に近い谷山の邊に住まひ、辻君となつて客を殺し財を奪ふ惡事を働いてゐた。或る夜も媼内と共に、善惡平・鬼四郎といふ者を殺したが、恰も甲斐を發つて通行中の犬田・犬村・犬飼四犬士のために捕へられ、積惡こゝに報いて媼内諸共慘殺された。四犬士は、また道節・信乃の二人とも會し、落鮎有種を加へて毛野の仇討と定正の討伐を合議した。

、大巧に妖賊を滅す（第八輯）

〔九輯〕文明十五年正月、龍山免太夫は扇谷定正の命により、小田原の北條家に使者として仁田山晋五・竈門鍋介・越杉駱三・鰐崎惡四郎以下の諸卒を從へて五十子の城を出で、武藏品革の宿を過ぎて鈴森にかゝつた時、蟹目前の密命を受け、圖らず多年の宿願を果す機を

得た犬坂毛野は、單身行列を要撃して兎太夫・惡四郎と血戰し、折から東西に現れた小文吾・莊介と力を併せ、遂に兎太夫の籠山逸東太以下を討ち果して本懐を遂げた。この報に接した定正は大に怒り、河鯉守如の諫止を卻けて自ら三百餘人を手勢として品革に急行する。かくと見るより、此處に兵を伏せてゐた現八・大角・道節は、一時に起つて定正の兵を攻め惱まし、中にも定正は、道節に迫はれて兜を射落され、已に危く見えたが、守如の子河鯉孝嗣に救はれて漸く那里の城に遁れた。この難に蟹目前と守如は責を負うて自刃した。一方後陣の信乃は、二十餘人の小勢を以て五十子城の虛を衝いてこれを乘取り、倉廩を開いて民に施したが、品革の勝報に聞を傳へて去り、翌日七犬士は穗北に歸り、それより〻大に會はんと結城に發足した。さて安房の里見家に於ては、義實は既に平群の瀧田に隱居し、嫡子義成家を繼いで安房郡稻村に在城し、杉倉氏元・堀内貞行・荒川清澄・東辰相の四家老に扶けられて勢旺んであつたが、こゝに同國館山の城主蟇田權頭素藤は、もと近江臙吹山の兇賊但鳥業因の子源金太素藤といひ、業因が京に刑死の後、この國に流れ來て偶々疫癘の鬼語を聞き、當時館山城下に猖獗を極めた疫病を治癒してより、昔の徒黨と結んで次第に勢を得た。時の館山城主小鞠谷如滿はこれを虞れ、郎黨兎巷幸彌太を遣して素藤を討たうと圖つたが、素藤は却つて幸彌太を謀つて如滿の家を奪つた者である。かくて館山の城に入つた素藤は、如滿の側室朝顏・夕顏を我がものとして榮華を誇つたが、疫病のために二人は相次いで急死したので、當時反魂の術を以て聞えた八百比丘尼妙椿を招いて二人の姿を求め、魑を遣らうとしたが、妙椿はこの時里見の五の君濱路姬の姿を現して見せた爲め、素藤は姬に懸想して結婚を申入れ、忽ち義成の拒絕を受けた。これを恨んだ素藤は妙椿と圖り、義成の子義通が初甲の式を擧げた際、これを捕へて義成に抗した。こゝに於て義成は自ら三千餘騎を率ゐて館山に素藤を攻めたが、義通が人質に取られてゐるので、決戰の途なく、徒らに城を圍むのみであつた。折から瀧田の義實は、伏姬の靈を祭らうと富山に微行したが、素藤の一味となつてゐた安西・麻呂の殘黨安西出來介・麻呂復五郎・天津九三郎等は、途に義實を襲つた。この時伏姬の神靈により、此處に養はれて既に九歲となつてゐた犬江親兵衞が現れて義實の急を救ひ、犬士の一人として義實に見參した。また同じく伏姬の神靈に護られて二人の嫁曳手・單節と共に、荒芽山から此處に移り住んでゐた姥雪與四郎も、敵の一人南彌六を捕へて現れ來り、伏姬の神慮を義實に告げた。かくて義實と共に富山を下つた親兵衞は、直ちに義實の許しを得て花咲爺與四郎に名馬青海波の轡を取らせ、單身館山城に使して油斷した素藤を見事生捕つて大功を樹て、素藤に代つて館山の城を治めたが、義成の仁心によつて隅田河岸に追放された素藤は、やがて妙椿の妖術によつて人不入山の庵に伴はれ、暫く淫樂に耽るうちにも、館山を奪ひ返して親兵衞に復仇せんものと頻に祕策を練つてゐた。かくて獨り山を下つた妙椿は、妖術を以て稻村城なる濱路姬を、養母夏引の幻靈となつて脅かし、その夜詰として親兵衞を館山より招かしめ、靈玉を地下に埋めさせて後、濱路姬と親兵衞と不義ある如く義成に疑はせて、遂に親兵衞を旅房を養つた狸が佛果を得ず里見家に祟つてゐるのであるから、親兵衞の靈玉に照して擊つべしと敎へ、更に孝嗣を以て一千人を救助したとて、その場で不忍池に入り狐龍となつて昇天した。そこで親兵衞は孝嗣と共に、上總に還らうと兩國河原に到り、偶々賣藥商人となつてゐた石龜屋次團太と百堀鯽三が土地の惡者のために難儀するを救ひ、共に安房に向はうとして宿つた船宿に、偶々照文・與四郎と邂逅し、義成の御敎書を頂き、また素藤に追はれた館山の兵六十餘人の來り加はるを併せた。そこで一同快船に乘じて上總に渡り、直ちに館山に迫つて靈玉の奇特によつて岩壁を割き、城内に亂入して素藤を捕へ、靈玉を以て妙椿に翳せば陰火と共にその姿は消えて、如・是・畜・生・發・菩・提・心の八字を背に現した狸の骸が見出された。かくて荒川清澄は素藤以下の捕虜を率ゐて稻村に凱旋し、親兵衞は七犬士召會の先命を果さんと、政木大全と改名した孝嗣並に次團太・鯽三を伴つて、そのまゝ結城に發足した。越えて四月十六日結城古戰場の草庵に於て、〻大法師は里見家の代香使蜷崎照文、七犬士以下二十餘名をもつて、結城戰死者五十年忌の大法會を修せんとしたが、結城の菩提所正四寺の僧德用はこれを怒つて、結城の家臣長城・堅名・根生野の三士を語らひ、同勢三百五十餘人、俄かに〻大の一行を襲つた。こゝに七犬士は大に戰つたが、不意を擊たれて照文・與四郎は虜にされ、〻大も既に危きところへ、恰も館山より來つた親兵衞が、忽ち敵を打破り、鐵砲に攻められて左右川に落ちた同行の大全・次團太・鯽三を尋ね行くうち、犬塚信乃と再會し、八犬士こゝに揃つて、一同照文・〻大を助けつゝ程近い六

道山能敎院の廢寺に難を避けた。時に結城の使者小山朝重は、この場に急行して味方の非を覺り、〻大等に禮を盡して陳謝すると共に、德用以下の家臣を處罰して事落着したが、結城・里見兩家は、これを機として舊交を復し、〻大は照文・與四郎と共に、先君里見季基の遺骨を齎して安房に歸つたので、義成は領内白濱に新に延命院を興し、盛大な追悼會を營み、〻大を院主にした。次いで穗北の豪族氷垣方に落着いてゐた八犬士は、大船を艤裝して稻村に迎へられ、改めて義實・義成兩公に謁して君臣の誼を結んだが、この時里見家では八犬士の本姓を金碗と定められ、その勅諚を請はんがため、犬江親兵衞・蜷崎照文を正副使として京に上された。兩人は途中三河國苛子崎の湊に於て、海賊今純友奢勘太・瀧龍王修羅五郎の勢を憎んでこれを攻めようと志し、先づ大石憲重を說客として諸侯に圖つた處、山内・千葉・長尾、甲斐の武田、相模の三浦等何れも定正に贊成して、その翌年十一月下旬より十二月初旬にかけ、これ等諸氏の軍勢は續々定正の居城五十子に集まり、軍議を凝らして、十二月三日聯合軍は國府臺を根據とし、安房洲崎より武藏石濱に亙る水陸二十里の戰陣を布き、陸は山内顯定・滸我成氏を將とし、水上は定正自ら總帥となつて、長驅里見の堅壘に迫つた。時に里見方では、御曹司義通陸上の主將となり、犬塚信乃・犬飼現八・犬川莊介・犬田小文吾・犬江親兵衞を防禦使とし、水上は義成自ら出陣して犬坂毛野を軍師とし、犬山道節・犬村大角を防禦としてこれを迎へ擊ち、攻防よく努めて水陸に善戰し、五十子・石濱・忍岡・大塚の四城を陷れて十二將を擒とし、遂に山大・照文は相具して同行し、禁裏・柳營に御禮の上洛を果して、七月二十日無事安房に歸着した。かくて八犬士は功を賞せられて、各々一城の主として祿一萬貫を賜り、家老上席に列せられ、更に義成の八人の姬を室として賜ふことになり、各々赤繩を引いて天緣を定めたが、中にも信乃は濱路姬と、大角は雛衣の名に似たひなぎ姬と不思議に配せられた。翌年二月八犬士は愈々華燭の典を擧げ、また政木大全は別に一城を賜つて家老次席となり、里見家の緣者眞利谷家の女を配せられた。〻大は先の上洛を禁裏より禪師の法號を受け、伏姬神の勅額を賜つて來たが、この年勅額を奉じて盛んな祭典を行ひ、法燈を弟子念戒に讓つて後富山に退隱し、伏姬の石窟に籠つて永く世に出でなかつた。長享二年里見義實も薨に及び、八犬士はその後各々兒孫を擧げて

したものに於ては、筋・結構の上に完成を示してゐる。卽ち前期の敵討・巷談・傳說に取材したものは、この史傳物のために修練の段階に在つたものとも見られるのである。實に敵討物・巷談物・傳說物の要素が悉く攝取されて大きく構成されたものが史傳物である。それには「椿說弓張月」「朝夷巡島記」「近世說美少年錄」「開卷驚奇俠客傳」(各別項)及びこの「里見八犬傳」等を數へるが、就中「八犬傳」は最大長篇で、馬琴の力量と手腕とを集めたものである。馬琴が「八犬傳」に期したものは「水滸傳」に比すべき規模の雄大と、武士道の理想としての諸德の形象化、儒佛思想から得た彼の觀念の現示であつた。「水滸傳」の百八の豪傑に擬した八犬士は、伏姬・八房の因緣から生れたもので、それ〴〵犬の文字を冠した姓を有し、

道山能教院の廢寺に難を避けた。時に結城の使者小山朝重は、この場に急行して味方の非を鳴り、〻大等に禮を盡して陳謝すると共に、德用以下の家臣を處罰して事落着したが、結城・里見兩家は、これを機として舊交を復し、〻大は照文・與四郎と共に、先君里見季基の遺骨を齎して安房に歸つたので、義成は領内白濱に新に延命院を興し、盛大な追悼會を營み、〻大を院主にした。次いで穗北の豪族氷垣方に落着いてゐた八犬士は、大船を艤裝して稻村に迎へられ、改めて義實・義成兩公に謁して君臣の誼を結んだが、この時里見家では八犬士の本姓を金碗と定められ、その勅諚を請はんがため、犬江親兵衞・蜑崎照文を正副使として京に上された。兩人は途中三河國苛子崎の湊に於て、海賊今純友寄勘太・瀧龍王修羅五郎一味のために危難に遭遇したが、同行の姥雪與四郎の水練と國主隣尾伊近の軍兵とに救はれて、恙なく京に到り、執權細川政元を經て將軍足利義尙に申請し、八月二十五日八犬士に金碗宿禰の姓を賜ふ宣旨を受けた。然るに細川政元は親兵衞の勇を惜しむの餘り、照文のみ御敎書を授けて還らしめ、親兵衞と與四郎を永く館に留めたので、親兵衞等はどうかして脫れ還らうと圖り、政元のために惡臣を懲らして屢々功を樹て、遂に名畫金岡の無瞳の虎が畫師巽風の點睛を得て洛中を脅かすを射留めた功によつて歸參を許され、無事に東下の途に就いた。一方、安房に於ては里見家の武威旺んとなるに及んで、義實は義成に說いて他國の確執に備へ、七犬士に命じて水陸兩戰の調練を怠らなかつた。玆に扇谷定正は豫て犬士を恨むの念强く、加ふるに河鯉孝嗣を奪ひ去られた事を知つてからは、愈々里見の勢を憎んでこれを攻めようと志し、先づ大石憲重を說客として諸侯に圖つた處、山內・千葉・長尾、甲斐の武田、相模の三浦等何れも定正に贊成して、その翌年十一月下旬より十二月初旬にかけ、これ等諸氏の軍勢は續々定正の居城五十子に集まり、軍議を凝らして、十二月三日聯合軍は國府臺を根據とし、安房洲崎より武藏石濱に亙る水陸二十里の戰陣を布き、陸は山內顯定・澁我成氏を將とし、水上は定正自ら總帥となつて、長驅里見の堅壘に迫つた。時に里見方では、御曹司義通陸上の主將となり、犬塚信乃・犬飼現八・犬川莊介・犬田小文吾・犬江親兵衞を防禦使とし、水上は義成自ら出陣して犬坂毛野を軍師とし、犬山道節・犬村大角を防禦としてこれを迎へ擊ち、攻防よく努めて水陸に善戰し、五十子・石濱・忍岡・大塚の四城を陷れて十二將を擒とし、遂に山內・扇谷の兩管領以下を奔らしめ、一部を武藏に駐めて全軍安房に凱旋し、翌文明十六年二月、水陸の大施餓鬼を行つて戰禍を蒙つた窮民を撫恤した。この戰の前、義成はまた蜑崎照文・大岸法六郎を使として上京せしめ、禁裏・柳營に貢物を獻じさせたので、兩度の獻上を嘉せられた朝廷並に將軍家では、義成父子の官位を陞す宣旨を賜ふと共に、策命使を照文等と共に東下させられたが、恰も里見が諸侯との合戰に大勝を博した折であつたので、策命使は直ちに和睦の調停に立ち、和議こゝに成つて、里見家では四城と十二將を諸侯に返還し、六月一日里見及び兩管領以下の諸侯、相模の洋上に集ひ、策命使秋篠廣當・熊谷直親立會ひの下に盛大な和睦の式を擧げ、誓紙を取交して事落着した。次いで策命使歸京のため洲崎を出立せんとするに當つて、八犬士・〻大・照文は相具して同行し、禁裏・柳營に御禮の上洛を果して、七月二十日無事安房に歸着した。かくて八犬士は功を賞せられて、各々一城の主として祿一萬貫を賜り、家老上席に列せられ、更に義成の八人の姬を室として賜ふことになり、各々赤繩を引いて天緣を定めたが、中にも信乃は濱路姬と、大角は雛衣の名に似たひなぎ姬と不思議に配せられた。翌年二月八犬士は愈々華燭の典を擧げ、また政木大全は別に一城を賜つて家老次席となり、里見家の緣者眞利谷家の女を配せられた。〻大は先の上洛に禁裏より禪師の法號を受け、伏姬神の勅額を賜つて來たが、この年勅額を奉じて盛んな祭典を行ひ、法燈を弟子念戒に讓つて後富山に退隱し、伏姬の石窟に籠つて永く世に出でなかつた。長享二年里見義實も遂に歿し、八犬士はその後各々兒孫を儲けて富貴顯榮の日を送つてゐたが、老年となるに及んで半知を返上し、相携へて富山に入り仙術を得た。後、子の八犬士は富山に登つて父に會ひ、その謦咳を聞いて共に致仕して他鄕に遊び、里見義堯の世となつて召還されたが、老年の故を以てこれを辭し、その子の八犬士が義堯・義弘の二君に仕へて、高名を阪東に謳はれたといふ。

【構想】馬琴は讀本を作るに當つて、敵討・巷談・傳說・史傳を材としたが、何れも彼の理想としたところの武士道の精神、儒敎の思想を、因果應報の觀念に統制して、具體的に表現した。常に勸善懲惡を標榜しつつ、又娛樂本位の態度をもとつた。その娛樂本位の態度は、固い敎訓に讀者を親しませるための方便に出でたものでもあらうが、寧ろ彼の小說の目的觀から來たものでもある。後期の史傳に取材したものに於ては、筋・結構の上に完成を示してゐる。卽ち前期の敵討・巷談・傳說に取材したものは、この史傳物のために修練の段階に在つたものとも見られるのである。實に敵討物・巷談物・傳說物の要素が悉く攝取されて大きく構成されたものが史傳物である。それには「椿說弓張月」「朝夷巡島記」「近世說美少年錄」「開卷驚奇俠客傳」（各別項）及びこの「里見八犬傳」等を數へるが、就中「八犬傳」は最大長篇で、馬琴の力量と手腕とを集めたものである。馬琴が「八犬傳」に期したものは「水滸傳」に比すべき規模の雄大と、武士道の理想としての諸德の形象化、儒佛思想から得た彼の觀念の現示であつた。「水滸傳」の百八の豪傑に擬した八犬士は、伏姬・八房の因緣から生れたもので、それ〴〵犬の文字を冠した姓を有し、身に八房の黑斑の擬似である牡丹の黑痣があり、伏姬の珠數の四散した仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌八行の中の一字が彫られた不思議な靈玉を持つてゐる。これ等八犬士の列傳を敍して、その所持する靈玉に現れてゐる文字の犬江親兵衞には仁、犬川莊介には義、犬村大角には禮、犬坂毛野には智、犬山道節には忠、犬飼現八には信、犬塚信乃には孝、犬田小文吾には悌の八德を配置して、これを具體的に描出しようとしたものであるが、何れも類型の武士道的人物で、豪勇無双の道德的權化に外ならない。その生立ち境遇に、武士道の精神を高調し、儒敎の思想を誇張して善を表現し、その反對の精神・思想を表象した梟雄・奸臣・惡漢・毒婦等に對立させ、因果應報の觀念によつて善が惡を懲らすといふ勸善懲惡の意を寓するのである。道節は君父の仇扇谷定正を狙ひ、君に槍をつけた越杉駄一郎、父の仇

竈門三寶平を討ち、毛野は奸臣馬加大記、籠山逸東太を討つて父の仇を報い、親兵衞は里見家に仇をする梟雄蟇田素藤、妖尼妙椿を討つといふやうな事件が重疊し起伏して行く。その事件を飽くまで複雜にし奇想妙案を凝らしては、大角の父赤岩一角を嚙み殺して化けたる山猫、妙椿實は八房を育てた狸等の不可思議な說話を點綴する。もと八犬士が善果を齎すべき約束を以て出生するといふ段取は、奇想妙案のそも〳〵の緒で、その活躍によつて波瀾を構成し、或は山猫の贋一角が雛衣の胎兒を奪はうとして、雛衣の自ら伏した刃のもとに迸り出た玉の靈力に斃れるとか、親兵衞が靈玉を以て、なほも玉梓の怨念の結ぼれた狸の化けた妙椿を退治るとか、また下總に在つた幼い親兵衞が、惡漢舵九郎に殺されようとして安房の富山に神隱になつたり、道節等を陷まひ、追手に圍まれて最期を遂げたと見えた姥雪與四郎・曳手・單節が、上州から富山に救はれてゐたりするやうに、靈玉の奇特や伏姫神靈の加護で統制してゐる。それ等は因果應報の觀念に由るものであるが、この因果の脈絡は實に全篇に横たはつてゐるところの根柢で、八犬士が互に相助け、相結ばれて行くのは、里見家の勃興を物語る、かの伏姫の齋した善果であつた。表面八犬士の傳記を叙してゐるけれども、さうして結ばれて行くところ、上を流れてゐるものは道節を中心に犬士が交涉する豐島練馬の復讐を展開し、底を流れてゐるものは、里見家の勃興を胚胎するところの構想である。そこには傳奇作家の馬琴——敵討物・巷談物・傳說物の馬琴がゐる。また黃表紙や合卷や洒落本や院本を作つた馬琴がゐる。又考證評論家の馬琴がゐる。凡そあらゆる種類と傾向の馬琴がゐる。彼が「我を知る者はそれ唯八犬傳か」と言つたのが肯かれるであらう。なほ櫟亭琴魚が本作の批評に馬琴が答述した「犬夷評判記」には、この構想等に就いて彼自ら語つてゐる。

八犬仙山中遊戲圖（第九輯）

【史的地位】八文字屋物が解體して、世に現れた「英草紙」「雨月物語」「本朝水滸傳」（各別項）などを先蹤とする讀本は、それ等上方に於ける初期の讀本の多く飜譯し飜案した支那小說の要素を繼承してゐるのであるが、なほ八文字屋ものの浮世草子が多く取つた淨瑠璃・歌舞伎の要素をも混在させて、文學的要素の上から浮世草子の系統を追ふものである。併し初期讀本は後の讀本の道念と結構とに方便的なものとなつて、本質的に浮世草子を中斷する介在であつた。浮世草子が世相を寫し義理と人情を扱ふに對して、これは敎訓を標榜して稀有なる事件を構成した。その眼目は世相・人生の描寫ではなくて、筋・結構にある。その結構・脚色に、支那小說や淨瑠璃・歌舞伎の要素が大きな役割を持つてゐる。馬琴もやはり「水滸傳」に據つた「高尾船字文」（別項）に、またその巷談物に、淨瑠璃・歌舞伎の要素を多く取入れてゐるが、そしてなほ「八犬傳」に於ても、濱路の悲戀、芳流閣上の格鬪、行德の悲劇、荒芽山の奇遇等の場面のやうに、淨瑠璃・歌舞伎の世界を見るやうな傾向はあるが、漸次支那小說の一方に偏して來た。それは衒學癖があつた爲めばかりではなく、彼自身の思想精神を表現し、その雄大な結構を構成するに特に「水滸傳」を最もよい模範とした爲めでもある。彼は「本朝水滸傳」を江戸讀本の祖とし、批評を書いて綾足をなつかしんでゐる。既に「新編水滸畫傳」（別項）の譯述の筆を執り、また合卷に「傾城水滸傳」（別項）を作り、そして遂に「八犬傳」の大作を成した。その文學的價値をかの「椿說弓張月」（別項）に讓るとしても、彼の全精力を打込んだ代表作であり、世界的長篇として、我が通俗文學の最高標準を示すところ、國文學史上比類なきものと言はなければならない。【批評】「八犬傳」の文章は、七五の韻律を主として綴り、豐富な修辭的の言葉と文字を使用し、最も絢爛の美に富む。その描かれた舞臺は、房總・武州を中心とし、兩毛・甲斐・越後・京都に展がつてゐるが、必ずしも忠實に地理に卽して書かれたものでなく、自然描寫も觀念的である。また事件人物の叙述描寫は、說明であつて表現ではないといふやうに感じられる。なほ人物の性格描寫も殆ど類型に止まつてゐる。八犬士の中では信乃の生立ちの邊りが最も描寫的でよく、道節が最も面白く描かれてゐる。それから船蟲の飽くなき惡玉振りは、やゝ盡してゐる觀がある。筋の面白さ、構造の面白さを期した爲めに、餘りに奇拔な筋に陷つたものが多い。けれども最初「全本となさんこと兩三年の程になん」と豫告したものが、出づるに隨つて構想し、二十八年間も書きつづけた小說として、實によく整つたものである。凡そ當時代の通俗小說の諸要素を具備し盡し、大きな舞臺に多くの人物を驅使し、數十年に亙る複雜な事件を構成して、よく物語の展開に齟齬を來さしめず、同樣の事件を繰り返さぬやう、周到な注意を以て全篇を一貫した構想にまとめ上げた點は、彼の製作力の偉大に因るものでなければならない。かの「水滸傳」の著しく現實離れのした構想の雄には及ばないとしても、これはまた理想を提げて現實に近づかうとした點で、「水滸傳」とは自ら別の世界を成してゐると言へる。【影響】第一輯以來好評を博したので、夙くから當時の文藝に影響してゐる。「合卷八犬傳犬の草紙」（一名、雪梅芳譯犬の草紙、笠亭仙果と二世柳亭種彦作）、「假名讀八犬傳」（二世

為永春水作、鳳儔庵琴童・假名垣魯文筆連作）、「追局八犬傳後日譚」（二世為永春水作）、淨瑠璃「南總里見八犬士傳梅魁碁八總」、常磐津「八犬義士寢勇猛」等や、その他、錦繪・俳句などにも廣く行はれた。【參考】近世物之本江戸作者部類（曲亭馬琴）（溫知叢書）○犬夷評判記（櫟亭琴魚批評・曲亭馬琴答述）（國書刊行會・德川文藝類聚）○稗史外題鑑（為永春水）○南總里見八犬傳批評（依田學海、舊版帝國文庫第六編）○八犬傳諸評答集（邊庭童村等）（早稻田文學・筆躍・馬琴日記鈔）○八犬傳物語・八犬傳年表・八犬傳人物一覽・八犬傳談餘（內田魯庵（名著全集）○馬琴研究（藤村作）（日本文學講座）○里見八犬傳笹野堅（婦人公論昭和七ノ六）○南總里見八犬傳（和田萬吉（岩波講座「日本文學」）○支那文學の馬琴の作品に及せる影響（麻生磯次（日本文化叢考）○馬琴の讀本重友毅（日本文學聯講）○馬琴の讀本と太平記（後藤丹治（月刊

南蠻鐵後藤

歌仙

【別號】春滿・俊滿・尙左堂俊滿・黃山堂・一筋千枝・鹽辛坊【生歿】寶曆七年に生れ、文政三年（一八二〇）九月二十日歿す。享年六十四【法名】善譽尙左俊滿居士【墓所】淺草黑船町正覺寺【閱歷】幼少の時父を失ひ、伯父某に養はれた。本所・神田富澤町・小傳馬町三丁目と轉住した。畫を楫取魚彥に學び、春滿と號したが、勝川春章の門人と紛れるのを厭ひ、俊滿と改めたのだと云ふ。後、北尾重政に學んだ。卽ち政演（山東京傳）とは相弟子であつた。特に左手が利き日常の用は左手で彼には黃表紙の方が比較的多いが、それも多作ではない。江戸つ子らしい凝つたものである。特に「吉原啣之綿有多」（安永九年）は政演畫で、吉原年中行事を知るによい書である。【著作】〔洒落本〕玉菊燈籠辨○油通汚（天明元年）○浮世の四時（天明四年）（各別項）。〔黃表紙〕通鬼寐子の美女○智音本調子（安永九年）○龍宮卷（同年）○遊客古事附太平記（天明元年）○出見世吉原（同年）○通人癖物語（天明二年）○芳野の由來（同年）○五郎兵衞商賣（同年）○仇名草伊達下谷（天明三年）等。【狂歌集】狂歌蟲合一冊（寬政四年）○狂歌左鞆繪三冊（享和二年）○狂歌左鞆繪二冊（前者とは別本、文化年間）。

【山崎】

爲永春水作、鳳鳴廬琴童・假名垣魯文筆連作）、「追局八犬傳後日譚」（二世爲永春水作）、淨瑠璃「南總里見八犬士傳梅魁若八總」、常磐津「八犬義士譽勇猛」等や、その他、錦繪・俳句などにも廣く行はれた。

【參考】近世物之本江戸作者部類曲亭馬琴（溫知叢書）○犬夷評判記（檉亭琴魚批評・曲亭馬琴答述（國書刊行會・德川文藝類聚）○稗史外題鑑（爲永春水）○南總里見八犬傳批評（依田學海（舊版帝國文庫第六編）○八犬傳諸評答集（遲塘堂村寧（早稻田文學・窪躍・馬琴日記鈔）○八犬傳物語・八犬傳年表・八犬傳人物一覽・八犬傳談餘（內田魯庵、名著全集）○馬琴研究（藤村作（日本文學講座）○里見八犬傳（笹野堅（婦人公論昭和七ノ六）○南總里見八犬傳（和田萬吉（岩波講座「日本文學」）○支那文學の馬琴の作品に及せる影響（麻生磯次（日本文化叢考）○馬琴の讀本重友毅（日本文學聯講）○馬琴の讀本と太平記（後藤丹治（月刊日本文學二ノ一）○文淡堂と八犬傳（四葩山人（高潮三・四）○八犬傳の版元について（伊藤專三（新小說一三ノ三）○八犬傳を讀む（織田得能（大帝國一ノ四）○法華の功德（八犬傳より）（雜誌社同人（國文中の佛教文學講義）

（笹野）

南窻筆記（なんそうひつき）　隨筆　五卷　【著者】

加藤美樹【諸本】百家隨筆第二所收。【解說】主として考古學的の考說を集め、殊に武家故實及び民間習俗に關する記事が多い。卷一に本朝古史の事以下十八則、卷二に安樂寺飛梅の事以下二十則、卷三に熊野烏の事以下二十四則、卷四にちがひ棚の事以下四十則、卷五に朱印の事以下十九則を收めてゐるが、往々僻說も交つてゐるが、大體に於て參考の價値はある。

（和田）

南陀伽紫蘭（なんだかしらん）

浮世繪師・洒落本作者・黃表紙作者【姓名】窪田易兵衞。また安兵衞【別號】春滿・俊滿・尙左堂俊滿・黃山堂・一筋千杖・鹽辛坊【生歿】寶曆七年に生れ、文政三年（一四八〇）九月二十日歿す。享年六十四【法名】善譽尙左俊滿居士【墓所】淺草黑船町正覺寺【閱歷】幼少の時父を失ひ、伯父某に養はれた。本所・神田富澤町・小傳馬町三丁目と轉住した。畫を楳取魚彥に學び、春滿と號したが、勝川春章の門人と紛れるのを厭ひ、俊滿と改めたのだと云ふ。後、北尾重政に學んだ。卽ち政演（山東京傳）とは相弟子であつた。特に左手が利き日常の用は左手でなしたので、尙左堂と云つた。狂歌は頭光（つむりのひかる）（別項）の門人で、一筋千杖はその狂號、鹽辛坊は川柳の號である。光の歿後、伯樂側の判者となる。その詠「夜の梅見て戻りしと女房にいひ譯くらき袖のうつり香」は、人に知られてゐる。畫の外、蒔繪の沈金彫に長じ、世に行はれた。文才あり多くの作品がある。その處女作は黃表紙「通鳥寐子の美女」（安永八年）、洒落本「玉菊燈籠辨」（安永九年）（別項）で、彼の二十三四歲の時である。また政演とは親交があり、互にその作品の揷繪を畫き合つてゐる。

狂歌仙歌合（寬政四年）○狂歌左鞆繪三册（享和二年）○狂歌左鞆繪二册（前者とは別本、文化年間）。【山崎】

南蠻鐵後藤目貫（なんばんてつごとうめぬき）

淨瑠璃　五段　時代物　【作者】並木宗輔【名稱】本作の二段目、主人公後藤文治が浪人して目貫師となつたことに取る。後藤が南蠻鐵の如き男で、目貫のやうに城の固めとなつたとの意をも通はす。【興行】享保二十年二月七日初日、豐竹座。但し五日間で禁止された。【諸本】版行を見ず、寫本としてのみ傳へられてゐる。七行百二十三丁。【題材】材を大阪落城の事と後藤又兵衞の逸話に取り、時代を南北朝に移した。先行曲として紀海音作の「義經新高館」がある。

【梗概】〔初段〕（評定）　鎌倉の將軍足利尊氏の膝下では、都の守護の任にある新田義興の放埒及び謀叛の風聞に就いて評議。時に鶴ケ岡の神職が義興の奉納した鏡を持參した。見ると鏡の裏には、天下一の文字が記されてある。正しく謀叛と云ふ事に決つた折柄、義興の老臣片岡一桐が佐藤局・正貞尼と共に、謀叛の風聞を申開くべく下向する。さすがの一桐も天下一の文字には辯解に窮した。已むなく一桐は、佐藤局・正貞尼の反對を押して義興公の愛妾染殿を人質として下す事を承引する。かくて執權譽田稻葉之助は、直ちに染殿を受取りに上洛する。（櫻狩）義興は愛妾染殿を相手に花見の酒に醉うてゐる所へ、佐藤局・正貞尼は一足先に歸洛して、一桐が染殿君を人質として下す事を承引したと申上げる。義興の怒りは勿論である。侯人神田主膳兄弟は、これ幸ひと一桐を內通者だと讒言する。遙々歸國した一桐は神田兄弟の討手に取卷かれる。一徹な君の心を知る一桐は、祕策を若き忠臣結城鳴戶之助に授けて自害して果てる。染殿を受取りに來た稻葉之助も、一桐の誠忠に感じて、一桐の首を染殿に代へて乘物に入れ、一時を繕つて歸る。〔二段〕（大津追分街道）近江の國栗本郡に大酒家の故に五斗兵衞と呼ばれる目貫師がゐた。今日も街道に醉ひ臥してゐると、鎌倉へ下向する譽田稻葉之助が通りかゝる。五斗兵衞は鎌倉武士に恩はないと動かない。稻葉之助がこの乘物は染殿君だと云へば、早くもその死首なる事を見破つてしまふ。稻葉之助も、これこそ名高い軍師後藤文治と察したが、後藤は五斗兵衞と名乘らずに去る。時に父を尋ねて五斗兵衞の子大三郎が來たので、稻葉之助は大三郎を無理無體に引連れて行く。（五斗兵衞宅）五斗兵衞實は後藤文治の家では、大三郎が見えないので大騷ぎ

である。殊に妻の關女はなさぬ仲なので心を痛めてゐる。この日深編笠姿で都方の將船田左衞門利村が尋ねて來て、味方に加はらん事を懇望する。そこへ大三郎は供廻り美々しく立派な侍になり、今日は父を十萬石の大名に抱へるべく、尊氏の使者として入つて來る。併し文治は既に都方に味方して了つたので、已むなく、承引を裝つて子を返した。〔三段目〕（義興館）義興は、晝夜を分たず踊り狂つてゐる。結城鳴戸之助は溢るゝ赤誠から、亂舞の中に割つて入つて諫言するが、船田左衞門が出てその逸る心を諭す。折柄後藤文治が殿に御目見えのため登城する。佞人神田兄弟は何とかして御前をしくじらせんと、巧みに好きな酒を勸める。後藤は終に醉つて正體なく奴共に叩き出される。（船田館）歸つて來た文治のへべれけな樣子に、こゝに引取られてゐる關女も娘德女も、共に愛想をつかして離緣を迫る。折柄嶄然たる鐵砲の音が響く。左衞門が文治を試みたのである。と、今迄正體なかつた文治は俄に飛び起きて、その空砲である事を見破り、なほ砲の五音に依つて敵が中途まで攻め寄せた事を敎へる。左衞門は大に感歎し、早速一方の大將として出陣を乞ふ。關女はこの有樣に詫びを入れるが、却つてさんざんに恥しめられ、已むなく娘を連れて立ち退かうとするが、德女は突然懷劍を拔いて咽に突き立てた。娘の心に恥ぢて關女も後を追はうとするが、左衞門は鎌倉方に奪はれた大三郎を取返してこそ貞女であると諭す。かくて關女は種ケ島を抱いて鎌倉を指して行く。〔四段目〕（道行富士見笠）關女は遙々と東海道を下つて行く。（小松坂）大三郎が既に討たれたと聞かされた關女は、尊氏を我が子の敵と一途に思ひ詰め、松陰からその乘物へ發砲した。併しそれは身代りの譽田稻葉之助で、關女はその場に捕へられる。（譽田館）その後、關女は夜に日に稻葉之助の詰問に苦しめられてゐる。かくとも知らず大三郎は、この家の婿に望まれて來る。早速手柄に關女の折檻を言ひ渡されるが、事の現はれんことを恐れて大三郎も涙を呑んで母を打つ。併し稻葉之助は早くも始終を察し、衣類に事寄せて母を與へる。〔五段目〕（義興城中）城中では笛や太鼓で打囃してゐる所へ、船田・後藤・結城の三勇將が馳せ來つて、愈々悲運にある事を傳へる。義興公も今更に放埒を悔い、三人に最後の盃を賜ふ。かくて今生の思出に染殿の舞が始まる。舞の內に染殿は、自分の親ながら內通の佞人神田主膳を殺す。時に大三郎が神田兄弟の首を出せば和睦するとの尊氏の書翰を持參する。かくて東西は目出度く干戈を收める事となつた。

【解說】大阪落城のことを脚色したものは、既に海音に二三見られるが、形式・內容共に本曲に於て完成したと云つてよい。これは一つには宗輔の時代が丁度時代物の形式の完成期であつた故でもあるが、更に內容に至つては彼の周到な筆致の功を擧げねばならない。主として宗輔一人の手に成つたが故に、合作の弊もなく、よく整つた力作と云ふ事が出來る。併し餘りに史實に近かつたので、直ちに上演を禁ぜられたのは不幸であつた。主な人物を史實に比較して見ると、足利尊氏は德川家康、新田義興は豐臣秀賴、片岡一桐は片桐且元、後藤文治は後藤基次、船田左衞門は眞田幸村、結城鳴戸之助は木村長門守、染殿は淀君、但し染殿は義興の母ではなく、愛妾とされてゐる。更に國家安康の鐘の文字を作り變へた天下一の鏡の文字の事、淀君人質の事、家康狙撃の事、又後藤基次が近江にあつて、赤貧を顧みず大酒をあふつてゐた事、家康が播磨一國を以て基次を招いた事等々の事實を巧みに脚色した。なほ徒らな片言の中にも幾多傳說的題材を取入れてゐる事は注意すべきである。本曲の山は三段目切「船田館の場」で、左衞門が空砲を放つて後藤を試みると云ふ思付き、また醉うても本心を失はない勇士の明智、關女の女らしい淺はかさ、それに德女の可憐な死、打つて變つた後藤の雄々しさなどが興を惹いた。【影響】延享元年三月、江戸肥前座に於て興行された「義經新含狀」は本曲の改作であるが、世界を「義經記」に取り、多少筆を加へて、全く異つた場面も二三ある。「泉三郎伊達目貫」は寶曆七年七月、同じく江戸肥前座の上演で、これは全く「新含狀」の外題を變へたものである。又「後藤伊達目貫」（興行年月未詳）も「新含狀」と全く同文である。再び上方へ歸つて上演されたのが、寶曆四年七月二十九日初日、豐竹座の「義經腰越狀」である。これは「後藤目貫」と「新含狀」との兩影響に成るもので、今なほ上演を見る三段目切「和泉三郎館の場」は、全く「後藤目貫」の「船田館の場」と同一である。又同じく大阪落城の事を脚色した諸作、「近江源氏先陣館」「鎌倉三代記」「日本賢女鑑」等に影響するところが多い。

【附記】昭和四年版帝國文庫第十篇「紀海音弁木宗輔淨瑠璃集」所載の「南蠻鐵後藤目貫」は「義經新含狀」を誤り載せたものらしい。

【參考】邦樂年表（義太夫節之部）○德川文藝類聚第八解說　【鶴見】

南蠻文學（なんばんぶんがく）「切支丹文學」を見よ。

南屏燕語（なんぺいえんご）　隨筆　三卷　【著者】釋南山　【刊行】天保二年　【解說】禪家の佛敎的隨筆で、上卷に來意・用心・日課・閱經・懺悔・懺愧・服相の諸目を擧げ、中卷に詩偈・文章の二項を論じ、下卷には專ら龍華の「象器箋」を抄し、往々自家の案を加へ、諸書を參考して禪門所用の稱謂・名目・法器等を知るに便してゐる。文政九年の著者の自序があり、天保二年臘月の刊記がある。

【著者小傳】釋南山は禪僧。名は紹岷、字は古梁、一號山庵、俗姓は笹野氏、相模國高座郡大澤村の人である。弱歲佛門に入り、江戸品川東禪寺に在つて內外の學に精勵し、後、仙臺瑞鳳寺住職となり、中頃京都妙心寺に陞り、晚年瑞鳳寺に復歸し、天保十年十一月八日寂、世壽八十七。儒學を究め、詩文書畫を能くし、當時の名流に敬愛された。著述に「叢林貫華集」「法苑詩規」「南山外集」等がある。　【和田】

南方語族（なんぽうごぞく）「マレー・ポリネシヤ語族」を見よ。

南北新話（なんぼくしんわ）　俳論　二册　【著者】建部涼袋（綾足）　【名義】或は北し或は南して受けた敎の謂である。　【刊行】寬延元年　【由來】本書はもと法橋百川に上木を勸められたことがあつた。その後著者が江戸淺草に吸露菴を結んだ頃、愈々梓行することになり、李趙に校書を囑し、延享四年七月の百川の序と翌五年六月（七月十八日寬延と改元）の麥湖樓主人の跋を附して剞劂に附したのである。　【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）・中興俳話文集（俳書大系）所收。　【解說】本文は著者が北陸金澤にあつて、乙由門の希因に就いて發句を修め、南海伊勢に走つて同門梅路に附句を學んだ當時の日記で、麥林舍乙由及び希因・梅路の俳論俳話を主とし、これに著者の意見を附したものである。全篇五十項目、發句の變化、麥林の說、希因が辨、句法の論、みづから句を定る法等より、麥林夜芝居の附句幷梅路が夜話に至るまで、その記すところは句作の實際に關するものが多く、俳諧の根本に觸れた問題は甚だ少い。併し本書に取扱はれた俳論俳話は、ともかく麥林傘下の所謂伊勢派俳諧の性質を覗ふに好適のものの一つである。　【各務】

南畝莠言（なんぽしうげん）　隨筆　二卷　【著者】大田覃　【刊行】文化十四年　【諸本】新百家說林三・日本隨筆大觀所收。　【解說】著者が讀書の際抄錄し置ける事どもに私案を加へた如きもので、その涉獵の博いところから百般の世事・人事に亙つてゐる。或は風俗・世態に係る事、或は器財・調度に係る事、詩歌・文墨に係る事、文字・語彙に係る事、古名人の逸話、古八篇、卷中に四十四篇、卷下に二十六篇を收錄。著者は、晚年薩摩の島津家久・同義弘に禮遇され、同國正興寺・安國寺等に住したので、家久・義弘が明・琉球・呂宋・安南等に贈る書を代作したるもの多く、慶長・元和の交の薩摩藩の史料に關するものがあり、且つ夙に儒學に染ね通じてゐたので、儒學の史料に關するものもあり、全卷に亙つて有用の文字に富んでゐる。　【鷲尾】

南溟（なんめい）　儒醫　【姓名】鵜井魯。字は道載。主水と稱す。　【號】後、南溟と記した。　【生歿】筑前の姪ノ濱に生れ、文化十一年（一八一四）歿す。享年七十二。　【墓所】福岡市地行淨滿寺　【閱歷】十四歲の時、肥前の僧大潮に就いて詩文を學び、後、京阪に出でて醫術を研き、永富獨嘯庵に從つて學ぶ。又長州に往き、山縣周南に就いて徂來の說を受けた。業成る遷り住した。この集は、東歸以後二十餘年間の作にかゝる。七言絕句二百五十四首、五言八句六十四首、五言絕句六首、四言四句二首、七言八句九十三首を收む。土佐の吸江庵で京都の諸友と往來したが、この間の贈答の作が殊に多い。絕海中津の衣鉢を受けて推敲に努めたもの、絕海の遜居したる攝津錢原の羚羊谷を訪うた詩に、「獨尋舊事向松間、二十餘年一夢還、流水浮雲人寂寞、落花啼鳥淚潺湲、神仙畫降塵猶閟、俗子春遊境自閑、不識此身拘底事、滿頭白髮復辭山」と、その風調の一斑を知るべきである。　【鷲尾】

南遊東歸集（なんいうとうきしふ）　詩文集　二卷一册　【著者】別源圓旨　【刊行】寬文四年、京都三條菱屋町數屋林傳左衞門尉板行。　【解說】外題は「南遊東歸集」とあり、內題は「南遊集」「東歸集」の二部に分れてゐる。「南遊集」は、元に在り、相模の粟船里に寓居した時の詩がある。「東歸集」は、この年間の作にかゝるもので、卽ち竺仙梵僊・東明慧日の序の末に、曆應庚辰（三年）とある。この後、康永の初め、鄕里越前に歸つて朝倉氏の歸依を受け、弘祥寺の開山第一世となり、文和三年京都に上り、眞如寺・建仁寺に歷住し、貞治三年十月十日、建仁寺洞春菴に壽七十一を以て寂したのである。康永以後二十餘年の間に詩文の作られたものがあつたであらう。しかし今は知るよしがない。要するに「東歸集」は、東歸以後十餘年間の詩文である。　【鷲尾】

南嶺（なんれい）　國學者・浮世草子作者　【姓】多田氏。時に桂氏を稱した。　【名】義俊・義寬・秀樹・滿泰・武起と云つた。　【字】政仲・公美・子謙　【通稱】進藏。後に將監・兵部・左衞門

俳話を主とし、これに著者の意見を附したものである。全篇五十項目、發句の變化、麥林の説、希因が辨、句法の論、みづから句を定る法等より、麥林夜芝居の附句幷梅路が夜話に至るまで、その記すところは句作の實際に關するものが多く、俳諧の根本に觸れた問題は甚だ少い。併し本書に取扱はれた俳論俳話は、ともかく麥林傘下の所謂伊勢派俳諧の性質を覗ふに好適のものの一つである。【各務】

南畝莠言（なんぽしうげん）　隨筆　二卷　【著者】大田覃【刊行】文化十四年【諸本】新百家説林三・日本隨筆大觀所收。【解説】著者が讀書の際抄錄し置ける事どもに私案を加へた如きもので、その涉獵の博いところから百般の世事・人事に亙つてゐる。或は風俗・世態に係る事、或は器財・調度に係る事、詩歌・文墨に係る事、文字・語諺に係る事、古典籍の談、その他殆ど際限がない。上卷に二十六夜の三尊の光から足利學校易の事に至る九十三條、下卷に升平・昇平の文字から乾隆の初麒麟出し事に至る三十條を收め、門人文寶堂筆の古圖縮摸數面を挿む。文化十四年の自序と文寶亭の跋がある。卷尾に後篇二册近刻の豫告が出てゐるが、實行を見ずに止んだ。本編二册はもと稿本數卷の中から、文寶亭が書肆衆星閣（角丸屋甚助）と共に、隨抄隨刻したものの由が序文中に見えてゐる所から察すると、原稿は多分に出來てゐたらしい。南畝の隨筆の澤山ある中で、讀書子の參考となるものの隨一であらう。【和田】

南浦文集（なんぽぶんしふ）　文集　三卷　【著者】文之玄昌【名稱】南浦は、その雅號。【刊行】寛永二年八月、京都四條寺町【解説】禪僧文之玄昌の漢文を收錄したもので、卷上に三十八篇、卷中に四十四篇、卷下に二十六篇を收錄。著者は、晩年薩摩の島津家久・同義弘に禮遇され、同國正興寺・安國寺等に住したので、家久・義弘が明・琉球・呂宋・安南等に贈る書を代作したるもの多く、慶長・元和の交の薩摩藩の史料に關するものがあり、且つ夙に儒學にも兼ね通じてゐたので、儒學の史料に關するものもあり、全卷に亙つて有用の文字に富んでゐる。【鷲尾】

南溟（なんめい）　儒醫　【姓名】綱井魯。字は道載。主水と稱す。【號】後、南溟と記した。【生歿】筑前の姪ノ濱に生れ、文化十一年（一八一四）歿す。享年七十二。【墓所】福岡市地行淨滿寺【閲歷】十四歳の時、肥前の僧大潮に就いて詩文を學び、後、京阪に出でて醫術を研き、永富獨嘯庵に從つて學ぶ。又長州に往き、山縣周南に就いて徂徠の説を受けた。業成るに及び、藩侯擢んでて儒員となし、聚英館を設け、道載をして教授たらしめた。道載は徂徠の學を唱へ、子弟を啓發する所多かつた。昭陽はその長子、小琴はその孫である。明治四十四年十一月十五日、從四位を贈られた。【人物】性、豪放不羈、禮儀を修めず。こと以て人の怨を買ひ、その職を免ぜられ、遂に快々として樂しまなかつた。その作る所の詩は皆悲憤慷慨の意を寓してゐる。【著作】毛詩考○南溟問答○辨惑論○論語語由○左傳講義○肥後物語○半夜物語○鹵居小草○南溟詩文集（六十二卷）等。

南遊集（なんいうしふ）　詩集　一卷　【著者】惠竅【解説】愕隱惠竅は至德の末、明に歷遊し、後、東歸して土佐の吸江菴に留まる。應永十七年相國寺に住し、後、周防の瑞雲寺、阿波の寶冠寺に歷住し、應永二十四年天龍寺に遷り住した。この集は、東歸以後二十餘年間の作にかゝる。七言絶句二百五十四首、五言八句六十四首、五言絶句六首、四言四句二首、七言八句九十三首を收む。土佐の吸江庵で京都の諸友と往來したが、この間の贈答の作が殊に多い。絶海中津の衣鉢を受けて推敲に努めたもの、絶海の遜居したる攝津錢原の勢羊谷を訪うた詩に、「獨尋舊事向松間、二十餘年一夢還、流水浮雲人寂寞、落花啼鳥淚潺湲、神仙畫降塵猶閒、俗子春遊境自閑、不識此身拘底事、滿頭白髮復辭山」と、その風調の一斑を知るべきである。【鷲尾】

南遊東歸集（なんいうとうきしふ）　詩文集　二卷　一册【著者】別源圓旨【刊行】寛文四年、京都三條菱屋町麩屋林傳左衞門尉板行。【解説】外題は「南遊東歸集」とあり、内題は「南遊集」「東歸集」の二部に分れてゐる。「南遊集」は、元に歷遊中の詩、各體百餘首及び結夏秉拂等二篇を收む。首に元の僧雲外の別源天童十詠の跋文を揭ぐ。別源の雲外天童十境詩の和韻、萬松關等の十首は、この集に收められる。雲外その跋文を作り、後にこの集の首に揭げられたものである。「東歸集」は、日本に歸つた後の詩二百餘首及び小佛事秉拂等數篇を收む。首に竺仙梵僊・靈石如芝及び雲外の序、後に東明慧日の跋あり。竺仙梵僊の序の末に、「曆應庚辰結制後三日、書于淨智東堂四明梵僊拜手」とあり。東明慧日の跋の末に、「曆應庚辰夏首、命再書、適病ノ目不ノ能ノ工、五住建長叟東明」とあり。別源圓旨（別項）が元に渡つたのは元應二年二十七歳の時で、滯留十一年に及んだ。「南遊集」は、この年間の作にかゝる。その東歸したのは、元德二年三十七歳の時で、建武・曆應の頃、鎌倉の圓覺寺・建長寺の叢林に在り、相模の栗船里に寓居した時の詩がある。「東歸集」は、この年間の作にかゝるもので、即ち竺仙梵僊・東明慧日の序の末に、曆應庚辰（三年）とある。この後、康永の初め、鄉里越前に歸つて朝倉氏の歸依を受け、弘祥寺の開山第一世となり、文和三年京都に上り、眞如寺・建仁寺に歷住し、貞治三年十月十日、建仁寺洞春菴に壽七十一を以て寂したのである。康永以後二十餘年の間に詩文の作られたものがあつたであらう。しかし今は知るよしがない。要するに「東歸集」は、東歸以後十餘年間の詩文である。【鷲尾】

南嶺（なんれい）　國學者・浮世草子作者　【姓】多田氏。時に桂氏を稱した。【名】義俊・義寛・秀樹・滿泰・武起と云つた。【字】政仲・公美・子謙　【通稱】進藏。後に將監・兵部・左衞門【別號】秋齋・春塘。また俳號は男鈴。【生歿】元祿十一年生れ、寛延三年（一七五〇）九月十二日歿す。享年五十三【墓所】京都東山本妙寺【閲歷】攝津の人、京都に出でて參議右衞門督豐廣・中山大納言等に從つて有職故實を學び、大阪長堀に私塾を開いた。又甲州流の兵學を究め、後、壺井義知（號鶴翁）に就いて古典學を修む。また半時庵淡々に師事して俳諧を善くした。かつて「舊事紀僞撰考」に於て「舊事紀」の僞撰なることを論證し、師壺井義知が著作に「舊事紀」を典據とせることを難じ、その説を撤回せんことを勸めた。壺井はその説を究むることをせず、濡りに師説を批する無禮を怒つて破門したといふ。初め東武に遊び、また尾州に居り、後、京都に歸つた。八文字屋自笑の囑に依つて浮世草子及び役者評判記の筆を執つたといはれる。【著作】南嶺は國學・有職故實の研究を本領と

せるため、その方面の著述が甚だ多い。彼自身が執筆せるものと、彼の講義口授を門人が筆記して出版せるものとある。その主なるものを擧げる。【國語學】伊呂波聲母傳一册（初めに假名の作者の事を記し、次にいろは四十七字の一字々々に就いて音義を記してゐる。義俊の國語に關する書は殆ど本書と同類の音義のもので、學術的價値に乏しい）○以呂波訓義抄三卷一册（「伊呂波聲母傳」と同類で、や、詳しくいろはの音義を說いたもの）○伊呂波傳受一册（「伊呂波聲母傳」と同類で、それより簡單なものである）○日本聲母傳一册（前記の書と同類のもので、初めに日本語と外國語の區別、飜譯の事、聲音の事等十ケ條の口傳を記す）○母字音配傳一册（前記の書と同類で、無相文雄から傳へられたと記してゐるが直に信じ難い）○本語口傳一册（「伊呂波聲母傳」と同類。外に「本語抄」と題する書が二卷あるやうであるが同類であらう）○和訓八例一册（國語の語源を論じたものであるが、國語中の漢語・梵語・蠻語（西洋語）系統の語についてその區別を記してゐる）。【有職故實・國史】故實纂要（別名「故實千箇條」）四卷（神代の事及び服飾・器物等の故實を記したもの）○職原鈔辨講二十卷（寬延元年から同三年三月まで續いた講義を門人が筆記したもので、初めに「職原鈔」の異本及び註釋書に就いて述べ、次にその全文を講義したもので、書中屢々その師壺井義知の說を破つてゐる）○三十箇條故實辨一册○舊事紀僞撰考一册（享保十六年成る。十ケ條の證據を擧げて僞書たる事を論斷す）○日本紀神代卷口義十卷（書紀神代卷の講義）○武門故實百箇條三册（嘉永元年刊）○祭祭記一册○神代釋三卷（延享五年成る）○神代卷顯要抄七卷○神代卷祕要抄十二卷○日本書紀或問私考二卷○日本書紀義解三十卷○古事記本義○古語拾遺本義○中臣祓本義○創祿辨一卷。【隨筆・雜】南嶺子四卷○南嶺遺稿四卷○秋齋閒語四卷○秋齋隨筆○秋齋著筆（各別項）○遊和草二卷（隨筆）○尊榮草紙三卷（自序寬保三年。日本隨筆大成第二期卷七所收。隨筆集）○神明憑談二卷（享保十九年）○神奠辨一册（寫）○神拜恐惶抄一册○几右雜記○几右雜記續篇○宮川日記○半宵談○獸肉論○春塘隨筆○多田滿仲五代卷十卷○繪本福壽草○桂花抄等。

また彼が筆のすさびとして八文字屋本の代作をしたことは、從來謂はれて來たことであるが、それは確乎たる根據があるのではない。寶曆二年板の「世間母親容氣」（別項）の序の署名に南圭梅嶺翁とあり、また末尾に秋齋桂先生著南嶺子といふ廣告あるのに依つて、これは南嶺の製作と謂はれる。併しながら寶曆二年は南嶺の死後二年に當り、その間の年月の距りが不審である。かく見る時、これとても眞僞明確でない。研究者は次の如きものを南嶺作とみてゐるが、自笑・其笑、又は其笑・瑞笑の連署であつて、南嶺の署名はない。「武遊双級巴」（自笑、元文四年）、「女非人綴錦」（自笑・其笑、寬保二年）、「鎌倉諸藝袖日記」（自笑・其笑、同三年）、「花楓劍本地」（其笑・瑞笑、寬延二年）、「道成寺岐柳」（其笑・瑞笑、寶曆元年）。これ等の作品は、「母親容氣」の外は、淨瑠璃・歌舞伎、又は古文學の穮案小說である。即ち「武遊双級巴」は「釜淵双級巴」（別項）より、「女非人綴錦」は「敵討襤褸錦」（別項）より、「花楓劍本地」は「桔狩劍本地」（別項）より飜案せる事は確かであり、「道成寺岐柳」は「道成寺現在蛇鱗」（寬保二年豐竹座上場）あたりから暗示されたらしく思はれる。また「鎌倉諸藝袖日記」（別項）は、「鎌倉袖日記」（松本治太夫正本）その他「夜會記」の趣向に基くことは、すでに藤岡作太郎の謂ふところである（近代小說史）。故にこれ等の作品の趣向の形式は、自笑・其磧時代に創始されて新しいものではないが、その文章の點にやゝ特色が存する。この時代の他の作品に比して、これ等の作品の文章は、著しく尖銳の感じを有してゐる。觀察が敏く文調が急速度で、從つて警句と諧謔に滿ちてゐる。署名は同じく自笑・其笑、若しくは其笑・瑞笑でも、どうしても他の作品とは異なる作者の筆に成つたものであらねばならない。これが「母親容氣」の南圭梅嶺翁より推して南嶺の作であると考へられる理由である。【吉田・龜田】

南嶺遺稿（なんれいいこう）　隨筆　四卷　【著者】多田義俊　【刊行】寶曆七年　【諸本】日本隨筆大成卷十所收。【解說】卷一に尾州尊榮以下二十項、卷二に近世神軍傳以下二十七項、卷三に甲斐之字義以下三十八項、卷四に水干如木以下二十四項を收め、通篇百九項に上る。有職故實・和歌・字義・古書・服飾・飮食、その他百般についての感想及び見解を述べたところの純隨筆である。寶曆七年良芸之の序、同年門人細谷文卿の跋がある。又本書は細谷文卿の所校に成つたものである。【和田】

南嶺子（なんれいし）　隨筆　四卷　【著者】多田義俊　【刊行】寬延三年　【諸本】日本隨筆大成卷九所收。【解說】著者一流の神道家的見地より儒佛二敎の弊、その外庸醫・巫覡・蠱惑等を說破し、又事始・字義・古書・有名人物の評論等に及び概ね訓誨に傾いてゐる。卷一は湖船風波ノ論以下十一條、卷二は儒佛ノ徒神事ニ戾ル義以下二十四條、卷三は庸醫誤レ人義幷六尺ノ字以下三十條、卷四は猿樂古今ノ異以下二十五條、通篇合計九十條を收めてゐる。卷首に引用書目九十七部を擧げてある。【和田】

に

二上り（にあがり）　【三味線】調子　を見よ。

二上新内（にあがりしんない）　歌謠　【名義】二上りの調子で歌ふ新内節（別項）の意。略してただ二上りとも、新内ぶしとも。また新内拔書・一口新内・よいわいな節とも云ふ。【解說】幕末の流行唄。とつちりとん節（別項）と同じく、深川の遊廓に起つた流行唄であらう。文化四年版の洒落本「船頭部屋」に、「男がよくて金持で」とあるのが、二上新内の「男がようて金持で、それで女子がほれるなら、中から下のきれぎれは、一生やもめで暮すであらうぞえ」の文句を取つたものであるなら、文化の初めには、既に行はれてゐたのである。文政になつて大に流行し、三都にまで及んだ。文政三年版の洒落本「嬉身噓」に、「二上りの騷唄」「どこの座敷も二上りで騷々しい」「二上りへ八ツ九ツや明七ツ、表のくぐり戸をとん〳〵と、慈悲ぢや情ぢや起番衆、今宵逢はねばこがれ死、へ切れてくれろと氣強くも、口には云へど目に涙、男はそれと承知のを、立す褄とらへて泣き出だし、わたしがこれ程思ふゆゑ、藝者のろけはやめさんせ」などと見えるのが、それである。文政六年には、名古屋でも大に流行した（小歌志彙集）。爾後、幕末に至るまで行はれて、瓦版本も種々刊行せられ、明治以後も酒間の座興を添へて今日に至つてゐる。【曲調】テンポの遲い凄艷な調子の歌で、新内の曲調と氣分とを、よく出してゐる。三味線は二上り。詞形は、七五四句より成る。即ち今樣形式で

ある。稀れに同一曲節を反復することによつて、七五六句より成る歌もある。また最後の句は、七と五との間に、囃子の詞を入れる。例へば「惡どめせずとそこ放せ、あすの月日がないやうに、とめるそなたの心より、歸る此の身がエーマードンナニドンナニつらからう」の如くである。これより、七五・七五・七五・七四五の如き形式の歌も、若干生じてゐる。また最後の五句は「よいわいな」「居るわいな」などの如く、ワイナと云ふ語で止めた詞が多く、よいわいな節と云ふ名も、これから生じた。

【備考】淨瑠璃から出た流行唄には、この外に二上り新內と同時代の流行唄、一中節（一中くづし）の如きがあつて、詞形も二上り新內に似てゐる。大正初年の流行唄、奈良丸くづしが浪花節より出てゐることなどと、同じ消息である。

思想の流入につれて、哲學も亦輸入され、同時にエマアソン、カアライル等の英米文學も入つて來た。ニイチェを最初に我が國へ紹介したのは吉田靜致で、同三十二年頃の哲學雜誌に「哲學史上第三期の懷疑論」として彼はニイチェ思想の大要を述べた。續いて長谷川天溪は「早稻田學報」で、簡單にニイチェの片影を紹介した。樗牛のニイチェイズムを唱へたのは、その後のことで、同三十四年の雜誌「太陽」一月號に「文明批評家としての文學者」を、八月號に「美的生活を論ず」を揭げ、ニイチェ思想を鼓吹した。樗牛は單にニイチェを紹介したばかりでなく、ニイチェを借りて、日本の思想界、學界に對する彼自身の反抗と不滿とを表白した。而して更にニイチェの個人主義に基く本能主義・天才主義（各別項）を主張して、スツルム・ウント・ドラング（別項）の時代

役割をなした。而して當時の文士の一部及び青年學生をスツルム・ウント・ドラングの新運動に參加させ、浪漫主義文學運動の先驅となつて、新文明を招來する機運を造らせるに至つた。【宮島】

新嘗祭（にひなめまつり）　神道　【名義】天皇御親ら新穀を天神地祇に奉られ、なほ御親らも聞食（きしめ）さるゝ最も大切な御祭儀の一つである。（大嘗祭參照）【田中（義）】

にひはり　俳誌　【創刊】明治四十四年六月　【解說】伊藤松宇（別項）を盟主とする秉燭會の機關雜誌として生れ、俳諧の史的趣味、連句趣味等の研究發表を趣旨として刊行された。「にひはり」の名稱は、日本武尊の御詠に採つたものであるが、昭和三年九月以降改題して「筑波」といひ、今日に至つてゐる。【伊藤】

新學（にひまなび）　歌論書　一卷一册　【著者】

はめて論ずる不可をとき、或は古書をよむ上に律令等を知るべきことを論じ、長歌の大に詠まるべきを主張し、赤人・人麿等の歌人を評し、「古今」「後撰」「拾遺」「古今六帖」等の集を批評し、端詞は「古今集」の適切なるを論じ、「古今集」の旋頭歌のひがごとであるを論ずる等種々注意すべき意見がのべられてゐるが、「萬葉」の丈夫ぶりの歌風を高唱し、彼の崇古主義・皇國主義を中心として、國學者としての斷片的の學說をのべてゐるのである。【價値】「歌意考」に比すると、やゝ斷片的の嫌ひがあるが、より一層彼の立場を明かにし、部分的に種々な見解が見られる。特にこの書に對しては景樹の「新學異見」（別項）の駁論が出で、「新學考加鞭」（一卷、寫、本間素嵩）、「新學異見辨」（一卷、業合大枝）、「新學異見辨」（一卷、寫、山平伴鹿）、「ことばのしもと」（一卷、寫、戶澤正令）等の駁論

新潟繁昌記 にいがたはんじょうき

【著者】寺門靜軒【成立】安政六年春【解説】繁昌記 二卷 俗體の漢文で越後新潟妓館の光景を記述したもので、「江戸繁昌記」（別項）と同類の著である。 〔佐久〕

ニイチェズム 【名稱】

義といふことで、ニイチェの思想を承けて、これを主唱する思想。【解説】ニイチェは十九世紀後半の文學者哲學者で、個人の解放を叫び、權力意志の思想を說いて超人の哲學（或は天才主義）を打建て、キリスト教的凡庸主義に反抗し、本能主義を唱へて性慾の解放に努め、人間の獸性を重視した思想家である。かゝる主義を我が國に於て闡明したのは高山樗牛であるが、これより先き、明治三十年頃ドイツ政治思想の流入につれて、哲學も亦輸入され、同時にニイチェ思想の大要を述べた。續いて長谷川天渓は「早稻田學報」で、簡單にニイチェの片影を紹介した。樗牛のニイチェイズムを唱へたのは、その後のことで、同三十四年の雜誌「太陽」一月號に「文明批評家としての文學者たるニイチェ」を掲げ、八月號に「美的生活を論ず」を掲げ、ニイチェの思想を鼓吹した。樗牛は單にニイチェを紹介したばかりでなく、ニイチェを借りて、日本の思想界、學界に對する彼自身の反抗と不滿とを表白した。而して更にニイチェの個人主義に基く本能主義・天才主義（各別項）を主張して、スッルム・ウント・ドラング（別項）の時代を現出せしめ、浪漫主義（別項）文學の隆盛を促した。かゝる樗牛のニイチェイズムの鼓吹は、當時の日本文壇に大きな反響を與へ、殊に文壇の風潮に敏感であつた小栗風葉は、個人主義を採り入れた幾篇かの作物を作つた。樗牛の主張に味方し、ニイチェの紹介に力めた登張竹風は雜誌「帝國文學」に據つて、樗牛と共に「歌意考」（別項）と同じく早稻田派の文士を率ゐてゐた坪内逍遙は、これに斷乎として反對し、文壇に一波瀾を捲き起したが、その餘波は雜誌「新潮」の記者と「帝國文學」の記者との論爭となり、延いて倫理學界・教育界にも、主に本能滿足主義に對する是非の批判が頻りに起つた。かくまでに文壇を賑はしたニイチェの哲學思想・人物は、その劃期的懷疑に陷つたものの行くべき道は、個人主義が宗教の門にあることを暗示する大きな役割をなした。而して當時の文士の一部及び青年學生をスッルム・ウント・ドラングの新運動に參加させ、浪漫主義文學運動の先驅となつて、新文明を招來する機運を造らせるに至つた。 〔宮島〕

新嘗祭 にひなめまつり 神道【名義】天皇御親ら新穀を天神地祇に奉られ、なほ御親らもきこしめし食さるゝ最も大切な御祭儀の一つである。（大嘗祭參照） 〔田中（義）〕

にひはり 俳誌【創刊】明治四十四年六月【解說】伊藤松宇（別項）を盟主とする秉燭の機關雜誌として生れ、俳諧の史的趣味、連句趣味等の研究發表を趣旨として刊行された。「にひはり」の名稱は、日本武尊の御詠に採つたものであるが、昭和三年九月以降改題して「筑波」といひ、今日に至つてゐる。 〔伊藤〕

新學 にひまなび 歌論書 一卷一冊【著者】賀茂眞淵【成立】明和二年【刊行】寛政十二年【諸本】歌學全書第十二編・續歌學全書第一編・賀茂眞淵全集第二・和歌叢書第七冊等に所收。初學萬葉抄（一卷）は本書の改題である。【內容】終りに「明和二年七月十六日に賀茂眞淵しるしぬ」とあり、荒木田久老の跋がついてゐる。大體に於て「歌意考」（別項）と同じく古を知るためには古言を知るべきであると論じ、皇朝の假名を說くに、悉曇・韻鏡（各別項）等をあげて、はじめて讀むべき不可をとき、或は古書をよむ上に律令等を知るべきことを論じ、長歌の大に詠まるべきを主張し、赤人・人麿等の歌人を評し、「古今」後撰・拾遺・古今六帖等の集を批評し、端詞は「古今集」の適切なるを論じ、「古今集」の旋頭歌のひがごとであるを論ずる等種々注意すべき意見がのべられてゐるが、「萬葉」の丈夫ぶりの歌風を高唱し、彼の崇古主義・皇國主義を中心として、國學者としての斷片的の學說をのべてゐるので、「歌意考」に比すると、やゝ斷片的の嫌がある。部分的に種々な見解が見られる。特にこの書に對しては景樹の「新學異見」（別項）の駁論が出で、「新學考加離」（一卷、鴨本間櫻堂）、「新學異見辨」（一卷、鴨山岡俊明）、「新學異見辨」（一卷、鴨戸澤正令）等の駁論「ことばのしもと」（二卷、鴨戸澤正令）等の駁論もものされてゐる點に徵しても、近世歌論史上忘るべからざるものである。 〔藤川〕

新學異見 にひまなびいけん 歌論書 一卷【著者】香川景樹【成立・刊行】文化八年成（奥谷直矩序）、文化十二年刊行。歌學全書第十二編・續歌學全書第四編・和歌作法集等所收。【內容】眞淵の「新學」（別項）に對する駁論で、「新學」の首章を十四に區分して一々原文を記し、これを批評し反駁し、自己の反眞淵派の立場を強調してゐる。眞淵が古の歌は調を專にした、それはうたふ物だからであると言ふを批評して、「誠は天地の調で、最純美眞正なもの、この誠から自ら調をなせるもので、意を用ひて調べなしたものでなく、又うたふといふのは言を長うする意味で後世の詠むと等しく、曲調にかかまへて謠ふ意味ではない」と論じてゐる。大和國は丈夫の國で、「萬葉」は丈夫ぶ

【參考】日本歌謠史（藤田徳太郎）　明治大正昭和流行歌曲集（世界音樂全集第十九卷）

新潟繁昌記 にいがたはんじょうき 二卷【著者】寺門靜軒【成立】安政六年春【解說】繁昌記（別項）と同類の著である。 〔佐久〕

ニイチェズム 【名稱】ニイチェ主義といふことで、ニイチェの思想を承けて、これを主唱する思想。【解說】ニイチェは十九世紀後半の文學者哲學者で、個人の解放を叫び、權力意志の思想を說いて超人の哲學（或は天才主義）を打建て、キリスト教的凡庸主義に反抗し、本能主義を唱へて性慾の解放に努め、人間の獸性を重視した思想家である。かゝる主義を我が國に於て闡明したのは高山樗牛であるが、これより先き、明治三十年頃ドイツ政治思想の流入につれて、哲學も亦輸入され、同時にニイチェ思想の大要を述べた。續いて長谷川天渓は「早稻田學報」で、簡單にニイチェの片影を紹介した。樗牛のニイチェイズムを唱へたのは、その後のことで、同三十四年の雜誌「太陽」一月號に「文明批評家としての文學者たるニイチェ」を掲げ、八月號に「美的生活を論ず」を掲げ、ニイチェの思想を鼓吹した。樗牛は單にニイチェを紹介したばかりでなく、ニイチェを借りて、日本の思想界、學界に對する彼自身の反抗と不滿とを表白した。而して更にニイチェの個人主義に基く本能主義・天才主義（各別項）を主張して、スッルム・ウント・ドラング（別項）の時代を現出せしめ、浪漫主義（別項）文學の隆盛を促した。かゝる樗牛のニイチェイズムの鼓吹は、當時の日本文壇に大きな反響を與へ、殊に文壇の風潮に敏感であつた小栗風葉は、個人主義を採り入れた幾篇かの作物を作つた。樗牛の主張に味方し、ニイチェの紹介に力めた登張竹風は雜誌「帝國文學」に據つて、樗牛と共に「歌意考」（別項）と同じく早稻田派の文士を率ゐてゐた坪内逍遙は、これに斷乎として反對し、文壇に一波瀾を捲き起したが、その餘波は雜誌「新潮」の記者と「帝國文學」の記者との論爭となり、延いて倫理學界・教育界にも、主に本能滿足主義に對する是非の批判が頻りに起つた。かくまでに文壇を賑はしたニイチェの哲學思想・人物は、その劃期的懷疑に陷つたものの行くべき道は、個人主義が宗教の門にあることを暗示する大きな

り、山城は手弱女國で、「古今」は手弱女であると論じ、「古今集」の六歌仙(別項)の批評は、古風を顧みず、丈夫ぶりをさげすむものとして眞淵が難じてゐる論等に對しても、一々これを反駁して、柔といひ剛といひ、ひとしくその時の姿を體とするがよいといふ立場から、丈夫ぶりに偏し、婦女風を嫌つた眞淵の態度を難じ、「萬葉」を讀み、「萬葉」に倣ふべきといふ眞淵の主張に對してはその非をならし、雄々しく強きは質朴の體で、質朴の鄙しきは實に至理である。歌は情のまゝに自ら調べなりて思慮を加ふべきものでなく、古に擬似する暇などはない。古に似せたならば「飾れる僞」となるのである。又似せようとしても似るべきものではなく、今の世の歌は今の世の辭で今の世の調であるべきであると論じ、眞淵が推重した實朝の歌を貶し、又眞淵の「古今」以下の歌集その他記・紀・物語等のよむべきことを說いてゐるにも反對して、歌は感情を主とするもので、更にその必要なく、文は義を本とするもので、一わたり見るのはよいが、今を捨てて古風の文を書くべきでないなどと論じてゐる。【價値】眞淵攻擊に急にして肯定し難い點もあるが、眞淵の崇古主義に反對して、彼の歌に對する大體の考を述べ得てゐるものとして、「歌學提要」(別項)その他の彼の歌論書と併せよまるべきである。彼の歌は現代の詞や調であるべきと說いた現代主義の立場は蘆庵(別項)の繼承であり、眞情・調べ・誠を說いたのは彼の攻擊した眞淵に於ても見られる所で、必ずしも獨自の見解とは思はれない。而して「古今集」等に彼の理想を求めてゐたらしい考が見られるのも、現代主義の立場からは一種の矛盾と言はねばならぬ。が誠を天地の調として、そが自ら歌となると說いたのは卓見である。この書に對する駁論の書として、業合大枝や山平伴鹿の「新學異見辨」等の出た事も注意すべきである。(新學參照)　【藤川】

鳩鳥(にはどり)　半太夫節・河東節詞曲集　横本五册　【刊行】享保四年　【解說】本書は普通「鳩鳥萬葉集」の名を以て世に知られてゐるのであるが、京都大學本は、表紙・外題とも失せて見る由なけれど、內題も柱も共に「鳩鳥」とのみあり、合歡堂沾德・坂本梁雲の序にも、皆「鳩鳥」とばかりいひて萬葉の語見えず。梁雲(江戸半太夫)の序に、

「僕東江の水に浴し樹をうごかして風を敎ゆるの枝に搏ㇷ゚今參平の唱を囀に一條〳〵にしてつくはねのこのもかのもは有こしありこいへども武藏ののしゐきがもとを尋ていまだ錄せしも侍らざりしを爰に蘭洲の男みづから書し集てより袖にするにかろしまことや此道のあとたえずにほどりの息なが〻く傳はらは後世をして烏鷺のあらそひをとゞめんものか」(全文)とあり。その裏面に、

江戸半太夫子　坂本半次郎　文周
江戸半太夫弟子　手欄子　河東　東河
同　閒室蘭洲　洲蘭
書林　戲文堂　奇堂

とあり、卷尾に河東の跋を載せ、その餘白に享保四己亥春三月於武陽章臺錄畢梓行井上氏と細書したるを見れば、同年河東・蘭洲二人の手によつて主として編成されたるも、集中半太夫物多きより半太夫の子半次郎の名を列記したのであらう。各卷の目錄は左の如し。

賀之部卷第一
遠淡・京わらべ・四季・すけ六・かつこ・杜形松・松の內・松の後・小もん盡・みつの朝
飾鑒部卷第二
公家・草づくし・きぬた・元ぶく・袖こめ・かみ梳・和髮すき・帶引・名寄祭文・傾情講狀・色あたか・竹馬隔・唉分相山
思慮部卷第三
かみ結・筐をくり・物ぐるひ・一重帶・鐵輪
紀行部卷第四
おせん・黑小袖・ほうか僧・巴やまぶき・大和之助・五人會我・露のまへ・袂のまへ・うてなの前・しのだ妻・はしら曆・和そが・さくら姬・きよつら・明ぼの・なる神・伊達の姬・扇子賣・江ぐち・袖こめ・浮世車
物語部卷第五
湯ぞろへ・名劒・黑木賣・小袖もやう・清見八景・相撲物語
已上五十五段　【藤井】

鳩烏万葉集(にはどりまんえふしふ)　詞曲集　横本二册　【刊行】享保八年八月、鶴屋喜右衞門板。【內容】半太夫節及び河東節の詞曲集で、題簽には「にほ万葉集江戸半太夫江戸河東直傳」とある。上卷には「四季のまひ」より「笠物狂」に至る三十九曲、下卷には「神樂獅子」より「あら世帶」に至る四十六曲を收む。總目錄左の如くである。

(一)四きのまひ(二)京わらべ(三)おんせん獅(四)くさづくし(五)うらしまの道行(六)小もんづくし(七)十郎かみすき(八)五郎げんぶく(九)ほうか僧道行(一〇)ほうか僧かつこの段(一一)松のうち(一二)まつののち(一三)かなはのだん(一四)唉分あいの山(一五)こくせんやかいづくし(一六)やはらぎ助六(一七)てうちんもんづくし(一八)そでごめそが(一九)袖ごめの道行(二〇)おんなかみゆい(二一)くげあくた川(二二)かたみそが(二三)かたみをくり(二四)ありまふで(二五)きぬた(二六)てうのはつがい(二七)里ことば(二八)かうやしん中(二九)かしこそで(三〇)ふみまくら(三一)たなばた(三二)かせんかいづくし(三三)吉原八けい(三四)助六後日心中(三五)さとかぐら(三六)ひとへおび(三七)元ぶくかみすき(三八)しかた松(三九)かさ物ぐるい(四〇)かぐらじし(四一)同しのびの段(四二)たるいおせんの道行(四三)江ぐちの道行(四四)しのだづま(四五)そでわかば(四六)せみ丸の道行(四七)同びわのだん(四八)同かねのだん(四九)なれそめそが(五〇)にいの前道行(五一)だて姬の道行(五二)小袖もやうの段(五三)けいせい道中双六(五四)はつねむこ(五五)こらせう〳〵の道行(五六)五人そがの道行(五七)おせん江戸物ぐるひ(五八)柱ごよみの道行(五九)馬上らうほの道行(六〇)けいせいうけ狀(六一)黑小そでの道行(六二)やまとのすけ(六三)きよつらの道行(六四)あふぎうり(六五)きやうらん草枕(六六)ふねのうち上(六七)ふねのうち下(六八)露のまへ道行(六九)黑木うり(七〇)天王しのびの段(七一)柳のかみすき(七二)まつよひ(七三)たもとのまへ(七四)新かたみおくり(七五)いしなげのだん(七六)すまふのだん(七七)三つのあさ(七八)こらがふみ(七九)あふぎ八けい(八〇)竹馬のむち(八一)あけぼの(八二)わにのだん(八三)はるのそら(八四)かぶろまんざい(八五)あらせたい。　【藤井】

鳩の浮巢(にはのうきす)　小說　【作者】宮崎三昧道人　【發表】明治二十八年五月、東京朝日新聞。【刊行】同二十九年二月、春陽堂。【題材】吉原扇屋の名妓鳩照の傳說を小說化したもの。

【梗概】良家の生れだが、今は紙屑買の幸次郎は、茶店女の妹おきぬと二人で家運再興のために奮闘してゐるうち、花魁鳩照の道中姿に迷ひ、何とかして一夕の歡を得たいと苦心する。揚代の工面に、おきぬの客黑部某から惠まれた金で谷中感應寺の富籤を買ふ。それが當つたと聞き、嬉し紛れに商賣道具の屑籠を川に拋り込んで感應寺へ駈けつける。だが肝心の富札は、屑籠に結びつけてあつたので金を受取ることが出來ない。はつと思ひ詰めた幸次郎は氣違ひとなる。おきぬは多田の藥師へ日參して兄の平癒を祈る。深川の俠商信傳(しんでん)は、一夜おきぬの災難を助けてこの話を聞き、幸次郎の戀を不愍に思ひ、情理を籠めて鳩照に說く。鳩照は義理と情に絡まれ、戀人の露川と緣を切つて、信傳に落籍されて幸次郎の妻となる。幸次郎は狂氣が癒え、信傳の世話で家運を戻すが、鳩照の心中を推し測つて離緣して露川の許に歸さうとする。鳩照は今は幸次郎の離緣を納れ、生命を捨てて露川に詫びをする。

【批評】如何にも哀れ深い物語で、切々と讀者の心をうつものがあり、脚本體の形式も內容に相應はしい。だが三昧の筆の重苦しさから來る一種ぎごちない感じが、どうしても拔けてゐない。古院本に見る「あはれ」も「さび」も

望を抱いてゐる。從つて村の他の子供達や若者達とは附合ひをしない。友達はただ新屋敷の貞一だけだつた。貞一は、猛夫とは異つて學問が嫌ひで、家の手傳をやつたり、若い漁夫だの、よくない人達と遊び歩き、段々不良になつて行く。彼の父の喜助は、猛夫の父の淸吉とはこれ又反對で、徒らに金儲けの夢を見、派手な生活をし、放縱で失敗ばかりして次第に產を傾けて行く。そして愈々金に困ると、大げさに漁船を海へ出したりした。かくて失敗に失敗を重ね、遂に遣り繰りに困つた擧句は、裁判沙汰まで惹起して、新屋敷の運命があやぶまれた。で、已むを得ず虎屋の主人は、喜助と一緒に岡山まで出向いて行つて、公け沙汰にしないですませた。その折、淸吉は初めて喜助に誘はれて遊廓に遊んだ。この導がひろまるに連れ、息子の猛夫は溺まされてゐる割に、生きた感じが薄い。他の三人は具象的に浮き上つてゐるが、猛夫は何處かつくりもののやうな感を抱かせる。季節々々の漁村の風物、殊に九月の暴風雨の後の狀況など、手に取るやうに鮮かに描かれてゐる。この一篇により、作者は長篇作家としても認められるに至つた。　【宮島】

にぎはひ草(にぎはひぐさ)　隨筆　二卷　【著者】佐野紹益　【刊行】天和二年　【諸本】本書は今稀覯に屬する。明治の復刊本は誤植が多い。日本隨筆全集卷十八所收。【解說】「徒然草」になぞらへて自己見聞の事、藝道の所感等を漫錄したもので、多くは晚年に及んで五六十年の既往を追懷した談である。上卷には茶道の事、和歌名匠の事、乞食僧靜圓・宗圓の話、埋忠氏の井手の蛙の事、細川幽齋の古今傳授の話、儉約と奢侈との利、「走禽草」の評、南以て聞えた。名妓吉野との情事は世の知るところである。元祿四年十一月十二日歿す。行年八十三。　【和田】

二九十八(にくじふはち)　能狂言　【解說】淸水の觀音樣に妻乞をした者、靈夢によつて西門の傍に立つてゐる女を妻に定めようと行つて見ると、果して女が衣を被いで立つてゐる。未だ獨身だといふので、宿を問ふと歌で答へる。春日の室町らしい。室町の角よりしてはいくつめかと問ふ。すると女は「あゝにく」とばかり言つて去つてしまふ。別に憎くもあるまいから二九十八軒目と云ふ事であらうといつて訪ねあて、さて被物を取つて見ると、ひどい醜婦なので驚いて逃げようとすると、女は觀世音の御引合せなのを逃げるものがあるかと追ひ入るといふ筋。大藏流では入門式に

を受取ることが出來ない。はつと思ひ詰めた幸次郎は氣違ひとなる。おきぬは多田の藥師へ日參して兄の平癒を祈る。深川の俠商信傳は、一夜おきぬの災難を助けてこの話を聞き、幸次郎の戀を不愍に思ひ、情理を籠めて鳰照に說く。鳰照は義理と情に絡まれ、戀人の露川と緣を切つて、信傳に落籍されて幸次郎の妻となる。幸次郎は狂氣が癒え、信傳の世話で家運を戻すが、鳰照の心中を推し測つて離緣して露川の許に歸さうとする。鳰照は今は幸次郎の離緣を納れ、生命を捨てて露川に詫びをする。

【批評】如何にも哀れ深い物語で、切々と讀者の心をうつものがあり、脚本體の形式も內容に相應はしい。だが三昧の筆の重苦しさから來る一種ぎごちない感じが、どうしても拔けてゐない。古院本に見る「あはれ」も「さび」もあるが、優れた作とはいひ難い。〔柳田(泉)〕

二家族（にかぞく）　小說　【作者】正宗白鳥【發表】明治四十一年九月より數箇月に亙り「早稻田文學」に連載。【刊行】同四十二年七月、新潮社。

【梗概】瀨戶內海の一漁村に名門として知られてゐる虎屋と新屋敷との二家族の生活を、虎屋の息子猛夫とその父淸吉、新屋敷の息子貞一とその父喜助とを中心人物として描き出したもの。この二家族は遠い姻戚關係もあるのだが、今日ではすつかり生活の方法が異つてゐる。虎屋の主人淸吉は、着實に一家を經營し、新たに土藏も建て、祖讓りの朽ちた大黑柱、傾いた棟をも修繕し、次第に財產をふやして行つた。息子の猛夫は小學高等科の四年、歲は十四で、學問が好きで、小學卒業後は中學に行き、やがては學者にならうといふ大望を抱いてゐる。從つて村の他の子供達や若者達とは附合ひをしない。友達はただ新屋敷の貞一だけだつた。貞一は、猛夫とは異つて學問が嫌ひで、家の手傳をやつたり、若い漁夫だの、よくない人達と遊び歩き、段々不良になつて行く。彼の父の喜助は、猛夫の父の淸吉とはこれ又反對で、徒らに金儲けの夢を見、派手な生活をし、放縱で失敗ばかりして次第に產を傾けて行く。そして愈々金に困ると、大げさに漁船を海へ出したりした。かくて失敗に失敗を重ね、遂に遣り繰りに困つた擧句は、裁判沙汰まで惹起して、新屋敷の運命があやぶまれた。で、已むを得ず虎屋の主人は、喜助と一緒に岡山まで出向いて行つて、公け沙汰にしないですませた。その折、淸吉は初めて喜助に誘はれて遊廓に遊んだ。この噌がひろまるに連れ、息子の猛夫は惱まされた。彼は元々村の鬼俗な、淫蕩な、野卑な生活を汚らはしく思つてゐたので、父までがみだらな生活をしたと聞かされては、彼はどんなに絕望したか知れなかつた。もう一時もこの村にゐるのがいやになつた。

【批評】作者最初の長篇小說。別に一貫した筋があるでもなく、また纏まつた物語的興味があるでもない。それにも拘はらず、讀者を易々と最後まで惹きつけて行く力はある。自然主義的手法、若しくは現實主義的態度を最もよく代表した作品であらう。これには作者の皮肉もなく、虛無的思想もなく、頹廢的要素もない。ただあるがまゝの生活を、あるがまゝに描いただけである。從つて白鳥の諸作中、稀に見る客觀的作品である。性格は猛夫・貞一・淸吉・喜助等、何れも鮮明に描き分けがしてある。ただ併し、猛夫に最も力が注がれてゐる割に、生きた感じが薄い。他の三人は具象的に浮き上つてゐるが、猛夫は何處かつくりもののやうな感を抱かせる。季節々々の漁村の風物、殊に九月の暴風雨の後の狀況など、手に取るやうに鮮かに描かれてゐる。この一篇により、作者は長篇作家としても認められるに至つた。

にぎはひ草（にぎはひぐさ）　隨筆　二卷　【著者】佐野紹益【刊行】天和二年【諸本】本書は今稀覯に屬する。明治の複刊本は誤植が多い。日本隨筆全集卷十八所收。【解說】「徒然草」になぞらへて自己見聞の事、藝道の所感等を漫錄したもので、多くは晚年に及んで五六十年の既往を追懷した談である。上卷には茶道の事、和歌名匠の事、乞食僧靜圓・宗圓の話、埋忠氏の井手の蛙の事、細川幽齋の古今傳授の話、儉約と吝嗇との別、「徒然草」の評、商家主從の間の事、無反の刀脇指の流行、鈴木正三の「因果物語」の評等を記し、下卷には本阿彌光悅の爲人、その烏丸光廣・飛鳥井雅章との交涉、八條宮智仁親王の事、蹴鞠の事數條、養珠院及び僧日遠の事、本滿寺日重上人の「和語抄」の評、和歌・俳句の評論、奈良不退寺在原業平の像等を錄してゐる。本阿彌光悅は己が諸藝の師であつて、永く近侍した關係から、その人物・言動を述べること、最も要領を得て居り、又茶道・蹴鞠は頗る堪能であつたと見えて、これを說くこと甚だ詳細である。卷尾に「天和二年歲次壬戌麥秋中浣、京室町物門辻書肆得榮堂二口伊豫彫梓」とあるのみで、序跋はない。

【著者・小傳】佐野紹益は家號を灰屋、通稱を三郎右衞門と云つて、京都上立賣の富商。諸藝に通じて搢紳の家に出入し、風流の交遊を以て聞えた。名妓吉野との情事は世の知るところである。元祿四年十一月十二日歿す。行年八十三。〔和田〕

二九十八（にくじふはち）　能狂言　【解說】淸水の觀音樣に妻乞をした者、靈夢によつて西門の傍に立つてゐる女を妻に定めようと行つて見ると、果して女が衣を被いで立つてゐる。未だ獨身だといふので、宿を問ふと歌で答へる。春日の室町らしい。室町の角よりしてはいくつめかと問ふ。すると女は「あゝにく」とばかり言つて去つてしまふ。別に憎くもあるまいから二九十八軒目と云ふ事であらうといつて訪ねあて、さて被物を取つて見ると、ひどい醜婦なので驚いて逃げようとすると、女は觀世音の御引合せなのを逃げるものがあるかと追ひ入るといふ筋。大藏流では入門式になつてゐるが、和泉流では小習である。觀音や藥師に妻乞や申子の通夜をする事は當代の流行だつたものか、文學上例が多いが、狂言にも「因幡堂」「吹取」「聲女座頭」等相當に見出される。「聲女座頭」の方は同じ淸水の靈驗でも、座頭と聲女とが夫婦になる事になつてゐるが、「二九十八」の方の結末は、狂言の常套的終結で類は却つて多い。〔編田〕

肉附け（にくづけ）　藝術論　【英】Modelling【佛】Modelé, Modelage.【解說】彫塑制作技術上の重要な一過程で、實在對象（主として人體）が有する厚味・立體感・圓味を作物に與へる仕方をいふ。普通粘土や蠟でする。かくして人體的印象の再現が完全に行はれたものを原型（モデル）として大理石又は靑銅等にうつすのであるが、吾々が展覽會等で屢々見るところの石膏像の如きは、むしろこの原型そのまゝのものと見做すべきものであるが、これ

をも鑑賞するといふことは、蓋し肉附けが彫塑技術上最も重要であることを表明する。繪畫の方面に於ても、明暗・暈し、或は明色暗色の照應關係を以て、畫面に於ける對象の立體感を完成する場合も、肉附けと稱して不可はない。文學論に於ても同樣の意味で使用されることがある。

【參考】ロダンの言葉 高村光太郎 〔村田〕

肉彈（にくだん） 戰爭文學 【著者】 櫻井忠溫 【刊行】明治三十九年四月、丁未出版社。櫻井忠溫全集・戰記名著文庫・戰爭文學集(現代日本文學全集)・新潮文庫等所收。

【梗概】明治三十七年日露開戰に際し、著者櫻井氏は松山聯隊の旗手として五月末遼東半島の一角に出征したが、折柄青泥窪（ダルニー）への關門南山の陷落を見たので、爾來新たに編成された第三軍に屬し、乃木將軍の指揮下に旅順攻圍戰に從ふ事になつた。對陣月餘にしてまづ歩頭山に初陣し、續いて劍山の險に激戰を經驗して敵の第一防禦線をわが手中に收めた。而して數次の猛烈な逆襲を斥けつつ警戒守備の任に當り、炎熱と雨露に交々惱まさるゝ幕營生活を續けること一ケ月、漸くわが進擊準備が整つたので、第二防禦線を襲ひ、難戰苦鬪三日に亙つて太白山一帶の陣地を占領し、更に長驅追擊して、初めて難攻不落を誇る堅壘、旅順要塞の本防禦線に迫るに至つた。やがてこれが攻擊の據點とすべく豪雨を衝いて大孤山の攻略に當り、著者も死を期して骨箱を用意した程で、敵壘よりの銃砲火に加ふるに、背面からは敵艦隊の砲擊さへ受けて極度に苦戰したが、二日にして遂にこれを奪取することが出來た。越えて二週目、わが軍は愈々第一回總攻擊に轉じた。この間著者は中尉に昇進し小隊長として陣頭に立つ事になり、目標たる東鷄冠山砲臺に向つて進んだ。わが砲兵隊の痛擊に掩護されつつ逐次躍進し、八月二十一日以來歩兵の突擊が行はれ、鐵條網と機關銃とを冒し、敵壘直下に所謂肉彈戰の慘烈なる場面が繰返されたが、徒らに死屍を積むのみに終つた。二十四日未明、中隊はその後を繼ぐ「必死隊」として進擊したが、敵の第一散兵壕を破るや中隊長戰死し、兵は一人々々斃れ、代つて指揮する櫻井中尉また右手を擊たれた。而も屈する色なく白刃を左手に望臺を占領したが、一隊の敵兵が直ちに逆襲して大混戰が演ぜられ、中尉は更に左手を射貫かれ、又右脚まで碎かれて立つ能はざるに至つた。夜が明けたが、累々として戰場を埋むる死傷者に伍し、敵の虐殺と味方からの砲彈の危險に曝されながら、流血の刻々と生命を奪ひ去るにまかせて重傷の身を横へてゐるより外なかつた。その時見も知らぬ高知聯隊の近藤竹三郎が、わが身の負傷を顧みず、瀕死の中尉を負うて敵圍より脫出し、辛うじて死中に再生を得しめたのである。

【批評】著者が自ら序する如く、本書は旅順役の一面を描いたものに過ぎず、またその悲壯慘烈の度も或はその後に於て甚だしかつたかも知れないが、而も日露戰爭を記念する作品中最も世に迎へられた所以は、一にわが國に於ける近代戰爭文學の最初の所産たりしと共に、著者がその體驗を率直に描いた點とにある。卽ち本書出でて初めて戰線の機構局面に接し得ると共に、人間的な鐵火記錄としてこれに親しむことが出來たのと、またやゝ稚拙粗大の文辭ながら、偶感觸目せる身邊の事實をその直後に記述せる事とて、生々しき實感を與へた爲めである。この故を以て、著者が左手を以て執筆したといふこの血の記錄は、啻に今日に至るまでよく讀者を感激せしめ、啻に戰爭文學第一の書としてのみならず、明治・大正を通じて最も多く讀まれたる作品の一つとしても特記せらるべきである。これが海外に於ての反響も頗る大で、本田增次郎、ミス・ベエコンに依る英譯の行はるゝ外、シンチングルの獨譯、バルビの伊譯、更に佛・伊・支語にも譯され、露語譯の出づること實に五種の多きに及んだ。なほ本書の姉妹篇として、著者が旅順の役を全部的に回顧的に描いたものに「銃後」がある。 〔水木〕

二絃琴（にげんきん） 樂器 【異稱】八雲琴（やくもごと） 【構造】現時はこれに二派あり、一を八雲琴と呼び、一を東流二絃琴といふ。兩者はその構造に於て大同小異である。八雲琴は長三尺六寸、頭幅四寸一分、尾幅三寸八分の細長い平たい胴の上に、二絃を並行に極めて近接して張つたものである。胴は初めは竹で造つたが、今は多く杉又は桐で造る。併し竹で造つたやうに似せて、表板には頭・中・尾の三所に竹節の形を彫つてある。表板は竹を割つたやうな形に凸つてゐるが、それに平らな裏板が張つてある。裏板には日輪形と月輪形との響孔が開けてある。尾の方には高二寸六分許の糸巻が二本左右に立つて居り、これに巻き付けた二本の絃は、一個の小さな風門と稱する孔を通つて胴の表に出るやうになつてゐる。それで駒は尾の近くと頭の近くとの二個所にあり、尾に近いものを雲額といひ、頭に近いものを

二絃琴

絃乘又は龍角といふ。前者は高さ四分、後者は高さ五分ある。この兩駒の間の絃の部分を彈ずるのである。東流二絃琴もその形大同小異であるが、ただ長さ少しく短く、且つ裏板のないことが大に異つてゐる。胴の表面には三十一個の徽があつて、これを勘所の目安とすることは一絃琴と相似てゐる。琴糸は青色の濃淡あるものを用ひる。又琴は必ず琴臺に乘せて用ひる。琴臺には机形のものと圖の如き形のものとがあり、普通には後者を用ひる。

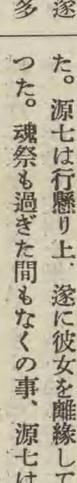
【奏法】一絃琴の奏法と同じく、左手の中指に轉管（てんかん）と稱する白竹又は象牙の管をはめて、それで絃の勘所を按じ、右手の食指に龍爪と稱する角製又は象牙製の爪をはめて、それで絃の龍角に近い部分を彈じて鳴らす。轉管は元來須賀川の千鳥に象るといふ。長さ一寸八分、前より六分の所へ、二つの穴をあけて錦の紐を通し、上にて後へ結び流し、その形鳥の羽の如くする。又管の先指のとまりにも同じく錦を張る。龍爪は管の兩端を斜に切つてある。その最も長い所で一寸二分の長さあり、その最も短い所は二分あつて、その部を錦で巻く。二本の絃は全く同調に調律してあるから、これを彈ずる時は常に二本を一緒に彈くのである。【樂譜】樂譜は徽の名を書き記す。徽は又霊（つぼ）ともいふ。霊の

琴臺

名は、次の和歌の各文字を雲額に近い方から順に唱へるのである。「ヤクモコト、ツホハウヘヨリ、シタマテヲ、ワカノミソチニ、ナラヒキメヌル」これを壺の歌といふ。

【沿革】我が國の古代及び支那に、二絃の琴が有つたか否かは不明である。今日行はれる八雲琴の起原は、江戸時代の中頃文政年間に始まる。その頃伊豫國宇摩郡天滿村の人中山吉士道卿なる者が、關口流の武術を學んでその奥義を傳へ、又醫學を練修して刀圭の理を窮めたが、音樂を好み、京都に出でて菊岡檢校の門に入つて箏曲を學び、文政三年十月、出雲國琴引山の天日隅宮に祈願を籠め、遂に宇迦の神山の竹を伐り、これに陰陽の二絃をかけて八雲琴を作つた。その初めは出雲琴又は玉琴と呼んだが、後に「八雲たつ」の古歌に因つて

して名人の名あり、多くの新曲を作つた。明治の中頃迄は相當に盛んであつたが、その後非常に衰へ、今日では名古屋に一色輝琴女史のある外は、あまり行はれてゐない。大岸正常は號を元琴といひ、江戸に出て下谷根岸にゐた。その時江戸の旗本の次男に加藤龜太郎といふ者があり、幼より音曲を好み、長唄の囃子に達してゐたが、大岸元琴の門に入つて八雲琴を學び、八雲琴の古風なるに慊らず思ひ、俗曲・端唄等の俗耳に入り易いものを主として奏したので、師から破門された。そこで彼は自ら藤舍廬船と名乘り（藤舍とは、彼の定紋が下り藤であるのによる）、八雲琴の名を改めて、東流二絃琴と稱して世に弘めた。關東に於ては、遂に八雲琴を壓倒して獨り榮えるに至つた。初代廬船の一子加藤常理は、愚にして遂に家産を蕩盡したが、常理の妻はまの兄本多うち、或る月の夜に、お力の以前の情人の蒲團やの源七が訪ねて來たが、お力は眼をつぶつて會はずに歸し、朝之助にわけを聞かれると辛い立場を訴へて吐息をもらした。お力に現をぬかした源七は、落ちぶれ果てた今もなほ彼女を忘れかねてゐる。女房のお初が悲しみを抑へての心盡しも效がない。それだけお力には、人の恨を受けながら色戀の切賣がつくづく嫌になるのであつた。朝之助が來るとお力はコップ酒を呷りながらの身の上話に、もとをと言へば代々傳はる出來損ねで、そのための貧苦から、と言ひさして泣き出した。一方源七は暮しに詰つても働かうとしない。賣女づれに見かへられたかと、お初は口惜しく涙ぐみ、子供の事から思ひ餘つてお力を罵つた。源七は行懸り上、遂に彼女を離縁して了つた。魂祭も過ぎた間もなくの事、源七はお



未だ人の世の儚さを嘆く分子が多いが、特異な題材をとつてゐると共に、一葉の作としては最も現實味に富んでゐるもので、文章も平明のうちに纖細な味を出してゐる。「たけくらべ」(別項)と共に作者の代表作である。なほ本篇は、眞山青果によつて脚色され、大正七年六月歌舞伎座で、河合・喜多村一座によつて上演された。 〔湯地〕

西周（にしあまね） 學者 【姓名】幼名經太郎（みちたろう）、やゝ長じて壽專（ひさもと）、後修亮。外に時懋（ときなり）・魚人（なひと）・魯人の名もあるが、公文書には多く周助と書し、竟にこれに從ふ。後また周と通稱す。【號】鹿城・天根・甘寐舍・甘寐齋 【生歿】文政十二年二月三日石州津和野に生れ、明治三十年一月二十九日東京に歿す。享年六十九。【墓所】東京青山墓地 【家系】家は代々津和野の藩醫である。父は時義、母は梁田氏兼子、周はその

名は、次の和歌の各文字を雲額に近い方から順に唱へるのである。「ヤクモコト、ツホハウヘヨリ、シタマテヲ、ワカノミソチニ、ナラヒキメヌル」これを壺の歌といふ。

【沿革】我が國の古代及び支那に、二絃の琴が有つたか否かは不明である。今日行はれる八雲琴の起原は、江戸時代の中頃文政年間に始まる。その頃伊豫國宇摩郡天滿村の人中山吉士道卿なる者が、關口流の武術を學んでその奥義を傳へ、又醫學を練修して刀圭の理を窮めたが、音樂を好み、京都に出でて菊岡檢校の門に入つて箏曲を學び、文政三年十月、出雲國琴引山の天日隅宮に祈願を籠め、遂に宇迦の神山の竹を伐り、これに陰陽の二絃をかけて八雲琴を作つた。その初めは出雲琴又は玉琴と呼んだが、後に「八雲たつ」の古歌に因つてこれを八雲琴と呼び、又自ら名を改めて中山琴主（ことぬし）といつた。そして再び京都に出でこの八雲琴を弘めた。然るにその時有名なる葛原勾當も亦獨立に二絃琴を發明して、これを京都の琴屋政田屋甚兵衞に作らせ、これを竹琴と名付けたが、或る時中山琴主と葛原勾當と相會し、互にその考案の一致せるに感嘆したが、勾當は琴主に讓つて名をも八雲琴と稱し、その家元を中山琴主とした。かくて琴主が、「八雲琴譜」と稱する書を發刊した時には、葛原勾當も亦自ら序文を書いた位であつたが、後に琴主と勾當と不和になつたので、遂にその書から葛原勾當の名を除き、中島檢校なる假名を以てこれに代用するに至つた。中山の門人備後尾の道の大岸正常といふ者が、頗るその技に通達

して名人の名あり、多くの新曲を作つた。明治の中頃迄は相當に盛んであつたが、その後非常に衰へ、今日では名古屋に一色輝琴女史のある外は、あまり行はれてゐない。大岸正常は號を元琴といひ、江戸に出て下谷根岸にゐた。その時江戸の旗本の次男に加藤龜太郎といふ者があり、幼より音曲を好み、長唄の囃子に達してゐたが、大岸元琴の門に入つて八雲琴を學び、八雲琴の古風なるに慊らず思ひ、俗曲・端唄等の俗耳に入り易いものを主として奏したので、師から破門された。そこで彼は自ら藤舍蘆船と名乘り（藤舍とは、彼の定紋が下り藤であるのによる）、八雲琴の名を改めて、東流二絃琴と稱して世に弘めた。關東に於ては、遂に八雲琴を壓倒して獨り榮えるに至つた。初代蘆船の一子加藤常理は、愚にして遂に家産を蕩盡したが、常理の妻はまの兄本多利實なる者が、その跡を襲いで二代目蘆船と稱し、一時は相當の勢力もあつたが、明治の末年から急に衰へて、今日では門弟等が辛うじてその跡を維持してゐる有樣である。

【參考】八雲琴譜中山琴主〇新撰八雲琴譜近藤儀琴〇東流二絃琴唱歌集初代藤舍蘆船〔田邊〕

にごりえ　小說【作者】樋口一葉【發表】明治二十八年九月、「文藝倶樂部」【刊行】一葉全集上卷・現代日本文學全集所收。

【梗概】酌婦のお力は菊の井の一枚看板で、媚びるでもなくむしろ我儘に振舞つて、それで不思議に人氣があつた。が、傳法を裝ふ胸の中には人に言はれぬ惱みがあつた。從つて何處か可憐な風情が感じられる。或る時、ふと呼び込んだ客の結城朝之助は、場所柄に過ぎた顏もしげな男で、逢ふ瀨の重なるに伴れ、お力もいつか馴染んでいつた。さうしてゐる

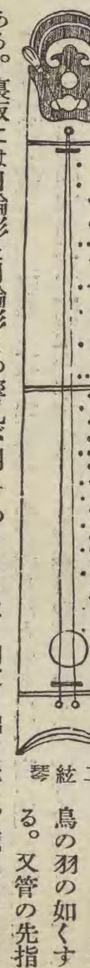
うち、或る月の夜に、お力の以前の情人の瀧團やの源七が訪ねて來たが、お力は眼をつぶつて會はずに歸し、朝之助にわけを聞かれると辛い立場をぬかした源七は、落ちぶれ果てた今もなほ彼女を忘れかねてゐる。女房のお初が悲しみを抑へての心盡しも效がない。それだけお力の恨を受けながら色戀の切賣がつく女づゝ嫌になるのであつた。朝之助が來るとお力はコップ酒を呷りながらの身の上話に、もとをと言へば代々傳はる出來損ねで、そのための貧苦から、と言ひさして泣き出した。一方源七は暮しに詰つても働かうとしない。賣女づれに見かへられたかと、お初は口惜しく涙ぐみ、子供の事から思ひ餘つてお力を罵つた。源七は行懸り上、遂に彼女を離縁して了つた。魂祭も過ぎた間もなくの事、源七はお力を中心とした世界を表とし、源七を殺して自分も死んだ。それは無理心中であつた。

【批評】お力を中心とした世界を表とし、源七を中心とした世界を裏とし、最後に兩者を一つに締めくゝり、その間にしんみりした人情味を湛へてゐる。殊にお力を主とした女性描寫に於て、色香を賣る女や、實意ある人妻等の生活裏の諸相が、世故に長けた筆で精細に描かれてゐる。中でもお力は、最も心理的に未だ人の世の儚さを曉く分子が多いが、特異な題材をとつてゐると共に、一葉の作としては最も現實味に富んでゐるもので、文章も平明のうちに纖細な味を出してゐる。「たけくらべ」（別項）と共に作者の代表作である。なほ本篇は、眞山青果によつて脚色され、大正七年六月歌舞伎座で、河合・喜多村一座によつて上演された。〔湯地〕

西周（にしあまね）　學者【姓名】幼名經太郎（みちたろう）、やゝ長じて壽專、後修亮。外に時懋（ときしげ）・魚人（なと）・魯人（ひと）の名もあるが、公文書には多く周助と書し、竟にこれに從ふ。後また周と通稱す。【號】鹿城・夫根・甘寐舍・甘寐齋。【生歿】文政十二年二月三日石州津和野に生れ、明治三十年一月二十九日東京に歿す。享年六十九。【墓所】東京青山墓地【家系】家は代々津和野の藩醫である。父は時義、母は梁田氏兼子、周はその長子、外に一弟二妹があつた。安政六年三月石川氏ます子を娶る。【閱歷】幼少の頃から祖父時雍の薰育を受けた。十二歲の時初めて藩主龜井玆監に見え、中扈從格となり、時懋と名乘る。この頃より學に勵むこと篤く、嘉永元年（二十歲）遂に父祖の業を捨て儒學を修業すべき命を受け、五月元服の式を行ひ、髮を蓄へて修亮と稱し、七月養老館句讀を拜命した。同二年九月、大阪遊學を願つて三年の暇を賜つた。大阪では後藤機の松陰塾に入つたが、翌年八月大阪を去つて岡山學校に移つた。同四年十月退學歸鄉、翌五年九月培塗塾頭を命ぜられた。越えて嘉永六年二月江戸詰となり時習堂講釋を命ぜられた。江戸出府後の周は洋學に志し、藩邸內の醫野村春岱に和蘭文典を學んだ。次いで安政元年三月、彼は松陰塾時代の舊友の援助を得て、君父に遺書して

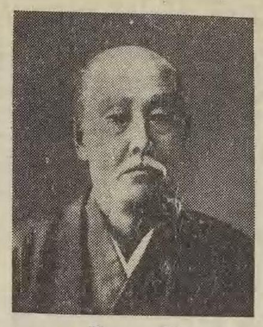
長驅追擊して、初めて難攻不落を誇る堅壘旅順要塞の本防禦線に迫るに至つた。やがてこれが攻擊の據點とすべく豪雨を衝いて大孤山の攻略に當り、著者も死を期して骨箱を用意した程で、敵壘よりの銃砲火に加ふるに、背面からは敵艦隊の砲擊さへ受けて極度に苦戰したが、二日にして遂にこれを奪取することが出來た。越えて二週目、わが軍は愈々第一回總攻擊に轉じた。この間著者は中尉に昇

も知れないが、而も日露戰爭を記念する作品中最も世に迎へられた所以は、一にわが國に於ける近代戰爭文學の最初の所產たりしと共に、著者がその體驗を率直に描いた點とにある。卽ち本書出でて初めて戰線の機構局面に接し得ると共に、人間的な鐵火記錄としてこれに親しむことが出來たのと、またやゝ稚拙粗大の文辭ながら、偶感觸目せる身邊の事實をその直後に記述せる事とて、生々しき實感



ある。裏板には日輪形と月輪形との響孔が開けてある。尾の方には高二寸六分許の糸卷が二本左右に立つて居り、これに卷き付けた二本の絃は、一個の小さな風門と稱する孔を通つて胴の表に出るやうになつてゐる。それで二本を一緒に彈くのである。【樂譜】樂譜は徽の名を書き記す。徽は又雲ともいふ。壺の尾に近いものを雲額といひ、頭に近いものをのとまりにも同じく錦を張る。龍爪は管の兩端を斜に切つてある。その最も長い所で一寸二分の長さあり、その最も短い所は二分あつて、その部を錦で卷く。二本の絃は全く同調に調律してあるから、これを彈ずる時は常に二本を一緒に彈くのである。鳥の羽の如くする。又管の先指

亡命した。これより大野藩士某及び郷人池田多仲に蘭學を學び、和蘭砲術の書を讀んだ。更に、大阪・岡山時代よりの舊友鈴木雄藏を介して杉田塾に通學し、次いで多仲を介して手塚律藏の塾に通つた。同三年初めて英語を學ぶ。同四年春、幕府の蕃書調所頭取古賀謹一郎に會ひ、手塚の推薦により、蕃書調所教授手傳並となつた(二十九歳)。同時に手傳並となつたものに津田眞一郎(後に眞道)がある。爾來兩人は永く手を携へて我が國文化の開發に貢獻した。同六年五月蕃書調所教授手傳を拜命。文久二年六月多年の願ひが容れられて、兩人は和蘭留學の命を受けた。六月十八日江戸を



西周

出發、翌三年五月和蘭に着いた。留まること三年、慶應元年十二月無事歸朝した。同二年三月開成所教授となり、四月その將來せる和蘭政治學の書を譯すべき幕命を受け、萬國公法を譯述して上つた。九月命により京都に赴く。これより先、將軍家茂大阪に薨じ、慶喜職を嗣いで京都にあつた。京都に於ける周は徒らに無聊に苦しむのみであつたが、諸藩士の聲名を傳聞して來り、意見を叩くものが多く、後には就いて學ぶ者も出來、遂に五百人に垂んとし、諸侯中來つて西洋法學の講義を聽くものもあつた。同三年三月突然慶喜の召にあひ、佛蘭西語を授けることとなつた。爾來慶喜の側近にあつて、相當重要な役目をなすに至つた。幕府の外交文書を譯したのも當時のことである。將軍の多忙なるに從ひ、佛蘭西語の學習を廢するに至つて、慶喜との交渉はやゝ縁遠くなつたが、私塾の方は益々盛んになり、西洋政治に關する諮問はいよ〳〵頻繁であつた。同年十二月慶喜の大阪に去るに隨ひ、更に翌慶應四年鳥羽伏見の戰爭起り、慶喜の江戸に遁れるや、これを追うて東に歸つた。江戸に到るや直ちに眞道と共に立憲政體調査の事を命ぜられた。同年二月東叡山に參仕して慶喜に謁した。時に慶喜は大久保一翁・勝安房の言を用ひて恭順、罪を謝するに決意してゐた。周は命ぜられてこれが告諭の文を草した。四月慶喜に扈從して水戸に行く。閏四月江戸に歸る。五月詔により徳川家達靜岡に封ぜらるゝに及び、事漸く定まり、慶喜は駿府に移つた。周は一身の歸趨に迷つて一度は恩師手塚律藏(瀨脇壽人と改む)を頼らんとしたが、當時阿部邦之助が軍艦を沼津に起すに當り、友人大築尚志の推薦によつて、招かれて兵學校頭取となつた(明治元年十月)。同二年三月、勝安房の推擧により、山縣有朋に見出され、軍部の顧問として兵部省出仕を命ぜられ、學制取調御用掛を兼ねた。彼が永く軍部特殊の立法に參するの端はこゝに始まる。就中山縣との交情は晩年まで續いた。同十一月育英舍を開く。軍部に於ける地位は年と共に進み、その間侍讀の命を拜し(四年八月)、明六社に入りて學者としての活動を鮮明にし(明治七年以降)、宮内省御用掛を拜し(九年一月)、東京學士會院會員に選まれ(十二年一月)、爾後屢々その院長となり、又文部省御用掛を兼ねて東京師範學校の事務を視(十四年六月)、元老院議官に任ぜられ(十五年五月)、次いで又貴族院議員に勅任せられた(二十三年九月)。而してこれ等の職任、また各々簡單にが、終始淪らざるは陸軍省幷に參謀本部との密接なる關係である。彼は元來蘭・英・佛の語に通じ、博く參照して獻替する所があり、兵法字書の編纂を初め、海陸軍刑法・陸軍官制職制・軍法會議等の如き、皆その力を藉らざるはない。然るに明治二十四年頃より著しく健康を害し、同三十年一月遂にまた起たなかつた。

【譯著】萬國公法四册(譯、慶應四年)○百一新論二册(別項)(著、明治七年三月)○致知啓蒙二册(著、明治七年九月)○利學二册(譯、明治十年)○奚般氏心理學二册(譯、明治十二・三年)○公法手錄一册(譯、明治十五年)○偶評西先生論集一册(壹生奉三編、明治十三年刊)等。外に短篇論文が主として「明六雜誌」「東京學士會院雜誌」「學藝志林」「内外兵事新聞」等に發表されてゐる。

【業績】國事多端の際に當つて、先覺の一人として各方面に殘した足跡は、實に大きいと言はなければならない。早くより慶喜の君側にあつて特殊の役割を果したのを初めとして、早く育英のことに力を用ひ、或は軍部の顧問として軍政の創立に努めた。殊にその卓見を稱すべきは、洋行前すでに西洋性理の學、又は經濟學に注意した點にある。彼に獨立の研究、纏まつた著述もなく、從つて學者としての名を後世に傳ふべき何物をも遺さなかつたのは、過渡時代の人としては已むを得なかつたであらう。併し彼が、早くより闔・英二國語を能くし、中頃獨・佛語にも通じ、後には拉丁・希臘語をさへ解したといふから、當時の碩學中群を拔いて世の尊崇を受けたのも寧ろ當然であつたと言ひ得る。【吉野】

【參考】西周傳(森林太郎、鷗外全集第七卷)○明治文化全集法律篇解題○和蘭に於ける日本最初の留學生(幸田成友、明治文化研究昭和四ノ六)

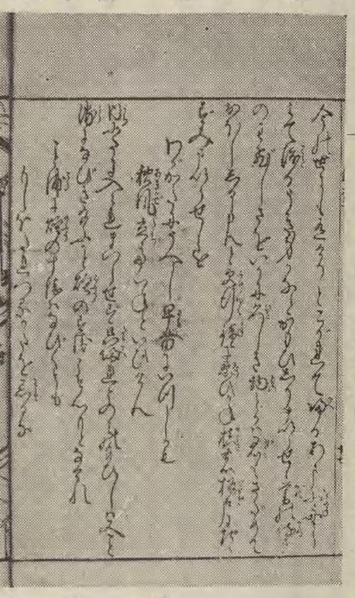
西川流(にしかわりゅう)　舞踊流派　【解説】創始者の姓に據る名稱で、寛保或は寶曆以後の人といはれる初代西川仙藏より始まつたが、廣く世に行はれるに至らず、藤間流(別項)の三代目藤間勘兵衛の門弟藤間勘助が、藤間より轉じて西川の家を嗣ぎ、四代目西川扇藏を名乘つてから、初めて世に謳はれた。彼の振附で有名な作品は、歌舞伎十八番の「勸進帳」(別項)である。彼は振附の名人として鳴らしたばかりでなく、近世の名手たる藤間勘翁・初代花柳壽輔・西川鯉三郎にも教へた。西川流は、扇藏の門弟鯉三郎に依つて名古屋に傳へられ、名古屋の名物となつた。正系の家元は東京に在るが、八代目を嗣いだ六十餘歳の老女は、大震災後間もなく歿し、その養女が九代目を嗣いだ。【小寺】

【參考】わが六大舞踊派の特質坪内逍遙(逍遙選集卷三)○少年時に見たる歌舞伎の追憶同上

錦繪(にしきえ)　繪畫　【解説】浮世繪(別項)版畫の最も進歩したもので、明和二年から作られた色摺版畫に附せられた名稱である。明和以前から色摺版畫は存在し、紅摺繪と稱せられてゐた。然るに明和二年に至つて美麗な色摺版畫が作られたので、その美しいこと恰も錦のやうだとて、蜀山人が錦繪と名付けたと傳へる。紅摺繪と錦繪の相違は、色版の發達によつて、あらはされた色彩美に關するのであつて、この時期に俄かに色版の發達を見、その技巧上の發達が、優れた色摺版畫を作製を促すに至つた。また紙質・顔料等の上にも改良を加へ、これまでの柾紙を廢して、明和以後奉書を用ふるに至つた。その大さにも變化があつて、これまでの紅摺繪の版畫とは寸法の上からも區別される。(浮世繪參照)【藤懸】

錦木(にしき)　「夫戀物の諸曲」を見よ。

錦木(にしき)　假名草子　五卷五册　【作者】未詳。淺井了意といふ説もあるが、北山邊に住んだ貞德門下の或る僧であるといふ説(新つれづれ)がある。【名稱】錦木は「言海」に、一尺許りの木を彩色したもので、古來陸奥の風俗に、男が女に逢はうと思ふと、女の門にこれを立てる。女も逢はうと思へば取り入れる。取入れなければ更に加へて立てて千束を限りとする。「思ひかね今日立てそむる錦木の、千束を待たで逢ふ由もがな」「徒らに千束朽ちにし錦木を、なほ戀ずまに思ひ立つ哉」といふ證歌まで出てをる。卽ち錦木は、文字のない國の艷書の代用をしたものであるから、本書が戀文を集めたもの故にかく名



錦木(太)

變心絶戀、誘引戀、絶戀、被捨戀、詞之義理、一艷發句の歌。

初めて艷書を贈る事から、その拒絶、二度目の文、次第に波瀾を卷き起して、戀の成就、滿足、疑惑、痴迷、破綻、哀愁、絶望等、戀の種々相や道程を艷書の文面に表現したもので、その構想は「堀河院艷書合」(一名「詞花懸露集」)や、近くは「薄雪物語」(別項)などから得

種の美文としては技巧の優れたものであり、好色本の一種として、當時にあつては、かなり歡迎されたものである。【影響】既に「薄雪物語」があつて、「錦木」の如きは、その影響を受けたものであるが、更にこの書に由りて艷書體小説が、ます〳〵盛んになつた。「水のかしは」「小夜衣」「好色錦木」「薄紅葉」(別項)「雲の梯」「誰袖の海」「新錦木」等、一々記すに遑がない。西鶴の「萬文反古」(別項)も、内容は別であるが、形式はこの體で、やはりその流れを汲んだものである。

【參考】堀河院艷書合　附　詞花懸露集　【水谷】

錦戸(にしきど)　「判官物の諸曲」を見よ。

錦之裏(にしきのうら)　洒落本　一册　【作者】山東京傳　【畫工】自畫　【名稱】内題には、「青樓書之世界錦之裏」とある。【刊行】寛政三年【諸本】德川文藝類聚第五編・近代日本文學大

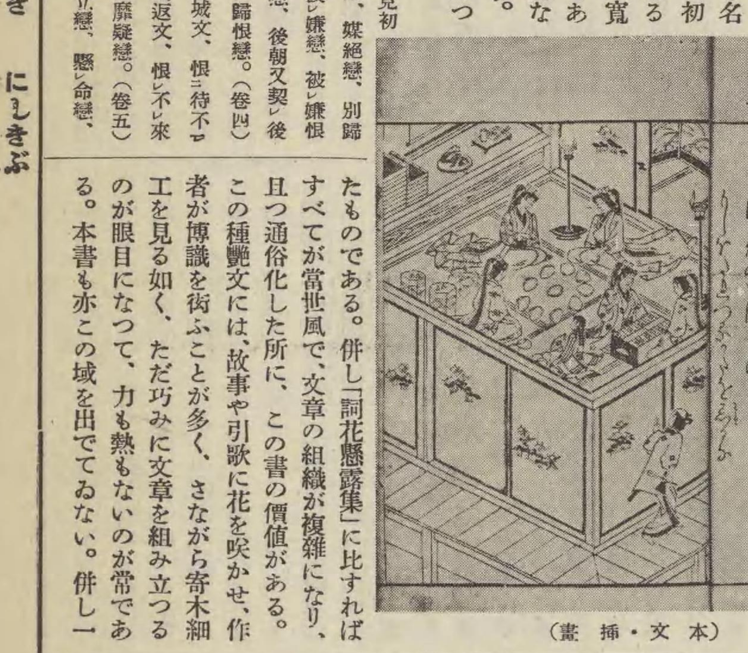
し、屏風の中に入れて愛める。折柄隣座敷の次の間では、新造等が集まつて歌骨牌をとつてゐる。その歌の文句が二人には一つ〳〵に身に當る。この時、遣手婆を初め若者等が來て伊左衛門を打擲し、店から突き出さうと騒ぐ。夕霧は制しかねて自殺しようとする。すると次の間の長持から「夕霧どの心底見えた」と聲かけて現はれたのは浮里の客である。藤屋の出店の番頭で、伊左衛門に顔見知られぬのを幸に、夕霧の心底を見屆けに來てゐたのであつた。彼はそこで伊左衛門に錦の財布を渡す。中には夕霧身請の手附金五百兩と勘當許しの父の手紙とがある。伊左衛門と夕霧の二人は、思はず手を合せて感謝した。

【構想】前半に於ける妓樓の朝より晝すぎ迄の描寫は、要を得てゐると共に精緻を極め、京傳でなくてはと思はれる。後半は人情本の世

錦木（にしき）「夫婦物（めをとも）の謡曲」を見よ。

錦木（にしき）　假名草子　五巻五册　【作者】未詳。淺井了意といふ説もあるが、北山邊に住んだ貞德門下の或る僧であるといふ説（新つれづれ）がある。【名稱】錦木は「言海」に、一尺許りの木を彩色したもので、古來陸奥の風俗に、男が女に逢はうと思ふと、女の門にこれを立てる。女も逢はうと思へば取り入れる。取入れなければ更に加へて立てて千束を限りとする。「思ひかね今日立てそむる錦木の、千束を待たで逢ふ由もがな」徒らに千束朽ちにし錦木を、なほ懲りずまに思ひ立つ哉」といふ證歌まで出てをる。卽ち錦木は、文字のない國の艷書の代用をしたものであるから、本書が戀文を集めたもの故にかく名づけたものであらう。【刊行】初版は寛文元年辛丑九月吉日とあるだけで書肆の名はない。【諸本】寛文板の外に、刊年月のない本もあるから、何度か重版したに相違ない。江戸時代文藝資料第四所收。【解說】本書は、戀の文盡しであつて、目錄は、

（卷一）寄三幼女一初戀、後朝戀、見初戀、行空歸戀。（卷二）初戀、疑戀、媒絶戀、別歸戀、慕戀、忍心戀、無二返歎戀一、被レ嫌戀、被レ嫌恨戀。（卷三）不レ堪レ忍戀、作レ文戀、後朝又契レ後戀、待戀、求レ媒始戀、被レ疑警戀、歸恨戀。（卷四）寄三遊女一戀、遊女恨戀、佗レ歸傾城文、恨三待不一レ來傾城文、遣二端傾城一文、端傾城返文、恨不レ來端傾城文、始戀、慕二好色一戀、乍レ靡疑戀。（卷五）忍久戀、互忍戀、忍不レ逢戀、名立戀、懸レ命戀、變レ契戀、誘引戀、絶戀、被レ捨戀、詞之義理、一艷曉句の歌。



錦木（本文・挿畫）

初めて艷書を贈る事から、その拒絶、二度目の文、次第に波瀾を卷き起して、戀の成就、滿足、疑惑、痴迷、破綻、哀愁、絶望等、戀の種々相や道程を艷書の文面に表現したもので、その構想は「堀河院艷書合」（一名「詞花懸露集」）や、近くは「薄雪物語」（別項）などから得たであらう。併し彼が、早くより歐・英二國語を能くし、中頃獨・佛語にも通じ、後には拉丁・希臘語をさへ解したといふから、當時の碩學中群を拔いて世の尊崇を受けたのも寧ろ當然であつたと言ひ得る。【吉野】

【參考】西周傳（森林太郎（鷗外全集第七卷）○明治文化全集法律篇解題○和蘭に於ける日本最初の留學生　赤田成友（明治文化研究昭和四ノ六）

種の美文としては技巧の優れたものであり、好色本の一種として、當時にあつては、かなり歡迎されたものである。【影響】既に「薄雪物語」があつて、「錦木」の如きは、その影響を受けたものであるが、更にこの書に由りて艷書體小說が、ます〳〵盛んになつた。「水のかしは」「小夜衣」「好色錦木」「薄紅葉」（別項）「雲の梯」「誰袖の海」「新錦木」等、一々記すに遑がない。西鶴の「萬文反古」（別項）も、內容は別であるが、形式はこの體で、やはりその流れを汲んだものである。

【參考】堀河院艷書合　附　詞花懸露集　【水谷】

錦戶（にしきど）　「判官物（はうぐわんもの）の謡曲」を見よ。

錦之裏（にしきのうら）　洒落本　一册　【作者】山東京傳　【畫工】自畫　【名稱】內題には、「青樓畫之世界錦之裏」とある。【刊行】寛政三年　【諸本】德川文藝類聚第五編・近代日本文學大系第十一編・洒落本大系等に所收。【題材】洒落本の趣向が年々古くなつたので、捻つて夜を生命とする青樓の畫の世界を描かんとしてゐる。百人一首の歌骨牌の歌の句に合せて、男女の情緒を逃ぶる趣向は、洒落本「面美知之裡（めみちのリ）」（天明九年）の趣向を襲用し、又夕霧伊左衞門の情話の筋と人物をも借りてゐる。

【梗概】攝津神崎の廓に、吉田屋喜左衞門と云ふ妓樓がある。吉田屋のお職女郎夕霧の部屋では、いぎたなく寢てゐた番頭新造川竹・振袖新造夜舟・あしかの等が漸く起き出でる。馴染の遊女を措いて他の遊女に遊んだ客が朝歸りに、新造等に捉へられて來る。遊女等の朝湯通ひ、朝飯がすむ。お齒黑をつける。臺所では肴の仕入がある。これ等を順序よく精細に寫生してある。人無き折を窺つて、夕霧は戶棚に隱して置いた情人藤屋伊左衞門を出し、屛風の中に入れて慰める。折柄隣座敷の次の間では、新造等が集まつて歌骨牌をとつてゐる。その歌の文句が二人には一つ〳〵に身に當る。この時、遣手婆を初め若者等が來て伊左衞門を打擲し、店から突き出さうと騷ぐ。夕霧は制しかねて自殺しようとする。すると次の間の長持から「夕霧どの心底見えた」と聲かけて現はれたのは浮里の客である。藤屋の出店の番頭で、伊左衞門に顏見知られぬのを幸に、夕霧の心底を見屆けに來てゐたのであつた。彼はそこで伊左衞門に錦の財布を渡す。中には夕霧身請の手附金五百兩と勘當許しの父の手紙とがある。伊左衞門と夕霧の二人は、思はず手を合せて感謝した。

【構想】前半に於ける妓樓の朝より晝すぎ迄の描寫は、要を得てゐると共に精緻を極め、京傳でなくてはと思はれる。後半は人情本の世界で、本篇としては光彩を添へるに過ぎない。要するに作者の努力して寫さうとしたのは妓樓の晝の寫生であつた。【影響】巧緻を極めた妓樓の晝の光景の描寫は、後世の作家に多大の影響を與へたらしく、春水は「春色惠之花」（別項）第二編に、「晝の世界の穿をいはゞ錦の裏の糟粕にて故人山東庵の筆意に恥べし」といひ、松亭金水は「閑情末摘花」（別項）第二編に、「故人京傳子が青樓の晝の世界を錦の裏と號（なづけ）られしこそ妙案なれ」と言つてゐる。

【參考】洒落本評釋　山崎麓

錦文流（にしきぶんりう）　浮世草子・淨瑠璃作者・俳人　【姓名】未詳　【閱歷】詳傳不明。西鶴門の俳人で、錦頂子と號した。著作の序の署名の上に、浪花津俳諧僧と冠したものがあるから、大阪に住んでゐて、僧形であつたと推想される。印には、茅（本朝諸士百家記・徒然時勢粧）

梅梢庵、徒然時勢粧）と見えてゐる。一時堀江に住んだことが「本朝諸士百家記」に、享保五年頃に座摩の邊にゐたことが「徒然時勢粧」に見えてゐる。「戯財錄」は彼を西澤一風・水田西吟と共に、文者三傑に數へてゐるから、當時淨瑠璃作者として相當の人氣を得てゐたであらう。【著作】【浮世草子】堂大門屋敷五册（寶永二年板）○風流今兼好五册（同年板、未見）○當世乙女織七册（同三年板）○熊谷女編笠五册（同年板）○好色手柄咄五册（同五年板、未見）○本朝諸士百家記十册（同六年板）○徒然時勢粧七册（享保五年板）【淨瑠璃】本海道虎石（元祿十二年、竹本座）○傾城八花形（同十五年、竹本座）○高名大福帳（寶永元年、竹本座）○仁德天皇萬年草（正德三年、豐竹座）○西行法師曇染櫻（享保二年、豐竹座）○熊野權現烏牛王（享保四年、會根崎芝居）○國仙野手柄日記（伊藤出羽掾座、興行年不明）○男色賀茂侍（豐竹座、興行年不明）。浮世草子作者としても、淨瑠璃作者としても、獨自の世界を開拓し得たものではない。畢竟いづれの方面でも二三流作者である。【藤村】

織錦舍隨筆（にしごりのやずるひつ）　隨筆　二卷

【著者】村田春海【名稱】織錦舍は著者の堂號。【諸本】百家說林續編（井上頴（かひ）博士所藏の寫本に據る）所收。【解說】和歌を中心として國學に關する諸方面の考察を發表したもので、語學・修辭・有職等に係ることも多い。上卷に「ちひさき水鳥」以下六十五條、下卷に「伊勢物語新義の大凡」以下二十四條を收める。尋常一樣の隨筆と異つて長文の考證論篇などが多い。下卷の「家集辨」「天字讀法考」「萬葉集」に係る條項が卽ちそれである。殊に下卷には「萬葉集」に係る條項が多い。卷中所々に本居宣長の意見を駁擊してゐる。兩者の學問上の見地の違ふことが窺はれる。全篇美しい雅文で書かれてある。【和田】

西澤一風（にしざはいつぷう）　浮世草子・淨瑠璃作者【本名】義敎。通稱は九左衞門【別號】與志・朝義・集樂軒【生歿】寬文五年生れ、享保十六年（一三九）五月二十四日歿す。享年六十七【法名】常譽貞淑禪定門【墓所】大阪下寺町大蓮寺【閱歷】大阪上久寶寺町三丁目、後、心齋橋南へ四丁目に住んで正本屋を業とした。父太兵衞より代々書肆で、子を九左衞門といひ、孫を利兵衞といつた。その子利兵衞（俳號一鳳）は、演劇の功勞者で、又脚本の貸本を始めた人として知られてゐる。利兵衞の次男が脚本作者の西澤一鳳軒（別項）である。さて彼の作家としての生涯は元祿十一年から享保十四年に及び、三十年に亙つてゐるが、享保三年までは浮世草子を書き、その後は淨瑠璃を書いてゐる。その間に作る所、浮世草子約二十篇、淨瑠璃約十曲であつて、平均一年一作に當る。彼の淨瑠璃は皆豐竹座のために筆を執つたものである。作品の數の比較的に少いのは、正本屋の業務を持つてゐた爲めでもあらう。彼の淨瑠璃中、享保十一年四月豐竹座の高欄にかけた「北條時賴記」（別項）は、最も喝采を博したものである。その著「今昔操年代記」（別項）は操淨瑠璃の史料として有益なものである。【著作】新色五巻書（元祿十一年）○御前義經記（同十三年）○女大名丹前能（同十五年）○寬濶曾我物語（同十五年）○風流今平家（同十六年）○傾城武道櫻（寶永二年）○逸愛五人男（同四年）○野傾友三味線（同五年）○風流三國志（同五年）○茶傾ひそり顏（同五年）○傾城伽羅三味線（同五年）○御前二代曾我（同六年）○今源氏うつぼ舟（享保元年）○亂脛三本鑓（同三年）○後室色縮緬（同三年）○井筒屋源六繼寒晒（田中千柳と合作、享保八年）（以上各別項）○日本五山建仁寺供養（享保八年）○賴政追善芝（同九年）○女蟬丸（同九年）○音米萬石通（同十年）○南北軍問答（同十年）○美丈御前身替弓張月（同十年）○大佛殿萬代石礎（同十年）○北條時賴記（別項）（以上田中千柳と合作、享保十一年）○今昔操年代記（同十二年）○熊坂今物語（同十四年）（各別項）。

【批評】彼は浮世草子作者としては、西鶴歿後八文字屋本時代に至るまでの一時期を代表すべき作家の一人で、多く西鶴の作を摸して端物的好色物を綴つてゐるが、なほ「平家物語」「義經記」「曾我物語」（各別項）等の一種の飜案や、語物の取入れ等に新意匠を見せた續物を書いて、西鶴を通俗化してゐる。この通俗化の點では、八文字屋物の先驅をなしてゐる。【參考】西澤一風 水谷不倒（劉傳體小說史）○西澤一風 藤村作（上方文學と江戸文學）【藤村】

西澤一鳳軒（にしざはいつぽうけん）　脚本作者【本名】利助（理助とも）【別名】幼名、利藏。通稱、正本屋利助、略して本利。また正本屋九郎右衞門。利助を義弟に讓つて後、九左衞門と改めた。【號】李叟・狂言綺語堂・世代軒など。俳名は秋聲庵蒼々、後、滄々と改む。【生歿】享和元年に生れ、嘉永五年（一八五二）十二月二日歿す。享年五十二【墓所】大阪下寺町大蓮寺にあると傳へるが、墓碑は發見されてゐない。【家系】玄祖父は元祿期の小說家兼淨瑠璃作者たる西澤一風（別項）である。一風は又、正本屋九左衞門と稱して、當時隆盛な出版書肆であつた。その子九左衞門、孫利兵衞と代々業をついだが、一風より四代の孫利兵衞（俳號一鳳）は、當時操芝居衰へて歌舞伎芝居の興隆に鑑み、在來の院本出版の業を轉じて、歌舞伎名狂言の臺帳を刊行することを思ひ立つた。かくて繪入根本（別項）流行の機運を造つたといふ。利兵衞の長子（利兵衞）は鳳堂と號し、家督をつぎ、次子が利助で、父の俳號一鳳を取つて一鳳軒と稱した。【閱歷】内本町二丁目に住んでゐたが、文化九年父の歿後、兄と離れて堺筋清水町に移り、正本屋貸本業等を營んだ。幼時から戲場を好み、早熟の性であつたが、十二三歳の頃、既に四方連の狂歌師と交つてゐた。戲作を好み、家業は好む所でなかつたが、便宜を得て古來の淨瑠璃脚本に關する多くの文獻を蒐集して樂しんだ。天保十一年兄の死によつて業を一手に引受けたが、書林榮海堂は義弟に讓つたといふ。常に戲作・狂歌・俳諧等を試み、十五六歳の頃から作の筆を執るうち歌舞伎役者との交りも生じた。文政年中は、奈河一洗・同晴助・歌右衞門事金澤龍玉等の代作をなしたといふ。狂言作者として一鳳の名を出したのは天保初年からである。天保年中は、多く二代中村富十郎や四代中村歌右衞門のために作を提供したが、天保十二年江戸に下つて市村座に關係した事から、後七代市川團十郎の上阪に際して、彼のためにも執筆する所があつた。天保末年から晩年にかけては、演劇の考證等に專念し、大著述を殘した。京傳・馬琴が風俗の考證を發表してからの戲作者間の流行を追つたもので、著作の大部な點は彼の精力家たるを思はすが、記錄の蒐集を主とする態度に認り、考證家としては、京傳等より遙かに劣つてゐる。濱松歌國（別項）も同種の傾向の人物であるが、歌國の方がなほ堅實な點が見える。かゝる解釋は彼の劇作方面にも向けられるので、創作より改作が多く、而も理につんだ作柄は、彼のために惜しむべき點である。【著作】【脚本】けいせい雪月花（天保元年正月、大阪角の芝居。けいせい忍逢淵の改作）○花橘詠吉野山路（天保六年五月、大阪中の芝居。義經千本櫻の改作）○花魁莟八總（天保七年正月、大阪中の芝居。馬琴の八犬傳）○紅色桔梗女團七（同年七月、大阪北の新地芝居）○女猿曳閻魔（天保九年六月、大阪堀江芝居）○けいせい濱眞砂（天保十年正月、大阪角の芝居、女五右衞門の增補）○紅楓いろは文庫（天保十三年八月、大阪角の芝居。いろは文庫）○昔語稻妻帖（嘉永元年三月、江戸河原崎座。京傳の稻妻表紙）等。【合卷】譚柄瑠璃莽（嘉永二年刊。安政二年五編まで刊行。芝叟の聲に據るか）。

學修身訓。

西村天囚（にしむらてんしう）　評論家・小說家【本名】時彥【生歿】慶應三年七月鹿兒島縣北種子島に生れ、大正十三年七月歿す。享年五十八【閱歷】東京帝大古典講習科に學び、更に重野安繹の指導を受けた。明治二十二年「大阪公論」に入つて論說を擔當したが、翌二十三年大阪朝日新聞社に轉じ、二十六年福島中佐（安正）騎馬旅行の歸途を浦鹽に迎へて「單騎遠征錄」を書いた。翌二十七年日淸戰爭が起るや從軍記者となつて觀戰記を草し、二十九年轉じて東京朝日新聞主筆となつた。後、南支那に漫遊、三十五年大阪朝日新聞に入り、四十三年渡歐、東京朝日新聞に「龍動通信」を寄せて紙上を賑はした。それから四

【高須】

長じて儒學を安井息軒・大槻磐溪に、西洋兵學を佐久間象山に、蘭學・英學を手塚律藏に、佛學を原坦山に學んだ。嘉永三年二十六歳で支藩佐野の重役となり、執政たること十五年、開港論者として老中阿部正弘や德川慶喜に屢々上書した。王政維新後も新政府に建白するところがあつた。明治三年、佐倉藩大參事となり、廢藩後印旛縣權參事に任ぜられたが、同五年これを辭し、東京深川に居をトして家塾を開き、青年訓育に從事しつつ著述の筆を執つた。その頃、大木喬任の意見で頒布された新學制が、實利に偏し、道德振作の旨に及ばないのを遺憾とし、明六社同人の一人として、人心・風俗の改善に力めた。同七年、文部省五等出仕を命ぜられ、八年、三等侍講を兼ね、翌年文部大丞に榮進、同年三月、日本弘道會の前身、修身學社を創立した。次いで雜誌「修身

【高須】

宋學史」等の著がある。

西山物語（にしやまものがたり）　讀本　三册【作者】建部綾足【名義】京都西山の松の尾にあつた物語の意。【刊行】明和五年、江戸須原屋市兵衞・三河屋判兵衞・京錢屋七郎兵衞・文臺屋太兵衞版。【諸本】明和五年刊行の半紙本と、文化十年刊行の大型三册本（浪花加賀屋善藏版）とがある。珍本全集（帝國文庫）・雅文小說集（有朋堂文庫）所收。【題材】作者が明和四年、京都に遊んで得た西八條村の巷談を題材としたものであることは、「近世物之本江戸作者部類」及びその註に、小津桂窓も云つてゐるが、文化三年卯月十七日上田秋成が、この作の主人公大森七郎のモデルである渡邊源太といふものに邂逅して、その實說を記してゐるものによれば、源太の妹が一族の團次の子右內と私かに行末を契つてゐるが、富み榮

つてゐる。濱松歌國（別項）も同種の傾向の人物であるが、歌國の方がなほ堅實な點が見える。かゝる解釋は彼の劇作方面にも向けられるので、創作より改作が多く、而も理につんだ作柄は、彼のために惜しむべき點である。【著作】【脚本】けいせい雪月花（天保元年正月、大阪角の芝居。けいせい忍逢淵の改作）○花橘詠吉野山路（天保六年五月、大阪中の芝居。義經千本櫻の改作）○花魁茗八總（天保七年正月、大阪中の芝居。馬琴の八犬傳）○紅色桔梗女團七（同年七月、大阪北の新地芝居）○女猿曳閻魔（天保九年六月、大阪堀江芝居）○けいせい濱眞砂（天保十年正月、大阪角の芝居、女五右衛門の增補）○紅楓いろは文庫（天保十三年八月、大阪角の芝居。いろは文庫）○昔語稻妻帖（嘉永元年三月、江戸河原崎座。京傳の稻妻表紙）等。【合卷】譚柄瑠璃舜（嘉永二年刊。安政二年五編まで刊行。芝叟の舜に據るか）。【雜著】讃佛乘（嘉永二年成、新群書類從第二所收）○綺語文草（嘉永三年成、同書及び浪速叢書第十一所收）○皐都午睡（別項）○傳奇作書（別項）○脚色餘錄（別項）○忠臣藏類聚大成○源平類聚大成（以上演劇に關する隨筆）○內外諺曲句集○勢語句抄○綺語堂發句集。【參考】西澤一鳳軒が傳（西澤一鳳傳奇作書初篇下卷）○西澤一鳳小傳（水谷不倒「新群書類從第一」）○綺語文草解題（浪速叢書第十一）【守隨】

西洋血潮小暴風（にしのうみちしほのささあらし）「自由之凱歌」を見よ。

西村茂樹（にしむらしげき）教育家【名】初名鼎。字は重器【號】泊翁（晩年）【生歿】文政十一年三月江戸に生れ、明治三十五年八月十八日武藏南葛寺島村にて歿す。享年七十五【墓所】東京市本鄉區駒込林町養源寺【閱歷】下總佐倉藩士で、幼時藩校に入つて文武を修め、長じて儒學を安井息軒・大槻磐溪に、西洋兵學を佐久間象山に、蘭學・英學を手塚律藏に、佛學を原坦山に學んだ。嘉永三年二十六歲で支藩佐野の重役となり、執政たること十五年、開港論者として老中阿部正弘や德川慶喜に屢々上書した。王政維新後も新政府に建白するところがあつた。明治三年、佐倉藩大參事となり、廢藩後印旛縣權參事に任ぜられたが、同五年これを辭し、東京深川に居を卜して家塾を開き、青年訓育に從事しつつ著述の筆を執つた。その頃、大木喬任の意見で頒布された新學制が、實利に偏し、道德振作の旨に及ばないのを遺憾とし、明六社同人の一人として、人心・風俗の改善に力めた。同七年、文部省五等出仕を命ぜられ、八年、三等侍講を兼ね、翌年文部大丞に榮進、同年三月、日本弘道會の前身、修身學社を創立した。次いで雜誌「修身學社叢說」を發刊、同十四年、每月道德講演を開いて一般の參聽を許した。それから同十七年、修身學社を日本講道會と改稱し、その會長に就任。その頃、歐化主義が漸く勃興し來るを見て深く憂慮し、同十九年十二月、帝大講堂で、三日間に亙り、日本道德に關する講演をなし、世の注意・反省を促した。同二十年六月、「弘道雜誌」を發行し、會名を日本弘道會と名づけてその事業を進めた。同二十一年七月、華族女學校長を兼任し、且つ宮中顧問官に任ぜられ、同二十三年九月、貴族院議員となつて在職二年に及んだが、間もなくこれを辭し、專ら弘道會の事業に力を注いだ。同三十四年、文學博士の學位を授けられた。【著書】泊翁叢書○心學講義○德學講義○日本道德論（別項）○經濟要旨○西史年表○泰西史鑑○萬國史略○西國事物起原○婦女鑑○小學修身訓。

西村天囚

西村天囚（にしむらてんしう）【高頴】評論家・小說家【本名】時彥【生歿】慶應三年七月鹿兒島縣北種子島に生れ、大正十三年七月歿す。享年五十八【閱歷】東京帝大古典講習科に學び、更に重野安繹の指導を受けた。明治二十二年「大阪公論」に入つて論說を擔當したが、翌二十三年大阪朝日新聞社に轉じ、二十六年福島中佐（安正）騎馬旅行の歸途を浦鹽に迎へて「單騎遠征錄」を書いた。翌二十七年日淸戰爭が起るや從軍記者となつて觀戰記を草し、二十九年轉じて東京朝日新聞主筆となつた。後、南支那に漫遊、三十五年大阪朝日新聞社に入り、四十三年渡歐、東京朝日新聞に「龍動通信」を寄せて紙上を賑はした。それから四十五年、明治天皇の崩御に際して哀悼の辭を草したが、それは大正初頭に於ける踐祚の賀辭と共に一世の名文と稱せられた。天囚は獨り論文に長じたのみならず、小說に於ても夙に一家を成し、明治二十年「屠屋の籠」（別項）前篇を書いて公刊し、二十一年後篇を書いた。外に「さゞなみ」「薩摩心中」「天目山」等の作品がある。が、中途筆を小說に絕ち、論說を書く傍ら、日本に於ける漢文學史その他を研究した。その業績が學界の注目するところとなり、文學博士の學位を授けらるゝに至つた。大正八年、大阪朝日新聞社を辭して社友となり、後、宮內省御用係を拜命して重要文書の起草を擔當した。前記の外に、「尾張敬公」「日本宋學史」等の著がある。

西山物語（にしやまものがたり）【高頴】讀本　三册【作者】建部綾足【名義】京都西山の松の尾にあつた物語の意。【刊行】明和五年、江戸須原屋市兵衞・三河屋判兵衞・京錢屋七郎兵衞・文臺屋太兵衞版。【諸本】明和五年刊行の半紙本と、文化十年刊行の大型三册本（浪花加賀屋善藏版）とがある。珍本全集（帝國文庫）・雅文小說集（有朋堂文庫）所收。【題材】作者が明和四年、京都に遊んで得た西八條村の巷談を題材としたものであることは、「近世物之本江戸作者部類」及びその註に、小津桂窓も云つてゐるが、文化三年卯月十七日上田秋成が、この作の主人公大森七郎のモデルである渡邊源太といふものに邂逅して、その實說を記してゐるものによれば、源太の妹が一族の團次の子右內と私かに行末を契つてゐるが、富み榮えてゐる團次は、家道の衰へた源太の家との結婚を拒むので、源太は妹を婚禮姿にして伴ひ行き、最後の談判を試みたが、なほ應じないので妹を殺したといふのである。【梗概】【卷之上】（こがねの卷）京都西山の松の尾に大森七郎といふ士が、妹かへ弟惣次と共に老母に仕へてゐた。その家に祖先彥七から傳來の寶刀があつた。楠正成の遺物で、嘗て異變があつてこれを寺に納めたが、七郎は志あつて貧苦の中に金を調へて取り返した。（かへの卷）それ以來怪しい事が頻りに起り、母も病に罹つたので、同じ里に住む從弟の八郎は、その子の宇須美を介抱の手傳に遣る。かくて宇須美とかへとは、密かに行末を契つた。（太刀の卷）その後、或る西國の大名が武藝者を抱へようといふので、七郎と八郎とは武藝を競べることになる。勝負の結果は八郎

の勝となつた。それは母の病の時に受けた恩を思うて勝を譲つたのである。〔巻之中〕（あやしの巻）この事を知つた母は、かの寶刀の祟だといつて寺に返すやうに進めたが、七郎は聞き入れず、酒を酌んでゐると、側の刺鍋が躍り上つて梁に着いたり、晝といふのに狐が鳴いたり、又或る夜七郎に正成の亡靈が現はれて太刀を持ち歸つた事を憎み、留め置く時は祟をみせるといふやうな怪しい出來事があつた。（琴の巻）一方八郎は祿を得て富み、人を集めて毎日のやうに宴を催した。或る日招かれて行つたかへは、宇須美等に勸められて琴を彈いて興を添へたが、丁度風のために燈火が消えて、宇須美と深く契つた。（文の巻）併し七郎は愈々貧しく、八郎との間も段々疎くなり、宇須美とかへは、ただ文にのみ想ひを寄せてゐた。（わかれの巻）その中に、八郎は西國へ赴くことになる。かへと宇須美とは別れねばならないので、互に悲しい思ひを訴へ、殊にかへは母の目につくやうに物思ひに沈んで痩せ衰へた。かねて事情を知つてゐた七郎は、媒人を立てて結婚を申込んだが、八郎は即座に拒絶し、また宇須美に離り文をさへ書かせた。〔巻之下〕（露の巻）そこで七郎は早速かへを結婚裝束にして伴ひ行き、最後の談判をしたが、なほ應じないので丈夫の振舞を見よとて妹を殺して歸つた。八郎は死骸に取りついて嘆いた。彼が幾許を拒絶したのは、占者に不吉の緣と云はれた爲めであつた。（よみの巻）それ以來病勝ちであつた宇須美は深草の里に籠り、はかなく別れたかへの供養を怠らず、或る秋の夜その亡靈に逢つてしみ〴〵語つた。（ほきの巻）又姉の死が全く八郎のためだと恨んでゐた惣次は、

西山物語（表紙・初頁）

仇を報いようとするので、七郎は私と公との道を說き聞かせた。然るに八郎が寺を建て亡き人の菩提を弔つた爲めか、宇須美の病も癒え、漸く相互の實情も知れ、兩家が和睦して共に榮えたといふ。

【構想】作者は巷談を題材とし、若い男女の戀に近世武士の道義的觀念を加味したが、それが當時のこととて憚る事情もあつたものか、前後に緊密な關係のない寶刀の祟、女の幽靈等を脚色し、却つて散漫に流れ、統一を缺いてゐる感じを與へる。又上中下三册を中古の物語風に九の巻に分ち、序に「從學の士をして古を以て今を御し、俗に卽いて雅をなすの術を曉らしめんと欲す」とあるやうに、現世的の題材を扱ひながら、擬古の形式と文體とを取り、古語や古歌に一々出典を註する等、初學者の學習に便ぜんとして書いてゐる。【史的地位】國學者の古典研究は眞淵に至つて大に振興され、純文學の上にも著しい影響を及ぼした。眞淵の弟子の綾足が「西山物語」を書いたのもその現はれの一つである。同時に荷田在滿の「百猿物語」「落合物語」、眞淵の「由良物語」等に刺戟されたものである。しかも讀本の要素と色彩とを備へ、なほ從來の怪異系統を離れた趣向と、長篇の形式とその文章とは、讀本（別項）の發達を促進し、また後の江戸國學者等をして雅文小說の一群を生ましめた重大な意義のあるものである。〔笹野〕

【參考】綾足と秋成 藤井乙男（江戸文學研究）

二十一代集 にじふいちだいしふ 和歌 【名義】二十一代の勅撰和歌集の意。【解說】「古今集」より「新古今集」に至る八代集（別項）と「新勅撰集」より「新續古今集」に至る十三代集とを合せたもの。「新葉集」を加へて二十二代集とする說もある。正保四年版、大本五十六册がある。〔西下〕

【參考】拾芥抄○歷代和歌勅撰考 吉田令世

二十五絃 にじふごげん 詩集 【著者】薄田泣菫 【刊行】明治三十八年五月、春陽堂。【解說】全二十五篇三十六章。「公孫樹下にたちて」「澤邊の歌」「金剛山の歌」「神の歌」等を代表詩篇とする。著者の第三詩集である。この集に於て、泣菫は前二集とは一見見違へるばかりの飛躍を試みた。長篇詩作を盛んに試み、好んで古語雅語を選擇して自在にこれを驅使し、その婉雅妖麗に自ら沈湎し、さきの瑰麗あつて實感少き缺陷は、次第にその影を潛めて、詩語を自由にし得る境地に達したと共に、その古艷語の間に於て、よく著者最近の感懷を自在に表現せんとする好望を明かに示して來た。これがため、彼の地位は俄然高まつて、蒲原有明（別項）と相並んで、藤村去りし後の詩林の双璧とならんとする實力をあらはすに至つた。この結果は、「白羊宮」（別項）によつて收められた。〔日夏〕

二十五座の神樂 にじふござのかぐら 舞踊 【別名】里神樂 【解說】里神樂（別項）は、曲の數に依り、甲地では七十五座の神樂と稱し、乙地では三十六座の神樂、十二座の神樂と稱する。二十五座は、既に東京に行はれた由を「東都歲時記」に記し、東京市民は今も里神樂の別名として二十五座と呼んでゐるが、この名稱は、東京にのみ限つてはゐない。たとへば越後南魚沼郡藪神村にも二十五座の神樂がある。（神樂參照）〔小寺〕

二十五菩薩來迎會 にじふごぼさつらいがうゑ 「練供養」を見よ。

二十四孝 にじふしかう 【作者】原本作者の名を記したものはないが、「昆陽漫錄」には、元の郭居敬の作とある。「世事百談」には、郭居業と記す。假名譯文は何人の手に成つたか未詳。【名稱】「二十四章孝行錄」とも。稱にただ「孝子傳」と稱するものもある。【諸本】嶋嶼本「二十四孝」、寛永九年九月中野市右衛門刊。江戸版では明曆二年松會

市郎兵衛の「新板二十四孝」一册、寛文五年嬉屋仁兵衛印行「二十四章孝行錄抄」一册、天和版「首書二十四孝」一册、貞享三年版「二十四孝諺解」一册、元祿版「二十四孝諺解」二册、同洛下隱子貞阿撰「二十四孝俗解」四册、寶永版熊澤蕃山撰「二十四孝小解」一册、浦川公左「二十四孝綸抄」一册、享保三年版鷹峰沙門某撰「對類二十四孝」二册、お伽草子の「二十四孝」一册、これ等が主なもので、この外「二十四孝」の單行本は數種ある。御伽草子後編（今泉嘉山校）・有朋堂文庫・日本文學大系十九巻等所收。

【解說】この書は、古來孝子として聞えた二十四人を選び、詩と傳とを記し、小兒に孝道を勸めた敎訓書で、何年頃日本に渡つたかは詳かでないが、假名草子としては慶長頃、嶸峨の角倉氏で刊行したものが、最も早いものである。これは紙數二十四丁、上段に繪があつて、下

嶸峨本 二十四孝

段に二十四孝の一人づつの事蹟を記したもので、繪は稚拙であるが、この外「二十四孝」の單行本及び節用・諸禮集等に收載されたものを擧げたら、かなり澤山なことと思はれる。又擬似本に就いて、その二三を擧げると、

【參考】昆陽漫錄 青木敦（百家說林正編上）○ねざめのすさび 石川雅望（百家說林續編上）○故事熟語大辭典 簡野道明 【水谷】

二十八宿 にじふはしゆく 詩集 【著者】横瀨夜雨 【刊行】明治四十年二月、金尾文淵堂。現代詩人全集・新潮社・第四巻所收 【解說】「新月の巻」（二十四篇）と「夕月の巻」（十六篇）に分れてゐる。「新月の巻」には「花守」時代の作で洩れたるもの及びその後の作品。「夕月の巻」には、第一集の「夕月」から拔萃した作品を蒐めてあるが、大抵三十一二年頃の作である。有名なる「お才」（三十一年六月作）も、その中にある。未だ民謠の新機運も動かなかつた時代

市郎兵衛の「新版二十四孝」一冊、寛文五年鶴屋仁兵衛印行「二十四章孝行錄抄」一冊、天和版「音二十四孝」一冊、貞享三年版「二十四孝諺解」一冊、元祿版「二十四孝俗解」二冊、同洛下隱子貞阿撰「二十四孝俗解」四冊、寶永版熊澤蕃山撰「二十四孝小解」一冊、浦川公左「二十四孝繪抄」一冊、享保三年版鷹峰沙門某撰「對類二十四孝」二冊、お伽草子の「二十四孝」一冊、これ等が主なもので、この外「二十四孝」の單行本は數種ある。御伽草子後編（今泉嘉山校）・有朋堂文庫・日本文學大系十九卷等所收。

【解說】この書は、古來孝子として聞えた二十四人を選び、詩と傳とを記し、小兒に孝道を勸めた敎訓書で、何年頃日本に渡つたかは詳かでないが、假名草子としては慶長頃、嵯峨の角倉氏で刊行したものが、最も早いものである。これは紙數二十四丁、上段に繪があつて、下段に詩と傳とがあり、詩には訓點を附し、傳は假名文である。何人が譯したかは詳かでないが、書は光悅風で、所謂光悅本、又嵯峨本と稱するものである。次の寬永版の事は判らないが、明曆二年の江戸版は、この嵯峨本を底本としたものらしく、插繪の構圖までほぼ同じである。寬文本・貞享本ともに、それ〴〵孝子の人名は同じであるが、順序に多少の入れ替へがある。なほ「二十四孝」は、すべて繪入本で、孝子の選定も、大舜を初め、ほぼ一定してゐるが、中に二三異同のあるものがある。例へば熊澤蕃山撰「二十四孝小解」の如きがそれである。異同を示せば、

（一）大舜（嵯峨本）―大舜（熊澤本）（二）漢文帝―漢文帝（三）丁蘭―曾子（四）孟宗―閔子（五）閔子騫―仲由（六）曾參―董永（七）王祥―剡子（八）老萊子―江革（九）姜詩―陸績（十）唐夫人―唐夫人（十一）楊香―王褒（十二）董永―王祥（十三）黃香―孟尼（十四）王褒―楊香（十五）郭巨―朱壽昌（十六）朱壽昌―庾黔婁（十七）剡子―老萊子（十八）蔡順―蔡順（十九）庾黔婁―黃香（二十）吳猛―姜詩（二十一）張孝張禮―王褒（二十二）田眞田廣田慶―丁蘭（二十三）山谷―孟宗（二十四）陸績―山谷。

熊澤本は、張孝と田眞の二兄弟を除いて、その代り仲由と江革の二人が入つてをる。然るに「昆陽漫錄」に載する二十四孝の人名は、嵯峨本に比すると、江革・韓伯俞・劉殷・陳娥・義姑・五武・子魯仲由・鮑一・趙孝宗元覺等の名があつて、漢文帝・唐夫人・楊香・王褒・朱壽昌・庾黔婁・吳猛・張孝・山谷等の名が削られ、九名の交替がある。石川雅望著「ねざめのすさび」に據ると、「二十四孝」は「初穎日記故事」といふ兒童敎訓書中の初めに載せてあるといふ。我が國でいへば、恰も「實語敎」（別項）「童子敎」などの、寺子屋式のもので、それゆゑ異本があると思はれる。この「二十四孝」に就いては、學者間に種々論議されてをるが、これは「孝經」（別項）などと同一に考へたからであらう。その行狀にも無稽の事などがあり、寧ろ敎訓の意を持つた小說的作品として取扱ふべきものである。郭巨の一話の如きは、親のためとはいひながら、子を生き埋めにせんとするのは人情に悖つたことである。王祥の鯉の如きも、理に合はぬ話である。理窟なしに孝の犧牲的精神を鼓吹した童話的作品と解すべきである。【影響】江戸時代に於て、最も廣く行はれたものと云へば、「百人一首」（別項）の右に出づるものはない。「二十四孝」は勿論それに比ぶべくもないが、これ又人氣ものの一種であつた。前記の諸本の如き主なものではあるが、この外「二十四孝」の單行本及び節用・諸禮集等に收載されたものを擧げたら、かなり澤山なことと思はれる。又擬似本に就いて、その二三を擧げると、「糟氏二十四孝」「對類二十四孝」「皇朝二十四孝」、これ等は硬派に屬するものであるが、假名草子・浮世草子の類本には、「日本二十四孝」「今樣二十四孝」（各別項）があり、鳥居庄兵衞畫の繪本「本朝二十四孝」（別項）及び近松半二作淨瑠璃の同名本等は、いづれも有名なものである。なほ個々の話題に就いては、閔子騫の題材が、繼子いぢめの小說に作られ、唐夫人の話が說經節の正本に取入れられ、その他、王祥の鯉、孟宗の筍、郭巨の釜等が、小說の題材になつたことはいふまでもなく、彼の掘出し物の語が、今も坊間に行はるゝを見ても、この書がいかに民衆的であり、又極めてその影響の大であつたかを知るに足る。それだけこの書が一般に感化を及ぼし、孝行奬勵に與つて力あつたことも認められる。併し目的のために手段を選ばず、親のためならどんなことをしても構はぬといふ、多少誤つた考を抱かしめたことも否まれない。

嵯峨本二十四孝（德富蘇峰氏藏）

【參考】昆陽漫錄青木敦（百家說林正編上）○ねざめのすさび　石川雅望（百家說林續編上）○故事熟語大辭典　簡野道明　【水谷】

二十八宿（にじふはつしゆく）　詩集　【著者】橫瀨夜雨　【刊行】明治四十年二月、金尾文淵堂。現代詩人全集　新潮社、第四卷所收　【解說】「新月の卷」（二十四篇）と「夕月の卷」（十六篇）に分れてゐる。「新月の卷」には「花守」時代の作で洩れたるもの及びその後の作品。「夕月の卷」には、第一集の「夕月」から拔萃した作品を蒐めてあるが、大抵三十一二年頃の作である。有名なる「お才」（三十一年六月作）も、その中にある。未だ民謠の新機運も動かなかつた時代に、唯一の民謠として珍しがられたばかりでなく、自ら婉轉たるリズムがあつたので、作曲されることなくして世に喧傳された。「お才」は作者自身の手によりて再三辭句に改訂を施されたが、矢張り最初「文庫」（別項）に發表されたのが好い。この作以來筑波は有名になつて、夜雨を指して筑波根詩人とさへ呼ばれるやうになつた。「お才」の外にも民謠がある。本詩集の樣式は「花守」と同樣二三篇の五七調を除いては七五調で押し通してゐる。用語も亦夜雨一流の典雅溫藉で、古語・近代語共に極めて洗練されてゐる。　【河井】

二重母音（にぢうぼいん）　「母音」を見よ。

二條院讃岐集（にでうゐんさぬきしふ）　歌集　【作者】二條院讃岐　【諸本】宮內省圖書寮に「讃岐集」と稱する寫本一卷がある。群書類從卷

沈んで痩せ衰へた。かねて事情を知つてゐた七郎は、媒人を立てて結婚を申込んだが、八郎は即座に拒絕し、また宇須美に離り文をさへ書かせた。（卷之下）（露の卷）そこで七郎は早速かへを結婚裝束にして伴ひ行き、最後の談判をしたが、なほ應じないので丈夫の振舞を見よとて妹を殺して歸つた。八郎は死骸に取りついて嘆いた。彼が機詐を仇を報いようとするので、七郎は私と公との道を說き聞かせた。然るに八郎が寺を建て亡き人の菩提を弔つた爲めか、宇須美の病も癒え、漸く相互の實情も知れ、兩家が和睦して共に榮えたといふ。

【構想】作者は巷談を題材とし、若い男女の戀に江戸武士の道義的觀念を取扱つたが、それ

合せたもの。「新葉集」を加へて二十二代集とする說もある。正保四年版、大本五十六册がある。　【西下】

【參考】拾芥抄○歷代和歌勅撰考　吉田令世

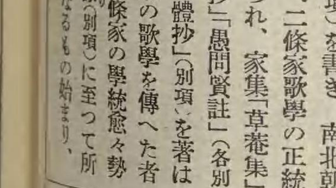
二十五絃（にじふごげん）　詩集　【著者】薄田泣菫　【刊行】明治三十八年五月、春陽堂。【解說】全二十五篇三十六章。「公孫樹下にたちて」「澤潟の歌」「金剛山の歌」「靈神の歌」等を

二十四孝（にじふしかう）　假名草子　一卷一册　【作者】原本作者の名を記したものはないが、「昆陽漫錄」には、元の郭居敬の作とある。「世事百談」には、郭居業と記す。假名譯文は何人の手に成つたか未詳。【名稱】「二十四章孝行錄」とも。稀にただ「孝子傳」と稱するものもある。【諸本】嵯峨本「二十四孝」、寬永九年九月中野市右衞門刊。江戸版では明曆二年松會

二一九・續國歌大觀等所收。【内容】「青柳の靡く下枝は掃きてけり」の歌より「大かたに秋のねざめの露けくは」の歌に至る合計一百首の歌を收める。部立はない。各歌概ね前書を有し、歌合等の歌は「述懐、賀茂の歌合」として一首あるのみ。この他、贈答による御製一首、三河内侍の歌一首、大殿三川一首、作者不明の歌二首の作を含んでゐる。この集の作者は、「千載集」戀二に選ばれたる「寄石戀。我戀は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間もなし」によつて、「沖の石のさぬき」と呼ばれたと傳へられる。この歌を初めとして、「雨の後のさなへ。名殘なく晴れぬめれども早苗取る田子の小笠はぬくよしもなし」の如く、平明流暢なれど着想に巧なる歌が多く、抒情味は豐かであつて、純叙景歌を多く見ない。又「形見を見て隱るゝ戀。そことだに知らせていにし我せ子が留むる笛の音こそなきぬる」の如く、ロマンチックな物語めくものもある。併しこの家集所收の百首は、作者の生涯のうち、早き頃の歌を集められたと見えて、「新古今集」に入れる十六首のうち、「明ぬれどまだ後朝になりやらで」の歌一首のみしか集中には見出せない。また「千五百番歌合」の歌も見られない。「新古今集」選入歌や、「千五百番歌合」の歌は、本集所收の歌と比較すれば、一段と微妙巧緻な技巧的なものとなつた。想ふに本集は「新古今」の頃に、既に現在の體裁に纏められたものであらう。【價値】新古今時代の多くもない女流歌人の中で、家集の存するものは、僅かに「俊成卿女集」「式子内親王家集」（各別項）等、數部に過ぎぬ點より して、新古今時代和歌史研究の史料としても重要である。【松通】

二條家（にでうけ） 和歌【名義】和歌史上藤原爲家（別項）の長子爲氏を祖とする歌の家筋をいふ。【沿革】俊成・定家二代に亙り中世初頭の歌壇に覇を稱へた御子左家（別項）は、定家の子爲家に至つて、その守舊的態度により基礎愈々固く、前々代よりの競爭者たる六條家（別項）も殆ど屛息して、歌壇の勢力を一手に掌握したが、その歿後、爲氏・爲教・爲相の三子各々家を立て二條（爲氏）・京極（爲教）・冷泉（爲相）の三家に分れた。而して二條家の爲氏と京極家（別項）の爲教とは同母兄弟ながら互に和せず、二條家對冷泉家（別項）の領地爭ひ起るや、爲教は異母弟の爲相（母阿佛尼）側に與みして二條・京極兩家葛藤の種を蒔いた。次いで爲氏の子爲世（別項）、爲教の子爲兼（別項）の代になると兩家の爭ひは判然歌壇の覇權爭ひとなり、折柄の皇統迭立の爭ひと結びついて、二條家は大覺寺統に、京極家は持明院統に支持せられて互に反目拮抗し、その間おのづから兩家の宗とする歌風も反對的立場をとり、保守と進取との對立を見るに至つた。今日傳はる「延慶兩卿訴陳狀」（別項）は花園帝の延慶年間歌集勅撰の御企畫に關し、爲兼撰者に擬せられたるに對して爲世より異議を申し立て、爲兼これを駁したるに對して更に爲世より訴陳したる奏狀の抄出であるが、この中に兩家の相反する立場を最も如實に覗ふ事が出來る。爲世を初め二條家の立場は、爲家嫡流として父祖の庭訓を金科玉條視し、爲家の穩健正雅の歌風を宗としてこれより一歩も出でざらんとし、制禁の詞等をやかましく論じた。而して京極家が實平以往の風體に歸ると稱して病を避けず禁忌を憚らず、ただ世俗の詞を以て僅かに眼前の風情を詠ずる態度を以て、祖先の叡意に背き當道の陵廢を爲すものとした。この保守的消極的見解は、後世まで二條家歌學を一貫する信條である。自然その詠出する所の歌は平凡陳腐に墮し、何等清新の趣あるを認めることが出來ないのであるが、大覺寺統に庇護せられた同家は、京極家が爲兼の猶子忠兼がその本流閑院家に復して衰微したに對してなほ後まで榮え、勅撰集第十二の「續拾遺」より第二十の「新後撰」に至る九集中、第十四の「玉葉」を爲兼に讓り、第十七の「風雅」を花園上皇御自撰になつた外、殘りの七集を凡て自派から撰集した。鎌倉時代を經て南北朝時代に入るや、二條家は京都に止まつて遂に北朝に仕へ、爲定「新千載」、爲明「新拾遺」、爲遠・爲重兩人「新後拾遺」を編んだが、後、一門内に軋轢起つて遂に衰微絶家し、勅撰集最後の「續後古今」は、飛鳥井家の撰集する所となつた。かくして二條家宗家からは、終始何等見るべき歌人を出さなかつたが、門下よりは屢々人材が現はれてゐる。先づ爲世の門人なる千種有房（別項）は、久我通光（別項）の孫で、二條家歌學を祖述した「野守鏡」（別項）を書き、南北朝に入るや頓阿（別項）が出で、二條家歌學の正統を受けて當時最も重んぜられ、家集「草菴集」（別項）の外、歌學書「井蛙抄」「愚問賢註」（各別項）を殘してゐる。「近來風體抄」（別項）を著はした二條良基（別項）も同家の歌學を傳へた者である。室町時代に入り二條家の學統愈々勢力を占め來り、堯孝より常緣（別項）に至つて所謂「古今傳屋敷」（歌道傳受參照）なるもの始まり、宗祇・實隆等を經て幽齋に傳ふる二條家當流、宗祇より牡丹花肖柏に傳ふる「堺傳授」、肖柏より林宗二（以上人物各別項）に傳ふる「奈良傳授」等に分れ、その流れは近世前期頃まで歌壇の主潮をなした。（歌道傳授參照）

【參考】日本歌學史 佐佐木信綱 ○鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎 【中島】



二條家俳諧（にでうけはいかい） 俳諧【解説】俳諧興行の一特例。寛政二年、五攝家の一たる二條左大臣家に於て、曩祖良基が連歌の權威で、筑波の道に干與した先蹤に則り、その九月十七日に、曉臺（別項）などを銅駝御殿に招いて百韻の連句を興行した。その日參殿した連衆は曉臺・月居・士朗（各別項）・桃唑・嵐月・麟路・湖遥・千當・昆明・之楓・巖山・吳井・觀楓・不木・素外・羅城・萬岱・蓬州・陶阿・麒六・蘆洲・仙兒・毛條・桃里・辨二等で、執筆は五周・百池・臥央・明舉、香元は怡泉であつた。御所樣御名代として泰古、若御所樣御名代として廣明が着座して、重々しい光景の下に俳諧が興行された。次いで同年の十月十七日には高槻藩更（別項）を宗匠とする俳席があつた。連衆は藩更・車蓋・鐵翁・青牛・葵・月峰・古塘・宇道・桃之・李昇・梁圓・松風・湖山・湖夕・蟠水・可計・乙路・岡明・月居・其成等であつた。同時に松岡青藟（別項）も召されたのであつたが、翌三年の三月十四日、再び青藟のための俳席が設けられ、青藟は國屋・布水・五栗・季雨・瓜涼その他の人々と參殿した。同五年四月十二日には、二條東巖公の發句で、芭蕉百回忌追福の俳諧が行はれ、重厚（別項）・闌更・玉屋・臥央・士朗・羅城・車蓋・月峰・月居・百池等が句を繼いで滿尾した。二條家がかゝる特例を開いた可否は別問題として、當時の俳人は深くこれを參考とし

た。この俳諧興行に伴つて起つたのが、貞德等が勅許と稱し、一世に誇耀した「花の本」（別項）なる稱號の復活である。即ち約百年にして再びこの稱號を冠する俳人の出現を見たのである。併し二條家俳諧に宗匠であつた者が必ず「花の本」の稱號を允許さるゝとも限らないので、青藟の如きはこれを得なかつた一人である。爾後の俳席を一括して表示すると、

文化六年成田蒼虬（別項）・文政七年茂呂何丸・同九年森郁抱儀・同年十丈・天保元年夙也・同十四年田川鳳朗（別項）・嘉永四年櫻井梅室（別項）・安政三年比良城林曹・同四年内海淡節・文久二年堤梅通・元治元年八木芹舍

の如くになり、芹舍以後は廢絶した。【發川】

二上峯（にじやうはう） 隨筆 一卷 寫 【著者】多賀常政（傳未詳。天明前後の國學者）【名稱】開卷第一に日向國臼杵郡高千穗の峯一名二上峯

述べたもの。「續耳塵集」（新群書類從第三所收）は民屋四郎五郎の著で、同じく坂田藤十郎を中心とした俳優言行錄で、中に金子吉左衞門に關する記述もある。坂田藤十郎の技藝上の意見・逸事等を知るのに「賢外集」（別項）と共に隨一の資料であり、而も又歌舞伎劇の本質檢討にも暗示に富む。「續耳塵集」中の金子吉左衞門に就いての記述は、狂言作者史上の彼の地位を知るに有益な資料である。【堀田】

似繪（にせゑ） 繪畫【解説】平安朝には傳神術なるものがあつて、唐風の影響で寫貌寫眞ともいふ。これが似繪であつて、肖像畫を書くのである。支那では古くより行はれたが、我が國にも藤原時代には著しく發達した。紫宸殿の障子に聖賢の像を畫いた如きで、初めは支那の聖賢を畫いたが、次第に我が朝の人物をも畫くに至つた。百濟河成・巨勢金岡は

に、北面下臈御隨身などの影を左京權大夫尉永親その樣をもしらでなへらかなる白襖著て北面に侍ひけるがめしいだされける時、太刀を取てはきて參りたりける、いみじうなん見え侍ける云々」と見えてゐる。主なる作品は、「平重盛像」「源頼朝像」「三十六歌仙繪」「隨身庭騎繪卷」（別項）「大臣影」「後白河法皇御像」等である。足利時代には、「後醍醐天皇御像」「聖一國師像」の如きものがある。この時代には、從來の如く天皇・公卿にとどまらず、僧侶の肖像を多く畫いた。これを頂相（ちやうさう）といつた。師の像を畫いて拜するものが、甚だ多かつたのである。五山名僧の詩文集などでは、自己の肖像に讃を書いたことが見えてゐる。繫馬の屛風及び鷹の繪の生じたのも似繪流行の餘波と考へられる。足利末期から織豐時代にかけて

したところが、よく似てゐるといふので好評を博し、勝川春章は版畫に多數の役者の似顏繪を作つた。又東洲齋寫樂は、俳優の似顏繪に一種異樣の面貌を畫いて、世人の渇仰する美なるものから醜なるものを摘發して痛快に罵倒した。これは所謂役者繪であつて、その個性を誇張したものである。これ等は似顏繪と呼んで似繪の流である。【藤懸】

修紫田舍源氏（にせむらさきゐなかげんじ） 合卷 三十八編百七十二册合七十六册（未刊二編）【作者】柳亭種彦【畫工】歌川國貞【名稱】「修紫」は今樣の紫式部作の意を示し、「田舍源氏」は通俗物、擬ひ物の「源氏物語」の意である。この命名は、都の錦作「風流源氏物語」（別項）の序文の一節、「田舍生立の振袖に似せ紫の下染をしらせ」に暗示を得たのであらう。【刊行】鶴屋板、文化十二年、初編。爾來累年出版。天保

た。この俳諧興行に伴つて起つたのが、貞德等が勃許と稱し、一世に誇耀した「花の本」（別項）なる稱號の復活である。卽ち約百年にして再びこの稱號を冠する俳人の出現を見たのである。併し二條家俳諧に宗匠であつた者が必ず「花の本」の稱號を允許さるゝとも限らないので、靑蘿の如きはこれを得なかつた一人である。爾後の俳席を一括して表示すると、

文化六年成田蒼虬（別項）・文政七年筏呂何丸・同九年森郵抱儀・同年十丈・天保元年夙也・同十四年田川鳳朗（別項）・嘉永四年櫻井梅室（別項）・安政三年比良城林曹・同四年內海淡節・文久二年堤梅通・元治元年八木芹舍

の如くになり、芹舍以後は廢絶した。〔贄川〕

二上峯（にじやうほう）　隨筆　一卷　寫　【著者】多賀常政（傳未詳。天明前後の國學者）【名稱】開卷第一に日向國臼杵郡高千穗の峯一名二上峯の記事を擧げたに據る。【解說】主として有職故實に係る考說の外、雅俗の風習、言語の原委、神道・和歌・史話等、凡て廣義の國學に關する雜話を集めたもの。所々に挿圖がある。卷末に、「右此二上峯一册天明四甲辰年十一月十九日起筆、翌年乙巳三月十日書寫之功既成多賀中原常政行年七十九歲而誌之者也、是慰情之一端也可爲嗤歟」とある。本書は傳寫の少いものである。〔和田〕

耳塵集（にぢんしふ）　演劇書　二卷　續編一卷　【名稱】「つたなき耳につもる塵の言葉」なりとの著者の言による。【成立】正德年中か。【諸本】古く「役者論語」（別項）中に收められた。新群書類從第三・隨筆文學選集卷四・歌舞伎叢書所收。【解說】「耳塵集」は金子吉左衞門（別項）の著で、主として坂田藤十郎（別項）の言行を中心に、當時の俳優達の逸事を雜纂的に述べたもの。「續耳塵集」（新群書類從第三所收）は民屋四郎五郎の著で、同じく坂田藤十郎を中心とした俳優言行錄で、中に金子吉左衞門に關する記述もある。坂田藤十郎の技藝上の意見・逸事等を知るのに「賢外集」（別項）と共に隨一の資料であり、而も又歌舞伎劇の本質檢討にも暗示に富む。「續耳塵集」中の金子吉左衞門に就いての記述は、狂言作者史上の彼の地位を知るに有益な資料である。〔增田〕

似繪（にせゑ）　繪畫　【解說】平安朝には傳神術なるものがあつて、唐風の影響で寫貌寫眞ともいふ。これが似繪であつて、肖像畫をくのである。支那では古くより行はれたが我が國にも藤原時代には著しく發達した。宸殿の障子に聖賢の像を畫いた如きで、初めは支那の聖賢を畫いたが、次第に我が朝の人物をも畫くに至つた。百濟河成・巨勢金岡は有名であつて、「牛馬にせゑ」といつて牛馬を傳神の法を以て畫いた。卽ち牛馬の似繪である。「吉槐記」乾元二年正月二十六日、日吉社御幸條下に「任經法眼、被レ召二御前一、書二牛馬似繪一堪能事」と出てゐる。源信は馬の名人であつた。百濟河成は殿中で從者を探すためにその肖像を紙に畫いたといはれる。その他、隆能・隆信・信實などの名手が出て次第に發達し、當時の上流社會の嗜好に適した。後世の似顏繪であるが、今日の肖像畫とは嚴密には多少異なり、必ずしも細密に實物を摸寫することなく、人物の特徵となる顏面の輪廓を略畫的に畫いたのが多い。これにはなほ實在描寫と想像描寫とあり得べく、「中殿御會圖卷」（別項）は前者であり、「三十六歌仙繪卷」は後者に屬する。その後、鎌倉時代に至つて後白河天皇・後堀河天皇がこれを賞美せられた。「著聞集」に、「後堀河院御時似繪を御好ありけるに、北面下﨟御隨身などの影を左京權大夫尉永親その樣をもしらでなへらかなる白襖著て北面に侍ひけるがめしいだされける時、太刀を取てはきて參りたりける、いみじうなん見え侍ける云々」と見えてゐる。主なる作品は、「平重盛像」「源頼朝像」「三十六歌仙繪」「隨身庭騎繪卷」（別項）「大臣影」「後白河法皇御像」等である。足利時代には、「後醍醐天皇御像」「聖一國師像」の如きものがある。この時代には、從來の如く天皇・公卿にとどまらず、僧侶の肖像を多く畫いた。これを頂相（ちやうさう）といつた。師の像を畫いて拜するものが、甚だ多かつたのである。五山名僧の詩文集などでは、自己の肖像に讃を書いたことが見えてゐる。繫馬の屛風及び鷹の繪の生じたのも似繪流行の餘波と考へられる。足利末期から織豐時代にかけて益々盛んとなつた。藤原信實は似繪の上手とせられ、子の爲繼も亦、父業をついで似繪をよくし、その「柴式部日記繪卷」（別項）にも人物の面貌に、似繪の手法が現はれてゐる。寫生畫でも理想畫でもなくて、作繪の一種と見るべきであらう。「東鑑」に「關東射手似繪。仁和二年十一月二十七日、當將軍家御時、關東射手似繪可レ被レ圖之由、有二其沙汰一、今日以二評定之次一、先註二其人數一、自二京都一就レ被二仰下一、爲レ被レ進レ覽也」と出てゐる。江戶中期以後、芝居の隆盛と共に、文藝が一時に活況を呈した。繪畫では、後者に對する諸人の關心を巧みにとらへた似顏繪が大に流行したが、似繪からの趣向上の展開を見ることが出來よう。併し傍に市川團十郎などと書いてあるが故に、僅かに首肯される位のものに過ぎなかつた。然るに烏山石燕は、淺草觀音堂に似顏繪を奉納したところが、よく似てゐるといふので好評を博し、勝川春章は版畫に多數の役者の似顏繪を作つた。又東洲齋寫樂は、俳優の似顏繪に一種異樣の面貌を畫いて、世人の渴仰する美なるものから醜なるものを摘發して痛快に罵倒した。これは所謂役者繪であつて、その個性を誇張したものである。これ等は似顏繪と呼んで似繪の流である。〔藤懸〕

修紫田舍源氏（にせむらさきゐなかげんじ）　合卷　三十八編百七十二册合七十六册（未刊二編）【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【名稱】「修紫」は今樣の紫式部作の意を示し、「田舍源氏」は通俗物、擬ひ物の「源氏物語」の意である。この命名は、都の錦作「風流源氏物語」（別項）の序文の一節、「田舍生立の振袖に似せ紫の下染をしらせ」に暗示を得たのであらう。【刊行】鶴屋板、文化十二年、初編。爾來累年出版。天保十三年、三十八編を以て終り、三十九編及び四十編は未刊行。【諸本】續帝國文庫・日本名著全集所收。日本名著全集所收本は原畫をそのまゝに雕刻、未刊の第三十九・四十編をも附載。【題材】「源氏物語」を室町時代の世界に移して飜案したものである。

桐壺の卷、初、二編。帚木、三編。空蟬、四編。夕顏、四・五編。若紫、二・六・七・八・九編。末摘花、八・十・十一編。紅葉賀、九・十・十一編。花宴、二・十一・十二編。葵、二・十二・十三・十四・二十五編。賢木、十四・十五・十六編。花散里、十六編。須磨、十六・十七・十八・十九編。明石、十九・二十・二十一・二十二編。澪標、二十三・二十四・二十五編。蓬生、二十二・二十三・二十四編。關屋、二十四編。繪合、二十五・二十六編。松風、二十六・二十七・二十八編。薄雲、二十八・二十九編。朝顏、二十四・二十九編。少女、三十・三十一・三十二編。玉鬘、三十二・三十三編。初音、三十四編。胡蝶、三十四・三十五編。螢、三十五編。